四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第　五　冊

石　田　遺　跡

長　砂　古　遺　跡

柞　田　八　丁　遺　跡

1988.3

香　川　県　教　育　委　員　会

日　本　道　路　公　団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第　五　冊

石　田　遺　跡

長　砂　古　遺　跡

柞　田　八　丁　遺　跡

1988.3

香　川　県　教　育　委　員　会

日　本　道　路　公　団

例　　言

1．本書は四国横断自動車道建設に伴う，埋蔵文化財発掘調査報告書第五冊である。

2．本書に収録したのは，1985年から1987年にかけて調査を実施した，香川県観音寺市池ノ尻町に所在する石田遺跡と長砂古遺跡，同市柞田町に所在する柞田八丁遺跡の三遺跡である。

3．調査は，日本道路公団高松建設局の委託を受けて，香川県教育委員会事務局文化行政課三係（善通寺連絡事務所）が実施した。

4．発掘調査は石田遺跡を小西正行・片桐孝浩・磯崎寛，長砂古遺跡を小西正行・片桐孝浩・磯崎寛・松浦隆，柞田八丁遺跡を小西正行・中西昇・片桐孝浩・磯崎寛・松浦隆・竹内峰雄が担当した。

5．調査に要する経費は，日本道路公団が負担した。

6．調査にあたっては，下記機関の指導や援助を得た。記して謝意を表したい。
日本道路公団高松建設局，同・観音寺工事事務所，香川県土木部横断道対策室，観音寺市横断道対策室，共同企業体，地元自治会，地元対策協議会。

7．出土品の整理は，善通寺連絡事務所職員が担当した。

8．本書の作成に当っては，文化行政課職員をはじめ，調査に参加した調査員の助言を受けながら，以下のように分担執筆した。また，校正作業では鎌谷周子・武内ゆかりの協力を得た。

Ⅰ－1……渡部明夫（調査三係係長）
Ⅰ－2……磯崎　寛（調査三係技師）
Ⅱ……片桐孝浩（調査三係技師）
Ⅲ－1区・2区……磯崎　寛（　〃　）
Ⅲ－3区……松浦　隆（調査三係嘱託）
Ⅳ……片桐孝浩（調査三係技師）

9．本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。

(1) 挿図の縮尺は，掲載の図内にスケールで示した。

(2) 方位は，国土座標第Ⅳ座標系の北を表す。

(3) 水平基準線の数値は，海抜高を示している。

10．本書に用いている遺構記号は次の通りである。

ＳＡ…柵列	ＳＢ…掘立柱建物	ＳＴ…土壙墓
ＳＤ…溝状遺構	ＳＥ…井　戸	ＳＸ…不明遺構
ＳＨ…竪穴住居	ＳＫ…土　坑	

11．長砂古４号墳出土鉄製品のレントゲン撮影にあたり，坂出市所在の佐藤医院に御協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

12．調査組織は下記の通りである。

昭和60年度

総括	課　長	磯田文雄(～12．20)	調査	善通寺連絡事務所	
	教育次長 課長事務取扱	樫原　悠(12．21～)		所　長	入江　久
	主　幹	松本豊胤		係　長	伊沢肇一
	課長補佐	片山　堯	石田遺跡		
庶務	係　長	宮谷昌之		主任技師	小西正行
	主任主事	前田和也		嘱　託	片桐孝浩
	主任主事	酒井幸子(～５．31)			磯崎　寛
	主　事	松下由美子(６．１～)			

昭和61年度

総括	課　長	廣瀬和孝	調査	善通寺連絡事務所	
	主　幹	松本豊胤		所　長	入江　久
	課長補佐	片山　堯		主任文化財専門員	伊沢肇一
庶務	係　長	宮谷昌之	長砂古遺跡		
	主任主事	前田和也		主任技師	小西正行
		近藤紀文		技　師	片桐孝浩
	主　事	松下由美子			磯崎　寛
				嘱　託	松浦　隆

柞田八丁遺跡

主任技師　小西正行
　　中西　昇
技　　師　片桐孝浩
　　磯崎　寛
嘱　　託　松浦　隆
　　竹内峰雄

昭和62年度

総括　課　長　廣瀬和孝
　　課長補佐　片山　堯(～5．31)
　　高木　尚(6．1～)
　　副主幹　小原克己
庶務　係　長　宮谷昌之
　　主任主事　前田和也(～5．31)
　　主　事　松下由美子(～5．31)
　　三宅浩司(6．1～)
　　水本久美子(6．1～)

整理作業　善通寺連絡事務所

柞田八丁遺跡

技　師　片桐孝浩
　　磯崎　寛

目　　次

I　はじめに……1

1．調査の経緯……3

2．立地と環境……10

II　石田遺跡……15

1．調査の経過……17

2．遺跡の概要……22

(1)　地　形……22

(2)　土層序……22

(3)　調査区周辺出土遺物資料……25

3．遺構・遺物について……26

(1)　検出遺構の概要……26

(2)　弥生時代……26

ＳＫ15……26

ＳＤ34・35……27

(3)　古墳時代……27

ＳＢ08……27

ＳＢ09……28

ＳＢ10……28

ＳＤ22……28

(4)　奈良時代……30

ＳＫ06……30

ＳＤ23……30

ＳＡ02……31

(5)　平安時代……32

①　平安時代後期・Ⅰ期……32

ＳＢ01……33

ＳＢ05……33

ＳＢ06……33

ＳＢ17……33

② 平安時代後期・II期……35
SB03……35
SB04……35
SB15……35
SB16……36
SB21……36
③ 平安時代後期・III期……37
SB02……37
SB07……37
SB18……38
SB20……38
SD36……38
SD13……38
SD47・53・57・61……41
SK11……42
(6) 古墳時代～平安時代に継続する遺構……43
SD29……43
(7) 中　世……47
① 中世－I……47
SB13……47
SB14……47
② 中世－II……47
SB11……47
SB12……48
SB19……48
③ 中世・その他の遺構……49
SD46……49
SD51……49
SK09……49
(8) その他の遺構……50
SD17……50
SK07……50
SA01～05……50

柱穴出土遺物……51
土壙墓……52
(9) 包含層出土遺物……54
① G－9，H－9，I－9，J－9出土遺物……54
G－9……54
H－9……54
I－9……56
J－9……59
まとめ……59
② F－12 第4層出土遺物……60
③ 土師質土器……61
④ 備前焼……61
⑤ 陶 器……61
⑥ 肥前系陶磁器（染付，陶胎染付）……61
⑦ 緑釉陶器……61
⑧ 灰釉陶器……64
⑨ 輸入磁器……64
⑩ 須恵器……64
⑪ カマド……64
⑫ 土 錘……64
⑬ キセル……64
⑭ 石製品……64
4．まとめ……66

III 長砂古遺跡……103
1．調査の経過……105
2．I 区……110
(1) I区の概要……110
(2) 遺構と遺物……113
① 溝状遺構……113
SD01，02，03……113
SD08，09，11……113
SD12，13……114

② 土　坑 ……114
③ 掘立柱建物 ……114
④ 竪穴住居 ……122
⑤ 包含層出土遺物 ……124
石製品 ……124
弥生土器 ……126
土師器 ……126
緑釉陶器 ……126
土師質土器 ……127
瓦質土器 ……129
須恵器 ……129
近世陶磁器 ……130
(3) 小　結 ……131
3．II　区 ……132
(1) II区の概要 ……132
(2) 遺構と遺物 ……135
① SD16 ……135
② SD17 ……138
③ SD18 ……139
④ SD19～SD22 ……139
⑤ SD23 ……139
⑥ SD24 ……139
⑦ SD25, 28 ……140
⑧ SD26 ……140
⑨ SD27 ……140
⑩ SD29 ……140
⑪ SD30 ……140
⑫ SK06 ……141
⑬ SK07 ……141
⑭ SK08 ……141
⑮ 包含層出土遺物 ……146
石製品 ……146
弥生土器 ……146

須恵器 ……146
土師器 ……146
土師質土器 ……146
瓦質土器 ……146
近世遺物 ……149
(3) 小　結 ……149
4．Ⅲ　区 ……150
(1) Ⅲ区の概要 ……150
(2) 遺構と遺物 ……153
① ＳＨ02 ……153
② ＳＤ31 ……155
③ 長砂古４号墳 ……156
立　地 ……156
遺　構 ……156
a．墳　丘 ……156
b．埋葬施設 ……163
c．母神山古墳群との比較 ……163
遺　物 ……167
a．石室内出土遺物 ……167
鉄製品 ……167
装飾類 ……173
b．墳丘盛土内出土遺物 ……182
須恵器 ……182
c．周溝内出土遺物 ……189
まとめ ……190
古墳周辺出土遺物 ……190
④ 包含層出土遺物 ……192
石製品 ……192
弥生土器・その他 ……193
須恵器 ……198
陶磁器 ……201
(3) 小　結 ……203

5．まとめ ……203
(1) 長砂古遺跡　石鏃・石材（サヌカイト）のグリッドごとの分布 ……203
(2) 石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡から出土した石鏃の形態 ……204

Ⅳ　柞田八丁遺跡 ……273
1．調査の経過 ……275
2．遺跡の概要 ……280
(1) 地　形 ……280
(2) 土層序 ……280
(3) 調査区周辺出土遺物資料 ……280
3．遺構・遺物について ……284
(1) 検出遺構の概要 ……284
(2) 古墳時代の様相 ……284
(3) 古墳時代後期（6世紀末頃） ……284
ＳＨ01 ……284
ＳＨ02 ……288
ＳＨ03 ……289
ＳＫ10 ……289
ＳＨ04 ……293
ＳＨ05 ……294
ＳＨ06 ……296
ＳＨ07 ……297
ＳＢ39 ……301
土井之内古墳 ……302
柵列（ＳＡ01・02） ……302
ＳＤ01 ……305
ＳＫ11 ……305
(4) 7世紀初頃 ……306
ＳＴ01・02 ……306
(5) 古墳時代後期～奈良時代 ……309
ＳＤ07・08 ……309
(6) 中　世 ……312
① 第一群 ……312

② 第二群 ……315
③ 第三群 ……318
④ 第四群 ……321
⑤ 第五群 ……324
⑥ 第六群 ……326
⑦ 第七群 ……330
⑧ 第八群 ……333
(7) その他の遺構出土遺物 ……337
ＳＤ02 ……337
ＳＤ04 ……337
ＳＫ01 ……337
ＳＫ02 ……337
(8) 柱穴出土遺物 ……338
Ｂ－８　ＳＰ08 ……338
Ｃ－８　ＳＰ05 ……338
Ｃ－９　ＳＰ12 ……338
Ｃ－９　ＳＰ13 ……338
Ｅ－６　ＳＰ01 ……338
(9) 近世　井戸・土坑 ……339
ＳＫ08・ＳＥ01 ……339
(10) 包含層出土遺物 ……342
① 須恵器 ……342
② 東播系こね鉢 ……346
③ 土師器 ……347
④ 土師質土器 ……348
⑤ 備前焼 ……348
⑥ 陶磁器 ……353
⑦ 輸入磁器・緑釉陶器・その他 ……354
⑧ 石製品 ……356
4．まとめ ……357

挿 図 目 次

I 第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜間）……8
第2図 発掘調査風景……9
第3図 整理作業風景……9
第4図 周辺地域の遺跡……13～14

II 第1図 整理作業風景……21
第2図 谷部基本層序模式図……22
第3図 H列南壁土層模式図……22
第4図 調査区周辺地形図・調査区設定図……23～24
第5図 調査区周辺出土遺物実測図……25
第6図 SK15平面図・断面土層図……26
第7図 SK15・SD35出土遺物実測図……27
第8図 SB08平・断面図……27
第9図 SB09平・断面図……28
第10図 SB10平・断面図……28
第11図 SD22出土遺物実測図……29
第12図 G－7・8，H－7・8，I－6・7・8平面図……29
第13図 SD23出土遺物実測図……30
第14図 SK06・SD23平・断面図……30
第15図 SK06・SD23・SA02平面図31
第16図 SB01平・断面図……32
第17図 SB05平・断面図……32
第18図 SB06平・断面図……33
第19図 SB17平・断面図……33
第20図 E－9，F－9平面図……34
第21図 SB03平・断面図……35
第22図 SB04平・断面図……35
第23図 SB15平・断面図……35
第24図 SB16平・断面図……36
第25図 SB16柱穴出土遺物実測図……36
第26図 SB21平・断面図……36
第27図 SB02柱穴出土遺物実測図……37
第28図 SB02平・断面図……37
第29図 SB07平・断面図……37
第30図 SB18平・断面図……37
第31図 SB20平・断面図……38
第32図 南西部遺構平面図……39～40
第33図 SD13・36・53・61出土遺物実測図……41
第34図 SK11平面図……42
第35図 SK11出土遺物実測図……42
第36図 J－6・7，K－6・7平面図44
第37図 SD29出土遺物実測図①……45
第38図 SD29出土遺物実測図②……46
第39図 SB13平・断面図……47
第40図 SB13出土遺物実測図……47
第41図 SB14平・断面図……48
第42図 SB11平・断面図……49
第43図 SB12平・断面図……49
第44図 SB19平・断面図……49
第45図 SK09出土遺物実測図……50
第46図 柱穴出土遺物実測図……51
第47図 SD17平面図……51
第48図 ST02出土遺物実測図……52
第49図 ST01平・断面図……52
第50図 ST02平・断面図……52
第51図 ST03平・断面図……53
第52図 ST04平・断面図……53
第53図 ST05平・断面図……53
第54図 G－9・H－9包含層出土遺物実測図①……55
第55図 H－9包含層出土遺物実測図②……56
第56図 I－9包含層出土遺物実測図③……57
第57図 I－9包含層出土遺物実測図④

……58
第58図　J－9包含層出土遺物実測図⑤
……59
第59図　F－12第4層出土遺物実測図…60
第60図　包含層出土遺物実測図（土師質土器）……62
第61図　包含層出土遺物実測図（陶磁器）
……63
第62図　包含層出土遺物実測図……65
第63図　包含層出土遺物実測図（石製品）
……65
第64図　石田遺跡遺構変遷図(1)……67～68
第65図　石田遺跡遺構変遷図(2)……69～70

III　第1図　調査区周辺地形図・調査区設定図
……107～108
第2図　I区基本層序と地形断面図 …110
第3図　I区平面図……111～112
第4図　SD01・03土層図 ……113
第5図　SD08・09・11平・断面図
……115～116
第6図　I区遺構出土遺物実測図(石製品)
……117
第7図　I区遺構出土遺物実測図 ……118
第8図　SH01平面図 ……119
第9図　SB01平・断面図 ……120
第10図　SB02平・断面図 ……120
第11図　SB03平・断面図 ……120
第12図　SB04平・断面図 ……120
第13図　SB05平・断面図 ……120
第14図　SX01平・断面図 ……121
第15図　SX02平・断面図 ……121
第16図　SX03平・断面図 ……121
第17図　SX04平・断面図 ……122
第18図　I区包含層出土遺物実測図（石製品）① ……123
第19図　I区包含層出土遺物実測図（石製品）② ……124
第20図　I区包含層出土遺物実測図（石製品）③ ……125
第21図　I区包含層出土遺物実測図① 127
第22図　I区包含層出土遺物実測図② 128
第23図　I区包含層出土遺物実測図③ 129
第24図　I区包含層出土遺物実測図④ 130
第25図　II区基本層序と地形断面図 …132
第26図　II区平面図……133～134
第27図　SD16土層図 ……135
第28図　SD16縦断面模式図 ……135
第29図　SD16出土遺物実測図① ……136
第30図　SD16出土遺物実測図② ……137
第31図　SD16出土遺物実測図③ ……138
第32図　SD17土層図 ……139
第33図　SD出土遺物実測図 ……140
第34図　SK08平面図 ……142
第35図　SK08出土遺物実測図① ……143
第36図　SK08出土遺物実測図② ……144
第37図　SK08出土遺物実測図③ ……145
第38図　II区包含層出土遺物実測図① 147
第39図　II区包含層出土遺物実測図② 148
第40図　III区基本層序と地形断面図 …150
第41図　III区平面図……151～152
第42図　SH02出土遺物実測図 ……153
第43図　SH02平面図 ……154
第44図　SD31出土遺物実測図 ……155
第45図　母神山北西部地形図……157～158
第46図　長砂古4号墳地形図……159～160
第47図　長砂古4号墳墳丘断面図
……161～162
第48図　長砂古4号墳石室実測図
……165～166
第49図　石室内遺物検出状況 ……169
第50図　石室内出土遺物実測図① ……170
第51図　石室内出土遺物実測図② ……171
第52図　長砂古4号墳出土馬具復元推定図
……172
第53図　石室内出土遺物実測図③ ……175

第54図　石室内出土遺物実測図④ ……176
第55図　石室内出土遺物実測図⑤ ……177
第56図　石室内出土遺物実測図⑥ ……178
第57図　石室内出土遺物実測図⑦ ……179
第58図　石室内出土遺物実測図⑧ ……180
第59図　石室内出土遺物実測図⑨ ……181
第60図　左側土器群出土状況① ……182
第61図　左側土器群出土状況② ……183
第62図　右側土器群出土状況 ……183
第63図　左側土器群実測図① ……186
第64図　左側土器群実測図② ……187
第65図　右側土器群実測図 ……188
第66図　周溝内出土遺物実測図 ……189
第67図　古墳周辺出土遺物実測図 ……191
第68図　III区包含層出土遺物実測図（石製品） ……192
第69図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器）① ……194
第70図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器）② ……195
第71図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器）③ ……196
第72図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器・その他）④ ……197
第73図　III区包含層出土遺物実測図（須恵器）① ……199
第74図　III区包含層出土遺物実測図（須恵器）② ……200
第75図　III区包含層出土遺物実測図（陶磁器） ……202
第76図　グリッド配置図 ……205

Ⅳ　第1図　包含層基本層序模式図 ……280
第2図　調査区周辺地形図・調査区設定図 ……281～282
第3図　小天皇塚古墳墳丘表採遺物実測図 ……283
第4図　陶印実測図・拓影 ……283
第5図　D－6・7・8，E－6・7・8遺構平面図……285～286
第6図　SH01出土遺物実測図 ……287
第7図　SH01平・断面図 ……287
第8図　SH02出土遺物実測図 ……288
第9図　SH02平・断面図 ……288
第10図　SK10平・断面図 ……290
第11図　SH03・SK10出土同一個体遺物実測図 ……290
第12図　SK10出土遺物実測図 ……290
第13図　SH03平・断面図……291～292
第14図　SH03出土遺物実測図…291～292
第15図　SH04出土遺物実測図 ……293
第16図　SH04平・断面図 ……294
第17図　SH05平・断面図 ……295
第18図　SH05出土遺物実測図 ……295
第19図　SH06出土遺物実測図 ……296
第20図　SH06平・断面図 ……297
第21図　SH07出土遺物実測図 ……298
第22図　SH07平・断面図……299～300
第23図　SB39平・断面図 ……301
第24図　古墳出土遺物実測図 ……302
第25図　土井之内古墳平・断面図 ……303～304
第26図　SD01出土遺物実測図 ……305
第27図　SK11出土遺物実測図 ……305
第28図　ST02出土遺物実測図 ……306
第29図　ST01・02平・断面図…307～308
第30図　SD08出土遺物実測図① ……309
第31図　SD08出土遺物実測図② ……310
第32図　L－2・3，M－2・3遺構平面図 ……311
第33図　SB03平・断面図 ……313
第34図　SB08平・断面図 ……313
第35図　SB12平・断面図 ……313
第36図　SB16平・断面図 ……313
第37図　SB26平・断面図 ……313
第38図　SB45平・断面図 ……314

第39図　ＳＢ47平・断面図 ……314
第40図　ＳＢ23平・断面図 ……314
第41図　第一群掘立柱建物配置図 ……315
第42図　ＳＢ30平・断面図 ……316
第43図　ＳＢ32平・断面図 ……316
第44図　ＳＢ46平・断面図 ……316
第45図　ＳＢ48平・断面図 ……316
第46図　第二群掘立柱建物配置図 ……317
第47図　ＳＢ21平・断面図 ……318
第48図　ＳＢ05平・断面図 ……319
第49図　ＳＢ17平・断面図 ……319
第50図　ＳＢ31平・断面図 ……319
第51図　ＳＢ33平・断面図 ……319
第52図　ＳＢ44平・断面図 ……319
第53図　第三群掘立柱建物配置図 ……320
第54図　ＳＢ01平・断面図 ……321
第55図　ＳＢ25平・断面図 ……321
第56図　ＳＢ27平・断面図 ……322
第57図　ＳＢ29平・断面図 ……322
第58図　ＳＢ42平・断面図 ……322
第59図　ＳＢ41平・断面図 ……323
第60図　第四群掘立柱建物配置図 ……323
第61図　ＳＢ20平・断面図 ……324
第62図　ＳＢ38平・断面図 ……324
第63図　ＳＢ43平・断面図 ……324
第64図　第五群掘立柱建物配置図 ……325
第65図　ＳＢ07平・断面図 ……326
第66図　ＳＢ11平・断面図 ……326
第67図　ＳＢ11柱穴出土遺物 ……326
第68図　ＳＢ13平・断面図 ……327
第69図　ＳＢ14平・断面図 ……327
第70図　ＳＢ15平・断面図 ……327
第71図　ＳＢ24平・断面図 ……327
第72図　ＳＢ34平・断面図 ……328
第73図　ＳＢ35平・断面図 ……328
第74図　ＳＢ36平・断面図 ……328
第75図　ＳＢ40平・断面図 ……328
第76図　第六群掘立柱建物配置図 ……329
第77図　ＳＢ02平・断面図 ……330
第78図　ＳＢ04平・断面図 ……330
第79図　ＳＢ09平・断面図 ……331
第80図　ＳＢ19平・断面図 ……331
第81図　ＳＢ28平・断面図 ……331
第82図　第七群掘立柱建物配置図 ……332
第83図　ＳＢ06平・断面図 ……333
第84図　ＳＢ10平・断面図 ……333
第85図　ＳＰ07平面図 ……333
第86図　ＳＢ10柱穴出土遺物実測図 …334
第87図　ＳＢ18平・断面図 ……334
第88図　ＳＢ22平・断面図 ……335
第89図　ＳＢ37平・断面図 ……335
第90図　第八群掘立柱建物配置図 ……336
第91図　溝・土坑出土遺物実測図 ……337
第92図　ＳＫ01平・断面図 ……337
第93図　柱穴出土遺物実測図 ……338
第94図　ＳＥ01出土遺物実測図 ……339
第95図　ＳＫ08出土遺物実測図 ……339
第96図　ＳＫ08平面図 ……340
第97図　ＳＥ01平・断面図 ……341
第98図　包含層出土遺物実測図（須恵器）①……343
第99図　包含層出土遺物実測図（須恵器）②……344
第100図　包含層出土遺物実測図（土器集中・攪乱土層）③ ……345
第101図　包含層出土遺物実測図（東播系こね鉢）④ ……346
第102図　包含層出土遺物実測図（土師器）⑤ ……347
第103図　包含層出土遺物実測図（土師質土器）⑥ ……349
第104図　包含層出土遺物実測図（土師質土器）⑦ ……350
第105図　包含層出土遺物実測図（土師質土器）⑧ ……351
第106図　包含層出土遺物実測図（備前焼）

⑨ ……352
第107図 包含層出土遺物実測図（陶磁器）
⑩ ……354
第108図 包含層出土遺物実測図(輸入磁器)
⑪ ……355
第109図 包含層出土遺物実測図（石製品）
⑫ ……356
第110図 柞田八丁遺跡遺構変遷図(1)
……359～360
第111図 柞田八丁遺跡遺構変遷図(2)
……361～362
第112図 柞田八丁遺跡遺構変遷図(3)
……363～364

表　目　次

I 第1表 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業（発掘調査のみ）……3
第2表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要（1）……6
第3表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要（2）……7

石　田　遺　跡

II 第1表 遺構番号変更一覧表……20
第2表 各層遺物時代幅一覧表……60
第3表 掘立柱建物一覧表……72
第4表 検出遺構一覧表……74
第5表 遺物観察一覧表……79

長　砂　古　遺　跡

III 第1表 遺構番号変更一覧表 ……109
第2表 グリッドごとの石鏃出土点数 206
第3表 グリッドごとのサヌカイト片出土重量 ……206
第4表 長さと幅の関係 ……207
第5表 くり込みの深さと幅の関係 …207
第6表 長さ・幅とくり込みの深さ・幅の関係 ……207
第7表 石鏃の厚さと幅の関係 ……207
第8表 石鏃のくり込み角と先端角の関係 ……208
第9表 遺物観察表（古墳出土装飾具・その他） ……209
第10表 検出遺構一覧表 ……214
第11表 遺物観察一覧表 ……221

柞　田　八　丁　遺　跡

IV 第1表 遺構番号変更一覧表 ……278
第2表 掘立柱建物一覧表 ……365
第3表 検出遺構一覧表 ……369
第4表 遺物観察一覧表 ……372

図 版 目 次

図 版 1　(1)石田遺跡調査区遠景（北西より）
(2)石田遺跡調査区遠景（南東より）
図 版 2　(1)調査区発掘風景
(2)調査区発掘風景
図 版 3　(1)調査区発掘調査前風景
(2)調査区表土剝ぎ
図 版 4　(1)ＳＫ15土層断面
(2)ＳＫ15遺物出土状況
図 版 5　(1)ＳＢ09・10・11検出状況
(2)Ｈ－７遺構検出状況
図 版 6　(1)ＳＢ08検出状況
(2)ＳＫ06・ＳＤ23・ＳＡ02検出状況
図 版 7　(1)ＳＫ06検出状況
(2)ＳＤ23検出状況
図 版 8　(1)ＳＢ01・02・03・04・05・06検出状況
(2)Ｆ－８，Ｇ－７・８，Ｈ－７・８，Ｉ－７・８遺構検出状況
図 版 9　(1)Ｆ－８，Ｇ－８遺構検出状況
(2)Ｇ－９遺構検出状況
図 版 10　(1)ＳＢ14・15・16，ＳＡ03検出状況
(2)ＳＢ15・ＳＡ03，ＳＢ16・ＳＤ31検出状況
図 版 11　(1)ＳＢ16柱穴検出状況
(2)ＳＫ11検出状況
図 版 12　(1)Ｎ－３，Ｏ－３遺構検出状況
(2)ＳＢ20・ＳＤ36検出状況
図 版 13　(1)Ｑ－３，Ｒ－３遺構検出状況
(2)ＳＤ63検出状況
図 版 14　(1)Ｊ－６，Ｋ－６遺構検出状況
(2)ＳＤ29遺物出土状況
図 版 15　(1)ＳＢ12・13検出状況
(2)Ｏ－２，Ｐ－２遺構検出状況
図 版 16　(1)ＳＤ17検出状況
(2)ＳＫ05検出状況
図 版 17　調査区周辺出土遺物
図 版 18　ＳＫ15，ＳＤ35，ＳＢ16，ＳＢ02，ＳＤ13・36・42・53・61，ＳＫ11出土遺物
図 版 19　ＳＤ29出土遺物①
図 版 20　ＳＤ29出土遺物②
図 版 21　ＳＤ29出土遺物③
図 版 22　(1)ＳＫ09出土遺物
(2)ＳＴ02出土遺物
図 版 23　Ｇ－９，Ｈ－９包含層出土遺物
図 版 24　Ｉ－９包含層出土遺物①
図 版 25　Ｉ－９包含層出土遺物②
図 版 26　Ｆ－12第４層出土遺物
図 版 27　包含層出土遺物（土師質土器）①
図 版 28　包含層出土遺物（陶磁器）②
図 版 29　包含層出土遺物（陶磁器）③
図 版 30　包含層出土遺物④
図 版 31　包含層出土遺物⑤
図 版 32　(1)包含層出土遺物（石製品）⑥
(2)母神山全景
図 版 33　(1)長砂古遺跡Ｉ区北部発掘作業風景
(2)Ｂ－14，Ｃ－14遺構検出状況（南より）
図 版 34　(1)ＳＤ01・02・03検出状況
(2)ＳＤ05，ＳＫ02検出状況(南より)
図 版 35　(1)Ｄ－12・13，Ｅ－12・13遺構検出状況（南東より）
(2)ＳＢ03検出状況（南東より）
図 版 36　(1)Ｄ－12，Ｅ－12・13，Ｆ－13・14遺構検出状況（南東より）
(2)ＳＨ01検出状況（北より）
図 版 37　(1)Ｉ区遺構出土石器
(2)ＳＤ01出土遺物
(3)(4)ＳＤ01出土遺物
(5)ＳＤ03出土遺物

図 版 38 (1)ＳＤ13出土遺物
(2)Ｉ区包含層出土石斧
図 版 39 Ｉ区包含層出土石器
図 版 40 (1)(2)Ｉ区出土弥生土器（底部）
(3)Ｉ区出土土師器坏底部（糸切り）
図 版 41 Ｉ区包含層出土遺物①
図 版 42 Ｉ区包含層出土遺物②
図 版 43 Ｉ区包含層出土遺物③
図 版 44 (1)(2)Ｉ区包含層出土遺物④
(3)Ｉ区作業風景（ＳＨ01付近）
図 版 45 (1)II区作業風景
(2)II区全景（北東より）
図 版 46 (1)ＳＤ15・16検出状況（南より）
(2)ＳＤ16断面（北より）
図 版 47 (1)ＳＤ15断面（北より）
(2)Ｉ－８，Ｊ－８遺構検出状況（南より）
図 版 48 (1)ＳＫ08遺物出土状況
(2)(3)ＳＤ16出土遺物①
図 版 49 ＳＤ16出土遺物②
図 版 50 ＳＤ16出土遺物③
図 版 51 (1)ＳＤ17出土遺物
(2)ＳＤ28出土遺物
(3)ＳＫ08出土遺物①
図 版 52 ＳＫ08出土遺物②
図 版 53 ＳＫ08出土遺物③
図 版 54 ＳＫ08出土遺物④
図 版 55 II区包含層出土遺物①
図 版 56 II区包含層出土遺物②
図 版 57 II区包含層出土遺物③
図 版 58 (1)ＳＨ02・長砂古４号墳遠景
(2)長砂古４号墳遠景
図 版 59 (1)長砂古４号墳羨道・版築土層断面
(2)墓道より玄室を望む
図 版 60 (1)床面（第一面）検出状況
(2)床面（第二面）検出状況
図 版 61 (1)配水施設検出状況
(2)掘り方検出状況
図 版 62 (1)基底石検出状況
(2)石室左玄門部構築状況
図 版 63 (1)玄室内床面遺物出土状況
(2)紡錘車出土状況
(3)提瓶・臼玉出土状況
図 版 64 (1)玄室奥壁際鉄刀・耳環出土状況
(2)耳環出土状況
図 版 65 (1)玄室床面臼玉出土状況
(2)玄室床面雲珠出土状況
(3)墳丘内土器群出土状況
図 版 66 (1)周溝検出状況
(2)周溝土層断面
図 版 67 石室内出土遺物（須恵器）①
図 版 68 石室内出土遺物（須恵器）②
図 版 69 石室内出土遺物（鉄製品）③
図 版 70 石室内出土遺物（鉄製品）④
図 版 71 石室内出土遺物（鉄製品）⑤
図 版 72 石室内出土遺物（鉄製品）⑥
図 版 73 石室内出土遺物（装飾品）⑦
図 版 74 石室内出土遺物（装飾品）⑧
図 版 75 (1)石室内出土遺物⑨
(2)長砂古４号墳出土遺物
図 版 76 (1)右側土器群
(2)左側土器群
図 版 77 (1)左側土器群出土状況
(2)～(5)左側土器群出土遺物
図 版 78 左側土器群出土遺物
図 版 79 右側土器群出土遺物
図 版 80 (1)(2)右側土器群出土遺物
(3)発掘調査に従事した人々
図 版 81 (1)～(4)ＳＤ31出土遺物
(5)ＳＤ34出土遺物（周溝）
図 版 82 (1)ＳＤ37出土遺物
(2)(3)III区包含層出土遺物①
図 版 83 (1)～(3)III区包含層出土遺物②
(4)サヌカイト片③
図 版 84 III区包含層出土遺物④
図 版 85 III区包含層出土遺物⑤

図 版 86　Ⅲ区包含層出土遺物⑥
図 版 87　(1)現場説明会風景
(2)発掘作業風景
図 版 88　(1)柞田八丁遺跡調査区遠景（南東より）
(2)柞田八丁遺跡調査区遠景（北西より）
図 版 89　(1)調査区表土剝ぎ
(2)発掘作業風景
図 版 90　(1)竪穴住居検出状況（南より）
(2)竪穴住居検出状況（東より）
図 版 91　(1)ＳＨ01検出状況（南より）
(2)ＳＨ02検出状況（東より）
図 版 92　(1)ＳＨ03検出状況（南より）
(2)ＳＨ03遺物出土状況
図 版 93　(1)ＳＨ03側溝遺物出土状況
(2)ＳＫ10検出状況
図 版 94　(1)ＳＨ04検出状況（南より）
(2)ＳＨ04柱穴検出状況（南より）
図 版 95　(1)ＳＨ04遺物出土状況
(2)ＳＨ06検出状況（南より）
図 版 96　(1)ＳＨ07検出状況（南より）
(2)ＳＨ07検出状況（北より）
図 版 97　(1)ＳＨ07遺物出土状況
(2)ＳＨ07カマド検出状況
図 版 98　(1)ＳＨ07柱穴検出状況
(2)ＳＨ07柱穴遺物出土状況
図 版 99　(1)ＳＢ39検出状況
(2)土井之内古墳検出状況（南より）
図版 100　(1)Ｃ－８遺構検出状況（東より）
(2)ＳＴ02検出状況
図版 101　(1)ＳＴ02遺物出土状況
(2)ＳＴ02土層断面
図版 102　(1)Ｌ－２・３，Ｍ－２・３遺構検出状況（西より）
(2)ＳＤ07・08遺物出土状況
図版 103　(1)Ａ－９・10遺構検出状況（東より）
(2)Ａ－９・Ｂ－９遺構検出状況（南より）
図版 104　(1)Ｃ－10，Ｄ－10遺構検出状況（北より）
(2)Ｃ－９遺構検出状況（西より）
図版 105　(1)Ｋ－３・４遺構検出状況
(2)ＳＢ27検出状況（北より）
図版 106　(1)ＳＢ38検出状況（南より）
(2)ＳＢ15柱穴遺物出土状況①
(3)ＳＢ15柱穴遺物出土状況②
図版 107　(1)ＳＢ10柱穴遺物出土状況①
(2)ＳＢ10柱穴遺物出土状況②
図版 108　(1)ＳＢ10柱穴遺物出土状況③
(2)ＳＫ12検出状況
図版 109　(1)ＳＫ08検出状況
(2)ＳＥ01検出状況
図版 110　(1)ＳＨ01出土遺物
(2)ＳＨ02出土遺物
(3)ＳＨ03・ＳＫ10出土遺物①
(4)ＳＫ10出土遺物②
図版 111　(1)ＳＫ10出土遺物③
(2)ＳＨ03出土遺物①
図版 112　(1)ＳＨ03出土遺物②
(2)ＳＨ04出土遺物
(3)ＳＨ05出土遺物①
図版 113　(1)ＳＨ05出土遺物②
(2)ＳＨ06出土遺物
図版 114　ＳＨ07出土遺物
図版 115　(1)土井之内古墳出土遺物
(2)ＳＤ01出土遺物
(3)ＳＫ11出土遺物
図版 116　ＳＴ02出土遺物
図版 117　ＳＤ08出土遺物
図版 118　(1)ＳＢ11柱穴出土遺物
(2)ＳＢ10柱穴出土遺物①
図版 119　ＳＢ10柱穴出土遺物②
図版 120　(1)ＳＢ10柱穴出土遺物③
(2)ＳＤ04，ＳＫ01，ＳＫ03出土遺物
(3)柱穴出土遺物

図版 121　ＳＫ08出土遺物①
図版 122　(1)ＳＫ08出土遺物②
(2)包含層出土遺物（須恵器）①
図版 123　包含層出土遺物（須恵器）②
図版 124　包含層出土遺物(須恵器・土師器)③
図版 125　(1)包含層出土遺物（土師器）④
(2)包含層出土遺物(東播系こね鉢)⑤
図版 126　(1)包含層出土遺物(東播系こね鉢)⑥
(2)包含層出土遺物（土師器）⑦
図版 127　包含層出土遺物（土師器）⑧
図版 128　(1)包含層出土遺物（土師質土器）⑨
(2)包含層出土遺物（土師質土器）⑩
図版 129　包含層出土遺物⑪
図版 130　包含層出土遺物（磁器）⑫
図版 131　包含層出土遺物（磁器）⑬
図版 132　包含層出土遺物（磁器）⑭
図版 133　包含層出土遺物（輸入磁器）⑮
図版 134　包含層出土遺物（輸入磁器）⑯
図版 135　包含層出土遺物（輸入磁器）⑰
図版 136　包含層出土遺物（越州窯系青磁その他）⑱
図版 137　包含層出土遺物（石製品）⑲
図版 138　ＳＨ04出土鉄滓
図版 139　土師質風呂
図版 140　(1)(2)篠原義幸氏所蔵遺物

付　　図

1．石田遺跡遺構配置図
2．長砂古遺跡遺構配置図
3．柞田八丁遺跡遺構配置図

I はじめに

1．調査の経緯

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業は昭和57年度に始まり，今年度で6年目を迎えた。今年度（62年度）は，用地未買収のため残されていた観音寺市柞田八丁遺跡の480㎡も6月に発掘調査を終了し，これで24遺跡・211,500㎡の発掘をすべて終了した。これに伴い，今年度は報告書作成のための整理作業が主体となり，7遺跡・2冊の報告書を刊行した昨年度に続き，9遺跡・4冊の刊行を予定しているほか，次年度にまたがる整理作業も実施している。報告書作成のための整理作業は今年度がピークで，順調に進めば，来年度以降には5遺跡の報告と総括編を残すのみとなる。また，各遺跡の報告書とは別に，一般啓蒙用として，昭和60・61年度に『語りかける埋蔵文化財　いにしえの讃岐　Ⅰ・Ⅱ』を刊行しており，今年度も3冊目を刊行する予定である。

今年度で終了した発掘調査は，昭和58年2月から3月にかけて，多度郡条里の検出を目的として善通寺インター予定地付近で開始された。発掘実施前には，調査予定遺跡は，17遺跡・60,900㎡とみられていたが，57年度の発掘調査で善通寺市金蔵寺下所遺跡が新たに発見され，かなりの増加が予想された。翌58年度には調査の基地として善通寺市原田町に「香川県埋蔵文化財発掘調査善通寺連絡事務所」を設置し，金蔵寺下所遺跡以下の発掘調査を本格的に実施するとともに，横断道予定路線内の事前調査を実施した。その結果，新たな遺跡の発見が相次ぎ，最終的には24遺跡・211,500㎡の発掘調査を実施するに至った。各年度ごとの発掘調査にかかわる遺跡数・面積・人員・経費は第1表のとおりである。

第1表　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業（発掘調査のみ）

内容／年度	遺跡数	面積（㎡）	人員		発掘調査費（千円）	備考
			職員	嘱託		
57	1	1,300	2	1	8,600	
58	7	19,200	8（うち，係長1，庶務1）	4（うち，所長1）	141,000	
59	16	57,900	9（同上）	5（同上）	245,644	
60	14	78,500	10（同上）	7（同上）	312,500	
61	6	54,120	15（同上）	7（同上）	262,027	人員の内，職員2は報告書作成。報告書作成の経費は含まず。
62	1	480	7	0	1,920	報告書作成の経費は含まず。人員は報告書作成の人数。
合計	24	211,500			971,691	

6年に及ぶ発掘調査によって，第2・3表に示すように縄文時代から江戸時代に至る遺跡が発掘された。

縄文時代の遺跡をみると，善通寺市永井遺跡では縄文時代後期の河川跡から，ドングリ・トチなどの堅果類の保存・加工処理場が発見されたほか，縄文晩期の打製石斧を大量に出土した別の河川跡では，川底に14本の杭が打ち込まれていた。

観音寺市一の谷遺跡群では県下で初めて弥生時代前期の竪穴住居跡が2棟検出され，善通寺市矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡で弥生時代中期の集落跡を，善通寺市稲木遺跡C地区・観音寺市一の谷遺跡群で弥生時代終末頃の集落跡を検出した。このうち，矢ノ塚遺跡と西碑殿遺跡の掘立柱建物跡が方形の柱穴掘り方をもつことと，一の谷遺跡群で舶載と思われる鏡片や平形銅剣片が出土したことなどは注目される。

古墳時代では，高瀬町大門遺跡・観音寺市柞田八丁遺跡で6世紀末頃のカマド付竪穴住居跡を特色とする集落跡が検出され，瀬戸大橋架橋に伴って発掘調査された坂出市下川津遺跡の例と共に，県内ではこれまで不明であった古墳時代後期の集落跡として重要である。

古代になると，善通寺市金蔵寺下所遺跡で奈良時代と考えられる30棟以上の掘立柱建物跡や条里の推定方位と一致する溝が検出されると共に，自然河川から斎串・人形・馬形・舟形などの木製祭祀具・わらじなどが出土した。また，善通寺市稲木遺跡B地区では，飛鳥・白鳳時代の掘立柱建物跡32棟，平安時代前期と考えられる掘立柱建物跡4棟が検出され，丸亀平野の条里や，古代集落，あるいは官衙の解明に貴重な資料を提供することとなった。また，善通寺市稲木遺跡C地区から5枚の「承和昌宝」を納めた土師質甕が出土し，胞衣壺と考えられていることや，善通寺市中村遺跡の平安時代中期頃の溝から，「貞」字をもつ銅印が出土したことも特筆される成果であった。

古代末から中世では，多くの遺跡で掘立柱建物跡が検出されており，畿内の和泉産と考えられる瓦器や東播系須恵質土器・輸入磁器・中世陶器などが出土した。また，善通寺市上一坊遺跡や観音寺市一の谷遺跡群で近世の遺跡に本格的な発掘調査のメスが入れられたことも注目される。

四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で注目されるのは，初めて沖積平野の本格的な発掘がなされた点である。発掘調査前には60,900㎡と予想されていた遺跡面積が，最終的には211,500㎡となった事実が示すように，これまでほとんど不明であった平野部の遺跡，特に集落跡が大規模に発掘調査された。これによって，平野部に多くの遺跡が存在する事実が確認されると共に，採集土器と墳墓などの少ない資料から想定されていた香川の先人達の暮らしが，豊かでより具体的なイメージを持ち始めてきた。

本報告は，四国横断自動車道の建設に伴って観音寺市内で発掘調査された石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡を収録した。

石田遺跡は，主任技師（当時）小西正行らを中心にして，昭和60年5月1日から61年1月11日

まで，17,200㎡が発掘調査された。発掘調査によって検出された主な遺構には弥生時代後期の土坑，古墳時代後期から中世の掘立柱建物跡20棟などがある。掘立柱建物跡は，古墳時代後期のもの3棟，古代末～中世初期のもの12棟，中世のもの5棟で，この地が永く集落として利用されたことを物語っている。ただ，これらの遺構は主に微高地の縁辺部で検出されており，本来集落の中心であった微高地の中央部は粘土採取によって破壊されていたことは残念であった。また，この遺跡の隣接地で，戦後，「生」のヘラ描き文字をもった8世紀頃の須恵器坏蓋が出土して注目されたが，今回の発掘調査では奈良時代の遺構は検出されなかった。

長砂古遺跡は，主任技師（当時）小西正行らを中心にして，昭和61年1月13日から8月12日まで，8,900㎡発掘調査された。検出された主な遺構をみると，I区では削平された弥生時代の竪穴住居跡・中世ではないかと考えられる掘立柱建物跡5棟などがあり，II区では奈良時代の土坑や各時代にわたる溝，III区では弥生時代末の竪穴住居跡1棟，6世紀後半の横穴式石室1基（長砂古4号墳）などがある。古墳は，路線内では1基しか検出されなかったが，付近にはかつて5基程度が存在し，母神山古墳群の一部として長砂古支群を形成していたことが明らかになった。

柞田八丁遺跡は，主任技師（当時）小西正行・技師（当時）中西昇らを中心にして，昭和61年4月3日から11月28日まで発掘調査を実施し，さらに用地買収の遅れた一部については，技師磯崎寛らを中心にして昭和62年6月5日から6月17日まで調査を実施した。柞田八丁遺跡では，遺跡の中央部が粘土採取によってかなり破壊されていたが，6世紀末頃の小型横穴式石室1基，竪穴住居跡7棟，掘立柱建物跡1棟，7世紀初頭の土壙墓2基，中世の掘立柱建物跡47棟などが検出されたほか，越州窯系青磁などの遺物が出土した。越州窯系青磁は包含層からの発見で，平安時代中期の遺構は検出されなかったが，香川県で3遺跡・4例目の出土であり，注目される。本遺跡から約200m離れた位置で，「封印」銘のある須恵質陶印も発見されており，約1㎞離れて安井廃寺や柞田駅推定地が所在することなどからして，今後，この地域の歴史時代の考古学的研究が待たれる。

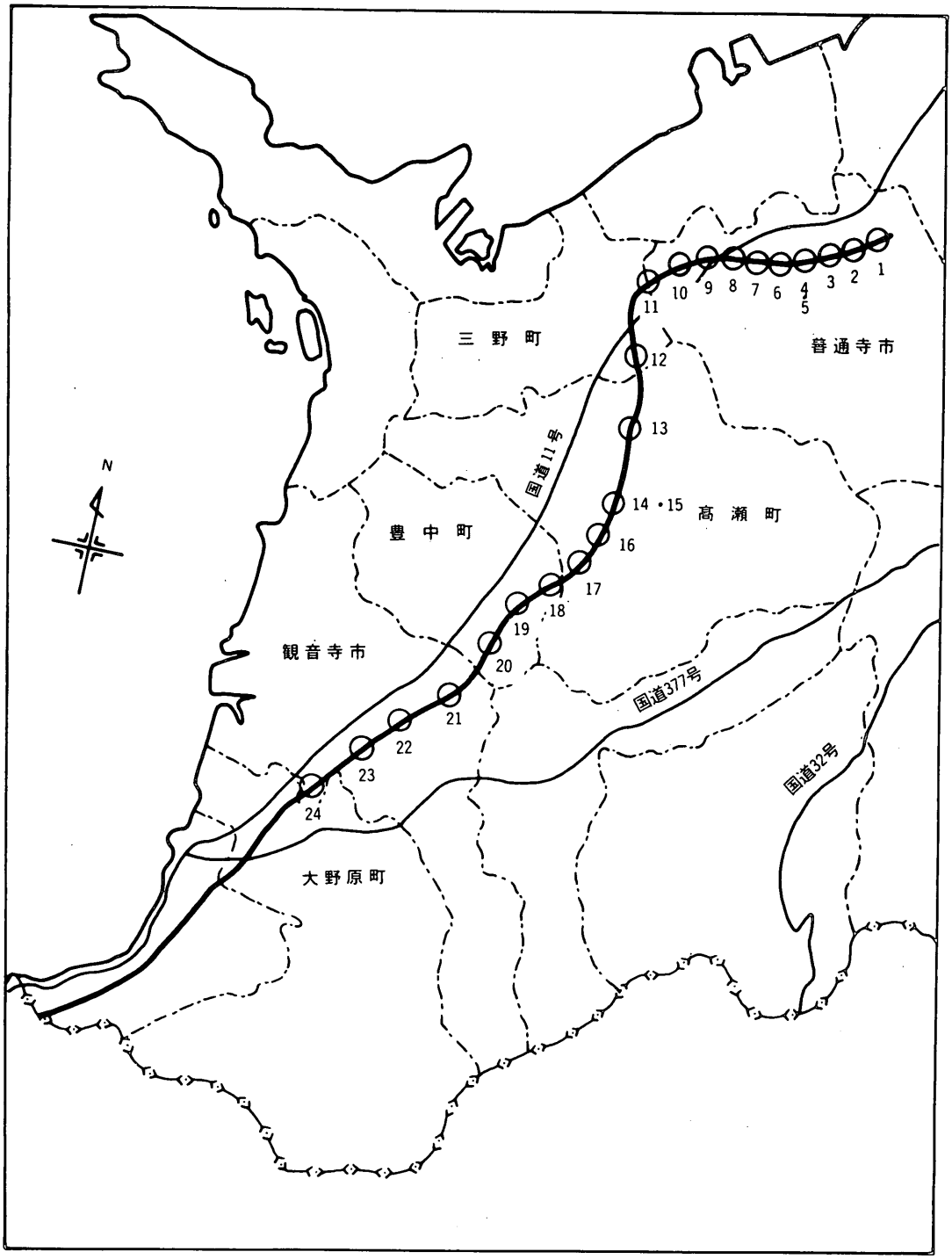
本報告に収録した3遺跡の整理作業は，技師片桐孝浩・磯崎寛が担当し，石田遺跡・柞田八丁遺跡を片桐が，長砂古遺跡を磯崎が主に分担して，昭和62年4月から行い，ここに刊行の運びとなった。

第２表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名(旧遺跡名)	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	主な出土品	備考
1	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町下所	17,000	56. 4. 1～60. 2.28	弥生時代 奈良・平安時代 中世	包含層，自然河川 溝，掘立柱建物跡　30以上 溝，掘立柱建物跡　5以上	須恵器，土師器，瓦器，木製品（斎串，人形，馬形，刀形，船形，曲物など。以上奈良時代)。わらじ(奈良時代)。	
2	稲木遺跡Ｃ地区	善通寺市稲木町	4,000	59. 4. 1～60. 3.30	弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡５，集石墓(？)８，土壙墓３，壺棺墓９ 掘立柱建物跡４ 掘立柱建物跡１，埋甕	弥生土器，土師器，須恵器，鏡片２，承和昌宝５	
3	稲木遺跡Ｂ地区	善通寺市稲木町	17,100	59. 9.17～60. 2.28	弥生時代 飛鳥・白鳳時代 平安時代	土坑４ 掘立柱建物跡32（内倉庫６） 溝 掘立柱建物跡４	土師器，須恵器，鉄製鋤先	
4	稲木遺跡Ａ地区	善通寺市稲木町	300	58. 6.29～59. 2.14	弥生時代 古代	溝 溝	縄文晩期土器，弥生土器，磨製石庖丁	
5	永井遺跡	善通寺市中村町島田・榎田，下吉田町下所西	33,300	60. 5. 7～61.12.24	縄文時代 弥生時代 中・近世	自然河川，土坑 溝，土坑，掘立柱建物跡３ 掘立柱建物跡12，溝，土坑	縄文土器（彦崎ＫⅠ，ＫⅡ式，黒土ＢⅠ式） 土偶１，耳飾２，打製石斧多数，杭14，椀１，鳥形木製品１，堅果類多数（以上縄文時代）	
6	中村遺跡	善通寺市中村町筆岡	9,000	59. 7. 3～59. 9.17	縄文・弥生時代 平安時代 中世 近世	自然河川 溝２ 掘立柱建物跡15，溝，土坑 溝，土坑	銅印「貞」	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊（以下，横断道報告Ⅰと略称）62. 3.31刊行
7	乾遺跡（吉原B_2）	善通寺市中村町乾	2,100	60. 9. 2～60.11.20	弥生時代 近世	湧水池状遺構，自然河川 土坑，自然河川	弥生前期土器	横断道報告Ⅰ
8	上一坊遺跡（吉原B_1）	善通寺市吉原町上一坊	2,800	60.11.13～61. 1.24	中世 近世	掘立柱建物24棟，井戸１，土坑，溝 井戸２，土坑，溝	近世陶磁器	横断道報告Ⅰ
9	矢ノ塚古墳	善通寺市吉原町碑殿町矢ノ塚	11,800	59.10. 8～60. 8.30	弥生時代 奈良時代 中世	竪穴住居跡１，掘立柱建物12，土坑，溝 掘立柱建物17，溝 掘立柱建物30以上，井戸２，土坑，溝	弥生土器，須恵器，剣形土製品１，鳥形土製品１，分銅形土製品４，石帯	横断道報告Ⅲ
10	西碑殿遺跡	善通寺市碑殿町	5,200	60. 2. 4～60. 4.30 61. 7.28～61. 8.11	弥生時代 奈良時代 中世 近世	掘立柱建物数棟 掘立柱建物数棟 掘立柱建物数棟 一字一石経塚	弥生土器，須恵器 一字一石経，京焼風陶器碗１（以上，経塚）	
11	深尾石棺群	三豊郡三野町大見深尾	500	59. 9.11～59.10.23				路線内には存在せず
12	道免窯跡	三豊郡三野町大見道免丸尾	100	59. 9.11～59.10.23	飛鳥・白鳳時代	（灰原）	須恵器坏・高坏・壺・甕	横断道報告Ⅱ
13	北条遺跡		100	60. 5. 9				路線内には存在せず

第3表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

No	遺跡名(旧遺跡名)	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	主な出土品	備考
14	利生寺遺跡（利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ区）	三豊郡高瀬町上勝間字砂古	3,200	60. 5.22～60. 7.18	弥生時代 中世 近世	土坑 5 竪穴状住居跡 1，ピット 掘立柱建物跡 1，井戸 1，土坑 4	弥生後期土器， 中・近世土器	横断道報告II
15	大門遺跡（利生寺遺跡Ⅲ区）	三豊郡高瀬町上勝間字砂古	5,500	60. 7.22～61. 1.28	古墳時代 中世 近世	竪穴住居跡23，掘立柱建物跡 1，土坑 6，溝23 礎石建物跡 1，掘立柱建物跡 13，土坑6，石組井戸1，溝9 溝 1	須恵器，土師器，中世土器，鞴の羽口，鉄滓	横断道報告II
16	利生寺古墳	三豊郡高瀬町上勝間字砂古	700	60.12. 2～61. 3.17	古墳時代	横穴式石室 1	須恵器，耳環	横断道報告II
17	矢ノ岡遺跡（土佐神社跡）	三豊郡高瀬町上勝間矢ノ岡	2,600	61. 1.28～61. 2.27	古墳時代 中世	竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 6，溝 6	八稜鏡 1	横断道報告II
18	四ツ塚古墳	三豊郡豊中町笠田笠岡	1,000	59. 4.16～59. 5.14	古墳時代	横穴式石室 1	須恵器，耳環	横断道報告IV（予定）
19	財田古墳	三豊郡豊中町上高野	1,000	58. 9.26～58.11.30	古墳時代	横穴式石室 1	須恵器，耳環，鉄斧，鉄釘	横断道報告IV（予定）
20	延命遺跡	三豊郡豊中町上高野大地・八反地	18,000	58.11.28～60. 5.15 61. 9. 1～61. 9.30	弥生時代 中世	溝 掘立柱建物，土坑，土壙墓，塚，井戸 3，柵	土師器，須恵器，瓦器，青磁	
21	一ノ谷遺跡群（刈田群条里）	観音寺市古川町，中田井町，本大町	36,100	60. 5.15～61.12.25	弥生時代 古墳時代～近世	竪穴住居跡34，土坑，溝 掘立柱建物32，土坑，土壙墓，溝	弥生土器（前期，後期），平形銅剣片，銅鏡片，中・近世土器	
22	石田遺跡	観音寺市池ノ尻町石田	17,200	60. 5. 1～61. 1.11	弥生時代 古墳時代 中世	土坑 掘立柱建物跡 3 掘立柱建物跡17，土坑 溝	土師器，須恵器，瓦器，緑釉土器，黒色土器	
23	長砂古墳跡	観音寺市池ノ尻町大長	8,900	61. 1.13～61. 8.12	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡 1 横穴式石室 1 溝，掘立柱建物跡 5	弥生土器，須恵器，玉類，馬具，武器，瓦器	
24	柞田八丁遺跡（中姫遺跡）	観音寺市柞田町土井之内	14,000	61. 4. 3～61.11.28 62. 6. 5～62. 6.17	古墳時代 中世	竪穴住居跡 7，掘立柱建物跡 1，横穴式石室1，溝，土壙墓 2 掘立柱建物跡47	須恵器，土師器，耳環 越州窯青磁	
	合計		211,500	67. 2. 8～61.12.25 62. 6. 5～62. 6.17 （調査期間は57年度の多度郡条里の発掘を含む。）				24遺跡



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜間）

第２図　発掘調査風景

第３図　整理作業風景

2．立地と環境

三豊平野は，低い洪積台地と，財田川，柞田川及びその支流によっ形成された沖積地からなる。観音寺市付近では西の燧灘に面して最も広く，南は山地が海まで迫って愛媛県との境をなし，北は，東西の山地に挟まれた地溝状の平地が細長く延び，鳥坂峠で丸亀平野と区切られて，一つのまとまった地域を形成している。

本書に収録した3遺跡は，いずれも香川県西部の観音寺市を中心に広がる三豊平野の中央部に位置する。各遺跡の所在地は，石田遺跡が観音寺市池ノ尻町石田，長砂古遺跡が同市池ノ尻町長砂，柞田八丁遺跡が同市柞田町八丁である。

石田遺跡・長砂古遺跡は，独立丘陵である母神山の北及び北西にあたる洪積台地の縁辺部に立地し，柞田八丁遺跡はこの2遺跡と柞田川を挟んで南西にあたる沖積地に立地している。

観音寺市内の遺跡を概観すると，旧石器時代の遺跡は実態がよく分かっていないが，伊吹島中央部の台地上でサヌカイト製ナイフ形石器が採集されている(註1)ほか，四国横断自動車道（善通寺・豊浜）の建設に伴う発掘調査によって，財田川の南に広がる一の谷遺跡(註2)群からもサヌカイト製ナイフ形石器が検出されている。

縄文時代になると，観音寺市の北にあたる詫間町・仁尾町にまたがる荘内半島とその周辺に多くの遺跡が分布するが，市内でも高屋町なつめの木貝塚(註3)（前期），中田井町中田井東台地遺跡(註4)（前期），本大町樋ノ口遺跡(註5)（後期），室本町室本遺跡(註6)（後・晩期）などが知られているほか，遺構は検出されなかったものの，四国横断自動車道（善通寺～豊浜）の建設に伴う調査でも，一の谷遺跡群・長砂古遺跡などから，後期の土器等が出土している。なかでも，昭和62年に財田川左岸の自然堤防上で発見され，調査された樋ノ口遺跡からは彦崎ＫⅠ式相当の良好な土器が出土し，注目されると共に，従来知られていた海浜の砂丘上や海に面した台地・低丘陵上の遺跡ではなく，沖積地に立地する遺跡であることから，三豊平野でも今後さらに多くの縄文遺跡の発見が期待できることとなった。

弥生時代の遺跡としては，まず室本町室本遺跡が挙げられる。室本遺跡は観音寺市北端の海浜砂丘上に立地する遺跡で，砂の採掘に伴い，縄文時代後・晩期の土器・石器と共に弥生時代前期古段階の壺が出土している。また，本大町から中田井町にまたがる一の谷遺跡群では前期の竪穴住居跡2棟が，前述した樋ノ口遺跡から前期の木棺墓群が検出されるなど，沖積地に前期の集落が展開していった様子が窺われる。

弥生時代中期の遺跡の調査はほとんど行われておらず，遺跡の実態は明らかでないが，粟井町岩鍋遺跡(註7)（中期後半）のような河川に面した山麓の集落が多く営まれていたのではないかと思われる。

後期になると沖積地や洪積台地の集落が増加するようで，長砂古遺跡や，中田井町向井西の岡

遺跡[註8]・一の谷遺跡群で後期末前後の住居跡が検出されている。なかでも一の谷遺跡群では32棟もの住居跡が検出され，大規模な集落の一部が明らかにされた。

弥生時代の青銅器の出土は多くないが，粟井町藤の谷遺跡[註9]から細形銅剣２・中細形銅剣１，古川町南下から外縁付鈕式２区流水文銅鐸[註10]が出土し，一の谷遺跡群でも，弥生時代終末頃の包含層から出土した舶載銅鏡片と，古墳時代以降のピットから出土した平形銅剣が知られている。

古墳時代になると，香川県内では積石・土盛りの前方後円墳が多数築造され，県内産の刳抜き式石棺が用いられるが，三豊地方では積石塚・４世紀の前方後円墳とも知られておらず，県内産の石棺にかわって，阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が用いられるなど，鳥坂峠以東の地域とは大きく異なっている。

観音寺市内で最も古い古墳は流岡町鹿隈鑵子塚古墳[註11]である。七宝山の南端にあるこの古墳は直径27.6mの円墳で，昭和13年に墳丘の一部とその周辺が破壊され，第一主体から遺物を出土すると共に，昭和52年に第二主体（小型竪穴式石室）が発掘調査され，鉇を出土した。採集された遺物には方格規矩鏡片・「王」字銘鏡片・櫛歯文鏡・玉類・槍先・刀子・鉇・短冊形鉄斧などがあり，これらすべてが鹿隈鑵子塚古墳の副葬品でないにしても，これから鹿隈鑵子塚古墳が４世紀末頃に築造されたことを想定することができる。鹿隈鑵子塚古墳を除くと，観音寺市内には４世紀まで遡る可能性のある有力古墳はなく，箱式石棺などが知られている。

観音寺市内で古墳築造が本格化するのは遅く，原町青塚古墳[註12]（前方後円墳）・室本町丸山古墳[註13]（円墳）など，阿蘇溶結凝灰岩製の石棺をもつ有力古墳が５世紀になって築造される。

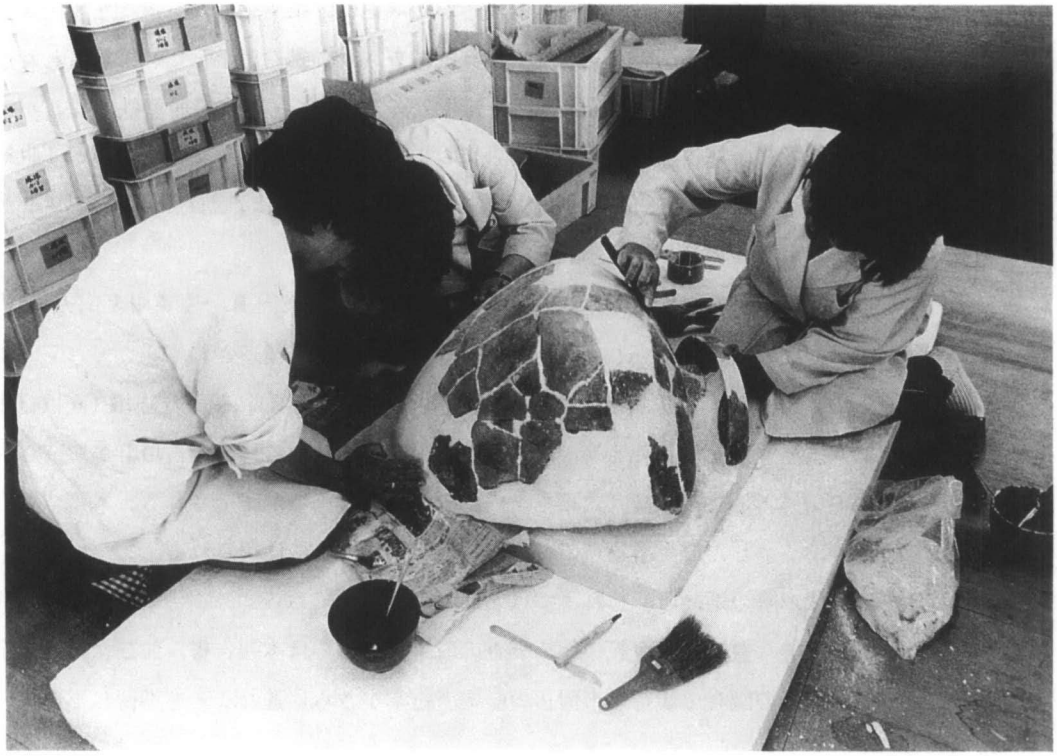
６世紀になると，母神山ではひさご塚古墳[註14]（６世紀前半の前方後円墳），鑵子塚古墳[註5]（６世紀後半の円墳・巨石横穴式石室）をはじめとして，50基以上の古墳からなる母神山古墳群が形成されるとともに，各地の山麓・低丘陵に横穴式石室を内部主体とする円墳が築造される。本書で報告した柞田八丁遺跡は，こうした群集墳築造の背景となった集落として注目される。

奈良時代・平安時代以降の遺跡は，これまでほとんど調査されておらず，不明な点が多い。四国横断自動車道（善通寺～豊浜）の建設に伴う調査の成果については本報告書，並びに続刊予定の報告書に譲るが，今後の調査で観音寺市周辺の歴史考古学がさらに進むことを期待したい。

（註）

1．松本敏三ほか『観音寺市誌（通史編）』　1985
2．岸上康久ほか「一の谷遺跡群」『四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告』　昭和61年度　1987
3．瀬戸内海歴史民俗資料館『四国地方縄文時代遺跡地名表』　1976
4．註３に同じ
5．昭和62年度に香川県教育委員会が発掘調査
6．松本豊胤「讃岐室本町の弥生式土器」『上代文化』　27　1957，及び註３に同じ
7．註１に同じ
8．昭和59年度に香川県教育委員会が発掘調査
9．福家惣衛「香川県出土の銅剣」『考古学雑誌』　37－４　1962

10. 上原準一「讃岐国三豊郡一ノ谷村古川発見の銅鐸について」『考古学雑誌』　13－11　1923
11. 香川県教育委員会『香川叢書』　考古編　1983，及び註１に同じ
12. 藤田憲司「讃岐（香川県）の石棺」『倉敷考古館研究集報』　12　1976，及び観音寺市文化財保護協会『観音寺市の文化財』　1977・1978
13. 香川県史蹟名勝天然記念物調査会「丸山古墳とその石棺」『香川県史蹟名勝天然記念物調査報告』　14　1950，及び藤田憲司「讃岐（香川県）の石棺」『倉敷考古館研究集報』　12　1976
14. 註11に同じ
15. 註１に同じ



第4図　周辺地域の遺跡

1　道音寺跡（奈良時代）
2　宮脇遺跡　——
3　四ツ塚古墳群（古墳後）
4　財田　〃　（古墳後）
5　妙音寺跡（奈良時代）
6　岡本遺跡（弥生中）
7　経塚古墳（古墳後）
8　丸山　〃　（古墳中）
9　室本　〃　（縄文晩，弥生前，古墳前）
10　なつめの木貝塚（縄文前）
11　興昌寺古墳（古墳後）
12　鹿隈古墳群（古墳前）
13　延命遺跡
　①　八反地地区（縄文晩，弥生前・後）
　②　城岡地区（縄文晩，弥生後）
14　延命古墳（古墳後）
15　樋ノ口遺跡（縄文後，弥生前）
16　村黒　〃　（弥生後～古墳）
17　古川　〃　（弥生中）
18　一の谷遺跡群
　①　平塚地区（弥生前・後，近世）
　②　香門　〃　（中世）
　③　竹道　〃　（弥生前，中世）
　④　山ノ前〃（中世）
19　石ノ経遺跡（弥生後）
20　向井・西の岡遺跡（弥生後）
21　古川下所遺跡（弥生後）
22　石田遺跡（古墳後～中世）
23　長砂古遺跡（縄文晩，弥生前・中・後，古墳後）
24　久染　〃　（弥生後）
25　青塚古墳（古墳中）
26　辻遺跡（弥生時代）
27　母神山古墳群（古墳後）
28　幸助藪古墳（古墳時代）
29　辻古窯址群（古墳後）
30　立石古墳（古墳時代）
31　百々　〃　（古墳後）
32　中姫遺跡（弥生前）
33　小天皇塚古墳（古墳時代）
34　柞田八丁遺跡（古墳後）
35　安井廃寺（奈良前）
36　上野古墳群（古墳時代）
37　藤の谷遺跡（弥生中）
38　岩鍋　〃　（弥生中）
39　藤目山古墳群（古墳後）
40　藤目城（中世）
41　道下古墳群（古墳後）
42　小森塚　〃　（古墳後）
43　椀貸塚古墳（古墳，6世紀末）
44　宗塚古墳（古墳後）
45　赤岡山古墳（古墳時代）
46　経塚　〃　（古墳，6世紀中頃～7世紀初頭）
47　役場南側古墳（古墳時代）
48　角塚古墳（古，7世紀頃）
49　平塚　〃　（古墳後）
50　西の後古墳群（古墳時代）
51　福田原古墳（　〃　）
52　竜王山古墳（　〃　）
53　王塚　〃　（　〃　）
54　豆塚古墳群（　〃　）
55　雲岡古墳（古，7世紀）
56　院内貝塚（縄文前）

II 石田遺跡

1．調査の経過

石田遺跡は，香川県遺跡台帳に遺物の散布地として登録されている。今回四国横断自動車道路建設予定地内に当遺跡が含まれるのではないかということで，本調査に先立ち調査対象面積17,200㎡において，予備調査を実施することになった。この予備調査は，遺跡の範囲，遺構面の枚数，時期決定を主な目的として，昭和60年２月18日～同年３月４日に実施された。その結果，調査区全域において，柱穴及び溝状遺構を検出した。しかし，出土遺物が少量であったため時期決定には至らなかった。

以上の成果をもとに検討を加えた結果，17,200㎡（予備調査1,200㎡を含む）本調査対象面積となった。

本調査は，昭和60年５月１日に開始され，昭和61年１月11日に終了した。しかし，宅地部分については，一時中断し，昭和61年２月26日から３月20日までの期間に調査を実施した。

調査の方法としては，日本道路公団の設置したセンター杭・幅杭をもとに，国土地理院国土座標に準拠し，20ｍメッシュを基本とする調査区の設定を行った。

調査区設定にあたっては，20×20ｍを小区画として，東西にアラビア数字を，南北にアルファベットをつけ，北西隅の記号をその小区画の名称とした（第４図）。

また，各遺構番号は，西から振り直した結果，昭和60年度の『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』とは若干異なっている（第１表）。

地元住民との事前協議の折，調査地区に斜めに横切る樋管があるので，調査に際しては，現在も使用しているこの樋管を壊さないようにとの強い要望があった。そのため，Ｈ－７，Ｉ－７，Ｊ－７・８，Ｋ－８において，この樋管部分に幅３ｍの未発掘部分ができる結果となった。

今後の参考のために，発掘調査の結果起こった問題点を列挙しておく。

まず，国土座標に準拠したグリッドの設定は，平野部においては，有効であろうが，今回の様に丘陵部での調査では，グリッド間に残した土層観察用の畦が尾根筋に直交するように残っておらず，非常に都合の悪いものであった。平野部と丘陵部における調査区設定にあたっては，今後，検討を加える必要がある。

２つめに，予備調査時にまだ未買収の土地が残っており，調査区中央部の粘土採取による遺構の破壊の程度が確認できなかった。このことは，発掘調査工程に大きな影響を与えたと思われる。また，畦畔を壊すことができなかったので，重機の移動に苦慮した。

今後，これらについては，事前に道路公団との打ち合わせを十分に行い，完全に用地買収されてから，調査に入れる様相方で努力しなければならない。

調査日誌抄

昭和60年

4月

25日　石田遺跡の発掘に先立ち，杭打ちを行う。

30日　表土剝ぎのためのグリッド設定を行う。午後から資材搬入を行う。

5月

1日　現場事務員が着任し，内業を始める。現場では，重機によるF－11･12，G－9・10・11の表土剝ぎと公団のB－4，M－4より基準杭のレベル高を引き出す。

2日　H－9，I－9，J－9において順次表土剝ぎを行う。

7日　現場作業員が初出勤。担当職員の紹介後，現場での発掘調査の進め方についての説明。午後，草刈りから現場作業を開始する。

8日　H－9第3～4層の発掘と並行してF－11，G－10・11の遺構面精査を行う。

13日　F－12においてもひきつづき遺構面精査を行う。

15日　F－11・12，G－10・11において柱穴・土坑・溝を検出する。遺構検出後写真撮影を行い，その後遺構実測を行う。土層実測は，各グリッド東・南壁において実施した。

16日　I－9，J－9において発掘開始。

20日　ベルコン等機材搬入。

23日　H－9において溝を検出。H－9上部包含層には，古墳時代～中世までの遺物が多量に出土した。特に須恵器が多い。F－11・12，G－10・11の遺構実測を並行して行う。

6月

4日　I－9第4層を発掘。

6日　H－9で溝・柱穴などを検出し，掘り抜きを行う。

10日　I－9，J－9，包含層発掘。H－9においては遺構実測を行う。

11日　I－9第5層において，平安時代の緑釉皿出土。

19日　I－9，J－9，遺構面を精査し，遺構を掘り抜く。H－9からの溝の延長及び柱穴が確認された。この頃より7月初旬にかけて雨が多く発掘作業が思うように進まなかった。

24日　J－7・K－7・L－7の発掘に着手。

7月

5日　K－7・L－7の第4～6層を発掘しながら，G－10・J－10・K－8・J－8の表土剝ぎを行う。

10日　K－7・L－7，遺構面を精査し，遺構を掘り抜く。遺構は，溝・土坑・柱穴が確認された。

15日　J－8・9，K－8，精査の結果，遺構はほとんど検出されなかった。

24日　O－5，H－5・6，表土剝ぎ。発掘区は，工事用道路の付け換えの問題により，まず調査範囲の東側から着手している。

8月

2日　Q－3・4，続いてR－2・S－2・T－2の表土剝ぎを行う。8月1日よりアルバイトの学生が来る。遅れぎみの遺構実測をしてもらう。実測作業は猫の手も借りたいほどの忙しさである。

9日　Q－3・R－3遺構面精査の結果，溝が4本検出された。それ以外に遺構は検出されず，おそらく水田に伴う灌漑用の水路かと思われる。

15～17日　盆休みで作業休み。

23日　Q－2・R－2，第3層を発掘。

27日　Q－2・R－2，遺構面精査の結果，溝・土坑・柱穴が検出された。

30日　S－2・3，遺構面精査の結果，弥生時代の溝を確認。猛暑が続く中，発掘作業は行なわれた。

9月

3日　O－4・5，P－4・5，発掘調査に着手。

4日　L－6においても発掘調査に着手。

6日　教育長現場視察。

12日　P－4・5，Q－4，遺構面精査。

18日　調査区北端B－11，C－11の調査を開始する。調査終了したグリッドから埋め戻しを行う。

19日　昭和59年，長砂古遺跡の予備調査時に調査できなかった2,700㎡について，今日より予備調査を行う。

10月

1日　調査がP－3・4，Q－4，G－9・10，H－10，B－11，C－10・11と調査区全域にわたり実施された。

14日　E－9・F－9，遺構面精査の結果，中世頃の柱穴が多数確認された。B－10・11の平板実測を行う。

17日　E－10，F－10の発掘に着手。

22日　E－9・10，F－9・10から平安時代末～中世にかけての掘立柱建物6棟が検出された。この区画は，野菜を作っていたため遺構の残りが良好であった。しかし，A・B・C・D列は，果樹園にされていたため，そのほとんどにおいて攪乱を受けていた。

28日　H－7・8，発掘着手。D－9・10，東・南壁の土層実測を行う。企業体との間で工事用道路部分の明け渡しについて協議を行う。

30日　E－9・10，F－9・10の遺構面実測を行う。東・南の写真撮影，土層実測も継続して行う。F－8・G－7・8，発掘着手。

11月

5日　F－8，G－7・8，遺構面精査を行う。

7日　長砂古遺跡の工事用道路部分において立ち会いを行う。

14日　H－7・8において，遺構面精査を行い継続して遺構掘り抜きを実施。このグリッドでは，尾根部から谷部に流れる溝を数本確認したが性格等については不明である。

18日　F－8，G－7・8，H－7・8の全体写真を撮る。

20日　I－7・8，発掘に着手。

25日　発掘調査域，安全のためロープで縄張りする。

26日　G－8・9，H－7・8など各グリッドにおいて写真撮影・実測を行う。

27日　J－6・K－6の発掘に着手したが，ほとんど全域において戦後の粘土採取に伴う攪乱を受けていた。しかし，J－6・K－6の東部でかなり削平を受けている溝SD29を確認した。この溝からは，古墳時代～平安時代末頃の遺物が多量に出土した。

12月

6日　H－7，I－9の発掘に着手。企業体との間で，STA202＋70以北を引き渡す。

12日　J－6・7，I－6・7，H－6・7のグリッドにおいて遺構面を精査する。その結果，中世の掘立柱建物3棟・溝2本・多数の柱穴を確認する。

14日　N－2・3，O－2・3の表土剝ぎを行う。この調査において，宅地部分は，建物が立ちのくまでは調査を行えないので調査行程に多大な支障をきたした。この頃より，徐々に建物が移転する。

23日　N－2・3，O－2・3の遺構を発掘。平安時代末頃の掘立柱建物を検出。また，当遺跡において初の弥生時代の遺構を検出。

27日　昭和60年現場作業の最終日である。来年予定されている長砂古遺跡調査に先立ち杭打ちを行う。

昭和61年

1月

6日　昭和61年，新春，現場作業開始。

8日　N－2・3，O－2・3，P－3の遺構実測を行う。長砂古遺跡へベルトコンベアー・発電機・分電板を移設する。

10日　発掘道具を長砂古遺跡へ移す。

22日　最後の宅地部分を除いて発掘調査終了。宅地部分撤去後まで，発掘調査を一時中断する。

2月

26日　宅地部分について杭打ちを行い継続して表土剝ぎを行う。

27日　M－3，N－3・4，O－3・4について発掘調査を行う。

3月

5日　各グリッドの土層写真撮影・実測を行い，まず畦を取りはずす。

10日　M－3，N－3・4，O－3・4，全面を精査し，遺構を掘り抜く。

11日　全体写真撮影を行う。継続して遺構平面実測を行う。

20日　石田遺跡における全ての発掘作業が完了する。

第1表　遺構番号変更一覧表

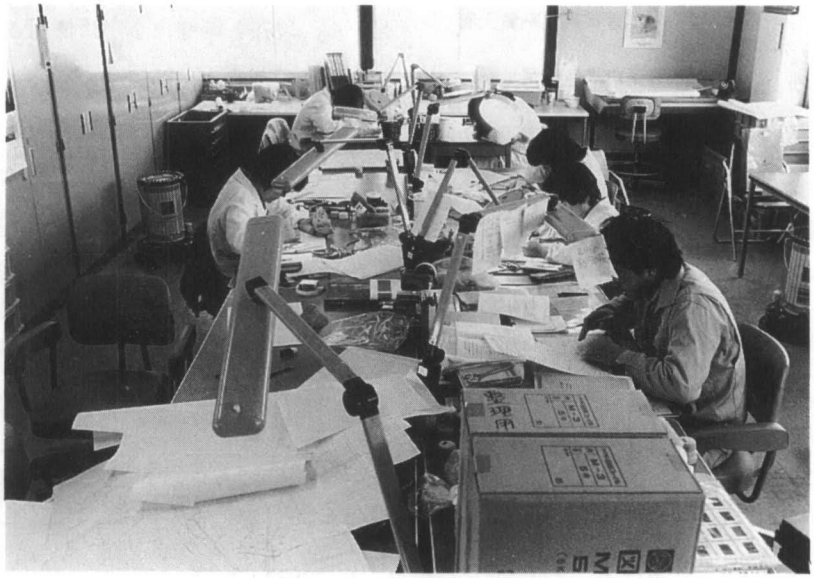
遺構名	地区名	旧名称	遺構名	地区名	旧名称
掘立柱建物SB			18	I－9	SD8508
01	E－9	SB8504	19	I－9	8509
02	E－9	8505	20	I－8	8543
03	E－9	8506	21	I－8	8544
04	E-9, F-9	8507	22	I－7，8	8545
05	E-9, F-9	8508	23	I－7	8549
06	F－9	8509	24	K－8	8515
07	F－11	8501	25	K－8	8516
08	H－7	8510	26	K-7, L-7	8513
09	H－7	8511	27	L－7	8514
10	H-6･7, I-6	8512	28	L－7	8512
11	I－6	8513	29	J-7, K-7･8, L-7	8510
12	J－7	8503	30	L－7	8511
13	J-7, K-7	8502	31	N－3	8667
14	M-3, N-3	8617, 8618	32	N－3	8668
15	N－4	8620	33	N－2	8650
16	N－3	8619	34	O－2	8651
17	N－3	8621	35	O－2	8652
18	N－3	——	36	N-3, O-3	8653
19	O－2	3615	37	N-3, O-3	8654
20	O－3	8614	38	N-3, O-3	8655
21	O－4	8616	39	N-3, O-3	8656
土坑　SK			40	O－3	8657
01	G－9	SK8509	41	P－3	8658
02	G－8	8505	42	O-4, P-4	8634
03	G－7	8506	43	P－4	8531
04	H－7	8507	44	P－4	8532
05	H－8	8508	45	P－4	8533
06	I－7	8512	46	P－4	8530
07	J－7	8504	47	O-2, P-2	8660
08	K－7	8501	48	P－2	8661
09	K－7	SP7	49	P－2	8659
10	L－7	SK8503	50	P－2	8662
11	N－3	SP8607	51	P－2	8663
12	O－4	SK8508	52	P－2	8666
13	N－3	8613	53	O-2, P-2	8664
14	O－3	8615	54	P－2	8665
15	O－2	8614	55	Q－3	8521
16	P－2	8617	56	Q－3	8522
17	P－2	8618	57	Q-3, R-4	8519
18	P－2	8616	58	Q-3, R-3, S-2	8520, 8525
溝　SD			59	R－3，4	8524
01	E－9	SD8537	60	R－3	8523
02	E－9	8536	61	Q-2･3, R-3	8518
03	G－11	8503	62	Q－2	8526
04	G－11	8502	63	Q-2, R-3	8527
05	G－11	8501	64	Q-2, R-2	8528
06	F－8	8538	65	R-2, S-2	8529
07	G－8，9	8539	土壙墓ST		
08	G－8，9	8540	01	H－7	ST8503
09	G－9	SD8546, SK8510	02	L－7	SK8502(ST8502)
10	G－8，9	SD8541	03	N－3	ST8604
11	G－9	8547	04	N－4	8604
12	G-9, H-9, I-9	8507	05	S－3	8501
13	G－9	SD8548, SK8511	不明遺構SX		
14	H－9	SD8504	01	F－8	SX8501
15	H－9	8505	02	F－8	8502
16	H－9	8506	03	I－8	8503
17	H－9	8535			

－発掘作業に従事した人々－

秋山マサ子　業天順子　渋谷泰　野田美乃里
今村瀞　合田太郎吉　資延百合子　樋口恵子
太田春夫　後藤満枝　田岡照治　藤井四郎
大西和昌　小林勝治郎　高木俊光　船場久計
大西節子　小林ミサヲ　高橋茂市　船場美和子
大西崇正　近藤キクエ　高橋千弦　松下貢子
大西長吉　斉藤キミ子　高橋フミノ　三谷サダ子
大広林四郎　斉藤清子　田辺ミヤ子　南キヌヨ
岡田桂子　坂井スマ子　筒井ヒサノ　三好春義
小野芳子　佐川加代子　富田玉恵　森岡光
片山康子　佐藤義顕　冨田良美　森道代
加藤悠喜子　篠原アヤ子　奈尾宗昭　横内正弘
河上忠義　篠原弘子　中野宏子　横山薫
木下アヤノ　篠原善美　仁尾博樹　吉田美智子
木下行雄

－整理作業に従事した人々－

石川ゆかり　川田裕加子　武内ゆかり　林肇子
小畑三千代　田井照美　筒井千景　藤田由紀子
葛西薫　高橋佳緒里　長谷川郁子　森岡浩子
鎌谷周子　高橋千恵



第1図　整理作業風景

2．遺跡の概要

(1) 地　形

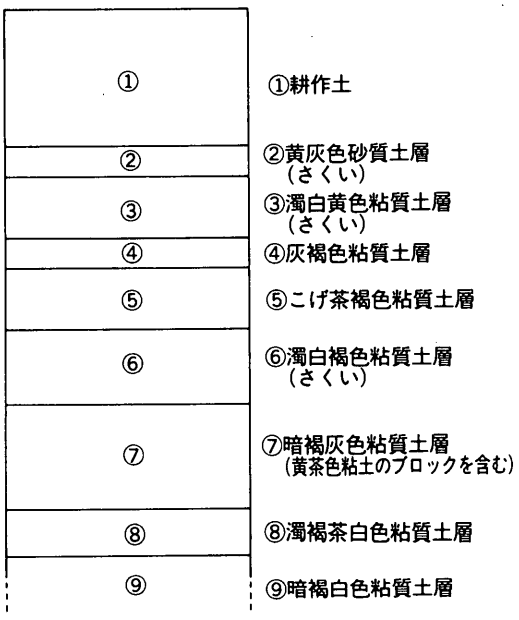
石田遺跡の調査位置は，地形図（第4図）からもわかるように，洪積台地上縁部にあたる。この洪積台地は，菩提山（標高312.0m）より派生し，低丘陵状を呈している。この低丘陵地には，微地形を復原することによって，たくさんの尾根部と谷部があることがわかる。石田遺跡においても，調査区周辺を含めて，微地形の復原を試みた。その結果，調査区内の東半分には，谷筋が大きく入り込んでおり，調査区外ではあるが，西側でも同様に谷筋が確認できた。四国横断自動車道は，東側で確認された谷筋を通り，尾根筋の基部を横切るように建設される。

当初の石田遺跡の調査対象区は，この谷筋と谷筋に挟まれた17,200㎡であった。

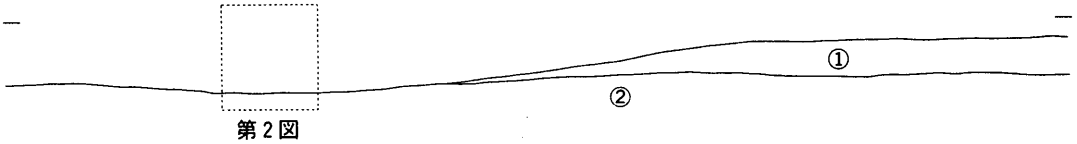
(2) 土層序

石田遺跡では，前項でふれた様に尾根部と谷部にわけられる。その各部における土層序は，尾根部では，戦後まもない頃の製瓦用粘土採取のために，耕作土直下が遺構面となり，遺物包含層は存在しないという状況であった。また，谷部においては，第1層が耕作土，第2層に床土，第3・4層は旧の耕作土と床土で，それ以下が各時代の包含層となる（第2図）。第5～7層は，各時期の遺物包含層となるが，それぞれの上面で遺構は検出されなかった。5層以下は，包含層出土遺物などから，奈良時代から中世までの自然堆積層と思われ，4層以上は，土層堆積状況から，現在と同様，水田に使用されていたことが推定できる。

遺構面を形成する洪積台地の層序は，尾根部では，白茶黄色粘質土層（第3図・第①層），谷部では，茶黄色粘質土層（第3図・第②層）となり，第②層が第①層の下に形成されている。



第2図　谷部基本層序模式図



第2図

① 白茶黄色粘質土層
② 上部茶黄色粘質土層
(こぶし大の礫を少量含む。下部になるにつれて礫層になる。)

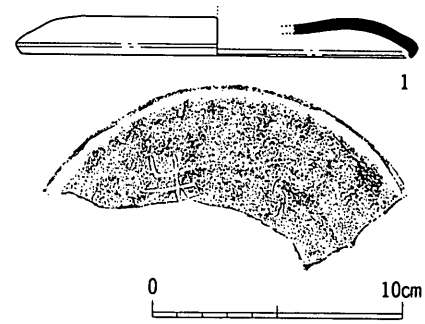
第3図　H列南壁土層模式図

第４図　調査区周辺地形図・調査区設定図

(3) 調査区周辺出土遺物資料

石田遺跡の報告に先立ち，周辺地域より出土した資料を紹介する。

当遺跡は，故石川巖氏によって古墳時代後期の方形の竪穴住居が発見されたことにより遺跡台帳に登録された。しかし，石田遺跡の明確な位置については，不明な点が多い。



第5図　調査区周辺出土遺物実測図

ここに紹介する資料は，石川氏による発見時の資料ではないかと思われ，石田遺跡の性格を知る上で重要な資料となるであろう。この須恵器は，山本町管生神社宮司真屋哲氏所蔵のもので，戦後，調査区から北西約50m付近の水田で発見されたものである。この須恵器の発見について真屋氏は，『円形の竪穴住居らしい包含層からの出土である。』と語ってくれた。

この坏蓋は，8世紀頃のもので，内面天井部に「生」とヘラ描きされている。しかし，完形ではないことから，「生」の字の後に，文字が書かれていたかどうかは不明である。

現在までに，香川県下で須恵器の坏蓋にヘラ描きの文字があるのは，2遺跡3点(註1)確認されており，その中で竪穴住居出土のものはほとんどなく，貴重な資料であると思われる。

註1　高屋廃寺出土「尤」(平安時代)，森広遺跡「上」2点（平安時代）
『瀬戸内海地方墨書・刻書土器一覧』瀬戸内海歴史民俗資料館1987．5．

3．遺構・遺物について

(1) 検出遺構の概要

石田遺跡は，前述したように菩提山から派生した低丘陵地に位置する。ここは，現地表面では見分けがつかないほど，いくつかの尾根部と谷部に分かれていることがわかっており，その最東端の尾根部に当遺跡は所在する。

発掘調査の結果，谷筋部分には，ほとんど遺構は検出されず，全て尾根部において検出された。しかし，この尾根部でも遺構の検出密度は希薄なものであった。これは，当遺跡の所在地が，良好な粘土の堆積する洪積台地上であったため，戦後，製瓦工場の粘土採取を受け，尾根筋の大部分が削平されたためである。その状況を示すように，調査区の半分程に当時の攪乱土坑が検出された。

このような状況において検出された遺構は，出土遺物などにより，弥生時代後期には，土坑・溝状遺構，古墳時代後期には，掘立柱建物，奈良時代には，土坑・溝状遺構・柵列が検出された。平安時代後期・中世では，検出された掘立柱建物の切り合いから，前者が3期，後者が2期に区分された。以上の結果から，当遺跡の遺構を5時代8期と不明時代に細分した。ただし，平安時代後期の3区分と中世2区分は掘立柱建物の時期差を示すものであり，時代区分ではない。

この中で掘立柱建物の時期内区分を行う時に主軸方向及び柱穴の切り合いで，この操作を行なったが，当遺跡は，中心部を攪乱により破壊され，また，谷筋部が尾根筋とは平行に走っておらず，地形に左右された掘立柱建物もあるという可能性から，このグルーピングが当遺跡に合致するかどうかは，現段階では判断できない。

以下，この時期ごとに説明する。

(2) 弥生時代

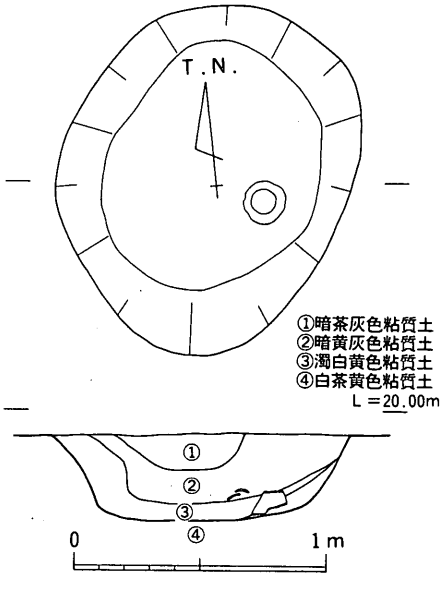
石田遺跡において，弥生時代の遺構は少なく，土坑ＳＫ15，溝状遺構ＳＤ34・35・64・65が検出されただけであった。

ＳＫ15

ＳＫ15は，長幅135cm，短幅112.0cmの楕円形に近い土坑で，深さ33.9cmの中から弥生土器が数点出土している（第7図）。

この弥生土器は，全て破片である。2は，甕形土器の口縁である。口縁端部は，外方に肥厚した面を持つ。頸部と体部の内外面の屈曲は，明瞭な稜を持たない。全体に摩滅しており，内外面の調整については不明である。

3～6は，弥生土器，底部である。6は，しっかりとし



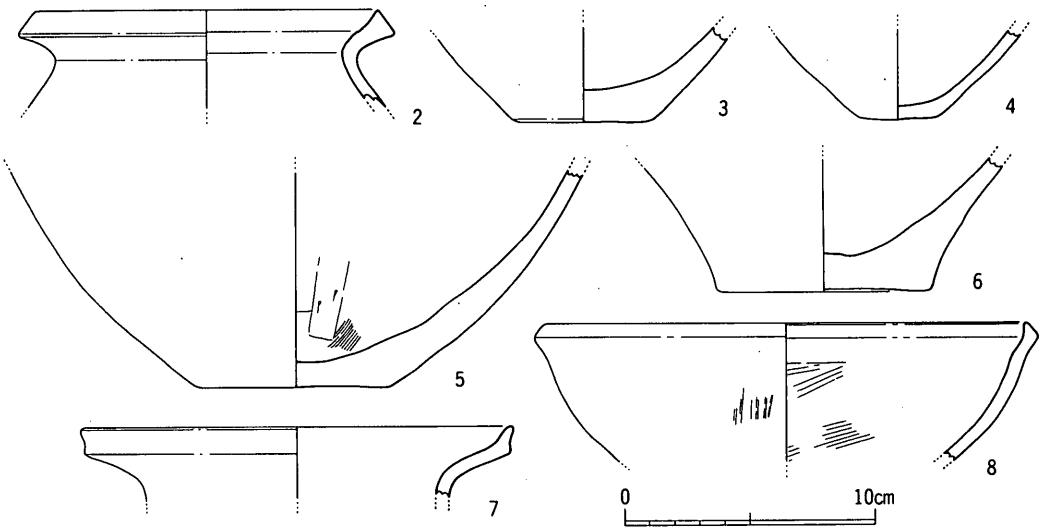
第6図　ＳＫ15平面図・断面土層図

た平底を呈しており，大型の壺であろうと思われる。

ＳＤ34・35

ＳＤ34・35は，削平により検出状態が悪く，また，範囲外へ延びているため，詳細は不明であるが，出土遺物より弥生時代の溝と思われる。ＳＤ35より出土した遺物は，壺の口縁(7)，鉢(8)である(第７図)。壺は，二重口縁でやや内彎しながら口縁部に至る体部を持つ。口縁部は，外面に面をつくり，やや外傾する。

土坑及び溝状遺構は，出土遺物より弥生時代後期のものと思われる。



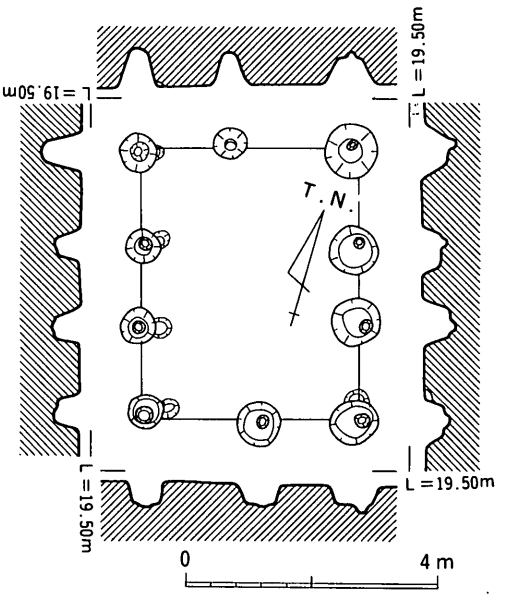
第７図　ＳＫ15・ＳＤ35出土遺物実測図

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は，６世紀末の須恵器が出土した溝ＳＤ22とそれによって切られている掘立柱建物ＳＢ08～10である。この３棟の掘立柱建物は，柱穴の大きさ，埋土，方向性に一つのまとまりを見せている。また，ＳＤ22は，ＳＢ09の一柱穴と切り合いがあり，明らかに掘立柱建物３棟ＳＢ08～10はＳＤ22に先行していることがわかる。

ＳＢ08

ＳＢ08は，梁間２間×桁行３間（348×435cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅69cmを計り，柱間は，平均長156.6cmを計る。主軸は，真北から16.5°西偏する。柱穴は，ほぼ中央が深く掘り込められ，２段掘り状を呈する。これは，柱の根痕と思われる。



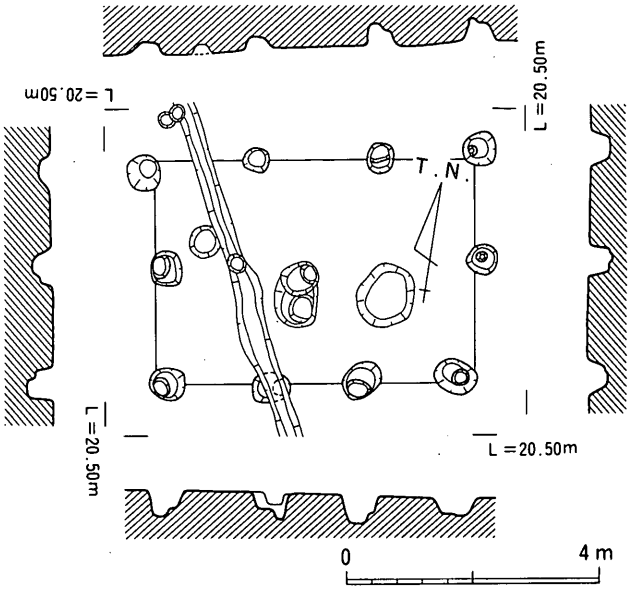
第８図　ＳＢ08平・断面図

柱穴より，残りの良い遺物は，ほとんど出土していない。また，ＳＢ08では，西側の柱穴に切られた規模の小さい別の柱穴が検出された。南東隅の柱穴でも同様なことが確認できる。以上のことから，建て換えあるいは別の建物の存在が推察できる。

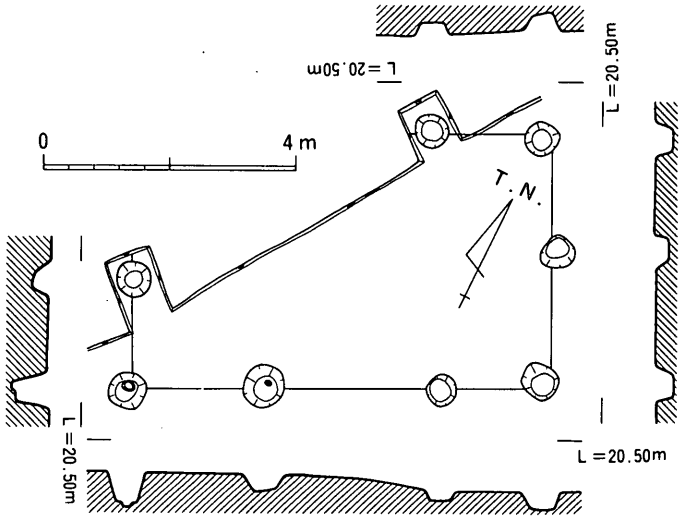
ＳＢ09

ＳＢ09は，梁間２間×桁行３間（350×514cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅57.8cmを計り，柱間は，平均長172.8cmを計る。主軸は，真北から9.5°西偏する。この建物の掘り方も２段掘り状を呈しており，柱の痕跡が確認された。柱穴から遺物は，ほとんど出土していない。

この建物の中央に土坑が２基検出された。埋土がほぼ同じであることから，この建物に付随する土坑であると思われるが，性格については不明である。



第９図　ＳＢ09平・断面図



第10図　ＳＢ10平・断面図

ＳＢ10

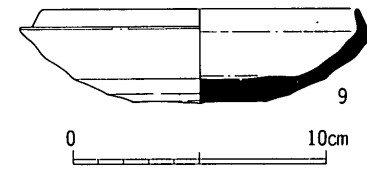
ＳＢ10は，梁間２間×桁行３間（430×668cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅59.6cmを計り，柱間は，平均長219.6cmを計る。主軸は，真北から26.3°西偏する。この建物は，他の２棟に比べると平均柱間が若干広く，少し規模の大きいものになる。北西隅の２柱穴は調査区域外にあると思われる。

以上の３棟からは，遺物がほとんど出土しておらず，時期を決定することができなかった。しかし，掘立柱ＳＢ09を構成する一柱穴と切り合う溝ＳＤ22より，古墳時代後期の土器が出土したことと，柱穴の埋土と溝の埋土が似通っていることより，ほぼ同時期ではないかと考えておく。

ＳＤ22

ＳＤ22は，Ｈ－７，Ｉ－７・８にまたがる溝で，Ｉ－７でほぼ南北方向に流れていたのが，Ｉ－

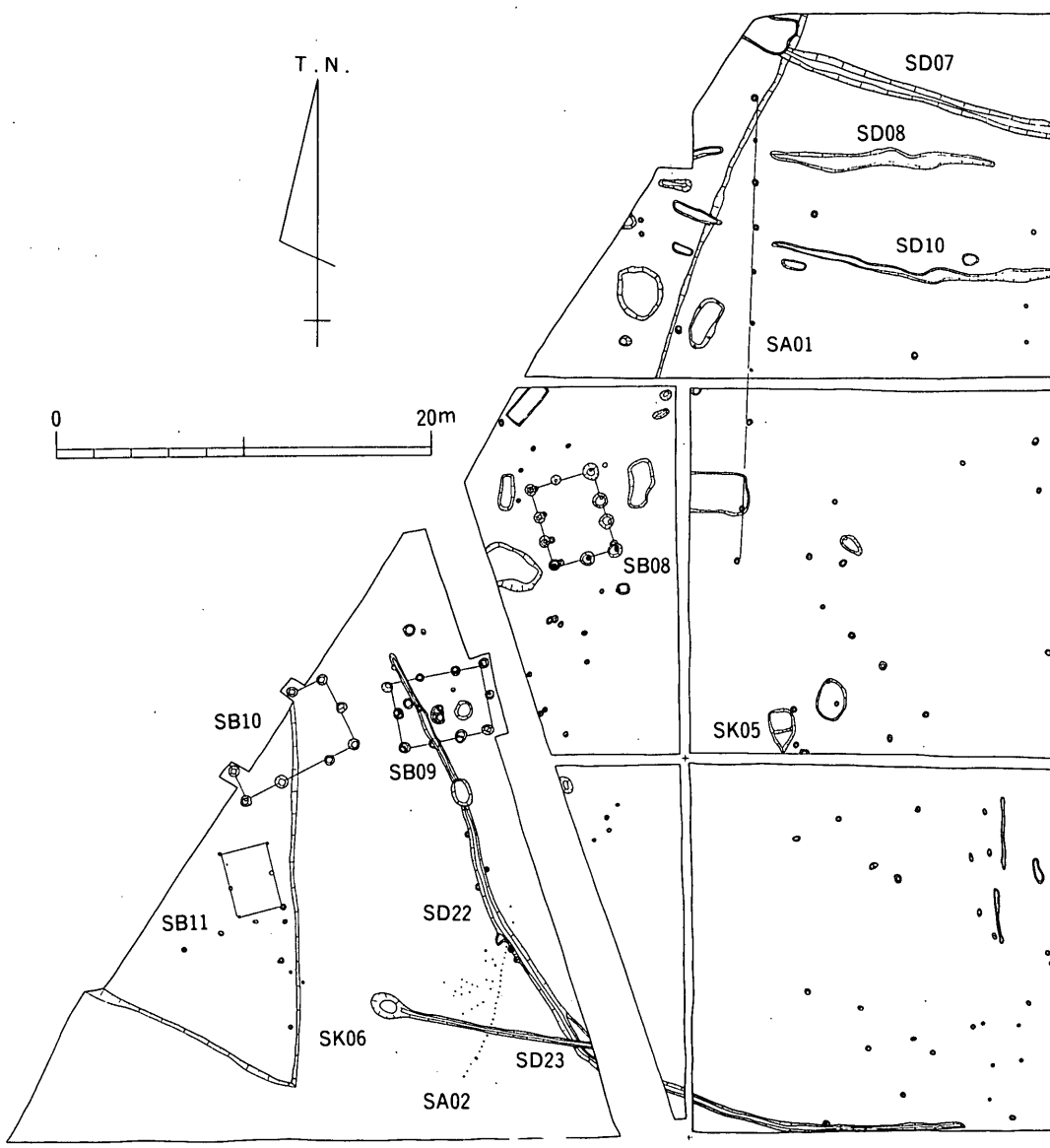
8で東西方向に流れを変えている。この溝に伴う遺構は，検出されなかったので，どのような性格の溝であったかは不明である。



第11図　ＳＤ22出土遺物実測図

この溝より，須恵器の坏身（第11図）が出土している。この須恵器の坏身は，立ち上がりと受部がかなり退化した形態のもので，おそらく陶邑ＴＫ209型式に比定されると思われる。

この古墳時代後期の建物遺構は，全て，主軸を北より西にふっており，石田遺跡で検出された掘立柱建物の大半が主軸を北より東にふっていることから比べると特異な一群である。



第12図　G－7・8，H－7・8，I－6・7・8平面図

(4) 奈良時代

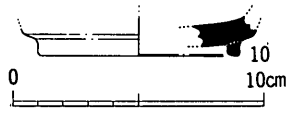
奈良時代の遺構は，Ⅰ－7において検出された土坑ＳＫ06，溝状遺構ＳＤ23，柵列ＳＡ02がある。

ＳＫ06

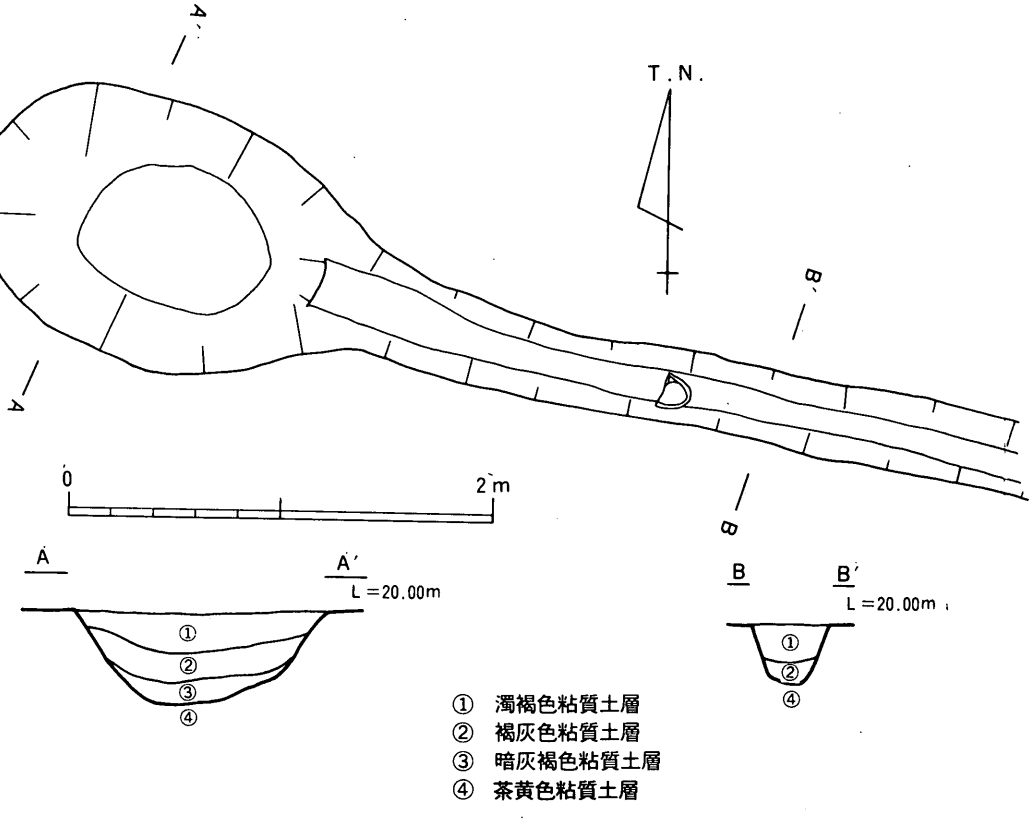
径約185.0cmの楕円形を呈し，深さ43.1cmを計る。土坑内から，少量の土器片と瓦片が出土している。時期は不明である。

ＳＤ23

Ⅰ－7においてほぼ東西に走る溝である。溝の形状は，天幅で38cm，深さ25.2cmと天幅に比べて深く，Ⅰ－8で検出されていないことから削平を受けていると思われるものの，残りの良い溝である。時期については，この溝状遺構ＳＤ23から出土した須恵器（第13図）より8世紀後半頃と思われる。この須恵器は，底部に高台を有する坏である。高台は，ヘラケズリされた底部にほぼ垂直に付く。体部は，底部と体部の境にシャープな稜線を持ち立ち上がる。ＳＤ23の埋土は，ＳＫ06とほとんど差がないことより，同時期と思われる。



第13図　ＳＤ23出土遺物実測図

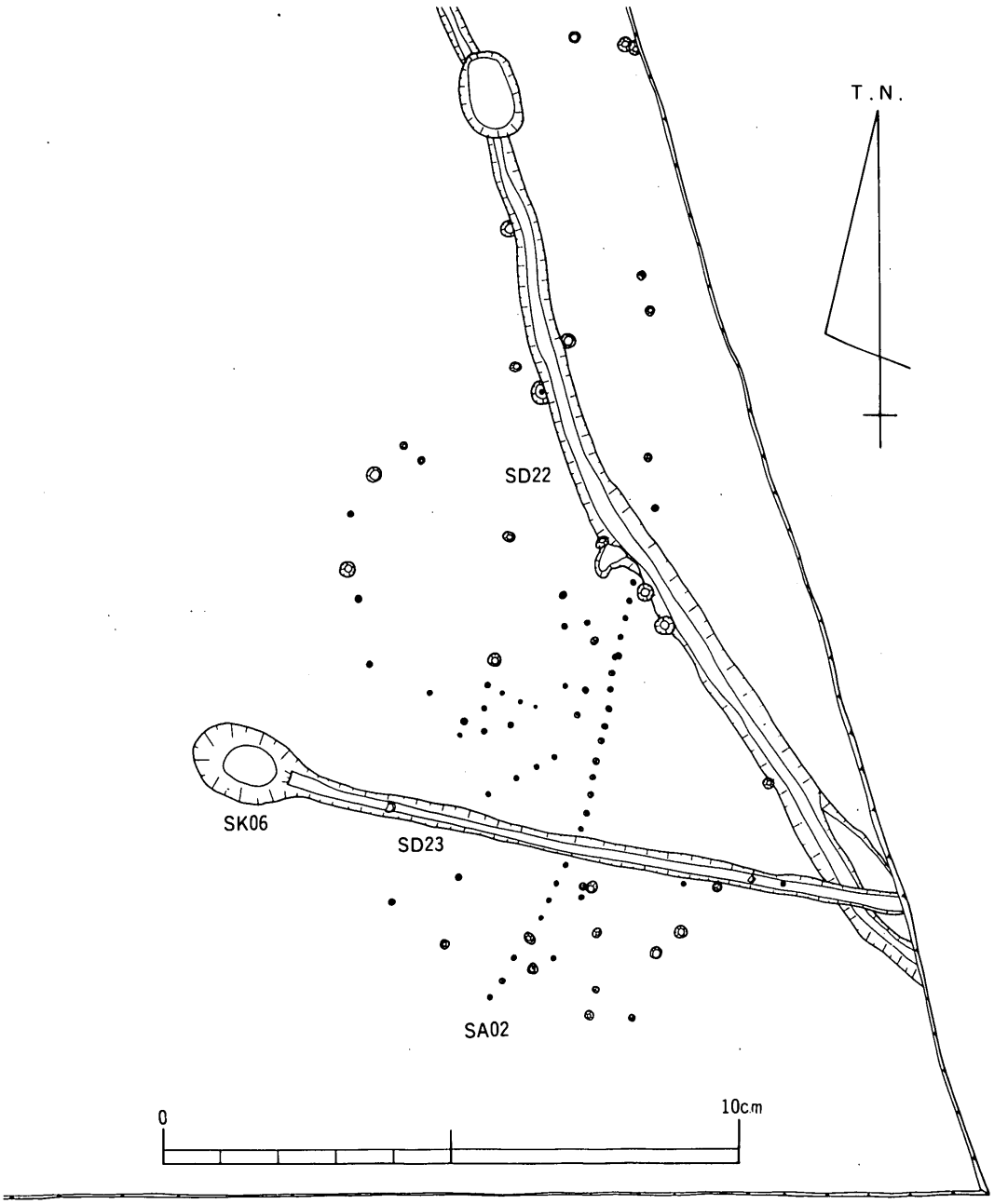


第14図　ＳＫ06・ＳＤ23平・断面図

ＳＡ02

ＳＤ23と直交するようにある柵列ＳＡ02は，柱間約31cmで，24本打たれている。これらは，土坑ＳＫ06に伴う排水施設を途中で画するために造られた柵列と思われる。

奈良時代の遺構は，これら以外にＳＤ29があるだけで，どういう性格のもので，当時の生活のどのような役割を果していたかは全く不明である。



第15図　ＳＫ06・ＳＤ23・ＳＡ02平面図

(5) 平安時代

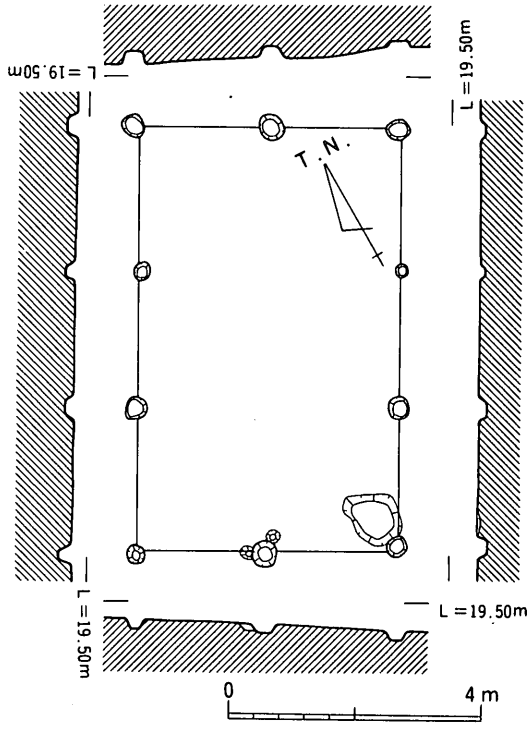
平安時代後期の遺構としては，13棟の掘立柱建物（ＳＢ01～07，15～18，20･21），溝状遺構（ＳＤ13･45･53･57･61），土坑（ＳＫ11）などがある。このうち掘立柱建物については，主軸方向及び切り合いにより３期に細分できた。しかし，溝状遺構・土坑については，この３期のどの時期に伴うものかは不明である。また，それぞれの建物に時期幅があるかどうかについては，遺構に伴う遺物が少量であったため不明である。

平安時代後期・Ⅰ期（ＳＢ01・05・06・17）は，主軸が真北から約30°東偏する一群で，ＳＢ05の大型建物をのぞくと，ほぼ同じ大きさである。

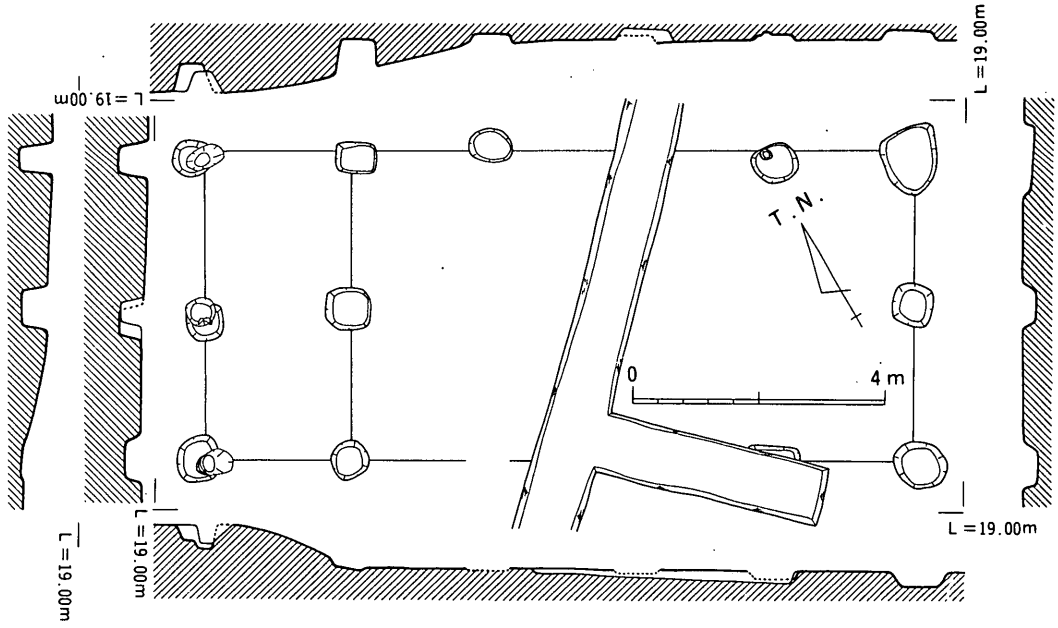
Ⅱ期（ＳＢ03・04・15・16・21）は，主軸が真北から約25°東偏する一群で，庇がつく建物（ＳＢ16），柵を伴い柱痕を残す建物（ＳＢ15･16）などがある。

Ⅲ期（ＳＢ02・07・18・20）は，主軸が真北から約39°東偏する一群で，雨落ち溝を伴う建物（ＳＢ20）などが含まれる。

①　平安時代後期・Ⅰ期



第16図　ＳＢ01平・断面図



第17図　ＳＢ05平・断面図

ＳＢ01

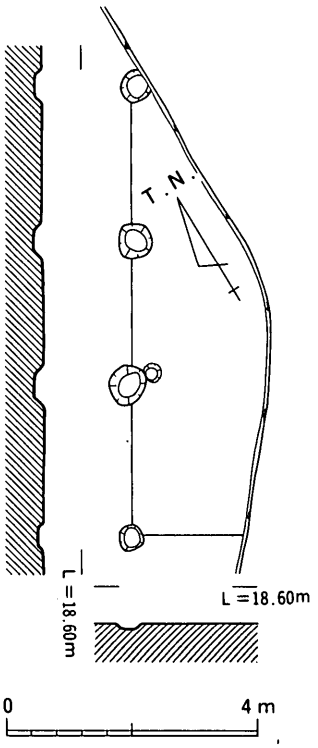
ＳＢ01は，梁間２間×桁行３間（416×669cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅36.4cmを計り，柱間は，平均長217cmを計る。主軸は，真北から30°東偏する。ＳＢ01に伴う遺物がないため，時期は不明である。

ＳＢ05

ＳＢ05は，梁間２間×桁行５間（495×1137cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅78cmを計り，柱間は，平均長233.2cmを計る。主軸は，真北から31°東偏する。この建物は，平安時代後期・Ⅰ期の中では特に巨大な建物で，特異な存在を示している。柱穴は，かなりの削平を受けているらしく，ほとんど残っていないものもある。また，西側梁間３穴は，ＳＢ04と切り合いがある。この遺構に伴う遺物が出土していないため時期は不明である。

ＳＢ06

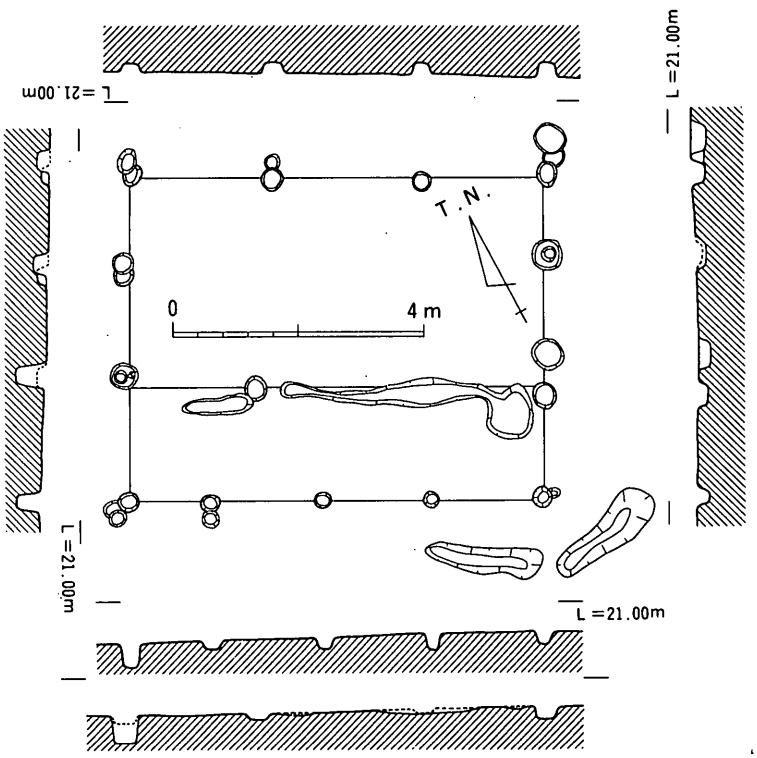
ＳＢ06は，梁間(1)間×桁行３間〔(176)×712cm〕の建物遺構であるが，建物の一辺を残すのみで，ほとんどが調査範囲外に逃げていることから，全体像は不明である。しかし，ＳＢ05とセットで考えられる建物である。



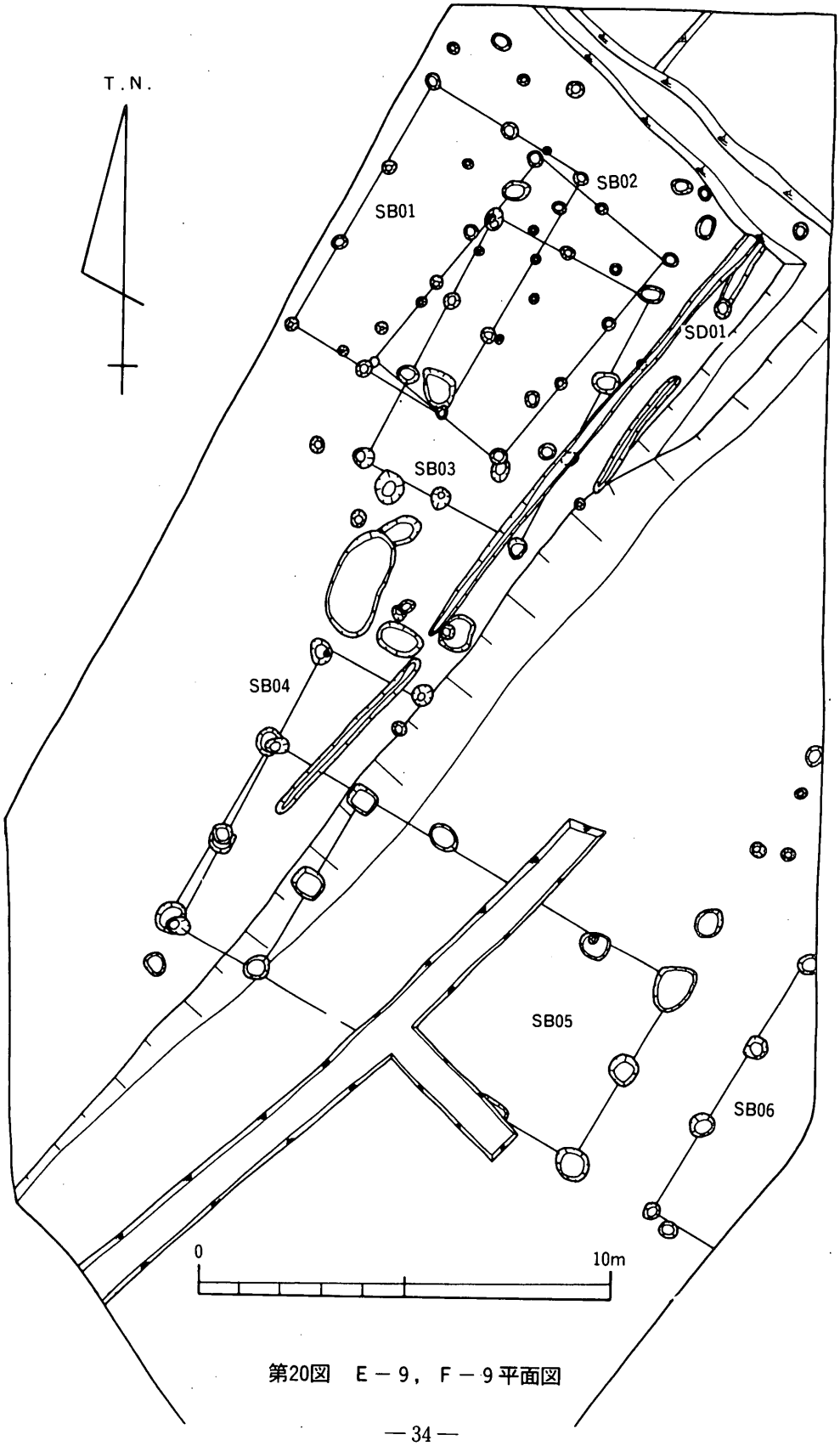
第18図　ＳＢ06平・断面図

ＳＢ17

ＳＢ17は，梁間２間×桁行３間（166×330cm）の建物遺構で，南側に桁行上１間，梁間４間で庇が付く。南東隅には，雨落ち溝ＳＤ32が伴う。柱穴は，平均幅36.6cmを計り，柱間は，平均長220cmを計る。主軸は，真北から28.5°東偏する。建物を構成する柱穴は，ＳＢ16とそれに伴う雨落ち溝ＳＤ31に切られて存在しないものもある。



第19図　ＳＢ17平・断面図



第20図　E－9，F－9平面図

② 平安時代後期・II期

SB03

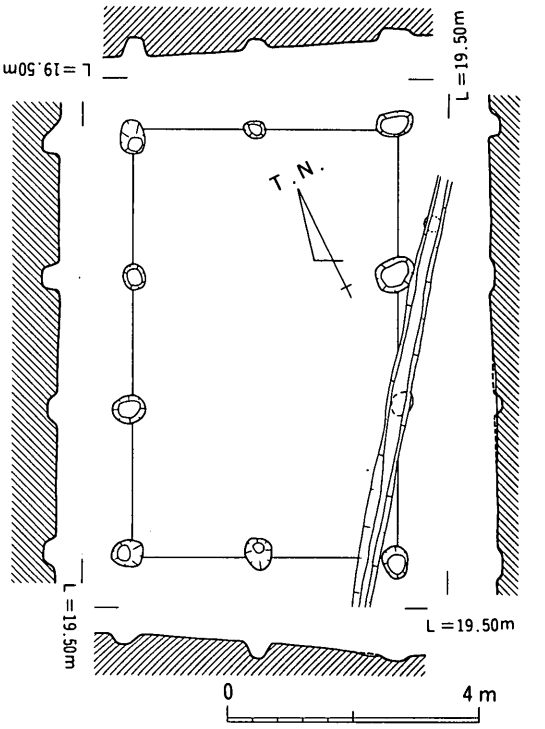
SB03は，梁間2間×桁行3間(426×677cm)の建物遺構である。柱穴は，平均幅51.8cmを計り，柱間は，平均長220.6cmを計る。主軸は，真北から26°東偏する。SB03の一柱穴が，溝SD01に切られていることより，SB03は，SD01より古い遺構である。

SB04

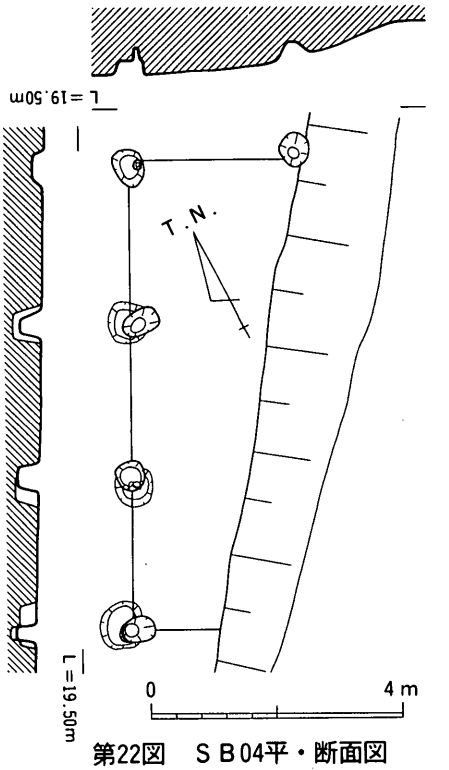
SB04は，梁間(1)間×桁行3間〔(268)×752cm〕の建物遺構である。柱穴は，平均幅54.4cmを計り，柱間は，平均長255cmを計る。主軸は，真北から27.5°東偏する。この建物の東半分は，水田形成時の段差で削られており，詳細は不明である。

SB15

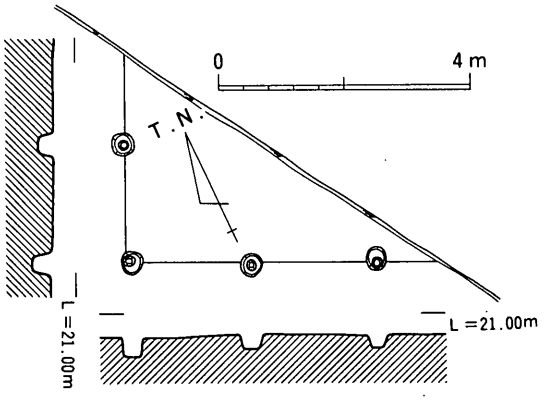
SB15は，梁間(2)間×桁行3間〔(330)×497cm〕の建物遺構である。柱穴は，平均幅37.6cmを計り，柱間は，平均長195.6cmを計る。主軸は，真北から25°東偏する。この建物も北西隅を水路で削られており，全体像は不明である。SB15と後述するSB16は，柱穴に柱痕を残し，他の掘立柱建物に比べると特異な例を示す。南側に柱間172cmの柵列を伴う。



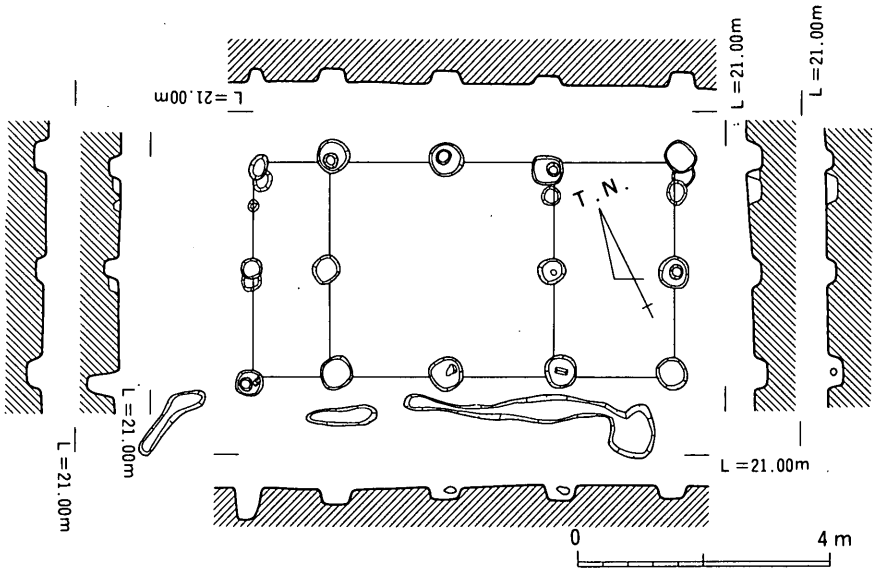
第21図　SB03平・断面図



第22図　SB04平・断面図



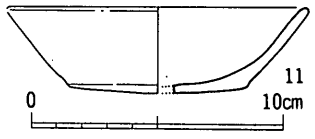
第23図　SB15平・断面図



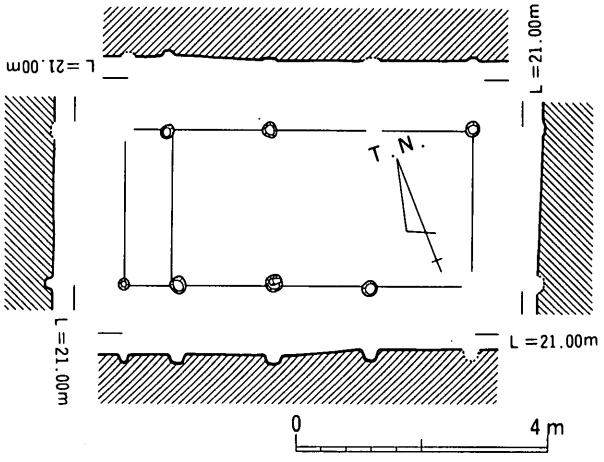
第24図　ＳＢ16平・断面図

ＳＢ16

ＳＢ16は，梁間２間×桁行３間（338×553cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅52cmを計り，柱間は，平均長176.6.cmを計る。主軸は，真北から26.3°東偏する。西側に桁行上で１間，梁間２間の庇が付く。また，南側に雨落ち溝ＳＤ31，東側に柱間191.3cmの柵列を伴う。ＳＢ15・16は，柱穴に柱痕を残す・同一主軸方向・柵列を伴うなどの理由から，同時期に存在していたことが窺われる。柱穴より，土師器の坏が出土している（第25図）。底部は，ヘラ切りされており，体部は，直線的に延び，端部を丸くおさめる形態をとる。



第25図　ＳＢ16柱穴出土遺物実測図



第26図　ＳＢ21平・断面図

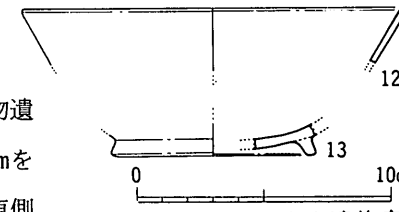
ＳＢ21

ＳＢ21は，梁間１間×桁行３間(244×482cm)の建物遺構である。柱穴は，平均幅26.2cmを計り，柱間は梁間で244cm，桁行で平均長160.6cmを計る。梁間長と桁行長が異なるＳＢ21は，平安時代後期・II期の中で特異な例を示す。これがその他の建物との時期差と考えるのか，その時期のバリエーションのひとつなのかは不明である。主軸は，真北から21.3°東偏する。西側に一間の庇がつく。

③ 平安時代後期・III期

ＳＢ02

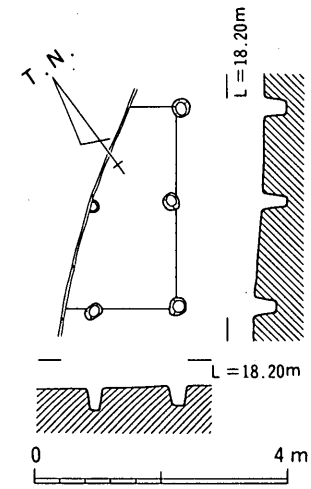
ＳＢ02は，梁間２間×桁行２＋１間（388×390＋242cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅32.6cmを計り，柱間は，平均長194.5cmを計る。主軸は，真北から37.9°東偏する。この掘立柱建物には，東側に主軸と平行するように雨落ち溝（ＳＤ01）と思われるものが伴う。また，柱穴には，根石を有するものがある。これら根石は，ＳＢ02が，谷筋と平行するように建っていることから，建物の谷筋側を補強するために用いられたものと思われる。柱穴より，黒色土器Ａ類が出土している（第27図）。底部には，外方にしっかりふんばった高台を持つ。



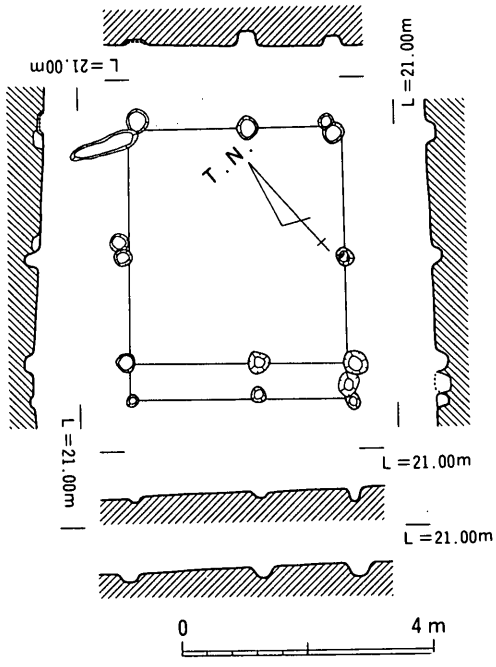
第27図　ＳＢ02柱穴出土遺物実測図

ＳＢ07

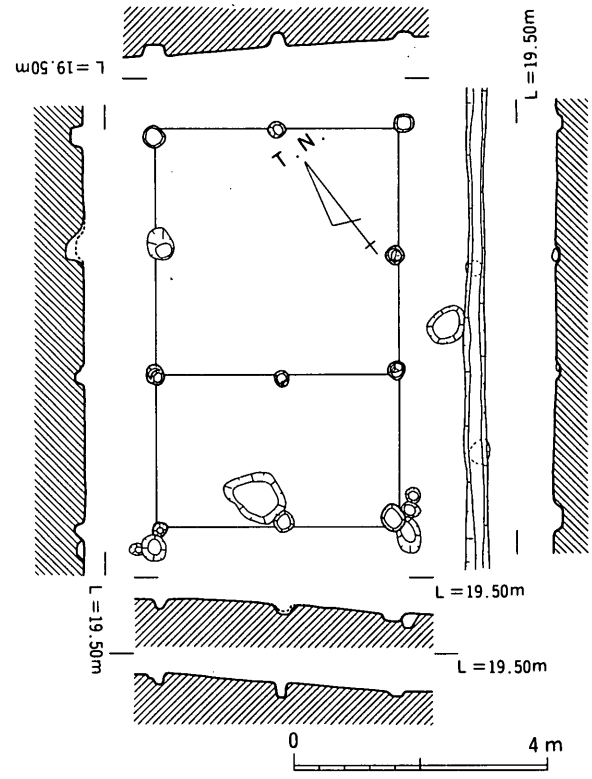
ＳＢ07は，梁間２間×桁行(2)間〔156×（322）cm〕の建物遺構と思われる。柱穴は，平均幅29cmを計り，柱間は，平均長150cmを計る。主軸は，真北から36.8°東偏する。この建物は，西側を水路で壊されており，東側の一部しか残っていない。



第29図　ＳＢ07平・断面図



第30図　ＳＢ18平・断面図



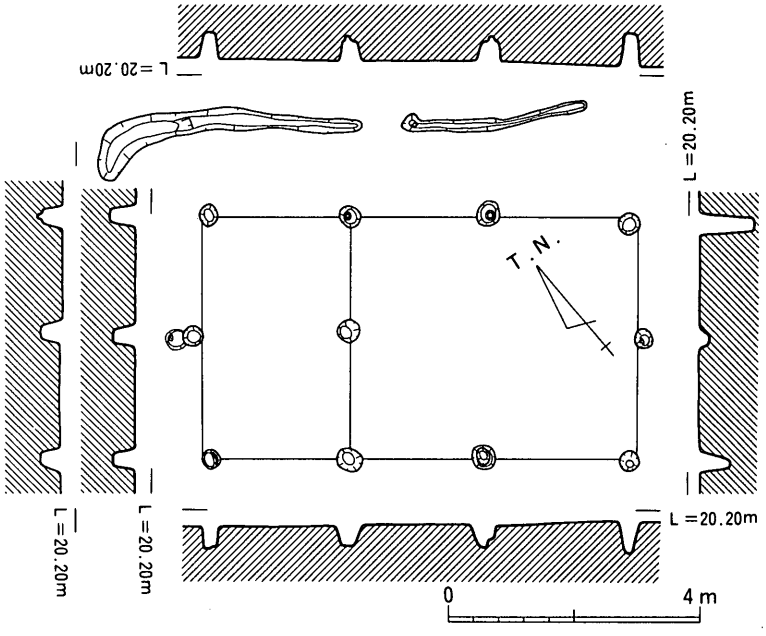
第28図　ＳＢ02平・断面図

SB18

SB18は，梁間2間×桁行2間（341×378cm）の建物遺構である。南側の桁行上に1間，梁間で2間の庇が付く建物である。庇を構成する柱穴は，主柱穴に比べるとやや小さい。柱穴は，平均幅35.2cmを計り，柱間は，平均長179.8cmを計る。主軸は，真北から40.6°東偏する。全体に小振りの建物である。

SB20

SB20は，梁間2間×桁行3間（383×699cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅36.8cmを計り，柱間は，梁間で平均長191.6cm，桁行で平均長233cmを計る。柱穴は，掘り方がしっかりしており，残りの良い建物である。この建物は，北側と北西隅を囲うように雨落ち溝SD36を伴う。主軸は，真北から41.5°東偏する。柱穴より良好な遺物は出土していない。



第31図　SB20平・断面図

SD36

SD36は，SB20に伴う溝状遺構である。SB20の北辺より120cm離れて検出された。この溝から出土した土器は，土師器埦・小皿，黒色土器などである。この中で，実測可能な遺物を紹介する（第33図）。

14は，土師器埦である。底部は丸く造られ，高台は，外方にふんばる様に付けられている。全面にナデ調整を施す。

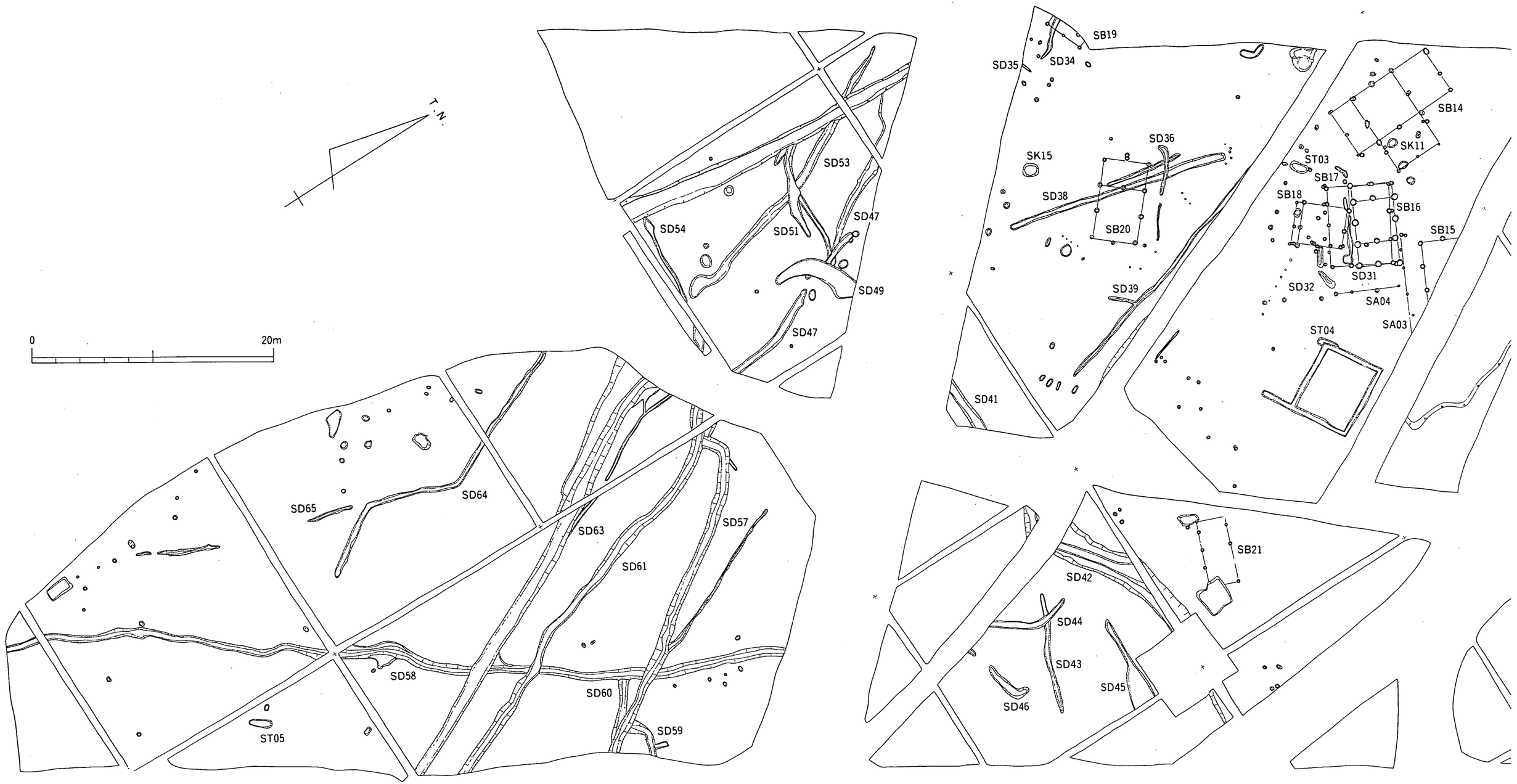
15は，土師器小皿である。底部は，ヘラ切りされており，体部は，丸く仕上げられた底部からやや外反気味に口縁端部へとなる。全面においてナデ調整が施されている。

SD13

SD13は，遺跡北端の谷部G－9で検出された遺構である。この溝より，須恵器坏と黒色土器が出土している。

16は，須恵器の坏身で，おそらく高台の付かないものであろうと思われる。体部は，外方に直線的に延び，口縁端部は，丸くおさめられている。

17は，黒色土器A類の埦である。高台はやや細身を呈し，高台径は8cmを計る。内面だけに炭



第32図　南西部遺構平面図

素を吸着させ黒色化したものである。

ＳＤ47・53・57・61

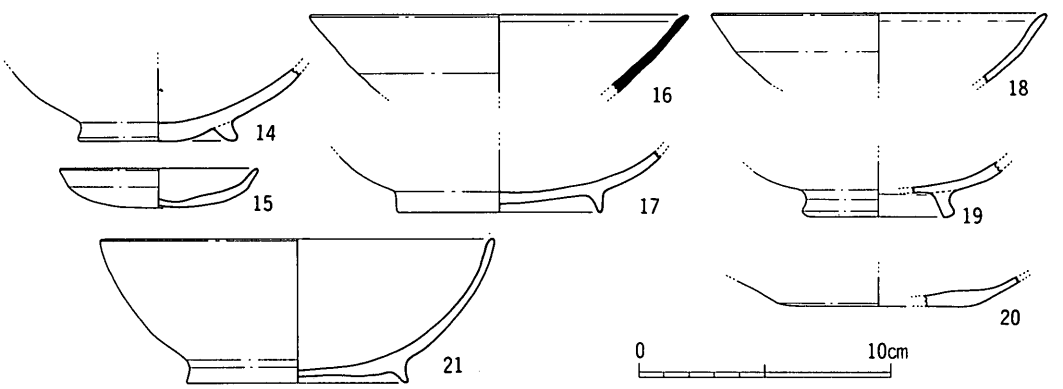
ＳＤ47・53・57・61は，石田遺跡の最西端Ｐ－２・Ｑ－３・Ｒ－３において検出された溝状遺構である。Ｐ－２においてはＳＤ47とＳＤ53がほぼ平行して流れており，それが未調査部分を挟んでＱ－３で合流し，また２本の溝ＳＤ57・61に分かれ平走する。この４本の溝は，Ｑ－３において切り合ってはいるが，出土遺物よりほぼ同時期であることがわかる。これらの溝は，おそらく，生産域と居住域を画する溝であり生産域においての用水路としての機能もあったであろうと考えられる。ＳＤ47・53・57・61の全てにおいて，黒色土器Ａ類の埦が出土しており，おそらく平安時代に使用されていたものと思われる。しかし，平安時代後期・３区分の中でどの時期に伴うものか，それとも全時期に伴うものであるかは不明である。

これらの溝より出土した遺物で，実測可能なものは４点であった。

ＳＤ53より18～20の土器が出土している。18は，土師器埦の口縁・体部であり，少し内彎しながら口縁付近ではやや外方に延び，口縁端部に至る。口縁端部はシャープな稜を持つ。19は，黒色土器埦の底部である。内面だけを黒色化したもので，底部には，外方にふんばるしっかりとした高台を持つ。20は，土師器坏の底部である。全体に摩滅が著しく，調整は不明である。

ＳＤ61からは，21の土器が出土している。21は，黒色土器埦で，内面のみ黒色化したＡ類である。底部には，かなり萎小化した高台が付き，体部は内彎しながら口縁端部に至る。口径15.6cm，器高5.7cmを計る。器高指数は37である。

以上の遺物より，これら４本の溝は，おおよそ平安時代末頃に比定される。



第33図　ＳＤ13・36・53・61出土遺物実測図

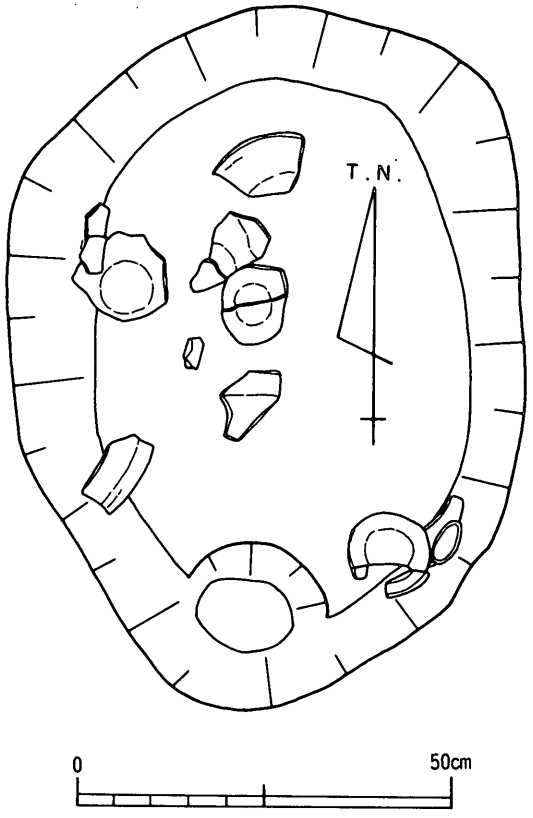
ＳＫ11

掘立柱建物及び溝状遺構以外の平安時代後期の遺構としては，Ｎ－３より土坑ＳＫ11が検出されている。形状は，南北に少し長い楕円形を呈し，規模は，南北91.6cm，東西68.0cmを計る。この土坑も石田遺跡の他の遺構と同様にかなりの削平を受けており，底から土器片が破壊され廃棄された状態で出土した。

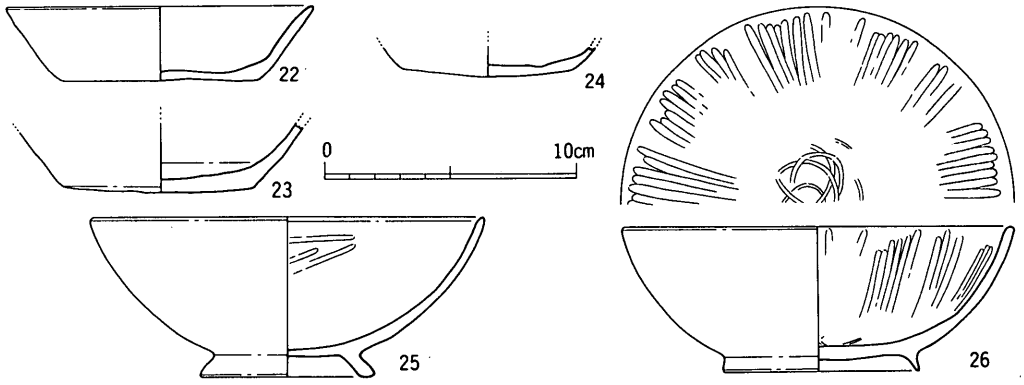
かなりの削平を受けていたにもかかわらず，ＳＫ11から多量の土器が出土した。その中で実測可能な土器を紹介する。

22～24は，土師器坏である。底部はヘラ切りされており，体部は，やや内彎しながら外方に延びるもの（23・24）と直線的に延びるもの（22）がある。

25・26は，黒色土器Ａ類の埦である。25は，底部に外方にふんばったような高台が付く。体部は，内彎しながら口縁端部に至り，端部は丸くおさめられている。調整は，全体に摩滅してはいるが，内面にわずかにヘラミガキが認められる。黒色化は内面だけである。器高指数は42を計る。26は，底部にかなり退化した高台を持ち，体部は，内彎しながら口縁端部に至る。口縁端部は，丸くおさえられている。器面調整は，体部内面に縦方向のヘラミガキが施され，内面見込み部分は不規則なヘラミガキが施されている。



第34図　ＳＫ11平面図



第35図　ＳＫ11出土遺物実測図

(6) 古墳時代～平安時代に継続する遺構

ＳＤ29

石田遺跡の中央部Ｊ－６，Ｋ－６・７，Ｌ－７で尾根筋と平行する溝状遺構ＳＤ29が検出された。この溝状遺構は，かなりの削平を受けており，検出状況は，天幅128cm，深さ19.5cmを計るが，ほとんど深さのない残りの悪い部分もある。また，Ｊ－６では，大きく２本の溝に分かれており，ここより多量の遺物が出土した。この溝の性格は，かなりの削平のため不明であるが，この溝より谷部側でこの溝と併存したと思われる遺構が検出されなかったことから，おそらく，居住域と生産域を区画した溝ではないかと思われる。

この溝より出土した遺物を観察すると，弥生時代の遺物も少量混ってはいるが，主として，古墳時代～平安時代末頃の遺物が多量に出土していることがわかる。

出土遺物（第37図，第38図）

27は，弥生土器の壺である。「く」の字型に外反した頸部を持ち，口縁部は肥厚し，外面上方に面を持つ。全体に摩滅しており，調整及び口縁部外面に凹線が施されていたかは不明である。

28は，土師器小皿である。口縁は外方に直線的に延び，端部は丸くおさめられている。全体に摩滅が著しいので底部の調整は不明である。

29～33は，土師器坏である。口径に比べ器高の低いもの（29），高いもの（30～33）がある。29は，底部をヘラ切りしており，体部は，やや内彎しながら外方に延び口縁に至り，端部は丸くおさめられている。30～32は，器高の高い土師器坏の底部である。底部はしっかりとしており，体部は，外方に直線的に延びる。調整は，内外面にナデ調整されており，底部はヘラ切りされているものと摩滅のため不明なものがある。33は，底部より内彎気味に外方に延びた体部を持ち，口縁端部は，やや外反しながら丸くおさめられている。

34は，突出した高台を持つ埦である。調整については，摩滅のため不明である。

35は，低い高台の付いた坏である。体部は，直線的に外方に延びる。

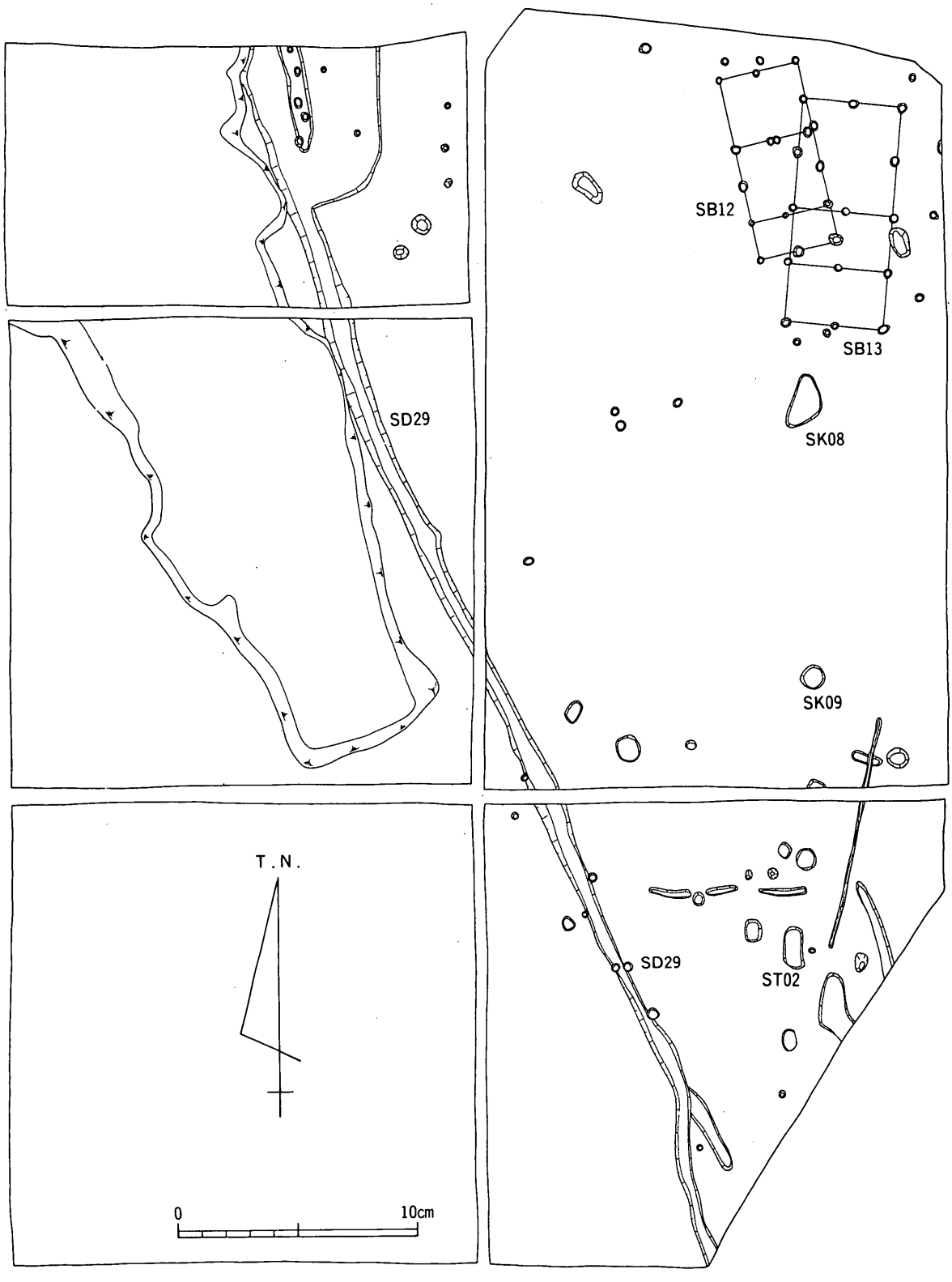
36･37は，内面だけを黒色化した黒色土器Ａ類の埦である。高台が外方に強くふんばるもの(36)と，外方に少し延びるだけのもの（37）の２種類ある。調整は，摩滅が著しく不明である。

38は，須恵器坏身である。立ち上がりも受け部もかなり退化したものである。体部内外面はヨコナデ調整されており，底部は，ヘラケズリされている。

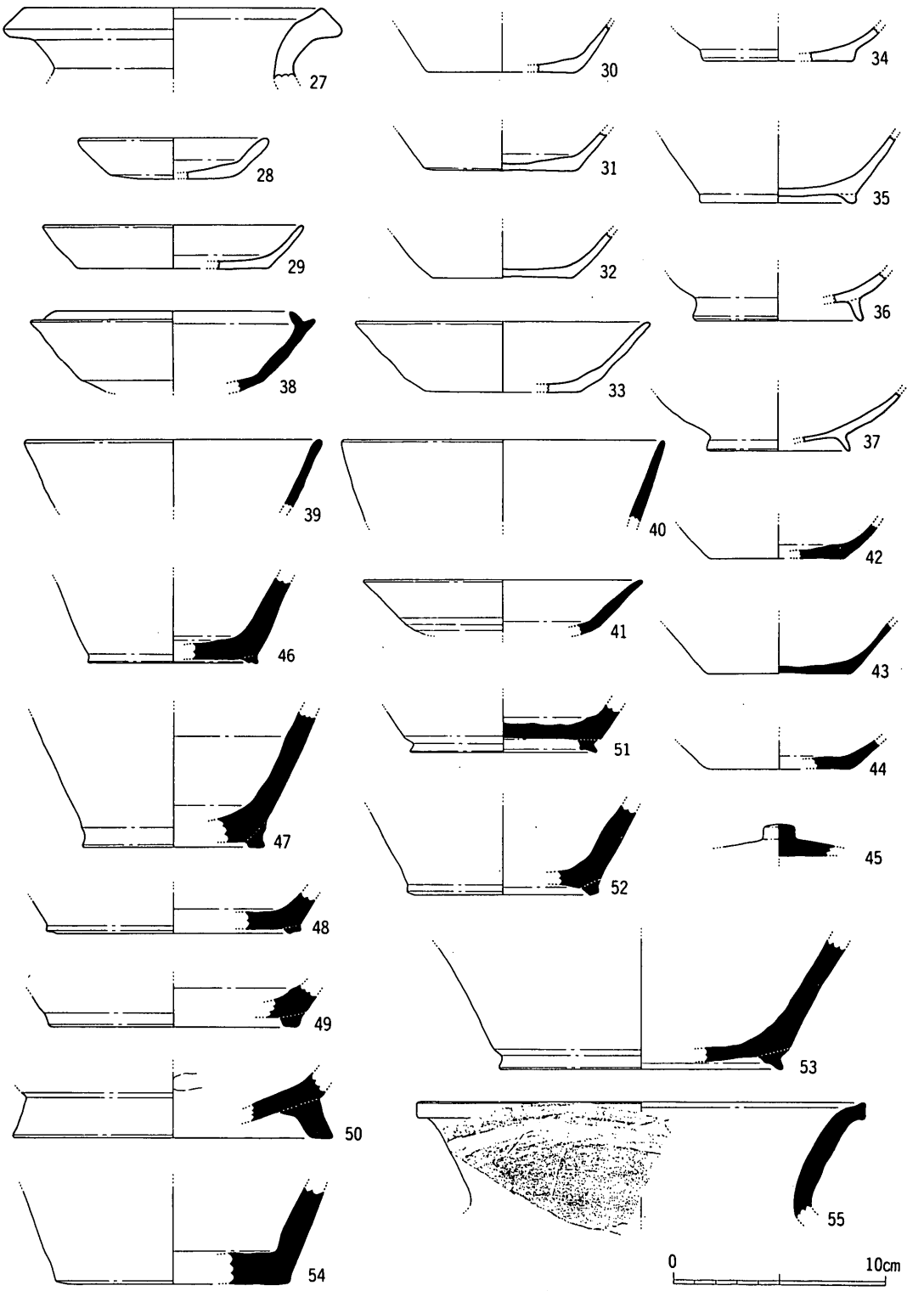
39～41は，須恵器坏身である。体部が外方に直線的に延びるもの（40・41）と口縁近くでやや外反しながら口縁端部に至るもの（39）がある。

42～44は，須恵器坏の底部である。底部はヘラ切りされており，体部は，やや内彎するもの(42),直線的に延びるもの（44），やや外反するもの（43）などがある。

45は，つまみのついた須恵器の坏蓋である。つまみはかなり簡略化されたもので，円錐形状になる。



第36図　J－6・7，K－6・7平面図



第37図　ＳＤ29出土遺物実測図①

46～53は，高台付きの壺か坏の底部と思われる。これら全て底部及び体部の器壁が厚いので壺の底部である可能性が強い。高台は，底部と体部の境に外にふんばるように付くものと，やや内側にまっすぐ付くものがある。

54は，高台の付かない壺の底部である。底部は，ヘラ削りされ，器壁は厚い。

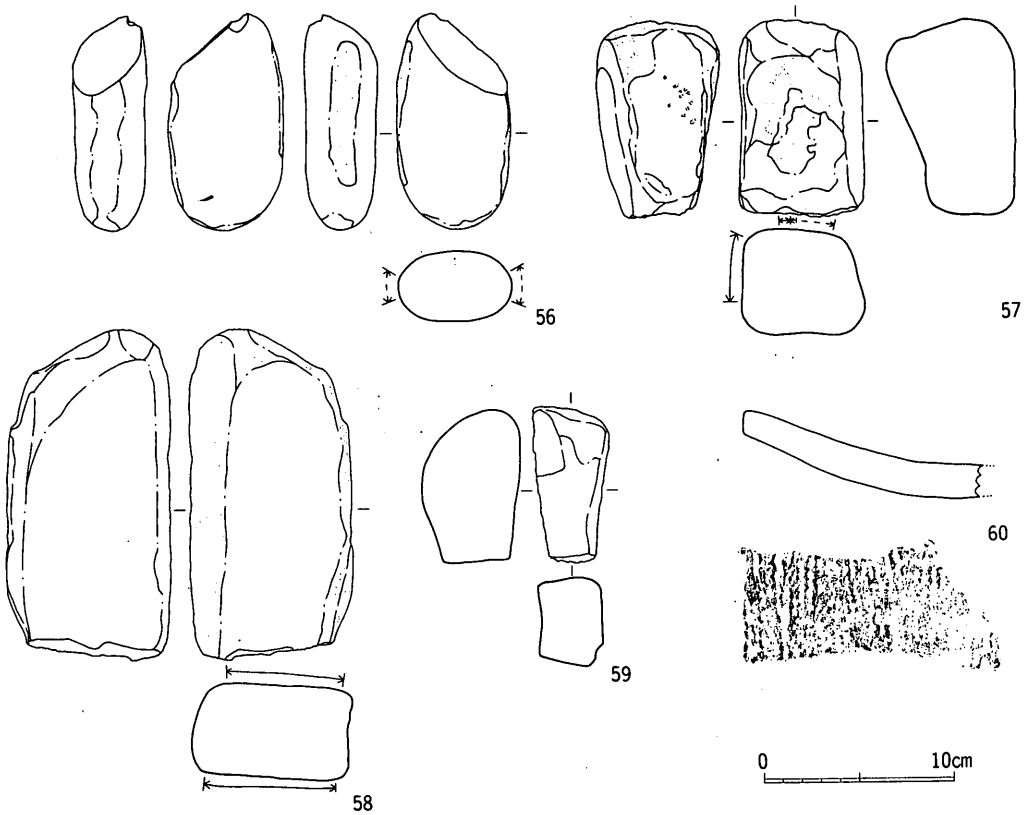
55は，須恵器甕である。頸部から「く」の字に曲がり，口縁部は，外方に面を持ち，そこにわずかな凹線を持つ。全体にナデ調整を施しているが，頸部外面には，格子目タタキ痕を残す。

また，ＳＤ29からは，多量の土器に伴い，石製品，瓦も出土している。

56は，砂岩製の敲き石である。上方部を折損しているが，残りの３面には，敲打痕がある。

57～59は，砂岩製の砥石である。上面と側面を使用面としているもの(57)，上面と下面を使用面にしているもの（58）などがある。

60は，平瓦である。外面に縄目のタタキ痕を残す。



第38図　ＳＤ29出土遺物実測図②

(7) 中　世

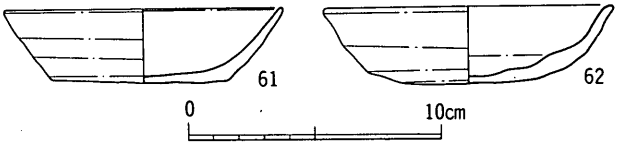
中世の遺構は，掘立柱建物（ＳＢ11～14,19），溝状遺構（ＳＤ46･51），土坑（ＳＫ18）などがある。掘立柱建物は，時期的には区別できないが，主軸方向によって２期に細分される。中世－ＩとしてＳＢ13・14（Ｎ－6°－Ｅ），中世－ＩＩとしてＳＢ11・12・19（Ｎ－16.1°－Ｗ）に分けられるが，それぞれの建物遺構に切り合いはなく，遺物の面でも時期差がないことより中世－Ｉ・ＩＩの前後関係は立証できなかった。

①　中世－Ｉ

ＳＢ13

ＳＢ13は，梁間２間×桁行４間(402×913cm)の建物遺構である。柱穴は，平均幅36.8cmを計り，柱間は，平均長214.6cmを計る。主軸は，真北から11°東偏する。

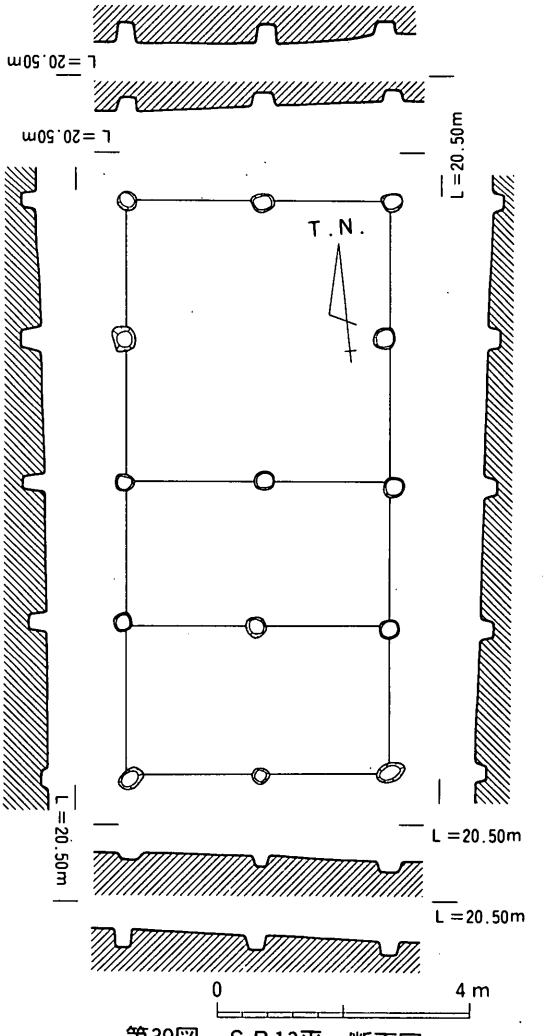
柱穴からは，土師器の坏（第40図－61・62）が出土している。61は，底部をヘラ切りしており，体部は，直線的に外方へ延びる。体部と底部の境には，シャープな稜を持つ。62は，底部と体部間に稜を持たない坏で，底部は，ヘラケズリされており，体部は，内彎気味に延び，口縁近くでやや外反する。口縁端部は，丸くおさめられている。



第40図　ＳＢ13出土遺物実測図

ＳＢ14

ＳＢ14は，庇が南側と西側に付く建物遺構である。主となる建物は，梁間２間×桁行２＋１間（432×411＋306cm）を計り，北側では，不規則な柱間を持つ。庇の柱穴は，主柱穴に比べるとやや小振りである。柱穴は，主柱穴で平均幅46.6cmを計り，柱間は，平均長210.8cmを計る。柱穴より，底部ヘラ切りの坏が出土している。主軸は，真北から１°東偏する。

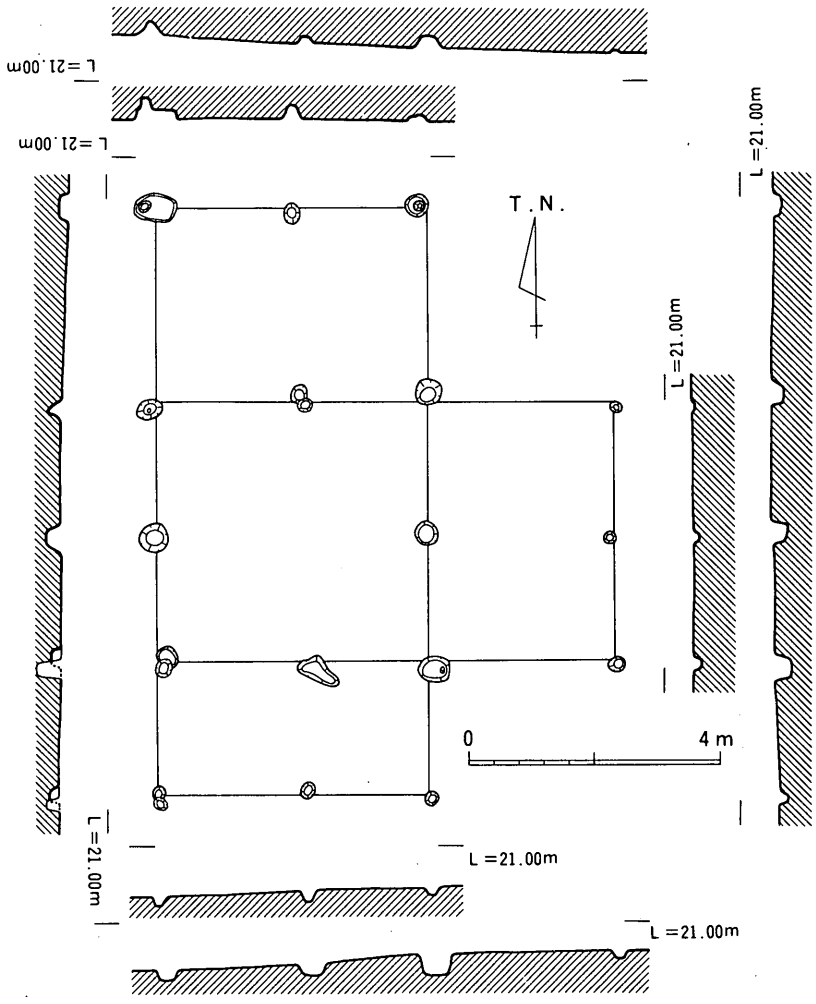


第39図　ＳＢ13平・断面図

②　中世－ＩＩ

ＳＢ11

ＳＢ11は，梁間１間×桁行２間（252×345cm）の建物遺構である。柱穴は，平均幅22.6cmを計り，柱間は，梁間において252cm，桁行では，平均長172.6cmを計る。この建物は，梁間と桁行の



第41図　ＳＢ14平・断面図

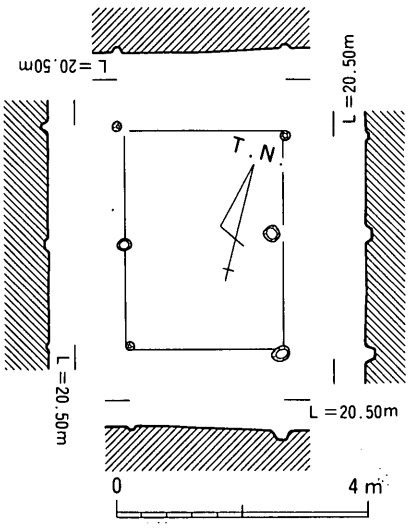
柱間に違いをみせている。主軸は，真北から14°西偏する。柱穴から良好な遺物は出土していない。

ＳＢ12

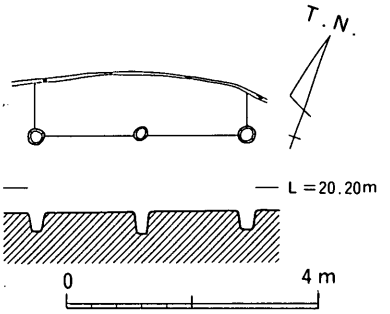
ＳＢ12は，梁間２間×桁行２＋１間（338×316＋180㎝）の建物遺構である。南側に桁行上で１間，梁間２間の庇を持つ。これは，２間×２間の主となる部分があり，それに柱間の異なる付属施設が付く建物である。柱穴は，平均幅33cmを計り，柱間は，平均長163.6cmを計る。主軸は，真北から13°西偏する。

ＳＢ19

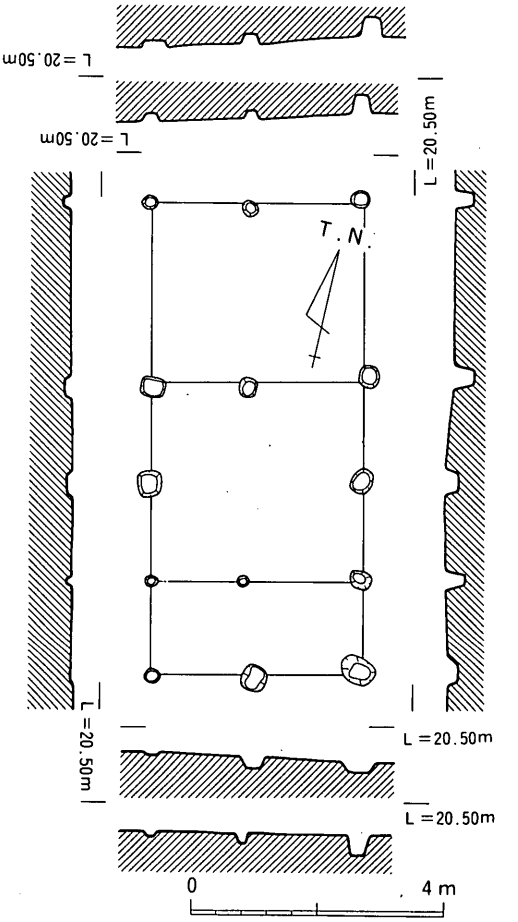
ＳＢ19は，梁間(1)間×桁行２間〔(84)×338cm〕の建物遺構である。柱穴は，平均幅26.6cmを計り，柱間は，平均長169cmを計る。主軸は，真北から20°西偏する。建物の北側が確認されていないため全様は不明である。柱穴から遺物は出土していない。



第42図　ＳＢ11平・断面図



第44図　ＳＢ19平・断面図



第43図　ＳＢ12平・断面図

③　中世・その他の遺構

前述した以外の中世の遺構としては，溝状遺構ＳＤ46・51と土坑ＳＫ18がある。

ＳＤ46

ＳＤ46は，Ｐ－４において検出された。後世の削平により残りの悪い状態であったため，遺物量が少なく，そのほとんどは破片であった。溝内より，小片ではあるが瓦器が出土している。口縁端部下はヨコナデされており，体部外面に指頭痕が目立つ。この瓦器は，口縁部・体部の形状から13世紀末頃の和泉産と思われる。

ＳＤ51

ＳＤ51は，石田遺跡西側の谷筋，Ｐ－２において検出された。これらＳＤ46・51は，削平のために性格の不明な遺構である。

ＳＫ09

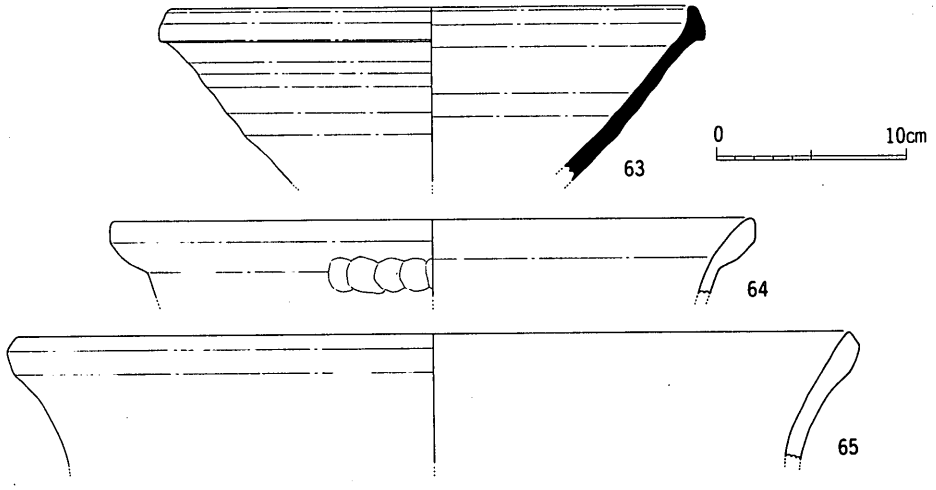
土坑ＳＫ09は，当遺跡の東側の尾根部と谷筋部間の斜面（Ｋ－７）で検出された。この土坑は，ほぼ円形の掘り方を持ち，天幅100cm，深さ74.4cmを計る。その土坑より中世の遺物が出土してい

る。この周辺で同時期の遺構が検出されていないので性格等については不明である。

出土遺物（第45図）

63は，須恵質こね鉢である。体部は，ロクロ整形時のヨコナデ痕が顕著に見られ，口縁部は，上下にやや肥厚し，外面は丸くおさめられている。また，内面口縁端部下には，強いヨコナデが施されており，そのために，口縁端部が内に反りかえる形状を持っている。

64・65は，土鍋である。口径が34cmと43.8cmと大型で，64の口縁は，「く」の字形に外反する形態をとっている。



第45図　ＳＫ09出土遺物実測図

(8) その他の遺構

ＳＤ17

ＳＤ17は，東部谷筋部分の最深部（Ｈ－10）より東で検出された遺構である。規模は，天幅180cm，深さ15cmと非常に浅い溝で，削平を受けている可能性が強い。溝は，南半で多数の凹凸が底部に認められ，北半では，３cm～20cm程度の礫が検出された。

遺物は，弥生土器，須恵器の小片が出土しただけである。性格等については，不明である。

ＳＫ07

ＳＫ07は，Ｊ－７で検出された土坑である。埋土は，焼土を少量含む炭層であった。壁面も赤色化していた。

ＳＡ01～05

当遺跡では，柵列が５ケ所で確認された。

ＳＡ01は，Ｇ－８，Ｈ－８で検出された柵列で尾根部と谷部を区画するように造られている。どの時期の遺構に伴うのかは不明である。

ＳＡ02は，奈良時代の遺構に伴うもので，前述した通りである。

ＳＡ03・04は，平安時代後期－Ⅱの建物に伴うものである。

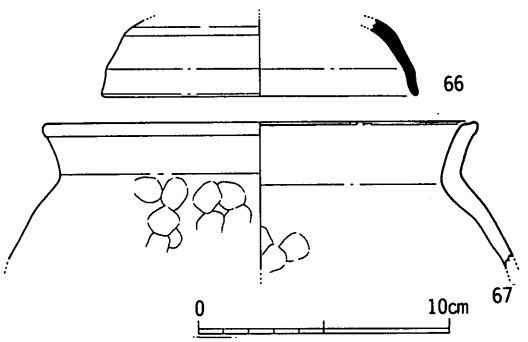
ＳＡ05は，Ｎ－３，Ｏ－３で検出された柵列で，どの時代の遺構に伴うかは不明である。

柱穴出土遺物（第46図）

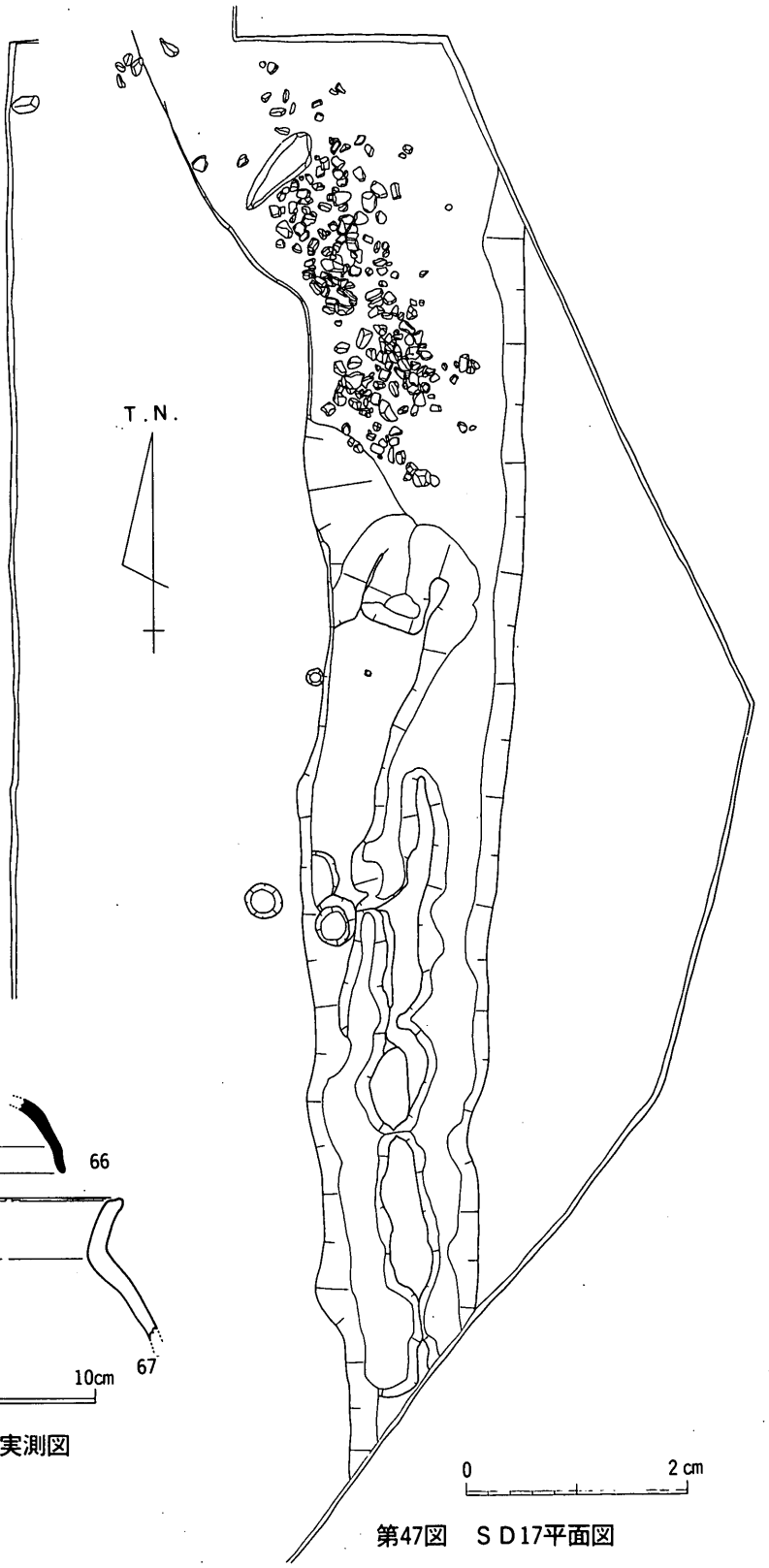
66は，Ｊ－６，ＳＰ01より出土した須恵器の坏蓋である。天井部と体部の境がほとんどなく，口縁は，やや外反して終る。

67は，Ｎ－３，ＳＰ08より出土した弥生土器と思われる。頸部は，「く」の字形に曲り，内面に柔らかな稜を持つ。口縁端部は，上方に面を持ち，凹線が施されている。

弥生の遺物は，土坑・柱穴及び包含層より少量ではあるが出土している。このことから，削平を受ける以前には，弥生時代の遺構が少なからず，存在した可能性がある。



第46図　柱穴出土遺物実測図



第47図　ＳＤ17平面図

土壙墓

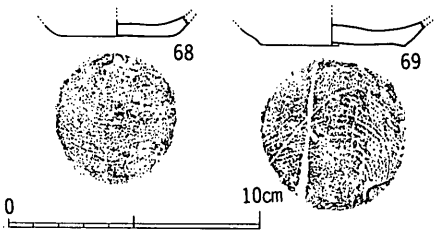
石田遺跡では，土壙墓と思われるものが5基検出されている。しかし，平面形が歪なものがあったり，壙内よりほとんど遺物が出土していないことから，これらは，土壙墓ではなく，ただの土坑の可能性もあることを考えておかなくてはならない。

この5基の土壙墓を，それぞれの主軸方向で分けると，ほぼ南北に主軸があるもの（ＳＴ01，02）と50°前後に主軸があるもの（ＳＴ03，04，05）の2グループに分けられる。また，頭位を確定するには，削平され残りの悪いものや，他の遺構に壊されているものなどがあり，非常に困難を極めた。そのため，本書においては，短辺の幅が大きい方を頭位方向とした。それによると，頭位が南側にあるもの（ＳＴ01，02,03,04），北側にあるもの（ＳＴ05）に分けられる。

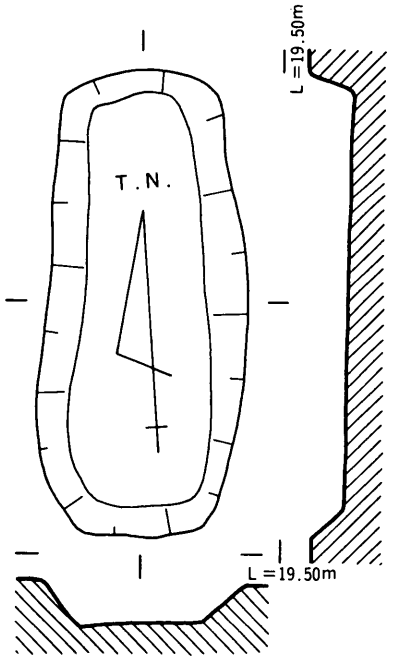
以上のことから，これら土壙墓を細分しなおすと，①主軸を南北に，頭位を南側にとる一群（ＳＴ01，02），②主軸をほぼ50°前後に頭位を南側にとる一群（ＳＴ03，04）③主軸をほぼ50°前後に頭位を北側にとる一群（ＳＴ05）に細分される。

ここでは，唯一土壙墓内より遺物の出土したＳＴ02について説明する。この土壙は，ほぼ主軸を南北に，頭位を南にとる。頭位の方が少し歪になっているが，ほぼ隅丸の長方形型を呈する。

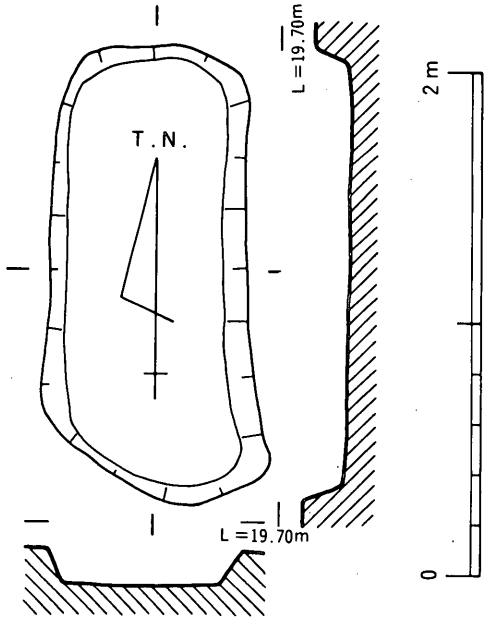
この土壙墓内より，土師器の小皿が出土している（第48図）。底部は，回転糸切りされており，体部は，外方へ直線に延びるものと思われる。時期は，中世頃と思われる。



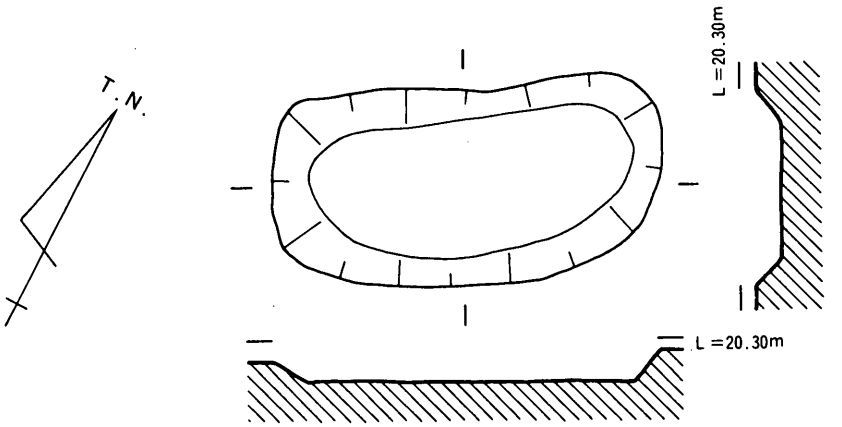
第48図　ＳＴ02出土遺物実測図



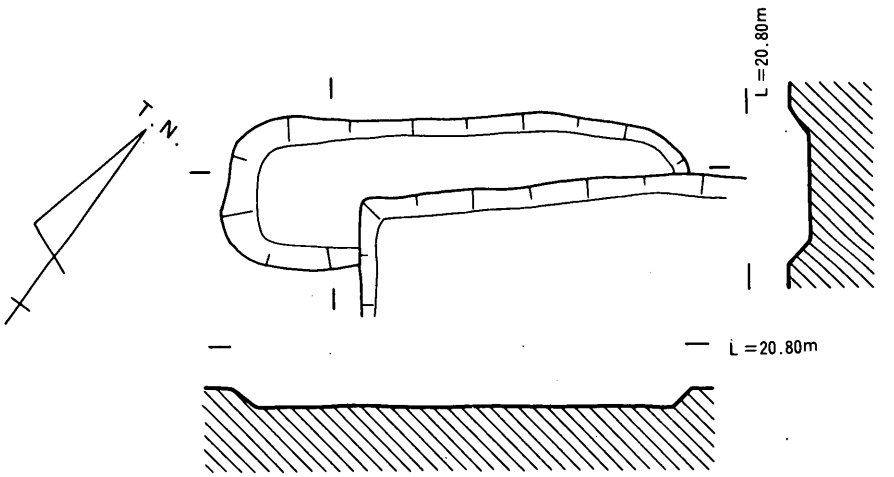
第49図　ＳＴ01平・断面図



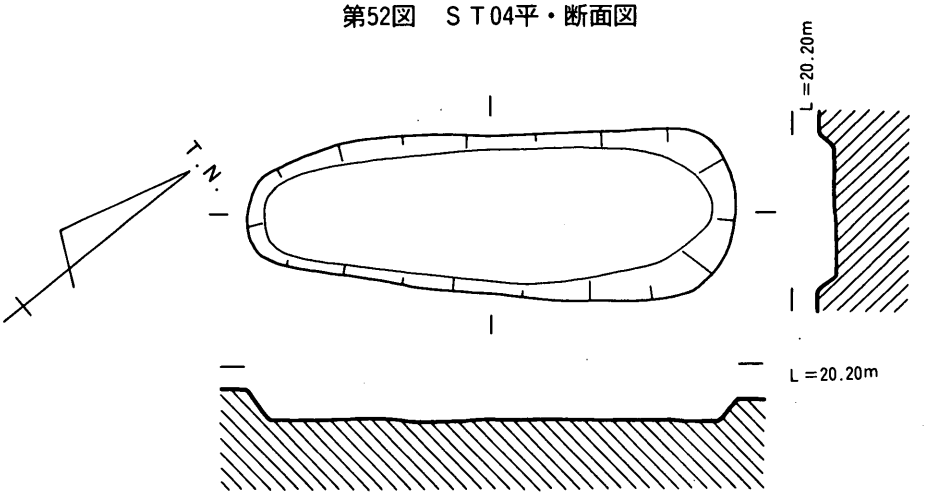
第50図　ＳＴ02平・断面図



第51図　ＳＴ03平・断面図



第52図　ＳＴ04平・断面図



第53図　ＳＴ05平・断面図

(9) 包含層出土遺物

石田遺跡では，尾根部においては，後世の攪乱により，遺物包含層がなく，谷部においてのみ遺物包含層が確認された。そのためここでは，遺物包含層が形成されているG－9・H－9・I－9・J－9について，層位ごとに遺物を列挙した。ちょうどここは，谷筋部にあたり，土層序でも述べたように，70cmの包含層が堆積しているグリッドである。ここでは，土層ごとの上面で精査を繰り返しながら発掘を実施したので，かなり良好な状態で遺物が得られたと思われる。

また，その他のグリッドにおいては，器種別に遺物を列挙した。

出土した遺物は，後世の攪乱及び削平により包含層が削られている部分が多く，対象面積に比べると出土量は少ない。しかし，谷筋にあたるG－9・H－9・I－9・J－9は，その中でも多量の遺物を出土したグリッドである。

出土遺物には，弥生～近世までの幅がある。弥生時代の遺物としては，弥生土器・石鏃・石匙，古墳時代の遺物としては，須恵器・土師器が出土しているが，全体から見ると少量である。時期別で多量に出土したのは，奈良時代の須恵器である。平安時代の遺物としては，緑釉陶器・灰釉陶器などが出土しており，中世期の土師器・土師質土器・須恵器・磁器・砥石などと同様に少量である。また，近世の遺物としては，備前焼擂鉢・陶器・染付などの陶磁器類とキセルなどの金属製品が出土している。

① G－9，H－9，I－9，J－9出土遺物

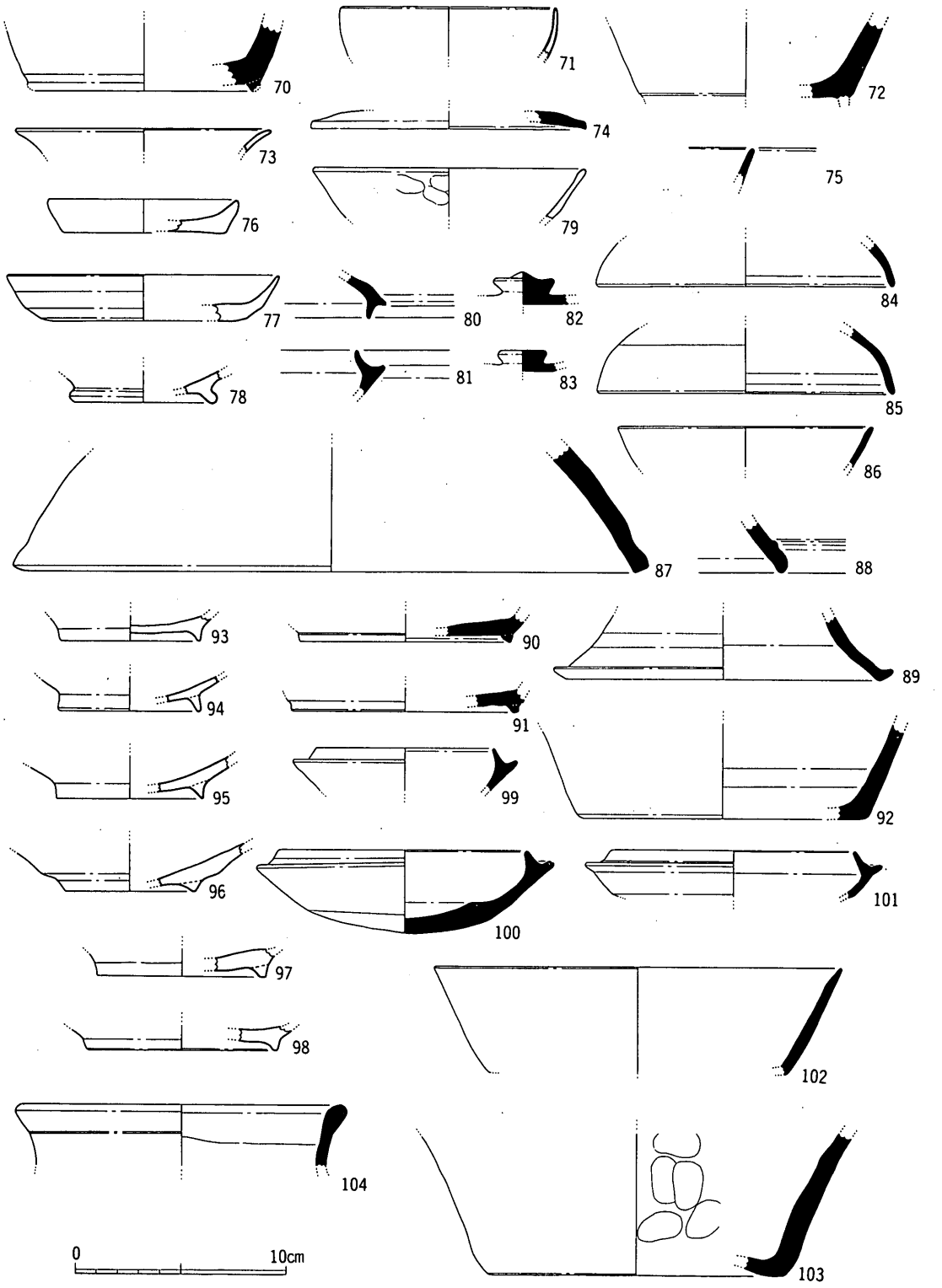
G－9　(第54図)

G－9より出土した遺物で実測可能な遺物は，第4層から，須恵器の高台付壺（70）が出土したのみであった。このように遺物量が少なかったのは，遺構面上層近くまで重機による掘削を行ったためである。

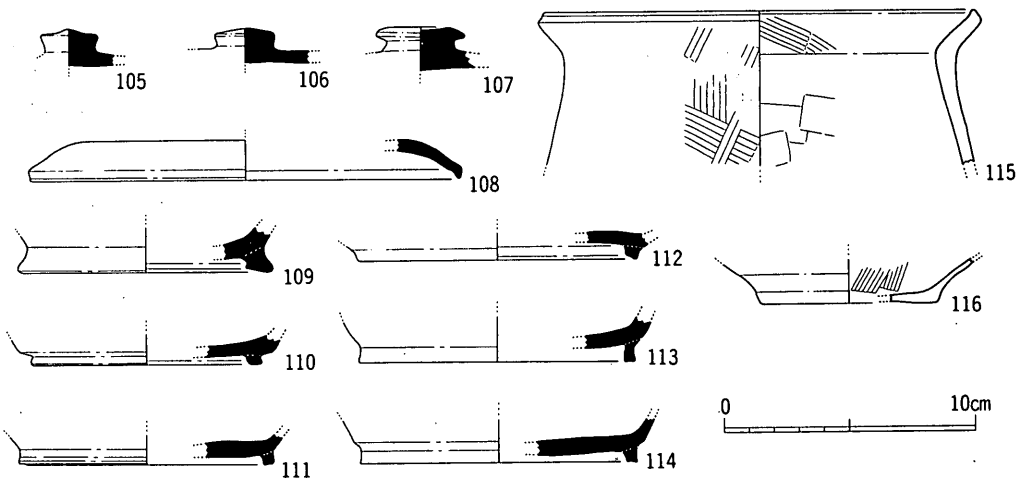
H－9　(第54図71～104，第55図105～116)

H－9では，包含層が6層に細分された。まず，第1・2層の耕作土及び床土からは，磁器碗(71)が出土している。時期は，近世以降と思われる。第3層からは，高台付の須恵器(72)が出土している。第4層においては，瓦器（73)・須恵器（74・75）などが出土している。少し古い須恵器坏蓋（74）が混ってはいるが，おそらく中世以降の包含層と思われる。以上4包含層からは，遺物の出土量が極めて少なかった。

第5層からは，土師器・瓦器・須恵器が出土している。土師器（76・77）は，糸切りされた底部を有している。瓦器埦（79）は，外面に指頭痕が顕著にみられる。和泉産の瓦器と思われ，おそらく13世紀末～14世紀初頭であろう。80～92は，須恵器で，立ち上がり・かえりを有するもの（80・81)，宝珠つまみが付く坏蓋（82・83)，付かない坏蓋（84・85）底部と体部の境に高台を有する坏身が出土している。87は，おそらく器台の脚と思われる。88・89は，高坏の脚である。以上から，第5包含層出土遺物には，古墳時代後期～中世の時期幅があることがわかる。



第54図　G－9・H－9包含層出土遺物実測図①



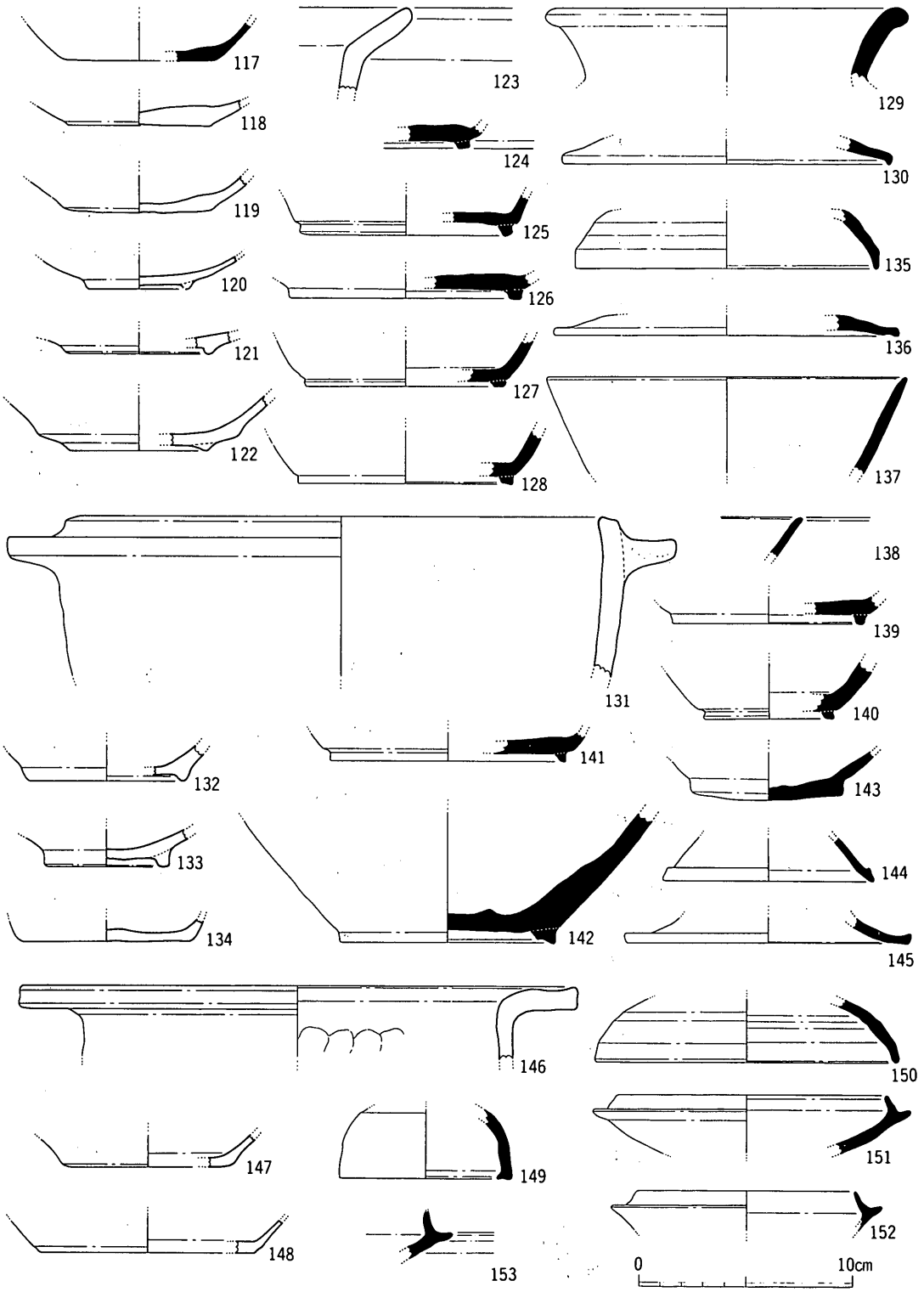
第55図　H－9包含層出土遺物実測図②

第6層からは，弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器が出土している。93～95は，黒色土器である。全て，内面だけに炭素を吸着させた黒色土器A類で，高台径が大きく，高台がしっかりしたものばかりである。99～101は，須恵器，坏身である。立ち上がりが萎小化しており，6世紀後半頃に位置付けられる。105～108は，宝珠つまみの付く坏蓋で，宝珠つまみが退化したもの(105・106)，扁平になったもの（107）などがある。102，109～114は，須恵器の高台付き坏身で，高台は，底部と体部の境に垂直に付くものばかりである。115・116は，弥生土器である。115は，内外面に刷毛目調整を施し，口縁端部は上方に少しつまみ上げられている。以上より，第6層出土遺物には，弥生時代～平安時代末頃までの時期幅があることがわかる。

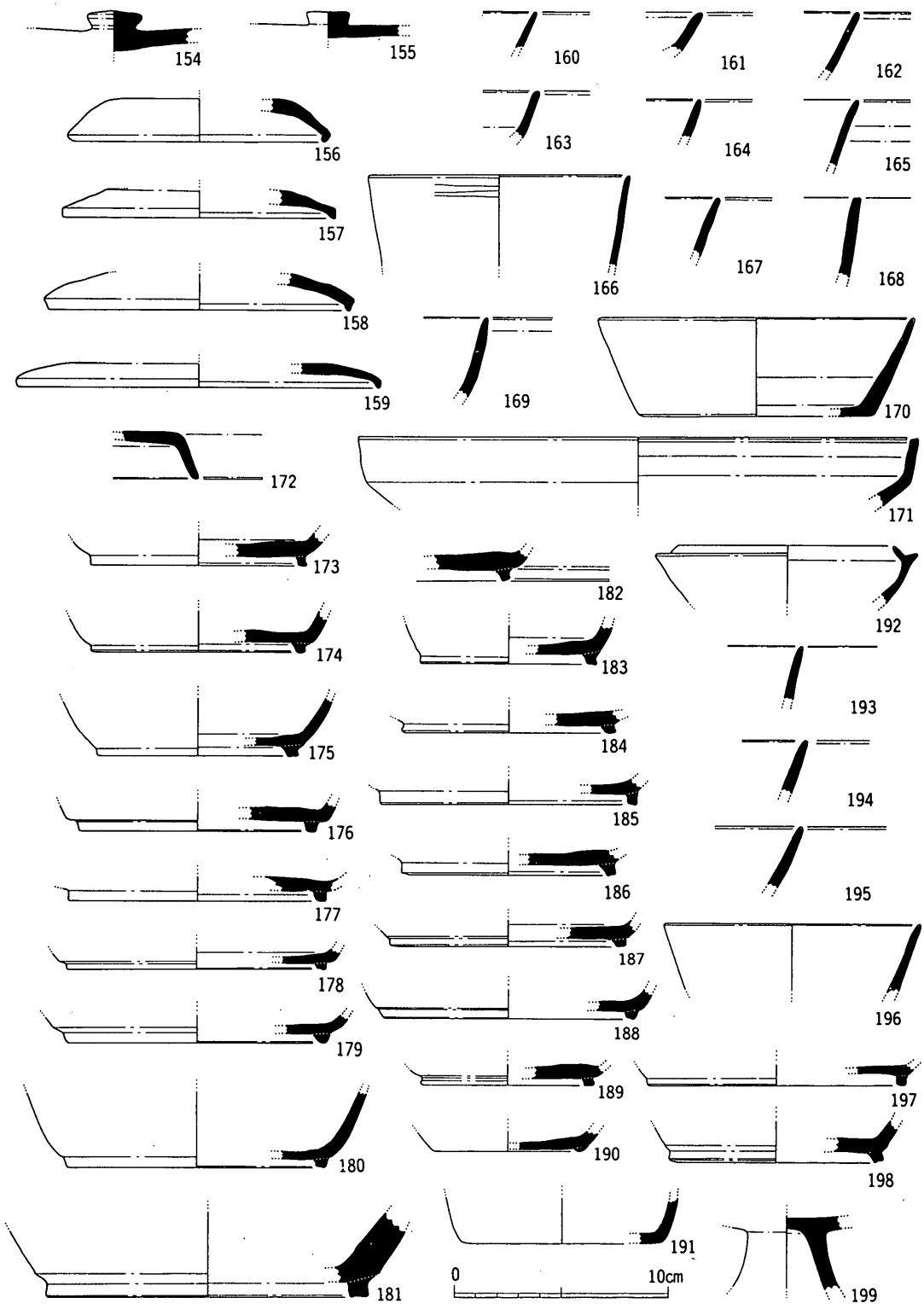
Ⅰ－9　（第56図　117～153・第57図　154～199）

Ⅰ－9の第3層からは，須恵器の坏が出土している。出土遺物量は少ない。第4層では，土師器・須恵器が出土している。118～122は，土師器である。124～128は，須恵器の高台付坏である。底部と体部の境に扁平な高台が付き，外方にややふんばり気味のもの（125）と垂直に付くものとがある。130は，宝珠つまみの付く坏蓋と思われ，端部が下方に短く屈曲する。これらの遺物には，奈良時代～中世にかけての時期幅がある。

第5層からは，土師器・須恵器が出土している。131は，土甕である。しっかりとした鍔が付き，口縁端部は，短くおさめる。132～134は，土師器で，高台の付く埦と，底部をヘラ切りされた坏がある。135・136は，須恵器の坏蓋である。天井部が高く，体部が内彎しながら口縁端部に至るもの（135）と，天井部が低く，おそらく宝珠つまみの付くもの（136）がある。137～141は，須恵器の坏身である。体部は，直線的に延び，端部は，シャープな稜を持ち，終る。高台は，底部と体部の境に付き，外方へ少しふんばるものばかりである。143は，須恵器の埦で，突出した高台を持つ。内面指ナデにより一段低くなっている。144・145は，高坏の脚で直線的に延びるもの（144）とスカート状に裾がひらくもの（145）がある。以上の出土遺物から，第5層は，奈良時



第56図　Ⅰ－9包含層出土遺物実測図③



第57図　Ⅰ－9包含層出土遺物実測図④

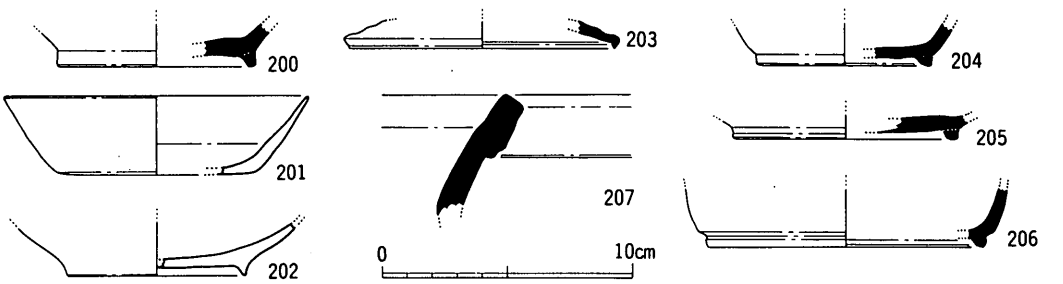
代～中世にかけての時期幅が考えられる。

第6層からは，土師器・須恵器が出土している。146は，土師質の甕である。口縁は，ほぼ直角に曲り，端部は，上方に小さくつまみ上げる。147・148は土師器の坏である。この層出土の須恵器は大別して，6世紀以前のものと，7世紀以後のものがある。6世紀以前のものとしては，150～153がある。150・151の坏身と坏蓋は，坏蓋の口縁端部と坏身の受け部が，自然釉により癒着した状態で出土しており，おそらく，須恵器窯が近くに存在する可能性が考えられる。これらの須恵器は，立ち上がりはやや退化しているものの，まだ，しっかりしており，時期は，おそらく6世紀後半頃と思われる。7世紀以降の須恵器は，天井部に宝珠つまみの付くもので，その宝珠もかなり退化している。坏身における口縁の形状は，直線的に延びる体部とやや内彎気味に立ち上がる体部があり，口縁端部も丸くおさめられるものと上面に面を持つものに分けられる。以上の出土遺物から，第6層は，古墳時代～中世の時期幅があることがわかる。

第7層出土遺物は，ほとんど須恵器で，坏身に立ち上がりを有するもの（192）と，高台付きの坏とに細分される。192の須恵器の坏は，立ち上がりも受け部もかなり萎小化しており，6世紀末頃に比定される。また，高台付坏は，底部と体部の境に外方にふんばる高台が付くもので，奈良時代頃と思われる。以上の出土遺物から，第7層は，古墳時代～奈良時代の時期幅がある。

Ｊ－9　（第58図　200～207）

Ｊ－9第3層からは，高台付きの坏身（200）が出土している。底部と体部の境に高台の付くものである。第5層からは，土師器・黒色土器が出土している。201は，土師器の坏で直線的に延びる体部を持つ。202は，黒色土器で，かなり退化した高台を持つ。時期は，おそらく平安時代末頃と思われる。第6層からは，須恵器が出土している。宝珠つまみの付くと思われる蓋（203）と，底部と体部の境に高台が付く坏（204・205・206）が出土している。時期は，奈良時代であろう。



第58図　Ｊ－9包含層出土遺物実測図⑤

まとめ

以上Ｇ－9・Ｈ－9・Ｉ－9・Ｊ－9の各包含層出土遺物を概略した結果をまとめると第2表になる。各グリッド各層ごとに時代幅はあるものの，おおまかな時期決定ができる。まず，5層以上は，古墳時代～中世の遺物が出土していることがわかる。第6層は，弥生時代～平安末，第7層は，古墳～奈良時代と，5・6層間，6・7層間に遺物の時期差がみられる。しかし，第1

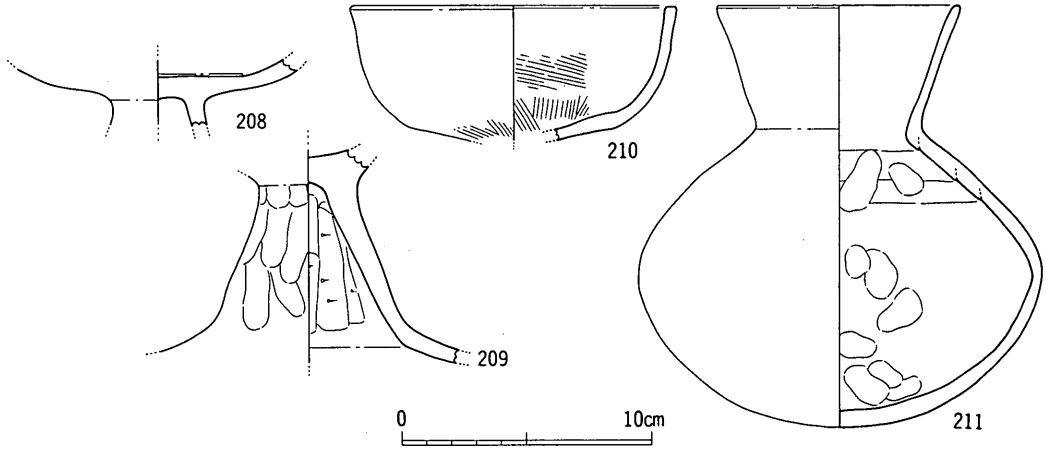
層から7層まで出土している須恵器の高台付坏身には，それほど時期差はなく，おそらく石田遺跡の谷部の包含層には，それほどの時期差はないように思われる。

②　F－12・第4層出土遺物　(第59図　208～211)

F－12の第4層より古墳時代の土師器が出土している。208～210は，高坏と思われる。209は裾部で大きく外方向に開き，筒部は，ややふくらみ加減である。調整は，外面に縦方向の指ナデが顕著に見られ，内面は，横方向のヘラケズリが施されている。210は，高坏の坏部と思われ，底部から体部にかけて直角近く内彎し，口縁端部は，上部に面を作る。調整は，体部内面に横方向のハケ目調整があり，見込み部には，中心から放射状にハケ目調整が施されている。また，底部外面もハケ目調整されている。211は，直口壺である。体部は，ソロバン状で，最大径が中央にあり，口頸部は直線的に外方に延びる。外面は，ミガキ調整されており，内面は，体部内面下半に指頭痕が施され，上半には，粘土紐の継ぎ目が顕著に見られる。以上の4点は，F－12第4層からまとまって出土しているため，包含層ではあるが，一時期の一括資料としての可能性は高い。時期は，布留式期と思われる。

第2表　各層遺物時代幅一覧表

グリッド名 / 層名	G－9	H－9	I－9	J－9
第1層				奈良時代
第2層				
第3層			奈良時代	
第4層				
第5層	奈良時代	奈良時代～中世	奈良時代～中世（白磁出土）	
第6層		古墳時代～中世（緑釉陶器出土）	奈良時代～中世	平安時代後期～中世
第7層		弥生時代～平安時代後期	古墳時代～平安時代後期	奈良時代
第8層			古墳時代～奈良時代	



第59図　F－12第4層出土遺物実測図

③ 土師質土器 （第60図 212～221）

当遺跡出土の土師質土器としては，土鍋・土釜・擂鉢・こね鉢がある。212・213は，土鍋である。頸部は「く」の字に曲り，口縁部は，端部に面を持ち終わるもの（212）と，端部を外方に少しつまみ出すもの（213）とに分かれる。214は擂鉢である。口縁部を内彎させており，内面では，凹部下より縦方向の条溝が刻まれている。215・216は，土釜である。しっかりした鍔の付くもの（215）と，退化しているもの（216）がある。外面には，煤の付着が著しい。217～221はこね鉢である。体部は，直線的に延び，口縁を扁平に肥厚させたもので，内面に条溝を有さない。

④ 備前焼 （第61図）

222～228は，備前焼である。222～225は，擂鉢で，口縁端部を上下に拡張するもの（225）と，拡張しないもの（222・223・224）とがある。これは，内面においての条溝とも関連して，時期差につながるものと思われる。内面の条溝は，重ねあわせるもの（225）と，単位ごとに分かれるもの（222・223・224）があり，その条溝も，上端を指ナデによってきれいに消すもの（222・223）と，そうでないもの（224・225）があり，施行具も鋭利なもの（224・225）と，そうでないもの（222・223）がある。226は，直口鉢で，体部は，やや内傾し外反気味に立ち上がる。端部は，丸くおさめられている。体部外面には，窯印がある。227は，甕と思われる。外方に延びた体部が口縁で少し内方向に曲り，端部を左右に拡張し，扁平に造る。228は，甕か壺の底部であろう。

⑤ 陶 器 （第61図）

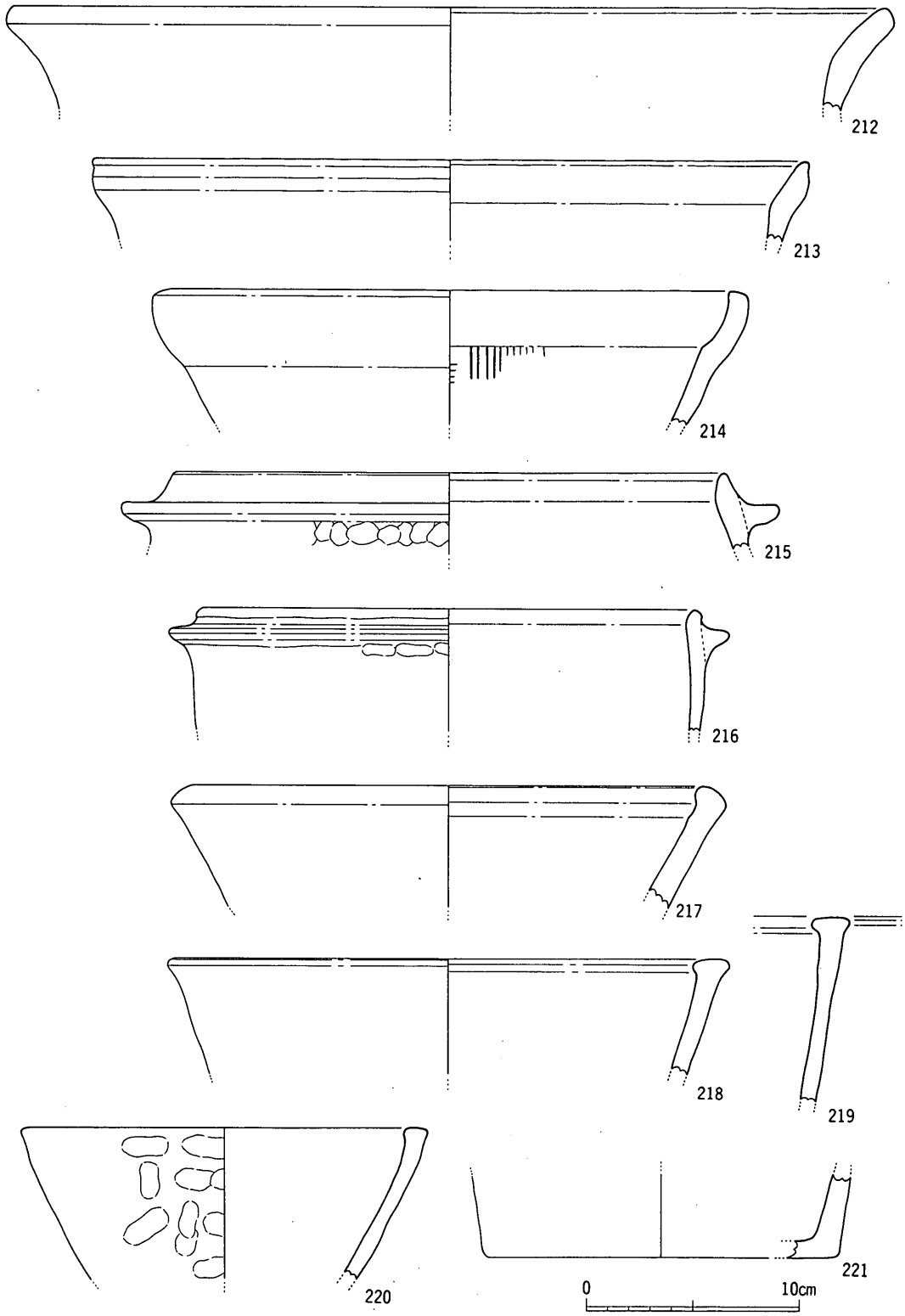
229～232は，陶器である。229は，小皿で，底部を糸切りされ，体部は，直線的に外方に延び，端部は，上方に短く屈曲させる。230も小皿と思われる。231は，甕の底部と思われる。外面だけに暗こげ茶色の釉をかけている。232は，甕の口縁と思われ，直角に屈曲する。

⑥ 肥前系陶磁器（染付，陶胎染付） （第61図 233～241）

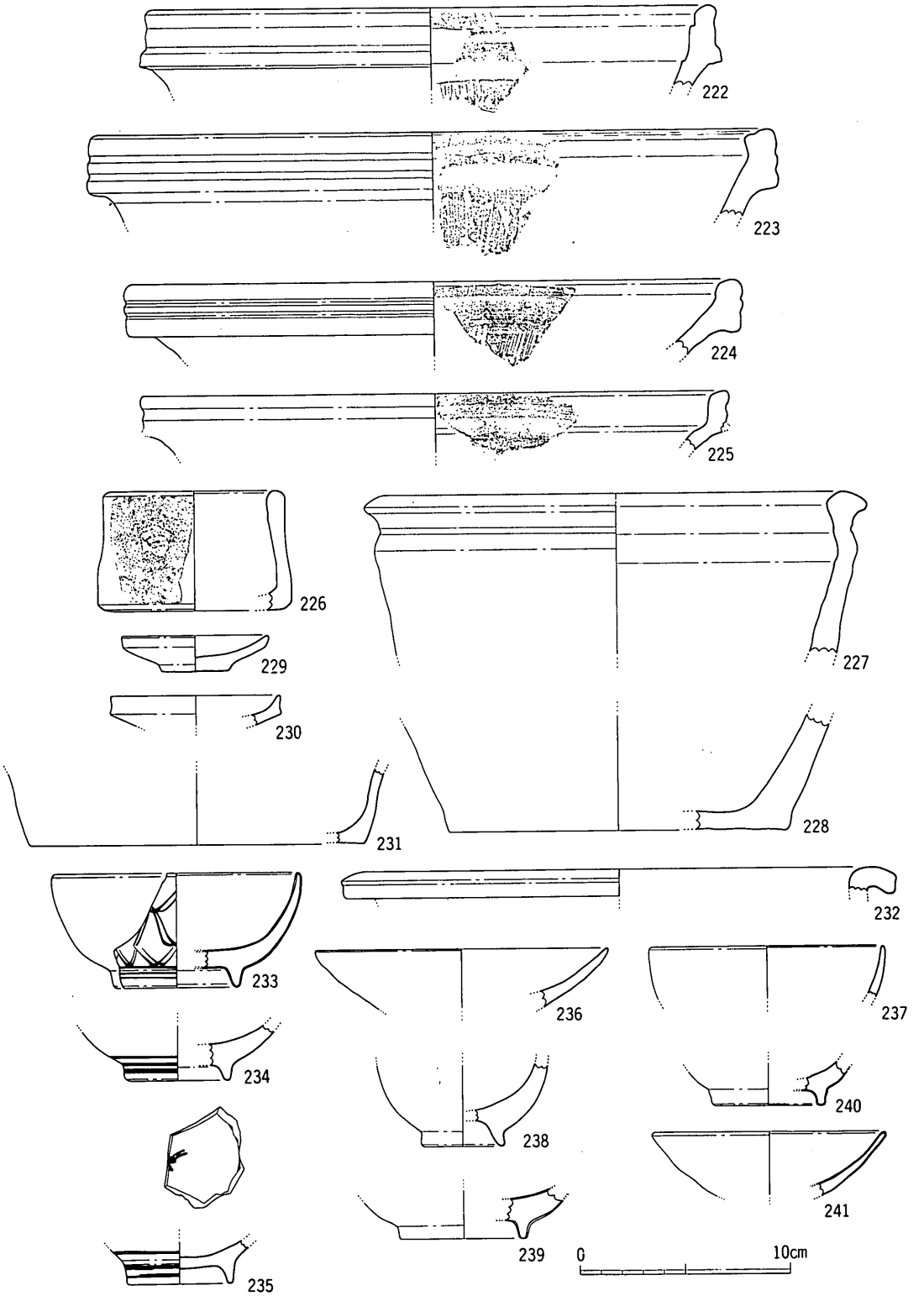
233～236は，肥前の染付である。233は，二重網目文の碗である。内外面には，青味を帯びた白色釉がかかっているが，高台端部には，かかっていない。台との付着を避けるためか高台端部に砂粒が付着している。呉須の発色は悪く，暗青色を呈する。時期は，18世紀頃と思われる。234は，染付碗である。内面見込み部の釉を掻き取っており，高台端部には，釉がかかっていない。釉は青味がかった白色釉である。235は，染付碗で，内面見込み部に文様が描かれている。高台は高く，青味がかった白色釉は，高台端部を除く全面にかかっている。236は，器壁の釉が，かなり摩耗している。呉須の発色も悪く，暗青色を呈する。237・239は，肥前の陶胎染付である。カン入が著しいものばかりで，全て碗と思われる。240は，磁器皿と思われる。全面に灰色釉がかかっている。胎土も灰色を呈している。241は，陶器の皿と思われる。陶器の胎土をしており，緑青色の釉が内面と外面上部にかかっている。これらの磁器は，全て近世以降のものである。

⑦ 緑釉陶器 （第62図）

242～245は，緑釉陶器である。242・243は，皿である。突出した高台を持ち，体部は，やや内



第60図　包含層出土遺物実測図（土師質土器）



第61図　包含層出土遺物実測図（陶磁器）

彎気味に口縁に至り，端部は，外反している。244は，器高が高いことから埦と思われる。全て器壁は摩滅しており，残りは悪いが，胎土は砂粒を含まない精良なもので軟質に焼成されている。釉は，淡緑色と濃緑色を呈している。また，底部にヘラ記号と思われる線刻があるもの（245）もある。時期は，平安時代と思われる。

⑧ 灰釉陶器 （第62図）

246は，灰釉陶器である。体部は，やや内彎気味に立ち上がり，口縁は，少し外反する。胎土は，緻密で，灰色を呈し，内外面に灰釉がかかっている。時期は，平安時代頃と思われる。

⑨ 輸入磁器 （第62図）

石田遺跡出土の輸入磁器は少なく，実測可能な遺物は，1点だけであった。247は，白磁碗底部である。内面だけに白釉がかかっている。太宰府編年Ⅳ類－Ⅰである。

⑩ 須恵器 （第62図 248～252）

248・249は，東播系のこね鉢である。どちらも口縁端部を上下に拡張している。時期は，13世紀末～14世紀頃のものと思われる。250・251・252は，突出した高台を持つ埦で，内面は，一段低く造られている。体部は，直線的に立ち上がるもの（252）と，やや内彎気味に立ち上がるもの（250・251）がある。時期は，平安時代頃と思われる。

⑪ カマド （第62図）

253は，カマドと思われる。おそらく，焚口部の破片と思われる。表面は，赤色化しており，かなり使用されていたものと思われる。

⑫ 土 錘 （第62図）

254は，土錘である。紡錘状の土錘で，中央に孔があけられている。

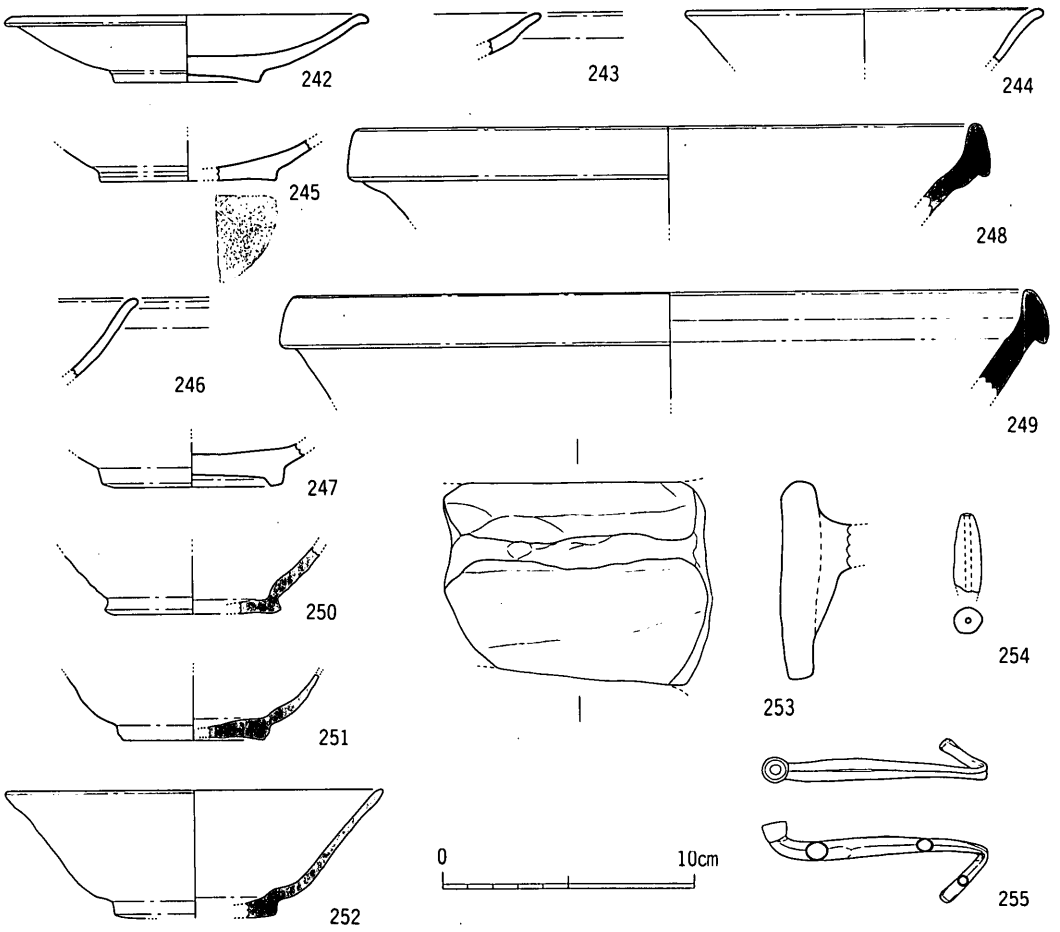
⑬ キセル （第62図）

255は，全長11.2cmのキセルである。火皿から吸口先端までを一枚の銅板で作ったもので，吸口をややふくらましている。

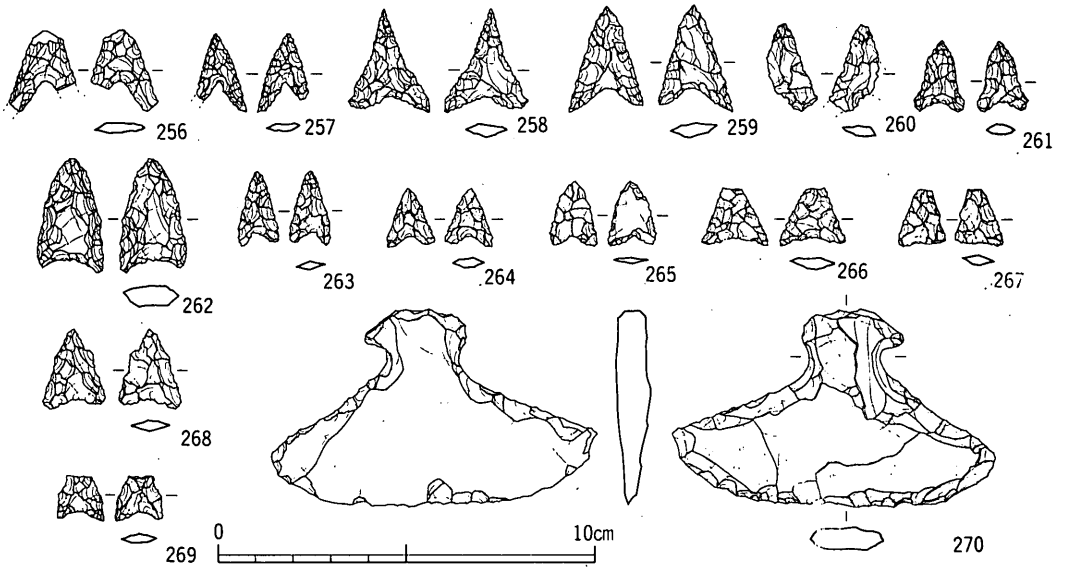
⑭ 石製品 （第63図 267～270）

256～269は，サヌカイト製の石鏃である。267は，平基無茎式，その他は全て凹基無茎式である。細部において各形状で分けると，全体が二等辺三角形を呈するもの（256・257・258・259・260・262・263・264・265・267・268・269），三角形を呈するもの（266），ロケット型を呈するもの（261）に分けられ，側辺においても，直線的になるもの（256・259・260・263・264・266・267・268・269），やや内彎するもの（258），やや外彎するもの（257・262・265），また，基部のくりこみも，V字状を呈するもの（256・257・265），U字状を呈するもの（258・259・261・262・263・264・266・268・269）がある。

270は，サヌカイト製横長石匙である。刃部は，素材の主要剝離側からの加撃により刃縁を形成している。表面には自然面を残し，上部にはくりこみを作り基部としている。



第62図　包含層出土遺物実測図



第63図　包含層出土遺物実測図（石製品）

4．ま と め

石田遺跡は，当初，古墳時代の遺跡と思われていたが，調査の結果，主として古代末～中世にかけての集落跡であることが判明した。しかし，古墳時代の遺構も確認されていることから，古墳時代の集落跡を全て否定するまでには至っていない。

ここでは，三豊平野における低丘陵地上の遺構の変遷を各時代ごとに概観することで，石田遺跡のまとめにかえたい。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は，当遺跡の微地形を復原することによって得られた尾根の西側縁部で，溝状遺構・土坑が確認されただけであった。これらの遺構は，溝については，範囲外に延び，土坑については，単独で出土していることから，全体像は不明瞭で，遺構の広がりを把握するまでには至らなかった。しかし，この低丘陵地上には，弥生時代後期の遺跡が点在しており，出土遺物の中にも弥生土器・石製品が少なからず含まれていることは，弥生時代の遺構の存在を窺わせるものである。

古墳時代後期

古墳時代の遺構は，尾根の東側縁部で，掘立柱建物３棟が確認された。これらは，60cm前後の柱穴を持つ建物で，一つのまとまりのある建物配置を成している。しかし，ＳＢ10が範囲外へ延びていることもあり，全体の建物構成については不明である。

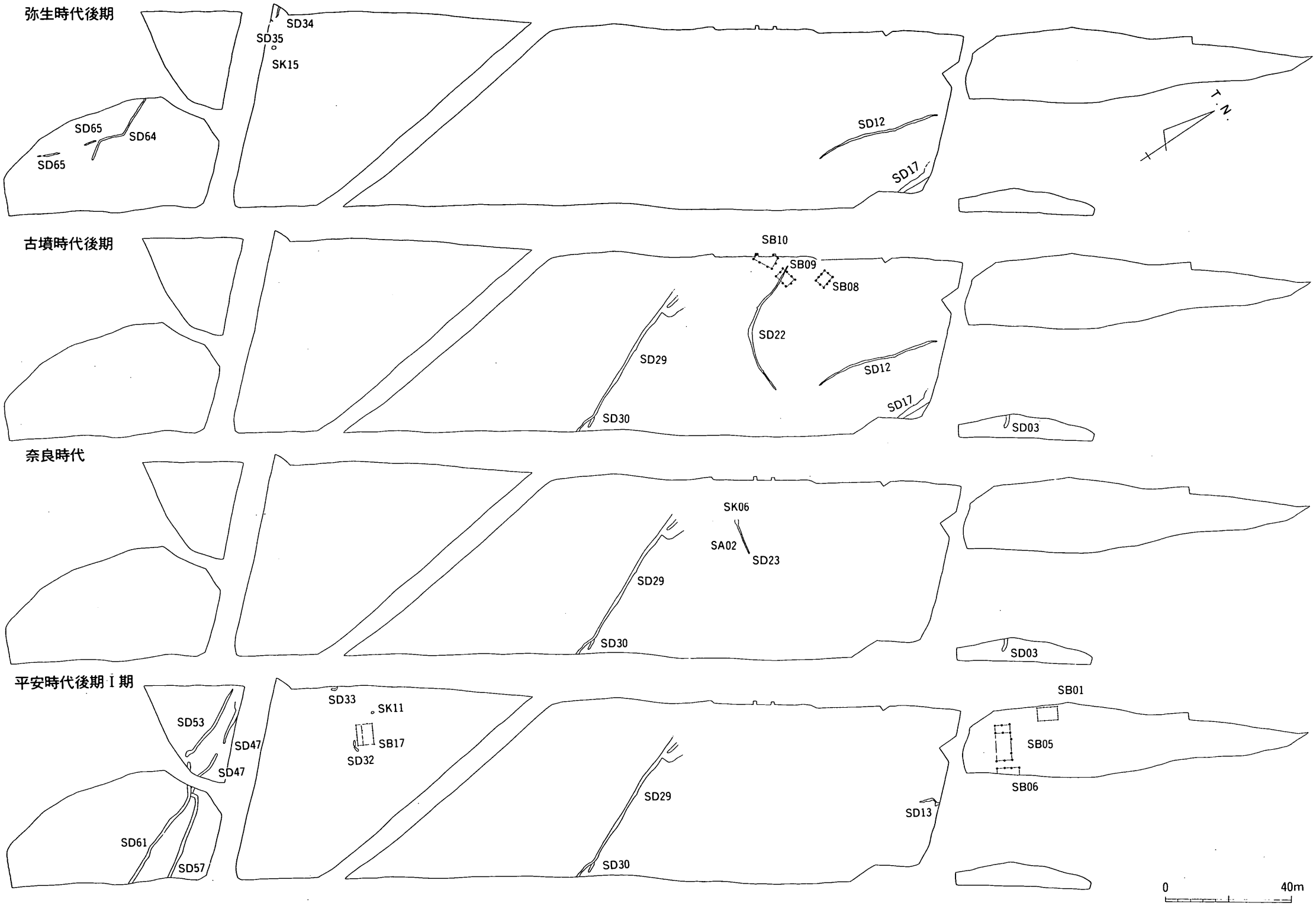
古墳時代後期の掘立柱建物は，この三豊平野では，高瀬町・大門遺跡で一棟（２間×４間・柱穴径約60cm，柱間長約172.0cm），柞田八丁遺跡で一棟（３間×３間・柱穴径約65.4cm，柱間長約162.5cm）検出されているだけである。しかしこれらは，竪穴住居と共に検出されており，当遺跡で検出された３棟とは，様相的に異なっている。この規格性のある掘立柱建物が検出されたことは，母神山古墳群を形成した人々の居住域の一端を垣間見たと同時に，今後，三豊平野における古墳時代の集落跡を考えていくにあたり貴重な資料となった。

奈良時代

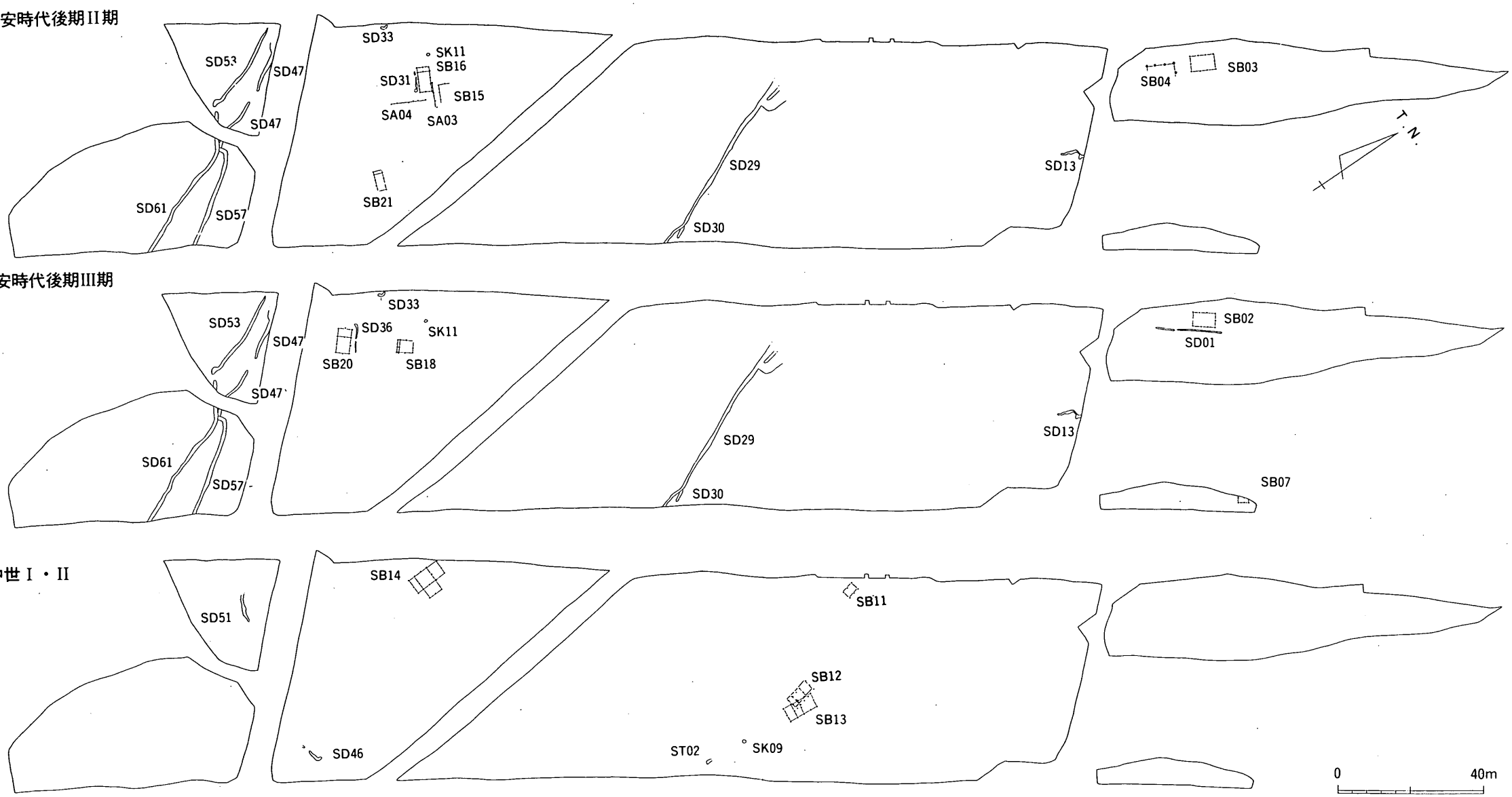
奈良時代の遺構は，尾根の東側縁部で土坑，溝状遺構及び柵列が検出された。これらは，ＳＤ23がＳＫ06の排水施設として機能していたと思われ，柵は，その排水施設を隠すために造られたものではないかという程度で，性格等については不明な点が多い。

平安時代後期・Ⅰ期

平安時代後期・Ⅰ期の遺構は，掘立柱建物４棟・溝状遺構である。掘立柱建物は，中央部が削平されていることもあり，尾根の東西縁部で検出されている。60cm前後の柱穴を持つ大型建物（ＳＢ05・06）は，谷部に東半がかかることから，平安時代後期には谷部の堆積が進んでいたことがわかる。



第64図　石田遺跡遺構変遷図(1)



第65図　石田遺跡遺構変遷図(2)

平安時代後期・II期

平安時代後期・II期の遺構は，掘立柱建物5棟と溝状遺構が検出されている。柱穴掘り方に柱痕を残し，柵列を伴う2棟が近接してある。

平安時代後期・III期

平安時代後期・III期の遺構は，掘立柱建物4棟がある。また，古墳時代から平安時代後期までの遺物を多量に含んだ溝状遺構が，尾根の西側で検出されている。遺構全体図では，尾根部において，この溝より西側全域は，削平を受けて遺構はないが，東側でこの時代に伴う遺構が検出されていないということから，居住域と非居住域を画する可能性も想定できる。尾根の西側では，尾根筋と平行するように溝が数本走っており，これらは，遺物量が少ないことから，水田施設に伴う溝かと思われる。

中世－I・II

中世の遺構としては，掘立柱建物5棟・土坑・溝状遺構などがあり，出土遺物により鎌倉時代と思われる。SB12とSB13が重なり合っているために，ここでは，中世を2つに分けた。しかし，その前後関係は，切り合いからも出土遺物からも確認できなかった。

以上，石田遺跡で検出された掘立柱建物を5時代8期に細分した。それによると，弥生時代～奈良時代までの遺構の立地は，尾根部に居住域があり，谷部は，生産域にされていた可能性があり，平安時代後期以降では，谷部もしだいに居住域として使用されていたことが，遺構の検出状況からわかる。

ところで，平安時代後期の3区分と中世2区分については，試行としての域を出ず，この細分が遺跡の実状に合致するものか否かは，確証を得ていない。そのため，柱穴間の切り合っているものについては，前後関係がつかめるが，もう一つの決め手である主軸の方向性については，若干問題点が残った。それは，尾根上における掘立柱建物に，主軸方向のまとまりがあるのかという点で，地形に左右された建物があるのではないかということである。また，非常に残念なのは，調査範囲の中心部を後世の攪乱によって破壊されており，石田遺跡の全体像がつかめなかったことである。

しかし，弥生時代から中世に至る間の居住域は，遺構の検出状況から尾根部にあったと思われ，谷部は，生産域あるいは湿地であったことがわかった。

第3表　掘立柱建物一覧表（1）

古墳時代後期　　単位（cm）

項目 / 遺構番号	規模(梁間×桁行) 大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
SB08	2間×3間	N16.5°W	88	54	206	113	しっかりした掘り方を持つ建物である。
	348×435		69(平均)		156.6(平均)		
SB09	2間×3間	N9.5°W	70	45	200	143	しっかりした掘り方を持つ建物である。
	350×514		57.8		172.8		
SB10	2間×3間	N26.3°W	70	52	285	171	以上3棟は柱穴の大きさ，埋土にまとまりをみせている。
	430×668		59.6		219.6		

平安時代後期　I期

SB01	2間×3間	N30°E	44	21	229	203	
	416×669		36.4		217		
SB05	2間×5間	N31°E	121	68	275	220	大きい掘り方を持つ巨大な建物である。
	495×1,137		78		233.2		
SB06	(1)間×3間	N31°E	66	44	244	230	SB05に伴う建物であろうが半分以上は範囲外にあると思われる。
	(176)×712		54.6		237.4		
※1 SB17	2間×3間	N28.5°E	40	32	184	148	南側に桁行4間の庇が付く。
					168		
	166×330		36.6		240	192	南側に雨落ち溝を伴う。
					220		

平安時代後期　II期

SB03	2間×3間	N26°E	66	37	241	195	
	426×677		51.8		220.6		
SB04	(1)間×3間	N27.5°E	62	48	268	242	後世の削平により東半分がなくなっている。
	(268)×752		54.4		255		
SB15	(2)間×(3)間	N25°E	38	37	201	186	南側に柵を伴う。
	(330)×(497)		37.6		195.6		
SB16	2間×3間	N26.3°E	58	44	193	164	西側に庇が付き，東側には柵を伴う建物である。南側に雨落ち溝ちを伴う。
	338×553		52		176.6		
※1 SB21	1間×3間	N21.3°E	28	24	244		梁間と桁行の間隔の違う建物である。西側に庇が付く。
					244		
	244×482		26.2		166	155	
					160.6		

第3表　掘立柱建物一覧表（2）

平安時代後期　　III期　　単位（cm）

遺構番号＼項目	規模（梁間×桁行）大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
※2 SB02	2間×2＋1間	N37.9°E	44	28	203	187	東側に雨落ち溝を伴う。
	388×390＋242		32.6		194.5		
SB07	2間×(2)間	N36.8°E	32	28	170	128	西側半分は不明であるが総柱の可能性がある。
	156×(322)		29		150		
SB18	2間×2間	N40.6°E	42	30	206	135	南側に庇が付く。
	341×378		35.2		179.8		
※1 SB20	2間×3間	N41.5°E	44	32	197	186	北側に雨落ち溝を伴う。
					191.6		
	383×699		36.8		248	214	
					233		

中　世　－　I

SB13	2間×4間	N11°E	48	28	240	182	
	402×913		36.8		214.6		
※2 SB14	2間×2＋1間	N1°E	70	32	248	184	南側と東側に庇が付く。
	432×411＋306		46.6		210.8		

中　世　－　II

※1 SB11	1間×2間	N14°W	35	16	252		梁間と桁行の間隔が違う建物である。
					252		
	252×345		22.6		181	164	
					172.6		
※2 SB12	2間×2＋1間	N13°W	56	22	190	148	
	338×316＋280		33		163.6		
SB19	(1)×2間	N20°W	28	24	170	168	
	(84)×338		26.6		169		

※1　梁間と桁行の柱間長の違う建物で，上段を梁間の柱間長及び平均，下段を桁行の柱間長及び平均とした。

※2　桁行において，柱間が明らかに異なるものがあり，主屋に対しての付属施設か間取りの違いによるものか不明であるのでここでは区別した。

（長砂古遺跡・柞田八丁遺跡も同様である）

第4表　検出遺構一覧表（1）

溝状遺構

SD	グリッド	大きさ(cm) 天幅	深さ	遺物	時期	備考
01	E－9	38.0	10.6	須恵器	平安時代後期	SB02に伴う溝である。谷筋に平行して流れる。
02	E－9	36.0	8.7	土師器		
03	G－11	112.0	30.5	土師器，須恵器	古墳時代～奈良時代	谷筋の東側から流れ込む。
04	G－11	70.0	30.5			
05	G－11	29.0	5.5	土師器，須恵器瓦片	近世以降	谷筋の東側から流れ込む。
06	F－8	166.0	8.7	土師器，須恵器		天幅に比べると深さのない溝である。
07	G-8,9	100.0	41.2	土師器		谷筋に流れ込む。
08	G-8,9	74.0	12.9	土師器		削平を受けており，残りが悪い。谷筋に流れ込む。
09	G－9	58.0	13.9	土師器		削平を受けており，残りが悪い。
10	G-8,9	64.0	10.9	土師器，須恵器		削平を受けており，残りが悪い。谷筋に流れ込む。
11	G－9	30.0	5.2			SD10と同じ流れであると思われる。
12	G-9,H-9 I-9	76.0	15.1	土師器，須恵器		谷筋の中央に流れる溝である。
13	G－9	64.0	11.9	土師器	平安時代後期	谷筋を流れる溝である。窪みより土器が出土している。
14	H－9	68.0	4.5	土師器，須恵器		
15	H－9	(102.0)	19.0	土師器		ちょうど畦畔下にあり，全体は不明である。
16	H－9	198.0	16.8	土師器		
17	H－10	180.0	15.0	弥生土器土師器，須恵器	弥生時代～古墳時代	底が一定してなく，いく条かの流れがある。北半では集石がある。
18	I－9	40.0	7.1	土師器，須恵器		谷筋を流れる溝である。
19	I－9	40.0	7.1	土師器		SD18と同じ流れであると思われる。
20	I－8	16.0	3.3			削平を受けており，ほとんど残っていない。谷筋と平行に流れる。
21	I－8	22.0	2.4			SD20と同様。SD20の続きの可能性有。
22	I-7,8	40.0	32.4	土師器，須恵器	古墳時代後期	谷筋と平行に流れていた溝がI－7南端でほぼ直角に曲がる。
23	I－7	38.0	25.2		奈良時代	天幅に比べると深く，配水施設として，機能していたと思われる。

第4表　検出遺構一覧表（2）

溝状遺構

SD	グリッド	大きさ(cm) 天幅	大きさ(cm) 深さ	遺物	時期	備考
24	K－8	78.0	9.3			削平を受けて，ほとんど残っていない。谷筋と平行に流れる。
25	K－8	46.0	6.2			SD24と同様。SD24の続きの可能性有。
26	K-7,L-7	13.0	7.8	土師器，須恵器 土師質土器		現在の畦に伴う溝と思われる。
27	L－7	48.0	5.3	土師器		調査区外へ延びる。
28	L－7	21.0	6.9			削平を受けており，残りが悪い。
29	J-6,K-6,7 L-7	128.0	19.5	土師器，須恵器 黒色土器,石,鉄	古墳時代後期～平安時代後期	削平を受けており，残りが悪い。J－7で分流する。
30	L－7	72.0	2.7	土師器，須恵器	〃	SD29と切り合ってはいるが一支流であると思われる。
31	N－3	43.0	8.7		平安時代後期	SB16の雨落ち溝である。南側にめぐる。
32	N－3	37.0	4.1		平安時代後期	SB17の雨落ち溝である。南側・南東隅にめぐる。
33	N－2	62.0	6.7	土師器，黒色土器	平安時代後期	
34	O－2	40.0	5.0		弥生時代	削平されており，残りが悪い。全様不明。
35	O－2	20.0	2.3	土師器	弥生時代	削平されており，残りが悪い。全様不明。
36	N-3,O-3	35.0	3.7	土師器，炭化物 黒色土器	平安時代後期	SB20の雨落ち溝である。東側，北東隅にめぐる。
37	N-3,O-3	32.0	6.1	土師器		SD36に切られている。
38	N-3,O-3	64.0	5.1	土師器，須恵器		SD36に切られている。
39	N-3,O-3	34.0	4.9	土師器		
40	O－3	(34.0)	18.8	土師器，須恵器 陶胎染付，瓦	近世以降	現在の水路とほぼ平行する。
41	P－3	78.0	7.7			
42	O-4,P-4	233.0	33.7	土師器，須恵器 備前焼	近世以降	
43	P－4	44.0	3.9			残りが悪い。
44	P－4	63.0	8.2			残りが悪い。
45	P－4	54.0	19.0	土師器，須恵器		東側で土坑状に広がる。全様は不明。
46	P－4	79.0	7.1	土師器，瓦器	中世	残りが悪い。

第4表　検出遺構一覧表（3）

溝状遺構

SD	グリッド	大きさ(cm) 天幅	大きさ(cm) 深さ	遺物	時期	備考
47	O-2,P-2	62.0	10.9	土師器，須恵器	平安時代 後期	SD56に続く。
48	P－2	42.0	10.7			
49	P－2	171.0	4.6	土師器		埋土が砂である。
50	P－2	46.0	5.3	土師器，須恵器		
51	P－2	76.0	8.8	土師器，須恵器	中世	
52	P－2	54.0	8.3			SD51に切られている。
53	O-2,P-2	69.0	9.6	土師器	平安時代 後期	SD61に続く。
54	P－2	30.0	5.7	土師器		
55	Q－3	22.0	2.9			SD57の支流。
56	Q－3	23.0	3.5			SD57の支流。
57	Q-3,R-4	86.0	18.6	土師器，須恵器	平安時代 後期	西側谷筋と平行に流れる。
58	Q-3,R-3 S-2	79.0	19.1	弥生土器，土師器		西側谷筋に流れ込む。
59	R-3,4	57.0	8.3			SD60の分流である。
60	R－3	66.0	11.2			SD58の分流である。 SD58,59,60は企画されている可能性有。
61	Q-2,3 R－3	108.0	28.2	土師器，須恵器 黒色土器	平安時代 後期	西側谷筋と平行に流れる。 SD47,53,57と同一時期の溝である。
62	Q－2	28.0	2.1			SD63に切られている。
63	Q-2,R-3	127.0	28.1			現在の畦畔に伴う。
64	Q-2,R-2	43.0	10.8	弥生土器	弥生時代 後期	不自然な曲がりかたをしている。
65	R-2,S-2	48.0	8.6	弥生土器	弥生時代 後期	SD64の支流。

第4表　検出遺構一覧表（4）

土　坑

SK	グリッド	形　状（cm）	遺　物	時　期	備　考
01	G－9	不定形 幅110.0× 68.0深さ 6.4	土師器		
02	G－8	不定形 幅224.0×179.0深さ18.4	土師質土器		
03	G－7	円　形 径241.0 深さ26.4	土師器，須恵器		かなりの削平のためか大きさのわりに浅い。
04	H－7	不定形 幅254.0×212.0深さ28.5			
05	H－8	不定形 幅220.0×136.0深さ18.9	焼土・炭化物が多量に出土	不明	底は2段になっており，全体に壁面が焼土化している。
06	I－7	楕円形 長185.0短124.0深さ43.1	須恵器，布目の瓦	奈良時代	
07	J－7	楕円形 長126.0短 77.0深さ14.3	土師器		
08	K－7	不定形 幅226.0×122.0深さ11.8	土師器，須恵器		
09	K－7	円　形 径100.0 深さ74.4	須恵器	中世	
10	L－7	不定形 幅(280.0)×112.0深さ4.8	土師器		削平により残りが悪い。
11	N－3	楕円形 長 91.0短 68.0深さ 5.2	黒色土器A類 土師器	平安時代	削平されているにもかかわらず土器の出土量が多い。
12	O－4	方　形 長242.0短 23.9深さ 7.0			
13	N－3	円　形 径126.0 深さ(64.6)	土師器，須恵器 擂鉢，土師質土器	近世以降	近世の井戸と思われる。 湧水のため底まで掘れず。
14	O－3	円　形 径 88.0 深さ 7.6	土師器，須恵器 焼木		柵列SA06を伴う。
15	O－2	楕円形 長135.0短112.0深さ33.9	弥生土器 土師器	弥生時代	
16	P－2	楕円形 長 84.0短 70.0深さ 3.5	土師器		土坑内にこぶし大の石が多量に出土。
17	P－2	楕円形 長 56.0短 34.0深さ 7.9	土師器		
18	P－2	円　形 径 82.0 深さ19.9	土師器		

第4表　検出遺構一覧表（5）

土壙墓

ST	グリッド	主　軸	大きさ(cm) 長辺(長さ)	短辺(幅) 最長	短辺(幅) 最短	遺物	備考
01	H－7	S4.1°W	186.5	82.0	67.0	土師器	主軸はほぼ,南北をとる。頭位は南向きをとる。
02	L－7	S0.5°W	182.5	86.0	75.0	土師器	唯一遺物の出土した土壙墓である。主軸はほぼ南北をとる．頭位は南向きをとる。
03	N－3	S62°W	155.0	78.0	75.0		頭位は，南向きをとる。
04	N－4	S54°W	184.0	62.0			頭位は，南向きをとる。
05	S－3	N38°E	195.0	67.0	44.0	土師器，須恵器，黒色土器	頭位を，北向きにとる。

不明遺構

SX	グリッド	形　状(cm)	遺　物	時　期	備　考
01	F－8	隅丸方形 幅138　×134　深さ94.9			素掘りの水溜め。
02	F－8	円　形 径142　深さ77.7			素掘りの水溜め。
03	I－8	不定形 幅130.0×　42　深さ　7.2	土師器		

第5表　遺物観察一覧表

参考資料（山本町菅生神社所蔵）

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
5	17	－1	須恵器坏蓋	15.6			堅緻	良好	内面　濁灰色 外面　青灰色	口縁端部は下方へ短く屈曲する。 端部外面にわずかに凹線を施す。 内面天上部に「生？」と線刻する。

SK15

7	－	－2	弥生土器甕	13.7			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	乳褐色	口縁部外方に面を持つ。 全体に摩滅が著しい。
7	－	－3	弥生土器底部			底径 5.1	0.5～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良	暗茶黄色	しっかりした平底を呈する。 全体に摩滅が著しい。
7	－	－4	〃			底径 3.1	0.5～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	茶褐色	小さい平底を有する。 全体に摩滅が著しい。
7	18	－5	〃			底径 7.8	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面　乳黄色 内面　黒灰色	平底を有し体部は内彎している。 内面は，ヘラケズリのちハケ目が施されている。
7	18	－6	〃			底径 8.7	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面　乳白色 内面　淡褐黄色	しっかりした底部を持ち，体部は外反しながら立ち上がる。 全体に摩滅が著しい。

SD35

7	－	－7	弥生土器壺	17.2			0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	濁茶黄色	頸部は「く」の字形に曲り，口縁は上方に折れ曲る2重口縁である。 口縁端部は丸くおさめられている。 全面ヨコナデ調整されている。
7	－	－8	弥生土器鉢	19.0			0.5～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	濁茶黄色	内彎する体部と内側に折れ曲る口縁端部を持つ。 内外面にハケ目調整を施す。

SD22

11	－	－9	須恵器坏身	12.4	3.4		堅緻	良好	淡青灰色	小型化したもので，立ち上がりも受け部もかなり萎小化している。 内面をヨコナデ，外面底部はヘラケズリされている。(右まわり)

SD23

13	－	－10	須恵器坏底部			8.0	微砂粒を含む。	良好	淡灰色	底部に垂直にしっかりした高台が付く。 全面ヨコナデ調整。

S B16

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
25	18	土師器坏	11.8	3.4	底径 7.0	0.2～1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	淡黄褐色	底部はヘラ切りされている。体部は，直線的に外方へ延び口縁端部は丸くおさめる。 全体にヨコナデ調整である。
−11									

S B02

27	18	黒色土器埦（A類）	15.0			1㎜以下の砂粒を含む。	良	内面 黒色 外面 褐茶色	直線的に延びる口縁を持つ。
−12									
27	18	〃			7.4	0.5㎜前後の砂粒を含む。	良	内面 黒色 外面 濁褐黄色	外方に強くふんばった高台を持つ。
−13									

S D36

33	18	土師器埦			6.2	0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗白乳色	底部は丸くつくられており，外方にふんばった高台が付く。 全体にヨコナデ調整されている。
−14									
33	−	土師器小皿	8.0	1.6		精良 金雲母を含む。	良	濁白乳色	底部はヘラ切りされており，体部との境を明確に持たず，体部はやや外反しながら口縁端部に至る。 ヨコナデ調整を施す。
−15									

S D13

33	−	須恵器坏身	5.1			微砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は直線的に外方へ延び口縁端部は，シャープな稜を持ち終る。
−16									
33	−	黒色土器埦			8.0	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	内面 黒色 外面 淡茶黄色	底部には高台が垂直に付く。 体部は，やや内彎しながら外方へ延びる。 調整不明。
−17									

S D53

33	−	土師器埦	13.2			微砂粒を含む。	良	暗茶黄色	やや内彎する体部を持ち，口縁端部は，シャープに終る。
−18									
33	−	黒色土器埦（A類）			5.3	精 良(密)	良	内面 黒色 外面 淡茶黄色	外方にふんばる高台が付く。 摩滅のため調整不明。
−19									
33	−	土師器坏			底径 8.1	精 良(密)	良	淡褐黄色	底部はヘラ切りされており，体部は外方へ直線的に延びる。 体部外面・内面はヨコナデ調整されている。
−20									

S D61

33	18	黒色土器埦（A類）	15.6	5.7	8.8	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	内面 黒色 外面 淡褐黄色	底部には，かなり萎小化した高台が付く。体部は，やや内彎しながら口縁に至り端部は丸くおさめられる。 内面ヨコナデのちミガキ調整。 外面ヨコナデ調整。
−21									

SK11

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
35	18	土師器坏	12.1	3.0	底径 7.8	精 良(密)	良	褐黄色	体部は直線的に外方に延び，口縁端部は，シャープな稜を持ち終る。全面摩滅しており，調整不明。
−22									
35	−	〃			底径 7.6	0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡褐黄色	底部はヘラ切りされている。体部は直線的に外方へ延びる。
−23									
35	−	〃			底径 6.9	0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良	淡褐黄色	底部はヘラ切りされている。全体に摩滅しており，調整不明。
−24									
35	18	黒色土器埦	15.7	6.4	6.9	精 良(密)	良 好	内面 黒色 外面 淡褐茶色	外方にしっかりふんばった高台を持つ。体部はやや内彎しながら外方へ延び口縁端部は丸くおさめる。内面ヘラミガキ調整。
−25									
35	18	〃	15.5	5.8	7.8	0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良 好	内面 黒色 外面 濁白乳色	かなり萎小化した高台を持つ。体部は内彎しながら，口縁端部に至り，丸くおさめる。内面は，タテ方向にヘラミガキされており，内面見込み部には，連続円形ヘラミガキが施されている。
−26									

SD29

37	19	弥生土器壺	14.1			0.5〜3㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	褐茶色	外反する頸部を持ち，口縁外方に面を持つ。
−27									
37	19	土師器小皿	8.7	1.9	底径 6.0	0.3〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	褐茶色	体部と底部の境ははっきりせず，体部は外方へ直線的に延び，口縁端部は丸くおさめられている。全面に摩滅しており，調整不明。
−28									
37	19	土師器坏	12.3	2.0	底径 9.1	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白色	底部はヘラ切りされている。体部は，やや内彎ぎみに外方に延びる。口縁端部は丸くおさめられている。
−29									
37	19	土師器坏底部			底径 7.1	精 良	不 良	暗茶色	全体に摩滅していて調整不明。体部は，直線的に外方へ延びる。
−30									
37	19	〃			底径 7.0	細砂粒を含む。	良	白灰色	底部はヘラ切りされており，体部は，外方へ直線的に延びる。調整不明。
−31									
37	19	〃			底径 6.6	精 良	不 良	暗白黄色	全体に摩滅しているため調整不明。体部はやや内彎しながら外方へ延びる。
−32									
37	19	〃	13.9	3.2	底径 7.5	0.3〜2㎜程度の砂粒を含む。	不 良	黒褐色	底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎しながら外方へ延び，口縁は外反する。体部はヨコナデ調整されている。
−33									
37	19	土師器埦			底径 7.1	微砂粒を含む。	良	淡褐色	底部は突出した平高台を有する。体部はやや内彎しながら外方へ延びる。調整不明。
−34									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
37	19	土師器坏			7.2	1㎜前後の砂粒を少量含む。	不良	濁茶黄色	低い高台を有する。 焼成不良の須恵器の可能性大。 全面摩滅していて調整不明。
−35									
37	19	黒色土器坩（A類）			7.9	精良(密)	良	淡褐茶色	内面のみ黒色化する。 高台は，やや外反しながら外方にふんばる形態をとる。
−36									
37	19	〃			6.7	精良(密)	良	茶白色	全面摩滅が著しく，調整は不明である。 高台は細く，外方にやや内彎しながらふんばる形態をとる。
−37									
37	−	須恵器坏身口縁部	11.1			1㎜前後の砂粒を含む。	良好	内面 灰色 外面 黄灰色	立ち上がりがかなり萎小化している。 外面には自然釉が付着する。 全面ヨコナデ調整を施す。
−38									
37	−	〃	14.0			堅緻	良好	青灰色	外方へ直線的に延びる体部を持ち，口縁はやや外反し端部は，丸くおさめられる。 全面ヨコナデ調整を施す。
−39									
37	−	〃	15.2			細砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は直線的に延び，口縁端部は，シャープに終わる。 全面ヨコナデ調整を施す。
−40									
37	−	〃	13.2			堅緻	良	淡灰色	底部と体部の境はほとんどない。 体部は直線的に外方に延び，口縁端部は，やや稜を作りながら丸くおさめる。 調整は不明。
−41									
37	−	須恵器坏身底部			底径 6.4	堅緻	良好	青灰色	底部はヘラ切りされており，体部は，やや内彎しながら外方に延びる。 全面ヨコナデ調整を施す。
−42									
37	−	〃			底径 6.8	堅緻	良好	暗青灰色	底部はヘラ切りされており，体部は，直線的に外方に延びる。 全面ヨコナデ調整を施す。
−43									
37	−	〃			底径 6.9	細砂粒を多量に含む。	良好	青灰色	底部はヘラ切りされ，体部は直線的に外方へ延びる。 全面ヨコナデ調整を施す。
−44									
37	−	須恵器坏蓋				細砂粒を含む。	良好	暗灰色	円錐状のつまみが付く。 全面ヨコナデ調整を施す。
−45									
37	20	須恵器底部			8.0	0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗青灰色	体部と底部の境に外方へふんばる高台が付く。 全面ヨコナデ調整を施す。
−46									
37	20	〃			8.5	堅緻	良好	青灰色	体部と底部の境に下方へ延びる高台が付く。 全面ヨコナデ調整されている。
−47									
37	20	〃			12.0	堅緻	良好	暗青灰色	高台は，体部と底部の境に付き外方へふんばる。 全面ヨコナデ調整を施す。
−48									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
37	20	須恵器			11.9	0.5～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	高台は体部と底部の境に，垂直につく。 全面ヨコナデ調整を施す。
−49		底部							
37	20	〃			15.1	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗青灰色	底部内面は，指頭痕が施されている。 外方へふんばった高台を持つ。 全面ヨコナデ調整を施す。
−50									
37	20	〃			8.8	堅緻	良好	青灰色	高台外方をつまみ出している。 高台は体部と底部の境よりやや内側に付く。 全面ヨコナデ調整を施す。
−51									
37	20	〃			9.1	堅緻 1～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	内面 青灰色 外面 黒灰色	体部と底部の境に外方へふんばる高台が付く。 全面ヨコナデ調整を施す。
−52									
37	−	〃			13.4	0.5～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	高台端部はつまみだされ，外方に延びる。 体部に比べると底部はうすい。 全面ヨコナデ調整を施す。
−53									
37	−	〃			底径 11.1	堅緻	良好	暗灰色	全面ヨコナデ調整を施す。
−54									
37	19	須恵器甕	20.8			堅緻	良好	内面 灰色 外面 暗青灰色	外方へ延びる頸部を持ち，口縁部は外反する。 頸部外面はタタキのちヨコナデ調整している。
−55									

SD29

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			石材	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			長さ	幅	厚さ			
38	21	敲き石	(11.3)	6.0	3.7	砂岩 (粒子が細かい)	暗灰色	3側面を打面として使用している。 断面は楕円形を呈する。
−56								
38	21	砥石	(10.1)	6.5	5.5	砂岩	灰茶白色	上面と左側面を研ぎ面として使用している。 下半分は欠損している。 断面は方形を呈する。
−57								
38	21	〃	(17.3)	7.9	4.9	〃	〃	上面と下面を研ぎ面として使用している。 下半分は欠損している。 断面は方形を呈する。
−58								
38	−	〃	(8.0)	(4.0)	(3.8)	〃	黄白色	上面を研ぎ面として使用している。 左半分，下半分は，欠損している。 断面は不明。
−59								

SD29

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			長さ	幅	厚さ				
38	−	瓦	(6.0)	(12.6)	1.7	精良	良	淡黒黄色	外面に縄目のタタキ痕がある。 内面は不明。
−60									

ＳＢ13

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
40	－	－61	土師器坏	11.0	2.9	底径 7.1	0.5～1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	淡褐黄色	底部はヘラ切されており，体部は直線的に外方へ延びる。 全面ヨコナデ調整されている。
40	－	－62	土師器坏	11.3	3.0		0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡褐色	底部はヘラケズリさており，体部との境がはっきりしない。体部はやや内彎しながら外方へ延び，端部は丸くおさめる。 全面ヨコナデ調整されている。

ＳＫ09

45	22	－63	須恵質土器 こね鉢	27.5			0.2～1㎜程度の砂粒を多量に含む。	良好	灰色	体部は直線的に延び，口縁は上下に肥厚している。 体部外面にはヨコナデ痕が明瞭に確認できる。
45	22	－64	土師質土器 土鍋	34.0			1㎜前後の砂粒を含む。	良	淡黄褐色	体部は「く」の字形にまがり，口縁端部になる。 外面にスス付着。
45	22	－65	〃	43.8			1～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	暗褐黄色	体部は，やや外反しながら，口縁部に至る。

柱穴出土遺物

46	－	－66	須恵器坏蓋	12.4			0.5㎜程度の砂粒を含む。	良好	灰色	天井部と体部に境がなく，口縁は外反する。 全面ヨコナデ調整されている。
46	－	－67	弥生土器壺	17.0			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗褐茶色	「く」の字に曲る頸部を持ち，口縁端部は上面に凹線を施す。 体部内外面には指頭痕を有する。

ＳＴ02

48	22	－68	土師器小皿			底径 4.8	0.5～1㎜程度の砂粒を少量含む。	良	淡褐黄色	底部は，糸切りされている。 摩滅のため調整不明。
48	22	－69	土師器小皿			底径 5.8	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡褐黄色	底部は糸切りされている。 全体にヨコナデ調整されている。

包含層出土遺物

G－9第4層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
54	－	須恵器壺			10.3	細砂粒を含む。	良	灰色	底部と体部の境に高台が付く。 体部外面はヘラ削り調整されている。
－70		底部							

H－9第2層

54	－	磁器碗	10.0			精緻	良好	断面 灰白色	体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。 口縁端部はシャープに終る。
－71									

H－9第3層

54	－	須恵器				細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	ヘラ切りされた底部に高台が付いていたと思われる。 ヨコナデ調整されている。
－72		底部							

H－9第4層

54	－	瓦器埦	12.1			精良	良	黒色 断面 淡褐灰色	かなり外反する口縁を持つ。 外面口縁端部下は，ヨコナデ調整されている。
－73									
54	－	須恵器坏蓋	13.0			細砂粒を少量含む。	良	灰色	口縁端部は下方に短く屈曲する。 ヨコナデ調整されている。
－74									
54	－	須恵器坏身				堅緻	良好	灰色	口縁端部は丸くおさめられている。
－75									

H－9第5層

54	23	土師器小皿	8.9	1.6	底径 7.8	精良	良	濁褐黄色	底部は糸切りされており，体部は，直線的に外方へ延びる。 ヨコナデ調整されている。
－76									
54	23	土師器皿	12.8	1.9	底径 8.0	精良	良	暗白乳色	底部は糸切りされており，体部は，内彎しながら口縁部に至る。
－77									
54	23	土師器埦			6.7	0.2～1mm程度の砂粒を含む。	良	濁茶白色	外方にふんばる高台を持つ。
－78		底部							
54	23	瓦器埦	12.8			精良	良好	灰黒色	口縁端部は丸くおさめる。 外面は指頭痕が目立つ。
－79									
54	23	須恵器坏蓋				堅緻	不良	内面 濁茶黄色 外面 灰色	かなり萎小化したかえりを持つ。 蓋と身の逆転時期の須恵器で坏身の可能性も有る。
－80									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
54	23	須恵器坏身				堅緻	良好	青灰色	萎小化した立ち上がりを持つ。
−81									
54	23	須恵器坏蓋				細砂粒を含む。	良好	灰色	扁平な宝珠形のつまみを持つ。 つまみはかなり退化している。
−82									
54	23	〃				堅緻	良好	青灰色	かなり退化した宝珠形つまみを持つ。
−83									
54	23	〃	13.9			堅緻	良好	青灰色	天井部と体部の境を明確に持たない蓋である。 ヨコナデ調整されている。
−84									
54	23	〃	13.8			1〜2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部と体部の境に稜を持たない。 ヨコナデ調整されている。
−85									
54	23	須恵器坏 (埦)	11.9			細砂粒を含む。	良好	青灰色	口縁部がやや外反する。 須恵器の埦であるかもしれない。
−86									
54	−	須恵器脚			脚底径 28.9	細砂粒を含む。	不良	淡茶黄色	内彎する脚である。 端部に平らな面を持つ。
−87									
54	−	〃				0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	不良	白灰色	高坏の脚端部と思われる。 端部は丸くおさめられる。 端部外面上部には，突出した稜を持つ。
−88									
54	−	〃			脚底径 14.9	0.2〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	外反する脚部で端部は，外方に屈曲する。 ヨコナデ調整されている。
−89									
54	−	須恵器坏 底部			9.9	堅緻	良好	青灰色	底部と体部の境に垂直に高台が付く。 全面ヨコナデ調整されている。
−90									
54	−	〃			10.8	細砂粒を含む。	不良	暗茶灰色	底部と体部の境に少し外方にふんばる高台が付く。
−91									
54	−	須恵器 底部			底径 13.2	細砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は，直線的に外方へ延びる。 体部外面はヘラケズリされている。
−92									

H－9第6層

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
54	－	－93	黒色土器埦底部			6.6	0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良	内面 黒色 外面 淡褐茶色	外方にややふんばる高台を持つ。 摩滅のため調整不明。
54	－	－94	〃			6.6	0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良	内面 黒色 外面 褐茶色	外方にふんばっるしかりした高台を持つ。 摩滅のため調整不明。
54	－	－95	〃			7.0	細砂粒を含む。	良	内面 黒色 外面 暗灰茶色	やや外方にふんばる高台を持つ。 摩滅のため調整不明。
54	－	－96	土師器埦底部			6.4	精良(密)	良	淡黄褐色	逆三角形の高台が付く。
54	－	－97	〃			8.0	精良	良	淡褐色	逆台形状の高台が付く。 全面ヨコナデ調整されている。
54	－	－98	〃			9.0	細砂粒を含む。	良	暗灰褐色	底部に垂直に高台が付く。
54	23	－99	須恵器坏身			8.0	堅緻	良好	暗灰色	全体に退化してはいるが受け部も立ち上がりもしっかりしている。 ヨコナデ調整されている。
54	23	－100	〃	11.1	4.0		0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗灰褐色	立ち上がりも受け部もかなり退化している。 底部はヘラケズリされている。 ロクロは右まわり。
54	23	－101	〃	11.5			堅緻	良好	淡青灰色	まだ立ち上がりも受け部もしっかりしている。 全面ヨコナデ調整されている。
54	23	－102	〃	19.2			細砂粒を含む。	良好	青灰色	直線的に外方へ延びる体部を持つ。 全体にヨコナデ調整されている。
54	23	－103	須恵器底部			底径 14.1	0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	底部はヘラケズリされている。 体部はやや外反しながら延びる。 内面は指頭痕が目立つ。
54	23	－104	須恵器壺	16.0			堅緻	良好	青灰色	口縁端部を丸く肥厚させている。 ヨコナデ調整されている。
55	－	－105	須恵器坏蓋				堅緻	良好	青灰色	退化した宝珠つまみである。
55	－	－106	〃				細砂粒を含む。	良好	青灰色	かなり退化した宝珠つまみでほぼ円柱状を成している。

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
55	−	−107	須恵器坏蓋				細砂粒を含む。	良好	暗青灰色 断面 茶褐色	扁平なつまみである。
55	−	−108	〃	17.1			竪緻	良好	暗灰色	口縁端部は下方に短く屈曲している。 全体に自然釉がかかっている。
55	−	−109	須恵器底部			10.0	竪緻	良好	青灰色	底部と体部の境にどっしりした高台が付く。
55	−	−110	須恵器坏底部			9.2	竪緻	良	灰色	底部は体部の境よりやや内側に高台が付く。
55	−	−111	〃			10.1	細砂粒を含む。	良好	灰色	底部と体部の境に長方形の高台が付く。 全体にヨコナデ調整されている。
55	−	−112	〃			11.0	竪緻	良好	灰色	底部と体部の境にやや内方向に高台が付く。
55	−	−113	〃			11.0	竪緻	良好	暗灰色	底部と体部の境にたて長い高台が付く。
55	−	−114	〃			11.0	細砂粒を含む。	良好	暗灰色	底部と体部の境に高台が付く。 ヨコナデ調整されている。
55	−	−115	弥生土器甕	17.1			0.5〜2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	暗茶色	「く」の字に曲る頸部を持ち，口縁端部は，上方に小さくつまみ上げる。 外面ハケ目調整・内面板ナデ調整されている。
55	−	−116	弥生土器底部			底径 7.1	細砂粒を少量含む。	良	濁茶黄色	しっかりした底部を持つ。 内面ハケ目調整されている。

Ⅰ−9第3層

56	−	−117	須恵器坏底部			底径 7.0	竪緻	良好	青灰色	底部はヘラ切りされており，体部は内彎しながら外方に立ち上がる。

Ⅰ－9第4層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
56	－	土師器底部			底径 7.2	精良	良	淡褐黄色	底部は糸切りされている。
－118									
56	－	〃			底径 7.0	0.2～1㎜程度の砂粒を少量含む。	良	茶褐色	体部は内彎ぎみに外方へ延びる。
－119									
56	－	土師器埦底部			4.8	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡白乳色	小さい高台を持つ。体部は内彎しながら外方へ延びる。
－120									
56	－	〃			7.0	精良	不良	白黄色	小さく丸い高台を持つ。
－121									
56	－	〃			6.5	精良	良	黄白色	底部はヘラケズリされており，逆三角形の高台が付く。摩滅のため，調整不明。
－122									
56	－	土師質土器土鍋				0.5～3㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	濁乳黄色	「く」の字に曲る頸部を持ち，口縁端部はやや上方にかたよった丸みを持つ。
－123									
56	－	須恵器坏底部				堅緻	良好	暗青灰色	底部と体部の境に外方にふんばる高台を持つ。
－124									
56	－	〃			10.0	堅緻	良好	青灰色	底部と体部の境に外方にふんばる高台を持つ。体部は直線的にほぼ上方に延びる。
－125									
56	－	〃			10.8	堅緻	良好	暗青灰色	底部と体部の境にほぼ垂直に高台が付く。
－126									
56	－	〃			9.3	細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境に扁平な方形の高台が付く。体部は内彎ぎみに外方へ延びる。
－127									
56	－	〃			10.0	堅緻	良好	青灰色	底部と体部の境に高台が付く。体部は内彎ぎみに外方へ延びる。
－128									
56	－	須恵器甕	15.6			細砂粒を含む。	良好	暗灰色	口縁端部は丸く肥厚し，おさめる。ヨコナデ調整されている。
－129									
56	－	須恵器坏蓋	15.2			堅緻	良好	淡青灰色	口縁端部は，下方に短く屈曲する。
－130									

Ⅰ－9第5層

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
56	24	－131	土師器甕	24.2			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄茶色	しっかりした鍔が付き，体部は直線的に延び，長胴タイプの土甕である。口縁は短く，外傾する端面を持つ。
56	－	－132	土師器底部			7.2	細砂粒を少量含む。	良	淡黄茶色	丸く短い高台が付く。
56	－	－133	〃			5.9	精良	良好	黄乳色	やや外方にふんばるしっかりした高台が付く。
56	－	－134	〃			底径 8.0	細砂粒を含む。	良	淡黄褐色	底部はヘラ切りされている。
56	－	－135	須恵器坏蓋	14.0			堅緻	良好	灰色	体部は内彎ぎみに口縁端部に至る。ヨコナデ調整を施す。
56	－	－136	〃	16.0			堅緻	良好	暗灰色	天井部をあまりふくらさず，口縁端部は下方に短く屈曲させ終る。
56	－	－137	須恵器坏	16.6			堅緻	良好	暗青灰色	外方に直線的に延びる体部を持ち，口縁端部はシャープな稜を持ち終る。
56	－	－138	須恵器坏身				堅緻	良好	青灰色	口縁部でやや外反する体部を持つ。ヨコナデ調整されている。
56	－	－139	須恵器坏底部			9.0	細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境にほぼ垂直に高台が付く。
56	－	－140	〃			6.0	堅緻	良色	灰色	底部と体部の境にやや外方にふんばった高台が付く。体部は直線的に外方へ延びる。
56	－	－141	〃			11.0	細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境にやや外方にふんばった高台が付く。全面ヨコナデ調整されている。
56	－	－142	須恵器壺底部			10.0	堅緻	良好	青灰色	底部と体部の境に外方にふんばる高台が付く。体部は直線的に外方へ延びる。ヨコナデ調整されている。
56	30	－143	須恵器底部			底径 7.0	堅緻	良好	青灰色	円柱状に突出した高台を持つ。全面ヨコナデ調整されている。外面に火襷が確認される。
56	－	－144	須恵器高坏脚			脚底径 9.8	堅緻	良好	暗青灰色 断面セピア色	脚端部は上方に肥厚させており，端部は丸くおさめる。

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
56	－	須恵器高坏脚			脚底径 13.1	0.5～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗灰色	スカート状にひらく脚を持ち，端部は上方に少しつまみ上げる。ヨコナデ調整されている。
－145									

Ⅰ－9第6層

56	－	土師器甕	25.9			0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	淡茶色	ほぼ直角に曲る口縁を持ち，端部は少し上方につまみ上げ，外面には，凹線を施す。
－146									
56	－	土師器坏			底径 8.0	細砂粒を含む。	良	暗褐黄色	全体に摩滅しており，調整不明。
－147									
56	－	〃			底径 10.0	精良	良	淡茶黄色	直線的に外方へ延びる体部を持つ。
－148									
56	24	須恵器坏蓋	18.0			細砂粒を含む。	良好	淡青灰色	天井部は高く，そして丸く作られている。口縁端部は内側につまみ出されている。ヨコナデ調整されている。
－149									
56	24	〃	14.1			堅緻	良好	内面 灰色 外面 暗緑色	天井部と体部間には稜を持たず，口縁端部に至る。外面に自然釉がかかる。
－150									
56	24	須恵器坏身	12.5			堅緻	良好	灰色	かなり立ち上がりが萎小化している。150の坏蓋とセットで出土した。151の受け部に150の端部がはり付いたままの状態であった。
－151									
56	24	〃	10.0			堅緻	良好	灰色	立ち上がりはしっかりしているもののかなり薄手になっている。
－152									
56	24	〃				0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	立ち上がり・受け部ともにしっかりしている。ヨコナデ調整されている。
－153									
57	－	須恵器坏蓋				細砂粒を含む。	良好	淡青灰色	かなり退化した宝珠つまみである。
－154									
57	－	〃				堅緻	良好	暗灰色	ほぼ円柱状のつまみである。
－155									
57	－	〃	11.6			堅緻	良好	青灰色	天井部がふくらみ，口縁端部はやや内側に短く屈曲する。
－156									
57	－	〃	12.6			細砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	口縁端部は短く下方に屈曲する。端部外部には，凹線を施す。
－157									

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
57	−	−159	須恵器坏蓋	16.7			細砂粒を多量に含む。	良好	暗灰色	口縁端部は下方に短く屈曲させる。ヨコナデ調整されている。
57	25	−160	須恵器坏				堅緻	良好	青灰色	体部は直線的に延びる。
57	25	−161	〃				細砂粒を含む。	良好	暗青灰色	体部は直線的に延びるが全体に浅い坏身と思われる。
57	25	−162	〃				0.2〜1mm程度の砂粒を含む。	良好	暗青灰色	体部は直線的に延びる。
57	25	−163	〃				細砂粒を含む。	良好	灰色	体部は直線的に延びるが浅い坏身と思われる。
57	25	−164	〃				細砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は直線的に延びる。
57	25	−165	〃				細砂粒を含む。	良好	淡青灰色	体部はやや外反しながら，口縁部に至る。
57	25	−166	〃	12.0			細砂粒を含む。	良好	淡褐灰色	体部は直線的に延び口縁端部は，やや外反する。ヨコナデ調整されている。
57	25	−167	〃				細砂粒を含む。	良好	暗灰色	体部は直線的に延びる。
57	25	−168	〃				細砂粒を含む。	良好	灰色	体部は直線的に延び，口縁端部は，上面に面を持ち，凹線を施す。
57	25	−169	〃				堅緻	良好	暗青灰色	体部は内彎ぎみに延び，口縁端部は，やや外反する。
57	−	−170	〃	14.6			細砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は直線的に外方に延び，口縁端部にはシャープな稜を持つ。ヨコナデ調整されている。
57	−	−171	須恵器皿	26.0			細砂粒を含む。	良好	暗灰色	体部は外方へ逆「く」の字に曲り，口縁端部は上面に凹線を施す。
57	−	−172	須恵器坏蓋				堅緻	良好	青灰色	天井部と体部の境は，稜を持つ。体部はやや外反する。

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
57	25	須恵器坏底部			10.1	細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境に少し外方にふんばる高台が付く。 ヨコナデ調整されている。
−173									
57	25	〃			10.0	堅緻	良	灰色	底部はヘラ切りされている。 底部と体部の境に少し外方にふんばる高台が付く。
−174									
57	25	〃			9.3	堅緻	良好	青灰色	底部と体部の境に少し外方にふんばる高台を持つ。 体部は内彎ぎみに立ち上がる。 ヨコナデ調整されている。
−175									
57	25	〃			11.0	細砂粒を含む。	良好	灰色	底部と体部の境よりやや内側に垂直に高台が付く。 ヨコナデ調整されている。
−176									
57	25	〃			12.0	細砂粒を含む。	良好	灰色	底部と体部の境に垂直に高台が付く。
−177									
57	25	〃			12.1	細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境よりやや内側に垂直に高台が付く。
−178									
57	25	〃			12.0	細砂粒を含む。	良好	暗灰色	底部と体部の境に丸い高台が付く。
−179									
57	25	〃			12.0	堅緻	良好	青灰色	底部と体部の境に垂直に高台が付く。 その境は稜を持たずゆるやかである。
−180									
57	25	〃			15.0	堅緻	良好	淡青灰色	底部と体部の境に垂直に高台が付く。 高台下面には，凹線を施す。
−181									
57	25	〃				細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境よりやや内側に外方にふんばった高台が付く。
−182									
57	25	〃			8.3	堅緻	良好	青灰色	底部はヘラ切りされている。また，体部との境にほぼ垂直に高台が付く。 高台下面には凹線を施す。
−183									
57	−	〃			10.0	堅緻	良好	青灰色	高台は外方にふんばる。
−184									
57	−	〃			12.0	細砂粒を含む。	良好	灰色	垂直ぎみに高台が付く。
−185									
57	−	〃			10.0	細砂粒を含む。	良好	青灰色	高台は外方にふんばる。 高台端部下面には凹線を施す。
−186									

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
57	−	−187	須恵器坏底部			11.0	細砂粒を含む。	良好	青灰色	底部と体部の境に少し外方へふんばる高台が付く。
57	−	−188	〃			11.7	堅緻	良好	青灰色	高台は，やや内傾して付く。
57	−	−189	〃			8.0	堅緻	良好	青灰色	ほぼ垂直に高台が付く。
57	−	−190	〃			底径 7.0	細砂粒を含む。	良好	暗灰色	底部と体部の境に，断面が半円形の高台が付く。
57	−	−191	須恵器坏底部			底径 9.4	堅緻	良好	暗青灰色	体部は内彎ぎみに立ち上がる。

Ⅰ−9第7層

57 −	−192	須恵器坏身	10.0			堅緻	良好	青灰色	かなり萎小化した受け部と立ち上がりを有する。 全面ヨコナデ調整されている。
57 −	−193	〃				堅緻	良好	暗青灰色	直線的に外方へ延びる体部を持ち，口縁端部はシャープに終る。 ヨコナデ調整されている。
57 −	−194	〃				細砂粒を少量含む。	良	淡灰色	直線的に外方へ延びる体部を持ち，口縁端部はシャープに終る。
57 −	−195	〃				堅緻	良好	暗青灰色	直線的に外方へ延びる体部を持つ。 ヨコナデ調整されている。
57 −	−196	〃	11.8			0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰色	少し内彎した体部を持ち，口縁はやや外反する。 口縁端部は丸くおさめる。 全面ヨコナデ調整されている。
57 −	−197	須恵器坏底部			12.0	堅緻	良好	灰色	底部から垂直に高台が付く。 ヨコナデ調整されている。
57 −	−198	〃			9.2	細砂粒を含む。	良好	淡青灰色	高台は，底部と体部の境に付き，外方にふんばる。 全面ヨコナデ調整されている。
57 −	−199	須恵器高坏				0.5〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	青灰色	全面ヨコナデ調整されている。

J－9第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
58	－	須恵器坏			8.0	細砂粒を少量含む。	良	灰色	高台は底部と体部の境に付き，少し外方へふんばる様である。 ヨコナデ調整されている。
－200		底部							

J－9第5層

58	－	土師器坏	12.1	3.2	底径 8.1	1㎜前後の砂粒を少量含む。	良	淡黄茶色	体部は，直線的に外方へ延び口縁端部はシャープな稜を持つ。 摩滅のため調整不明
－201									
58	－	黒色土器埦（A類）			7.2	細砂粒を少量含む。	良	内面 黒色 外面 茶褐色	かなり萎小化した高台を持つ。
－202		底部							

J－9第6層

58	－	須恵器坏蓋	10.6			竪緻	良好	灰色	口縁端部は下方に短く屈曲する。 ヨコナデ調整されている。
－203									
58	－	須恵器坏			7.1	竪緻	良好	青灰色	高台は，底部と体部の境にほぼ垂直に付く。 ヨコナデ調整されている。
－204		底部							
58	－	〃			9.0	0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	高台は，底部と体部の境にほぼ垂直に付く。 ヨコナデ調整されている。
－205									
58	－	〃			11.0	細砂粒を含む。	良好	暗灰色	高台は，底部と体部の境にほぼ垂直に付く。 体部は，ほぼ上方に立ち上がる。 全面ヨコナデ調整されている。
－206									
58	－	須恵器甕				細砂粒を含む。	良好	暗灰色	口縁部は外面肥厚している。
－207									

F－12第4層

59	26	土師器高坏				0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡茶黄色	坏部と脚部の境である。 全面ヨコナデ調整されている。
－208									
59	26	土師器高坏				0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡黄茶色	脚部中央をややふくらまし，裾部で大きく外反させる。 外面は上下に指ナデしており内面はヘラケズリしている。
－209		脚							
59	26	土師器高坏	12.7			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	濁黄白色	体部は，内彎しながら立ち上がる。 口縁端部は上部に面を持つ。 外面および外面坏部下面にハケ目を施す。
－210									
59	26	土師器壺	9.5	17.3		0.5～1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	淡褐茶色	体部はそろばん玉状に中央がふくれており，口縁は直線的に外方へ延びる。 体部内面下半は指頭痕が見える。 上半は粘土紐の継ぎ目が確認される。
－211									

土師質土器

E－9第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
60	27	土師質土器	41.0			0.2～2mm程度の砂粒を含む。	良	濁乳黄色	頸部は「く」の字に外反する。
－212		土鍋							

E－10第3層

60	27	土師質土器	33.5			0.2～1mm程度の砂粒を含む。	良	暗茶色	頸部は「く」の字に外反し，口縁端部は外側に小さくつまみ出す。
－213		土鍋							

N－3第3層

60	27	土師質土器	26.0			0.2～1mm程度の砂粒を少量含む。	良好	濁茶色	体部は直線的に外方へ延び，口縁部で内彎する。 体部内面に数条の条溝がみとめられる。
－214		擂鉢							

L－7第3層

60	27	土師質土器	25.8			0.5～3mm程度の砂粒を含む。	良	褐茶色	しっかりした鍔が付く。 口縁端部は細くなる。
－215		土釜							

K－7第1層

60	27	土師質土器	22.1			0.2～1mm程度の砂粒を含む。	良	淡茶色	退化した鍔が付く。 口縁端部はシャープな稜を持つ。
－216		土釜							

E－10第3層

60	27	土師質土器	24.1			0.2～2mm程度の砂粒を多量に含む。	良好	淡茶色	直線的に延びる体部を持つ。 口縁端部は内面に肥厚している。
－217		こね鉢							

B－11第3層

60	27	土師質土器	26.3			0.2～2mm程度の砂粒を含む。	良	淡茶色	直線的に延びる体部を持つ。 口縁端部は上部に面を持ち左右に拡張されている。
－218		こね鉢							
60	27	〃				0.2～2mm程度の砂粒を含む。	良好	茶色	直線的に延びる体部を持つ。 口縁端部は上部に面を持ち，左右に拡張されている。
－219									
60	27	〃	20.2			0.5～3mm程度の砂粒を多量に含む。	良	淡茶色	体部は直線的に外方へ延び，口縁部でやや内彎する。 端部は上部に面を作るように拡張する。
－220									
60	27	〃			底径 16.1	0.5～1mm程度の砂粒を含む。	良	淡茶色	全体にヨコナデ調整されている。
－221									

備前焼，染付，その他

L－7第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
61	28	備前焼擂鉢	26.5			堅緻	良好	こげ茶色 断面 茶褐色	口縁端部下方を拡張している。 内外面はヨコナデされており，特に内面の体部条溝部と，口縁部の境のヨコナデは，明瞭に施されている。 条溝は重なりあわない。
－222									

G－7第1層

61	28	備前焼擂鉢	32.1			0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	茶褐色	肉厚な口縁を持つ。 外面には2条の凹線を施す。 内面条溝との境は明瞭な段にはならない。 条溝単位に間があく。
－223									

B－11第3層

61	28	備前焼擂鉢	28.8			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗灰褐色	肉厚な口縁を持つ。 端部は丸くおさめられている。 条溝は重なりあわないで不規則に施されてる。
－224									

I－6第1層

61	28	備前焼擂鉢	27.6			細砂粒を含む。	良好	褐茶色 断面 淡茶黄色	全体に薄手の作りである。 外面に2条の凹線を施し，口縁端部は内傾した面を持つ。
－225									

H－9第1層

61	28	備前焼	7.8	5.7	底径	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗茶褐色	ほぼ直立する体部と，丸くおさめた口縁端部を持つ。 体部外面には窯記号を持つ。
－226		直口鉢			8.7				

K－6攪乱土層

61	28	備前焼甕	21.6			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	内面 茶褐色 外面 暗黄茶色	体部はやや外反しながら立ち上がり口縁近くで内側に屈曲する。口縁端部は上部に面を持つように肥厚し，丸くおさめる。 外面は塗り土されている。
－227									

Q－2大溝

61	28	備前焼甕(壺)			底径	1～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗褐灰色	体部は外方向に延びる。
－228		底部			16.0				

F－8第4層

61	28	陶器	6.9	1.7	底径	堅緻	良好	暗こげ茶褐色 断面 茶褐色	突出した底部を有し，体部は外方に直線的に延び口縁端部は内側に短く屈曲する。
－229					3.2				

F－9第4層

61	28	陶器	8.1			堅緻	良好	暗こげ茶色 断面 暗茶褐色	口縁部は上方に屈曲し，丸くおさめている。 釉は内面と外面の口縁部にかかっている。
－230									

K－6攪乱土層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
61	28	陶器			底径 16.0	堅緻	良好	内面 淡茶黄色 外面 暗こげ茶色	体部はやや外反しながら立ち上がる。釉は，外面だけにかけられている。
－231									

D－10第2層

61	28	陶器口縁部	26.4			堅緻	良好	暗茶色 断面 暗灰色	体部から外方に直角に曲る口縁を持ち，端部は下方に少し拡張され，外面に凹線を施す。
－232									

B－11第1層

61	29	染付碗	11.6	5.4	6.0	緻密	良好	青白色	外面に二重網目の文様を描く。呉須の発色は鈍く暗青色を呈する。釉は青味を帯びた白色釉がかかる。
－233									

C－11第3層

61	29	染付底部			5.0	緻密	良好	淡青白色	内面見込み部に釉を掻き取っている。
－234									

G－9第1層

61	29	染付底部			5.3	緻密	良好	青白色	内面見込み部に呉須絵を描く。
－235									

C－11第1層

61	29	染付底部	13.1			緻密	良好	濁白色	体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。体部外面に呉須絵が描れている。
－236									

G－7第1層

61	29	磁器	11.1			緻密	良好	青灰色	体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。釉は体部内外面の上半にかかっている。
－237									

I－8第1層

61	29	磁器			3.9	堅緻	良好	暗緑白色	暗緑白色の釉がかかる。カン入が著しい。
－238									

G－8第1層

61	29	肥前系陶胎染付			6.0	堅緻	良好	暗青白色	高台下面には釉がかかっていない。全体にカン入が著しい。
－239									

M－9第1層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
61	29	肥前系陶胎染付			5.4	堅緻	良好	淡緑白色	高台下面には釉がかかっておらず，カン入が著しい。
－240									

L－7第1層

61	29	施釉陶器	11.0			緻密	良好	緑青色 断面 濁黄白色	体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。 釉は，体部内面と外面口縁部のみにかかっている。
－241									

緑釉陶器，輸入磁器，その他

H－9第6層

62	30	緑釉陶器皿	13.8	2.6	底径 5.8	0.5mm前後の砂粒を含む。	良好	淡緑灰色	底部は突出した高台を有し，体部はゆるやかに内彎しながら口縁に至り。端部は短く外方に屈曲する。 全面緑色の釉をかける。
－242									

I－9第5層

62	31	緑釉陶器皿				精良	良好	濃緑色	口縁端部でやや外反する。 口縁端部外面はヨコナデされている。 濃緑色の釉がかかっている。
－243									

H－3第4層

62	31	緑釉陶器碗	14.0			精良	良好	暗黄緑色	やや内彎ぎみに体部を持ち，口縁端部は少し外方に屈曲する。 暗緑色の釉がかかっている。
－244									

L－11第5層

62	30	緑釉陶器碗			底径 7.0	精良	良好	淡緑色	突出した底部を持ち，体部はやや内彎しながら，外方へ延びる。 底部にヘラ記号がある。 淡緑色の釉がかかっている。
－245									

D－2第3層

62	31	灰釉陶器				堅緻	良好	灰色	体部は内彎しながら口縁に至り，端部は外方に屈曲する。 内面灰色の釉がかかっている。
－246									

I－9第4層

62	31	白磁底部			7.2	堅緻	良好	濁白色	高台は削り出されている。 釉は，内面だけにかかっている。
－247									

J－5第1層

62	30	須恵器こね鉢	28.6			細砂粒を含む。	良好	灰色	口縁部を上下に拡張し，端部はやや内傾する。
－248									

K－7第1層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
62	30	須恵器	24.6			細砂粒を含む。	良好	暗灰色	口縁部は上下に拡張し，内面に凹線を施しているために，やや内傾している。
－249		こね鉢							

N－3第1層

62	30	須恵器坏			底径	堅緻	良好	青灰色	突出した高台を持つ。 内面見込み部分が低くなっている。 底部はヘラ切りされている。
－250		底部			5.6				

K－7第6層

62	30	須恵器坏			7.0	堅緻	良好	青灰色	突出した高台を持つ。 内面見込み部分は指ナデにより一段低くなっている。 底部はヘラ切りされている。
－251		底部							

N－2第3層

62	30	須恵器坏	14.9	5.1	6.4	0.2～1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗灰色	突出した高台を持ち，内面見込み部は，指ナデにより一段低くなっている。 底部はヘラ切りされている。
－252									

L－7第4層

62	－	カマド				0.5～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	淡褐色	焚き口部の上部と思われる。
－253									

N－3第4層

62	30	土錘			直径	細砂粒を含む。	良好	黄黒色	紡錘状を呈する。
－254					1.0				

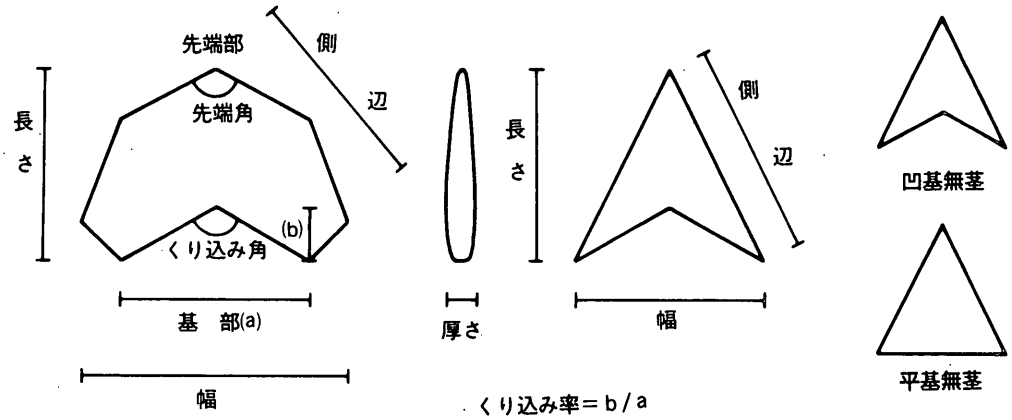
P－5第3層

62	30	キセル	全長		直径	銅		緑銅色	火皿から吸口先端まで一枚銅板で作られている。
－255			11.2		0.7				

石製品

挿図番号 / グリッド名 出土土層名	図版番号 / 遺物番号	器種	石材	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察
63	32	石鏃	サヌカイト	(21.40)	(18.30)	3.40	(0.90)	足の長い凹基式である。
K-7第1層	−256							先端・両足を欠き全長は不明である。
63	32	〃	〃	(20.80)	(13.60)	2.50	(0.45)	足の長い凹基式である。
T-2第3層	−257							細身に作ってある。
63	32	〃	〃	27.00	21.60	3.75	1．1	凹基式である。
表採	−258							先端が細く尖っている。
63	32	〃	〃	27.20	19.40	3.80	1.25	凹基式である。
H-9第6層	−259							足部は尖っているが，先端はにぶい。
63	32	〃	〃	(23.15)	(13.35)	3.30	(0.7)	凹基式である。
T-2第3層	−260							足は欠損している。
63	32	〃	〃	18.40	13.30	3.25	0.55	ロケット型を呈する凹基式である。
H-9第6層	−261							
63	32	〃	〃	29.50	17.60	6.60	3.15	平基式に近い凹基式である。
SD17	−262							大型の石鏃である。
63	32	〃	〃	19.15	11.25	2.60	0.4	凹基式である。
R-2第3層	−263							
63	32	〃	〃	14.30	13.00	2.90	0.4	凹基式である。
表採	−264							側辺は直線をなす。
63	32	〃	〃	16.60	(12.95)	2.05	(0.35)	凹基式である。
H-10 表採	−265							側辺は外彎孤をえがく。
63	32	〃	〃	(11.45)	(17.45)	3.50	(0.65)	平基式に近い凹基式である。
H-8第5層	−266							三角形を呈し，側辺は直線をなす。
63	32	〃	〃	(14.75)	(12.55)	3.10	(0.55)	平基式である。
N-3表採	−267							
63	32	〃	〃	19.95	20.40	3.50	0.85	平基式に近い凹基式である。
I-9第6層	−268							
63	32	〃	〃	(12.00)	12.35	3.15	(0.45)	凹基式である。
SD15	−269							
63	32	石匙	〃	52.20	85.80	8.55	28.20	横長石匙で表面に一部自然面を残し，裏面は，
I-9第7層	−270							剝離面である。

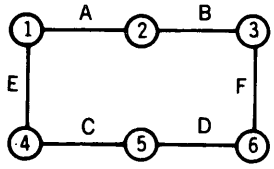
凡　例



くり込み率＝b／a

※ 先端部・基部に欠損が見られる場合，反転復元のくり込み率は(　)書きをしている。

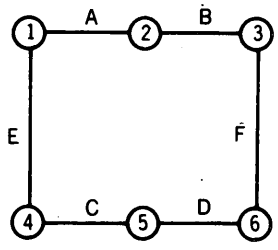
凡　例



1間×2間

柱穴径＝(1+2+3+4+5+6)÷6

柱間長＝(A+B+C+D+E+F)÷6

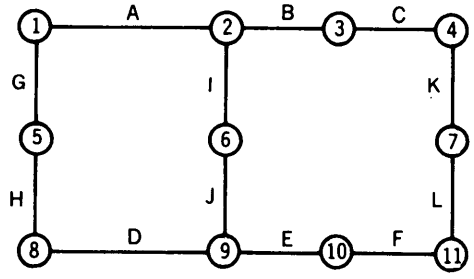


※1　1間×2間

柱穴径＝(1+2+3+4+5+6)÷6

柱間長＝(E+F)÷2

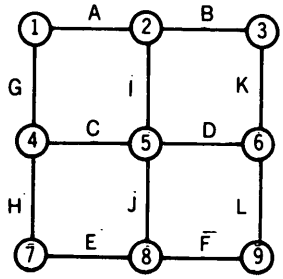
＝(A+B+C+D)÷4



※2　2間×2＋1間

柱穴径＝(1+2+3+4+5+6+7+8+9+10+11)÷11

柱間長＝(B+C+E+F+G+H+I+J+K+L)÷10



2間×2間

柱穴径＝(1+2+3+4+5+6+7+8+9)÷9

柱間長＝(A+B+C+D+E+F+G+H+I+J+K+L)÷12

III　長砂古遺跡

1．調査の経過

当該地域周辺では，1972年に実施された埋蔵文化財分布調査によって，すでに長砂古古墳群及び長砂古遺跡住居跡の存在が確認されていた。その記述によれば，各々「破壊されたものが多くあり現在四基程あったとおもわれ，どれも天井石を除去されており出土品は不明であるが，てんこやま古墳からは多数の遺物あり」・「三谷団地の北で柱跡三ヶ所，その西に土器(土師器らしい)が径3～4mの円形に埋まっており，稀に須恵器片もある。(註1)」とあり，今回の四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査において，さらに周知の遺跡としての長砂古遺跡の正確な位置とその性格の把握が必要となった。

そのため，昭和60年9月19日～26日に予備調査が実施され，弥生時代の遺構・古墳の存在を示す成果を得た。調査対象面積は，8900㎡となった。

発掘調査は，昭和61年1月6日～9月9日にわたって実施された。3ヶ所に分けられた調査区は，北からⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区と名付けられた。各々の調査区には，真北にその主軸を持つ20m×20mの小調査区が設けられ，南北方向にアルファベット，東西方向にアラビア数字が冠せられ，小調査区の位置を表す記号が付された。

調査日誌抄

昭和61年

1月

6日，Ⅰ区において，小調査区設定のための杭打ちを実施し，調査を開始する。9日より重機による表土層の除去を行い，中旬より作業員を就労し人力による発掘作業を開始する。下旬，Ⅰ区南部のE・F列を完掘，精査し，SH01・SB02～05・SD11～15・SK03～05を検出する。

2月

先月下旬に引き続いてⅠ区中部～北部のA～D列の調査を行う。D－12では，SD06～10を検出する。何れも流路を北西方向に持つ。13日，観音寺市文化財保護協会による現地見学。

3月

前半雨天のため調査難行，さらに石田遺跡宅地部の調査を実施したため当遺跡の調査を一時中断する。中旬，Ⅰ区北部の小河川SD01～03完掘に重点を置き調査を継続する。その他に，SB01，SD04・05を検出する。28日，昭和60年度調査予定地区であったⅠ区の調査を終了する。

4月

2日より昭和61年度の調査を開始する。重機によるⅡ区の表土層の除去に引き続き，H列より調査を開始する。下旬，Ⅱ区東部のⅠ－8，J－9・10においてSD16～18を検出する。

5月

SD16～18の検出・完掘に調査の重点が置かれる。中旬，雨天のため調査に支障をきたす。J－7・8，K－8において，SK08他，多数の溝状遺構を検出する。下旬よりⅡ区の調査に平行して，Ⅲ区の表土層を重機によって除去する。26日，J－9・10において，SD16精査・写真撮影及び断面土層実測を完了する。28日，Ⅱ区全域の精査・遺構掘り抜きを行う。

6月

2・3日，Ⅱ区の遺構写真撮影を実施する。上・中旬，Ⅱ区の遺構・土層実測を進める一方，Ⅲ区の調査を行う。9日，R－2において須恵

器が多量に出土する。

7月

11日，R－3南西隅において横穴式石室の側壁，奥壁の石の並びを確認する。18日，石室の調査に着手。下旬，石室床面の検出作業を進める。その他，R－3南東隅SD33～35を確認する。

8月

古墳群に対する調査に重点が置かれる。上旬，大半の作業員が柞田八丁遺跡の調査に加わる。6日，石室床面の検出を完了する。7日，石室北隣で炭化木材を比較的多く含む遺構SH02を検出する。中旬，石室を除く部分の実測を行う。19日，石室の実測に着手する。20日，観音寺市文化財保護協会より現地見学。26日，1次的な実測図の作成・写真撮影を完了し，上層礫床の除去を行う。

9月

1日，下層礫床検出に伴い2次的な実測図の作成・写真撮影を開始する。3日，礫床下において確認した排水溝の調査を行う。同日，石室周辺の平板実測を開始。5日，墓壙の精査を行い，最終的な実測図の作成・写真撮影を完了する。8・9日，石室・SH02の最終的な精査を行い，Ⅲ区の調査を終え，長砂古遺跡における全調査を完了する。

－発掘作業に従事した人々－

秋山マサ子	合田太郎吉	渋谷　泰	船場久計
今村　瀞	後藤満枝	資延百合子	船場美和子
太田春夫	小林勝治郎	田岡照治	松下貢子
大西長吉	小林ミサヲ	高橋千弦	三谷サダ子
大広林四郎	近藤キクエ	高橋フミノ	南　キヌヨ
小野芳子	斎藤キミ子	立石利幸	三好春義
片山康子	斎藤清子	田辺ミヤ子	森岡　光
加藤悠喜子	坂井スマ子	筒井ヒサノ	森　道代
河上忠義	佐川加代子	富田玉恵	横内正弘
河田雪子	篠原アヤ子	奈尾宗昭	横山　薫
木下行雄	篠原弘子	中野宏子	吉田美智子
業天順子	篠原善美		

－整理作業に従事した人々－

石川ゆかり	川田裕加子	武内ゆかり	林　肇子
小畑三千代	高橋佳緒里	筒井千景	藤田由紀子
葛西　薫	高橋千恵	長谷川郁子	森岡浩子
鎌谷周子			

第1図　調査区周辺地形図・調査区設定図

第1表　遺構番号変更一覧表

グリッド	旧番号	新番号	グリッド	旧番号	新番号
I　区（溝）			I－8	SD8618	SD21
C-14, B-13, B-14	SD8609	SD01	I－8		SD22
B－14		SD02	I-8, J-8, K-8	SD8619	SD23
B-13, B-14	SD8610	SD03	J－8	SD8620	SD24
D－14	SD8608	SD04	J－8	SD8624	SD25
D－13	SD8607	SD05	J－8	SD8626	SD26
D－12	SD8605	SD06	J－8	SD8621	SD27
D－12	SD8604	SD07	J-8, K-8	SD8622	SD28
D-12, E-12, E-13	SD8603	SD08	J－8	SD8625	SD29
D-12, E-12, E-13	SO8611	SD09	J-8, J-7	SD8623	SD30
D－12	SD8606	SD10	（土　坑）		
E-13, F-13, F-14	SD8602	SD11	J－9	SK8607	SK06
E－13		SD12	I－8	SK8606	SK07
F-12, E-13, F-13	SD8601	SD13	J－8	SK8605	SK08
E－13		SD14			
F－14		SD15	III　区（溝）		
（掘立柱建物）			P-3, P-4, Q-4		SD31
D－13	SB8606	SB01	R－3		SD32
E－12	SB8604	SB02	R－3		SD33
E－12	SB8605	SB03	R-3, S-3	SD8627	SD34
F－13	SB8603	SB04	R-3, S-3	SD8628	SD35
F－14	SB8602	SB05	R-2, R-3	SD8629	SD36
（竪穴住居）			R－2		SD37
E-13, F-13	SB8601	SH01	（竪穴住居）		
（土　坑）			R-2, R-3		SH02
C－14	SX8601	SK01			
D－13	SK8604	SK02			
E－13	SK8603	SK03			
E－14	SK8601	SK04			
F－14	SK8602	SK05			
（不明遺構）					
E－12		SX01			
E－12		SX02			
E-12, E-13		SX03			
E-12, E-13, F-12, F-13		SX04			
E-12, E-13, F-13		SX05			
II　区（溝）					
J-10, J-9	SD8616	SD16			
I-9, J-9	SD8615	SD17			
I－9	SD8614	SD18			
H-8, I-8	SD8618	SD19			
H－8	SD8617	SD20			

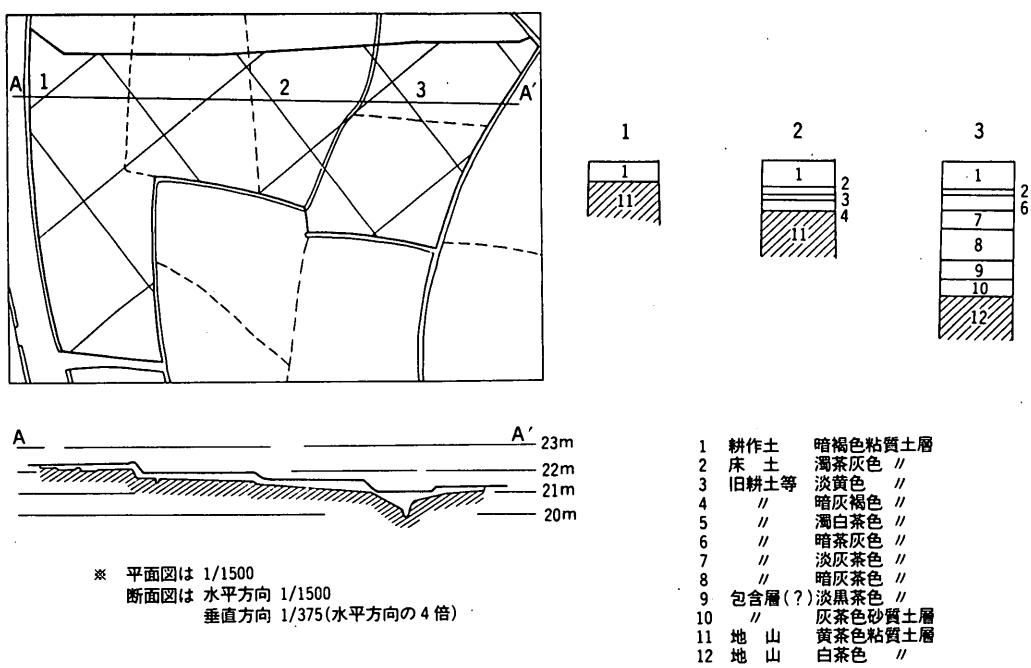
2．Ⅰ区

(1)　Ⅰ区の概要

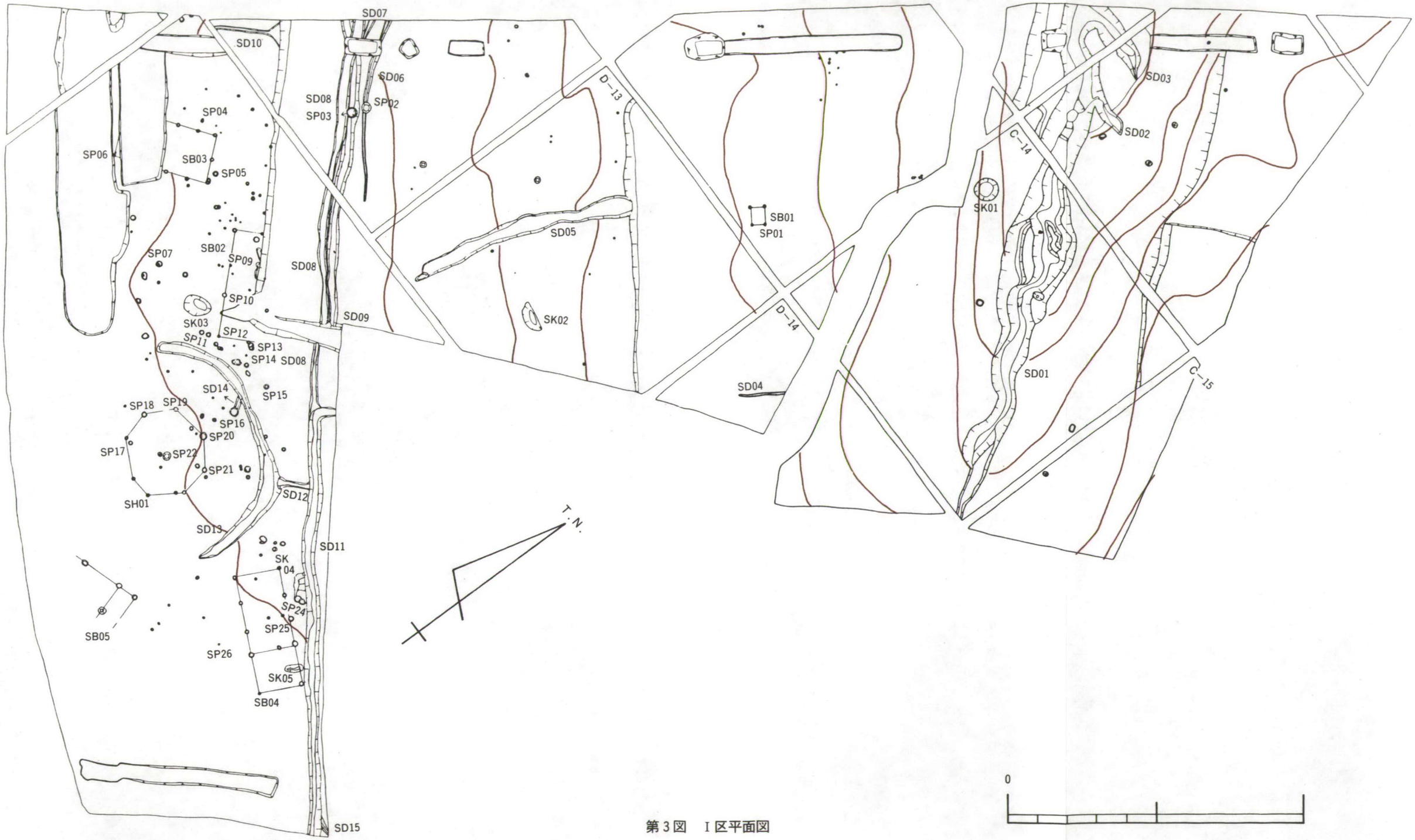
Ⅰ区は長砂古遺跡の所在する２本の低丘陵のうち北側丘陵の北東斜面から谷部にかけての部分に当たる。水田造成によって原地形はかなりの改変を受けており，現状では，３～４段の階段状を呈している。

西半最上段部では現耕作土直下に地山層が見られるが，これは造成時の削平によって本来多少は堆積していたであろう包含層等が失われたものと考えられる(第２図－１)。３段目の斜面中位では，若干の旧耕作土・床土を挟んで地山層に至るが，地点によって耕作土下，地山上の堆積層の有無に，多少格差がある。(第２図－２)。更に東端，再下段の谷部では現耕作土下，地山層上に厚い部分で0.6～0.7mもの堆積層が見られる。この過半は旧耕作土層及び水田造成時の盛土であるが，下部に若干のプライマリーな遺物包含層を残している。(第２図－３)。

丘陵頂部付近を削平し，その土砂で谷部を埋めて，階段状に水田を造成しているため，丘陵部では，遺構・遺物包含層の残りが悪く，逆に谷部では盛土下に保存されているようである。したがって，今回の調査で確認した遺構・遺物包含層分布範囲は，後世の改変行為による影響を強く受けており，必ずしも本来的なものではない可能性を念頭におく必要がある。



第２図　Ⅰ区基本層序と地形断面図


SD07
SD10
SD06
SD08
SP03
SP02
SP04
SP06
SB03
SP05
SD05
SD08
SP07
SB02
SP09
SP10
SD09
SK03
SP12
SP11
SP13
SP14
SD08
SD14
SP15
SP18
SP19
SP16
SP20
SP17
SP22
SP21
SH01
SD12
SD13
SD11
SK
04
SP24
SP25
SB05
SP26
SK05
SB04
SD15
D-13
SB01
SP01
SK02
D-14
SD04
SD03
SD02
C-14
SK01
SD01
C-15
N.
0

第3図　Ⅰ区平面図

(2) 遺構と遺物

① 溝状遺構

第Ⅰ調査区の北東部に位置する低地部を流れる流路について述べる。

ＳＤ01・02・03

この３条の溝は，第Ⅰ調査区の東北部の地形的に最も低くなった部分に位置し，斜面と直行して南から北へ流れるＳＤ01を本流とし，支流のＳＤ02・03が注ぎ込む。本流となるＳＤ01の底はかなりの起伏があり，凹地を流れた自然河川である可能性が高い。ＳＤ01は削平の結果，南部では残存状況が悪い。残りの良い北部では幅約4.8m・深さ約１mの規模を計る。

出土遺物には埋土の最下層からは弥生時代の甕の底部・６世紀後半須恵器坏蓋・７世紀初頭の須恵器坏身が出土しているほか，埋土の上層部から石鏃が出土している。(第７図－25～29，第６図－１・２)

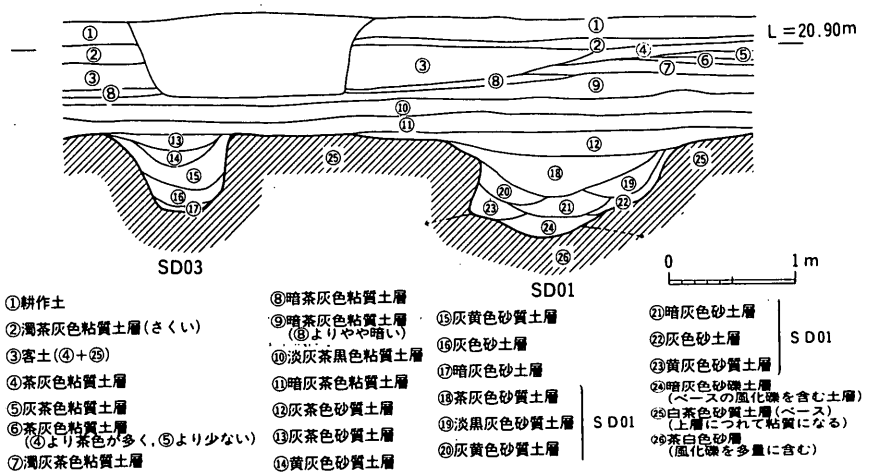
ＳＤ02からは遺物が出土していない。ＳＤ03の最下層からは弥生時代後期の甕が出土している。(第７図－29・30)。

ＳＤ01は古墳時代後期以降の流路であるとせざるをえないが，地形的にみて最も低い部分であることに加えて周辺に弥生時代の遺構群もあることから，弥生時代にも流路として機能していた可能性も十分考えられる。また周辺には，土坑（ＳＫ01）を確認しただけであるが，地形的にみて斜面部に位置することから，もともと遺構が希薄であった可能性が高い。

ＳＤ08・09・11

調査区の西部を走る溝で，基本的には等高線と平行した流路を有し，N50°W前後の方位を有する。流路は重複しており，３条の溝の切り合いが認められる。

ＳＤ08は，調査区の北西部のＤ－12，Ｅ－12・13で検出され，ＳＤ09の北東部上端を切り，下流と考えられる南東部ではＳＤ09と平行に走る。ＳＤ11はＳＤ08と東南部で重複し，ＳＤ08を切



第４図　ＳＤ01・03土層図

り，北東方向へ直角に曲がり調査区外に延び，東南部ではＳＤ11を切る。いずれの溝も残存状況の良い所で上面幅１ｍ・深さ30cm程の規模を計る。図示しなかったものの切り合い関係から最も古いＳＤ08から平安時代の遺物が出土している。流路の重複状況等からすれば，いずれの溝も近接した時期の所産であろう。（第７図－33・34，第６図－４～９，15～21）

ＳＤ12・13

ＳＤ13は竪穴住居ＳＨ01を囲む周溝と考えられ，斜面部側の低くなった部分だけが残存する状況で検出した。最深部は20cm，最大幅1.3ｍを計る。

出土遺物には，弥生中期の高坏，石鏃が４点，楔状石器１点，石錐と推定される石製品１点が出土しており，弥生前期の甕の口縁が混入している。（第７図－35～40，第６図－10～13，22，23）。

ＳＤ12は，ＳＤ13から延びる排水用の溝であると考えられ，末端部でＳＤ11に切られる。　第Ｉ調査区で検出した他の溝はいずれも遺物の出土を見ず規模も小さい。近世以降の所産である可能性が高い。

② 土　　坑

第Ｉ調査区で検出した土坑は，多くはないが竪穴住居の炉跡と考えられるものなどがある。

ＳＫ03は，第Ｉ調査区の南部の微高地上で，竪穴住居ＳＨ01の周溝の北側に位置する。長径160cm・短径100cm・深さ30cmを計る楕円形をした平面形を呈し，埋土中から焼土と炭化物が出土している。後述するが，周辺に柱穴がめぐるように分布することから，削平を受けた竪穴住居の炉跡の可能性がある。

ＳＫ05は，南部微高地上の掘立柱建物ＳＢ05に重複するように検出した。遺物は出土していない。

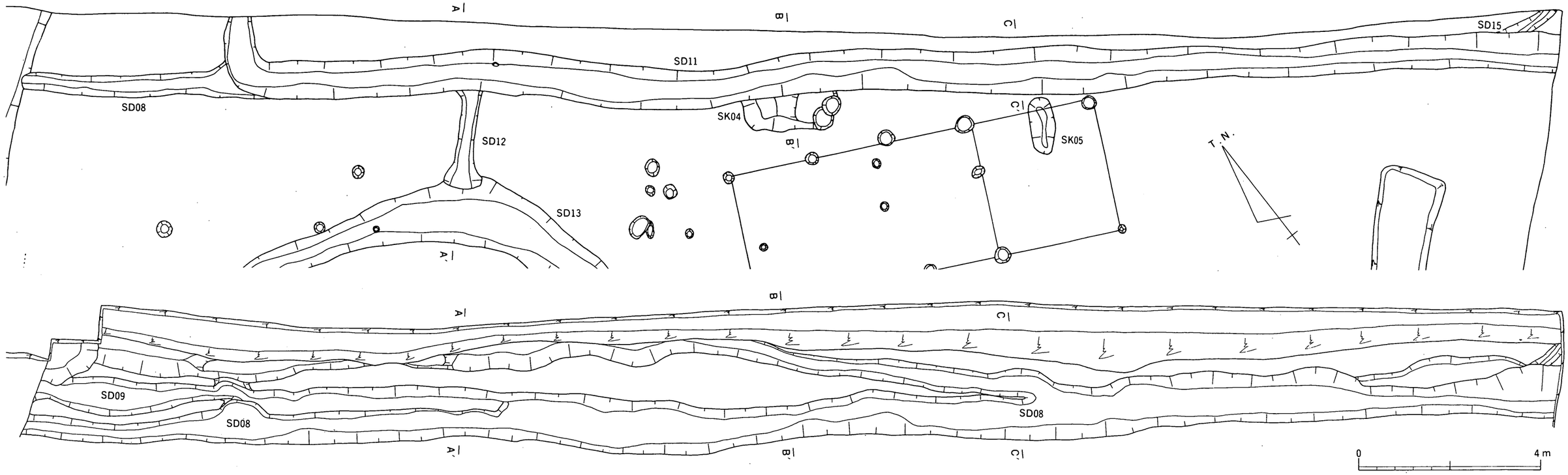
③ 掘立柱建物

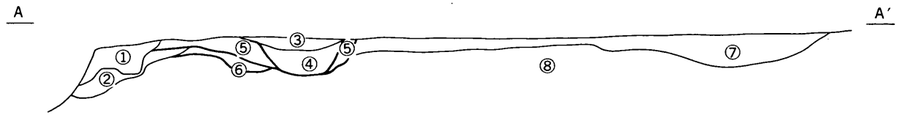
第Ｉ調査区で検出した掘立柱建物を，５棟復元した。調査区中央部の斜面部に位置する１棟を除き，他は，微高地上に位置する。

ＳＢ01は，斜面部に位置する１間四方の建物である。柱穴の中心間の長さは，109cmほどを計る。近接して古い時期の遺構がないことに加え，建物の方位が，近世遺構の溝等と平行することから，遺物は出土していないものの，それほど古い時期の所産ではないであろう。

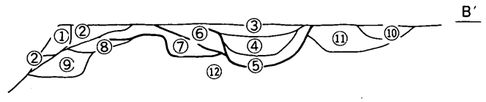
ＳＢ02～05は，ＳＤ08・11よりも南の微高地上に位置する。いずれも削平をうけ，柱穴の残存度は悪い。微高地上は削平を受けており，旧地形の復元には若干困難な面もあるが，巨視的に見れば調査区の北部に位置するＳＤ01が谷筋を形成していると考えられることから，ＳＢ02・04は長軸を現状から推定される旧地形の等高線と平行に営み，ＳＢ03は長軸が等高線と直交する可能性が高い。またＳＢ05は中間的な方向を呈している。

ＳＢ02は桁行３間・梁間１間以上の建物で，ＳＤ08・11と平行する方位を持つ。柱穴の中心間

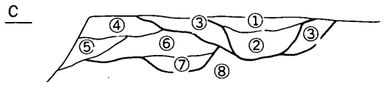




① 現在の溝
② 暗褐灰色粘質土層
③ 褐黒色粘質土層 } SD11
④ 暗灰褐色粘質土層 }
⑤ 暗茶灰色粘質土層 SD08
⑥ 暗黄灰色粘質土層 SD09
⑦ 暗灰茶色粘質土層（⑤とほぼ同じ）
⑧ 黄茶色粘質土層（ベース）



① 現在の溝
② 暗褐灰色粘質土層
③ 褐黒色粘質土層 }
④ 暗灰褐色粘質土層 } SD11
⑤ 暗黄灰褐色粘質土層 }
⑥ 暗茶灰色粘質土層 SD08
⑦ 暗黄灰色粘質土層 SD09
⑧ 灰茶色粘質土層
⑨ 黄灰色粘質土層
⑩ 茶褐色粘質土層 } 土坑
⑪ 黄褐色粘質土層 }
⑫ 黄茶色粘質土層（ベース）



① 褐黒色粘質土層 } SD11
② 暗灰褐色粘質土層 }
③ 暗茶灰色粘質土層 SD08
④ 濁白灰色粘質土層
⑤ 暗褐灰色粘質土層
⑥ 暗黄灰色粘質土層
⑦ 黄灰色粘質土層
⑧ 黄茶色粘質土層（ベース）

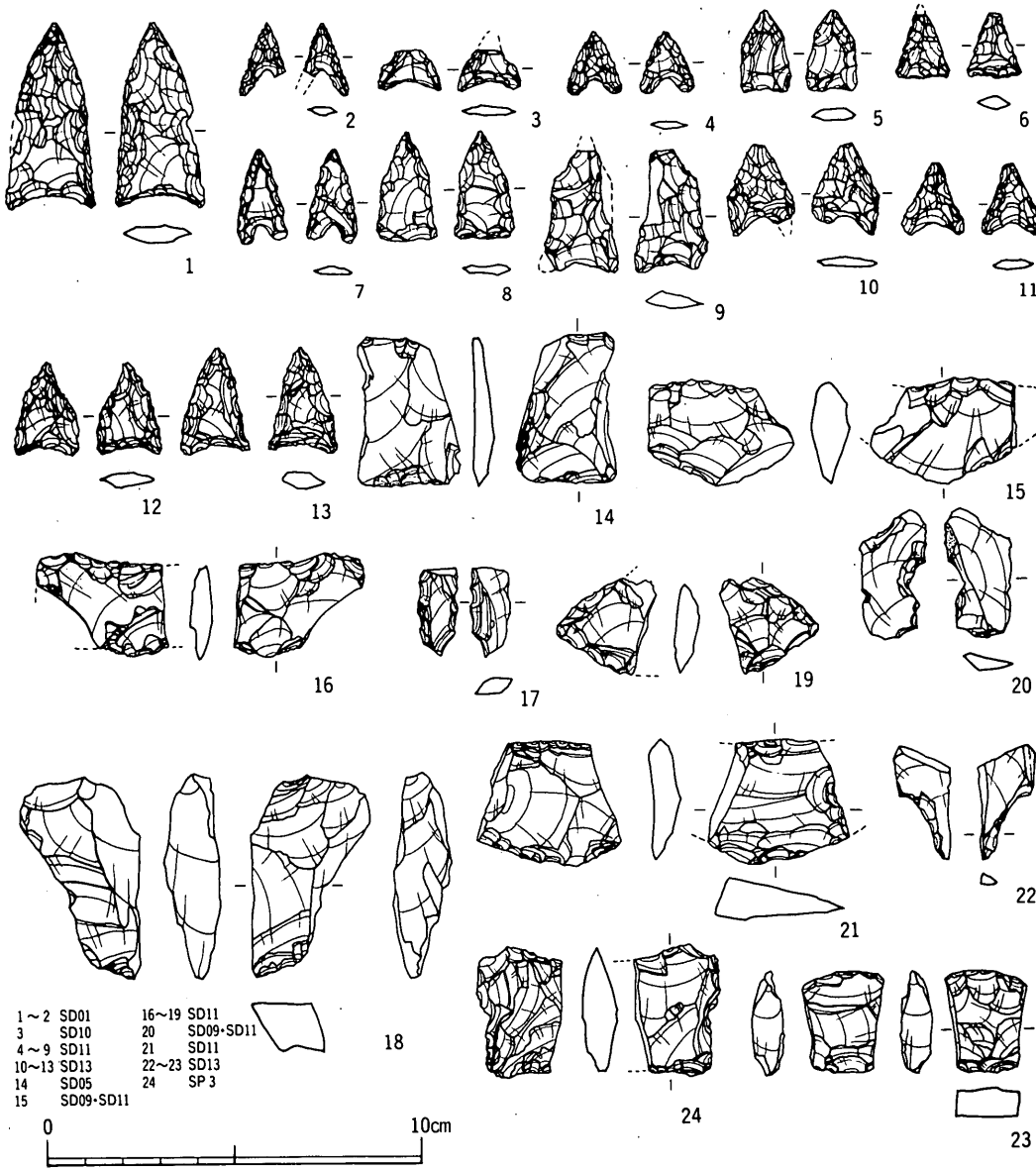
0 2m

平面図 80分の1
土層図 40分の1

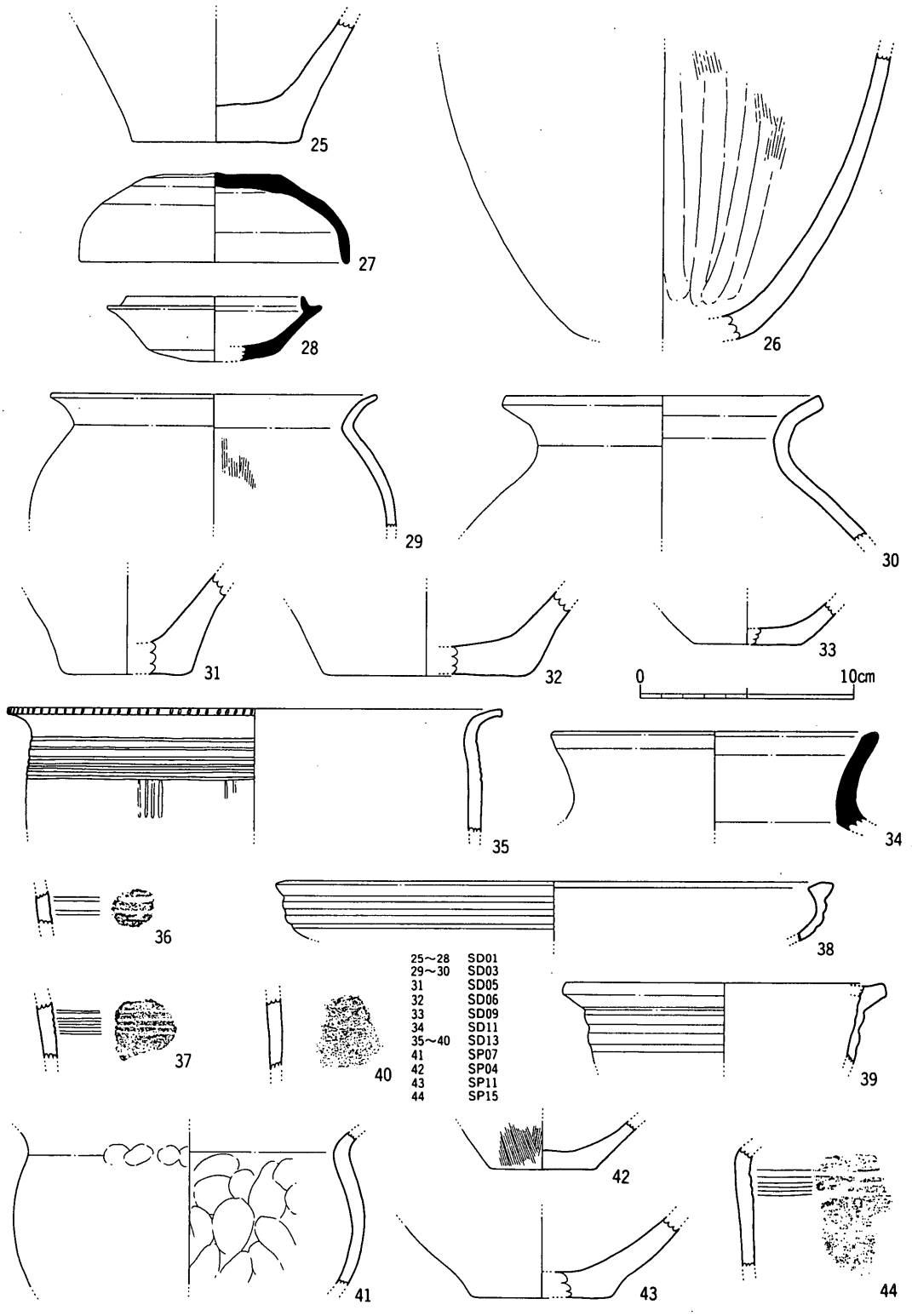
上図 上層平面図
下図 下層平面図

第5図　ＳＤ08・09・11平・断面図

は237cmを計る。桁行756cm・梁間196cm以上である。ＳＢ03は，ＳＢ02と直交する方位を持つ建物で，南西部が攪乱を受けて残存しないものの，梁間２間・桁行４間ほどの建物であろう。柱穴の中心間は146cmを計る。桁行は648cm・梁間は324cmとなる。ＳＢ04は調査区の東部に位置し，建物の一部はＳＤ11に接する。桁行544＋278cm・梁間298cmである。柱穴の中心間の長さは，桁行側で181.3cm・梁間側で298cmを計る。建物の東部の桁行側の柱穴間が278cmと他の柱穴間と比較すると広いため，１間×２間と１間四方の２棟になる可能性もある。ＳＢ05は，調査区の東南端で検出した掘立柱建物の一部と考えられる。庇を持つ可能性もある。桁行412cm・梁間204cm以上である。



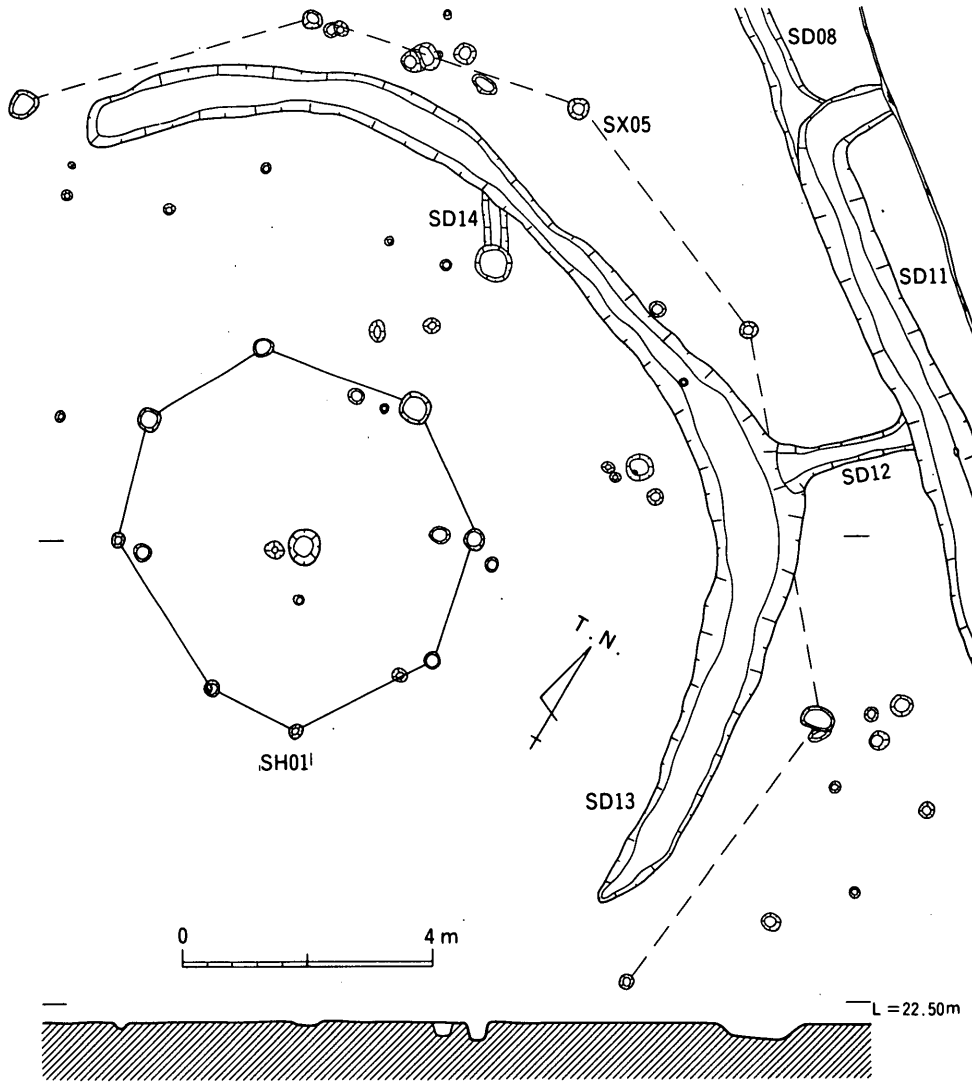
第６図　Ｉ区遺構出土遺物実測図（石製品）



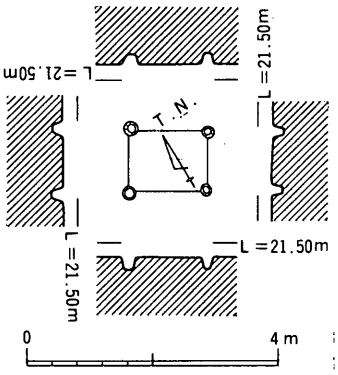
第7図　Ⅰ区遺構出土遺物実測図

柱穴の中心間の長さは，桁行側で137.3cm・梁間側で204cmを計る。

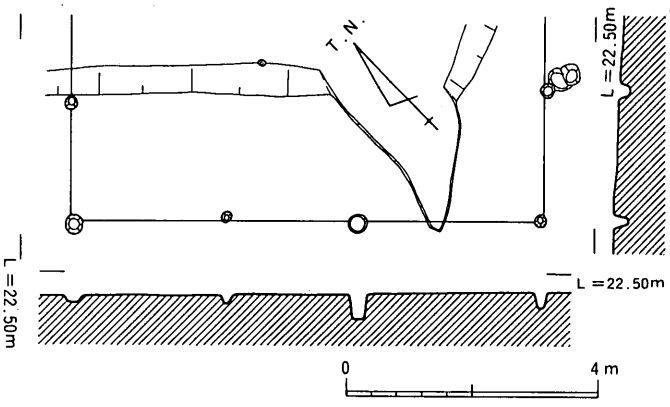
微高地上は削平を受けており，掘立柱建物の雨落ち溝等も消失しており，建物の時期の決定が非常に困難である。ただ，前述した建物の規模や立地の規格性からＳＢ02～04は同時併存の可能性があり，包含層出土の遺物の中には中世遺物もかなり出土しており，さほど古い時期の所産ではないだろう。



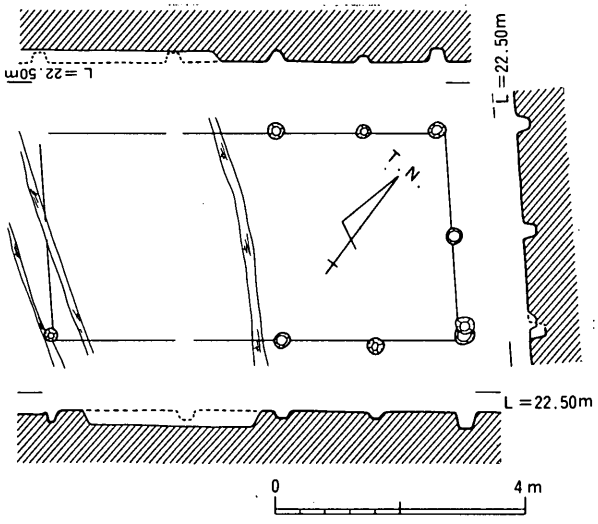
第８図　ＳＨ01平面図



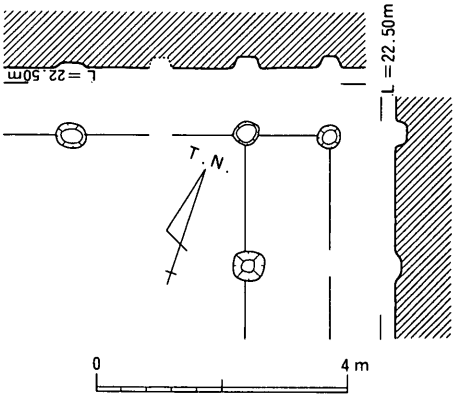
第9図　ＳＢ01平・断面図



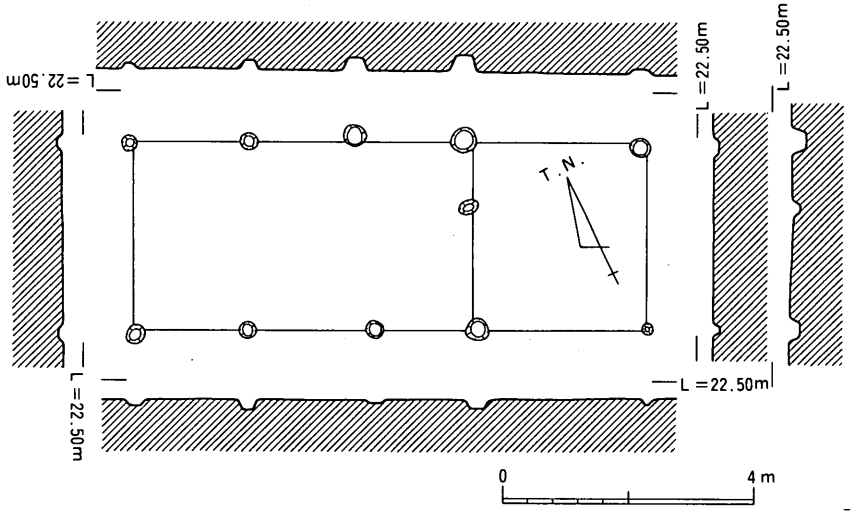
第10図　ＳＢ02平・断面図



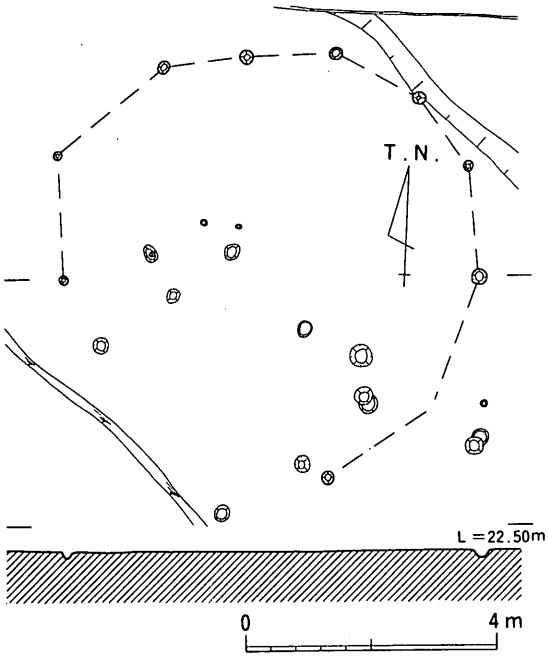
第11図　ＳＢ03平・断面図



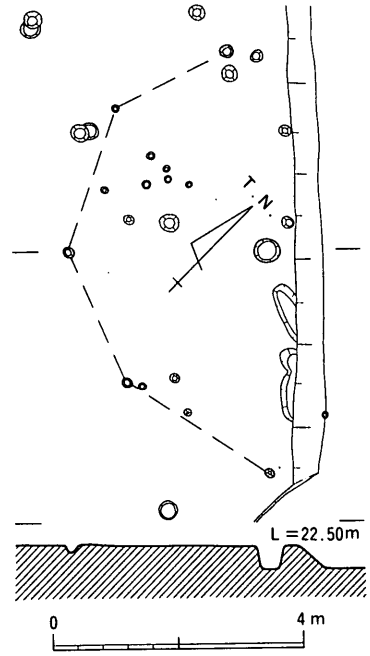
第13図　ＳＢ05平・断面図



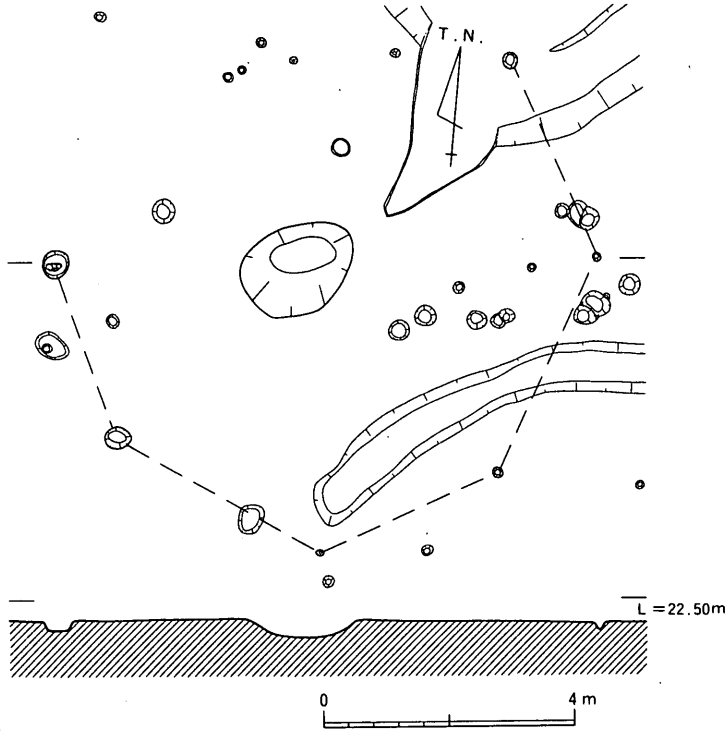
第12図　ＳＢ04平・断面図



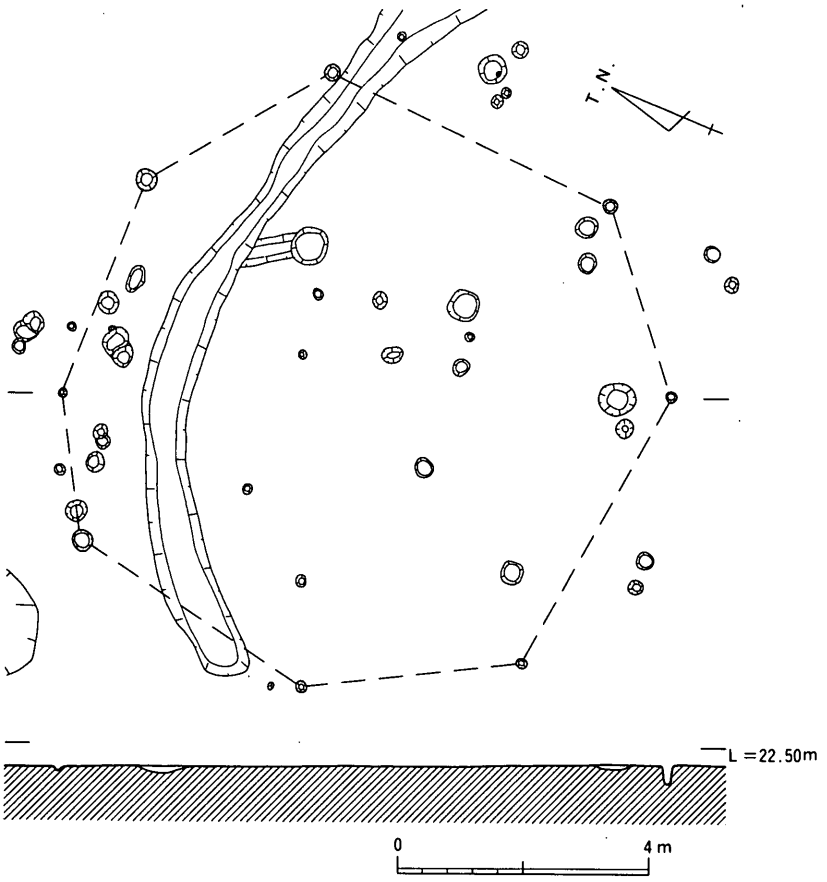
第14図　ＳＸ01平・断面図



第15図　ＳＸ02平・断面図



第16図　ＳＸ03平・断面図



第17図　ＳＸ04平・断面図

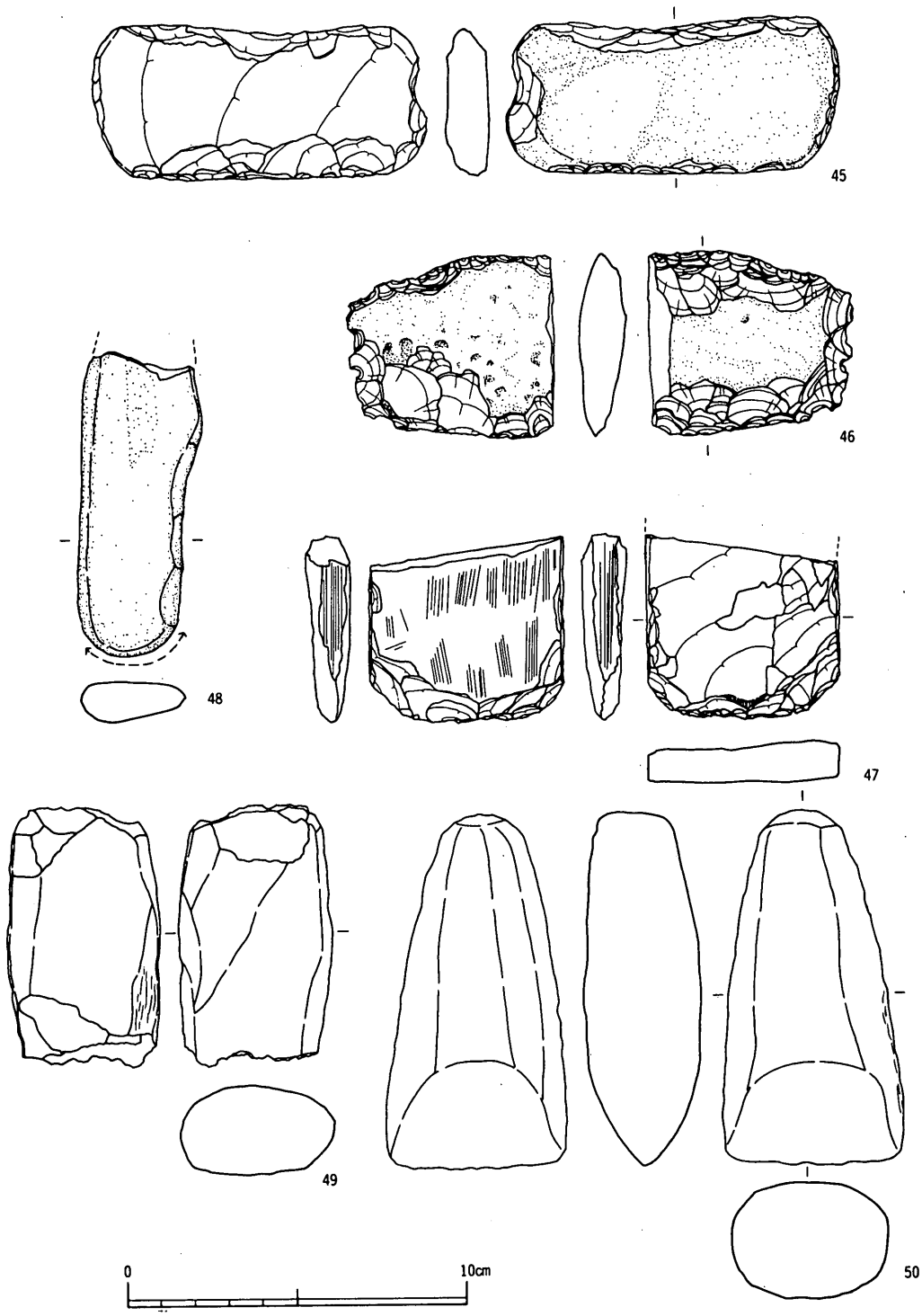
④　竪穴住居

竪穴住居と考えられる遺構は微高地上で，竪穴住居を少なくとも１棟検出した。

ＳＨ01は，中央部に焼土及び炭化物が入っていたＳＰ02があり，それを取り囲むように直径約６ｍの８角形状に柱穴がめぐる。さらにその外側に前述した排水溝付きのＳＤ13が半円形にめぐる。竪穴住居の平面形状は，柱穴の配列と周溝からしか推定しうる根拠はないが，直径７～８ｍほどの円形のものであろう。時期については，ＳＤ13出土遺物から弥生時代の中期と考えられる。

ＳＨ01以外に微高地上には削平を受けた竪穴住居の可能性が考えられる遺構がある。ＳＸ名を付けたものがそれにあたる。ほぼ円形に柱穴がめぐるという条件のもとに抽出した。いずれも平面分布上での抽出であり，可能性があるという程度のものである。

ＳＸ03は，中央に焼土と炭化物を含む土坑があり，取り囲むように直径８ｍ程の規模で南部を中心として柱穴が６穴めぐる。この種の遺構のなかでは，竪穴住居の可能性が最も高いものである。ＳＸ03の柱穴群はＳＨ01の周溝と考えられるＳＤ13と重なっており，前後関係が考えられる。ただ遺物の出土を見ないことと埋土間での切り合いがないため時期を特定できない。

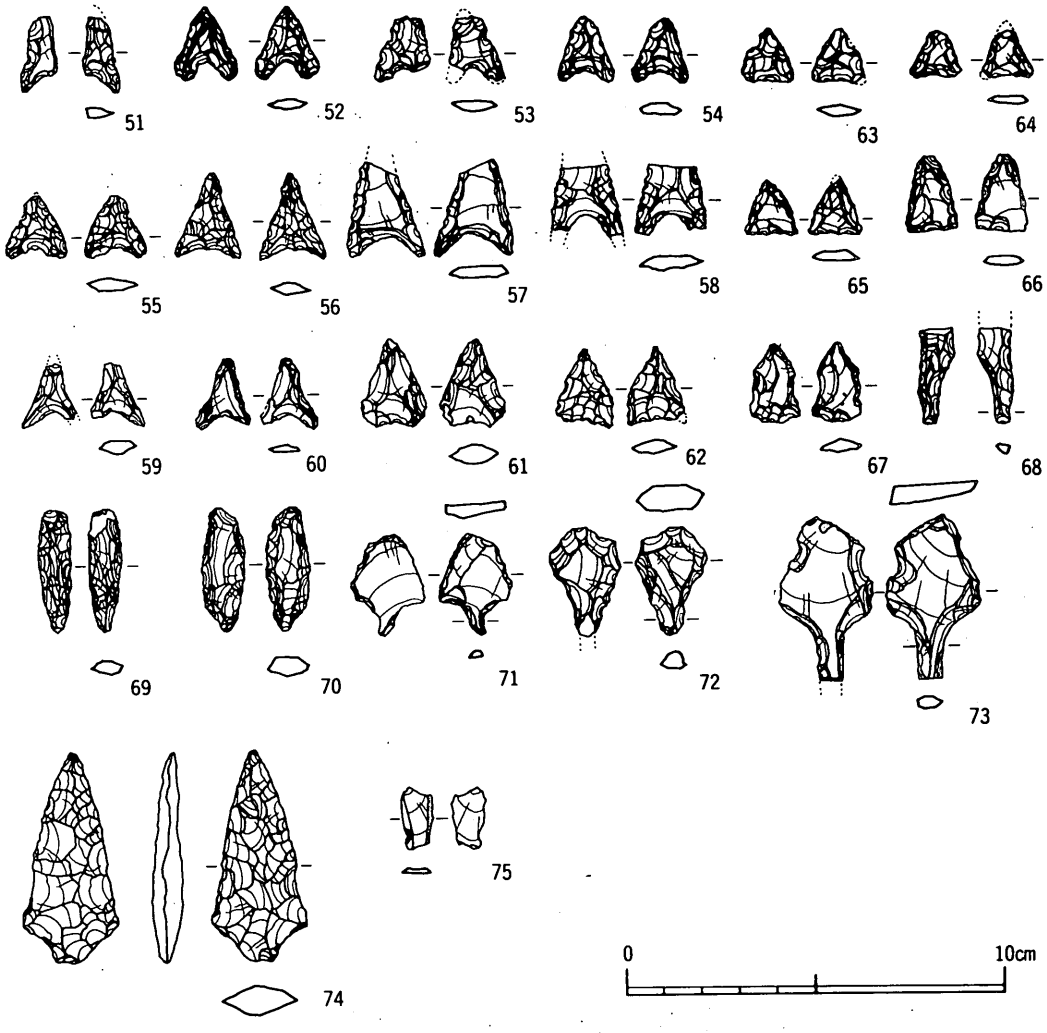


第18図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図（石製品）①

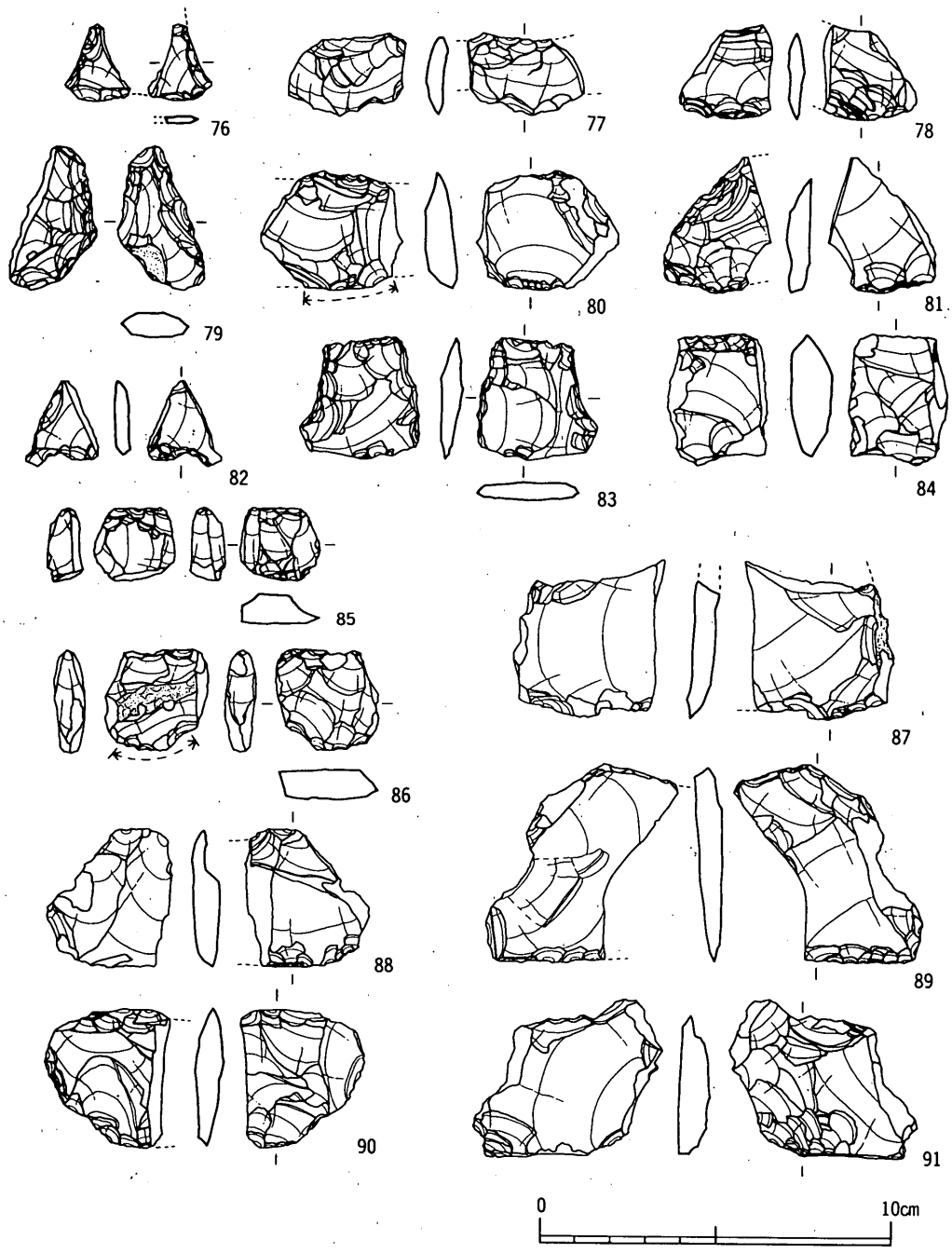
⑤ 包含層出土遺物

石製品（第18図－45～50，第19図－51～75）

45は，緑色片岩製の打製石包丁である。隅丸長方形を呈しており，側辺部には抉りが認められる。46は，サヌカイト製の打製石包丁である。ほぼ半分を欠損しているが側辺部に僅かな抉りが認められる。47は，緑灰色泥岩製の打製石斧である。刃部に擦痕がみられる。48は，緑色の結晶片岩で叩き石の可能性がある。49は，青白色の結晶片岩製で，一部に擦痕がある。石斧かあるいは叩き石の可能性がある。50は，結晶片岩製のバチ形蛤刃石斧である。石材の表面に1㎜内外の凹凸があり，明黄褐色の皮膜で覆われていて石材の表面は確認できない。51～66は，サヌカイト製の石鏃である。51～62は，凹基無茎式で，63～66は，平基無茎式で，67は，凸基無茎式（？）である。51は，先端から片側を欠き翼端は尖り，翼部は張りだす。52は，先端が尖り，翼部は丸み



第19図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図（石製品）②



第20図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図（石製品）③

を帯びる。平面形は二等辺三角形状を呈する。53は，先端・翼部が欠損しており，平面形は二等辺三角形状を呈する。54・55は，先端・翼部がやや丸みを帯びる。56は，二等辺三角形状を呈し，先端・翼部は尖る。57は，周辺に細かい調整が施されており，翼端は尖る。先端は欠損している。58は，先端・翼端が欠損するが，平面形は二等辺三角形状を呈すると思われる。59は，先端及び片翼が欠損している。60は，側片が内彎し，先端・翼部はやや丸みを帯びる。61・62は，繰り込みが小さく側片が内側に屈曲し，平面形は五角形状を呈する。63・64・65は，側辺・底辺の長さがほぼ等しく，平面図は正三角形を呈する。67は，五角形状に翼が張りだしている。底部はやや膨らんでいる。68～73は，石錐である。68は，基部を欠損しているものの，わずかに摩滅痕を残す。69は，柳葉形を呈する石錐である。周辺には調整が施されており，先端に摩滅痕がある。70は，周辺にのみ調整が施されており，錐部は彎曲している。71は，大きな基部と細くて小さな錘部を持つ。72は，基部から錐部にかけて急に細くなり，錐部が棒状に延びる。73は，やや大きめの基部を持つもので錐部が欠損しているものの典型的な石錐である。74は，有舌尖頭器で，全体に調整が摩滅している。側片は，先端から最大幅を持つ部分まで緩やかに外彎しながら続き，舌部に至る。75は，細石核より剝ぎ取られたチャート製の細石刃であろう。背面は，二面の樋状剝離痕を残し，側面には素材面を残している。腹面は，ポジティブな主要剝離面からなり，打点の位置は背面中央部の樋状剝離の打点位置とほぼ同じである。先端部の欠損は，後世のものと思われる。

第20図は，石器もしくはその製造過程で生じた調整の認められる石片である。

弥生土器（第21図－92～100）

Ⅰ区西半包含層からは，多量の弥生土器が出土している。そのほとんどは摩滅しており，実測可能な遺物は，数点にすぎなかった。底部形態には，穿孔のあるもの，上げ底気味に作られているもの，底部から1cm程垂直に立ち上がり外方に屈曲し延びる体部を持つものなどがある。底部は全てしっかりしたものばかりで，胎土に砂粒を多量に含む。

土師器（第21図－101～114）

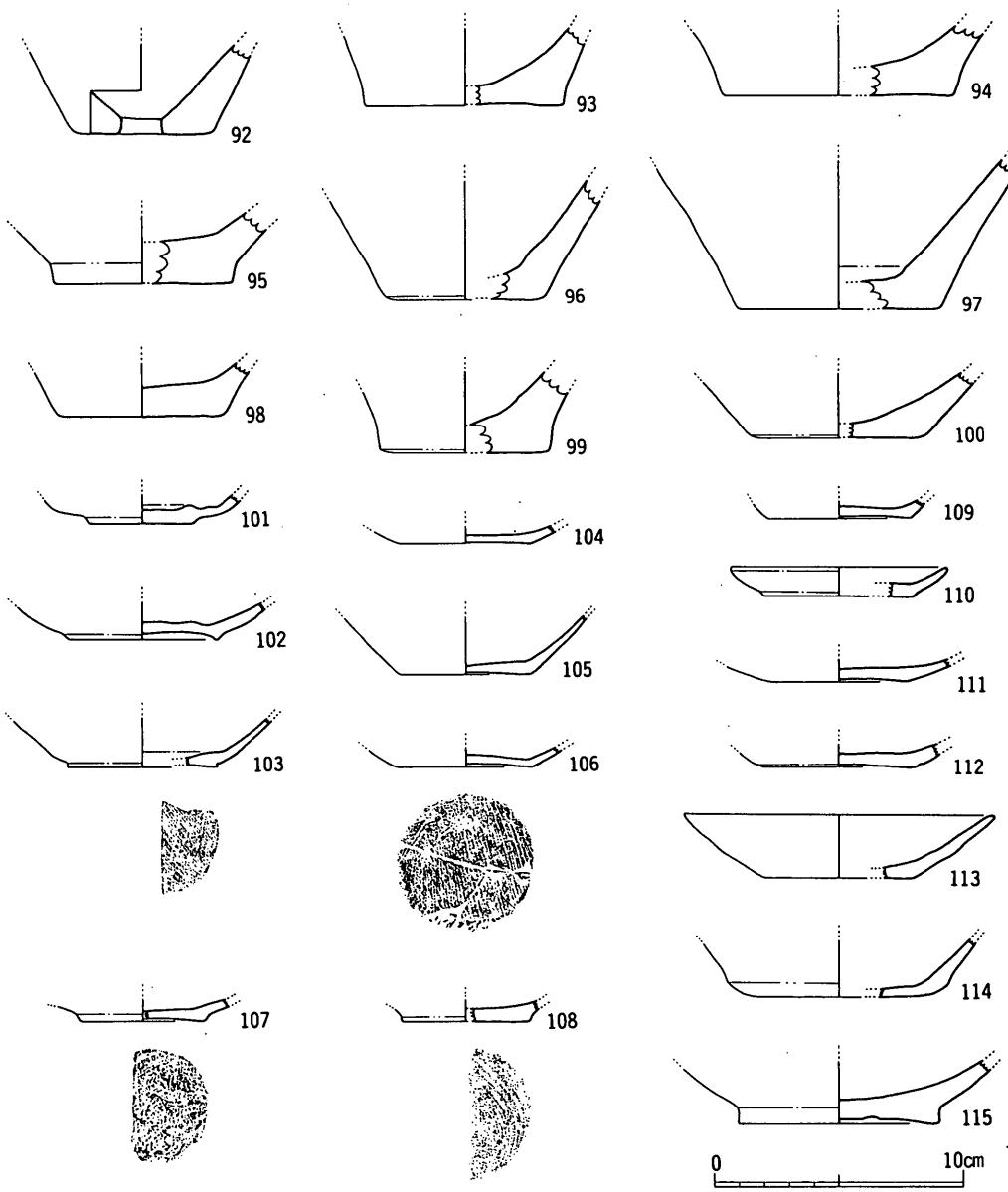
101～114は，土師器の坏である。そのうち101～110は，底部が糸切り調整されている。101～107は，糸切り痕が直線的であり，静止糸切りされたと考えられる。それに対し，108は，糸切り痕が曲線的であり，回転糸切りされたと考えられる。109・110は，摩滅しているもののわずかに糸切り痕が残る。111～114は，底部摩滅により，底部調整は不明である。

緑釉陶器（第21図－115）

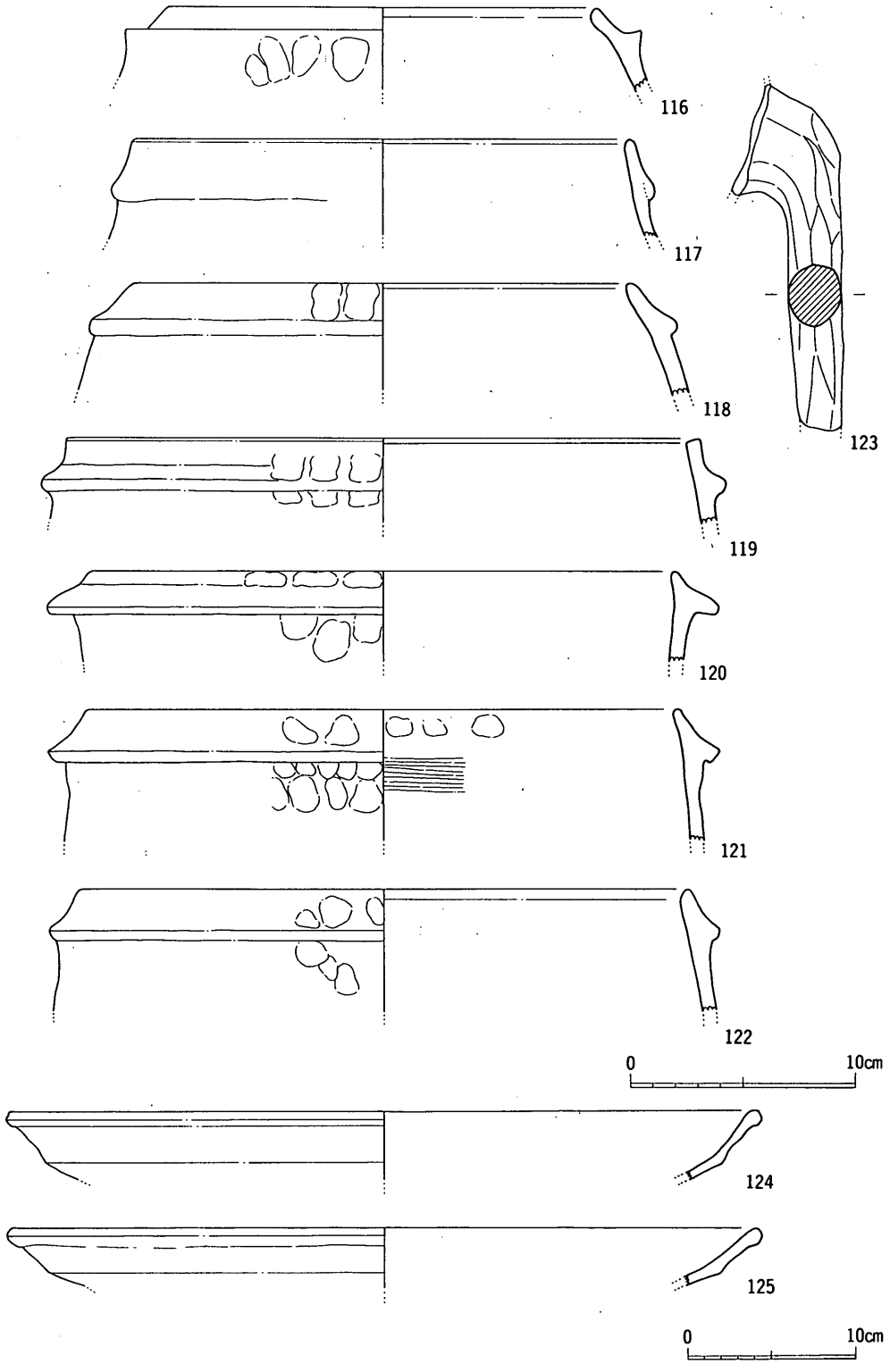
115は，須恵質の緑釉陶器である。底部はやや上げ底気味の蛇ノ目高台を呈しており，体部は内彎気味に立ち上がる。器表面は，黄緑色の釉がかかっている。

土師質土器（第22図－116～125，第23図－126～130）

包含層出土の土師質土器は，土釜・焙烙・土鍋・土錘などである。すべて，外面口縁下の鍔がかなり退化したものばかりである。全体にナデ調整されているものの，鍔の上下にはかすかに指頭痕が残る。117・118・121・122の鍔先端部は，下方に折り曲げられ，さらにナデ調整が施されている。123は，脚であり，全体に摩滅しているが一部にナデ調整が残る。124・125は，焙烙口縁部である。口径は，約45cmあるが，丸く外方に膨らみ，体部との境に稜を持つ。外面は，ススの付着によって黒ずんでいる。126～129は，土鍋の口縁部で，126は，やや立ち上がり気味であり，



第21図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図①



第22図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図②

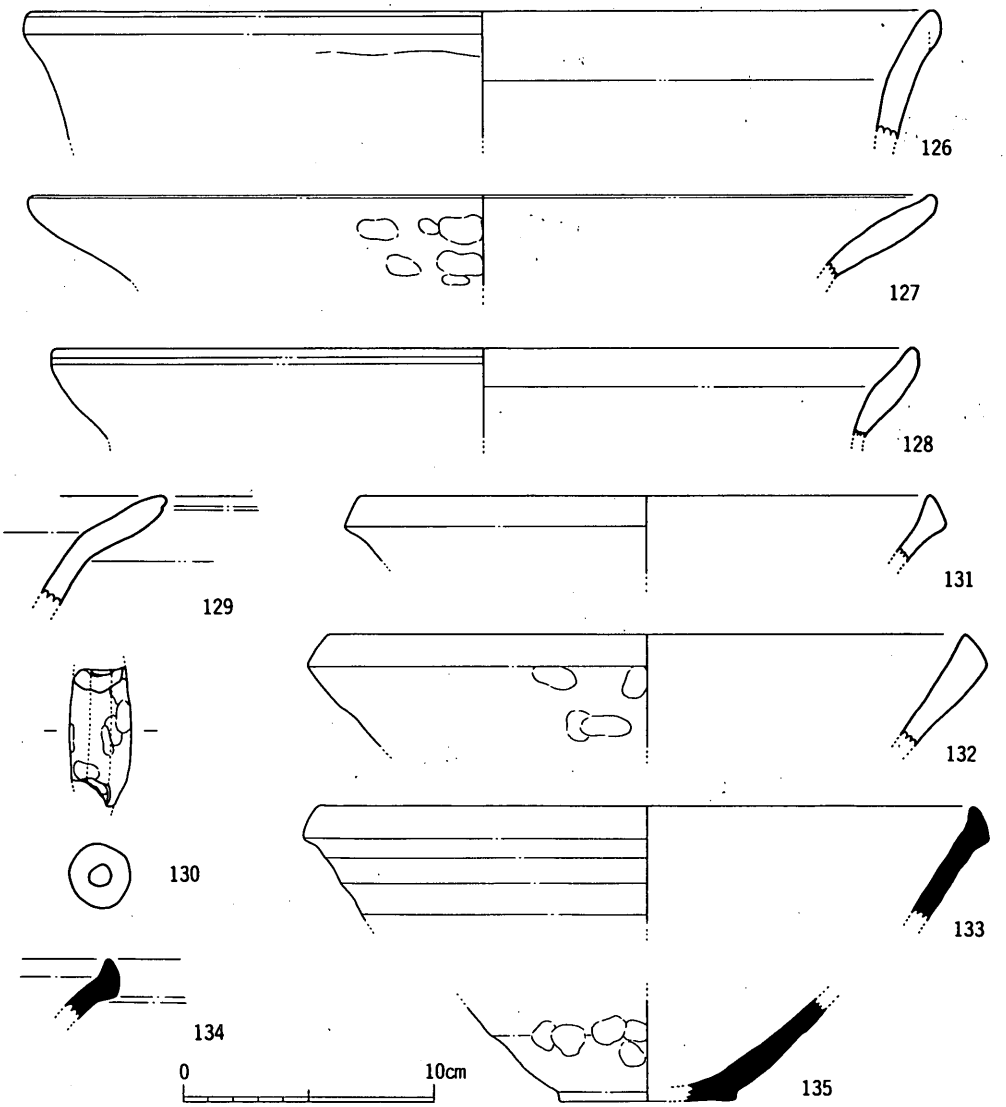
127はやや大きく外反し，外面に指頭痕を残す。129の口縁部は「く」の字に屈曲する。130は，土錘である。両端は欠損している。

瓦質土器（第23図－131・132）

131・132は，瓦質のこね鉢である。外面に指頭痕が見られ，口縁端部は三角形状につくられている。

須恵器（第23図－133～135）

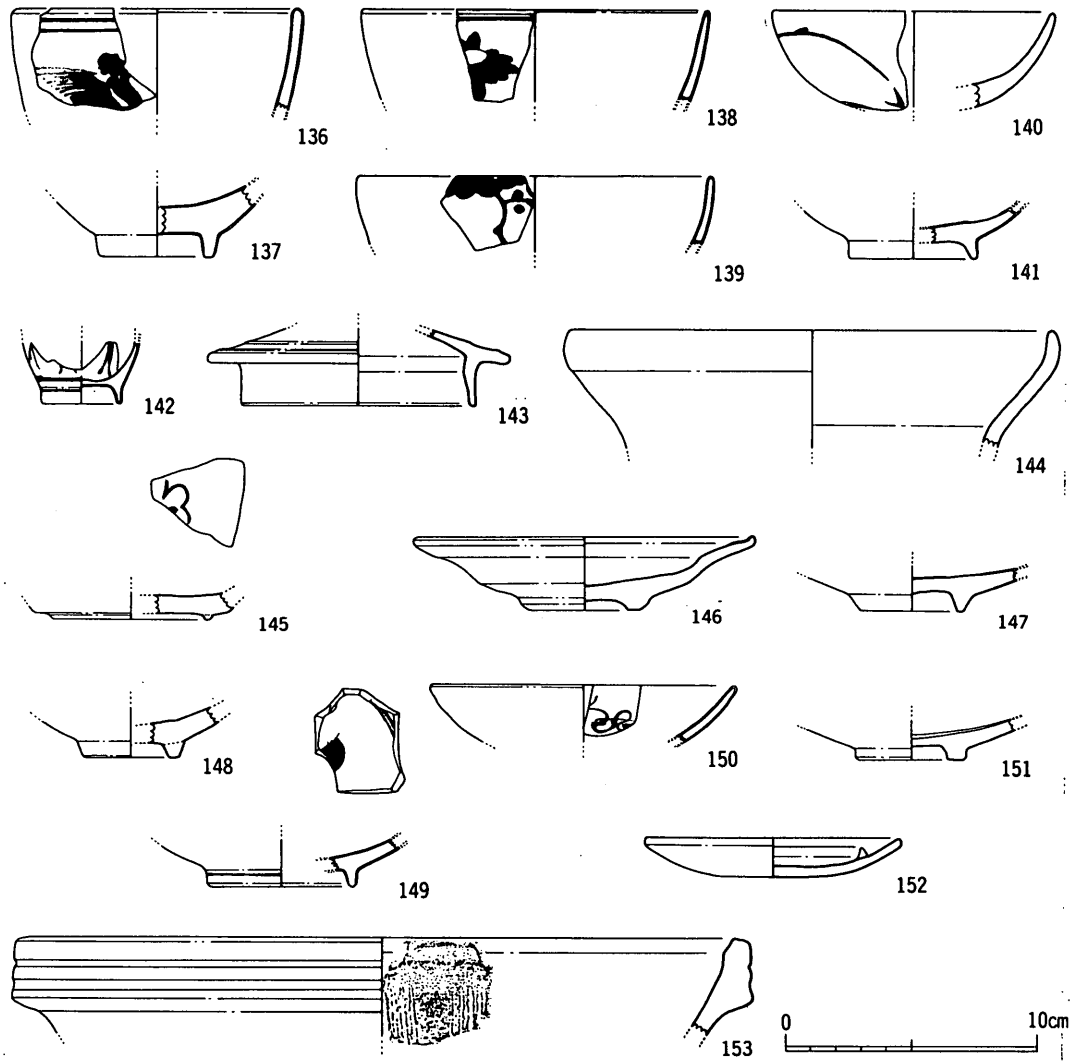
133～135は，東播系のこね鉢である。133・134の口縁端部は上下に拡張され，口縁端部上端を内方につまみ出している。外面下半には指頭痕が見られるが，ほとんどはヨコナデ調整されている。135の底部は糸切りされている。



第23図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図③

近世陶磁器（第24図－136～153）

第24図は，Ⅰ区包含層出土の近世陶磁器である。136～141は，碗である。136・137は，陶胎染付で，胎土はともに灰色であり，比較的精緻である。釉は136がオリーブ灰色，137が乳濁色釉である。時期は，17世紀末～18世紀中葉頃と思われる。138～140は，染付磁器である。138は，外面にコンニャク印判による施文が施されている。時期は，18世紀前半～18世紀中葉である。139には口縁端部外面に雨降り文が描かれている。140は，見込みに釉剝ぎ痕が残る。141は，青磁染付である。丸碗で見込みに蛇ノ目釉剝ぎが入る。A－2類(註2)とされるものである。蛇ノ目釉剝ぎ部には砂が多く付着する。時期は18世紀中葉～19世紀初頭頃と思われる。142は染付磁器の小瓶である。畳付けには砂が多く付着する。143は，陶器の蓋と思われる。外面にはオリーブ灰色釉が施され，ピラ掛けによる白色釉の圏線が入る。144は陶器の鉢と思われる。内外面ともに暗オリーブ色釉が



第24図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図④

施されている。145～151は皿である。145は印花文を見込み中央に持つセト・ミノ系陶器皿である。時期は16世紀前半頃と思われる。146は唐津溝縁皿である。内面見込みに砂目積痕を持つ。畳付けから高台裏・高台内にかけても同様に砂目積の痕跡が残る。時期は1600～1630年代と思われる。147は唐津系青緑釉皿である。外面の釉は146同様，外面途中までしか施されていない。時期は17世紀後半～18世紀前半頃と思われる。148～150は染付磁器である。148は内面見込み部に蛇ノ目釉剝ぎが施されており，砂が多く付着する。外面の釉も高台脇までである。時期は17世紀後半～18世紀前半頃と思われる。149は内面に黒色釉を厚く施した陶器皿である。152は灯明皿である。内面に突帯を持ち，灯芯受けの凹部が入る。内面及び口縁端部には塗り土が施されている。備前系と思われ，18世紀中葉以降(註3)のものである。153は擂鉢である。外面は口縁部と体部で色が重なり，重ね積みをしたようである。おろし目の上端は揃えていない。備前系と思われ，17世紀後半～18世紀頃のものである。

(3) 小　結

第Ⅰ調査区では，調査区の南西部の微高地部で弥生時代中期の竪穴住居と掘立柱建物群を検出した。現状での地形を見ると，微高地が南方へ広がる。また，予備調査の結果では，かなりの削平を受けており，遺構の残存は考えにくいものの，かつては微高地上を中心として弥生時代前期・後期の集落域も展開していた可能性が高い。

調査区内からは，弥生時代前期・後期の遺物も出土しており，微高地上を中心として集落域が広がっていた可能性が考えられる。

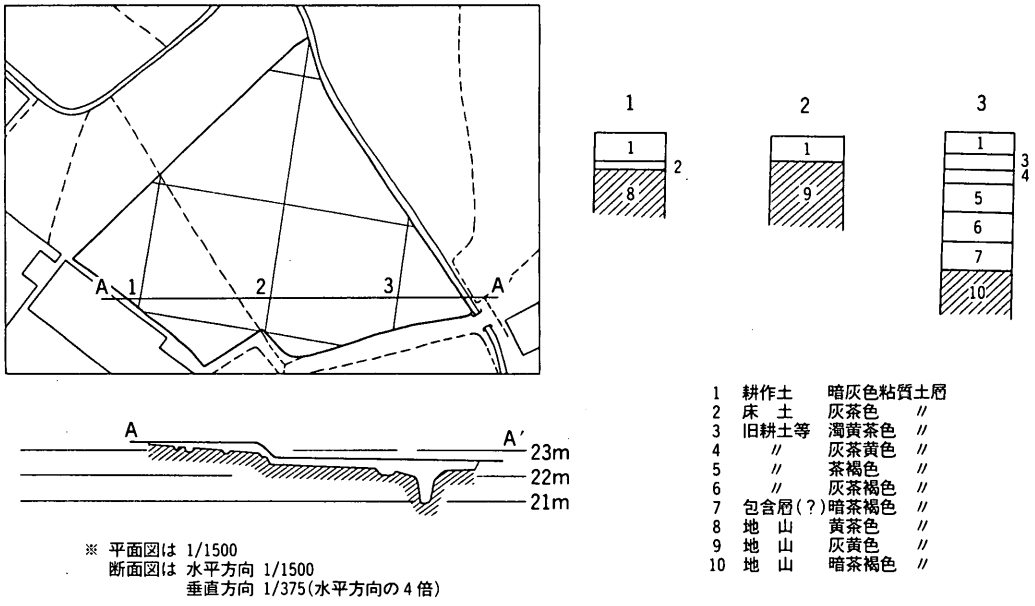
また，旧石器時代の遺跡の様相が不明な点が多いこの地域でのチャート製の細石刃やサヌカイトとは異なる泥岩を用いた有舌尖頭器が出土した点は注目される。

3．II区

(1) II区の概要

II区は，I区の低丘陵の南側丘陵の北東斜面から谷部にかけての部分であるが，I区同様に水田造成による地形改変を受けており，現状で調査区は北東方向に階段状に下降する2段の平坦面と成っている。上段および，下段西半部が丘陵斜面に，同東半部が谷部に当たる。上段は，削平が著しく現耕作土・床土直下に地山層が表れる（第25図－1，2）。

下段西半部の谷底部では，現耕作土・床土直下に厚く旧耕作土および水田造成に伴う盛土が堆積しており下位には，遺物包含層も残存している（第25図－3）。



※ 平面図は 1/1500
断面図は 水平方向 1/1500
垂直方向 1/375(水平方向の4倍)

第25図　II区基本層序と地形断面図

0 20m

第26図　II区平面図

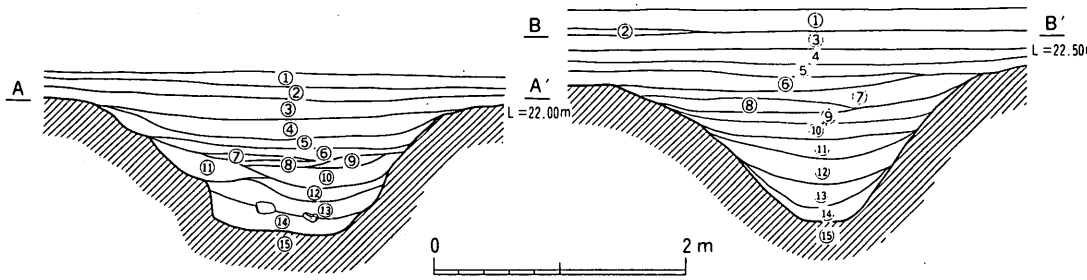
(2) 遺構と遺物

① ＳＤ16

Ｊ－９・10で検出され，最大幅７ｍ弱・最深部3.3ｍで，Ｎ15°Ｅ，Ｎ50°Ｅに流路を取る小河川を総長15ｍほど確認した。川底には，約30cm大の石があり，その両岸には，遺物の出土したピットが見られる。溝底は起伏があり自然流路の可能性が高い。

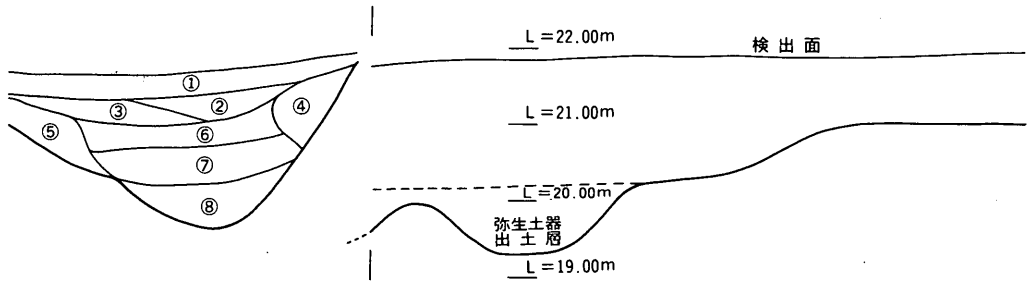
検出面から６層目には，土師器坏が７個体かさなって出土している。(第29図－154～160)。底部は，糸切りされており，中心部が浮き上がっている。体部は，水平より約40°の角度を持って外反する。最下層から瓦質土器・須恵器が出土した（第29図－161～163図)。161の瓦質土器は，ほぼ完形で，底部は粘土紐の貼り付け高台で，体部は灰黒色を呈している。162は，瓦器である。底部が欠損しているものの，内面にはヘラミガキが見られ，外面には指頭痕が見られる。163は，須恵器である。底部のみを残し，ヘラ切りの痕をとどめる。

その北には，30～40cmの大きな石が検出された。そのすぐ下流には，深い掘れ込みがあり，そ



①灰茶褐色粘質土
②暗茶褐色粘質土
③暗茶褐色粘質土（ベースの粘土粒を含む）
④暗茶褐色粘質土（③より黒っぽい）
⑤濁灰黄褐色粘質土（ベースの粘土粒を含む）
⑥黄茶褐色粘質土（ベースの黄色の礫・粒土を多く含む）
⑦黒灰色粘質土
⑧淡黄灰色粘質土
⑨黒灰色粘質土
⑩暗茶灰褐色粘質土（さくい）（ベースの礫を含む）
⑪淡灰黒色粘質土
⑫黒灰色粘質土
⑬濁灰黒茶色砂質土（黄色の粘土粒を含む）
⑭黒灰色粘質土（瓦質土器出土層）
⑮淡黄茶色粘質土（ベース）（マンガン粒を多く含む）
①耕作土
②濁黄茶灰色粘質土
③灰茶黄色粘質土
④茶褐色粘質土
⑤灰茶褐色粘質土
⑥暗茶褐色粘質土
⑦暗茶褐色粘質土（⑤よりも黒っぽい）
⑧暗茶褐色粘質土（さくい）
⑨暗褐灰色粘質土（黄色の粒土3～5mmの大の小礫を含む）
⑩暗褐灰色粘質土（黄色の粘土3～5mm大の小礫を含む）（さくい）
⑪暗灰茶褐色砂質土（黄色の粘土粒５mm大の小礫を含む）
⑫濁灰黒茶色砂質土（黄色の粘質土を多く含む）
⑬黒灰色粘質土
⑭灰色砂質土（さくい）
⑮淡黄茶色粘質土（ベース）（マンガン粒を多く含む）

第27図　ＳＤ16土層図



①黒灰色粘質土
②灰色粘質土
③黄灰色粘質土
④黄灰色砂質土
⑤黒灰色粘質土
⑥暗灰黄色粘質土
⑦黒灰黄褐色粘質土
⑧黒灰色砂質土

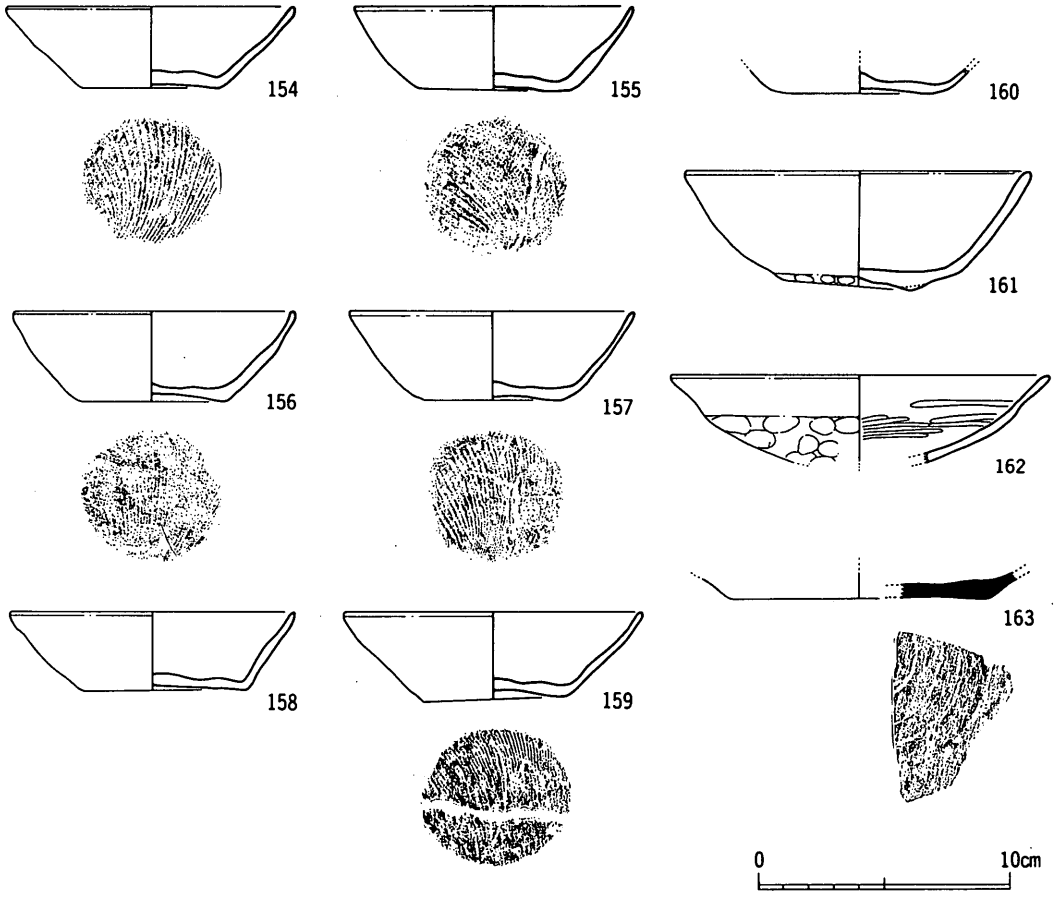
第28図　ＳＤ16縦断面模式図

こから，弥生土器が出土している（第30図－164～179）。164は，口縁部が拡張している。165は，口縁端部上面をつまみ上げており，165は，口縁外部に鋸歯文が施されている。167は，外面に叩き目が施されており，上部には，さらにナデが施されている。168は，小型の支脚で，上部が欠損している。やや傾きを持ち，全面にナデが施されている。169～173は，しっかりとした平底を持つ。174は，底部の縁辺部が丸みを帯びている。他の底部に比べて大きく，他の平底よりやや底が薄くなると考えられる。175は，弥生土器の底部で，体部は，やや厚い。外面は，ハケ目があり，底部縁辺部には，指頭痕が顕著に認められる。

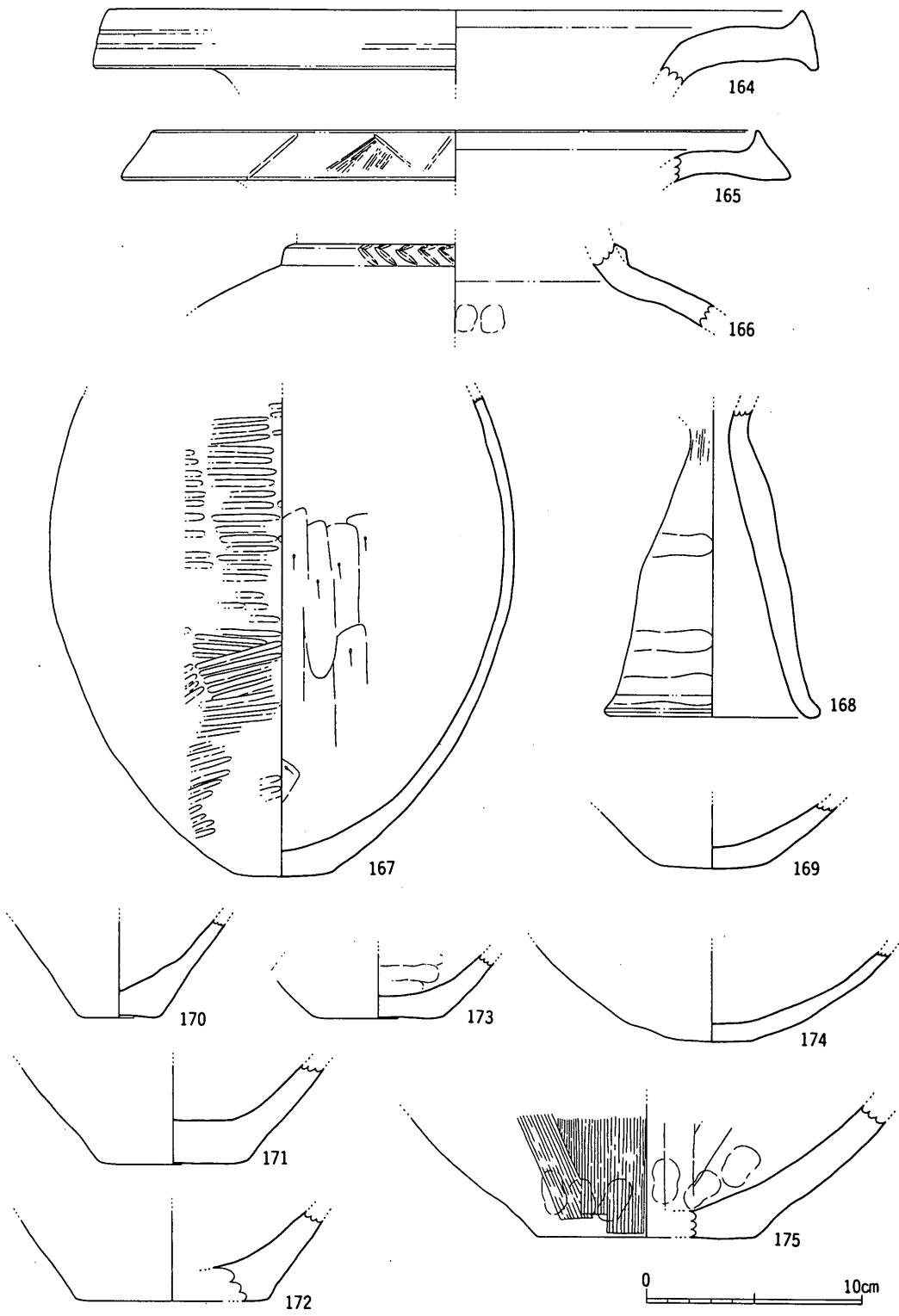
176～178も同じく溝底のくぼみから出土した弥生土器である（第31図）。内面に稜を持ち，「く」の字に外反する甕の口縁である。

179は，北壁精査中に，右岸の下層より出土した甕である。（第31図）。外面は，ナデ調整が施され，内面には指ナデの痕が明瞭に遺存する。頸部には，内外面に指頭痕が見られる。また，底部外面には，黒斑が広がっている。体部内面には，粘土のつなぎ目が見られる。

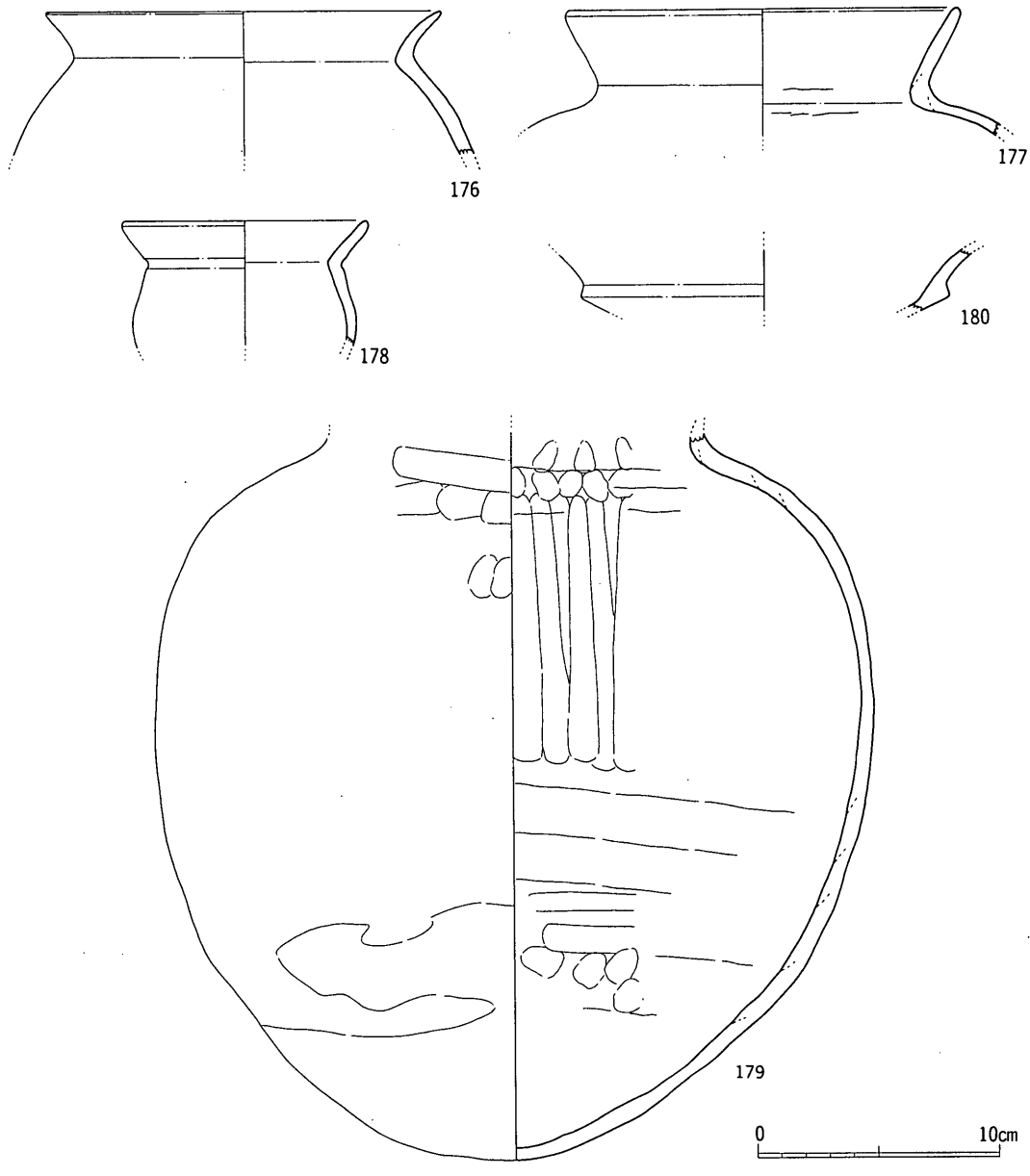
180は，北端部最下層から出土した高坏である。体部は，くびれを持ちながら外反する。内外面



第29図　ＳＤ16出土遺物実測図①



第30図　ＳＤ16出土遺物実測図②

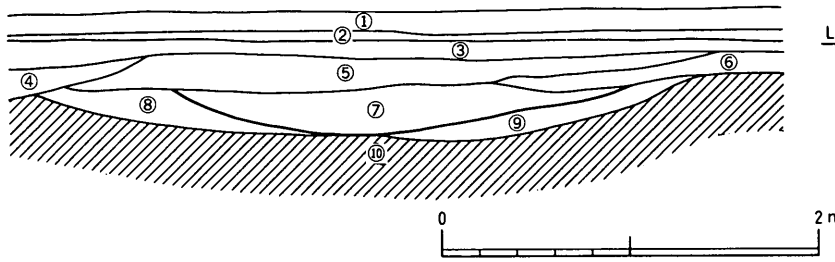


第31図　ＳＤ16出土遺物実測図③

はヨコナデ調整されている。

②　ＳＤ17

Ｉ－９・Ｊ－９に位置し，幅3.2m，深さ0.3mの規模を計る。長さ36mほどを検出した。真北から西にやや振った方位を呈し，北端部で東に流路を向ける。埋土は砂であったが，溝底には鉄分が沈着しサビ状に硬化した砂層がみとめられた。遺物は，縄文晩期の土器片の口縁部と炭化物が出土している（第33図－181)。表面は，暗茶褐色を呈し，口縁部内面に削り出し部を持つ深鉢（岩田Ⅳ類）である。



①耕作土
②灰黄茶色粘質土
③灰茶色粘質土
④暗茶褐色粘質土
⑤黄灰褐色砂質土(マンガンを念む)
⑥灰茶褐色砂質土(マンガンを多く含む)
⑦暗黄灰褐色砂質土
(⑤よりもマンガン含有量が多く，よくしまっている)
⑧黄灰褐色砂質土(⑤よりさくい)
⑨黄茶褐色粘質土(マンガンを多く含む)
⑩濁灰黄色粘質土(マンガンを多く含む)

第32図　ＳＤ17土層図

③　ＳＤ18

この溝は，Ｉ－９で検出され，長さ560cm，幅240cm，深さ38cmで，ほぼ真北に流路を取る。ＳＤ17から派生した溝である。ＳＤ17とＳＤ18に，明確な切り合い関係は認められない。遺物は，炭化物，土器片が出土している。

④　ＳＤ19～ＳＤ22

いずれも残存が悪く連続しては検出できなかったものの，流路方面からすれば同一のものか，近似した時期の所産である可能性が考えられる。

ＳＤ19は，Ｈ－８，Ｉ－８で検出され，長さ880cm，幅60cm，深さ８cmほどを計る。流路は真北に近い。９ｍほどの長さを検出した。遺物は，土師器片，須恵器片が出土している。

ＳＤ20は，幅50cm，深さ20cmほどを図り，ＳＤ19の西側を平行して走る。長さ１ｍほどを検出した。遺物は，弥生時代の鉢が出土している（第33図－182)。底部が欠損しているが，内面に指頭痕を残し，ゆるやかに立ち上がる。

ＳＤ21は，Ｉ－８で検出され，長さ440cm，幅96cm，深さ５cmで，Ｎ15°Ｅに流路を取る。遺物は，磁器片，須恵器片，土師器片が出土している。

ＳＤ22は，Ｉ－８の東部で検出され，長さ90cm，幅32cm，深さ10cmで，真北方向に流路を取る。遺物は，須恵器の高台，染付碗の口縁部が出土している（第33図－183・184)。

⑤　ＳＤ23

この溝は，Ｉ－８，Ｊ－８，Ｋ－８で検出され，最大幅1.1m，深さ15cmほどを計る。長さ20mほどを確認した。真北方向に走り，ＳＤ25を切っている。遺物は，石鏃，須恵器の口縁部，弥生土器壺口縁部が出土している（第33図－185・186・191)。191は，先端・片翼が欠損している。186は，口縁端部をわずかに拡張している。全体に摩滅しており，調整は不明である。

⑥　ＳＤ24

この溝は，Ｊ－８で検出され，現在の水田に伴う段落ち部と平行して走る。最大幅64cm，深さ10cmほどを計る。長さ９ｍほどを検出した。ＳＤ27を切っている。遺物は磁器片，須恵器片が出

土している。

⑦　ＳＤ25・28

いずれもＳＫ08およびその東側の段落ち部をめぐるような方向を見せており，出土遺物では時期が特定できないものの関連がある遺構である可能性が高い。

ＳＤ25は，Ｊ－８で検出され，幅80cm，深さ10cmほどを計る。長さ６ｍほどを確認した。

ＳＤ28は，Ｊ－８，Ｋ－８で検出され，長さ2,120cm，幅110cm，深さ20cmほどを計る。北部で彎曲した流路を取り，ＳＤ27・29を切る。遺物は，須恵器壺の頸部から口縁部，土師器口縁部が出土している（第33図－189・190）。

⑧　ＳＤ26

この溝は，Ｊ－８で検出され，長さ110cm，幅56cm，深さ13cmを計る。Ｎ35°Ｅの方位を示し，ＳＤ25に切られている。遺物は出土していない。土坑の可能性もある。

⑨　ＳＤ27

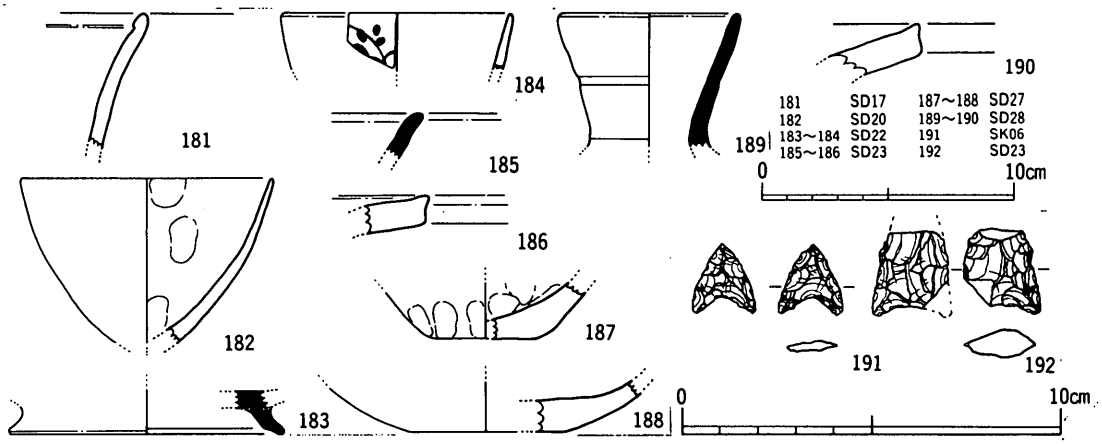
この溝は，Ｊ－８で検出され，幅70cm，深さ15cmで，真北に近い方位を呈する。長さ15ｍほどを検出した。ＳＤ24・28に切られている。遺物は，弥生後期と考えられる土器の底部が２点出土している（第33図－187・188）。187は，外面に指頭痕がみられ，内面には，指ナデが施されている。188は，全面ナデ調整されている。切り合い関係，出土遺物より，Ｊ－８では一番古い溝と考えられる。

⑩　ＳＤ29

この溝は，Ｊ－８で検出され，幅30cm，深さ５cmを計り，長さ２ｍほどを検出した。Ｎ75°Ｅに流路を取る。ＳＤ28に切られる。遺物は出土していない。

⑪　ＳＤ30

この溝は，調査区の西端のＪ－７・８で検出され，幅70cm，深さ８cmほどを計る。長さ10ｍほどを検出した。Ｎ65°Ｅに流路を取る。遺物は，須恵器片，土師器片が出土している。



第33図　ＳＤ出土遺物実測図

⑫ ＳＫ06

Ｊ－９で検出された。平面形は，長径84cm，短径68cmの楕円形を呈しており，深さは，10cmを計る。遺物は，石鏃１点，炭化木材１点が出土している（第33図－192)。石鏃は，くり込みがあり，側辺はやや内彎しながら延びる。炭化木材は，長さ5.5cm，直径2.7cmの棒状で，ひびわれが無数に走っている。

⑬ ＳＫ07

Ｉ－８で検出された。平面形は，大きさ50×80cmのひずんだ台形状を呈しており，深さは，24cmを計る。遺物は出土していないが，埋土や位置からＳＤ21に続く溝の一部と考えられる。

⑭ ＳＫ08

Ｊ－８で検出された。平面形は，大きさ160×110cmのひずんだバチ形を呈しており，深さは25cmを計る。東側の段落ち部とＳＤ25・28との間に位置する。遺構内部からは多量の須恵器とカマドが出土した。埋土はわずかで，ほとんど遺物によって埋まっていた。出土状況からすれば平安時代前期の一括資料で，出土した須恵器には坏・皿等が欠落し貯蔵形態のものからなる点が遺構の機能を考えるうえでは注目される。(第35～37図)。

193は，須恵器の壺である。全面，ヨコナデ調整されており，底部には，ヘラケズリが施されている。底部から体部にかけて急に立ち上がり，ヘラケズリによって形成された面を持ち，肩部から頸部にかけては，ゆるやかに内彎する。

194は，やや外反する高台を持ち，水平面より60°の角度ですぐに内彎しながら立ち上がり，最大径部からは内彎しながら頸部へとつながる。頸部は，やや開きながら外反する。全面，ヨコナデ調整されている。

195は，壺の肩部から口縁部である。ゆるやかな丸みを持った肩部から，やや外反しながら，一気に立ち上がっている。全面，ヨコナデ調整されている。

196は，薬壺の肩部である。肩部は，ゆるやかに内彎し，頸部は，垂直に立ち上がる。

197は，壺の底部から体部である。底部は，平坦で，体部との境に明瞭な稜を持つ。体部は，やや内彎しながら立ち上がる。

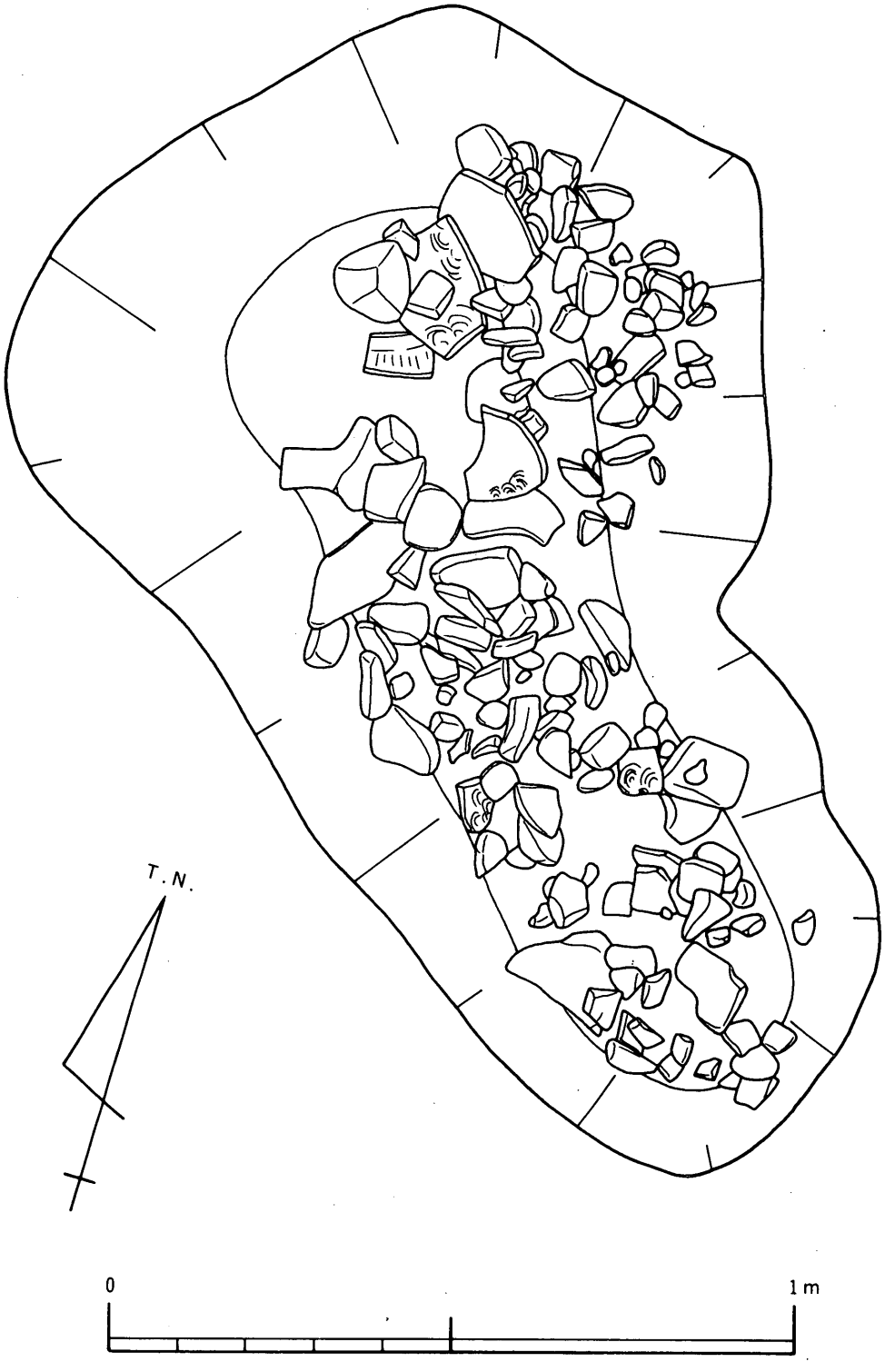
198は，須恵器壺の頸部である。肩部から明瞭な稜を持ち，垂直より約10°外反する。

199は，須恵器壺の頸部である。198より緩やかに外反しながら立ち上がる。

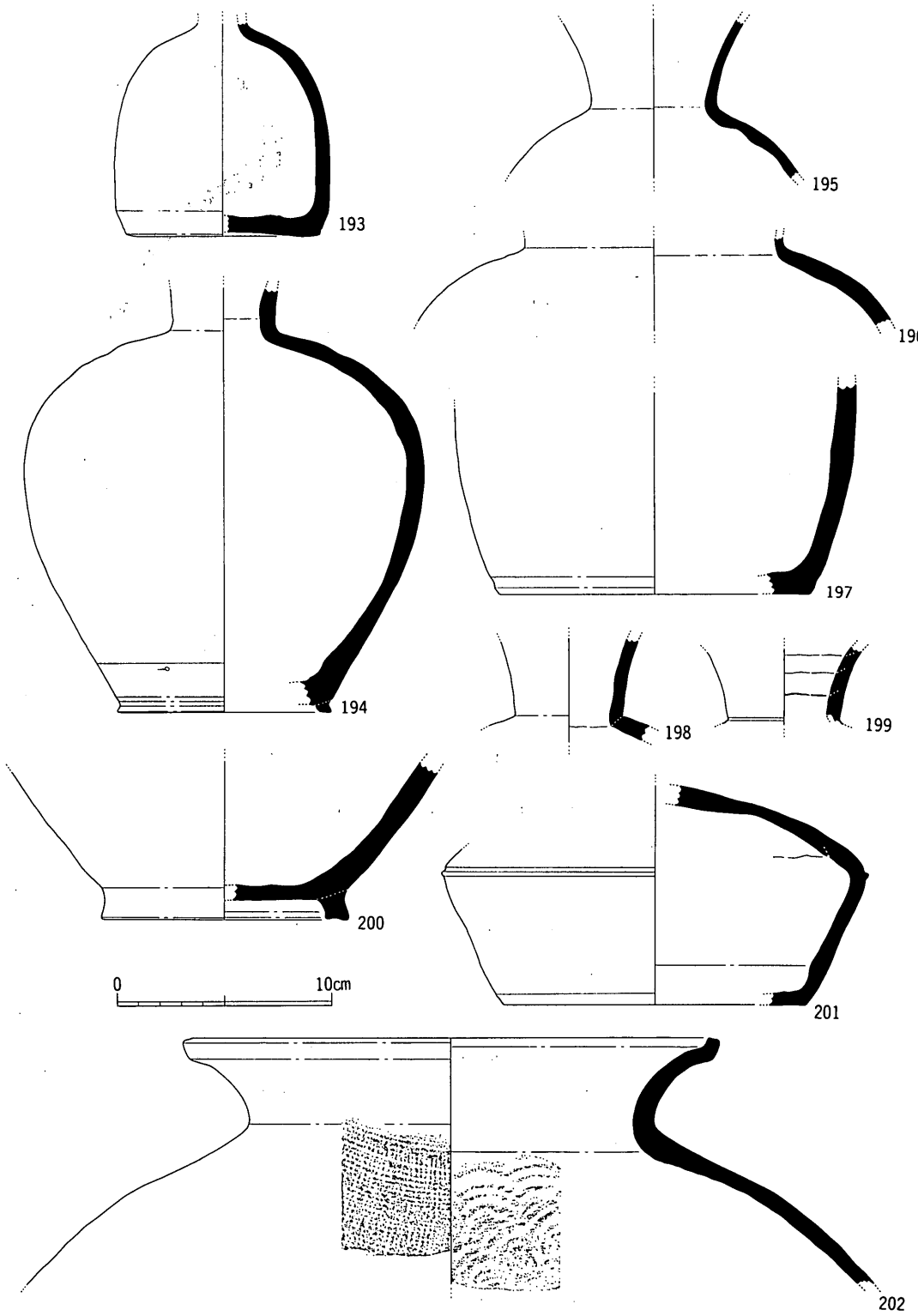
200は，須恵器の高台付壺の底部である。やや外反する高台を持ち，水平より約40°の角度でやや内彎しながら立ち上がる。

201は，平瓶である。平底を呈しており，水平より約65°で立ち上がる。肩部からは，ゆるやかに内彎する。

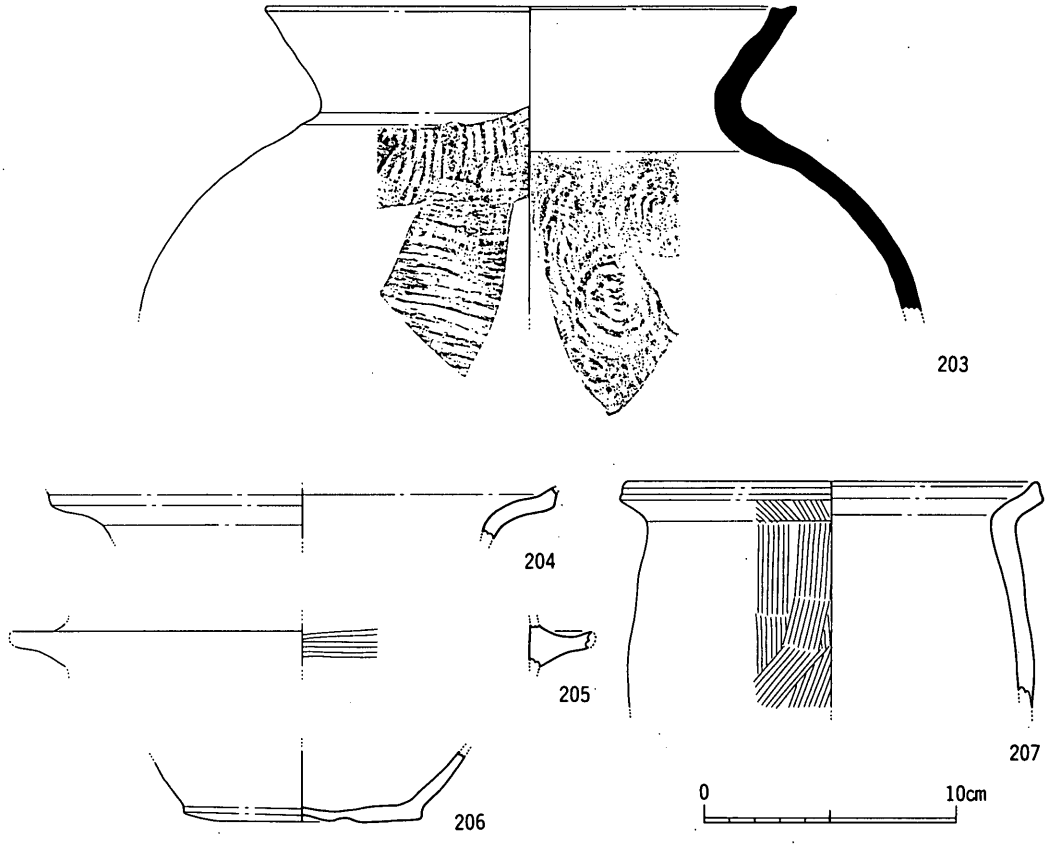
202は，口径24cmにも達する須恵器甕である。外面には格子状の叩き，内面には青海波文の叩きが施されている。口縁部は，ヨコナデ調整されている。



第34図　ＳＫ08平面図



第35図　ＳＫ08出土遺物実測図①



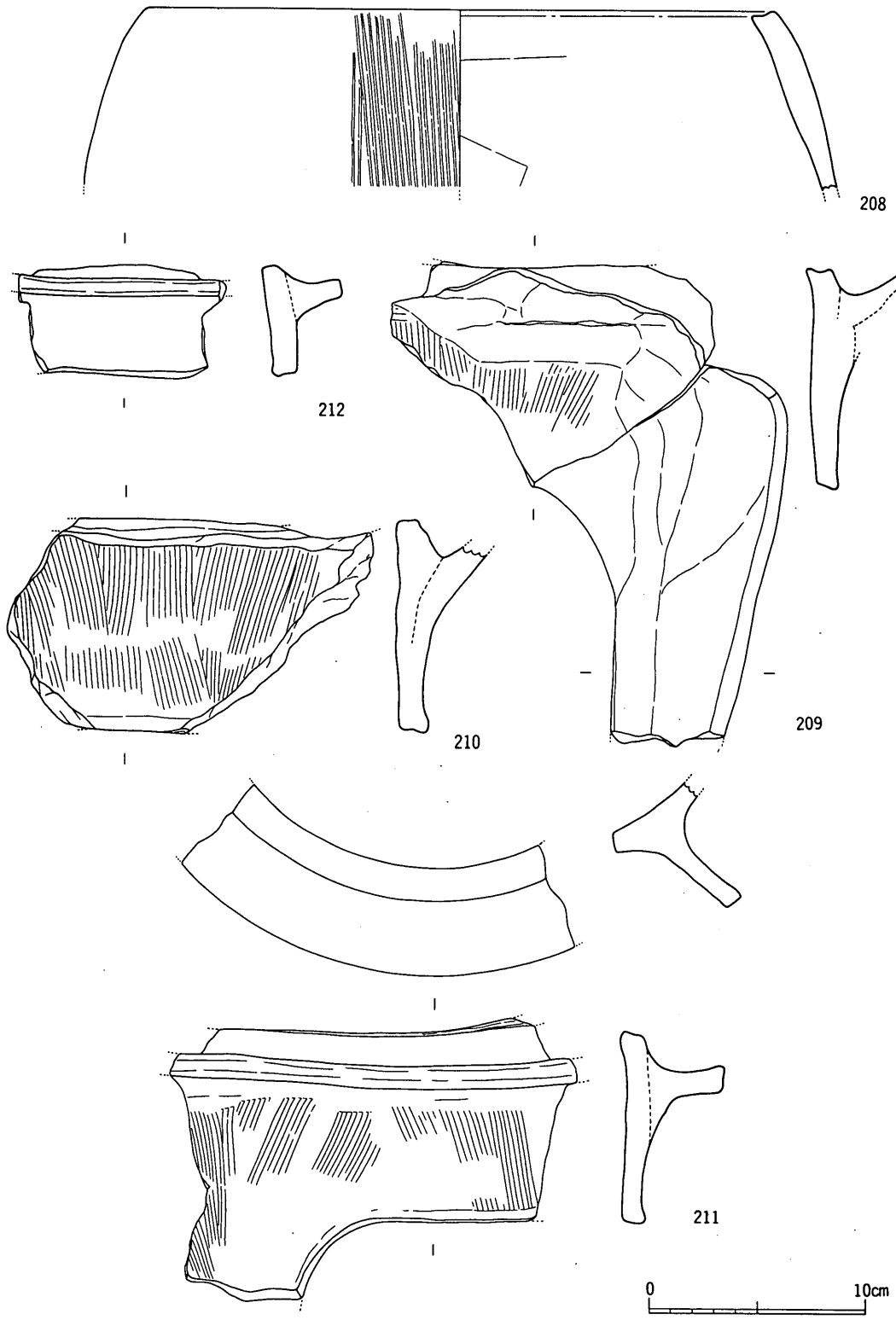
第36図　ＳＫ08出土遺物実測図②

203は，須恵器甕である。外面には粗い叩きが，内面には青海波文の叩きが施されている。

204は，土師器の口縁である。口縁部は外反し，口縁端部はつまみ上げられている。

207は，土師器甕である。やや内彎する体部を持ち，口縁部は外反する。口縁端部は，つまみ上げられている。外面にハケ目が施されている。

208～212は，カマドである。焚き口部外面には，粗いハケ目が施されており，焚き口部内面はナデ調整されている。209～211には，焚き口の鍔がついている。209は，ＳＰ05出土のものと接合した。212は，カマドの口縁部と考えられる。



第37図　ＳＫ08出土遺物実測図③

⑮ 包含層出土遺物

石製品（第38図－213～218）

213～216は，サヌカイト製石鏃である。213は，凹基無茎式で，側辺は内彎する曲線である。214は，凹基無茎式で，くり込みが213に比べると深い。215は，凹基無茎式で，くり込みが浅い。216は，平基無茎式のやや小型の石鏃である。217は，サヌカイト製スクレイパーである。両面とも，一回の打撃による大きな面を持ち，刃部には粗い調整が施されている。218は，緑色片岩製太形蛤刃石斧ある。先端部に使用痕が認められる。

弥生土器（第38図－219）

II区包含層より出土した弥生土器はほとんどが摩滅しており，実測可能なものは一点のみであった。219は，弥生土器底部である。しっかりした平底を持ち，体部は外方に直線的に延びる。

須恵器（第38図－220～235）

220～225は，坏蓋である。220は，天井部と体部間にわずかな稜を持つ。断面は明赤灰色を呈している。221～222は，天井部と体部間に稜を持たず緩やかに屈曲しながら口縁部になる。223～225は，天井部につまみを有する坏蓋である。223のつまみ上には，焼成時に他の須恵器片が癒着している。外面は，暗緑色の自然釉が付着し，内面のかえりは小さい。226～228は，高坏の脚である。脚端部は上方へ屈曲するもの（226）と，下方へ屈曲するもの（227，228）がある。229～235は，須恵器底部である。229は，平底の底部にヘラ削りが施されている。230，231の高台は，底面やや内側に付き，その断面は，長方形を呈する。232～234の高台は，体部と底部の境につき，外方へ張りだしている。235の高台は，底部端に付く。体部外面には，叩き目があり，内面は指ナデが施されている。

土師器（第38図－236～242）

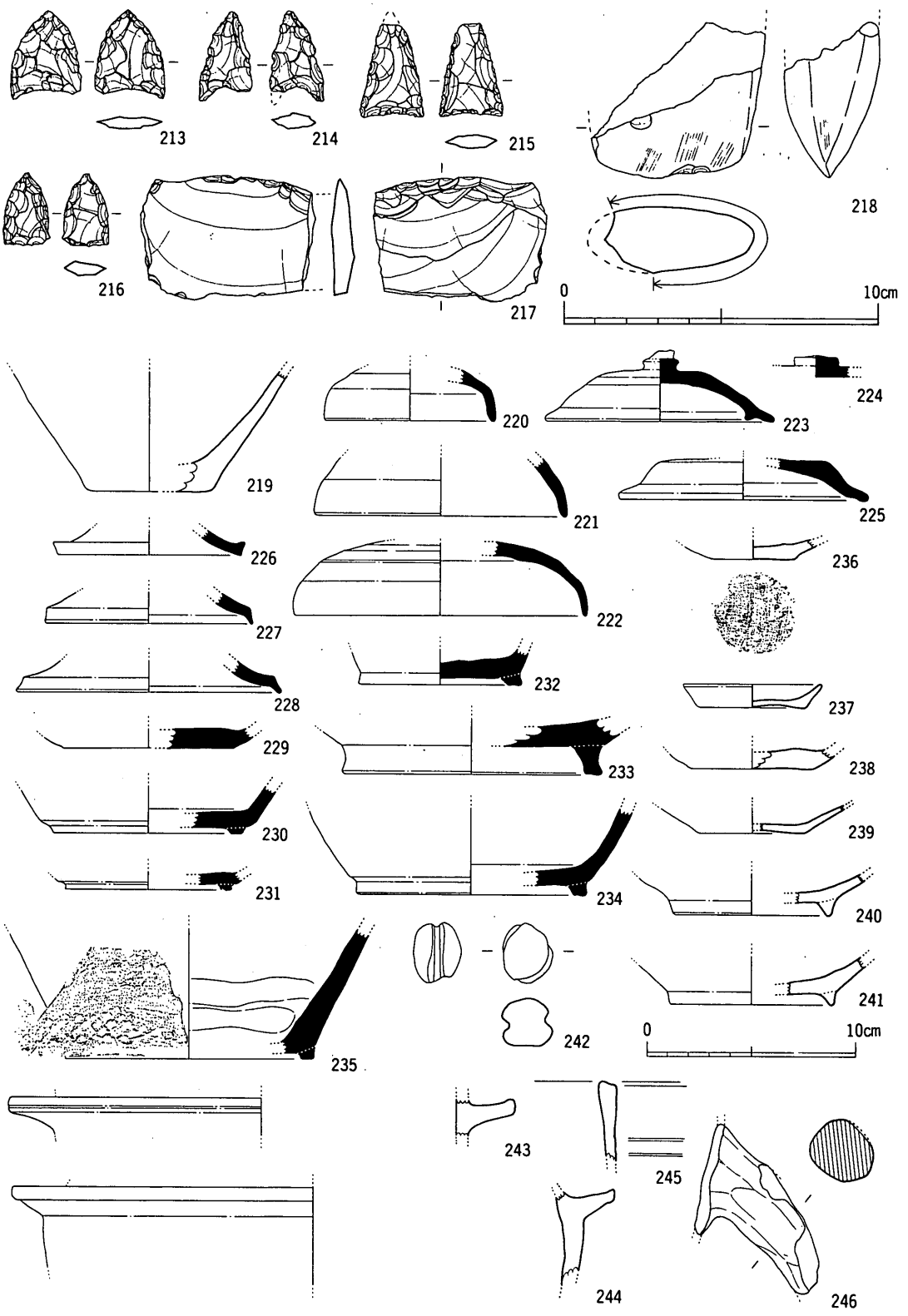
236は，底部を静止糸切りされた坏である。237は，土師器小皿である。底部は静止糸切りされており，体部は直線的に外方に延びる。238は，底部をヘラ切りされた坏である。240，241は，土師器埦である。逆三角形状の高台が付く。242は，土錘である。両端に溝を持ち，レモン型を呈する。

土師質土器（第38図－243・246）

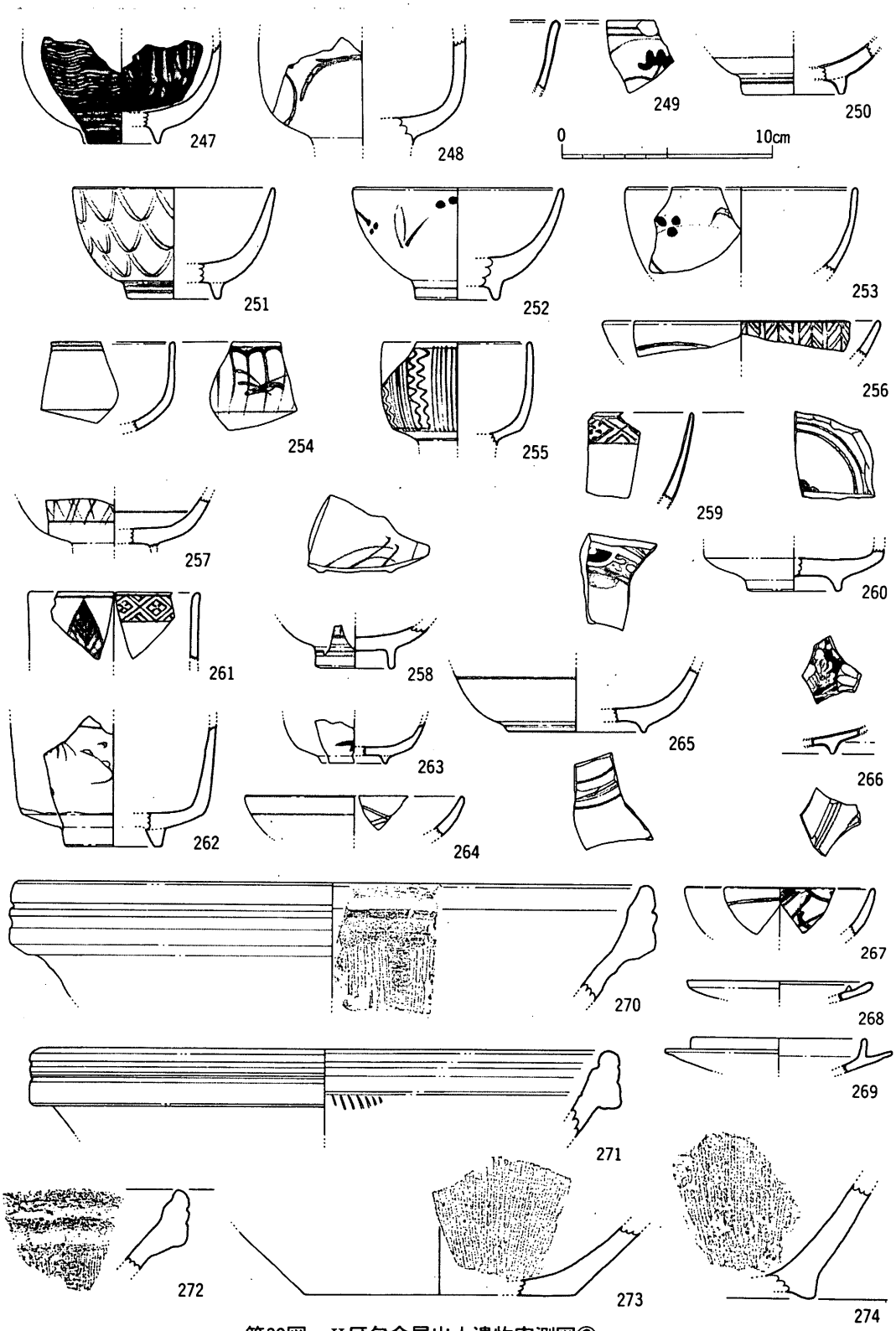
243は，羽釜の鍔である。鍔の端部は上方へやや上がり気味である。246は，土鍋の脚である。途中から欠損しており全体は不明であるが中心部に穿孔を持つ特徴がある。

瓦質土器（第38図－244・245）

244・245は，羽釜である。244は，羽釜の鍔の部分で，外面にはみがきが施されている。245，外面に2条の凸線を持つ。口縁端部上面は，ややくぼんでいる。



第38図　II区包含層出土遺物実測図①



第39図　II区包含層出土遺物実測図②

近世遺物（第39図－247～274）

第39図は，II区包含層出土近世陶磁器である。

247～261は，碗である。247は唐津系刷毛目碗で，黒褐色の釉がかけられている。内外面とも刷毛目模様が認められる。時期は，18世紀前半～中葉頃と思われる。248～250は，陶胎染付である。胎土は粗く，外面はオリーブ灰色～明緑灰色釉がかけられている。肥前系か。時期は17世紀～18世紀中葉頃と思われる。251～258は，染付磁器である。251は，外面に二重網目文が描かれており，時期は18世紀頃と思われる。252・253は，外面に梅樹文らしい文様が描かれている。254・255は内が深く小丸碗B類(註4)に属するものと思われる。19世紀頃である。256は口縁端部に口銹が施されている。257は，見込み中央に文様が入り，高台はやや高めに作られる。259・260は青磁染付である。260は高台脇から体部にかけて朝顔型に開く青磁染付B類(註5)に属するものと思われる。時期は，18世紀中葉～19世紀初頭頃と思われる。261は筒形碗である。染付磁器で外面にコンニャク印判による施文が見られる。18世紀前半～19世紀初頃と思われる。262は陶胎染付の瓶である。胎土は粗く，外面は明紫灰色釉がかけられている。17世紀末頃～18世紀中葉頃である。263は小瓶である。染付磁器で外面に笹文が描かれている。264～267は染付磁器の皿である。264は内面に斜格子文が描かれている。18世紀頃のものである。265は墨弾き抜型による白ぬき染付である。268・269は灯明皿である。内面に突帯を持つタイプである。268は備前糸で，18世紀中葉以降(註6)のものと思われる。269は灰黒色を呈し，内面の立ち上がりが大きく突出する。産地は不明である。270～274は擂鉢である。270・272は細くてシャープなおろし目を持ち，上端をナデで揃えていない。重ね積みをしているため，口縁部外面と体部外面の色が異なる。17世紀～18世紀前半頃と思われる。271はおろし目上端に段を付けて揃えている。外面は，口縁部・体部とも自然釉がかかる。18世紀後半以降である。273は平坦な平底を持つ。おろし目はシャープである。274はおろし目がシャープで，高台を持つ。

(3) 小　結

第II調査区も自然流路が東部の谷筋を流れ，その西側の微高地上に集落域が広がるという点で第I調査区と共通した状況を示す。中心となる遺構は，調査区西部の緩斜面部で検出した。遺構は，斜面を方形にカットした段落ち整地部と溝などからなる。その段落ち整地部は，地形的に高く，その西側を溝がめぐる。またその整地部に隣接する土坑からは須恵器・土師質のカマド等が出土している。これらのことよりこの整地跡は掘立柱建物等の施設の整地面の痕跡である可能性が高い。

調査区の東部で検出した自然河川と考えられる流路ＳＤ16・17は第I調査区のＳＤ01と同様に溝底は起伏に富む。

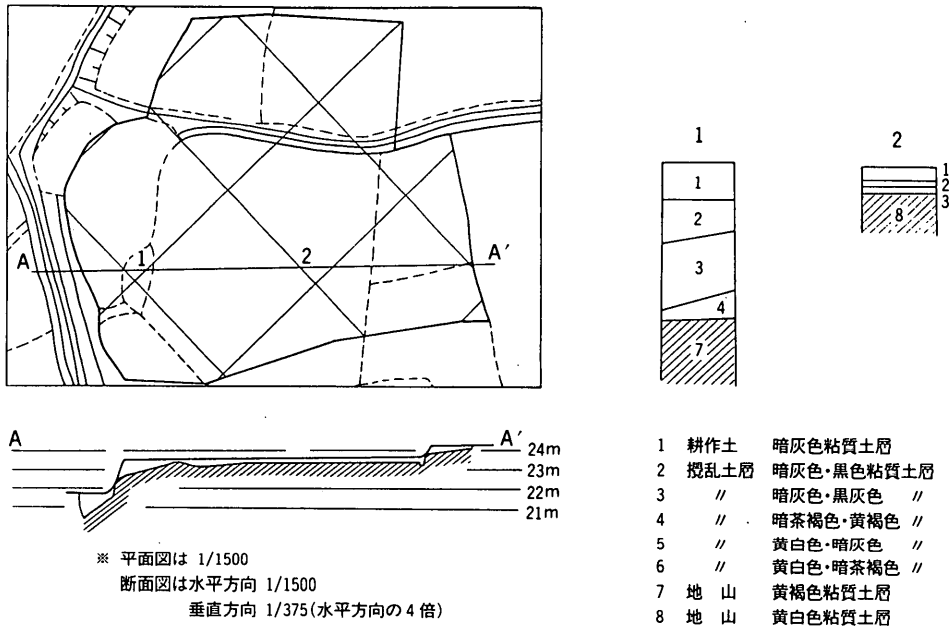
また調査区内の遺構や包含層からは弥生時代の遺物が出土しており，本調査区に近接して弥生期の集落域が営まれている可能性が高い。

4．III　区

(1)　III区の概要

III区は，II区と同一の低丘陵の南西部，頂部平坦面から南西側面にかけて広がる。大部分が丘陵上平坦部に当たり，西南端が側斜面にかかっている。今回検出された長砂古4号墳は平坦部西縁に立地する。I・II区同様に水田造成の影響を強く受けているが，これに加えて本区では，おそらく近世以降の粘土採取によるものと考えられる掘削・攪乱の痕跡が著しい。

調査区中央部では，現耕作土直下に粘土採取に起因する攪乱土が堆積しており，遺物包含層は残存せず，遺構の残存度も低い(第40図－2)。西端の斜面部には，同様の攪乱土が厚く堆積している（第40図－1)。



第40図　III区基本層序と地形断面図

第41図　III区平面図

(2) 遺構と遺物

① SH02

竪穴住居（SH02）は，古墳築造及び後世の攪乱・削平のために，北東壁と西側に周溝を残すだけの残りの悪い状態で検出された。そのために，規模・形状については，推定の域を出ないが，わずかに残る北東壁より直径約6mの円形住居址ではなかったかと思われる。主柱穴は，北東部では確認されていないが，4穴と考えられる。また，床面には炭化木材が検出されており，焼失家屋と思われる。東側で焼土化した床面が見られるのは，そのためかあるいは，炉が検出されていない現状から竪穴住居に付随した炉の可能性も考えられる。

遺物は，わずかに残っていた埋土から少量ではあるが出土している（第42図）。

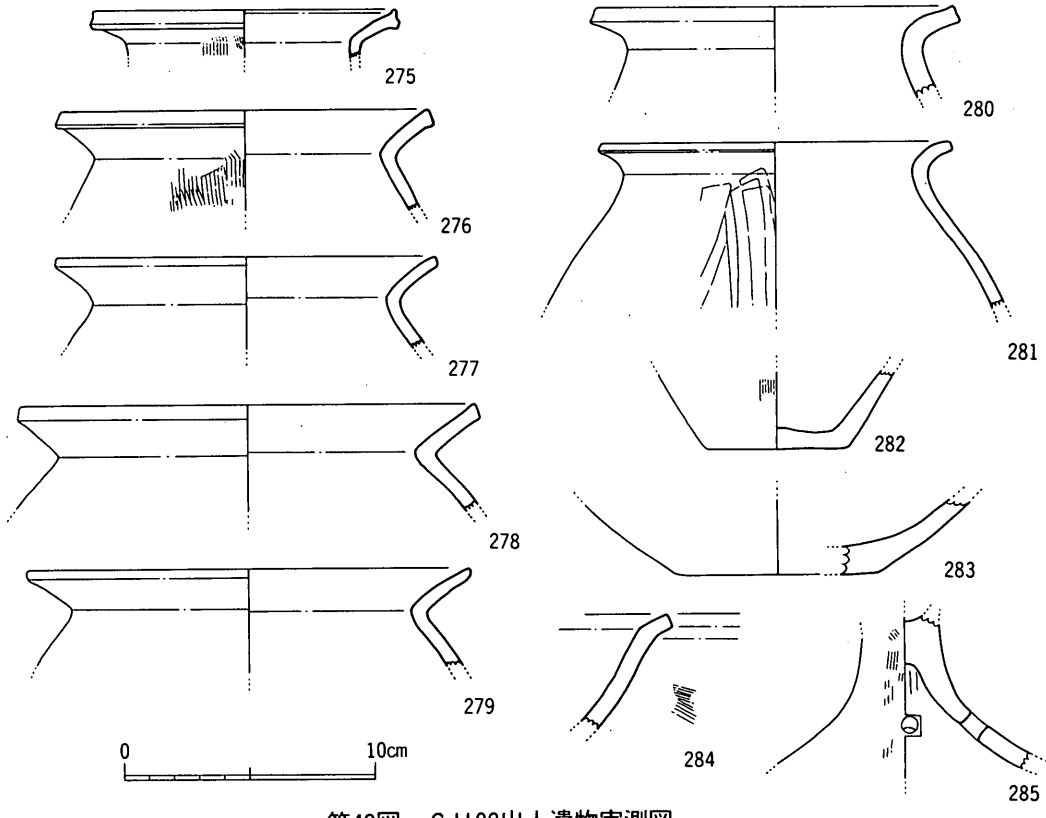
275は，弥生土器壺である。口縁端部外面に退化した凹線を持つ。

276～281は，弥生土器甕である。口縁端部は，少し下方に拡張するもの（276）もあるが，ほとんどは，そのまま終わらせているものである。また，頸部については，内面にシャープな稜を持つもの（276・277・278・279）と丸くおさめるもの（280・281）に分けられる。

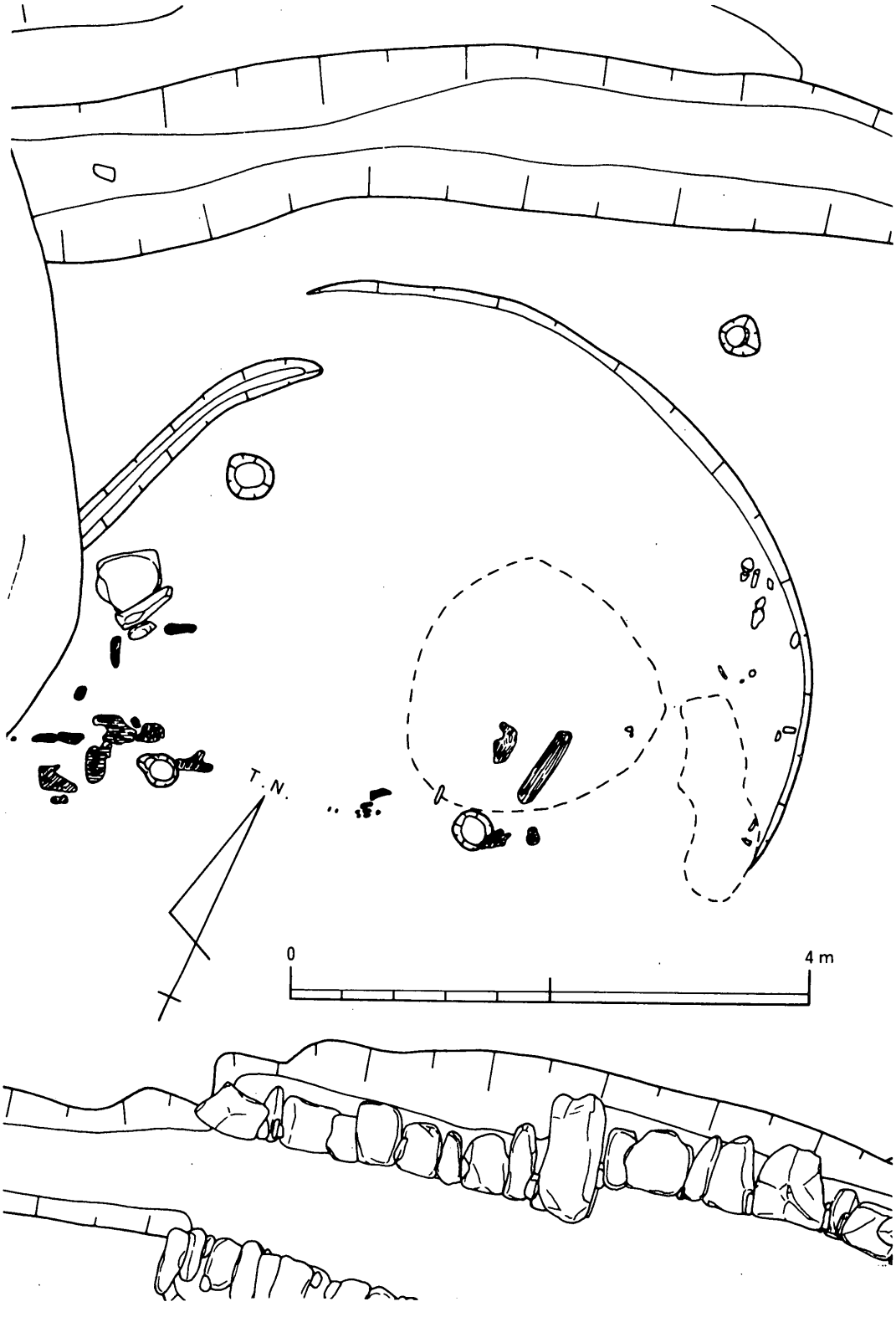
282・283は，弥生土器の壺か甕の底部である。底部はしっかりした平底を呈している。

285は，弥生土器高杯の脚で，四方に透しを持つ。

時期は，弥生時代後期後半頃と思われる。



第42図　SH02出土遺物実測図



第43図　S H02平面図

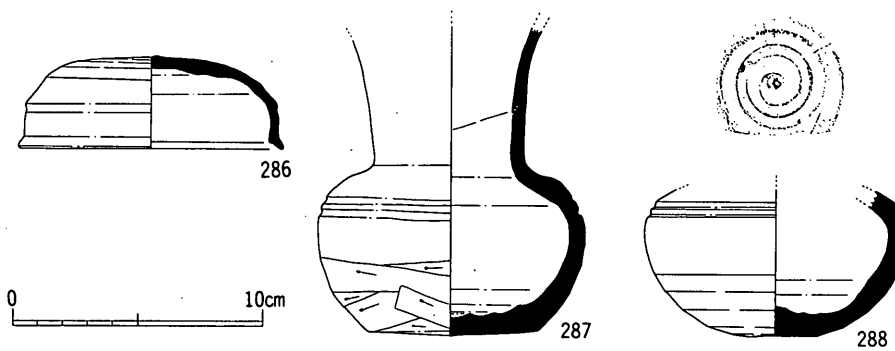
② ＳＤ31

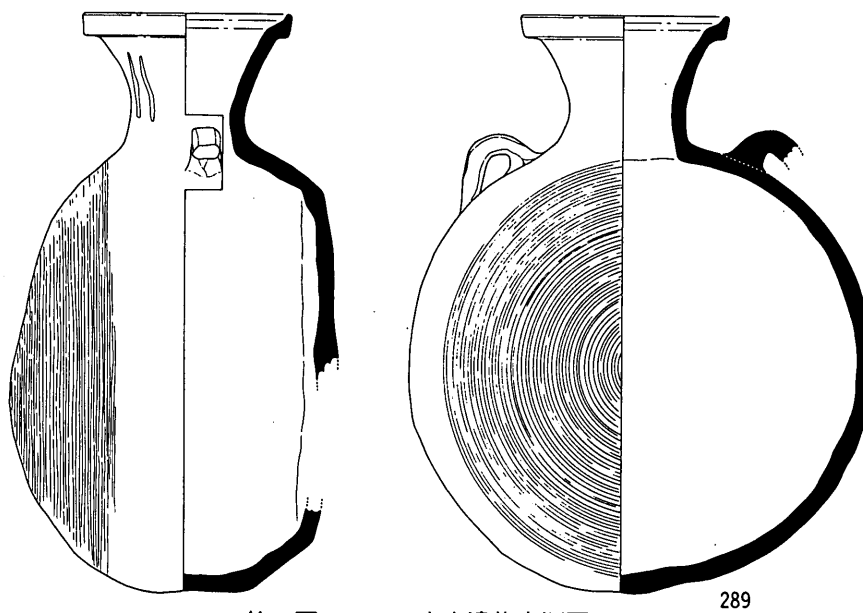
この溝は，Ｐ－３・Ｐ－４・Ｑ－４で検出され，長さ29m，幅60cm，深さ30cmで，Ｎ50°Ｅに流路を取る。溝より西側は，一段低くなっており，30cm程の高低差がある。

溝の埋土は，地山の黄灰白色粘土の風化層からなる。

遺物は，瑤・長頸壺・短頸壺の蓋・提瓶が出土している（第44図286～289）。288は瑤である。丸みを帯びた底部を持ち，体部の上半肩部には凹線が施されている。内面底部には，ヨコナデが施されている。287は長頸壺である。底部は，ヘラ切りによる平底を呈しており，暗赤色を呈している。286は短頸壺の蓋である。口縁端部は外反し，体部との間に稜を持つ。体部は，ほぼ真っ直ぐ立ち上がり，天井部との間に凹線を持つ。289は提瓶である。断面は，暗赤色を呈し，極めて硬質である。前面は，釉が剝離した様で，灰白色を，背面・内面は，青黒色を呈している。頸部には，ヘラ記号が記されている。

時期は，ほぼ６世紀の中頃に比定される。





第44図　ＳＤ31出土遺物実測図

③ 長砂古4号墳

立　地

長砂古4号墳は，菩提山（標高312,0m）より派生した低丘陵地上（洪積台地上）西側縁部に立地している。ここより南側には，近接して，約70基の後期古墳が群集している独立丘陵がある。この古墳群を母神山古墳群という。母神山古墳群には，下母神支群・上母神支群・黒島林支群・千尋支群の四支群があるが，その中の下母神支群は，この独立低丘陵から北西に派生した一尾根先端付近に位置している。この下母神支群と谷を挟んだ東側に長砂古4号墳がある。この長砂古4号墳が立地する場所において微地形を復原すると，母神山の他の古墳群と同様微高地上に長砂古4号墳が立地していることがわかる。

この微高地上には，戦後の粘土採取により破壊された古墳が多数あったようである。そのために，当時の状況に詳しい篠原義幸氏の記憶及び遺跡台帳に基づき周辺の古墳の位置の復原を試みた。それによると，長砂古4号墳の位置する周辺には，数基の古墳があったことがわかった（第45図）。

篠原氏と遺跡台帳の記述には，若干の相違があるものの，遺跡台帳にあるてんこ山古墳（1号）及び長砂古2・3号墳の位置はほぼ同じで，これら全て，微高地上に位置していることが判明した。

以上のことより，今回の調査で確認された古墳を長砂古4号墳と称し，この微高地上の古墳群を母神山古墳群の一支群に位置づけ，母神山古墳群（長砂古支群）と総称する。

長砂古古墳の確認・未確認古墳も含めて全体像を復原すると，7基の古墳群であったことがわかる（第45図）。

遺　構

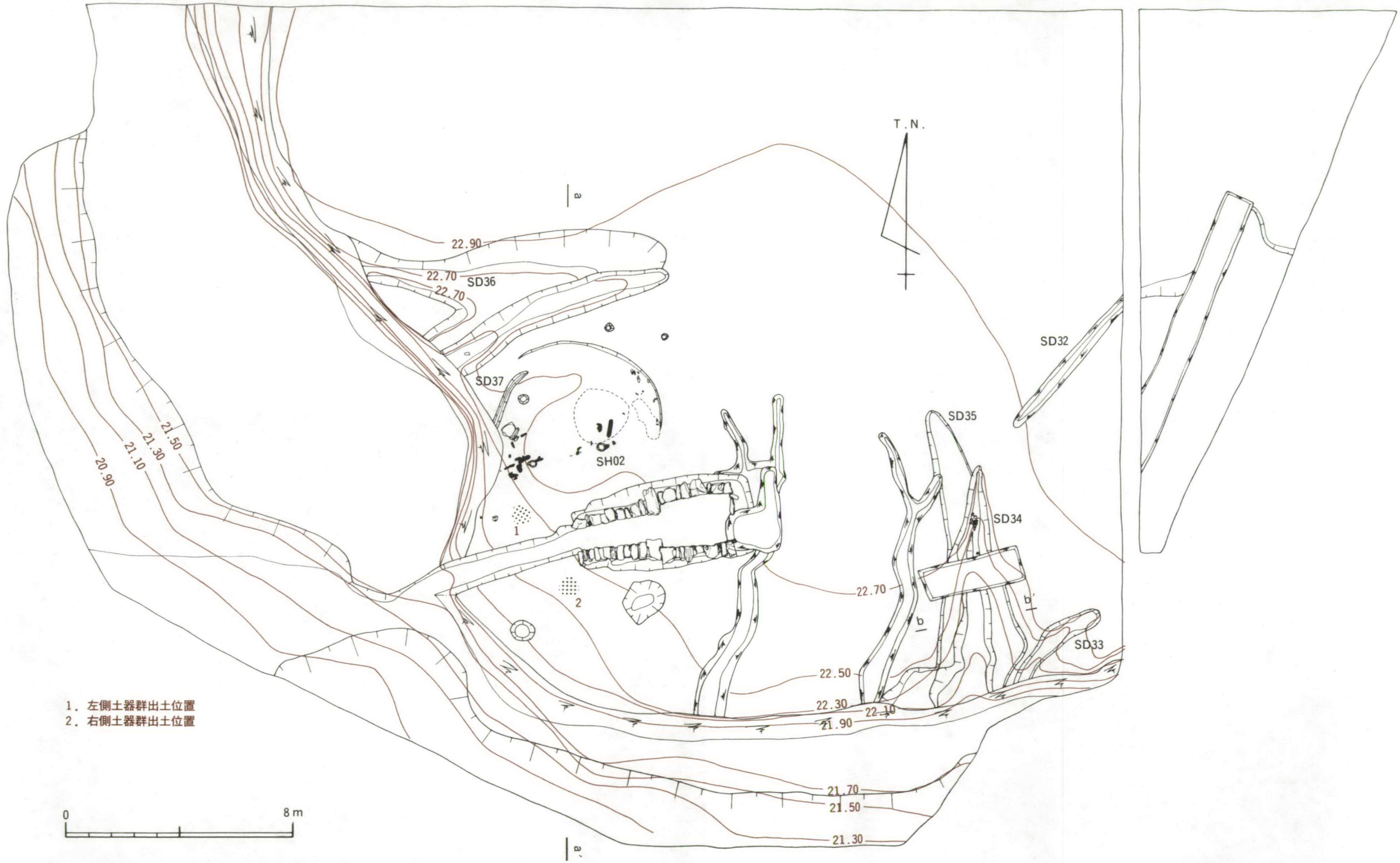
a．墳丘（第46図）

本古墳の墳丘は，製瓦用の粘土取り，後世の耕作等により削平を受けたのか，発掘前においては全く起伏が認められなかった。

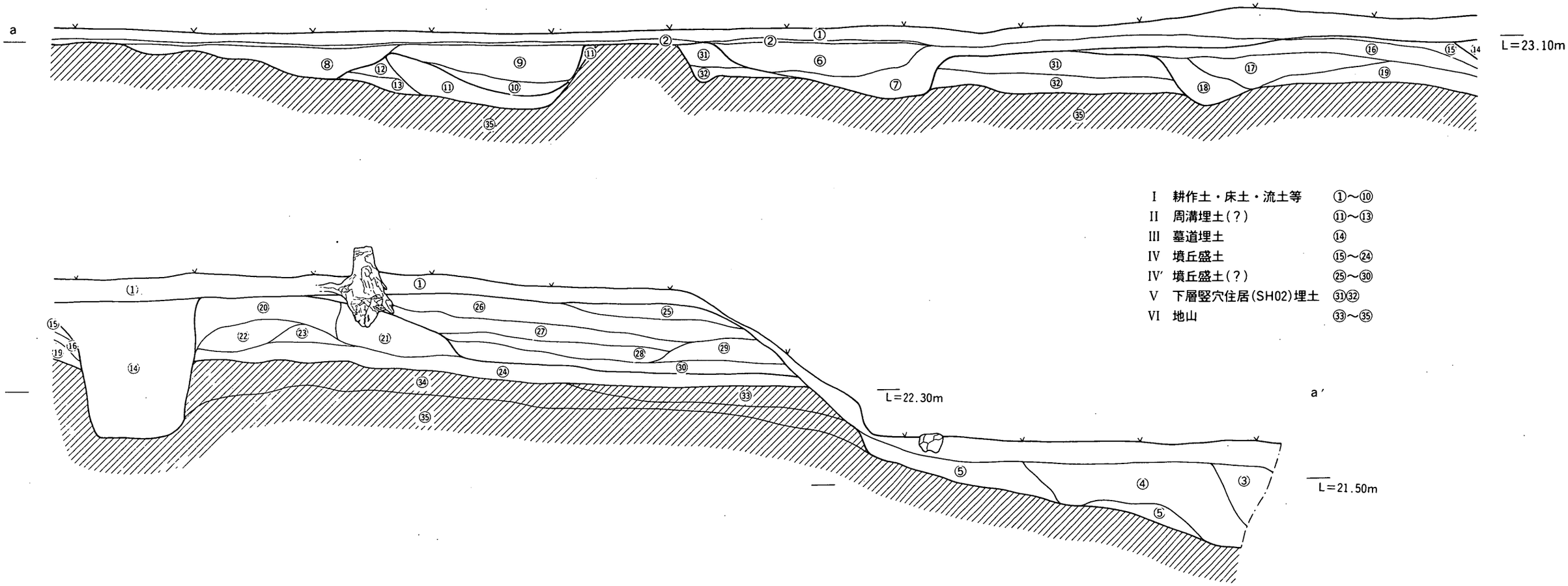
調査の進行にともない，耕作土，床土の直下に黄白色粘質土（地山）が広がっており，墳丘を構成していたと思われる盛土は，西部で少し確認しただけでその他ではほとんど確認することができなかった。そこで，版築の残る，R－2・S－2の東壁土層（第47図）を参考にしながら周溝埋土，竪穴住居埋土，古墳版築土をそれぞれ説明する。

長砂古4号墳は，竪穴住居SH02の埋土上部より墳丘版築を開始しており，古墳築造以前にあった包含層及び遺構を破壊して造られていることが判る。現状では，約80cm程の版築が確認され，各層は，非常に固くしまっており，他の攪乱土層・堆積土層とは異なっていた。各層は，地山・腐蝕土及び弥生遺物包含層をブロック状に含み，墳丘全体に広くしかも薄く築き固められたようである。

第45図　母神山北西部地形図



第46図　長砂古 4 号墳地形図



①暗灰色細砂質土(耕作土)
②黄灰色細砂質土(床土)
③濁黄褐色粘質土
④腐蝕土＋暗茶褐色粘質土＋黄褐色砂礫土(10～50㎜大の円礫を多く含む)
⑤濁黄褐色砂礫土(大・小の円礫を含む)
⑥黄褐色粘質土＋暗茶褐色粘質土＋淡茶褐色粘質土
⑦暗茶褐色粘質土＋黄褐色粘質土＋黒色粘質土
⑧黄褐色粘質土＋淡茶褐色粘質土
⑨黄褐色粘質土＋淡茶褐色粘質土＋暗茶褐色粘質土
⑩暗茶褐色粘質土＋黄褐色粘質土
⑪暗茶褐色粘質土＋黄褐色粘質土(黄褐色をわずかに含む)
⑫黄褐色粘質土＋暗茶褐色粘質土
⑬暗茶褐色粘質土＋黄褐色粘質土
⑭暗茶褐灰色粘質土(黄褐色粘質土のブロックを含む)
⑮濁黄褐色砂質土(5㎜大の小礫を多く含む)
⑯黒色粘質土＋暗茶褐色粘質土
⑰淡茶褐色粘質土(黒色粘質土がブロック状に含まれる)
⑱淡茶褐色粘質土(黒色粘質土及び暗茶褐色粘質土がブロック状に含まれる)
⑲暗茶褐色粘質土＋淡茶褐色粘質土(黒色粘土と5～10㎜大の小礫を含む)
⑳黒色粘質土
㉑黄褐色粘質土＋黒色粘質土(木の根による撹乱土)
㉒黄褐色粘質砂礫土＋腐蝕土(10～50㎜大の円礫を多く含む)
㉓黒色粘質土＋暗茶褐色粘質土
㉔黒色粘質土＋暗茶褐色粘質土
} 境界に黄褐色砂礫土が5～10㎜の厚さで入っている
㉕耕作土(5～20㎜大の小礫を含む)
㉖黒色粘質土(5㎜大の小礫をわずかに含む)
㉗黒色粘質土(5～15㎜大の小礫を含む)
㉘黒色粘質土
㉙暗灰色細砂質土(5～40㎜大の円礫を含む)
㉚黄褐色粘質砂礫土(20～50㎜大の円礫を多く含む)
㉛暗茶褐色粘質土(黒色粘質土がブロック状に含まれる)
㉜暗茶褐色粘質土＋黒色粘質土
㉝淡茶褐色粘質土(暗茶褐色粘質土及び5～20㎜大の小礫を少し含む)
㉞濁黄褐色粘質土(地山)
㉟濁黄褐色粘質土(地山) (やや淡い)

0 2 cm

第47図　長砂古4号墳墳丘断面図

そのような状況から，本古墳の墳丘を復原することは非常に困難であるが，現地形，あるいはあとで触れる溝状遺構等を考慮にいれると，直径12～14m程度の円墳であったと推定される。

b．埋葬施設

本古墳の内部主体は横穴式石室である。削平によって奥壁の一部を含め上半部を失っていたが，床面から約60cm，側壁石の構築数にして３～４段が遺存していた。

石室は両袖式で，やや中央部が膨らむ矩形状を呈する玄室と，幅の狭い羨道からなり，その前方に素掘りの墓道が続いている。

石室はほぼ真西に開口しており，主軸方位はS82°Wを計る。石室の全長は，石室床面測定値で奥壁から羨道側壁最前端までが2.59m，玄室長2.6m，玄室幅は奥壁部で1.70m，袖部で1.65mを計り，奥壁から1.3mのところに最大値1.88mがある。羨道は長さ2.86m，幅1.0～1.11mを計る。

横穴式石室を構築するにあたっては地山に約6.5m×3.0mの墓壙を掘ることから始められている。墓壙は玄室，羨道を意識して穿たれており，上面観は縦長の凸字形を，断面形は壁体石材の積み方を考慮してか，扁平な逆凸字形を呈している。

c．母神山古墳群との比較

奥壁は，羨道に向かって左側の壁体を盗掘により失っているが，右側と同様の大型で縦長の石材が用いられていたものと考えられる。右側の壁体は縦1.23m，横0.8mの石材を用いている。これらは墓壙掘り方直下に穿たれた穴に据えられており，裏側には小ぶりな石を隙間に詰めることによって更に安定を図っている。

玄室側壁は，奥壁から羨道に向かって左右両側とも最も奥壁寄りに大型で扁平の石材を用いている。それに続く側壁は，長軸方向を石室主軸に並行にした方柱状の石材を２個基底石として据え，その上にやや小ぶりの縦長の石材が基底石に直交した方向に小口積みされることによって構成されている。側壁は僅かに内傾する傾向が認められる。

一方，袖部側壁は，やや大型で縦長の石材を石室主軸に直交させ基底石とし，その上に同一方向に同様な石材を積み上げることによって構成されている。

以上の３壁によって形づくられた玄室の平面形は，中央部がやや膨らむ胴張り傾向を示している。

玄室の床面は，地山面を被覆することによって整形し，その面から排水溝が掘りこまれている。

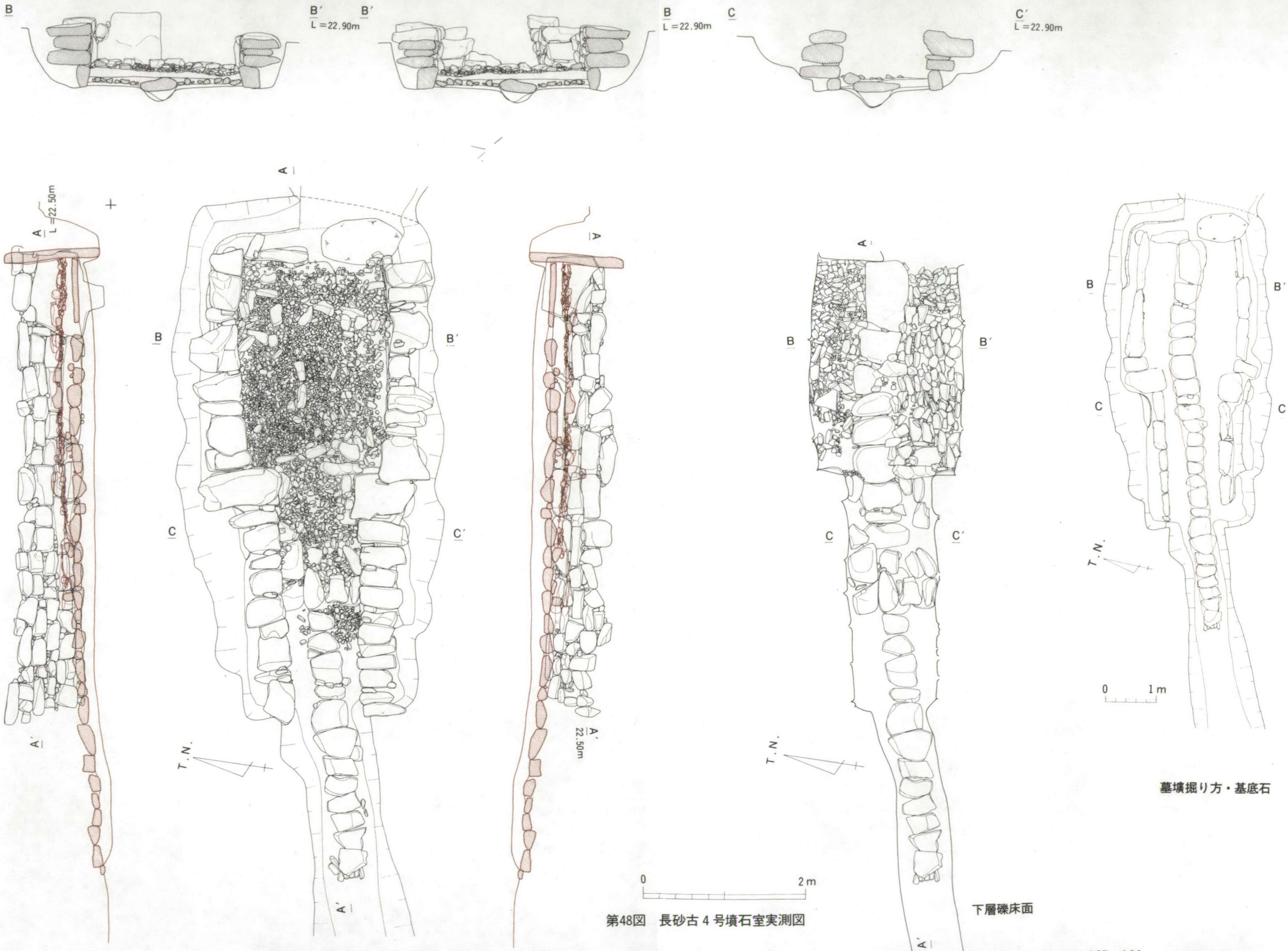
排水溝は奥壁から墓道にかけて，石室の中央にほぼ真っすぐ穿たれており，その規模は長さ7.5m，深さ0.2m，幅0.4mを計る。断面は「U」字を呈し，上面を平坦な石材が被覆しており蓋石の役割を果たしている。蓋石は，概ねその規模は縦40cm，横50cm程度に統一されているが，もっとも奥壁のものは縦86cm，横53cmを計る平坦なものでその趣を異にしている。墓道側の出水口に当たる部分には小さめの石が蓋石の下側に縦方向に詰められており，排水の際の便が図られている。

排水溝の上面は，礫によって床面が構築されているが，使用されている礫によって2面構成になっている。上層には4～10cm程度の礫（玉砂利）がランダムに，全面にわたって敷かれ，その隙間を白褐色粘土で充塡している。下層には10～20cm程度の比較的大きめの礫が敷かれ，同じ様に白褐色粘土で隙間を充塡しているが，礫の敷き方に変化が認められる。すなわち奥壁から羨道に向かって右側はランダムに敷かれているのに比べ，左側は20cm程度の同様な礫が約200cm×80cm程度の範囲にその長軸方向を同じにして敷かれており，何らかの意図が働いたことが窺われる。なお，床面（上層）には20～30cm程度の石材が矩形に並べられており，棺台に該当する役割を果たしていた可能性が考えられる。

羨道は，その主軸方向玄室に比べ，更に南にとっている。羨道の両側壁も玄室同様直方形の石材の長軸を石室主軸方向と平行に，右側壁では5個，左側壁では3個据え基底石としている。その上にはやや小ぶりの縦長の石材が小口積みにされ壁体が構成されている。側壁は更に内傾しており，持ち送りが顕著である。

羨道床面は中ほどまで玄室と同様に2層にわたって礫床が構築されているが，墓道側は大きめの石材によってしきり状に段がつくられており，段から墓道にかけては排水溝の蓋石がみられるだけで他の敷石は全く認められなかった。

玄門部には約57cm×15cm程度の石材が仕切り石として立てられていたが，その掘り方が墓壙掘り方に穿たれていた点を考えるとこの石は床面の構築以前に置かれていたことが推定される。更に玄門部にはやや小振りの石材が長軸方向を石室主軸に平行にして積まれているものが認められ，閉塞石の一部であったことが考えられる。



墓壙掘り方・基底石

下層礫床面

第48図　長砂古４号墳石室実測図

遺　物

a．石室内出土遺物

石室内より，須恵器・鉄製品（馬具・武器）・装身具などが出土している。

石室内出土状況としては，奥壁際に鉄矛・太刀・刃子・馬具などが出土しており，装身具は，玄室奥半分に散乱している状態で検出された。また，羨道部右側壁際には，上部を欠損した須恵器脚２点が出土している。

当古墳は，天井石・側壁石上半および奥壁石半分を盗掘のために取り除かれ，また，石室内の土層の堆積状況により石室内は，相当の攪乱を受けていることが判る。そのために，床面直上の遺物は，当初副葬された位置及び遺物量を示していない可能性も考えられる。特に，石室内出土の土器類は，非常に小量であった。

ここでは，石室内出土遺物を中心に説明するが，須恵器に関しては，墳丘盛土内の遺物も含めて最後に述べたい。

鉄製品

－馬具類－

馬具は玄室左袖部を中心として，数点出土しており，その内訳は雲珠１点，辻金具２点，革金具２点，鉸具（破片）３点，棒状金具４点である。

辻金具（第53図303，304）

303・304共にほぼ同じ構造，規格をもち，直径6.8cmを測る有脚半円形辻金具である。何れも鉢部を失い，肥厚な縁辺部のみが遺存しており，責金具を伴う４個の脚を有している。303には縄状繊維の残存が認められる。

雲　珠（第53図305）

有脚半球形の雲珠である。全体の約５分の１程度を失っているが，直径5.2cm，高さ1.5cmの浅い鉢部に隅丸形の脚を６個伴う。脚部には中央に鉄鋲が打たれており，僅かに金箔が認められ，金箔張りであったようである。

革製品（第53図306・307）

長方形の地板に２本の鉄鋲を打つ。306は2.7cm×1.3cm，307は2.6cm×1.6cmと規格が異なっており，307は長側辺に突起している。

鉸　具（第53図308～310）

何れも破片であるが，鉸具の刺金（308）および輪金（309・310）部分と考えられる。刺金は環部を失っており，残存長4.6cm，断面形0.5cmを計る。

棒状金具（第53図311～314）

311～314はほぼ同巧同大の棒状金具である。芯材に管状の金具が被せられており，両端が肥大した鋲状を呈している。長さ3.4～3.7cm，径0.5～0.6cmを計る。

－武器類－

玄室南側壁沿いから太刀が，奥壁沿い南寄りから太刀（部分）・鉄鉾が出土した他，鉄鏃，刀子など図化し得た遺物の総数は50点を越える。

鉄　鏃（第55図334～367）

玄室北東隅，同中央部，あるいは羨道部から多数の鉄鏃が出土したが，完存しているものは1点もない。図化し得たものは鋒部破片を含めて35点にのぼる。それらは鋒部の形態から幾つかに分けられる。

334～342は逆刺を有さない三角形鏃である。334・335の鋒部は長さ4.6cm，幅2.5cmを計り，両丸造りである。336は鋒部の破片であるが，その形状から同タイプと考えられる。337・338も三角形鏃の鋒部と考えておきたい。339～342も逆刺を有さない三角形鏃であるが，法量，鋒部の形状にバラエティーがみられる。341はもっとも大型の鋒部を持ち，長さ6.5cm，幅4.7cmを計る。342は鋒部が長さ4.4cm，幅4.4cmを計り，五角形に近い形状を呈している。

343～346は逆刺を有する三角形鏃である。法量，鋒部，逆刺の形状にバラエティーがみられる。343は鋒部先端が丸く，逆刺がやや内彎する。344～346は逆刺が外反する形状を呈している。343～345は両丸造り，346は片丸造りである。

347は非常に小型の三角形鏃で，鋒部の長さ2.3cm，幅1.0cmを計る。なお茎部に木質が残存している。

348・349は鋒部の破片であるが柳葉形鏃と考えられる。349のみ片丸造りである。

350～367は茎部の破片である。残存部分が僅かで判然としないが，概ね平根式（350～355）と尖根式（356～367）に分けられる。破片でありながらも遺存状態は比較的良く，矢柄への装着方法の一端を知ることのできるものが幾つかみられた。353・355・359には矢柄部木質のほか，その上から斜め方向に巻かれた樹皮が認められ，そうすることによって鏃身と矢柄の接続部分を強化していたことが知られる。

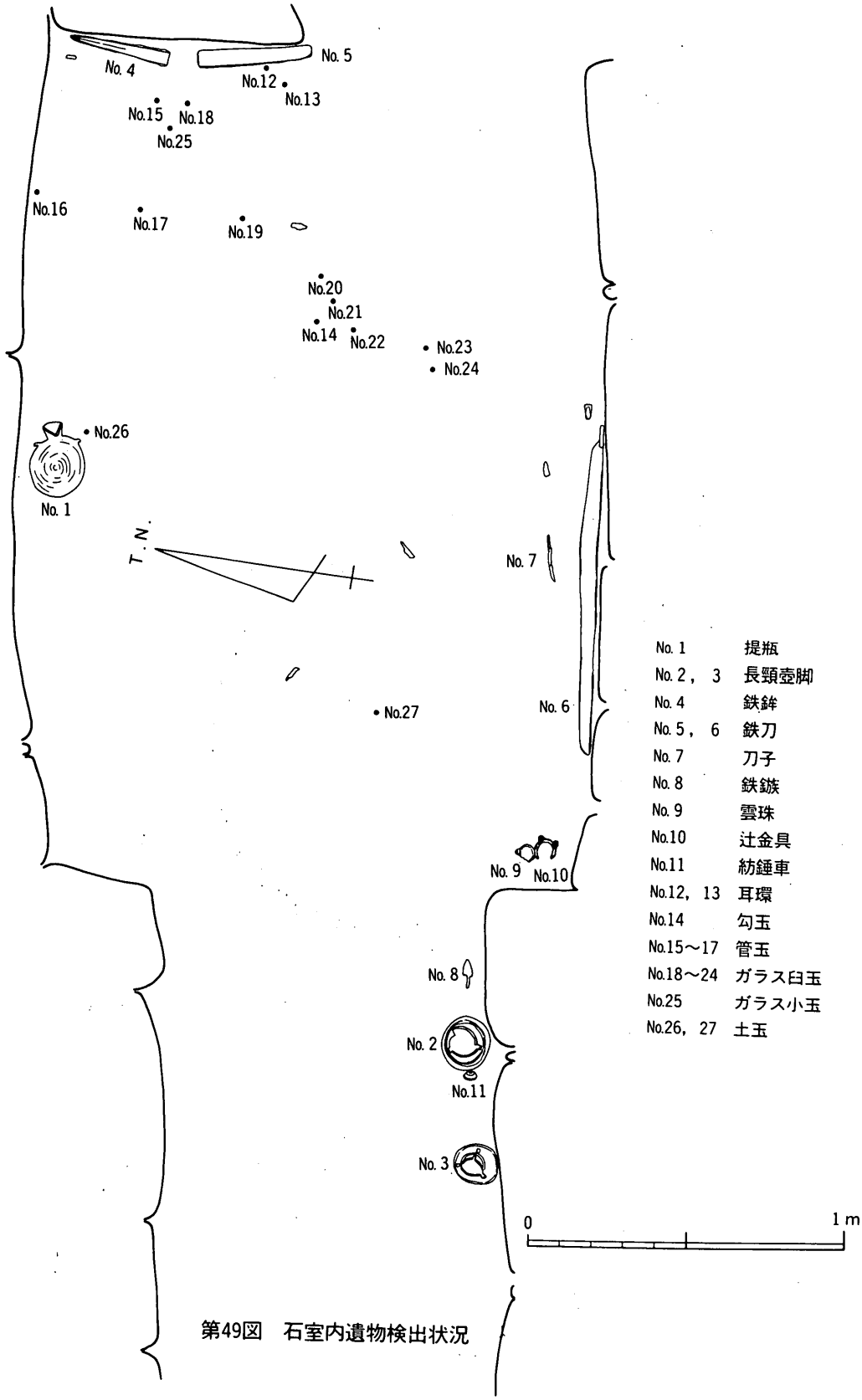
刀　子（第56図368～383）

完存に近いもの2点を含めて16点を図化した。

368は残存長15.5cmを計り，両関で刀身，茎ともに木質が残存している。刀身長11.3cmを計り，断面は二等辺三角形を呈し，切先より1.5cmで幅1.1cm，厚さ0.4cm，関より1.7cmで幅1.6cm，厚さ0.5cmを計る。茎は断面台形を呈し，関付近で幅1.1cm，厚さ0.4cmを計る。目釘は認められない。

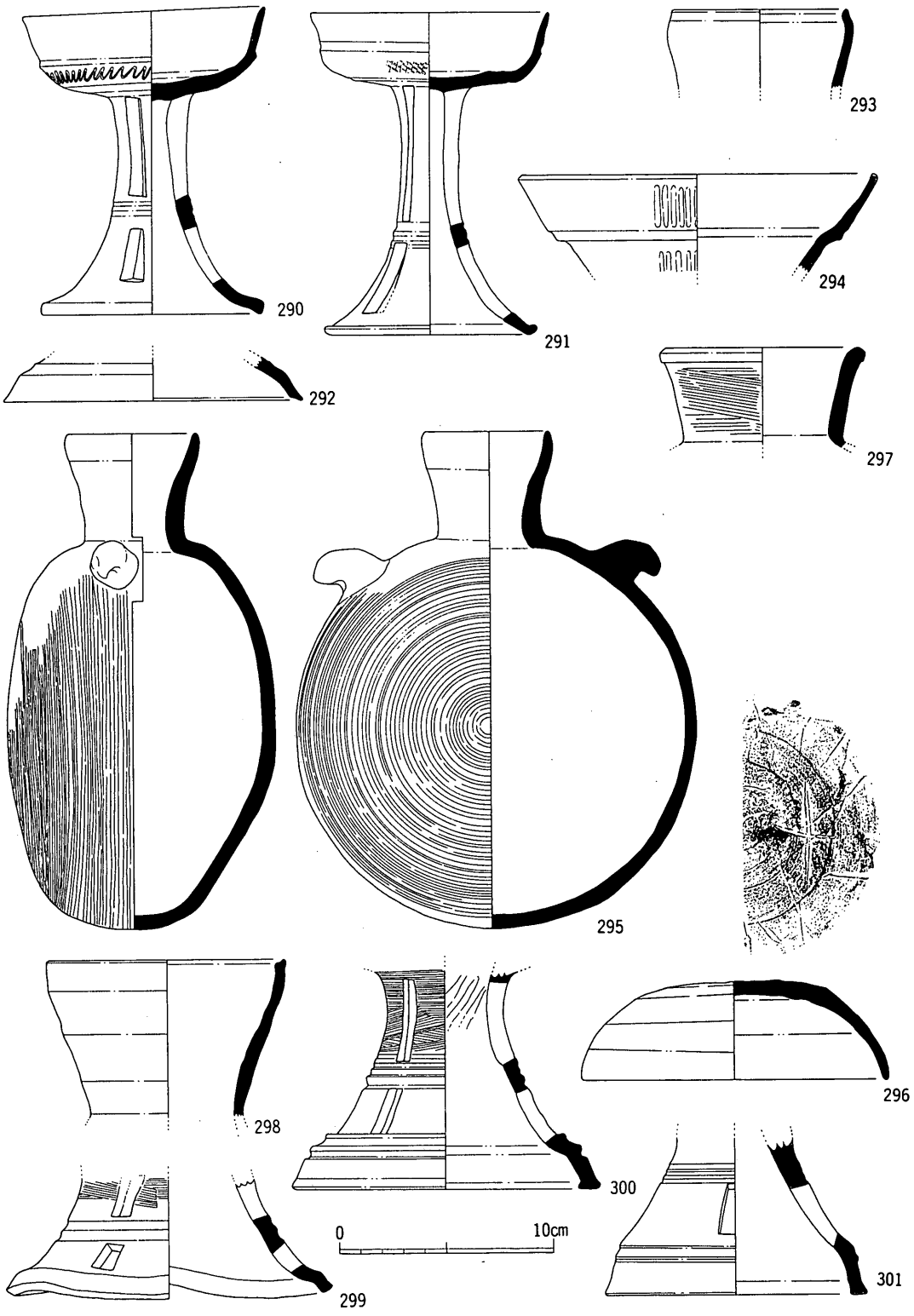
369は切先，茎を僅かに欠損している。残存長19.6cmを計り，刀身，茎ともに木質が残存している。関部は錆化のため判然としないが両関と考えられる。刀身は残存13,5cmを計り，断面はやや膨らみを持つ二等辺三角形を呈し，ほぼ中央で幅1.5cm，厚さ0.5cmを計る。茎は断面長方形を呈し，幅0.4を計る。目釘は認められない。

370～375は関を中心として，茎から刀身にかけての部分の破片である。370・372は茎が端部ま



No. 1	提瓶
No. 2, 3	長頸壺脚
No. 4	鉄鉾
No. 5, 6	鉄刀
No. 7	刀子
No. 8	鉄鏃
No. 9	雲珠
No.10	辻金具
No.11	紡錘車
No.12, 13	耳環
No.14	勾玉
No.15～17	管玉
No.18～24	ガラス臼玉
No.25	ガラス小玉
No.26, 27	土玉

第49図　石室内遺物検出状況



第50図　石室内出土遺物実測図①

で依存しており，何れも端部は丸く仕上げられているが，規格にはバラエティーがみられる。370・371には，木質の残存も見られる。

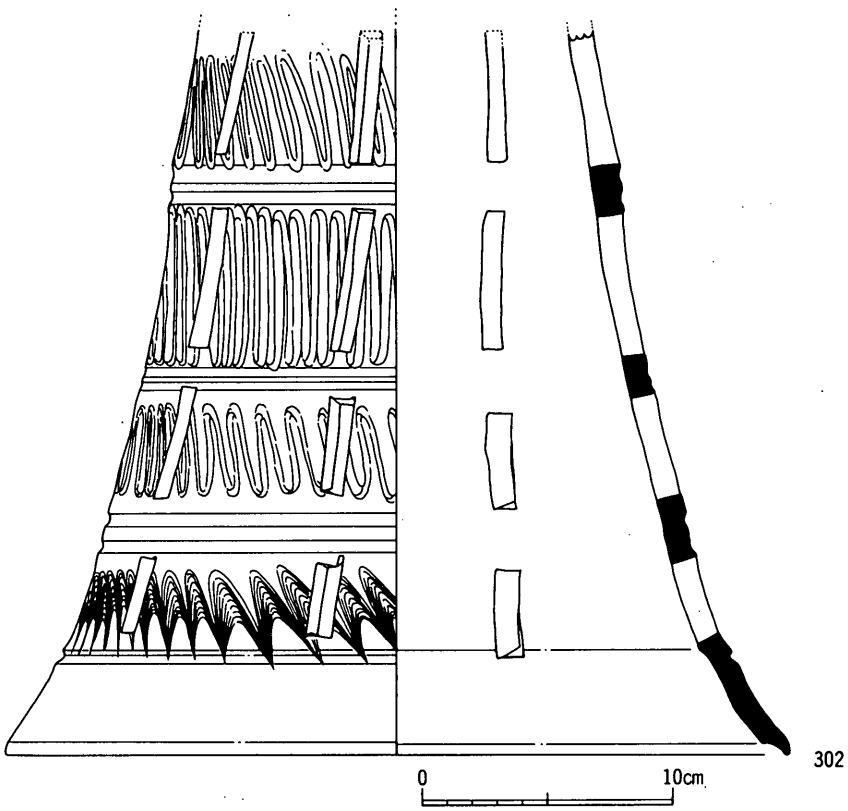
376～380は切先を中心とした刀身部分の破片である。376は368に近い質感を呈する刀身部分の破片であり，残存長約8.0cmを計り，関側から３分の１程度のところから内側に二次的に曲げられている。377～383は切先部分のみの破片で，残存長は何れも約２～４cmで全容を明らかにし得ない。377・382・383は他のものに比べ幅，厚さとも小さく刀子形（片刃式）鏃鋒部先端の破片である可能性がある。木質の残存は381にのみ僅かに認められる。

鉄　鉾（第56図386）

玄室奥壁沿いから出土した。異物などの錆着が著しいが，遺存状態は良好といえる。全長31.8cm，身長22.4cmを計る山稜身で，断面三角形を呈する。鉾身は中央部で一辺約1.4cmを計り，基部に袋状の装着部を持つ。その規模は長さ9.4cm，直径2.5～0.7cmを計る。装着部には木柄が僅かに残存している。

太　刀（第56図387・388）

387は小型の太刀である。先端切先付近は，僅かに反っている。残存長は切先部分の錆着のため判然としないが，約46.5cmと推定される。断面は鎬を持たず，二等辺三角形で僅かに膨らみを持



第51図　石室内出土遺物実測図②

ち，中央部で幅2.7cm，厚さ0.6cmを計る。ほぼ全面にわたって木質が残存している。

388は全長106.0cmを計る直刀で，異物などの銹着が著しく，刃部を僅かに欠損しているが遺存状態は良好と言える。刀身の長さは関部が銹着のため判然としないが，約89.5cmと推定される。断面は鎬を持たず，二等辺三角形で僅かに膨らみを持つ。切先近くでは刀身の幅3.8cm，厚さ0.8cm，関部近くで幅4.4cm，厚さ1.0cmを計る。茎は幅2.6cm，厚さ0.9cmを計る。端部は僅かに欠損しており，目釘は不明である。なお，一部に木質が残存している。

鉋（第53図319）

319は，鉋と思われる。断面は二等辺三角形を呈しており，稜を持つ側に上端をやや反りかえらせている。下部を欠損しているため全体は不明であるので，鏃の可能性も考えておかなくてはならない。

－古墳周辺攪乱土層出土鉄製品－（第53図315～318，320～324第54図325～333）

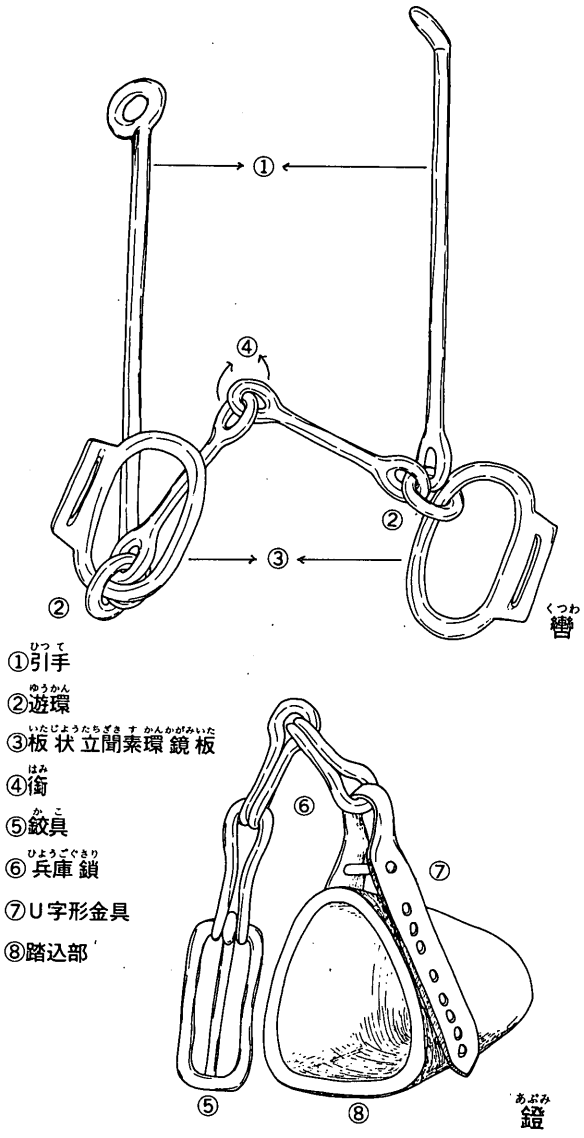
古墳周辺攪乱土層より多数の鉄製品が出土している。これらは，おそらく長砂古古墳群のひとつからの出土と思われる。

315・316は，馬具の革金具と思われ，五角形を呈し，鉄鋲を持つもの（315）と，一辺2.6cmの正方形で鉄鋲を4つ持つもの（316）がある。

317は鉄斧である。全長5.6cm，刃部2.8cm，袋部2.8cm，最大幅3.4cmで袋部断面を隅丸の長方形に作っている。

318・320～324は，鉄鏃である。318は，切先が圭頭状を呈し，鏃身の側面には刃を持たない。320は，柳葉形の鏃であろうか。鏃身は細く長い。321～324は，鉄鏃の茎である。321の矢柄には，木質が残っている。

325～333は，馬具である。325・326は鐙鞍で，二連の兵庫鎖の一方に鉸具を，もう一方にU字形金具（326・327）をつけている。U字形金具には，鋲が打たれ



第52図　長砂古4号墳出土馬具復元推定図

ており，木製の沓受部と接合する構造をとる木製壺鐙であったと思われる。330～333は，轡と思われる。330・331は，素環の鏡板に遊環・引手・銜が付いているものである。332は，引手の一部であろうか。333は板状立聞素環鏡板に銜が付くものと思われる。

装飾類

－紡錘車－（第57図１）

羨道部床面直上から１点出土した。断面截頭円錘形で，外縁に面を持つ形状を呈する，緑色片岩製である。外縁部を僅かに欠損しているが，直径4.2cm，厚さ1.3cmを計り，径0.62cmの貫通孔を有する。

表面は平滑に仕上げられているが，斜面部分に僅かに鑿跡が認められる。なお，使用痕が認められる。

－耳　環－（第57図２～５）

合計４点が出土しており，その何れもが銅地銀張りのいわゆる銀環である。地金の銅は全て中実である。

２．３は玄室奥壁寄りから接近して出土したものであるが，法量，色調などから対をなすものと考えられる。２は端部を丸く仕上げた径約６㎜の銅地金を長径2.9cm，短径2.5cmの「Ｃ」字形に曲げ，表面に銀箔を施したものである。全体に遺存状態は良好であるが，銹化のため，やや光沢に乏しい。３は２とほぼ同巧同大のものであるが，部分的に亀裂，破損が見られ，緑青銹がふき出している。

４．５は法量は異なるものの，同等のつくりのものである。径２～３㎜の銅芯に銀箔を施したもので，２．３に比べ稚拙なつくりである。これら２点は法量差が認められるところから，各々が単品と考えられる。

－玉　類－

勾　玉（第57図６．７）

玄室中央部やや奥壁寄りから２点が出土した。何れも硬玉製で，淡白緑色を呈しており，法量は異なっているものの，その形状は趣きを一にしている。６は両側，７は片側穿孔である。

切子玉（第57図８）

玄室中央部やや奥壁寄りから１点のみ出土している。稜角はやや不明瞭であるが，平面六角形を呈する十四面体のもので，白濁した水晶製である。直径9.2㎜，厚さ12.1㎜を計る。

管　玉（第57図９～20）

合計12点が出土している。これらは玄室中央部やや奥壁寄りから，あるいは同東北隅からある程度まとまって出土している。

何れもが碧玉製で，オリーブ色から淡灰緑色を呈しており，表面は平滑に磨き上げられている。規格に統一性は見られないが，色調の差が若干反映されているようである。なお，穿孔は何れも

片側から実施されている。

ガラス製臼玉（第57図21～31，第58図32～44，46，49～53，61～109，117）

ガラス製小玉同様多数出土している。図化し得たものは80点を数えるが，破砕したものも若干見られることから，本来副葬されたものは80点を超えるものと思われる。

直径6㎜前後，断面図が扁平なドーナツ形をなし，藍色を呈するものがその大半を占める。

68～70は法量が大きく，形状を異にしている。何れも直径10㎜前後を計るが，68・69は断面がやや歪んだ扁平なドーナツ形を呈し，70は断面がほぼ球形を呈するものである。

ガラス製小玉（第58図45，47，48，54～60，110～116，118～164，第59図165～209）

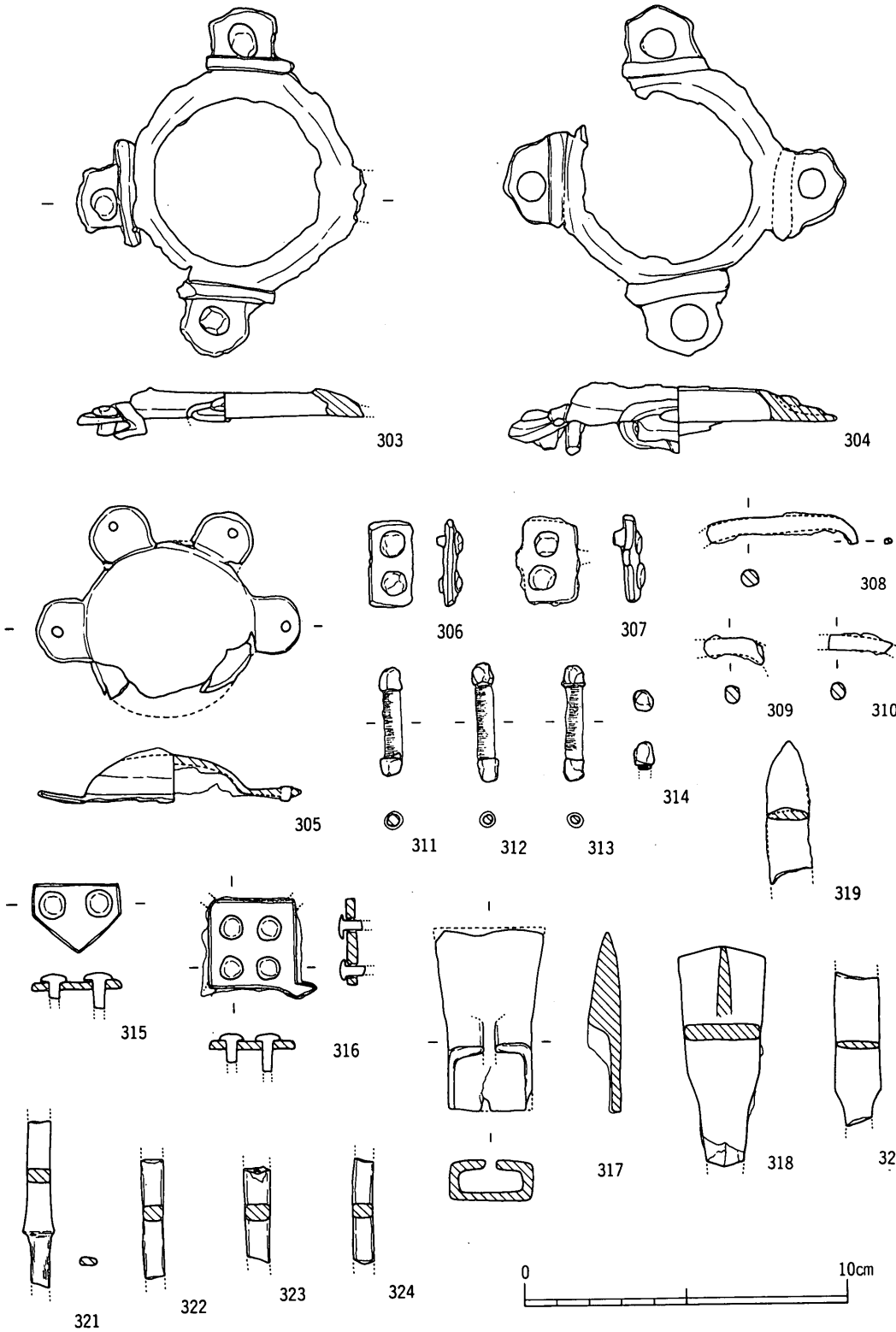
石室奥半部から多数出土した。図化し得たものは109点を数えるが，破砕したものを含めると総数は120点を優に越えるものと考えられる。

直径が3㎜前後，断面形が扁平なドーナツ形を呈するものがその大半を占めており，色調は藍色を中心として，うすい青色，淡青緑色，淡白緑色，黄色を呈してしる。

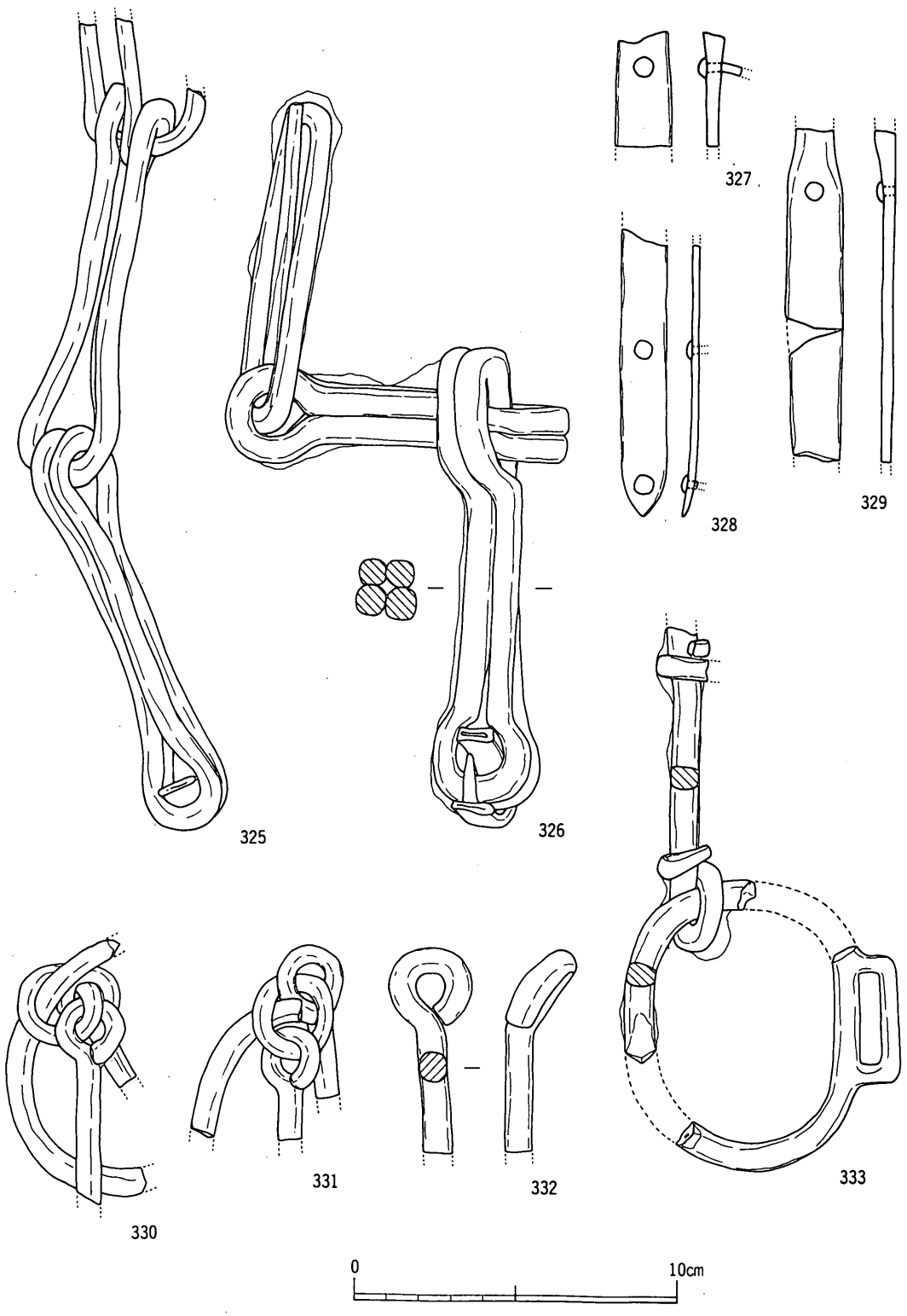
土製丸玉（第59図210～261）

玄室中央部，北側側壁沿い，左袖部より多数出土しており，52点を図化し得た。やや脆弱なつくりのため，検出，水洗段階で破砕したものも多く認められており，総数は70点を優に越えるものと思われる。

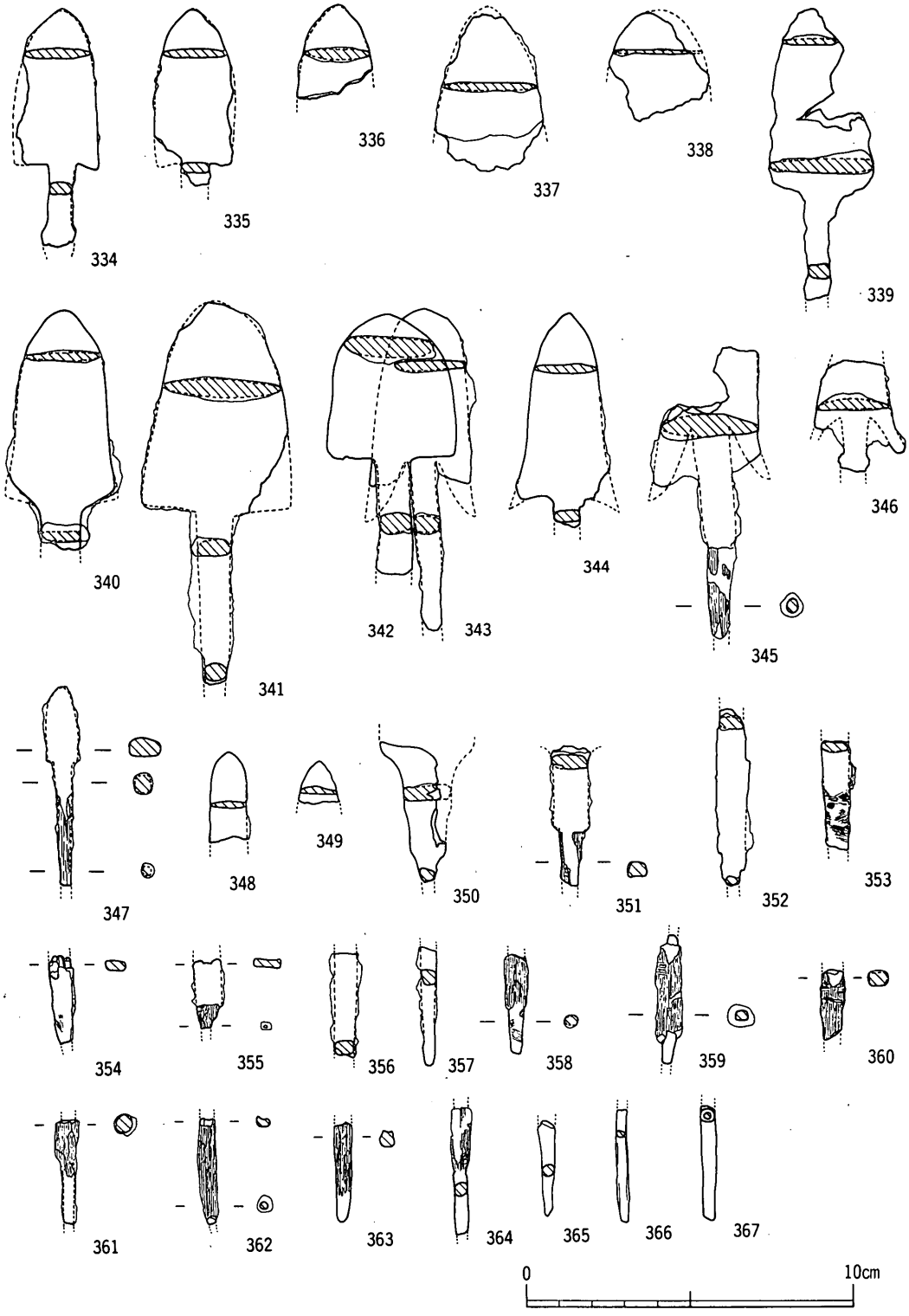
直径8㎜前後，厚さ6㎜前後を計り，断面が扁平なドーナツ形を呈し，径1.5～2.0㎜の貫通孔を有する。色調は全て黒褐色を呈している。



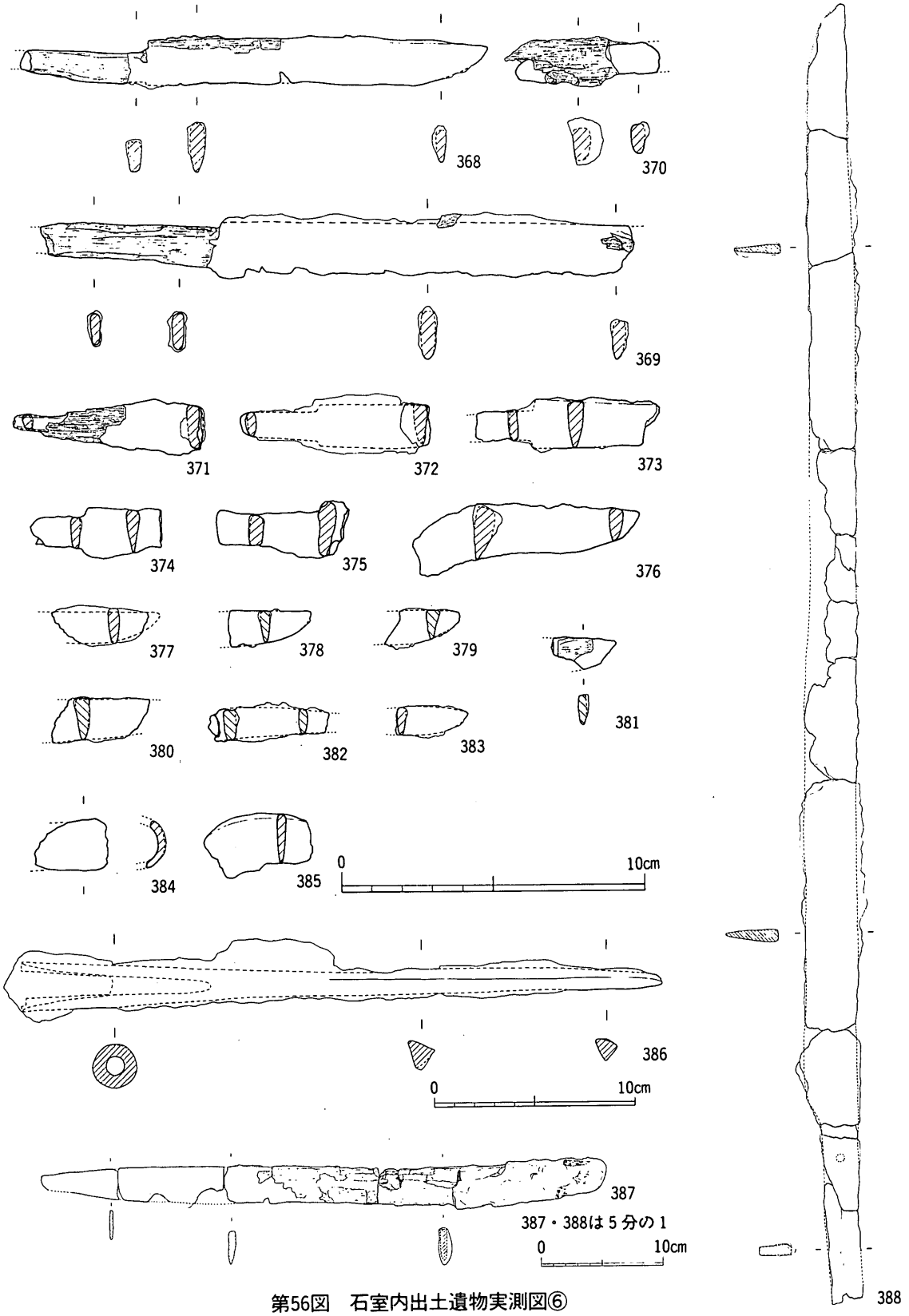
第53図　石室内出土遺物実測図③



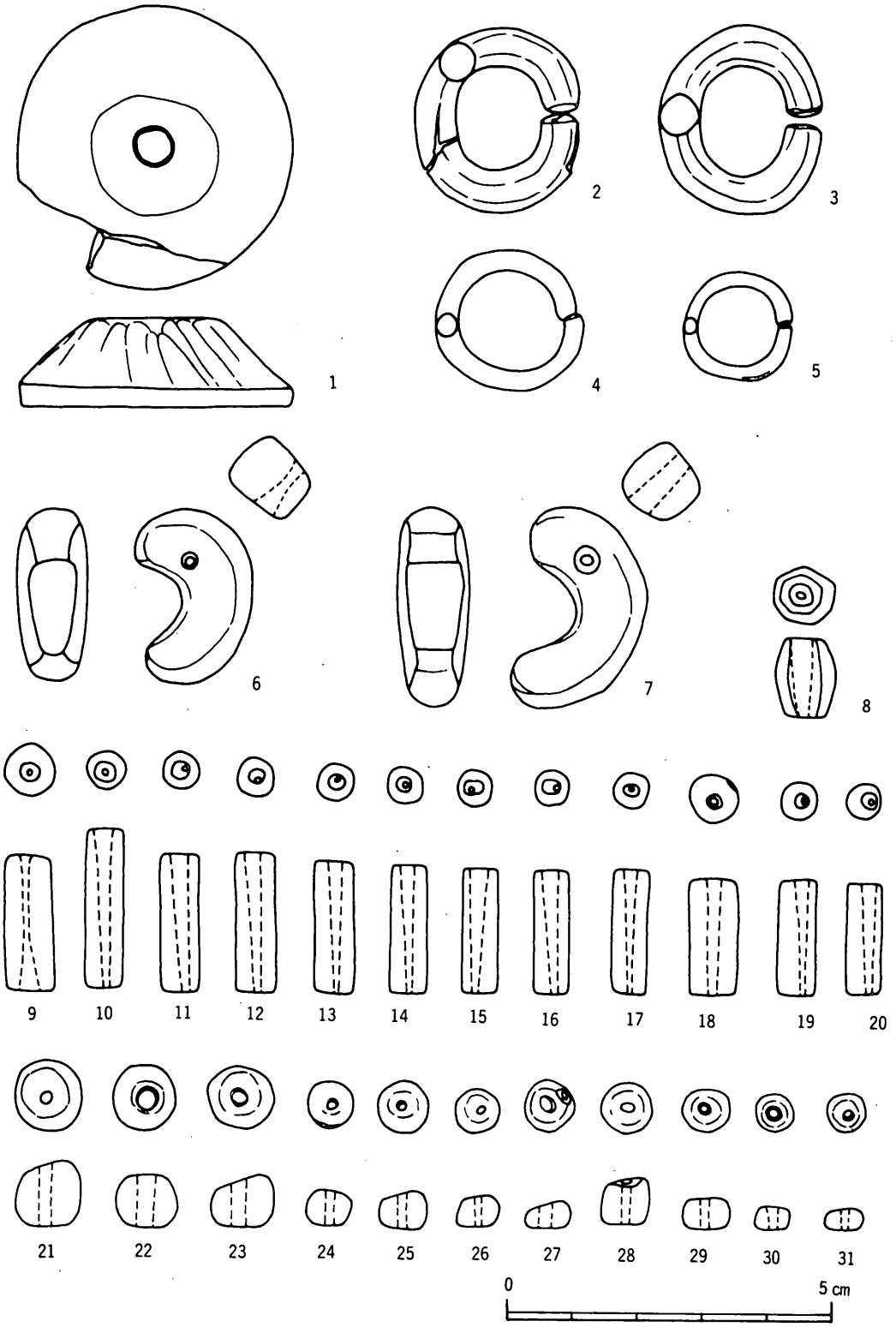
第54図　石室内出土遺物実測図④



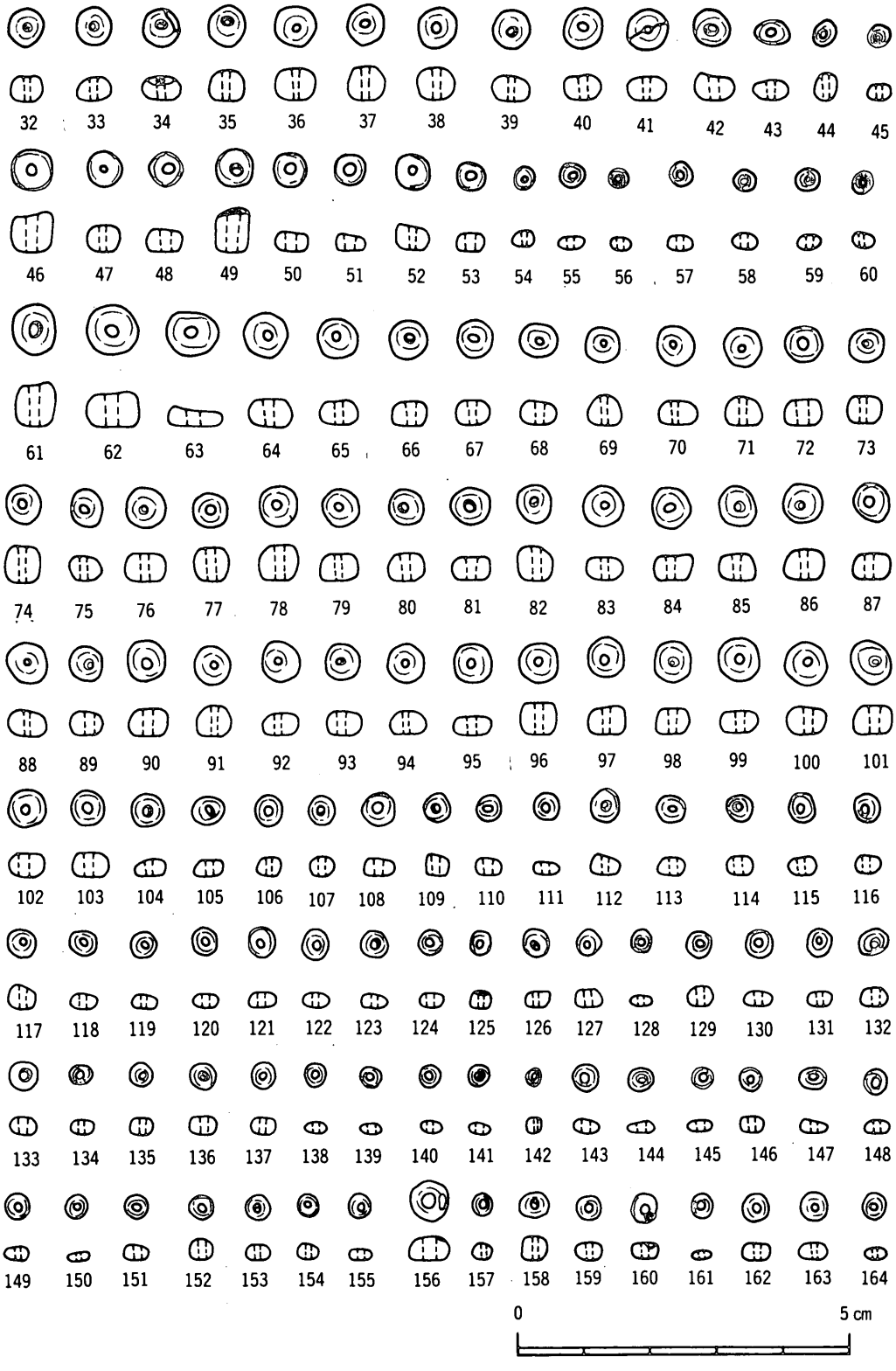
第55図　石室内出土遺物実測図⑤



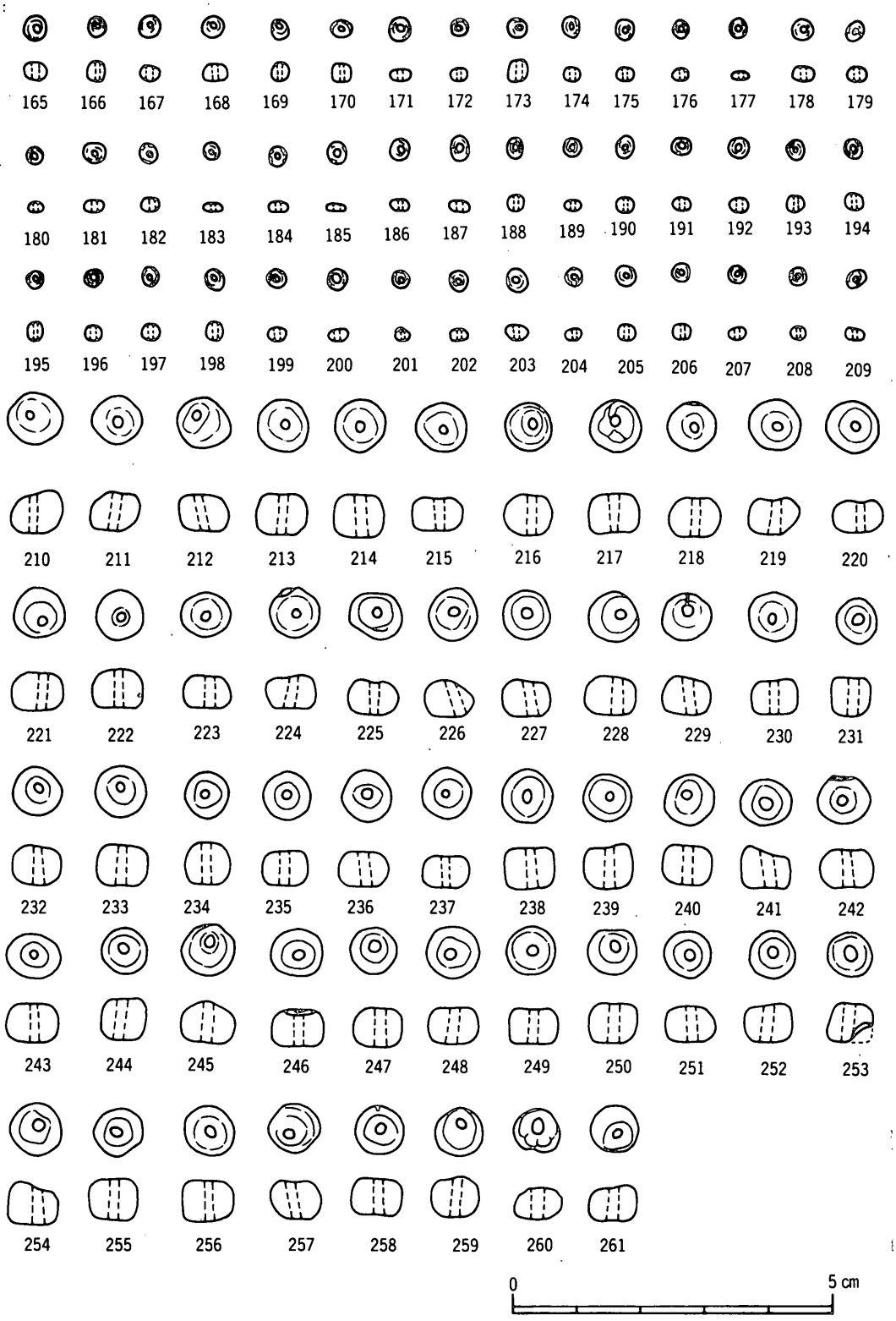
第56図　石室内出土遺物実測図⑥



第57図　石室内出土遺物実測図⑦



第58図　石室内出土遺物実測図⑧



第59図　石室内出土遺物実測図⑨

b．墳丘盛土内出土遺物

長砂古4号墳では，墳丘築造時，古墳造営にかかわる祭祀行為があったことを示唆する痕跡が確認された。その痕跡とは，墳丘盛土内に含まれていた土器群で，墓道の右側と左側に確認されている。この土器群は，土層的に弥生時代の土器を含む包含層上面に接するように置かれ，版築土の中に掘り方なしの混入状態を呈していた。また，墓道左側土器群の上面観は，かためておかれた状態を呈していたが，右側土器群は，整然と立て並べられていた土器群が版築のため左右に倒れたような状態で検出されている。

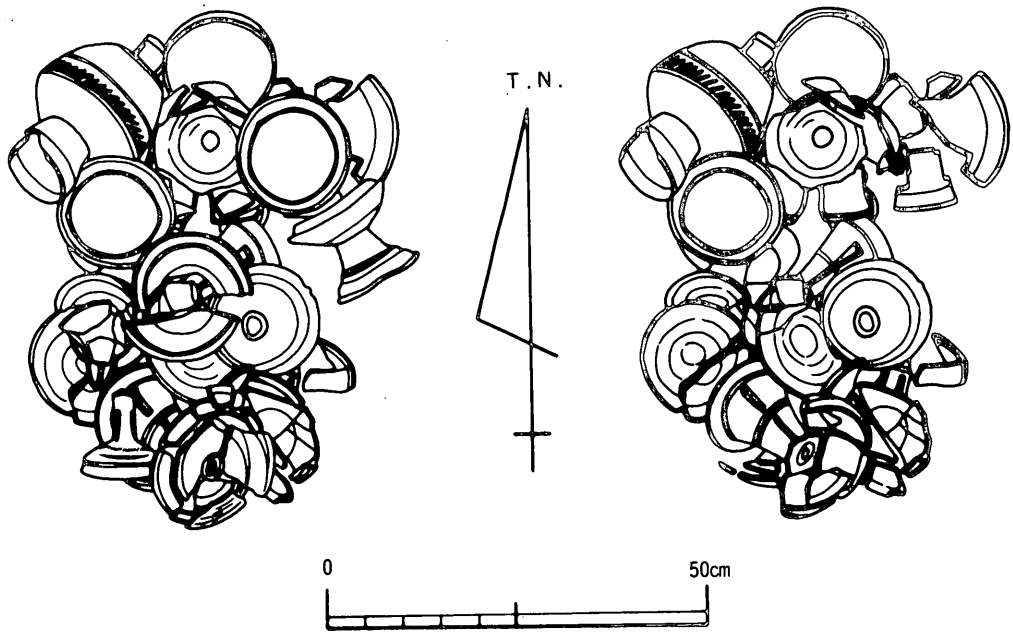
墓道左側土器群であるが，器種別に分けると有蓋高坏8点，無蓋高坏1点，高坏蓋7点，脚付き壺1点が版築包含土層中より出土している。これらは，高坏と蓋を主として，かためておかれている状態で検出された。

墓道右土側器群も，器種別に分けると，無蓋高坏7点，短頸壺1点と，高坏を主としてまとめられており，供膳具による祭祀形態があったことが判る。

これらの土器群のなかで，特に高坏に関しては，局部及び口縁立ち上がり部の形態により，いくつかのタイプに細分されるので，石室内出土遺物と共にここで説明する。

須恵器

石室内から出土した須恵器は，提瓶（第50図295），坏蓋（第50図296）と若干の高坏を数えるのみで，大半は周辺から出土している。その器種は，高坏蓋，坏蓋，高坏，提瓶，脚付長頸壺，短頸壺，器台，甑等と多岐にわたっている。

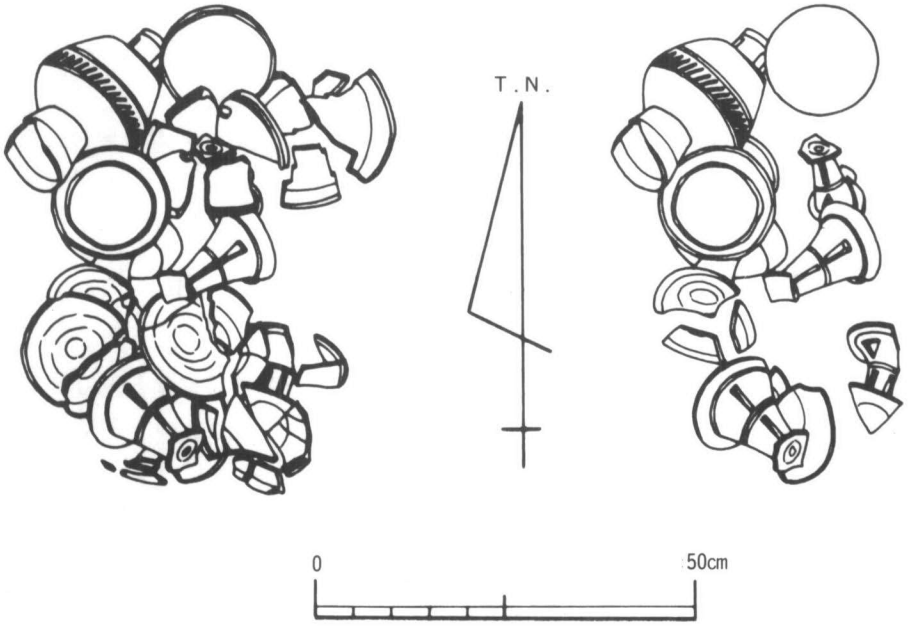


第60図　左側土器群出土状況①

－高坏蓋－

7個体が出土しており，全て天井部につまみを伴うが，つまみの形状から2つに分類される。

第62図　右側土器群出土状況



第61図　左側土器群出土状況②

Ⅰａ類（第63図389～392）

口径に比べ高い器高を持ち，天井部に中央のくぼんだやや大きめのつまみを伴う。形態的には外面中程の稜の下側に凹線を伴うことを特徴とする。

Ⅰｂ類（第63図393）

天井部に中央のくぼんだやや大きめのつまみを伴うが，天井部が比較的平坦で，口縁部と120°を成す。天井部内面に同心円文叩きが明瞭に残る。

Ⅱａ類（第64図395）

天井部に中央の膨らんだ宝珠状のつまみを伴う。口縁は端部に向かって内彎するが，端部は外方につまみだされている。

Ⅱｂ類（第64図394）

天井部に上面の平坦なつまみを伴う。口縁端部は395と同様に仕上げられているが，器壁は比較的厚い。

－坏蓋－（第50図296）

羨道部理土中より床面から浮いた状態で破片として出土した。器壁が比較的厚く，口縁端部は丸く仕上げられている。外面に「＋」印のヘラ記号が認められる。

－高　坏－

坏部に立ち上がりを伴うもの（有蓋高坏：Ⅰ類）と，そうでないもの（無蓋高坏：Ⅱ類）との2つに分類される。

Ⅰａ類（第63図396～398）

比較的器高が低く，脚部は太く短い。5分の2で2段に屈曲し，透かしを伴わない。

Ⅰｂ類（第64図401～403）

所謂長脚2段透かしの有蓋高坏で，脚部は下端付近で2段に屈曲する。403のみ長方形と三角形の透かしを伴う。

Ⅰｃ類（第63図399・400）

長脚2段透かしの有蓋高坏だが，脚部の屈曲はほとんど見られず端部は丸く仕上げられている。

Ⅱａ類（第65図406～412）

長脚2段透かしの無蓋高坏で，脚端部が丸く仕上げられている。その形状には若干のバラエティーが認められる。

Ⅱｂ類（第64図404）

長脚2段の透かしの無蓋高坏である。坏部は口径に比べて器高が高く，脚部は細く直線的に延び，2分の1でラッパ状に広がる。

Ⅱｃ類（第50図290）

長脚2段透かしの無蓋高坏である。形態的にはⅡａ類に近いが，全体に小型で坏部下半にヘラ

描波状文を伴う。

II d類（第50図291）

長脚2段透かしの無蓋高坏である。坏部は比較的平坦で口縁部と105°を成す。脚部は4分の3ほど欠損しているが，形状はII c類に近いものと考えられる。

－提瓶－（第50図295）

口縁部は短く，内彎気味に延びる。肩部の把手は鉤状を呈し退化段階途上にある。扁平な球状には全面にカキ目調整が施されている。

－台付長頸壺－（第64図405）

脚部2分の1を欠損しており，残存高26.3cmを計る。口縁部は緩やかに外反し，端部が内彎する。体部最大径を3分の2に持ち，肩部に2条の凹線を伴うクシ描列点文が施されている。脚部は長方形2段透かしを3方向に持ち，緩やかに外反する形状を呈するようである。

－短頸壺－（第65図413）

口縁部は立ち上がりがやや内傾し，端部は丸く仕上げられている。体部最大径を3分の2に持ち，底面にかけて緩やかに内彎する。口頸部から肩にかけて蓋をして焼成した痕跡が認められる。

－脚付長頸壺－（第50図293・297～301）

293・297・298は，長頸壺の口縁部である。口縁端部においてやや内方に屈曲し，すぐ外反するもの(293)，やや内彎気味に外方へ延び，口縁端部外側を上方に短くつまみ上げたもの(298)がある。

299～301は，脚付長頸壺の脚部である。三方2段透かしを持つもの（299・300）と四方1段透かしを持つもの（301）があり，前者は，後者に比べ裾がかなり広がっている。299・300は，脚部上半外面にクシ描が施され，内面にはしぼり目が見られる。また，299・300は，上下透かし間に凹線を施し，301は，透かし上下に凹線を施す。透かしは，全て長方形を呈している。脚端部は，外方に面を持つもの（299）と下方に面を持つもの（300・301）がある。

－𤭯－（第50図294）

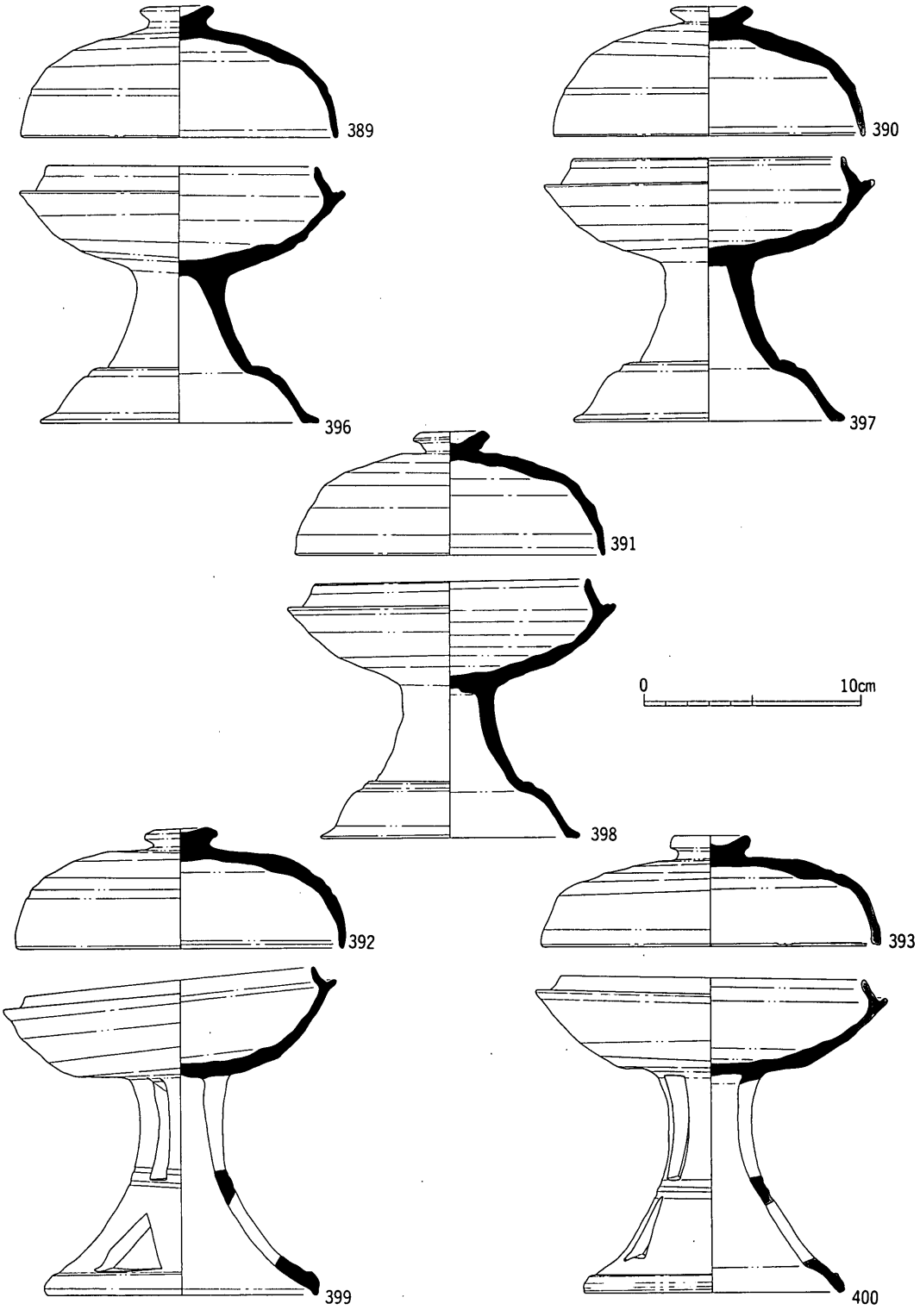
口縁部は，2段になりかなり広く拡がる。外面には，ヘラ磨き状の調整が施されている。

－器台－（第51図302）

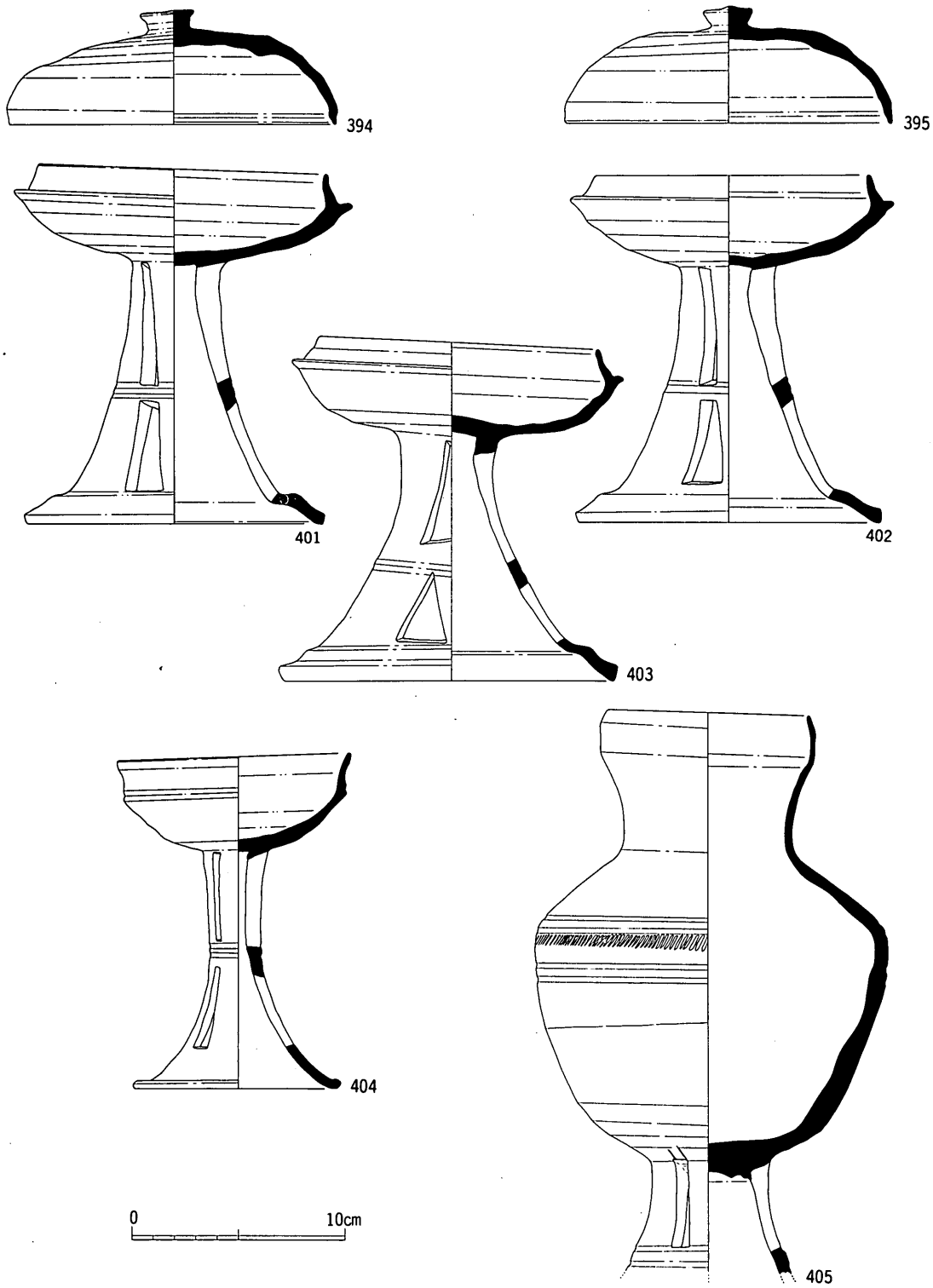
2状の凹線を3段施し，その凹線によって4区に画した外面の上部三区画をヘラ状工具による磨きを施し，最下段の区画には，波状文を施している。透かしは長方形で，4段6方向に穿たれている。脚端部は，外方に小さく彎曲させている。

以上のように墳丘盛土内及び石室内埋土より多量の遺物が出土しており，特に墳丘盛土内より出土した土器群は，なんらかの祭祀行為の結果生じたものと思われ，これら土器群による時期決定が古墳築造時期及び初葬時期を決定する貴重な資料となった。

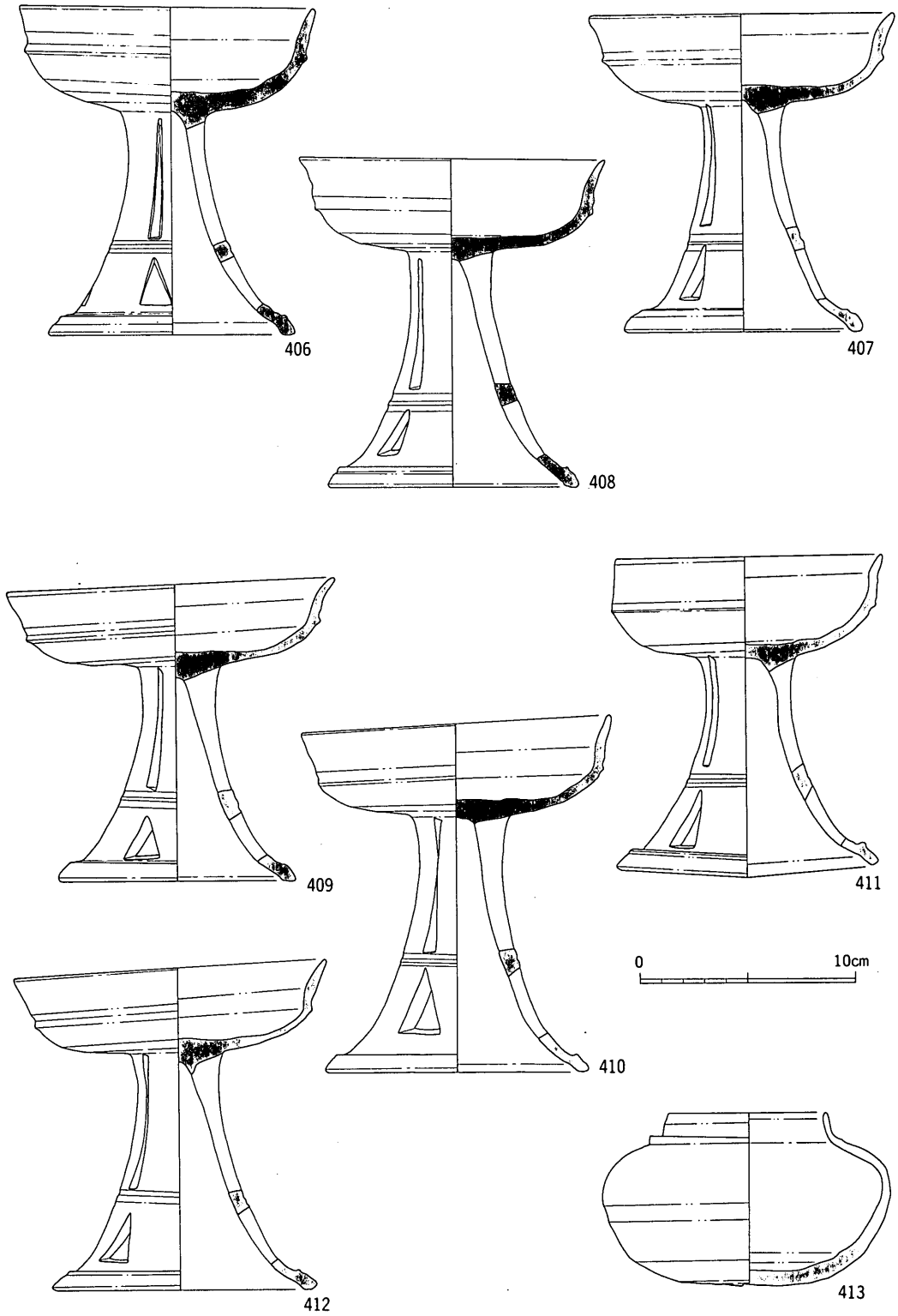
須恵器細部の特長については，遺物観察表（第11表290～302，389～413）にまとめてあるので参照されたい。



第63図　左側土器群実測図①



第64図　左側土器群実測図②



第65図　右側土器群実測図

c．周溝内出土遺物

当古墳では，石室の北側と西側で周溝が検出されているが繋がってはおらず，古墳の立地する高所側で切れている。高所から傾斜を持つように造られた周溝は，丘陵地の縁辺部に造られた古墳によく見られ，周溝に排水の機能を持たせたものと思われる。周溝検出状況から，2時期にわたる堆積があったことが窺れる。

この周溝より多数の遺物が出土している。

414～416は，弥生土器で，古墳築造以前の遺構を壊して造られたための混入と思われる遺物である。

417～420は須恵器である。

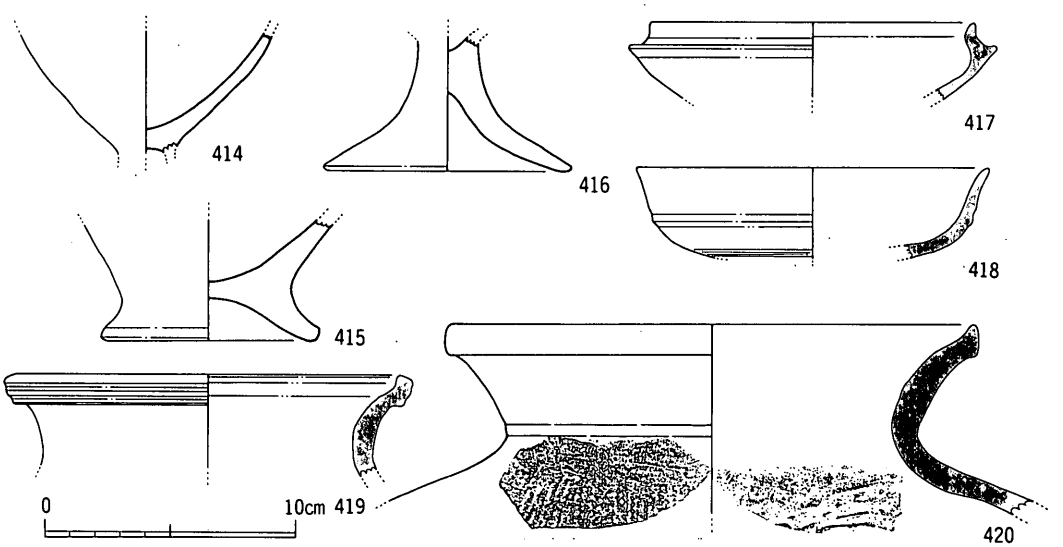
417は，坏身で，立ち上がりも受け部も太いが，かなり退化傾向にある。この土器は，古墳築造時を土器溜りの時期（6世紀3四半期）とすると，やや新しい形成であることから，追葬時あるいは後世の混入遺物と思われる。

418は，無蓋高坏の坏部である。右側土器群の型式に似ていることから，ほぼ同時期と考えられる。

419は，壺である。口縁部をやや拡張している。

420は，甕である。口縁部を上下にやや拡張しており，上端は，上方につまみ出している。

この周溝は，出土している遺物より古墳築造期から6世紀末頃に堆積したものと思われる。



第66図　周溝内出土遺物実測図

ま と め

長砂古4号墳の各細部についての特筆すべき事項を列挙することによって，まとめにかえたい。

①石室構築方法は，母神山古墳群・縁塚古墳群などの群集墳と同様に基底部に方柱状の川原石を直列に配し，上部は方柱状の川原石を小口積みする方法をとっている。また，奥壁及び側壁奥部からの一枚は，基底石に大きめの板石を使用している。

②玄室床面は，二重構造をとっており，第一面は5～10cm程度の川原石を配し，第二面では，中央に配水溝を，その両面に5×15cm程度の方柱状の石を奥壁に向かって左側をランダムに，右側を規則的に配している。

③第一面上に棺床と考えられる川原石を長方形状に配している。また，第二面でも第一面の棺の位置を想定した配石方法（②）をとっている。

④床面の玉砂利は，羨道部中央に配された仕切り石まで敷かれている。

⑤玄室と羨道部の境（玄門部）には，石室構築当初から障壁と考えられる板石が立てられていたようである。

⑥配水溝は，地山状に整地された土層上面から掘り込まれており，素掘溝の上面に板石を配した構造をとっている。

⑦墳丘は，弥生時代の包含層状に版築されている。

⑧版築土層の2カ所に土器溜りが検出された。

⑨時期は，陶邑編年TK43頃，おそらく6世紀第3四半期頃と思われる。

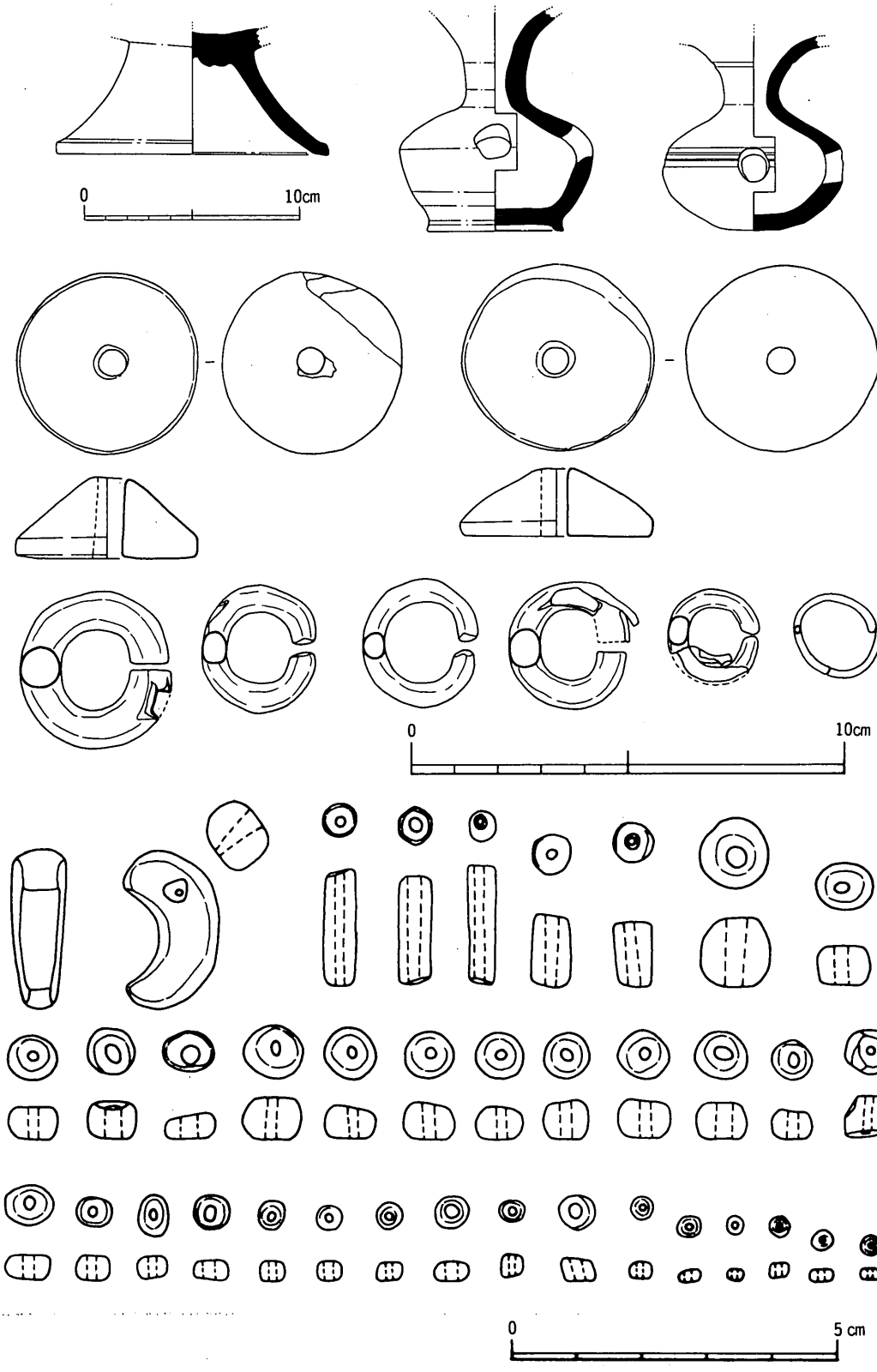
以上のことから長砂古4号墳は，母神山古墳群あるいは縁塚古墳群と同様な石室構造を持つ古墳であることが判る。

盛土中に土器溜りを持つ例は，県内では確認されていない。その土器溜りは，器種的に一つのまとまりを見せており，古墳築造に際して盛土版築直前に墓道両側に高坏を主とする供膳具の祭祀形態をもっていたことが想定される。掘り方の両脇で検出されたこの土器溜りは，おそらく墳丘版築（古墳造営）当初に行われた地鎮祭的な祭りの痕跡ではないかと考えられる。

古墳周辺出土遺物

ここに紹介する遺物は，長砂古古墳群推定地に畑地を持つ篠原氏所蔵の遺物である。篠原氏の記憶により，これら遺物の大半は，長砂古2号墳から出土したものであることが判った。

遺物は，通常古墳に副葬されているものばかりであるが，全体像の不明な長砂古古墳群にあっては，貴重な資料である。

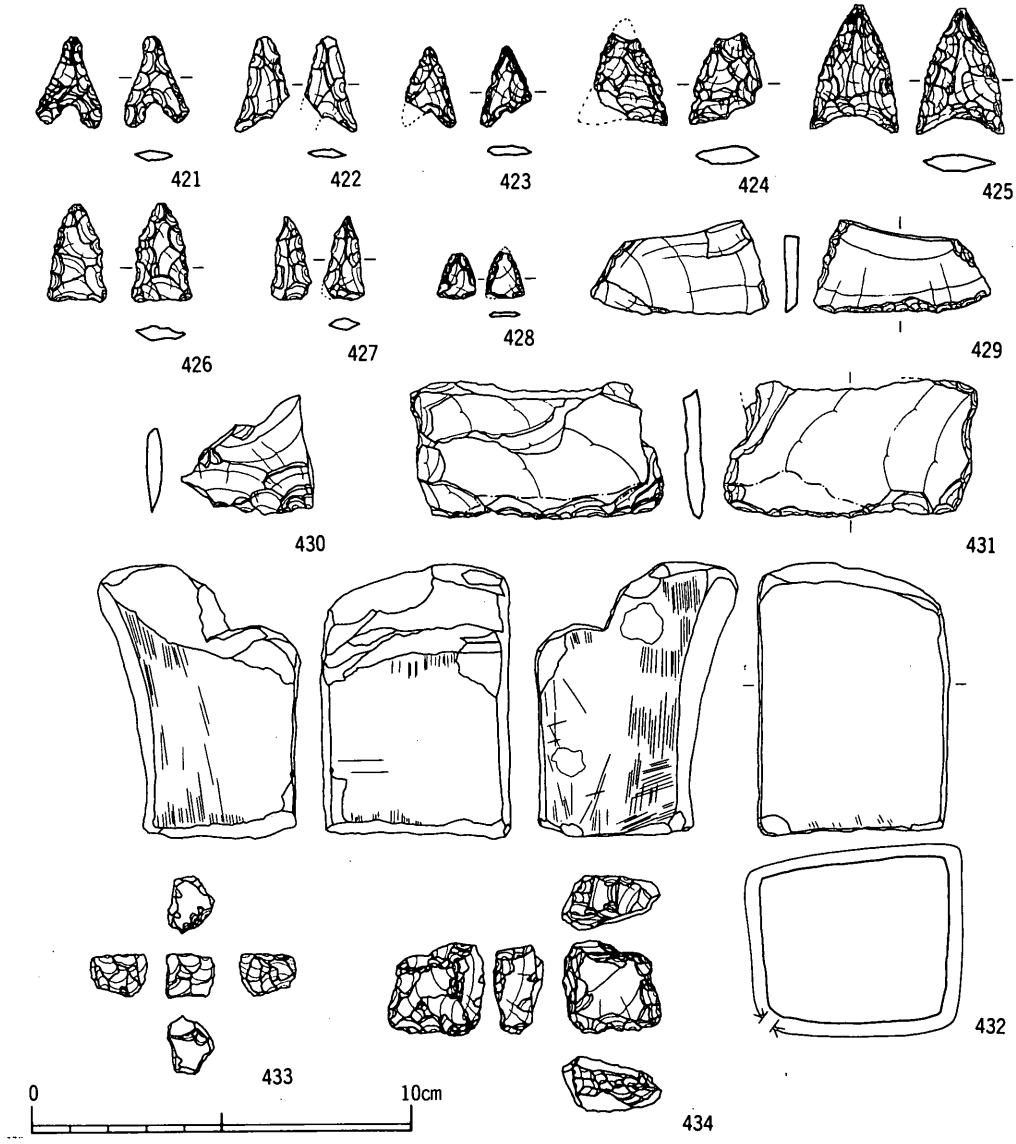


第67図　古墳周辺出土遺物実測図

④ 包含層出土遺物

石製品（第68図－421～434）

421～428はサヌカイト製石鏃。421は翼端が丸みをおびて，くり込みの幅が小さい。片側辺にくびれがあり，左右対称でない。先端がやや突出する。422は二等辺三角形状で，先端はややとがるものと思われる。調整が少ない。423は，先端がとがり，二等辺三角形状を呈し，くり込みは浅い。424は先端角がやや大きい二等辺三角形状で，くり込みが浅い。425は，側辺がやや内彎し，先端・翼端がとがる。くり込みのあるタイプである。426はくり込みがなく，左右非対称の五角形状である。427は五角形状だが，長さのわりに幅が狭く，特異な形をしている。428は検出された中で一番小さい石鏃で周辺に細かい調整が施されている。430は，サヌカイト製の打製石包丁の側



第68図　III区包含層出土遺物実測図（石製品）

辺と思われる。429は，サヌカイト製のスクレイパーだが，石匙の可能性がある。431は，赤色結晶片岩で，打製石包丁と思われる。432は流紋岩製の砥石で，主な研ぎ面は四面あり，どの面もつるつるに磨かれ隣接面とは鋭い稜を持つ。他一面の一部には，研ぎ部があり，計五面が研ぎ面として使われている。433・434は，淡い青緑色を呈するチャートを石材とする。前者は上下に残る石理平行面を打面として，石理に逆らって樋状剝離が認められ，良好なブレイド剝離痕はない。

細石刃核である可能性は低い。後者は稜上にかなりつぶれがあり，剝離痕は認められるものの石核等の可能性は低い。

弥生土器・その他（第69図－435～453，第70図－454～473，第71図）

435～511・516は弥生土器，512・513は縄文土器，514・515は土師質土器の把手である。

長砂古遺跡III区においては，弥生時代の竪穴住居が検出されたこともあり，多量の弥生土器が出土している。

435～453は，弥生土器の壺である。口頸部の形態により4つにグループ分けできる。二重口縁を持つもの（435・436），頸部を広く水平に造り，口縁端部外面の凹線・鋸歯文・竹管文などが施されているもの（437～444），頸部を「く」の字形に屈曲させ，ほぼ水平に口縁端部に延びるもの（446～448），頸部は外反気味に大きく広がり，口縁端部外面には，凹線気味のヨコナデなどを施すもの（449～453）である。

454～467は，弥生土器の甕である。頸部は「く」の字形に屈曲し，口縁端部を上下に拡張させ凹線を施すもの（454～456），端部上端を上方につまみあげるもの（457・458・460），頸部内面に明瞭な稜を持つもの（458）などがある。

468・469は，小型丸底壺と思われる。これらは，頸部を短く屈曲させるものである。

470～472は，鉢である。体部は，やや内彎気味に造られ，頸部は「く」の字に屈曲し，口縁端部に至るものである。

473は，坏である。内彎気味に立ち上がり，口縁端部に至る。

474～501は，弥生土器の底部である。丸底気味の平底を呈するもの（474），やや小さめの平底を呈するもの（475～480）などがあるが，全体にしっかりした平底を持つものが多く認められる。

502～510は，高坏の脚及び台付壺の脚である。508は，外方に広がる脚部で，端部に面を持つ。

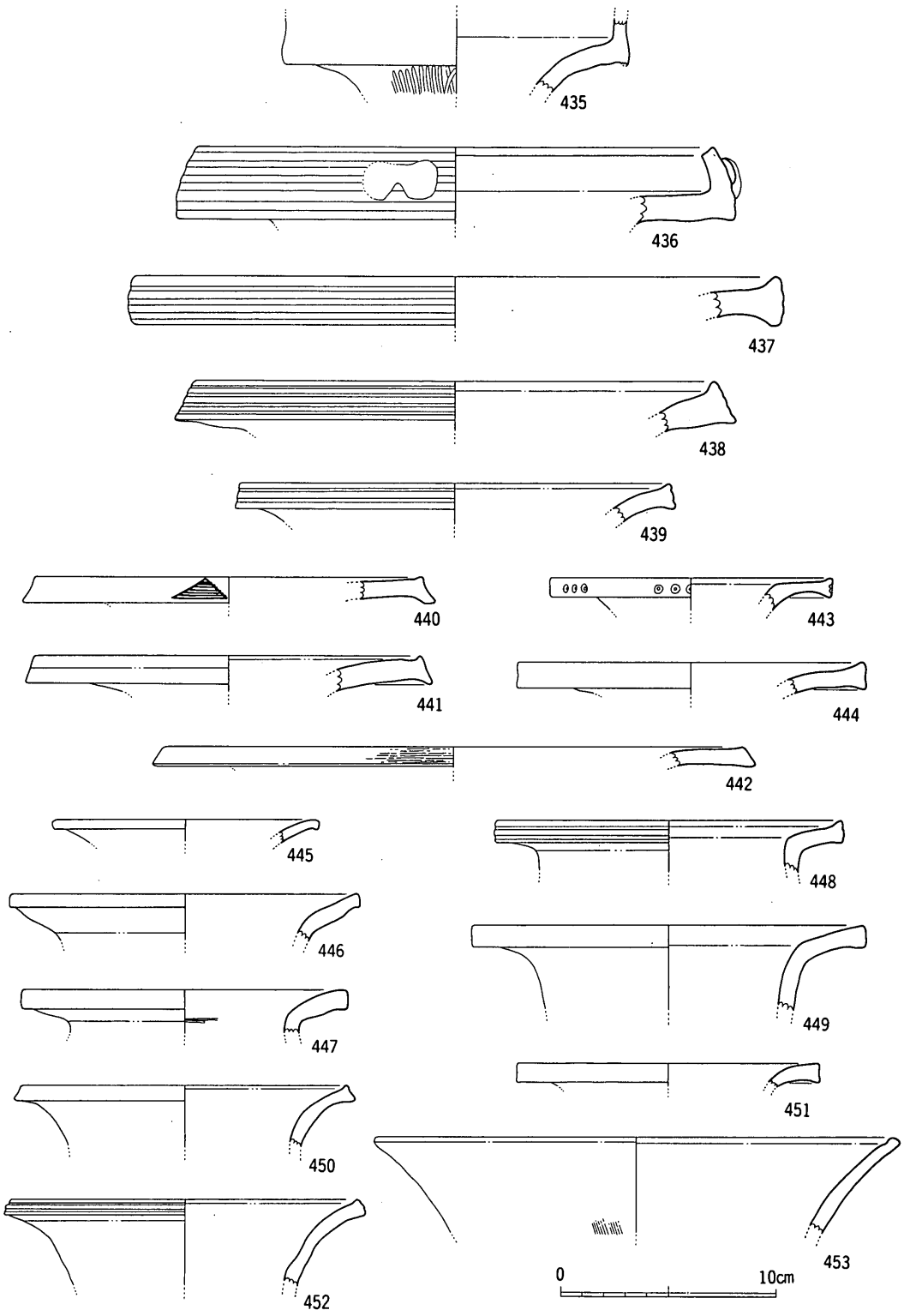
511は，支脚である。棒状の体部下端に，円形状の脚を持つものである。上半は欠損している。

512・513は，縄文土器の深鉢である。

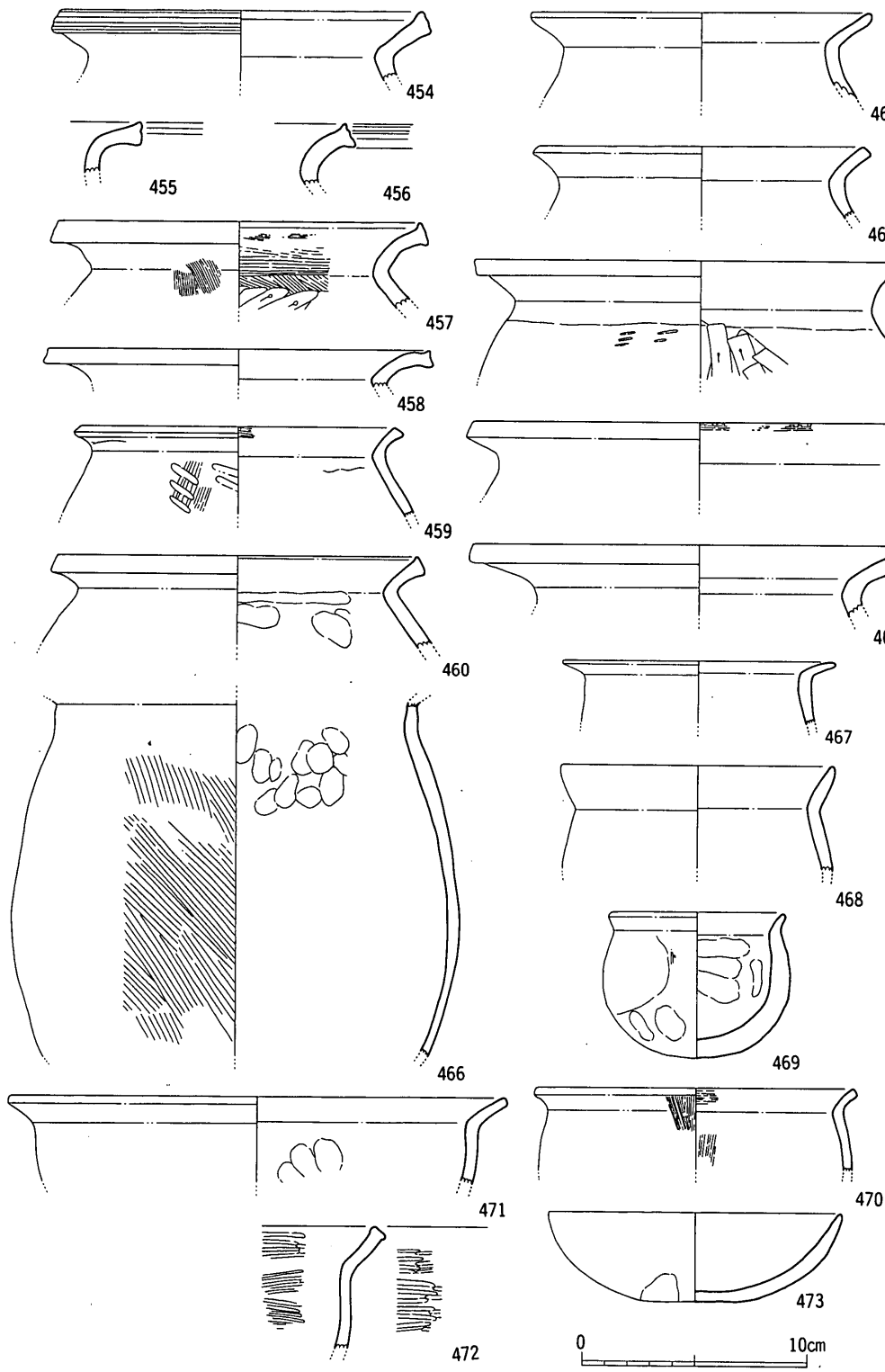
514・515は，土師質土器の把手である。515は，ヘラ描き文様が施されている。

516は，弥生土器の壺である。口縁部は，二重口縁で，頸部外面には撚り紐状の突帯を持つ。

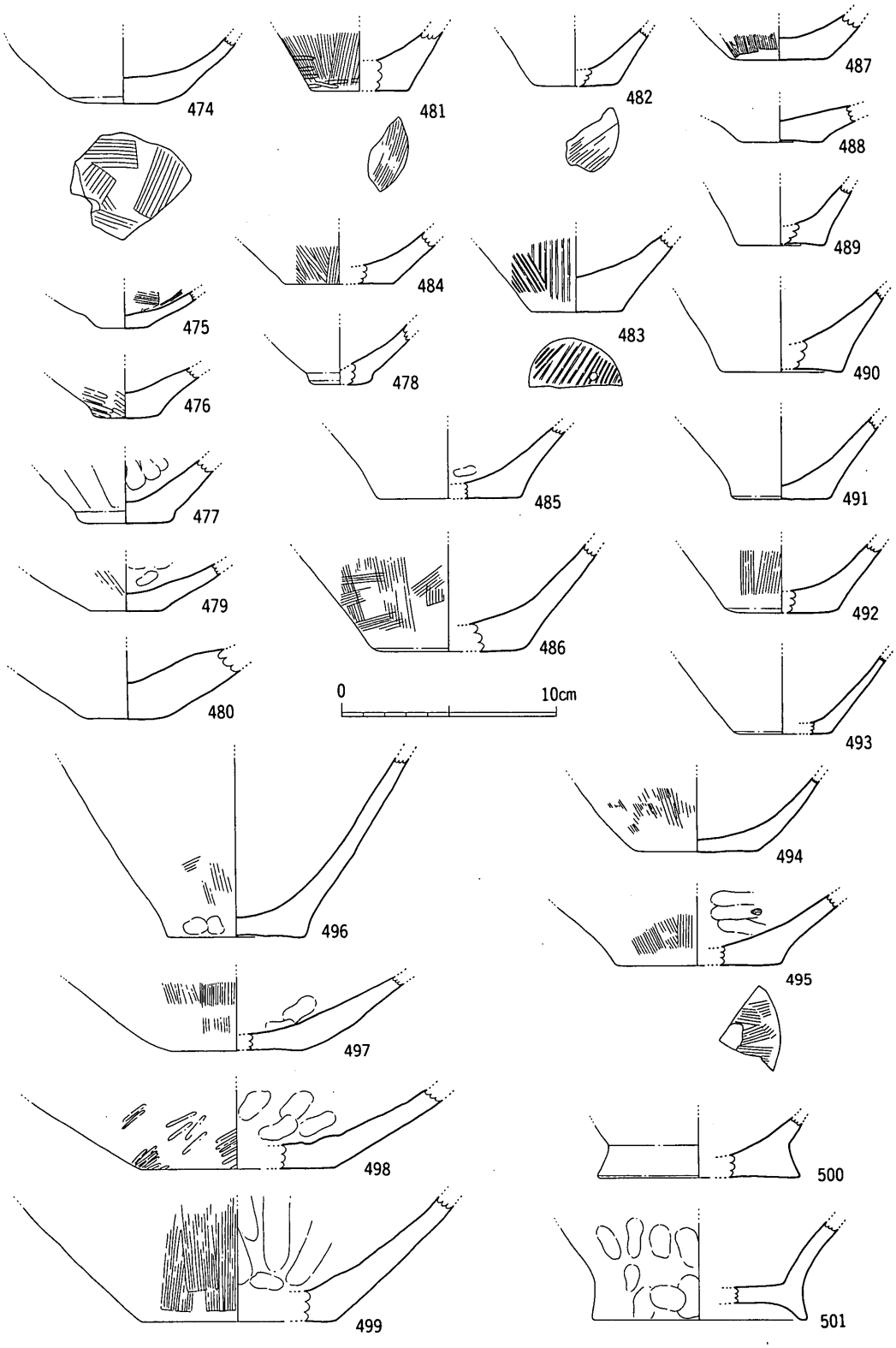
以上の弥生土器は，弥生時代後期後半頃と思われ，三豊平野で増加する弥生時代末頃の前段階として，今後，注目される遺跡であろう。



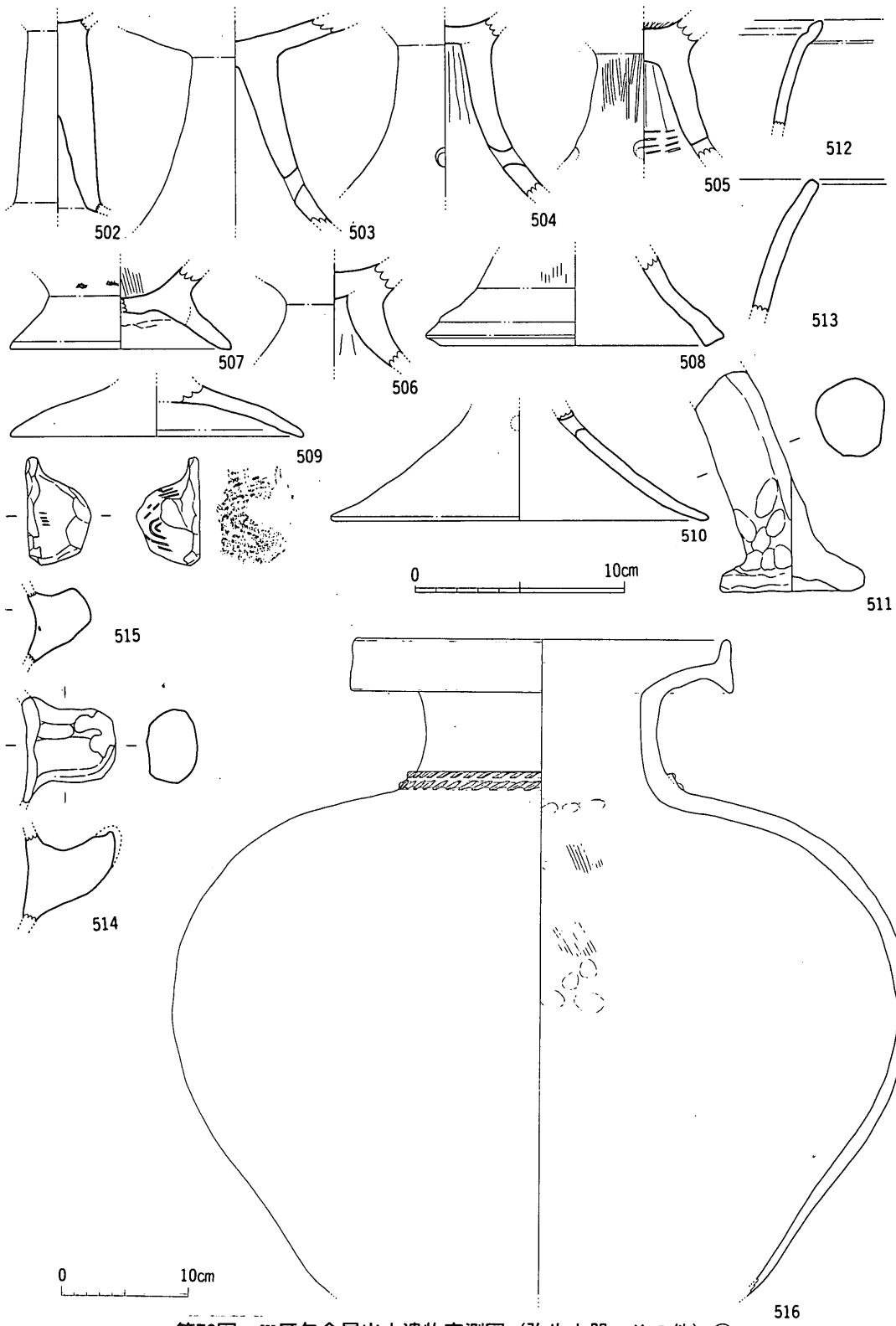
第69図　Ⅲ区包含層出土遺物実測図（弥生土器）①



第70図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器）②



第71図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器）③



第72図　III区包含層出土遺物実測図（弥生土器・その他）④

須恵器（第73図－517～536，第74図－537～547）

長砂古遺跡，包含層より，多数の須恵器が出土している。III区では，長砂古4号墳が検出されたことにより，古墳と同時期の遺物が多数出土している。

517・518は，短頸壺の蓋である。天井部と体部の境に稜を持つ。

519は，長頸壺の蓋と思われる。

520～527，坏蓋である。天井部と体部間に稜を持たず，口縁端部内面に段を持つものである。

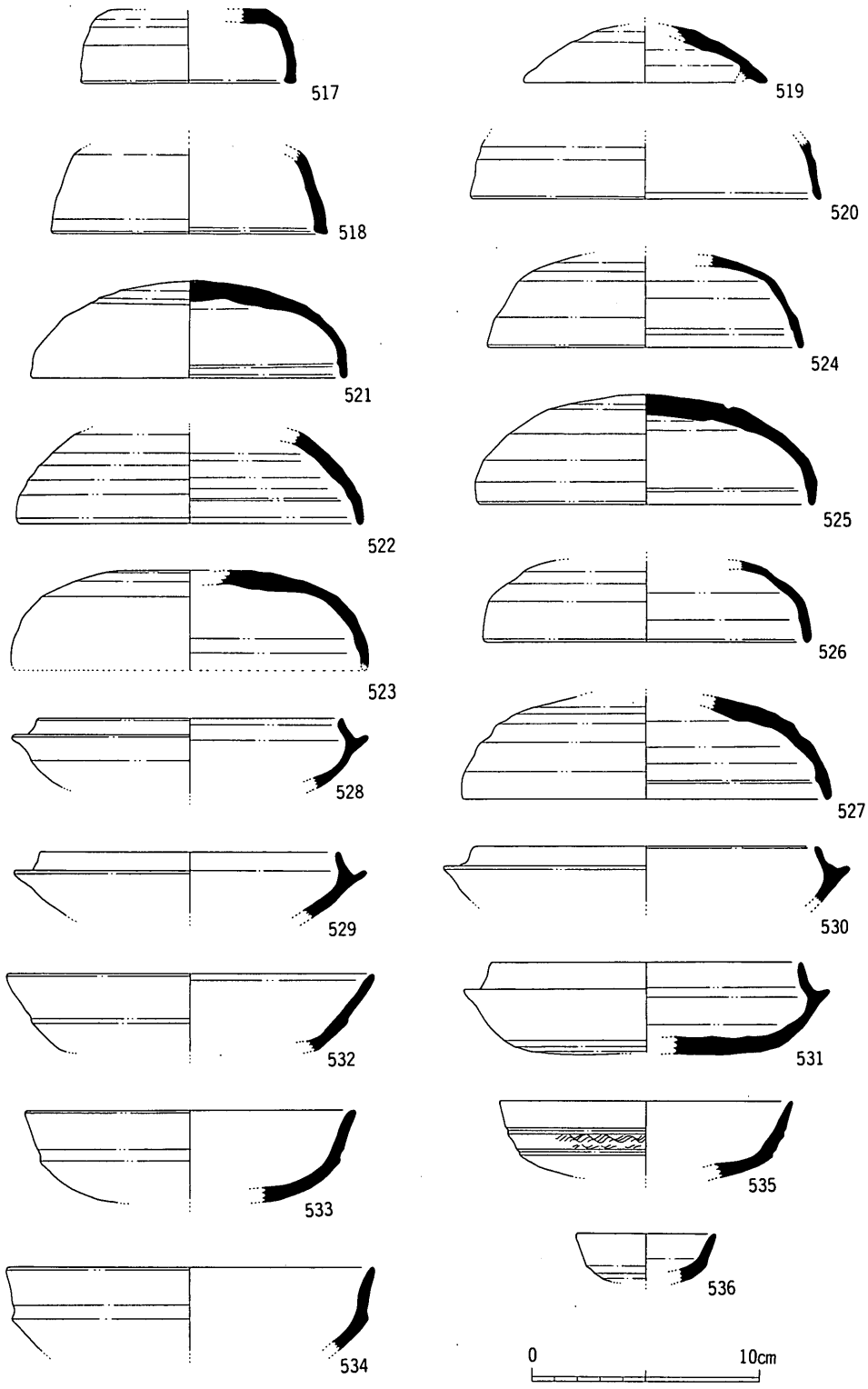
528～531は，坏身である。これらは，受け部・立ち上がりがしっかりしている。

532～535は，高坏の坏部である。全て，無蓋高坏で，体部外面に波状文を施しているものがみられる。

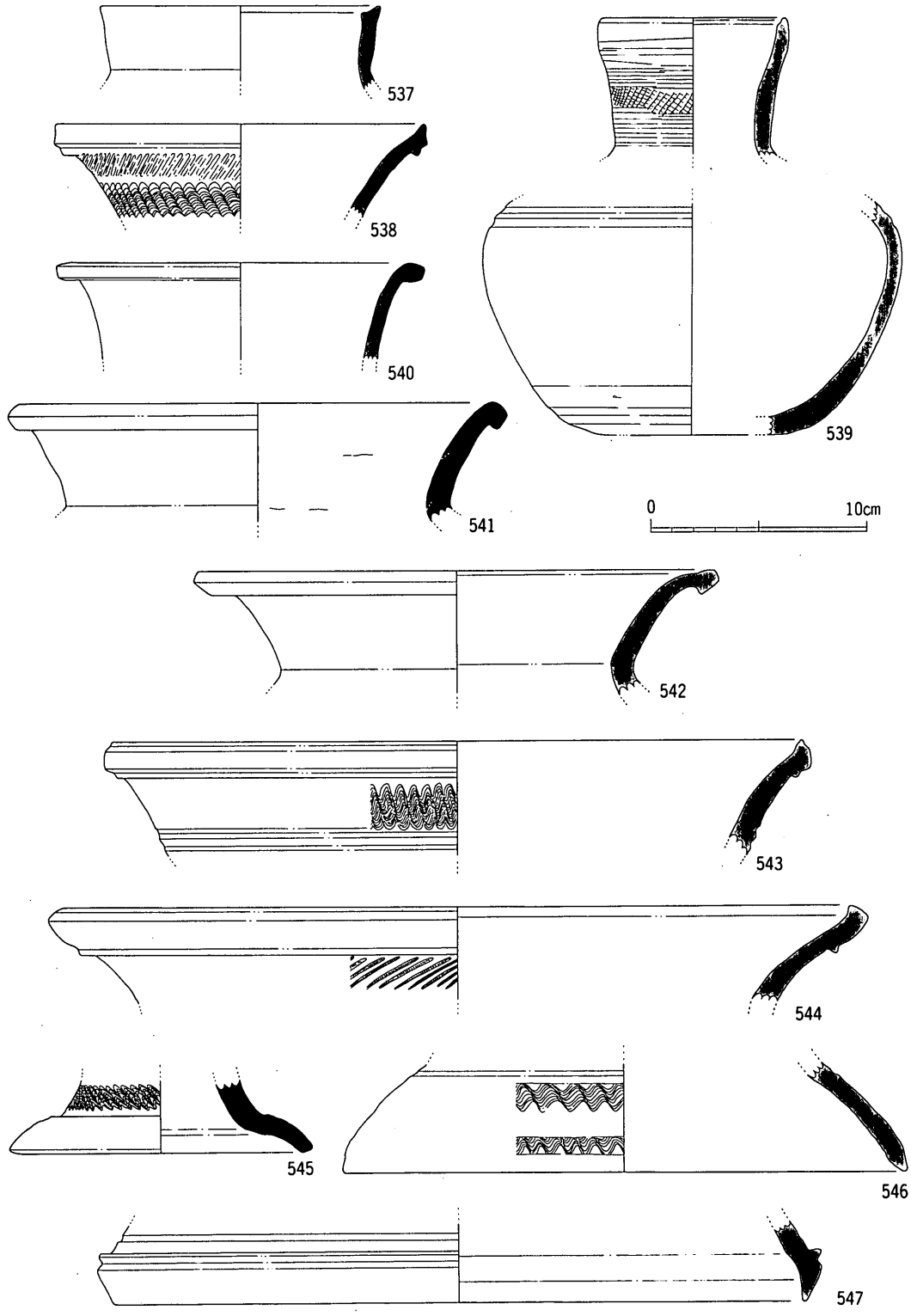
537～540は，壺である。538は，広口壺で，頸部外面に波状文が描かれている。

541～544は，甕である。頸部外面に波状文・櫛描列点文などが施されている。また，口縁端部は，丸くおさめたもの，外面を上下に拡張したものなどが見られる。

545～547は，器台である。



第73図　III区包含層出土遺物実測図（須恵器）①



第74図　III区包含層出土遺物実測図（須恵器）②

陶磁器（第75図－548～574）

548～562は呉須絵碗（陶器）。セト・ミノ系か。549～554は陶胎染付。胎土は549・550・552・553は粗く，551・554は比較的精緻。552は549～551に比べて高台内の削りが高台脇よりも深くなっている。17世紀末～18世紀中葉頃。唐津系か関西系かは不明。555～562は染付磁器。555・556は外面に梅樹文・雪輪・笹文などが描かれる。556は見込みに釉剝ぎ痕が残る。18世紀頃。557・558は外面にコンニャク印判による文様が描かれている。559・560は染付。時期は近世と思われる。561・562はセト・ミノ系磁器か。562は型紙による施文か。時期は近代の可能性がある。

563は鍋か。セト・ミノ系の陶器と思われる。

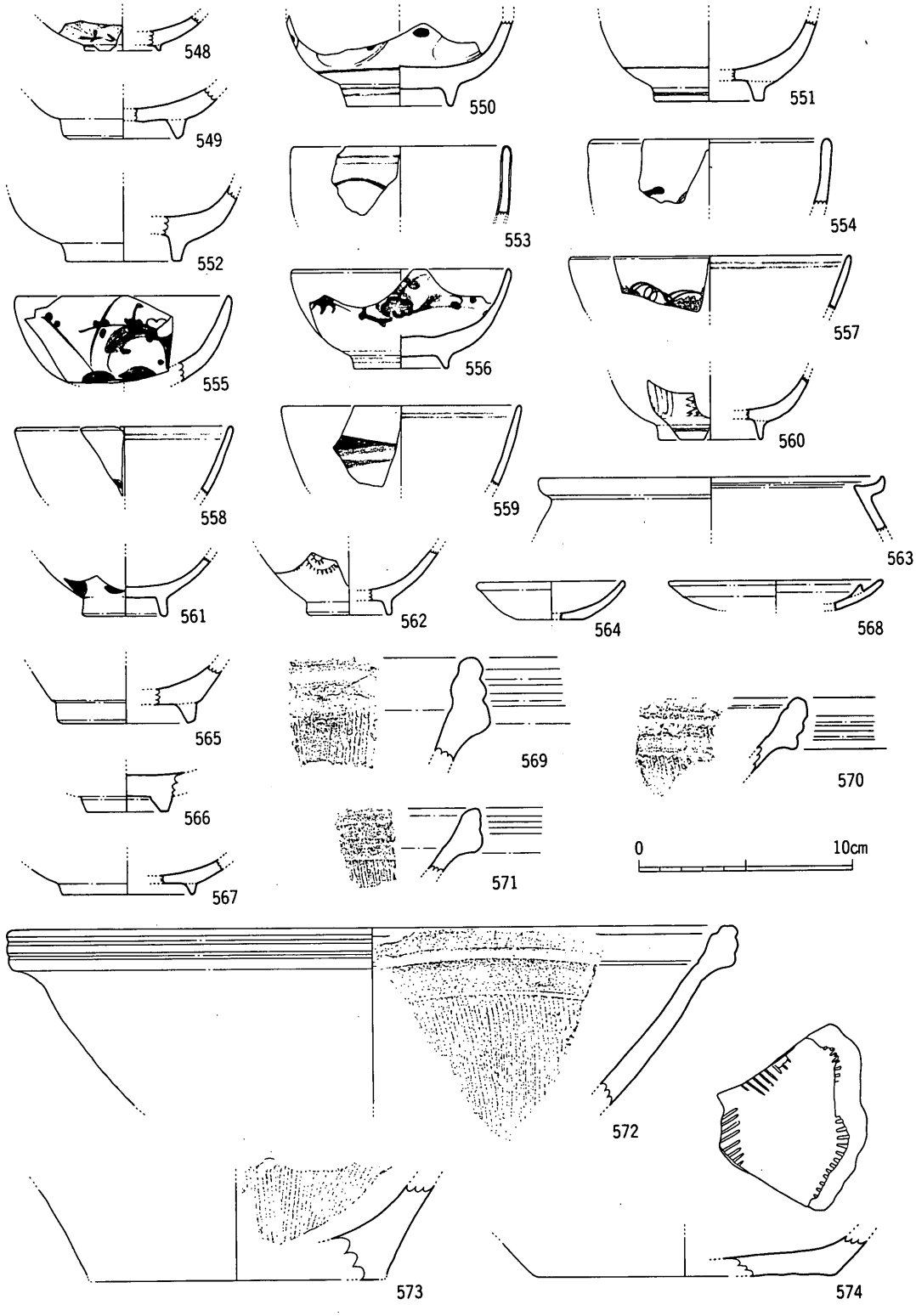
564は小鉢か。セト・ミノ系の陶器と思われる。

565は染付磁器の瓶である。内面無釉で焼成不良である。

566・567は皿である。566は染付磁器か。高台脇から高台・畳付・高台裏・高台内無釉。見込は蛇ノ目釉剝ぎがされている。17世紀後半～18世紀前半。567も磁器である。外面に黒色釉が施される。

568は灯明皿である。内面に突帯をもつタイプである。備前系であろうか。時期は，18世紀中葉以降である。

569～574は擂鉢である。569・571は重ね積みをしているため，口縁部外面と体部外面の色が異なる。570・572は，口縁部・体部とも塗り土が施されているようであり，重ね焼きをしていないためか，その色に差異が認められない。569は細くてシャープなおろし目をもち，上端をナデで揃えていない。570～572はおろし目上端に段をつけて揃えている。特に570・572はその境をはっきりと沈線で区画している。569は17世紀後半から18世紀前半。570～572は18世紀後半以降。573は非常に厚い底部をもつ。高台内を削り出した底部となる可能性がある。574は底部外面に，非常に多くの砂が付着する。堺産擂鉢[註7]の可能性がある。



第75図　III区包含層出土遺物実測図（陶磁器）

(3) 小　結

長砂古遺跡III区は，低丘陵西端に位置している。この調査もＩ区・II区と同様にかなりの削平を受けており，遺構は竪穴住居一棟と古墳が一基調査区西側で検出されただけで東側ではほとんど検出されなかった。しかし，検出された遺構および包含層出土遺物よりこの低丘陵上には，弥生時代後期に竪穴住居（居住域）があり，古墳時代に母神山古墳群の一支群としての墓域が形成されていたことが窺われる。また，長砂古４号墳は母神山古墳群のなかにおいて出土遺物・古墳形成過程において注目されるべきものがあり，広い視野に立った考察が可能な古墳であったと評価されるものと思われる。

ま と め

母神山北西麓の標高25m前後の段丘面は小谷によって開析されて，平行に北西に延びる３本の低丘陵状を呈している。南端の丘陵頂部に下母神古墳群が形成されている。これに北接する２本の丘陵部に長砂古遺跡が立地する。

今回の調査では，北側丘陵北東側斜面（Ｉ区），南側丘陵北東側斜面（II区），同南西斜面（III区）の，三か所に調査区を設定した。しかし，本遺跡周辺はほぼ耕地化されており，水田造成時に階段状に整地された結果，丘陵頂部付近の遺跡残存状況は良好ではない。

長砂古遺跡は，三豊平野のほぼ中央部に位置する低丘陵地上にあるが，この丘陵地も微地形を復元することによっていくつかの尾根部と谷部が存在することが判る（第１図）。それによると調査区最北端にある長砂古遺跡Ｉ区は，ちょうど尾根東斜面にあたり，そのために遺構の検出状況も調査区東部に集中していることが判る。また，調査区最南端にある長砂古遺跡III区は，下母神古墳群がある尾根の西側に位置している。そのため古墳群の存在する可能性があったが調査の結果かなりの削平を受けており遺構はほとんど検出されなかった。また，調査区中央部にある長砂古遺跡II区は，Ｉ区とIII区の尾根に挟まれた谷筋にあたり，III区の存在する尾根東傾斜面にわずかに遺構があるだけでほとんど遺構は検出されなかった。このように，長砂古遺跡におけるそれぞれの遺構は，２つの尾根にまたがり形成されており，時期も違うことから別の遺跡として考えたほうが良いかもしれない。また，この低丘陵上尾根最頂部がかなりの削平を受けていることが今回の調査で判明した。しかし，それぞれの調査区において縄文時代から近世までの遺構の存在を窺わせる遺物が多量に出土していることは見逃せない事実である。

III区で検出された竪穴住居は，弥生時代後期後半にあたりこの低丘陵地上で最近確認されている竪穴住居に比べるとやや古い時期に否定され，今後三豊平野における弥生時代研究の貴重な一資料となるであろう。

(1) 長砂古遺跡・石鏃・石材（サヌカイト）のグリッドごとの分布

長砂古遺跡からは，44点の石鏃・多量のサヌカイト片が出土している。それらの分布を遺跡の性格を考える資料としてまとめてみた。

石鏃については点数を，サヌカイト片については質量を，グリッドごとに集計した（第２表，第３表)。

表にあげた石鏃以外の遺物として，石鏃がＤ－12から１点，Ｄ－13から１点，Ｅ－12から２点，Ｅ－13から３点，Ｆ－14から１点出土している。また，石包丁が，Ｅ－12から１点，Ｄ－12から１点，Ｓ－２から２点出土している。

(2) 石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡から出土した石鏃の形態

石鏃は，長砂古遺跡から44点，石田遺跡から14点，柞田八丁遺跡から13点出土しており，この報告書に載せられた石鏃総数は，71点にのぼる。その中の欠損の少ないもの52点からデーターを取り，石鏃の形態的な特徴と傾向を調べる事にした。

計測した値は，長さ・幅・厚さ・先端の角度・くり込みの幅・深さ・角度の７項目である。

なお，欠損の大きいものについては，あらかじめデーターから除いてあるが，欠損の小さいものは，反転復原や側辺の延長により数値的に完形なものにして，この作業を進めた事を断っておきたい。

計測した値を基に，長さ・幅・くり込みの深さ・くり込みの幅・長さと幅の割合い・くり込みの深さとくり込みの幅の割合，くり込み率と重量，先端の角度・くり込み角，以上５つの関係をグラフ化し，石鏃の傾向を見る事にした。

ａ．長さと幅の関係（第４表）

長さは，８㎜～55.5㎜の間に分布し，幅は，10.5㎜～31.8㎜の間に分布する。長さと幅の比，２：１～１：１の間に多く分布する。さらに，長さ20㎜以下のものには，長さの割に幅の広い個体が多く，逆に，20㎜以上の個体には，スマートなものが多い傾向がある。

ｂ．くり込みの深さと幅の関係（第５表）

くり込みの深さと幅の比が，１：２より小さく，それより浅いくり込みが多い事がわかる。中でも，くり込みの深さと幅の比が１：４～１：２のものは，翼端が丸みを帯びた形のものが多く，広いくり込み幅の割に，深いくり込みを示している。

ｃ．長さ・幅とくり込みの深さ・幅の関係（第６表）

長さを幅で割ったものは，0.9～2.3の間に分布する。くり込みの深さをくり込みの幅で割ったものは，１～0.67に分布する。この長幅比と，くり込みの深さ・幅の比は，小さなまとまりは少ないものの，細長く，くり込みの浅いもの，長幅比１～1.5位でくり込みが0.1～0.4位のもの，くり込み率が0.6～0.7で長幅比が1.2～1.7位のものの３つに大きく分けられる。

ｄ．石鏃の厚さと幅の関係（第７表）

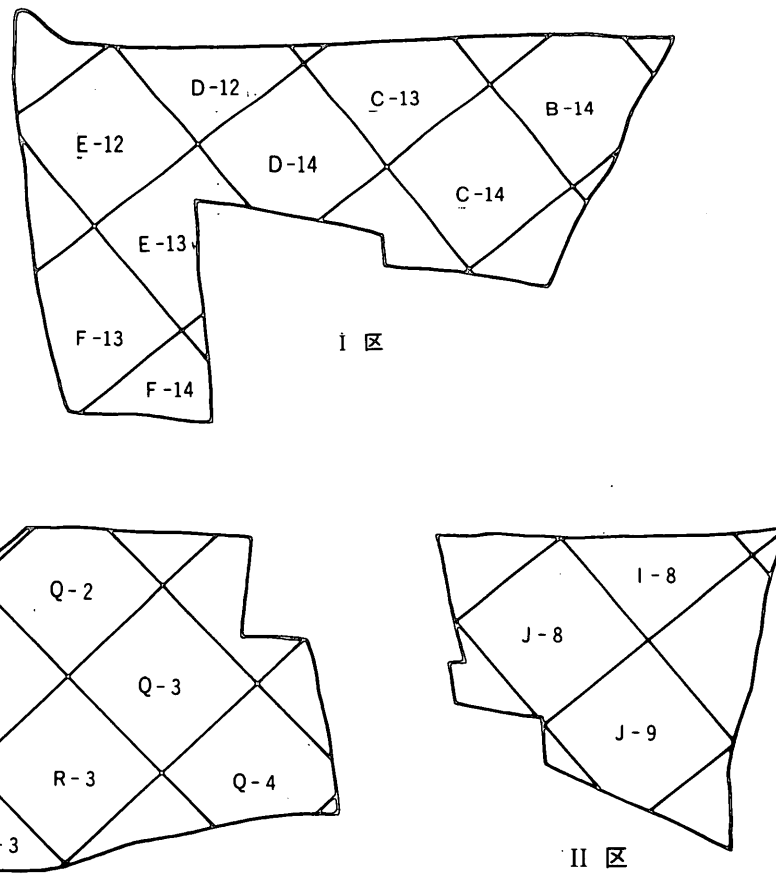
厚さは，1.8～6.6㎜までの間に，幅は，10.0～28.3㎜の間に分布するが，その多くは，厚さ：幅＝１：５の近辺に分布する。

ｅ．石鏃のくり込み角と先端角の関係（第８表）

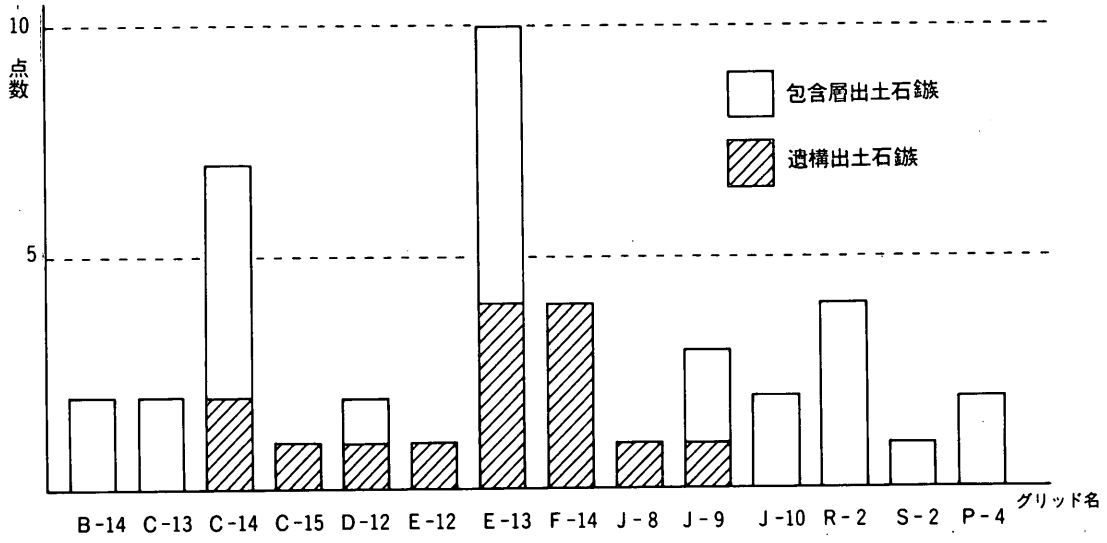
先端角は30°～90°の間に分布し，くり込み角は70°～160°の間に分布する。(くり込み角は180°は，平基を表す。)凹基は，くり込み角と先端角の比が，３：１～３：２の間に分布し，くり込み角が110°より小さいものは，先端角との比が３：２になる傾向がある。また，先端角は60°付近に多く分布し，くり込み角は110°～160°付近に多く分布している。

(註)

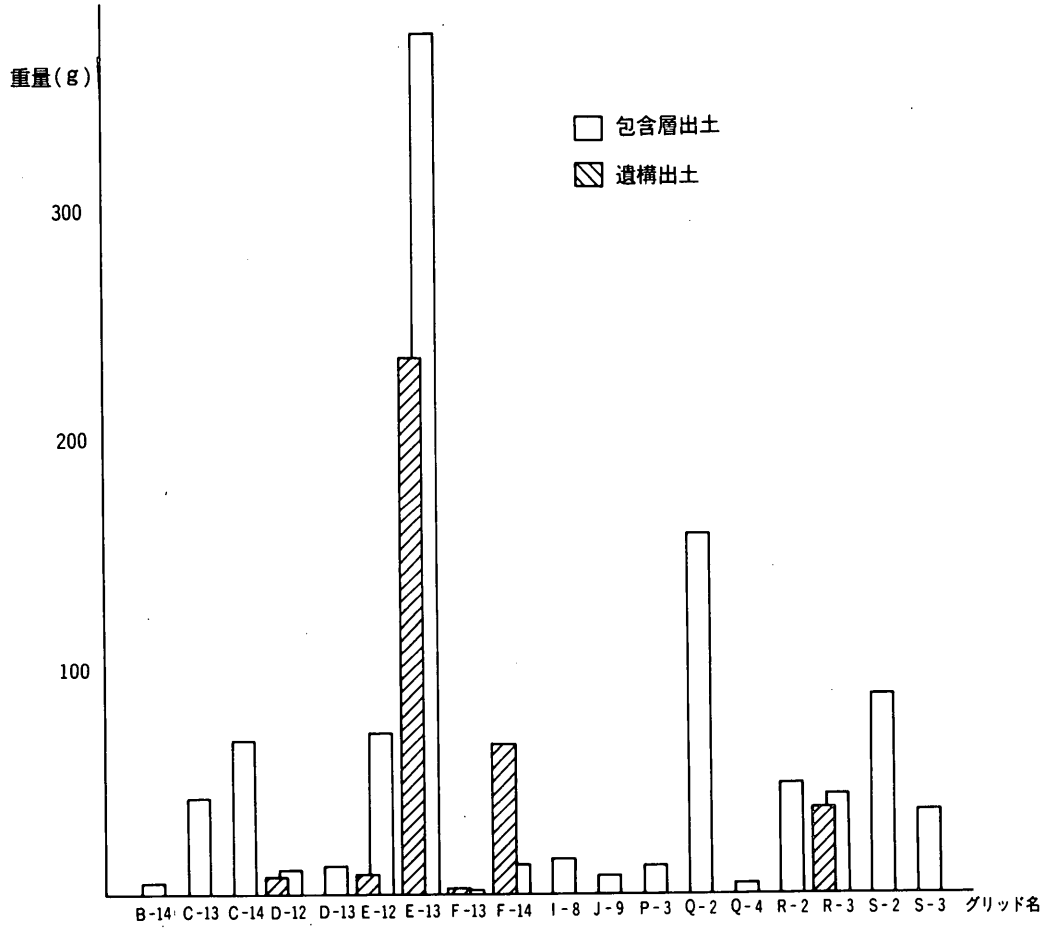
1．香川県教育委員会　埋蔵文化財分布調査報告書　1972
2．佐賀県立九州陶磁器文化館「南川原窯，辻窯，広瀬向窯」
　　－肥前地区古窯跡調査報告書　第３集－1986．３　P17
3．「木村コレクション古備前図録」　P106，107
4．註２．に同じ　P29，30
5．註２．に同じ　P17，29
6．註３．に同じ
7．高槻城跡遺跡調査会「高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書」　1987　P13



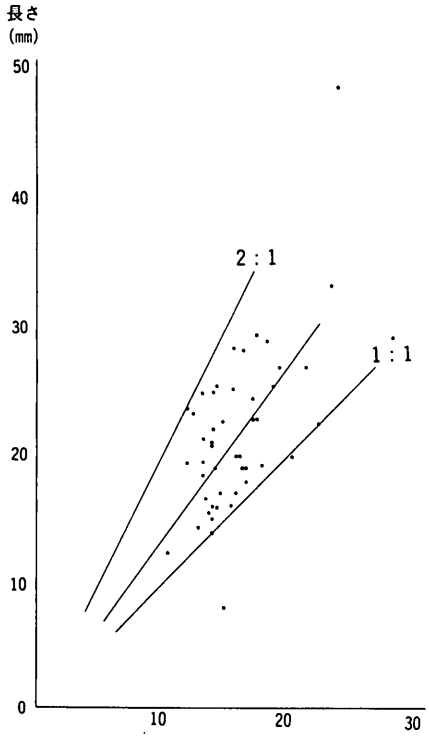
第76図　グリッド配置図



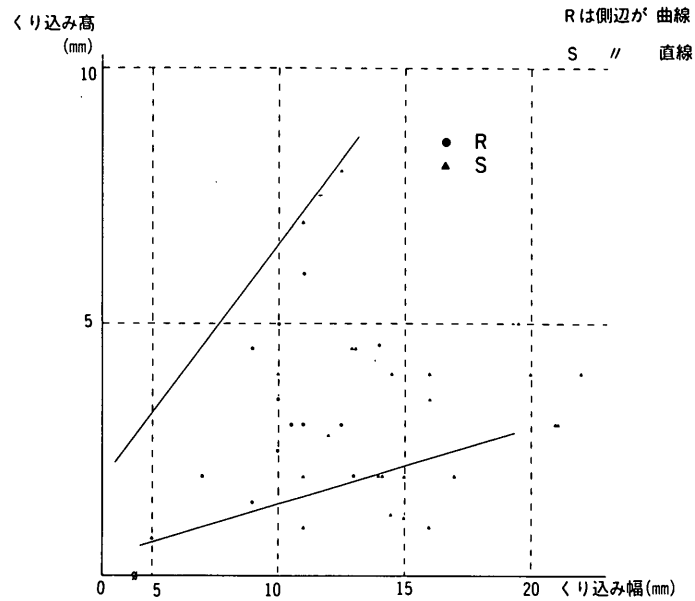
第2表　グリッドごとの石鏃出土点数



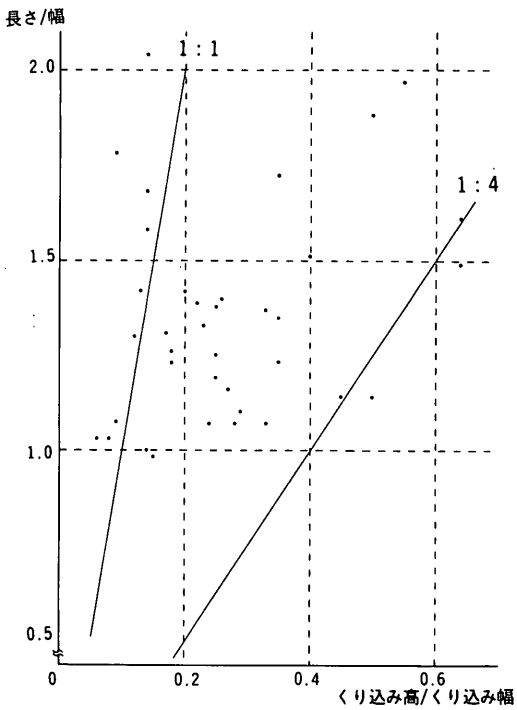
第3表　グリッドごとのサヌカイト片出土重量



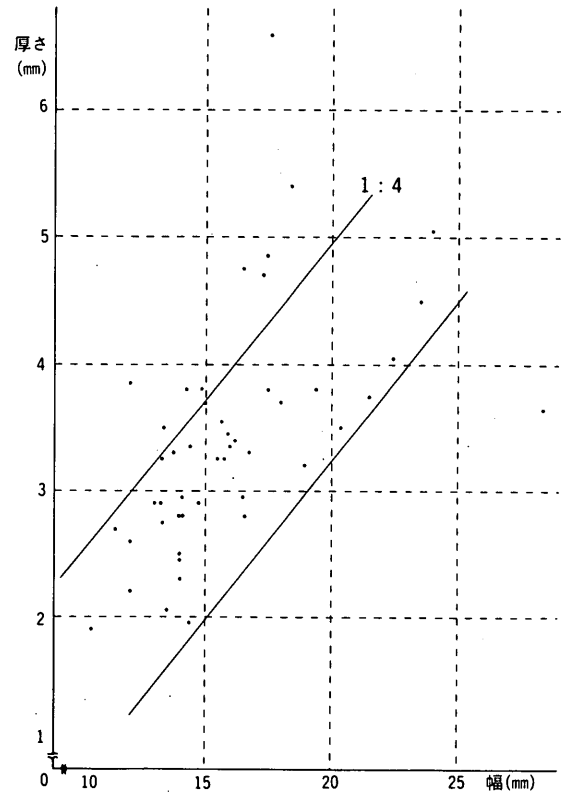
第4表　長さと幅の関係



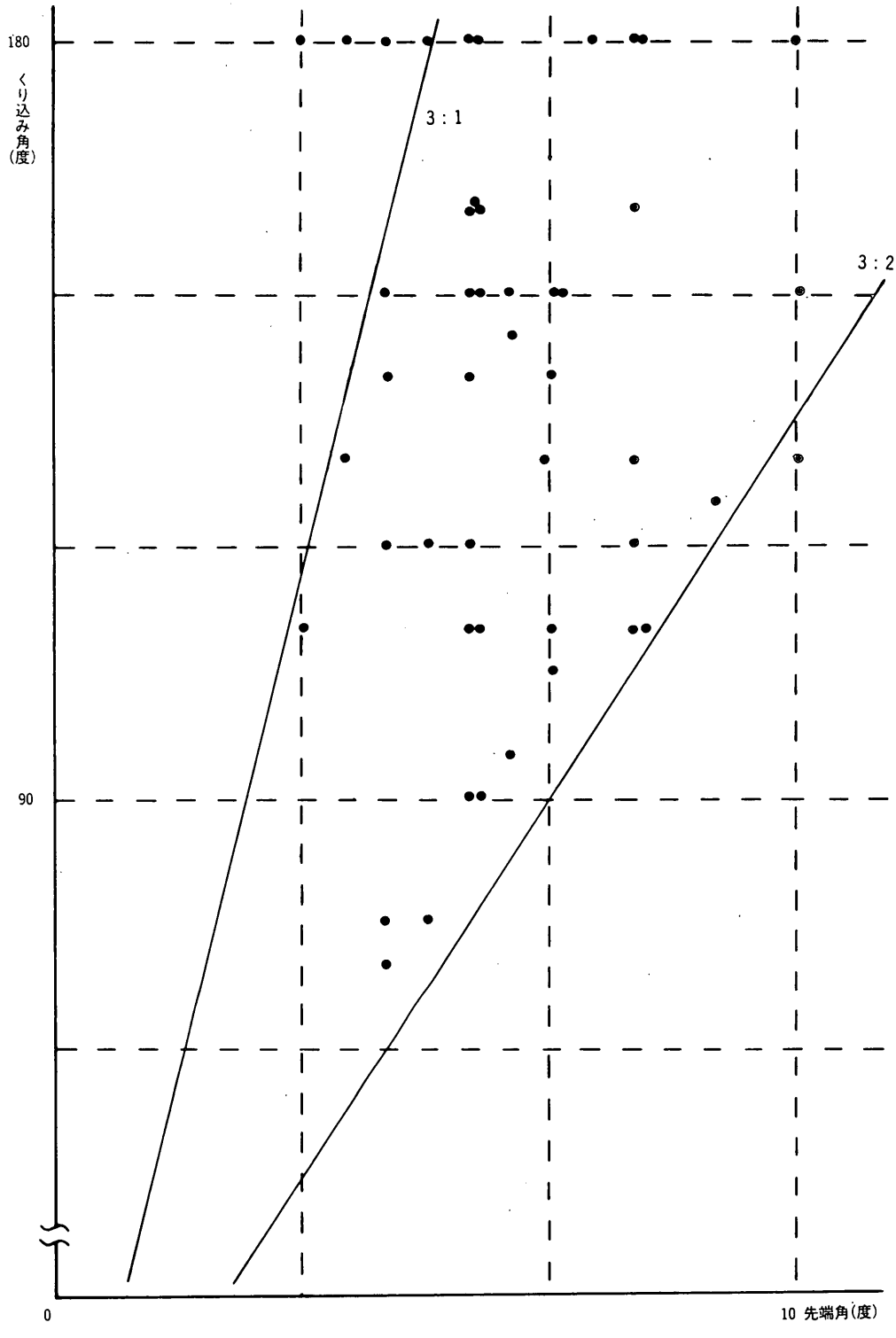
第5表　くり込みの深さと幅の関係



第6表　長さ・幅とくり込みの深さ・幅の関係



第7表　石鏃の厚さと幅の関係



第8表　石鏃のくり込み角と先端角の関係

第9表　遺物観察表（古墳出土装飾具・その他）（第57～59図，図版73～75）

遺物番号	種　類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
1	紡錘車	42.0	13.0	6.2	31.84	緑色片岩	－	－

遺物番号	種　類	外径(cm)	内径(cm)	太さ(cm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
2	耳　環	2.5　2.9	1.3　1.5	0.59	9.93	青　銅	－	銀箔張り
3	耳　環	2.5　2.9	1.4　1.7	0.59	11.68	青　銅	－	銀箔張り
4	耳　環	2.1	1.5	0.3	2.23	青　銅	－	銀箔張り
5	耳　環	1.6	1.0	0.2	1.17	青　銅	－	銀箔張り

遺物番号	種　類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
6	勾　玉	23.0	9.5	3.3	8.16	碧　玉	淡白緑	－
7	勾　玉	31.0	9.9	3.1	9.33	碧　玉	淡白緑	－
8	切子玉	9.2	12.1	3.6	1.30	水　晶	白　濁	－
9	管　玉	7.5	20.6	2.7	2.32	碧　玉	オリーブ	－
10	管　玉	6.1	24.2	3.2	1.56	碧　玉	オリーブ	－
11	管　玉	5.8	21.1	2.2	1.36	碧　玉	淡灰緑	－
12	管　玉	6.1	21.1	2.6	1.08	碧　玉	淡灰緑	－
13	管　玉	5.8	19.6	1.8	1.24	碧　玉	淡灰緑	－
14	管　玉	5.6	18.8	2.2	1.26	碧　玉	淡灰緑	－
15	管　玉	5.9	19.1	1.9	1.12	碧　玉	淡灰緑	－
16	管　玉	5.4	18.5	2.3	1.00	碧　玉	淡灰緑	－
17	管　玉	5.6	19.0	2.1	1.13	碧　玉	淡灰緑	－
18	管　玉	7.4	17.1	2.0	1.78	碧　玉	オリーブ	－
19	管　玉	5.2	16.8	2.1	0.84	碧　玉	淡灰緑	－
20	管　玉	5.8	17.8	2.2	1.11	碧　玉	淡灰緑	－
21	臼　玉	10.1	9.7	1.7	1.57	ガラス	紺	不透明
22	臼　玉	9.6	7.9	3.0	1.09	ガラス	紺	不透明
23	臼　玉	9.6	8.0	1.9	1.08	ガラス	紺	不透明
24	臼　玉	7.7	5.8	1.4	0.56	ガラス	藍　色	不透明
25	臼　玉	8.4	5.9	1.5	0.36	ガラス	藍　色	不透明
26	臼　玉	7.3	4.8	1.2	0.48	ガラス	藍　色	不透明
27	臼　玉	8.2	4.4	2.9	0.32	ガラス	藍　色	不透明
28	臼　玉	7.8	7.2	1.4	0.62	ガラス	藍　色	不透明
29	臼　玉	7.4	4.7	1.5	0.38	ガラス	藍　色	不透明
30	臼　玉	5.8	4.0	2.0	0.27	ガラス	藍　色	不透明
31	臼　玉	6.4	3.5	1.6	0.20	ガラス	藍　色	半透明
32	臼　玉	4.3	5.4	1.2	0.20	ガラス	藍　色	半透明
33	臼　玉	5.9	3.5	1.3	0.17	ガラス	藍　色	半透明
34	臼　玉	6.0	3.6	1.6	0.20	ガラス	藍　色	不透明
35	臼　玉	6.0	4.4	1.2	0.23	ガラス	藍　色	不透明
36	臼　玉	6.3	4.8	1.2	0.28	ガラス	藍　色	不透明
37	臼　玉	6.1	5.1	1.5	0.27	ガラス	藍　色	不透明
38	臼　玉	6.2	4.9	1.4	0.27	ガラス	藍　色	不透明
39	臼　玉	6.0	3.8	1.4	0.20	ガラス	藍　色	不透明
40	臼　玉	6.0	4.0	1.2	0.20	ガラス	藍　色	不透明
41	臼　玉	6.2	3.7	1.2	0.18	ガラス	藍　色	不透明
42	臼　玉	5.8	4.0	1.8	0.21	ガラス	深　緑	半透明
43	臼　玉	5.2	3.0	1.5	0.12	ガラス	深青緑	半透明
44	臼　玉	3.6	4.0	1.2	0.07	ガラス	淡青緑	半透明
45	小　玉	3.6	2.7	1.2	0.06	ガラス	淡青緑	半透明
46	臼　玉	5.3	5.6	1.8	0.30	ガラス	青	－
47	小　玉	5.1	3.5	1.0	0.12	ガラス	青	－
48	小　玉	5.2	3.0	1.8	0.11	ガラス	青	－

遺物番号	種　類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
49	臼　玉	6.5	5.4	1.6	0.22	ガラス	青	－
50	臼　玉	4.9	2.6	1.7	0.09	ガラス	黄	－
51	臼　玉	4.7	2.3	1.9	0.07	ガラス	黄	－
52	臼　玉	5.1	3.0	1.0	0.12	ガラス	黄	－
53	臼　玉	4.2	2.3	1.2	0.06	ガラス	黄	－
54	小　玉	3.8	2.5	1.3	0.06	ガラス	藍　色	半透明
55	小　玉	4.0	2.1	1.3	0.05	ガラス	黄	不透明
56	小　玉	3.0	2.0	1.2	0.03	ガラス	淡青緑	半透明
57	小　玉	3.4	2.1	1.3	0.04	ガラス	淡青緑	半透明
58	小　玉	3.3	2.5	1.3	0.04	ガラス	淡青緑	不透明
59	小　玉	3.6	2.1	1.3	0.04	ガラス	淡青緑	半透明
60	小　玉	3.3	2.2	1.2	0.04	ガラス	淡青緑	半透明
61	臼　玉	7.3	6.9	2.1	0.48	ガラス	紺	不透明
62	臼　玉	7.9	5.8	1.8	0.56	ガラス	紺	不透明
63	臼　玉	8.2	3.4	1.7	0.26	ガラス	紺	不透明
64	臼　玉	6.5	4.1	1.4	0.25	ガラス	紺	不透明
65	臼　玉	6.4	3.7	1.7	0.25	ガラス	紺	不透明
66	臼　玉	6.1	3.9	1.1	0.22	ガラス	紺	不透明
67	臼　玉	5.8	3.6	1.1	0.21	ガラス	紺	不透明
68	臼　玉	6.0	3.7	1.3	0.17	ガラス	紺	不透明
69	臼　玉	5.3	4.3	0.9	0.18	ガラス	紺	不透明
70	臼　玉	6.1	3.5	1.0	0.19	ガラス	紺	不透明
71	臼　玉	5.8	4.1	1.2	0.20	ガラス	紺	不透明
72	臼　玉	5.7	3.7	1.8	0.19	ガラス	紺	不透明
73	臼　玉	5.5	4.2	1.1	0.16	ガラス	紺	不透明
74	臼　玉	5.8	5.3	1.1	0.27	ガラス	紺	不透明
75	臼　玉	5.7	3.5	1.2	0.16	ガラス	紺	不透明
76	臼　玉	6.2	4.2	1.3	0.23	ガラス	紺	不透明
77	臼　玉	5.3	4.9	1.3	0.16	ガラス	紺	不透明
78	臼　玉	6.1	5.1	1.2	0.25	ガラス	紺	不透明
79	臼　玉	6.0	3.8	1.1	0.20	ガラス	紺	不透明
80	臼　玉	5.7	4.1	1.5	0.21	ガラス	紺	不透明
81	臼　玉	5.8	3.6	1.3	0.19	ガラス	紺	不透明
82	臼　玉	5.8	5.1	1.0	0.26	ガラス	紺	不透明
83	臼　玉	6.1	3.4	1.2	0.20	ガラス	紺	不透明
84	臼　玉	5.9	4.2	1.5	0.23	ガラス	紺	不透明
85	臼　玉	6.0	3.8	1.1	0.21	ガラス	紺	不透明
86	臼　玉	6.3	4.3	1.4	0.24	ガラス	紺	不透明
87	臼　玉	6.1	3.7	1.1	0.19	ガラス	紺	不透明
88	臼　玉	5.5	3.7	1.1	0.21	ガラス	淡青緑	－
89	臼　玉	5.3	3.6	1.1	0.14	ガラス	紺	不透明
90	臼　玉	6.2	4.3	1.6	0.18	ガラス	紺	不透明
91	臼　玉	6.0	4.7	1.3	0.25	ガラス	紺	不透明
92	臼　玉	6.2	3.3	1.2	0.20	ガラス	紺	不透明
93	臼　玉	6.0	3.7	1.2	0.20	ガラス	紺	不透明
94	臼　玉	6.1	3.6	1.0	0.20	ガラス	紺	不透明
95	臼　玉	6.0	2.9	1.3	0.22	ガラス	紺	不透明
96	臼　玉	6.0	4.3	1.4	0.24	ガラス	紺	不透明
97	臼　玉	6.0	4.2	1.5	0.23	ガラス	紺	不透明
98	臼　玉	6.3	4.0	1.3	0.22	ガラス	紺	不透明
99	臼　玉	6.3	4.3	1.3	0.20	ガラス	紺	不透明
100	臼　玉	6.6	4.1	1.9	0.25	ガラス	紺	－
101	臼　玉	6.5	4.2	1.5	0.24	ガラス	紺	－
102	臼　玉	6.0	3.6	1.6	0.21	ガラス	紺	－

遺物番号	種　類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
103	臼　玉	5.8	3.8	1.2	0.19	ガラス	紺	－
104	臼　玉	5.2	2.4	1.1	0.10	ガラス	淡　紺	－
105	臼　玉	5.1	2.6	1.0	0.09	ガラス	紺	－
106	臼　玉	4.7	3.1	1.4	0.08	ガラス	紺	不透明
107	臼　玉	4.3	3.0	1.3	0.09	ガラス	紺	－
108	臼　玉	5.0	2.7	1.0	0.09	ガラス	紺	－
109	臼　玉	4.4	3.5	1.1	0.09	ガラス	紺	－
110	小　玉	4.2	2.7	2.0	0.06	ガラス	緑　青	－
111	小　玉	4.4	2.1	1.4	0.06	ガラス	淡　紺	－
112	小　玉	4.8	3.1	1.4	0.09	ガラス	紺	不透明
113	小　玉	4.6	2.6	1.1	0.08	ガラス	紺	－
114	小　玉	4.0	2.9	1.1	0.08	ガラス	紺	－
115	小　玉	4.6	2.8	1.1	0.08	ガラス	紺	－
116	小　玉	4.5	2.8	1.1	0.08	ガラス	紺	－
117	臼　玉	4.2	4.0	0.9	0.10	ガラス	紺	－
118	小　玉	4.3	2.4	1.2	0.06	ガラス	紺	－
119	小　玉	4.2	2.3	0.9	0.06	ガラス	紺	－
120	小　玉	4.3	2.3	1.2	0.06	ガラス	紺	－
121	小　玉	4.3	2.4	1.2	0.07	ガラス	紺	－
122	小　玉	4.4	2.3	1.4	0.06	ガラス	紺	－
123	小　玉	4.2	2.1	1.2	0.06	ガラス	紺	－
124	小　玉	3.8	2.3	0.8	0.04	ガラス	紺	－
125	小　玉	3.5	2.8	1.0	0.04	ガラス	紺	－
126	小　玉	4.4	2.4	1.2	0.06	ガラス	紺	－
127	小　玉	4.2	3.0	1.0	0.06	ガラス	紺	－
128	小　玉	3.5	1.9	1.2	0.02	ガラス	紺	－
129	小　玉	4.4	2.5	1.3	0.08	ガラス	紺	不透明
130	小　玉	4.4	2.5	1.1	0.08	ガラス	紺	不透明
131	小　玉	3.8	2.5	0.9	0.05	ガラス	紺	－
132	小　玉	4.6	3.2	1.2	0.08	ガラス	紺	不透明
133	小　玉	4.2	2.5	1.6	0.07	ガラス	紺	－
134	小　玉	3.7	2.1	1.1	0.04	ガラス	紺	－
135	小　玉	3.7	2.6	0.9	0.07	ガラス	紺	不透明
136	小　玉	4.2	3.0	1.1	0.08	ガラス	紺	不透明
137	小　玉	4.2	2.6	1.1	0.05	ガラス	紺	－
138	小　玉	3.4	1.8	1.0	0.06	ガラス	紺	－
139	小　玉	3.5	1.9	1.3	0.03	ガラス	紺	－
140	小　玉	3.5	2.3	1.1	0.03	ガラス	紺	－
141	小　玉	3.4	1.8	0.9	0.03	ガラス	紺	－
142	小　玉	2.3	2.6	1.0	0.02	ガラス	紺	－
143	小　玉	4.4	2.3	1.3	0.05	ガラス	紺	－
144	小　玉	4.2	2.0	1.4	0.04	ガラス	紺	－
145	小　玉	3.7	1.9	1.3	0.03	ガラス	紺	－
146	小　玉	3.7	2.5	0.9	0.03	ガラス	紺	－
147	小　玉	4.2	2.1	1.3	0.04	ガラス	紺	－
148	小　玉	3.8	2.0	1.4	0.03	ガラス	紺	－
149	小　玉	4.0	2.2	1.2	0.03	ガラス	紺	－
150	小　玉	3.5	1.8	1.5	0.02	ガラス	紺	－
151	小　玉	3.7	2.6	1.2	0.04	ガラス	紺	不透明
152	小　玉	3.9	3.2	1.1	0.05	ガラス	紺	不透明
153	小　玉	3.9	2.4	1.1	0.02	ガラス	紺	不透明
154	小　玉	3.6	2.6	1.0	0.03	ガラス	紺	不透明
155	小　玉	3.5	1.8	1.0	0.03	ガラス	紺	不透明
156	小　玉	6.0	3.6	2.1	0.17	ガラス	淡青緑	－

遺物番号	種　類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
157	小　玉	3.4	2.4	0.9	0.05	ガラス	淡青緑	—
158	小　玉	4.2	3.6	1.1	0.08	ガラス	淡青緑	—
159	小　玉	4.1	2.8	1.3	0.06	ガラス	淡青緑	—
160	小　玉	4.0	2.6	1.4	0.06	ガラス	淡青緑	—
161	小　玉	3.5	1.7	1.5	0.01	ガラス	淡青緑	—
162	小　玉	4.2	2.4	1.3	0.06	ガラス	淡青緑	—
163	小　玉	4.3	2.5	1.2	0.08	ガラス	淡青緑	—
164	小　玉	3.8	1.8	0.9	0.05	ガラス	淡青緑	—
165	小　玉	4.3	3.0	1.4	0.06	ガラス	淡青緑	—
166	小　玉	3.0	3.1	0.9	0.04	ガラス	淡青緑	—
167	小　玉	3.6	2.3	0.8	0.04	ガラス	淡青緑	—
168	小　玉	4.0	2.6	0.9	0.03	ガラス	淡青緑	—
169	小　玉	3.2	2.8	1.0	0.03	ガラス	淡青緑	—
170	小　玉	3.4	2.9	1.7	0.04	ガラス	淡青緑	—
171	小　玉	3.5	1.9	1.2	0.04	ガラス	淡青緑	—
172	小　玉	3.0	2.0	0.8	0.03	ガラス	淡青緑	—
173	小　玉	3.1	2.4	1.2	0.06	ガラス	淡青緑	—
174	小　玉	3.4	2.1	1.1	0.05	ガラス	淡青緑	—
175	小　玉	3.3	2.1	0.8	0.03	ガラス	淡青緑	—
176	小　玉	2.9	1.9	0.8	0.02	ガラス	淡青緑	—
177	小　玉	3.1	1.4	1.2	0.03	ガラス	淡青緑	—
178	小　玉	3.8	2.3	1.0	0.03	ガラス	淡青緑	—
179	小　玉	3.2	2.1	1.1	0.02	ガラス	淡青緑	—
180	小　玉	2.8	1.6	1.1	0.02	ガラス	淡青緑	—
181	小　玉	3.8	1.9	1.1	0.03	ガラス	淡青緑	—
182	小　玉	3.0	2.2	1.2	0.03	ガラス	淡青緑	—
183	小　玉	2.9	1.4	0.9	0.04	ガラス	淡青緑	—
184	小　玉	3.2	1.6	1.1	0.02	ガラス	淡青緑	—
185	小　玉	3.1	1.1	1.2	0.03	ガラス	淡青緑	—
186	小　玉	3.1	1.8	1.1	0.03	ガラス	淡青緑	—
187	小　玉	3.6	1.8	1.1	0.03	ガラス	淡青緑	—
188	小　玉	3.2	2.5	1.0	0.03	ガラス	淡青緑	—
189	小　玉	2.9	1.9	1.2	0.02	ガラス	淡青緑	—
190	小　玉	3.6	2.2	0.8	0.02	ガラス	淡青緑	—
191	小　玉	3.4	2.1	0.9	0.04	ガラス	淡青緑	—
192	小　玉	3.8	2.2	1.2	0.03	ガラス	白　緑	不透明
193	小　玉	3.1	2.4	0.7	0.03	ガラス	淡青緑	不透明
194	小　玉	3.0	2.4	0.8	0.03	ガラス	淡青緑	不透明
195	小　玉	2.9	2.6	0.7	0.02	ガラス	淡青緑	—
196	小　玉	2.7	2.3	0.8	0.03	ガラス	淡青緑	—
197	小　玉	2.8	2.8	1.0	0.03	ガラス	淡青緑	—
198	小　玉	3.1	2.9	1.1	0.04	ガラス	淡青緑	—
199	小　玉	3.0	2.3	0.8	0.02	ガラス	淡青緑	—
200	小　玉	3.8	1.8	1.6	0.02	ガラス	淡青緑	—
201	小　玉	2.9	1.9	1.2	0.03	ガラス	淡青緑	—
202	小　玉	3.4	2.0	0.8	0.03	ガラス	淡青緑	—
203	小　玉	3.9	2.3	1.1	0.04	ガラス	淡青緑	—
204	小　玉	3.2	2.0	0.9	0.02	ガラス	淡青緑	—
205	小　玉	3.8	2.4	0.8	0.03	ガラス	淡青緑	—
206	小　玉	3.6	2.2	0.7	0.03	ガラス	淡青緑	—
207	小　玉	2.9	2.1	0.7	0.02	ガラス	淡青緑	—
208	小　玉	3.1	2.0	0.9	0.03	ガラス	淡青緑	—
209	小　玉	3.2	1.8	0.9	0.02	ガラス	淡青緑	—
210	丸　玉	8.5	6.5	1.2	0.43	土	黒褐色	—

遺物番号	種　類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	質量(g)	材　質	色　調	備　考
211	丸　玉	8.0	6.0	1.5	0.37	土	黒褐色	−
212	丸　玉	8.0	5.5	1.5	0.40	土	黒褐色	−
213	丸　玉	8.0	6.2	1.8	0.53	土	黒褐色	−
214	丸　玉	8.0	6.0	1.9	0.47	土	黒褐色	−
215	丸　玉	8.0	5.0	1.2	0.37	土	黒褐色	−
216	丸　玉	7.9	6.0	1.2	0.37	土	黒褐色	−
217	丸　玉	8.0	6.0	2.0	0.38	土	黒褐色	−
218	丸　玉	7.9	6.0	1.2	0.42	土	黒褐色	−
219	丸　玉	8.0	5.2	2.0	0.36	土	黒褐色	−
220	丸　玉	8.0	5.0	1.1	0.39	土	黒褐色	−
221	丸　玉	8.0	6.0	1.5	0.35	土	黒褐色	−
222	丸　玉	8.0	6.0	1.5	0.34	土	黒褐色	−
223	丸　玉	8.0	5.0	1.5	0.37	土	黒褐色	−
224	丸　玉	8.0	5.2	1.5	0.30	土	黒褐色	−
225	丸　玉	8.0	5.5	1.5	0.35	土	黒褐色	−
226	丸　玉	8.0	5.9	2.0	0.39	土	黒褐色	−
227	丸　玉	7.8	5.9	2.0	0.41	土	黒褐色	−
228	丸　玉	8.0	6.0	2.0	0.31	土	黒褐色	−
229	丸　玉	8.0	6.0	2.0	0.44	土	黒褐色	−
230	丸　玉	8.0	5.5	1.5	0.34	土	黒褐色	−
231	丸　玉	7.0	6.0	2.0	0.33	土	黒褐色	−
232	丸　玉	7.9	6.0	1.9	0.42	土	黒褐色	−
233	丸　玉	8.0	6.1	1.5	0.46	土	黒褐色	−
234	丸　玉	8.0	6.5	1.5	0.40	土	黒褐色	−
235	丸　玉	7.2	5.5	1.5	0.35	土	黒褐色	−
236	丸　玉	8.0	5.8	1.8	0.32	土	黒褐色	−
237	丸　玉	7.9	5.0	1.5	0.36	土	黒褐色	−
238	丸　玉	8.1	6.1	2.0	0.39	土	黒褐色	−
239	丸　玉	8.0	6.7	2.0	0.52	土	黒褐色	−
240	丸　玉	7.9	6.1	1.5	0.44	土	黒褐色	−
241	丸　玉	8.0	6.5	2.0	0.42	土	黒褐色	−
242	丸　玉	8.2	6.0	2.0	0.34	土	黒褐色	−
243	丸　玉	8.2	6.0	1.5	0.40	土	黒褐色	−
244	丸　玉	7.0	6.7	1.5	0.38	土	黒褐色	−
245	丸　玉	8.2	6.2	1.5	0.45	土	黒褐色	−
246	丸　玉	8.2	6.0	1.8	0.37	土	黒褐色	−
247	丸　玉	7.8	6.0	1.9	0.36	土	黒褐色	−
248	丸　玉	8.1	5.9	2.0	0.43	土	黒褐色	−
249	丸　玉	7.9	5.5	2.0	0.43	土	黒褐色	−
250	丸　玉	8.0	6.0	2.0	0.44	土	黒褐色	−
251	丸　玉	8.0	5.5	1.6	0.33	土	黒褐色	−
252	丸　玉	7.8	6.0	2.0	0.34	土	黒褐色	−
253	丸　玉	7.8	6.0	2.0	0.27	土	黒褐色	−
254	丸　玉	8.1	6.5	2.0	0.39	土	黒褐色	−
255	丸　玉	7.9	6.5	1.8	0.38	土	黒褐色	−
256	丸　玉	8.0	6.0	1.5	0.46	土	黒褐色	−
257	丸　玉	8.0	6.0	1.5	0.34	土	黒褐色	−
258	丸　玉	8.0	5.9	1.5	0.38	土	黒褐色	−
259	丸　玉	7.9	6.1	1.5	0.39	土	黒褐色	−
260	丸　玉	7.5	5.0	2.0	0.26	土	黒褐色	−
261	丸　玉	7.5	5.5	1.9	0.38	土	黒褐色	−

第10表　検出遺構一覧表（1）

掘立柱建物　　遺構観察表　Ⅰ区

遺構番号	グリッド名	規模(梁間×桁行) 大　き　さ(cm)	方　位	柱穴(cm) 最大	柱穴(cm) 最小	柱間(cm) 最長	柱間(cm) 最短	備　　考
SB01	C－13	1間×1間 94×124	N32°E	24 21.5	20	124 109	94	
〃 02	E－12	(2)間×3間 (196)×756	N46.5°E	30 24	20	296 237	192	長辺の半分は段差によって切られる。
〃 03	E－12	2間×3間 324×648	N41.5°W	32 27.5	24	164 146	128	攪乱によって切られる。
※1・2 〃 04	E－13 F－13 F－14	1間×3＋1間 298×544＋278	N26°E	42 32.2	20	298 298 202 181.3	 158	1間×3間で，柱間長の異なる柱穴を伴う。
※1 〃 05	F－14	(2)間×(4)間 (204)×(412)	N19°W	54 46.5	40	204 204 138 137.3	 136	全体に削平されており浅い。 建物を構成するピットが全部は，検出されていないので推定値である。

※1　梁間と桁行の柱間長の違う建物で，上段を梁間の柱間長及び平均，下段を桁行の柱間長及び平均とした。

※2　桁行において，柱間が明らかに異なるものがあり，主屋に対しての付属施設か，間取りの違いによるものか不明であるのでここでは区別した。

竪穴住居

遺構番号	グリッド名	大　き　さ 直径(cm)	大　き　さ 検出ピット数	遺　　物	時　期	備　　考
SH01	E-12・13 F-12・13	600	8	弥生土器 サヌカイト片	弥生時代	弥生土器，高坏体部が出土している。 8角形を呈する。

不明遺構

遺構番号	グリッド名	大　き　さ 直径(cm)	大　き　さ 検出ピット数	遺　　物	時　期	備　　考
SX01	E－12	760	10			10角形を呈する。
〃 02	E－12	655	5			8角形を呈する。
〃 03	E－12	860	7			8角形を呈する。

第10表　検出遺構一覧表(2)

遺構番号	グリッド名	大きさ		遺物	時期	備考
		直径(cm)	検出ピット数			
SX04	E-12・13 F-12・13	960	8			10角形を呈する。
〃 05	E-12.13 F-12・13	800	6			10角形を呈する。

溝状遺構

遺構番号	グリッド名	大きさ(cm)			遺物	時期	備考
		長さ	天幅	深さ			
SD01	B-13・14 C-14	3,680	480	99	弥生土器 須恵器，石鏃	弥生時代～	※N50°Wグリッドの中央部で最大幅を計る。須恵器の坏身と坏蓋が出土している。
〃 02	B－14	280	90	82			N10°W SD01につながる。
〃 03	B-13・14	480	150	67	弥生土器	弥生時代	N80°W，N90°W SD01につながる。
〃 04	D－14	320	20	4			N35°W
〃 05	D－13	1,536	140	5	弥生土器 サヌカイト片	弥生時代	N100°E，N110°E 弥生土器の底部が出土している。
〃 06	D－12	1,248	44	3	弥生土器	弥生時代	N55°W SP01に切られる。 弥生土器，底部が出土している。
〃 07	D－12	130	27	5			N30°W SD11に切られる。
〃 08	D-12 E-12・13	2,800	60	20	須恵器 弥生土器 サヌカイト片	弥生時代～	N50°W SD09の片を切る。 須恵器の甕が出土している。 SP03に切られる。
〃 09	D-12 E-12・13	2,168	80	7	弥生土器 須恵器 サヌカイト片	弥生時代～	N50°W SD08に片を切られる。
〃 10	D－12	448	28	10	石鏃		N45°E 他の遺構より上に掘り込まれている。北端で最大幅を計る。
〃 11	E-13 F-13・14	2,880	100	28.4	弥生土器 須恵器，石鏃 サヌカイト片	弥生時代～	N45°W SD08・09と下層でつながる。須恵器甕，石鏃，石錐と思われる石器が出土している。
〃 12	E－13	86	38	8			N45°E 末端でSD13からSD11方向に比高差を持ち，この2つの溝をつなぐ。
〃 13	E-13 F-12・13		130	20	弥生土器 石鏃・楔状石器	弥生時代 中期	SD14によって，SD11につながる。 SH01の周溝，直径1,520cm 弥生前期の甕，弥生中期の高坏が出土している。
〃 14	E－13	20	34	8			N35°W SD13に切られる。 SD13の弧内で検出される。

※　北を基準として，溝の流れの方向を表示したものである。

例　N　N150°E　N30°W　N150°W

第10表　検出遺構一覧表（3）

遺構番号	グリッド名	大きさ(cm)			遺物	時期	備考
		長さ	天幅	深さ			
SD15	F－14	88	32	10			N45°W SD11に切られている。

土　坑

遺構番号	グリッド名	形状(cm)			遺物	時期	備考
		長径	短径	深さ			
SK01	C－14	160	160	130			平面形は円形を呈する。
〃 02	D－12	210	90	47			平面形は紡錘形を呈する。
〃 03	E－12	160	100	30	炭化物 焼土		平面形は楕円形を呈する。埋土から焼土と炭化物が出土。
〃 04	F－14	210	80	25			平面形は隅丸長方形を呈する。北東部をSD11に切られている。SP21・22にも切られる。
〃 05	F－14	160	60	25			平面形は、隅丸長方形を呈する。SB04の敷地内で検出された。

遺構番号	グリッド名	形状(cm)			遺物	時期	備考
		長径	短径	深さ			
SP01	C－13	20	20	17	土師器		SB01北東角のピットである。 土師器の小皿が出土している。
〃 02	D－12	75	75	25	須恵器片 土器片		SD06を切っている。
〃 03	D－12	72	72	29	土器片		SD08を切っている。
〃 04	E－12	26	26	5	弥生土器 サヌカイト片	弥生時代	第7図－42
〃 05	E－12	35	35	10	土器片		
〃 06	E－12	22	22	10	サヌカイト片 土器片		SB03のピットである。
〃 07	E－12	44	44	8	弥生土器		SX03のピットである。 第7図－41
〃 08	E－12	40	40	16	炭化物		

第10表　検出遺構一覧表（4）

遺構番号	グリッド名	形状 (cm)			遺物	時期	備考
		長径	短径	深さ			
SP09	E－12	15	15	13	土器片		SB02のピットである。
〃 10	E－12	30	30	40	サヌカイト片		SB02のピットである。
〃 11	E－12	34	34	35	弥生土器 瓦質土器 須恵器片		第7図－43
〃 12	E－12	18	18	25	土器片		SB02のピットである。
〃 13	E－13	33	33	20	土器片		SH01のピットである。
〃 14	E－13	30	30	28	サヌカイト片		SH01のピットである。
〃 15	E－13	60	60	20	弥生土器	弥生時代 前期	SD12を切っている。この弥生土器は体部に3条の凹線をもつ。 第7図－44
〃 16	E－13	46	46	30			
〃 17	E－13	56	56	9	土器片		SH01の中心部のピットである。
〃 18	E－13	28	28	24	弥生土器 サヌカイト片	弥生時代	SH01のピットである。
〃 19	E－13	34	34	40	土器片		SH01のピットである。
〃 20	E－13	34	34	20	弥生土器	弥生時代	SB04のピットである。
〃 21	E－13	40	40	19	弥生土器	弥生時代	この弥生土器は三条の凹線文を持つ。
〃 22	E－13	46	46	27	土器片		
〃 23	E－13	32	32	42			
〃 24	E－13	7	7	18	サヌカイト片		SX03のピットである。
〃 25	E－13	17	17	21	土器片		SH01のピットである。
〃 26	F－13	28	28	21	サヌカイト片		SX05のピットである。

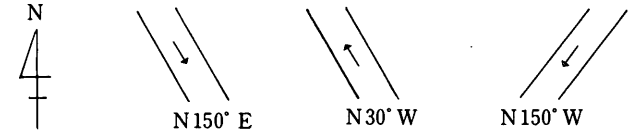
第10表　検出遺構一覧表（5）

溝状遺構　　遺構観察表　II区

遺構番号	グリッド名	大きさ(cm) 長さ	天幅	深さ	遺物	時期	備考
SD16	J－9 J－10	1,520	680	330 66	弥生土器 須恵器 瓦質土器	弥生時代～	※N50°E，N15°E 一番幅の広い小河川である。
〃 17	I－9 J－9	3,600	320	30	縄文土器 炭化物	縄文時代 晩期	N15°W，N25°W
〃 18	J－9	560	240	38	炭化物		ほぼ真北に流路をとる。 SD17より派生している。
〃 19	H－8 I－8	880	60	8	須恵器片 土器片		N5°E，N10°W
〃 20	H－8	96	45	23	弥生土器 須恵器片		N5°W 弥生土器の鉢が出土している。
〃 21	I－8	440	96	5	須恵器片 土器片，磁器片		N15°E
〃 22	I－8	95	32	10	須恵器 染付		N5°E 須恵器の高台付壺の高台が出土している。
〃 23	I－8 J－8 K－8	2,080	110	15	土師器，須恵器 磁器，石鏃		N5°W SD25を切っている。
〃 24	J－8	900	64	10	須恵器片 磁器片，土器片		N125°E，N95°E SD27を切る。ほとんど水平である。
〃 25	J－8	600	80	10	須恵器片 土器片		N70°E SD26を切り，SD23に切られる。
〃 26	J－8	110	56	13			N35°E SD25に切られる。
〃 27	J－8	1,560	70	15	弥生土器	弥生時代	N10°E 弥生土器の底部が出土している。 SD24，SD28に切られる。
〃 28	J－8 K－8	2,120	112	20	須恵器 土師器	奈良時代	N145°E，N165°E，須恵器，土師器の口縁が出土している。 SD27，SD29を切る。
〃 29	J－8	220	30	5			N75°E SD28に切られる。
〃 30	J－7 J－8	920	70	8	須恵器片 土器片		N65°E

※　北を基準にして，溝の流れの方向を表示したものである。

例　N



第10表　検出遺構一覧表（6）

土　坑

遺構番号	グリッド名	形状（cm）			遺物	時期	備考
		長径	短径	深さ			
SK06	J－9	84	68	10	石鏃 炭化木材		N30°W方行にやや長い。 楕円形を呈する。

遺構番号	グリッド名	形状（cm）			遺物	時期	備考
		長径	短径	深さ			
SK07	I－8	50	80	24			SD21と同一遺構か。 平面形は，ひずんだ台形状を呈する。
〃 08	J－8	168	112	24	須恵器 土師質土器等多数	奈良時代	奈良時代の遺物を多量に含む。 カマドが出土している。 平面形はひずんだバチ形を呈する。

遺構番号	グリッド名	形状（cm）			遺物	時期	備考
		長径	短径	深さ			
SP01	J－10	26	46		土器片		
〃 02	I－9	24	24	23	土器片		SD07の東に位置する。
〃 03	J－9	24	24	6	土器片		
〃 04	I－8	34	34	12	土器片		
〃 05	J－8	50	60		土師質土器		カマドが出土している。

第10表　検出遺構一覧表（7）

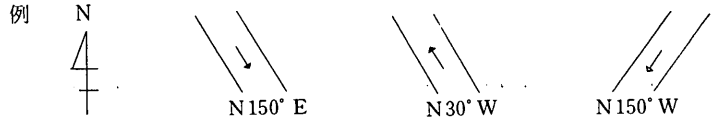
竪穴住居　　遺構観察表　III区

遺構番号	グリッド名	大きさ		遺物	時期	備考
		直径(cm)	検出ピット数			
SH02	R-2•3	600	3	弥生土器 サヌカイト	弥生時代 後半	弥生土器の壺•甕•高坏が出土している。床面より炭化木材が出土している。

溝状遺構

遺構番号	グリッド名	大きさ (cm)			遺物	時期	備考
		長さ	天幅	深さ			
SD31	P-3•4 Q-4	2,900	60	30	須恵器	6世紀 中頃	※N50°E 須恵器の甕，長頸壺，短頸壺の蓋，提瓶が出土している。
〃 32	R－3	600	40	10			N140°W
〃 33	R－3 S－3	320	80	17	須恵器片		
〃 34	R－3 S－3	1,180	315	49	須恵器	6世紀	古墳の周溝である。須恵器の甕が出土している。
〃 35	R-2•3	920	145	34	須恵器	6世紀	古墳の周溝である。須恵器の甕が出土している。
〃 36	R－2	830	110	37	弥生土器 須恵器	6世紀	古墳の周溝である。
〃 37	R－2	225	25	7		弥生時代 後期後半	SH02の壁溝である。

※　北を基準にして，溝の流れの方向を表示したものである。



第11表　遺物観察一覧表

Ⅰ区

遺構出土遺物

挿図番号 / 出土遺構名	図版番号 / 遺物番号	器種	石材	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察
6 / SD01	37 / −1	石鏃	サヌカイト	48.95	24.00	5.05	5.18	凹基無茎式 側辺中央にややはり出す五角形状を呈する。 先端角5.5°　くり込み率0.14
6 / SD01	37 / −2	〃	〃	(19.40)	(12.05)	2.20	(0.27)	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状を呈する。片翼を欠損している。長い翼を持つ。 全体に細かい調整が施されている。 くり込み率0.60
6 / SD10	37 / −3	〃	〃	(10.65)	16.55	2.95	(0.45)	凹基無茎式 平面形は三角形状と思われる。 先端部を欠損している。
6 / SD11	37 / −4	〃	〃	16.50	14.50	1.80	0.35	凹基無茎式 側辺はやや外反する。 くり込み率0.45
6 / SD11	37 / −5	〃	〃	21.30	3.35	3.50	1.02	平基無茎式 平面形は五角形状を呈している。 基部はわずかにくぼむ。 先端角70°　未端角10°
6 / SD11	37 / −6	〃	〃	(12.00)	14.25	3.80	(0.67)	平基無茎式 平面形は二等辺三角形状を呈している。 先端を欠損している。 先端角45°
6 / SD11	37 / −7	〃	〃	24.95	13.30	2.75	0.72	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状を呈する。側辺はやや内彎する。翼端部は丸みを帯びている。 くり込み率0.50
6 / SD11	37 / −8	〃	〃	28.45	15.75	3.25	1.45	平基無茎式 平面形は五角形を呈する。 調整は少なく，側辺の傾きは異なる。
6 / SD11	37 / −9	〃	〃	(33.00)	(20.05)	4.85	(2.58)	凹基無茎式 先端及び片辺・片翼端を欠損している。 くり込み率0.13
6 / SD13	37 / −10	〃	〃	(24.40)	(18.95)	3.20	(1.10)	凹基無茎式 側辺は途中で屈曲・内彎し，翼に至る。 くり込み率0.35　くり込み角105°
6 / SD13	37 / −11	〃	〃	(19.10)	16.50	2.95	(0.59)	凹基無茎式 側辺はやや内彎する。 くり込み率0.27　くり込み角120°
6 / SD13	37 / −12	〃	〃	24.55	17.30	4.70	1.63	凹基無茎式 側辺は左右対象ではなく，不規則な五角形を呈する。 くり込み率0.13
6 / SD13	37 / −13	〃	〃	29.00	18.40	5.40	2.26	凹基無茎式 平面形は二等辺三角形状を呈する。 側辺は直線とゆるいコーナーを持つ2辺からなる。
6 / SD05	37 / −14	不明	〃	39.70	26.55	6.50	6.87	一辺にわずかな調整がみられる。
6 / SD09 SD11	− / −15	〃	〃	−	−	−	11.14	大きな欠損がある。 側辺には調整がみられ両辺は角度を持ち，幅狭部から広部に広がりそれにつれて厚くなる。
6 / SD11	− / −16	不明（スクレイパー？）	〃	27.80	35.95	5.80	6.05	稜線にはわずかな摩滅がみられる。
6 / SD11	37 / −17	不明（石錐？）	〃	20.36	11.05	4.70	1.50	上下に折損部がある。 石錐の胴部と思われる。
6 / SD11	− / −18	楔形石器	〃	−	−	−	22.53	両長側に裁断面を持つ。

挿図番号	図版番号	器種	石材	法量(mm)			重量(g)	観察
出土遺構名	遺物番号			長さ	幅	厚さ		
6	−	不明	サヌカイト	−	−	−	3.92	一辺に折損面，一辺に欠損面がみられる。他の二面は約70°の角度である。調整が施されている。
SD11	−19							
6	−	〃	〃	−	−	−	1.99	一辺にくぼみ調整がみられるのみである。周辺端部は薄くなる。
SD09 SD11	−20							
6	−	〃	〃	−	−	−	13.65	大きな折損面があり，反対側には小さな折損面とえぐり調整がある。また，他の細かい調整面と粗い調整面を持つ二辺からなる。
SD11	−21							
6	37	不明（石錐？）	〃	14.95	30.95	6.20	2.03	片側に調整が施されている。先端部に摩滅がみられる。
SD13	−22							
6	−	楔形石器	〃	−	−	−	6.49	折損面以外に調整がみられる。側辺の片方の調整面は粗く，リングを持つが片面の調整は細かい。
SD13	−23							
6	−	不明（石庖丁？）	〃	−	−	−	8.64	折損面以外には調整がみられる。一辺の中央部にくぼみがある。
SP3	−24							

S D01

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
7	37	弥生土器			7.8	0.5～3㎜程度の砂粒を多く含む。	良	明黄褐色	しっかりとした底部。摩滅のため調整不明。
−25		底部							
7	−	弥生土器				0.2～3㎜程度の砂粒を多く含む。	良	外面 暗橙色 内面 黄灰褐色	底部は不安定な平底。
−26		体部							
7	37	須恵器坏蓋	12.3	4.1		1㎜程度の砂粒を含む。	良	灰白色	口縁端部からゆるやかに内彎しながら立ち上がり天井部はヘラ切り。
−27									
7	−	須恵器坏身	8.2			1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 灰色 内面 灰白色	天井部はほとんど欠損している。 内外面ヨコナデ調整されており，天井部はヘラ切りされている。
−28									

S D03

7	−	弥生土器甕	15.0			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明黄褐色 内面 褐灰色	頸部は「く」の字に屈曲し，口縁は外反する。 器壁は薄い。 外面口縁部付近はヨコナデ調整されており，体部には9～10条／cmのハケ目が施されている。
−29									
7	37	〃	14.6			1～3㎜程度（最大5㎜）の砂粒を含む。	良	外面 赤橙色 内面 黄灰色	口縁部は体部よりゆるやかに外反し，端部では面を持つ。 外面摩滅のため調整不明。 内面はナデ調整されている。
−30									

S D05

7	−	弥生土器			6.0	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 淡黄色 内面 黒褐色	外面は摩滅のため調整不明。 内面はナデ調整されている。
−31		底部							

S D06

7	−	弥生土器			9.0	1～2㎜程度の砂粒を多く含む。	良	外面 明赤褐色 内面 黒褐色	しっかりした平底。 外面・内面体部摩滅のため調整不明。 底部内面はナデ調整されている。
−32		底部							

S D09

7	−	弥生土器			5.0	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黄褐色 内面 明黄褐色	小ぶりで底部から体部へ厚さの変化が少なく，体部はやや内彎ぎみである。 内外面摩滅のため調整不明。
−33		底部							

S D11

7	−	須恵器甕	15.0			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	灰色	頸部で「く」の字に屈曲し，口縁にかけて外反している。 口縁端部はやや内に傾斜する面を持つ。 内外面ヨコナデ調整されており，体部内面には同心円文の叩きが施されている。
−34									

SD13

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
7	38	−35	弥生土器甕	23.0			0.2〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明黄褐色 内面 褐 色	如意状口縁で，口縁端部に刻み目があり，口縁部下に2条を1単位とするクシ描状の工具を用いた計6条の平行沈線がめぐる。そのヘラ描きを一部切りながら下方に約2cm4条のヘラ描き沈線が施されている。内面はナデ調整されている。
7	−	−36	弥生土器体部				1㎜程度の砂粒を含む。	良	明赤褐色	外面にはヘラ描き沈線が施されている。
7	38	−37	弥生土器甕体部				0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗黄褐色 内面 黄褐色	外面には2条を1単位とするヘラ描き沈線が施されている。
7	38	−38	弥生土器 高坏 口縁〜体部	25.0			0.5〜1㎜程度の細かい砂粒を多く含む。	良	外面 明褐色 内面 暗黄褐色	口縁端部は左右に拡張され，上部には平らな面を持つ。 全面摩滅のため調整不明。 外面に3条の凹線を持つ。
7	−	−39	弥生土器口縁〜体部	15.0			0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 灰橙色 内面 黒褐色	38の土器を上下に引き延ばした様な形をしている。 口縁部外面はナデ調整されているが，他は摩滅のため調整不明。 外面に3条の凹線を持つ。
7	−	−40	弥生土器体部				0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	明赤褐色	外面は摩滅のため調整不明だが，竹管文がみられる。 内面はナデ調整されている。

SP07

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
7	−	−41	弥生土器鉢				0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 淡黄色 内面 黄橙色	体部の中ほどでややふくらむ。 外面頸部及び内面には指頭痕が見られる。 内面はナデ調整されているが，外面は摩滅のため調整不明。

SP04

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
7	40	−42	弥生土器底部			4.9	0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明橙褐色 内面 黄灰褐色	底部のわりに薄く，体部は外反する。 外面は10条／cmのハケ目が施されている。内面は摩滅のため調整不明。

SP11

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
7	−	−43	弥生土器底部			6.5	0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黒褐色 内面 灰黄色	内外面ヨコナデ調整されている。 しっかりした平底。

SP15

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
7	−	−44	弥生土器甕				1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 橙黄褐色 内面 暗褐色	体部の一部で頸部から口縁にかけては欠損している。 外面は摩滅のため調整不明だがヘラ描き沈線が3条みられる。 内面はナデ調整されている。

包含層出土遺物

挿図番号 / グリッド名	図版番号 / 遺物番号	器種	石材	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察
18	39	打製石庖丁	緑色片岩	45.50	98.75	13.15	115.40	平面形は隅丸の長方形状 短辺の1辺は外反しもう1辺は中央部にえぐりを持つ。 長辺の1辺はややくぼみ調整されている。 周縁に鋭利なエッジは残らず摩滅している。
E-12第1層	−45							
18	39	〃	サヌカイト	53.45	(60.55)	(14.15)	(53.33)	片側を欠損している。 周辺に細かい調整が施されている。 表裏に自然面を残す。 短辺にくぼみがある。
D-12第2層	−46							
18	38	不明 (扁平片刃石斧？)	泥岩 (緑灰色)	(55.05)	(57.40)	(12.90)	(52.15)	折損面以外には擦痕がみられる。 特に最大面はつるつるになっている。 未製品か。
攪乱土	−47							
18	−	不明 (叩き石？)	結晶片岩 (緑色)	(88.00)	35.95	12.85	(63.77)	片方が折れているので全形は不明である。 丸みを帯びた先端部には摩滅痕があり，叩き石の可能性がある。
C-13第3層	−48							
18	38	不明 (石斧？)	結晶片岩 (青白色)	(77.00)	(44.90)	(25.00)	(142.81)	一部に擦痕がある。 断面は楕円形を呈しており，上下は欠損している。 結晶の流れは縦方向に走る，石斧と思われる。 刃部は欠損している。
B-14第3層	−49							
18	38	バチ型 蛤刃石斧	結晶片岩	104.65	53.25	34.90	300.45	表面に1㎜内外の凹凸があり，明黄褐色の被膜で内部は見えない。 持った感じが重い，片側辺，片刃部に使用痕が見られる。磁石が反応。
C-14第5層	−50							
19	39	石鏃	サヌカイト	(20.05)	(9.15)	(2.90)	(0.50)	凹基無茎式 先端及び片側を欠損している。 側辺には翼部が突出。くり込み率0.40。
B14第5層	−51							
19	39	〃	〃	19.00	16.60	2.80	0.55	凹基無茎式 平面形は二等辺三角形状。 先端角70° 末端角50° くり込み率0.32。
B-14第4層	−52							
19	39	〃	〃	(17.80)	(14.35)	3.00	(0.61)	凹基無茎式　先端及び片翼を欠損。 平面形は二等辺三角形状。調整は少なく粗い側辺に起伏がある。 先端角40° 。
C-14第4層	−53							
19	39	〃	〃	17.05	14.75	2.90	0.52	凹基無茎式 平面形は二等辺三角形。 先端はやや丸みを帯る。 先端角80° 末端角40° くり込み率0.26。
C-14第5層	−54							
19	39	〃	〃	(16.05)	15.90	3.45	(0.62)	凹基無茎式 平面形は正三角形，先端及び側辺の一部欠損。 先端角60° 末端角60° くり込み率0.15。 N／H＝1.07
C-14第4層	−55							
19	39	〃	〃	22.80	17.50	3.80	0.81	凹基無茎式 平面形は二等辺三角形状。 先端角50° くり込み率は0.12と小さい。 N／H＝1.30　A／H＝0.22
E-13第2層	−56							
19	39	〃	〃	(25.30)	20.70	3.35	(1.65)	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状。 先端部を欠損し，周辺に細かい調整が施されている。 翼端はするどく尖る。 くり込み率は0.38と大きい。
E-13第1層	−57							
19	39	〃	〃	(18.95)	(19.00)	(3.75)	(1.24)	凹基無茎式 先端及び両翼欠損。 平面形は二等辺三角形状と思われる。 先端角35° 末端角15° くり込み率0.55。
C-14第6層	−58							
19	39	〃	〃	(16.70)	(14.10)	3.35	(0.52)	凹基無茎式 先端及び片翼欠損。 全体に調整が少ない。 くり込み率0.25。
C-13第3層	−59							
19	39	〃	〃	18.50	(14.05)	2.45	(0.44)	凹基無茎式 平面形は二等辺三角形。 片翼を欠損している。翼が側辺より突出。 くり込み率0.13　N／H＝1.32　A／H＝0.17。
D-12第2層	−60							
19	−	〃	〃	22.80	17.45	4.85	1.42	凹基無茎式　平面形は五角形状。 先端角は50° と小さく，くり込み率も0.17と小さい。
E-13第2層	−61							
19	39	〃	〃	(20.60)	(15.00)	3.70	(0.78)	凹基無茎式 片翼末端を欠損している。 平面形は五角形状。 くり込み率0.33。
C-13第3層	−62							

※　表中のN／Hは長さ／幅，A／Hは厚さ／幅の略である。

挿図番号	図版番号	器種	石材	法量(mm)			重量(g)	観察
グリッド名 出土土層名	遺物番号			長さ	幅	厚さ		
19	39	石鏃	サヌカイト	13.95	(13.35)	2.80	(0.36)	平基無茎式 平面形は正三角形状を呈している。 片翼，及び側辺の一部を欠損する。 先端角70°。
E-13攪乱	−63							
19	39	〃	〃	(12.25)	(13.20)	2.30	(0.33)	平基無茎式 平面形は正三角形状を呈している。 先端部及び片翼端部は欠損している。 先端角40° 末端角40° N／H＝1.23 A／H＝0.17。
E-13攪乱	−64							
19	39	〃	〃	(14.30)	13.75	3.30	(0.56)	平基無茎式 平面形は正三角形状を呈する。 先端部を欠損している。 周辺に細かい調整がみとめられる。先端角60°。
E-13第3層	−65							
19	39	〃	〃	19.50	13.25	2.90	0.67	平基無茎式 平面形は二等辺三角形状を呈し，側辺はやや内彎する。調整は周辺のみ加えられている。 先端角40° 末端角30° N／H＝1.47。
C−15	−66							
19	39	〃	〃	(20.35)	(12.45)	3.00	(0.72)	凸基無茎式か？ 基部がゆるやかにふくれる。片翼を欠損している。 平面形は五角形状に側片が突出するいわゆるロケット型。
C-14第6層	−67							
19	39	石錐	〃	(24.95)	9.60	4.75	(1.08)	先端部は細くなる。 基部は欠損。
F-13攪乱土	−68							
19	39	〃	〃	(33.40)	8.80	4.35	(1.44)	細長い棒状を呈し，通例の石錐とは形状が異なる。 先端部は細く尖る。
D-13第2層	−69							
19	39	〃	〃	33.65	11.95	6.10	2.59	棒状を呈するが69よりもやや幅広のものである。
E-12攪乱	−70							
19	39	〃	〃	27.35	19.40	3.45	1.48	大きな基部と細くて小さな錐部を持つ。 錐部の長さは8㎜で，先端にかすかに摩滅がみられる。
D-12第2層	−71							
19	39	〃	〃	(28.95)	17.85	7.25	(3.84)	錐部は欠損している。 周辺に調整が認められる。
E-12第2層	−72							
19	39	〃	〃	(44.05)	24.05	5.70	(5.51)	先端錐部側辺に調整がみられる。 錐部が欠損している。
E-13第1層	−73							
19	39	有舌尖頭器	泥岩	55.60	25.30	8.90	9.71	軟質の石材を用いているためか，表面の摩滅が著しい。 押圧剝離による加工と考えられ素材面は残存しない。 基部は欠損している。
C-14第3層	−74							
19	−	細石刃	チャート (白茶色)	16.00	9.00	1.30	−	白色を基調とし，茶褐色部が一部に認められる。 チャート製で，打面はほとんど残存しない。 断面は台形状を呈し先端部は欠損している。
E-12第2層	−75							
20	−	不明	サヌカイト	−	−	−	0.92	二側辺に明らかに調整が加えられている。
C-14第5層	−76							
20	−	楔形古器	〃	−	−	−	5.79	凹線部には敲打が見られる。
E-13攪乱土	−77							
20	−	〃	〃	−	−	−	4.38	平面形は台形状を呈している。 片面には大まかな調整がみられる。 他の三辺は欠損している。
E-13攪乱土	−78							
20	−	〃	〃	−	−	−	7.11	片翼の欠損した石鏃の形をしている。 周辺に調整がみられる。
E-13攪乱土	−79							
20	−	〃	〃	−	−	−	13.22	平面形は五角形状を呈し，片面はややくぼんだ平面から成るが片面は起伏がある。
E-13攪乱土	−80							
20	−	〃	〃	−	−	−	8.64	二辺が調整を受けている。
E-13第1層	−81							
20	−	不明	〃	24.25	20.80	4.50	2.08	平面形は三角形を呈している。 一辺に凹形の調整を残す。
E-13攪乱土	−82							

※ 表中のN／Hは長さ／幅，A／Hは厚さ／幅の略である。

挿図番号 / グリッド名 出土土層名	図版番号 / 遺物番号	器種	石材	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察
20 / E-12第1層	− / −83	楔形石器	サヌカイト	−	−	−	8.08	全面・全辺に形成調整がある。
20 / F-13第2層	− / −84	〃	〃	−	−	−	17.53	コーナーに大きな欠損面がある。 折損面に対する面は自然面である。
20 / D-12第2層	− / −85	〃	〃	−	−	−	5.95	ほぼ五角形の平面観を持つ。 側辺は楔状を呈する。
20 / D-12第1層	− / −86	〃	〃	−	−	−	9.43	下線に敲打を有し，一面の一部に自然面の名残を有する。
20 / D-13第3層	− / −87	〃	〃	−	−	−	18.89	欠損のある側辺に自然面を残す。 一側面に調整痕がある。
20 / E-13攪乱土	− / −88	〃	〃	−	−	−	14.33	多くの欠損部がある。 片面はほぼ平らであるが，片面は起伏がある。
20 / E-12第2層	− / −89	〃	〃	−	−	−	22.11	一辺に調整が認められる。 大きく内彎する辺にはえぐれたやや新しい欠損面がある。
20 / F-13第2層	− / −90	〃	〃	−	−	−	15.40	折損面以外には調整が施されている。
20 / E-13攪乱土	− / −91	〃	〃	−	−	−	24.35	刃部はなく，また，多くの欠損が見られる。

B－14第５層

挿図番号	図版番号	器種	法量(mm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
21	40	弥生土器甕			5.6	1～5㎜の砂粒を含む。3～5㎜の砂粒が目立つ。	良	外面　淡橙色 内面　橙灰色	外面ナデ調整されている。 底部に穿孔を有する。
－92		底部							

C－13第３層

21	－	弥生土器			8.0	1㎜程度の砂粒を含む。	良	橙褐色	しっかりとした底部。 内外面ナデ調整されている。
－93		底部							

D－12第２層

21	－	弥生土器			9.2	1㎜程度の砂粒を含む。	良　好	外面　黄褐色 内面　黄黒褐色	しっかりとした平底。 外面はナデ調整されており内面には指頭痕が見られる。
－94		底部							

D－12第３層

21	－	弥生土器			7.2	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良　好	黄褐色	しっかりとした平底。 外面はナデ調整されており，内面は摩滅のため調整不明。
－95		底部							

D－12第２層

21	－	弥生土器			6.4	1㎜程度の砂粒を含む。	良　好	淡黄白色	平底。 外面はナデ調整されており，内面は指頭痕を施した後ナデ調整されている。 部分的に黒斑がみられる。
－96		底部							

D－14第４層

21	－	弥生土器			8.0	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面　暗灰橙色 内面　明灰黄色	しっかりとした平底。 内外面ナデ調整されている。
－97		底部							

E－12第２層

21	－	弥生土器			6.4	2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡褐色	しっかりとした平底。 外面はナデ調整されている，内面は摩滅のため調整不明。
－98		底部							

E－13第１層

21	－	弥生土器			6.8	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良　好	赤橙色	しっかりした平底。 内外面ナデ調整されている。
－99									

E－12第２層

21	－	弥生土器			16.4	1～2㎜の砂粒を含む。	良	外面　橙褐色 内面　黄褐色	ややうすい平底。 摩滅が著しく調整不明。
－100		底部							

攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(mm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
21	−	土師器坏底部			4.1	0.5〜1mmの砂粒を含む。	良好	明橙色	内外面はヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。底部はわずかな段をつくりゆるやかに立ちあがる。
−101									

C−13第3層

21	40	土師器坏底部			6.0	緻密	良	黄白色	外面はヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。
−102									

C−14第4層

21	40	土師器坏底部			6.0	緻密	良好	灰白黄色	内外面はヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。
−103									

D−14第3層

21	−	土師器坏底部			5.2	緻密	良	暗灰黄色	内外面はヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。
−104									

E−13第2層

21	−	土師器坏底部			5.2	緻密	良	黄白色	全面摩滅。底部静止糸切り痕がわずかに残る。
−105									

E−12第1層

21	40	土師器坏底部			5.8	緻密	良	白橙色	内外面はヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。
−106									

C−14第4層

21	−	土師器坏底部			5.0	緻密	良	黄白色	内外面ナデ調整。底部静止糸切り。
−107									

C−13第3層

21	−	土師器坏底部			5.0	0.2〜1mmの砂粒を含む。	良	白黄橙色	外面はヨコナデ調整されている。内面は摩滅のため調整不明。底部は回転糸切りされている。
−108									

C−15第5層

21	−	土師器坏底部			5.5	0.5〜1mmの砂粒を含む。	良	明橙白色	内外面はヨコナデ調整されている。底部はわずかに静止糸切りの痕が残る。
−109									

C－14第5層

挿図番号	図版番号	器種	法量(mm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
21	－	土師器坏			底径 6.0	緻密	良	灰白橙色	内外面ヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。
－110									

B－14第4層

21	－	土師器坏 底部			底径 5.4	緻密	良	灰白色	内外面摩滅のため調整不明。底部はわずかに静止糸切りの痕が残る。
－111									

C－14第6層

21	－	土師器坏 底部			底径 6.1	0.5～2mmの砂粒を含む。	良好	灰黄白色	内外面摩滅のため調整不明。
－112									

C－14第4層

21	－	土師器坏	12.4	2.5	底径 6.0	緻密	良	灰黄白色	全面摩滅。
－113									

C－14第6層

21	－	土師器坏 底部			底径 8.0	緻密	良好	灰白色	全面摩滅。
－114									

B－14第4層

21	41	緑釉陶器 底部			8.0	緻密	良好 (須恵質)	(釉) 淡黄緑色 (地) 灰白色	底部はやや上げ底気味の蛇の目高台を呈しており,体部は内彎気味に立ち上がる。器表面は黄緑色の釉がかかる。内外面ヨコナデ調整されている。底部は回転糸切りされ,高台は中央部でくぼむ。
－115									

C－14第4層

22	41	土師質土器 土釜 口縁部	19.0			0.5～1mmの砂粒を含む。	良	外面 暗黄黒色 内面 黄灰白色	内外面ナデ調整されている。外面には指頭痕が施されており，ススが布着している。
－116									

B－13第4層

22	41	土師質土器 土釜 口縁部	18.0			0.5～2mmの砂粒を含む。	良	外面 白黄色 内面 黄白色	鍔先端部は下方に折り曲げられさらにナデ調整が施されている。外面に粘土のつなぎ目が見られる。
－117									

C－13第3層

22	－	土師質土器 土釜 口縁部	24.4			0.5～1mmの砂粒を含む。緻密	良	黄白色	鍔先端部は下方に折り曲げられさらにナデ調整が施されている。外面に粘土のつなぎ目が見られる。
－118									

挿図番号	図版番号	器種	法量(mm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
22	－	土師質土器 土釜	28.2			0.5～1mmの砂粒を含む。	良	外面　黄褐色 内面　黄灰褐色	わずかに鍔が張り出す。 内外面ナデ調整されている。 外面には指頭痕が見られる。
－119		口縁部							

C－15第5層

22	－	土師質土器 土釜	26.0			1～3mmの砂粒を含む。 粗い胎土。	良	外面　暗灰橙色 内面　明灰橙色	鍔がやや下方に大きく出る。 内外面ナデ調整されている。 外面には指頭痕が見られる。
－120		口縁部							

C－14第5層

22	－	土師質土器 土釜	26.1			0.5～1mmの砂粒を含む。	良	外面　黄白色 内面　灰黄色	鍔先端部は下方に折り曲げられ，さらにナデ調整が施されている。 外面及び内面上部に指頭痕が見られ，内面にはハケ目が施されている。
－121		口縁部							

C－13第3層

22	－	土師質土器 土釜	27.0			0.5～1mmの砂粒を含む。	良	外面　黄白色 内面	鍔先端部は下方に折り曲げられ，さらにナデ調整が施されている。 内外面ナデ調整されており，外面には指頭痕が見られる。
－122		口縁部							

B－13攪乱土

22	－	土師質土器 土釜				1～3mmの砂粒を含む。	良	暗黄白色	全体に摩滅しているが一部にナデ調整の跡が残る。 断面はほぼ円。
－123		脚							

B－14第4層

22	－	土師質土器 焙烙	44.6			1～2mmの砂粒を含む。	良	外面　暗黒茶色 内面　暗灰茶色	口縁部は丸く外方に膨らみ，体部との境をつくっている。 外面はススの付着によって黒ずんでいる。 内外面ヨコナデ調整されている。
－124		口縁部							

D－14攪乱層

22	－	土師質土器 焙烙	44.4			1～3mmの砂粒を含む。	良	外面 黒色(ス付着) 内面　明灰褐色	口縁部は丸く外方に膨らみ，体部との境をつくっている。 外面はススの付着によって黒ずんでいる。 内外面ヨコナデ調整されている。
－125		口縁部							

B－14第4層

23	－	土師質土器 土鍋	36.0			1～2mmの砂粒を含む。	良	明褐黄色	口縁部は立ち気味である。 摩滅のため調整は不明。外面には粘土のつなぎ目が見られる。
－126		口縁部							

C－13第2層

23	－	土師質土器 土鍋	35.8			0.5～3mmの砂粒を含む。	良	明褐黄色	口縁部は大きく外反し外面に指頭痕を残す。 内外面ナデ調整されている。
－127		口縁部							

C－14第5層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
23	－	土師質土器 土鍋	24.1			1～2㎜の砂粒を含む。	良	明黄灰色	外反する口縁はひし形気味の断面を有し，端部外面にわずかに沈線を有す。内外面ナデ調整されている。
－128		口縁部							

C－13第4層

23	－	土師質土器 土鍋				2～3㎜の砂粒を含む。	良	外面 暗褐黄色 内面 明白黄色	口縁部は「く」の字に屈曲している。内外面ナデ調整されている。
－129		口縁部							

E－12第1層

23	－	土錘	径 2.5			0.5～1㎜の砂粒を含む。	良好	暗黄灰色	両端が欠損している。中心に穴を持つ紡錘形。
－130									

C－14第4層

23	－	瓦質土器 こね鉢	22.7			0.5㎜以下の砂粒を多く含む。	良	明褐黄色	口縁端部は三角状の断面を有し，上方につまみあげられている。ナデ調整。
－131		口縁部							

C－14攪乱土

23	－	瓦質土器 こね鉢	27・0			0.5～1㎜の砂粒を含む。	良	外面 灰黒白色 内面 灰白色	口縁端部は三角状の断面を有し，上方につまみあげられている。全面摩滅，外面に指頭痕が残る。
－132		口縁部							

C－14第6層

23	－	須恵器 こね鉢	26.0			0.5～1㎜大の砂粒を含む。	良	明青灰色	口縁端部は上下に拡張され，口縁部上端を内方につまみ出している。内外面ヨコナデ調整されている。
－133		口縁部							

C－13第3層

23	－	須恵器 こね鉢				緻密	良	明青白色	内外面ヨコナデ調整されている。口縁端部は上下に拡張され，口縁部上端を内方につまみ出している。
－134		口縁部							

C－13第4層

23	－	須恵器 こね鉢			7.0	0.5㎜程度の砂粒を含む。	良	明青灰色	内外面はヨコナデ調整されており，体部外面には指頭痕が見られる。
－135		底部							

D－13第２層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色 釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
24	41	陶胎染付碗	11.0			灰色 やや粗い		暗青色から暗緑灰色 オリーブ灰色釉	厚手でつくられており口縁端部は，丸くおさまる。全体にかん入が入る。17C～18C中
－136									

E－13攪乱土

24	－	陶胎染付碗 底部			4.2	灰色 やや粗い	若干不良	紫灰色 乳濁色釉	非常に厚くつくられており畳付以外は釉がかかる。全面にかん入が入る。高台には１条の圏線が入る。17C末～18C中
－137									
24	42	染付磁器碗	13.6			白色 精緻		明青色から青色 明緑灰色釉	口縁端部は若干とがりぎみで少し丸くなっておさまる。口縁端部外面に１条の圏線が入り，外面にコンニャク印判による施文がある。18C前半～中葉の頃。
－138									
24	42	染付磁器碗	14.0			灰白色 精緻		青灰色 明緑灰色釉	口縁端部は丸くおさまる。外面には文様が描かれ，口縁端部外面には，雨降り文が入る。
－139									
24	41	染付磁器碗	11.0			灰白色 精緻		青灰色 明緑灰色釉	やや厚手でつくられており，口縁端部は丸くおさめられている。見込は，蛇ノ目状の釉剝ぎがされている。俗にいう「くらわんか手」である。
－140									
24	－	青磁染付碗 底部			5.0	明紫灰色 精緻		内面・高台裏・高台内は，明緑灰色釉・外面・高台脇・高台は，緑灰色釉。	底部はやや厚手であり，高台はほぼ直線的におり，高台裏はゆるやかに彎曲しながらあがる。高台内には削り痕が残る。見込に蛇ノ目釉剝ぎあり，そこに砂が多く付着。18C頃
－141									
24	42	染付磁器小瓶			3.1	灰白色 精緻		青灰色 明緑灰色釉	高台内は削り出されており，削り痕が残る。体部から高台，高台裏，高台内は釉がかかる。畳付露胎砂付着。内面無釉。外面には文様が描かれ，高台脇・高台に１条ずつ圏線が入る。
－142									
24	42	陶器蓋？	9.2			にぶい黄燈色 精緻		オリーブ灰色釉	裏面からかえりにかけては，無釉。外面には，白色の圏線が２条まわる。
－143									
24	41	陶器鉢	18.9			灰色 やや粗い		暗オリーブ色釉	体部途中から，ラッパ状に開き，口縁端部は上にあがり，丸くおさまる。細かくかん入が入る。
－144									

C－13第３層

24	42	印花文皿			6.0	灰白色 粗い		浅黄色釉	〔註１〕底部はやや厚手で，高台は低くつく。畳付のみ露胎。見込中央には，印花文が刻まれている。セト・ミノ系。
－145									

B－14第４層

24	43	陶器溝縁皿	13.3	2.9	4.3	明褐灰色 やや粗い		灰オリーブ色釉	〔註２〕体部途中で，ラッパ状に広がり，口縁端部で屈曲し，上にあがる。高台脇から高台～高台内にかけては無釉。見込には砂目積痕がいくつか残り，高台内にも砂が残る。いわゆる溝縁皿。
－146									
24	44	陶器皿			4.0	灰白色 精緻		オリーブ灰色釉	外面には釉がかかり，高台脇から高台，畳付，高台裏，高台内とも無釉。内面にも，釉がかかるが，見込みは蛇ノ目釉剝ぎされている。全面にかん入が入る。唐津系皿　17C後～18C中か？
－147									

E－13攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色 釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
24	－	磁器皿			3.8	灰白色 精緻		透明釉	高台は台形状につく。見込は蛇ノ目釉剝ぎされており，砂が多く付着する。畳付から高台裏・高台内無釉。かん入が入る。17C後半～18C中頃
－148									
24	42	磁器皿			5.6	灰白色 精緻		明青色 明緑灰色釉	高台はほぼまっすぐにおり，高台下端は，内外ともに面取りされている。見込に2条，高台に1条圏線が入り見込中央には文様が入る。
－149									

C－13第2層

24	－	染付磁器皿	12.0			灰白色 精緻		灰色 明緑灰色釉	やや薄手でつくられており，内面には文様が描かれている。
－150									

E－13攪乱土

24	42	陶器皿			4.1	灰白色 やや粗い		内面には，黒色釉。厚くたまる。	高台は低く，若干ふんばったようになっている。高台下端は面取りされている。畳付は，平坦であり高台脇から高台，畳付，高台裏・高台内と無釉。ヘラ削り（右回転）
－151									

C－13第2層

24	－	陶器灯明皿	10.0	1.5	4.4	明褐灰色 精緻		内面は塗土が施こされ赤褐色。外面は無釉，灰赤色。	〔註3〕外面はヘラ削り。回転方向不明。内面には凸帯を持ち，一部に灯芒受けの凹部を持つ。備前系？18C～
－152									

E－13攪乱土

24	－	備前擂鉢	27.8			暗赤褐色		暗赤褐色 (口縁外部) 茶赤褐色	内面に2㎜内外の沈線を6本以上持つ。18C頃の備前焼擂鉢。
－153									

II区

遺構出土遺物

SD16

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
29	50	土師器坏	11.1	3.2		1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡灰白色	ほぼ完形　底部の中心部は浮き上がっている。体部は水平より約40°の角度を持って斜めにのび端部は丸くおさめられている。外面は二段ナデが施されており，内面はヨコナデ調整されている。底部は糸切り。
－154									
29	50	土師器坏	11.0	3.3		1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	淡灰白色	ほぼ完形　底部の中心部は浮き上がっている。体部は水平より約40°の角度を持って斜めにのび端部は丸くおさめられている。外面は二段ナデが施されており，内面はヨコナデ調整されている。底部は糸切り。
－155									
29	50	土師器坏	11.2	3.1	6.5	2㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良	淡白灰色	ほぼ完形　底部の中心部は浮き上がっている。体部は水平より約40°の角度を持って斜めにのび，端部は丸くおさめられている。外面は二段ナデが施されており，内面は摩滅のため調整不明。底部は糸切り。
－156									
29	50	土師器坏	11.0	3.5	5.6	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡白灰色	底部の中心部は浮き上がっている。体部は水平より約40°の角度を持って斜めにのび端部は丸くおさめられている。外面は二段ナデが施されていおり，内面は摩滅のため調整不明。底部は糸切り。
－157									
29	50	土師器坏	11.2	3.5	5.5	1～2㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良	淡白灰色	底部の中心部は浮き上がっている。体部は水平より約40°の角度を持って斜めにのび端部は丸くおさめられている。外面は二段ナデが施されており，内面は摩滅のため調整不明。底部は糸切り。
－158									
29	50	土師器坏	11.6	3.5	5.5	1～2㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良	淡白灰色	底部の中心部は浮き上がっている。体部は水平より約40°の角度を持って斜めにのび端部は丸くおさめられている。外面は二段ナデが施されており，内面はヨコナデ調整されている。底部は糸切り。
－159									
29	－	土師器			5.5	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄白色	底部の中心部は浮き上がっている。全面摩滅のため調整不明。
－160									
29	50	瓦質土器埦	13.4	4.5		微砂粒を多く含む。	不良	淡灰黒色 口縁部黒色化	体部はやや内彎しながら立ち上がり端部は丸くおさめられている。やや厚手である高台は粘土紐を貼り付けてつくられておりその際の指頭痕が残る。内外面ヨコナデ調整されている。
－161									
29	－	瓦器埦	15.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	灰白色	わずかに内彎しながら斜めに立ち上がる。 外面上半部はヨコナデ調整されており，下半部は指頭痕がみられる。 内面はヘラミガキされている。 いぶしは施されていない。
－162									
29	－	須恵器			10.0	微砂粒を含む。	良	淡灰色	内外面ナデ調整されており，底部はヘラ切り。
－163									
30	－	弥生土器壺	32.0			砂粒を含む。	不良	明褐色	口縁部が拡張している。 口縁外部に鋸歯文が施されている。 摩滅のため調整不明。
－164									
30	49	弥生土器壺	28.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面　明褐色 内面　淡灰黒色	口縁端部上面をつまみ上げている。 口縁外部に鋸歯文が施されている。
－165									
30	49	弥生土器壺頸部				2～5㎜程度の砂粒を含む。	良	淡灰褐色	外面はナデ調整されている。 体部と頸部の境の貼り付け突帯の上には刻み目が施されている。
－166									
30	48	弥生土器甕			4.6	1～7㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰褐色	外面はタタキの上ナデ調整されている。黒斑あり，内面は体部最大径あたりから下半部までヘラケズリされており，他はナデ調整されている。
－167									

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
30	48	−168	支脚			脚底径 10.0	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄褐色	小型で上部が欠損している。 やや傾きを持つ。 くびれ部外面はハケ目調整されており，脚部外面は指ナデが認められている。 内面はナデ調整されている。
30	−	−169	弥生土器底部			5.0	1～5㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰褐色	底部の縁辺部が丸みを帯びている。 内外面ナデ調整されている。
30	−	−170	弥生土器底部			3.8	1～8㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明橙色 内面 淡灰黒色	しっかりとした平底を持つ。 内外面ナデ調整されている。 外面に黒斑がみられる。
30	−	−171	弥生土器底部			6.0	1～2㎜程度の砂粒を含む。	不良	外面 淡黄褐色 内面 淡灰黒色	しっかりとした平底を持つ。内外面ナデ調整されている。
30	−	−172	弥生土器底部			9.0	1㎜～1cm程度の砂粒を多く含む。	良	灰褐色	しっかりとした平底を持つ。 摩滅のため調整不明。
30	−	−173	弥生土器底部			6.0	2～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 淡灰黒色 内面 茶褐色	底部端が丸みを持ちやや底が薄い。 外面はナデ調整，内面は指ナデ調整されている。
30	−	−174	弥生土器底部			(4.0)	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	明黄褐色	丸底風の平底を持つ。 外面はナデ調整されており，黒斑がみられる。 内面は摩滅のため調整不明。
30	49	−175	弥生土器底部			10.0	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	淡灰黄褐色	底部はしっかりとしており体部はやや厚い。 外面はハケ目が施され内面は板ナデ調整されている。 内外面指頭痕がみられる。
31	−	−176	弥生土器甕				0.2～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 淡橙色 内面 淡黄橙色	内面に稜を持ち「く」の字に外反する口縁である。 外面頸部及び内面はナデ調整されている。他は摩滅のため調整不明。
31	−	−177	弥生土器甕	16.0			1㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄褐色	内面に稜を持ち「く」の字に外反する口縁である。 外面はヨコナデ調整されている。 内面は摩滅のため調整不明。
31	−	−178	弥生土器壺(小型丸底壺)	10.0			0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明褐色 内面 橙褐色	外面の一部に黒斑がみられる。 頸部は凹線風にヨコナデされている。 他は摩滅のため調整不明。
31	−	−179	弥生土器甕				1㎜～1cm程度の砂粒をわずかに含む。	良	淡黄灰色	口縁部が欠損している。 底部は，丸底を呈している。 外面下方に黒斑がみられる。 外面上半部は指ナデ調整されている。 内面上半部には縦方向の指ナデが施されており頸部内面と体部下半に指頭痕がみられる。また，体部内面には粘土のつなぎ目が顕著にみられる。
31	−	−180	弥生土器高坏体部				1㎜程度の砂粒を多く含む。	良	淡褐色	体部はくびれを持ちながら外反する。 内外面ナデ調整されている。

SD17

33	51	−181	縄文土器深鉢				0.2～1㎜程度の細かい砂粒を多く含む。	良	暗茶褐色	口縁内部に削り出しを持つ，岩田IV類の深鉢である。 外面は摩滅のため調整不明。

S D20

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
33	－	弥生土器鉢	10.0			0.2～5㎜程度の砂粒を多く含む。	良	外面 明黄褐色 内面 白黄灰色	体部はやや内彎しながら急に立ち上がる。 内面にわずかに指頭痕が残る。摩滅のため調整不明。
－182									

S D22

33	－	須恵器 高台			10.8	微砂粒を含む。	良	淡黄灰色	高台は「ハ」の字に開き端部がさらに外反する。 内外面ヨコナデ調整されている。
－183									
33	－	染付碗	9.0			精緻	良	乳白色 釉 暗緑青色	体部は直線気味に延びる。 体部外面には，草花文様が描かれている。
－184									

S D23

33	－	須恵器 口縁				微砂粒をわずかに含む。	良	外面 淡灰褐色 内面 白灰色	口縁端部でやや外反している。 内外面ヨコナデ調整されている。
－185									
33	－	弥生土器壺 口縁				0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明橙褐色 内面 淡黄褐色	端部は上方へややつまみ上げられている。 内外面摩滅のため調整不明。
－186									

S D27

33	－	弥生土器 底部			底径 4.0	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 淡黄黒色 内面 淡黄白色	外面はかすかに指頭痕が残る。 内面は指ナデがわずかにみられる。 全面摩滅している。
－187									
33	－	弥生土器 底部			底径 6.0	0.5～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	外面 茶黒色 内面 茶色	底部は平底で体部はやや内彎気味に立ち上がる。 全面ナデ調整されている。
－188									

S D28

33	51	須恵器 口縁	7.0			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	暗青灰色	やや外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめられている。 内外面ヨコナデ調整されており外面には凹線が１条施されている。
－189									
33	－	土師器 口縁				1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	赤橙色	端部は上方へやや内彎気味に立ち上がる。全面摩滅のため調整不明。
－190									

S K08

35	－	須恵器壺			底径 9.0	0.2～1㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良好	暗青灰色	底部から体部にかけて急に立ち上がりヘラケズリによって形成された面を持ち肩部から頸部にかけてはゆるやかに内彎する。内外面ヨコナデ調整されている。外面下部から底部にかけてヘラケズリされている。
－193									
35	53	須恵器壺			9.0	0.2～1㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良好	青灰色	最大径18.5cm やや外反する高台を持ち水平面より60度の角度ですぐに内彎しながら立ち上がり最大径部からは内彎しながら頸部へとつながる。頸部は開きながらやや外反する。内外面ヨコナデ調整されており外面高台付近はヘラケズリされている。
－194									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
35	53	須恵器壺				微砂粒を含む。	良好	青灰色	ゆるやかな丸みを持った肩部からやや外反しながら一気に立ち上がっている。 内外面ともヨコナデ調整されている。 自然釉が付着している。
−195									
35	53	須恵器壺 (薬壺)				微砂粒をわずかに含む。	良好	明青灰色	肩部はゆるやかに内彎し，頸部は垂直に立ち上がる。 内外面ともヨコナデ調整されている。
−196									
35	−	須恵器壺 底部			底径 14.4	微砂粒を含む。	良好	暗灰色	底部は平坦で体部との境に明瞭な稜を持つ。体部はやや内彎しながら立ち上がる。内外面ともヨコナデ調整されている。底部はヘラ切りした後，ナデ調整されている。
−197									
35	51	須恵器壺 頸部				0.2〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	肩部から明瞭な稜を持ち垂直より約10°外反する。 内外面ともヨコナデ調整されている。 内面くびれ部に粘土のつなぎ目がみとめられる。
−198									
35	51	須恵器壺 頸部				0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡黒灰色	198より緩やかに外反しながら立ち上がる。 内外面ともヨコナデ調整されている。 内面に粘土のつなぎ目が顕著に見られる。
−199									
35	−	須恵器 高台付壺 底部			11.4	細砂粒を含む。	良好	外面 灰黒色 内面 濁灰色	やや外反する高台を持ち，水平より約40°の角度でやや内彎しながら立ち上がる。外面及び内面見込み部はヨコナデ調整されている。体部内面は指ナデが施されている。
−200									
35	53	須恵器平瓶			底径 14.0	1㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡灰白色	平底を呈しており，水平より65°で立ち上がる。肩部からはゆるやかに内彎する。内外面ヨコナデ調整されており，外面底部付近はヘラケズリが施されている。内面には粘土のつなぎ目がみられ体部最下部は指ナデが施されている。底部はヘラ切り。
−201									
35	52	須恵器甕	24.0			1㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡青灰色	口頸部は内外面ともヨコナデ調整されており，体部外面は格子目状のタタキ，体部内面は青海波文のタタキが施されている。
−202									
36	52	須恵器甕	19.0			1㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡青灰色	口頸部は内外面ともヨコナデ調整されており，体部外面には粗いタタキ，体部内面には青海波文のタタキが施されている。
−203									
36	−	土師器				1〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄褐色	口縁部は外反し口縁端部はつまみ上げられている。 内外面ナデ調整されている。
−204									
36	−	土師質土器 羽釜				0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良	赤橙色	鍔は先端部が少し上がり気味になっている。 外面はナデ調整されており，内面はハケ目が施されている。
−205									
36	−	土師器埦 底部			底径 9.4	細砂粒を含む。	良好	赤橙色	底部の中心部はくぼむ。 体部への立ち上がりは段を伴う。 内外面ともナデ調整されている。 底部はヘラ切り。
−206									
36	−	土師器甕	16.0			1㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	やや内彎する体部を持ち，口縁部は外反する。口縁端部はつまみ上げられている。外面口縁部及び内面はナデ調整されている。外面は8条/1.3cmのハケ目が施されている。
−207									
37	−	土師質土器 カマド 口縁	29.0			1〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	赤橙色	外面は3条／1cmのハケ目が施されており内面はナデ調整されている。
−208									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
37	54	土師質土器				2㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良好	淡赤橙色	正面に3条／1cmのハケ目が施されている。
−209		カマド							
37	−	土師質土器				1㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良好	赤橙色	正面に7条／2cmのハケ目が施されている。
−210		カマド							
37	54	土師質土器				1〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	赤褐色	正面に5条／1.5cmのハケ目が施されている。
−211		カマド							
37	−	土師質土器				1〜3㎜程度の砂粒を多く含む。	良	外面 黄褐色 内面 暗褐色	カマドの焚口部の上部である。 調整は不明である。
−212		カマド							

包含層出土遺物

J−9第5層

38	−	弥生土器			底径	2〜5㎜程度の砂粒を含む。	良	明橙黄色	摩滅のため調整は不明。 大きい砂粒が目立つ。
−219		底部			6.0			外面・底部付近 明赤橙色	

I−8第2層

38	−	須恵器坏蓋	8.2			1〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	明青灰色 (断面 明赤灰色)	肩と体部の成す角が小さい。 内外面ヨコナデ調整されている。
−220									

I−8第4層

38	−	須恵器坏蓋	12.0			砂粒を含まず。	良	暗青灰色	体部から口縁にかけて下方へ緩やかに屈曲し，口縁部は少し外反気味に終る。 内外面ヨコナデ調整されている。
−221									

I−8第2層

38	−	須恵器坏蓋	14.0			1〜2㎜の砂粒を含む。	良	暗青灰色	内外面ヨコナデ調整されている。 天井部にはヘラケズリが施されている。
−222									

J−9第4層

38	55	須恵器坏蓋	11.0			3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 内面 薄青灰色	天井部には偏平な宝珠つまみがついている。また，つまみには焼成時に土器片が付着している。かえりは小さい，内外面はヨコナデ調整されており外面には自然釉がかかる。
−223									

J−8第4層

38	−	須恵器蓋				ほとんど砂粒を含まない。	良	明青灰色	ボタン状のつまみを有する。 全体にナデ調整されている。
−224		宝珠つまみ							
38	−	須恵器坏蓋	12.0			ほとんど砂粒を含まない。	良	暗青灰色	内外面ヨコナデ調整されている。
−225									

J－8第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
38	－	須恵器高坏			脚底径	緻密	良	外面 明黄灰色	端部が上方へ屈曲し底面はどちらもヘラケズリが施されている。
－226		脚			8.8			内面 暗青灰色	内外面ヨコナデ調整されている。
38	－	須恵器高坏			脚底径	ほとんど砂粒を含まない。	良	外面 暗青灰色	内外面ヨコナデ調整されている。
－227		脚			10.0			内面 暗青黒色	端部が下方へ屈曲している。

J－8第3層

38	－	須恵器高坏			脚底径	1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗青灰色	端部が下方へ屈曲している。
－228		脚			12.5			内面 暗青黒色	内外面ヨコナデ調整されている。

J－8第4層

38	－	須恵器			底径	砂粒をほとんど含まない。	良	暗青灰色	底が平坦である。
－229		底部			8.0				内外面ヨコナデ調整されている。 底部はヘラケズリされている。

J－8第3層

38	－	須恵器高台付坏			9.0	1㎜程度の砂粒を含む。	良	暗緑灰色	下方へすぼむ台形状の高台が底部内側に貼り付けられている。
－230		底部							内外面ヨコナデ調整されている。

J－8第4層

38	－	須恵器高台付坏			8.0	大きな砂粒は含まない。	良	青灰白色	外側へ張り出す高台がやや内に貼り付けられている。
－231		底部							内外面ヨコナデ調整されている。
38	－	須恵器高台付坏			7.8	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰紫色	外へ張り出す高台が貼り付けられている。
－232		底部							内外面ヨコナデ調整されている。

J－9攪乱土

38	－	須恵器			12.5	砂粒をほとんど含まない。	良好	明灰色	高台はやや底部内側寄りに付き,その外側は「く」の字にくびれ外反する。内外面ヨコナデ調整されている。内面には暗青色の自然釉がかかる。胎土が密で焼成が他の須恵器に比べると良好である。
－233		高台付底部							

J－8第3層

38	－	須恵器			11.0	0.5㎜程度の砂粒を含む。	良	白青灰色	高台はやや内側につき底面との間に谷を造り外反する。
－234		高台付底部							内外面ヨコナデ調整されている。

J－8第4層

38	55	須恵器高台付壺			11.9	砂粒をほとんど含まない。	良好	明青灰色 (断面 暗赤色)	高台は底部端に付く。 外面にはタタキ目が内面には指ナデが施されている。
－235		底部							

I－8第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
38	－	土師器 底部			底径 4.0	微砂粒をわずかに含む。	良	赤橙色	内外面ヨコナデ調整されている。底部は静止糸切り。
－236									

J－10第5層

38	－	土師器小皿			底径 5.2	1㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄橙色	全面摩滅のため調整不明。底部は静止糸切り。
－237									

K－8

38	－	土師器 底部			底径 6.0	1㎜程度の砂粒を含む。	良	淡橙色	内外面ヨコナデ調整されている。底部はヘラ切り。
－238									

J－9第6層

38	－	土師器 底部			底径 5.0	0.5～1㎜程度の砂粒をわずかに含む。	良	淡橙白色	全面摩滅のため調整不明。
－239									

J－9第3層

38	－	土師器埦 底部			7.2	0.5㎜程度の砂粒を含む。	良	灰黄褐色	逆三角形の高台が貼り付けられている。全面摩滅のため調整不明。内面には黒っぽいものが付着している。
－240									

J－10第7層

38	－	土師器埦 底部			7.8	微砂粒を含む。	良	灰黄橙色	逆三角形の高台を持つ。高台は貼り付けて造られている。全面摩滅のため調整不明。
－241									

J－8第3層

38	－	土錘				0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良	暗黄橙色	小型の有溝土錘である。両端に溝を持ち，レモン型に巡る。
－242									

J－10第2層

38	－	土師質土器 羽釜 鍔				0.2～1㎜程度の砂粒を多く含む。	良	内面・鍔上 暗黄灰色 鍔下 黄黒褐色	端部が上方へ少し上がっている。内外面ナデ調整されている。
－243									

J－10攪乱土

38	－	瓦質土器 羽釜 鍔				微砂粒を含む。	良	外面 白黒色 内面 黒白色	内外面ヨコナデ調整されている。外面はミガキが施されており，光沢がある。
－244									

J－9第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
38	－	瓦質土器 羽釜				0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黄黒色 内面 淡黒色	口縁端部はややくぼんでいる。内外面ヨコナデ調整されている。外面には凸線がみられる。
－245		口縁							
38	－	土師質土器 土釜				0．5～3㎜程度の砂粒を多く含む。	良	明黄褐色	大きな欠損が目立ち途中から折れている。中心部は穿孔されている。摩滅しているが，指ナデの痕がわずかに遺存する。
－246		脚							

I－8第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
39	－	陶器			3.6	灰黄褐色 やや粗い		黒褐色	〔註4〕高台内は若干高台脇よりも深く削り込まれている。内外面とも黒褐色釉が施こされ，かん入が入る。その上を外面はヨコ方向，内面はタテ方向の灰白色の刷毛目が入る。畳付露胎。
－247		刷毛目碗							

I－9攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
39	－	陶胎染付碗				明紫灰色 少し粗い	やや不良	緑灰色 灰色から明緑灰色釉	厚手でつくられており，外面には文様が施されている。全面にかん入が入る 17C末～18C中
－248									

I－9第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
39	－	陶胎染付碗				明褐灰色 少し粗い		青灰色から暗緑灰色 オリーブ灰色釉	やや厚手でつくられており，口縁端部は丸くおさまる。口縁端部外面には2条の圏線が入り，外面には文様が描かれている。全面にかん入が入る。17C末～18C中
－249									

J－10第5層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
39	－	陶胎染付碗			4.6	灰白色 少し粗い		青灰色 明緑灰色釉	高台はややふくらみながらおり，高台裏は若干内彎しながらあがる。外面下方に1条，高台に1条，それぞれ圏線が入る。全面にかん入が入る。畳付露胎。
－250									

I－9攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
39	56	染付磁器碗	9.4	5.2	4.2	灰白色 精緻		オリーブ灰色から明青灰色 明緑灰色釉	やや厚手でつくられており，外面には二重網目文が描かれ，高台脇に1条，高台に2条の圏線が入る。畳付露胎。砂付着。18C
－251									

J－10攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
39	56	染付磁器碗	9.8	5.2	3.8	灰白色 精緻	焼成不良釉が溶けず発色が悪い。	オリーブ黒色 透明釉	高台脇から底部は厚手である。口縁端部は丸くおさまり，外面にはロクロ痕が残る。また外面には梅樹文が描かれ，高台には1条の圏線が入る。畳付のみ露胎。俗にいう「くらわんか手」。18C頃
－252									

J－9第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
39	－	染付磁器碗	10.7			灰白色 精緻		暗緑灰色から緑灰色 明緑灰色釉	やや薄手でつくられており，口縁端部は，丸くおさまる。外面には文様が描かれている。
－253									

J－10

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色 釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
39	56	染付磁器碗				灰白色 精緻		青灰色から オリーブ黒色 明緑灰色釉	やや薄手でつくられており，口縁端部は若干平坦ぎみに丸くおさまる。外面には細連弁文に蝶(?)文が入る。口縁端部内面に2条，見込に1条の圏線が入る。
－254									

I－9攪乱土

39	55	染付磁器碗	7.0			灰白色 精緻	釉が溶けず，発色が悪い。	灰オリーブ色 灰白色	やや薄手でつくられており，口縁端部は丸くおさまる。高台脇から体部へは，するどく屈曲する。外面にはよろけ縞文が入る。
－255									

J－9第2層

39	55	染付磁器碗	13.0			灰白色 精緻	釉が溶けず発色が悪い。	青灰色から 暗青灰色 透明釉	口縁端部は丸くおさめられている。内面には矢羽文が，外面にも文様が入る。口縁端部は，口銹が施されている。
－256									

J－10第3層

39	－	染付磁器碗				灰白色 精緻		青灰色 明緑灰色釉	やや厚手でつくられている。外面には文様が描かれており，内面から見込にかけては1条の圏線が入る。
－257									

J－8第2層

39	－	染付磁器碗			3.3	灰白色 精緻		明青色 明緑灰色釉	高台はほぼまっすぐにおり，若干高くつくられている。畳付砂付着。高台内は削り痕が残る。外面に文様が描かれ高台脇に1条，高台に，2条の圏線。見込中央にも文様が入る。
－258									

I－9第2層

39	56	青磁染付碗				灰白色 精緻		明青色 明緑灰色釉	やや薄手でつくられており，口縁端部はとがった感じになっていて先端で少し丸くおさまる。口縁端部内面には四ッ割花弁連続文。外面のみ明緑灰色釉が施された青磁染付　18C中～
－259									

I－9第3層

39	55	青磁染付碗			4.2	白色 精緻		明青色から 青黒色 外面は 明オリーブ灰色	高台下端は面取りされている。高台脇から屈曲し，朝顔形に開く。見込に2条の圏線が入り，見込中央にはコンニャク印判による五弁花文が入る。畳付露胎。外面，明オリーブ灰色の青磁染付。
－260									

J－10第5層

39	56	染付磁器 筒形碗(?)	8.0			灰白色 精緻		暗青色 透明釉	体部はほぼまっすぐに上がり，口縁部はやや平坦ぎみに外側が高く斜めにおさまる。口縁端部内面に四ッ割花弁連続文。外面に圏線が1条入り，コンニャク印判による。施文が見られる。18C前半～中葉頃
－261									

I－9攪乱土

39	－	陶胎染付 瓶(?)			4.5	暗褐色 粗い		明青色 明紫灰色釉	高台脇から体部にかけて屈曲し，高台は小さくつくられている。体部のみ施釉され，文様が描かれている。かん入が入る。高台脇はヘラ削り。畳付砂付着。　17C末～18C中
－262									

I－9第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
39	－	染付磁器小瓶			3.1	灰白色 精緻		オリーブ灰色 透明釉	高台はやや内傾し畳付に至る。畳付は若干とがったようになり，高台裏もやや内彎しながらあがる。外面に笹文が入る。高台下端及び畳付が無釉。
－263									

I－9攪乱土

39	－	染付磁器皿	10.3			灰白色 精緻		緑灰色 明緑灰色釉	口縁端部は丸くおさまり外面には1条の圏線が入る。内面には斜格子文が描かれている。
－264									

I－9第3層

39	－	染付磁器皿			6.4	白色 精緻		明青色から青色 透明釉	薄手でつくられており，高台は急激に内傾する。畳付平坦，露胎。見込には文様が入り，外面にも文様が入る。高台には2条の圏線が入る。内面は，墨はじき技法によって白ぬき染付となっている。
－265									
39	－	染付磁器皿				明緑灰色 精緻		明青色から暗青色 透明釉	高台は急激に内傾し，高台裏は若干内彎しながら上がる。外面に1条，高台脇に1条，高台に2条，高台内に1条の圏線が入る。
－266									

I－8第3層

39	－	染付磁器皿	8.8			灰白色 精緻		青灰色から暗青灰色 明赤灰色釉	やや厚手につくられており内面には文様が描かれている。また外面にも文様が入る。
－267									

J－8第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
39	－	灯明皿	8.6			精緻	良好	茶褐色	体部はやや内彎ぎみに外方に延びる。内面には上方につまみ上げた凸帯を持つ。
－268									

J－8第3層

39	－	灯明皿	8.2			精緻	良好	灰黒色	内面の立ち上がりは長く延びている。全面ヨコナデ調整されている。
－269									

J－10攪乱土

39	57	擂鉢	30.0			細砂粒を含む。	良	褐茶色	口縁端部外面には，2条の凹線がみられる。内面には鋭利な工具による条溝が施されている。
－270									

J－10第2層

39	57	擂鉢	27.0			細砂粒を含む。	良好	内面 茶色 外面 黒褐色	口縁端部外面下半を三角形に拡張し，2条の沈線を施す。条溝上端はヨコナデにより切られている。
－271									

I－8攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
39	57	擂鉢				0.5～1mm程度の砂粒を少量含む。	良好	褐茶色	口縁端部外面には2条の凹線を持つ。内面条溝は単位ごとに間隔を持ち，施されている。
－272									

I－9攪乱土

39	57	擂鉢底部			底径13.0	1～2mm程度の砂粒を少量含む。	良好	暗茶褐色	内面に施された条溝は，鋭利な工具で密につけられている。
－273									
39	57	擂鉢底部				細砂粒を含む。	良好	茶色	底部に高台が付く擂鉢である。内面の条溝は鋭利な工具で密に施されている。外面はヨコナデ調整されている。
－274									

石製品

挿図番号	図版番号	器種	石材	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察
グリッド名 出土土層名	遺物番号							
33	55	石鏃	サヌカイト	(23.30)	(20.25)	6.35	(2.69)	凹基無茎式 先部及び片翼を欠損している。
SD22	－191							
33	－	〃	〃	17.95	16.75	3.30	0.66	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状を呈しておりやや内彎する側辺を持つ。先端は鋭く尖る。くり込み率は0.28
SK06	－192							
38	55	〃	〃	(22.55)	(22.45)	4.50	(2.74)	凹基無茎式　片翼端部を欠損している。側辺は内彎する曲線である。先端角60°末端角20°とかなり屈曲している。
J-10 攪乱土	－213							
38	55	〃	〃	(28.38)	(16.50)	4.75	(1.76)	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状。片翼を欠損している。片側辺はほぼ直線，対側辺は内彎する曲線である。くり込み率0.35
J-10第1層	－214							
38	55	〃	〃	(29.05)	19.70	4.40	(2.39)	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状。先端は欠損している。側辺は真直ぐに延びる。平基だがややくぼむ。くり込み率0.06
J-9第2層	－215							
38	－	〃	〃	22.65	14.85	3.80	1.32	平基無茎式 側辺はゆるやかに内彎する。
J-9第3層	－216							
38	－	スクレイパー	〃	－	－	－	23.75	平面形はほぼ長方形を呈しており，折損面が2つある。一辺には粗い調整が加えられている。
K－8	－217							
38	55	太形蛤刃石斧	緑色片岩	－	－	－	65.58	先部以外は欠損している。全体によく磨かれている。使用痕がある。側面はややざらつくが主面はつるつるしている。側面と主面の境には，ゆるやかではあるが明瞭な稜を残す。
表採	－218							

III区

遺構出土遺物

竪穴住居

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
42	−	弥生土器壺	12.0			0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	黄茶色	頸部は垂直に立ち上がり，ほぼ直角に外方に屈曲する。口縁端部は上下に拡張され，外面には凹線が施されている。頸部外面に刷毛目調整(7本/cm)されている。その他はヨコナデ調整されている。
−275									
42	−	弥生土器甕	14.5			0.5〜3㎜程度の砂粒を含む。	良好	褐茶色	頸部はくの字形に外反する。 頸部内面には稜をもつ。 口縁端部は下方に少し拡張させている。 体部外面には刷毛調整が施されている。
−276									
42	−	〃	14.9			0.2〜3㎜程度の砂粒を含む。	良	黄茶色	頸部はくの字形に外反し，口縁端部はそのまま終らせている。 頸部内面にはやわらかい稜が認められる。 摩滅が著しく，調整は不明。
−277									
42	−	〃	18.0			0.2〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	黒茶黄色	頸部はくの字形に外反し，口縁端部はやや上方をつまみ上げている。 頸部内面には稜を持つ。 外面ヨコナデ，内面は摩滅が著しい。
−278									
42	−	〃	17.5			0.2〜4㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	褐黄色	頸部はくの字形に外反し，口縁もやや外反しながら細くおさめている。 頸部内面には稜を持つ。 摩滅が著しく，調整不明。
−279									
42	−	〃	14.0			0.2〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	濁白黄色	頸部はくの字形に外反し，口縁端部は外面に凹線状のくぼみを持ち，上端部はややつまみ上げている。 体部内面はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。
−280									
42	−	〃	13.7			0.2〜5㎜程度の砂粒を多量に含む。結晶片岩を多量に含む。	良好	褐茶色	頸部はくの字形に外反し，口縁は短くおさめる。 体部外面は板ナデ調整されている。 内面は摩滅のため不明。
−281									
42	−	弥生土器底部			底径 5.5	0.2〜3㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	淡茶褐色	底部は平底を呈し，体部は真っ直ぐ外方へ延びる。 摩滅のため調整は不明。
−282									
42	−	〃			底径 7.8	0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	内面 淡黒色 外面 淡赤褐色	底部は平底を呈し，体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。 体部外面は刷毛目調整されている。 内面は摩滅のため調整不明。
−283									
42	−	弥生土器鉢				0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗褐茶色	体部はやや内彎ぎみに立ち上がり口縁部で外方に屈曲する。 体部内面板ナデ，外面は刷毛目（6本／cm）調整されている。
−284									
42	−	弥生土器高坏				0.5〜3㎜程度の砂粒を多量に含む。	良好	淡黄茶色	脚部中央部で大きく広がる。 孔は四方に穿れている。 脚部外面は刷毛目（7本／cm）調整されている。 内面にはしぼり目が認められる。
−285									

SD31

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
44	81	須恵器 短頸壺蓋	10.6	3.7		密 1㎜前後の砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	天井部と体部の境に稜を持ち，口縁端部は外方につまみ出している。 天井部はヘラケズリ，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。 内面に赤色顔料が付着している。
−286									
44	81	須恵器 長頸壺			7.0	0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗赤色	底部は平底で体部は丸く作られ，頸部はやや外反しながら上方へ延びる。底部及び体部中程までヘラケズリされている。 体部肩部に2条の凹線が施されている。 頸部内面につなぎ目が認められる。
−287									
44	81	須恵器 甕(?)				微砂粒を多量に含む。	良好	灰黒色	底部・体部とも丸く作られている。 底部及び体部中程までヘラケズリされている。 体部肩部に2条の凹線が施されている。
−288									
44	81	須恵器 提瓶	8.3	22.9		緻密	良好	前面 灰白色 背面・内面 青黒色 (断面 暗赤色)	体部は丸く作られ，肩部に把手を持つ。口縁端部はやや拡張され上方に小さくつまみ上げられている。体部正面にはカキ目が施されている。頸部にヘラ記号がつけられている。
−289									

石室内出土遺物

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
50	—	−290	須恵器 無蓋高坏 〔羨道埋土〕	口径 11.3 器高 14.0 基部径 4.2 脚部高 10.0 脚底径 10.2	坏部は外面1/2に不明瞭な凹線1条を伴う明瞭な稜を有し，口縁に向かって直線的にのび，端部はわずかに外反する。 坏部下半には単位の小さい篦描波状文が施文されている。 脚部は緩やかに外方に広がり端部は下方につまみあげられている。 長方形2段のスカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を持つ。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土 やや密，砂粒を多く含む。 焼成 堅緻 色調 灰〜黒灰色 坏部口縁を1／7程度欠損。 II・C
50	67	−291	須恵器 無蓋高坏 〔羨道埋土〕	口径 11.1 基部径 3.8 脚部高 11.3 脚底径 9.3	坏部外面1／2に不明瞭な凹線1条を伴う明瞭な稜を有し，口縁に向かって直線的にのびる。底面平らで口縁と105°を成す。坏部下半には櫛描列点文が施されその下端に1条の凹線を有する。 脚部は緩やかに外方に広がり長方形2段のスカシを3方向に持ちスカシ間に3条の凹線を持つ。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 坏部内面中央に単方向の仕上げナデ。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 灰〜黒灰色 脚部を3/4程度欠損
50	—	−292	須恵器 高坏脚	脚底径 14.0	脚部は外方に広がり，端部で内方に屈曲する。 脚端部外側を小さくつまみ出している。	回転ナデ調整されている。	胎土 微砂粒を多く含む。 焼成 堅緻 色調 暗青灰色 脚部5/6程度欠損
50	—	−293	須恵器 長頸壺口縁	口径 8.0	口縁はやや内彎ぎみに端部で外方に短く屈曲する。	外面には櫛描きによってカキ目調整が施されている。	胎土 微砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 青灰色 口縁部2/3程度欠損
50	67	−294	須恵器 廻口縁	口径 16.4	口縁はかなり広がっており，頸部上半で屈曲しているため，2重口縁になっている。 口縁は細く端部は内方に小さくつまみ出している。	頸部及び口縁部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。	胎土 細砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 内面暗灰茶色 外面暗青灰色 口縁部2/3程度欠損
50	67	−295	須恵器 提瓶	口径 5.7 器高 23.5 体部最大径 19.1 体部最大厚 12.5	口縁部はわずかに外反し，端部でわずかに内反する。 端部は丸く比較的肥厚する。 体部は偏平な球形を呈するが断面形は非対象である。 口頸部との接合部にわずかに平坦な面があり，その下方に先端の丸い鉤状の肥手を有する。	口頸部はナデ調整。 体部は成形後外面全体にわたって同心円状カキ目が施されている。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 黒灰色〜灰色 外面は自然釉が顕著 口頸部1/3欠損
50	67	−296	須恵器 坏蓋 〔羨道部埋土〕	口径 14.2 器高 4.6	器壁が比較的厚く，口縁端部は丸く仕上げられている。 外面には明瞭な稜を有する。	外面上半は回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 内面中央に仕上げナデ。 外面に「十」字のヘラ記号。	胎土 密，砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 青灰色

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
遺物番号						
50	67	須恵器壺	口径 9.0	頸部はほぼ真直ぐ立ち上がる。口縁端部は折り曲げられ，丸くおさめている。	頸部外面にはカキ目が施されている。その他はヨコナデ調整されている。	胎土 微砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 暗青灰色
−297						
50	−	須恵器 広口長頸壺	口径 11.0	頸部上半部でやや内彎ぎみに立ちあがり，口縁端部外側を上方に小さくつまみ上げている。	全面ヨコナデ調整されている。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 暗青灰色 口縁部2/3程度欠損
−298						
50	−	須恵器 脚付長頸壺 脚	脚底径 15.2	裾は広く，脚端部でやや内方に屈曲する。透しは2段3方透しである。焼き歪みがある。上下透し間には2状の凹線を施す。	脚部上半にカキ目を施す。その他はヨコナデ調整されている。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 外面黄灰色 内面暗青灰色
−299						
50	−	〃	脚底径 14.4	裾は広く，脚端部やや上方で内方に屈曲する。上下透し間および下方に2状の凹線を施す。透しは2段3方透しである。底部下方に面を持つ。	脚部上半にカキ目を施す。その他は，ヨコナデ調整されている。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 外面 黄灰色 内面 青灰色
−300						
50	68	〃	脚底径 12.2	299・300に比べると裾の広がりは少ない。透しは，1段4方透しである。透し上下に2〜3状の凹線を施す。脚端部やや上方で内方に屈曲する。底部下方に面を持つ。	全体にヨコナデ調整されている。	胎土 微砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 黒灰色
−301						
51	68	須恵器 器台脚	脚底径 31.2	裾は下方で外反しながら広がる。脚端部は，外側をつまみ出し，内方に屈曲させる。透しは4段6方透しである。	脚を1〜2状の凹線により5区に分け最下段以外に透しを持ち，上から3段をヘラ磨き，4段目に波状文を施している。	胎土 細砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 灰色
−302						

墳丘内左側土器群

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
遺物番号						
63	77	須恵器	口径 14.5 器高 6.0	天井部に中央の凹んだつまみを有し口縁部に向かって内彎する。端部内面には内傾する段を伴い，外面2／5に稜があり，その下側に凹線を有する。	つまみは貼り付け外面上半は回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面中央に仕上げナデ。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 暗灰～青灰色 (内面 青灰色) 完存 Ⅰ－a
－389		高坏蓋				
390	77	須恵器	口径 14.3 器高 5.9	天井部に中央の凹んだつまみを有し，口縁部に向かって内彎する。端部内面には内傾する段を伴い，外面2／5に稜があり，その下側に凹線を有する。	つまみは貼り付け。 外面上半は回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面中央に同心円叩き目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 青灰～暗灰色 完存 Ⅰ－a
－390		高坏蓋				
63	77	須恵器	口径 14.2 器高 5.6	天井部に中央の凹んだつまみを有し，口縁部に向かって内彎する。端部内面には不明瞭な段を伴い，外面1／2に稜があり，その下側に凹線を有する。	つまみは貼り付け。 外面上半は回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面中央に仕上げナデ。	胎土 密，砂粒含む 焼成 堅緻 色調 暗灰色 (内面 青灰色) 完存 Ⅰ－a
－391		高坏蓋				
63	77	須恵器	口径 15.0 器高 5.5	天井部に中央の凹んだつまみを有し，口縁部に向かって内彎する。端部内面には不明瞭な段を伴い，外面1／2に稜があり，その下側に凹線を有する。	つまみは貼り付け。 外面上半は回転ヘラケズリ調整の後回転カキ目調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面中央に仕上げナデ。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 黒灰色 (内面 青灰色) 完存 Ⅰ－a
－392		高坏蓋				
63	－	須恵器	口径 15.5 器高 5.1	天井部に中央の凹んだつまみを有し，口縁部と天井部はある程度の角度を成し，内彎する。端部は四角く仕上げられており，内側に内傾する段を伴う。	つまみは貼り付け。 外面上半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面に１次的に同心円叩き目。	胎土 密，砂粒含む 焼成 堅緻 色調 淡青灰～灰色 口縁部を1/4欠損 Ⅰ－b
－393		高坏蓋				
64	78	須恵器	口径 15.3 器高 5.2	天井部に頭の平坦なボタン状のつまみを有し，口縁部に向かって内彎する。端部はわずかに外方につまみ上げあげられ，内面に内傾する段を伴う。	つまみは貼り付け。 外面上半は回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面に１次的に同心円叩き目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 青灰～灰色 焼成時の歪み有り 完存 Ⅱ－b
－394		高坏蓋				
64	－	須恵器	口径 15.3 器高 5.4	天井部にボタン状のつまみを有し，口縁部に向かって内彎する。端部はわずかに外方につまみあげられ，内面に内傾する段を伴う。	つまみは貼り付け。 外面上半は回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 灰～青灰色 口縁部中央をわずかに欠損 Ⅱ－a
－395		高坏蓋				

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
遺物番号						
63	77	須恵器	口径 12.5 器高 11.8 基部径 4.8 脚部高 7.0 脚底径 12.8	坏部は，緩やかに内彎しながら上方にのび外面下半に稜を伴う。 立ち上がりは内傾し，端部が直立気味にのび端部内面に段を伴う。 脚部は2/5で2段に屈曲し，端部は外方につまみあげられている。 スカシは伴わず，屈曲の変換点に各々1条の凹線がみられる。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整後，回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 青灰～黒灰色 脚部をわずかに欠損 I－a
－396		有蓋高坏				
63	77	須恵器	口径 12.4 器高 12.0 基部径 4.3 脚部高 7.3 脚底径 12.3	坏部は，緩やかに内彎しながら上方にのび外面に稜を伴う。 立ち上がりは内傾し端部が直立気味にのび端部内面に段を伴う。 脚部は2／5で2段に屈曲し，端部は外方につまみあげられている。 スカシは伴わず，屈曲の変換点に凹線を有する。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 坏部，脚部に接合痕。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 青灰～黒灰色 完存 I－a
－397		有蓋高坏				
63	77	須恵器	口径 12.7 器高 11.8 基部径 4.6 脚部高 7.1 脚底径 11.8	坏部は，緩やかに内彎しながら上方にのび外面に不明瞭な稜を伴う。 立ち上がりは直線的に内傾し，丸く仕上げられた端部は外反する。 脚部は2/5で2段に屈曲し，端部は外方につまみあげられている。 スカシは伴わず，屈曲の変換点にごく浅い凹線を有する。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 坏部内面中央に仕上げナデ。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 淡紫灰～青灰色 (内面 灰色) 完存 I－a
－398		有蓋高坏				
63	78	須恵器	口径 13.4 器高 14.4 基部径 4.6 脚部高 10.0 脚底径 12.4	坏部は緩やかに内彎しながら上方にのび外面に稜を伴う。 立ち上がりは，内彎しながら上方にのびる。 脚部は緩やかに外方に広がり，端部は丸く仕上げられ，下方につまみあげられている。 長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，上段に櫛描文が施され，スカシ間に2条の凹線を伴う。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後櫛状工具による回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 坏部内面中央に同心円叩き目。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 灰～青灰色 完存 I－c
－399		有蓋高坏				
63	78	須恵器	口径 14.0 器高 14.6 基部径 5.4 脚部高 10.3 脚底径 11.8	坏部はやや直線的に上方にのび，1／3に稜を伴う。 立ち上がりは直線的に内傾している。 脚部は緩やかに外方に広がり，端部は丸く仕上げられている。 下端に1条の凹線を伴う。 長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の不明瞭な凹線を伴う。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 灰～青灰色 ほぼ完存 I－c
－400		有蓋高坏				
64	78	須恵器	口径 13.6 器高 16.6 基部径 4.4 脚部高 12.3 脚底径 13.9	坏部は緩やかに内彎しながら上方にのび外面に稜を伴う。 立ち上がりは内傾し，端部が直立気味にのび端部内面に不明瞭な段を伴う。 脚部は緩やかに外方に広がり，下端付近で更に外方に広がる。 長方形の2段のスカシを3方向に有し，スカシ間に2条の不明瞭な凹線を伴う。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後カキ目調整。 坏部内面中央に仕上げナデ。 他は回転ナデ調整。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 灰～暗灰色 焼成時の歪みあり ほぼ完存 I－b
－401		有蓋高坏				
64	78	須恵器	口径 12.7 器高 16.0 基部径 4.5 脚部高 11.9 脚底径 14.1	坏部は緩やかに内彎しながら上方にのび，外面に稜を伴う。 立ち上がりは直線的に内傾し，端部は丸く仕上げられている。 脚部は緩やかに外方に広がり下端付近で更に外方に広がる。 長方形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に不明瞭な2条の凹線を伴う。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転カキ目調整。 他は回転ナデ調整。 坏部内面中央に仕上げナデ。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 青灰～灰色 完存 I－b
－402		有蓋高坏				

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
遺物番号						
64	77	須恵器	口径 13.0 器高 15.8 基部径 4.7 脚部高 11.8 脚底径 15.3	坏部は，緩やかに内彎しながら上方にのびるが，底面が比較的平坦である。 立ち上がりは直線的に内傾し，端部は丸く仕上げられている。 脚部は，緩やかに外方に広がり，下端付近で更に外方に広がる。長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ちスカシ間に2条の凹線を伴う。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 坏部内面中央に仕上げナデ。 脚部内面にしぼり目。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 淡灰色 完存 I－b
－403		有蓋高坏				
64	78	須恵器	口径 10.3 器高 15.5 基部径 3.1 脚部高 11.3 脚底径 9.4	坏部は口径に比して深く，外面1／2に凹線1条を伴う稜を有し，口縁に向かって直線的にのび端部はわずかに外反する。外面下半には櫛描文が施されており中央が磨り消され，下側に斜行する櫛描列点文が重ねて施されている。脚部は細かく直線的にのび下方でラッパ状に広がり，端部は外上方につまみあげられている。長方形2段のスカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を持つ。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土 やや密，砂粒を多く含む 焼成 堅緻 色調 灰～灰褐色 わずかに成形時の歪みあり 完存 II－b
－404		無蓋高坏				
64	78	須恵器	口径 9.3 器高 26.3 口頸部最大径 10.1 体部最大径 16.5	口頸部は緩やかに外反し，3/4で直立気味になり，口唇部は内傾する。端部は丸い。体部は口頸部と110°をなし直線的に外方に広がり，2/3に最大径を有し，内彎気味に下内方にのび，底部で内彎する。脚部は下半を欠損しているが緩やかに外方に広がり，2段の長方形スカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を有する。体部外面には上下各2条の凹線を有し，その間に斜行する櫛描列点文を有する。	体部下半，脚部は貼り付け。 体部外面，1/5回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 脚部内面にしぼり目有り。	胎土 密，砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 灰色～灰紫色 口縁部1/4，脚部1/2を欠損
－405		台付長頸壺				

墳丘内右側土器群

65	80	須恵器	口径 13.6 器高 14.9 基部径 4.3 脚部高 10.3 脚底径 11.1	坏部は外面1／2に稜を有し，口縁に向かって直線的にのび，端部はわずかに外反する。脚部は緩やかに外方に広がり下端で段を伴い，内彎しながら更に外方に広がる。長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に不明瞭な2条の凹線を有する。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。 他は回転ナデ調整。 （坏部下半，脚部は櫛描文施文後2次的に脚部内面にしぼり目有り，坏部外面下半，脚部外面に櫛描文	胎土 密 焼成 堅緻 色調 灰～暗灰色 焼成時の歪みあり ほぼ完存 II－a
－406		無蓋高坏				
65	79	須恵器	口径 14.0 器高 14.5 基部径 4.1 脚部高 10.3 脚底径 10.7	坏部は外面1／2に凹線1条を伴う稜を有し，口縁に向かって直線的にのび端部は外反する。脚部は緩やかに外方に広がり下端で段を伴い内彎しながら更に外方に広がる。長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を有する。底部は面を有するがやや丸味をおびる。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。 他は回転ナデ調整。 坏部下半脚部外面にクシ描文。 （坏部下半，脚部は櫛描文施文後2次的）に脚部内面にしぼり目。	胎土 密，砂粒含む 焼成 堅緻 色調 黒灰～灰色 焼成時の歪みあり ほぼ完存 II－a
－407		無蓋高坏				
65	79	須恵器	口径 14.2 器高 15.1 基部径 4.0 脚部高 10.8 脚底径 11.5	坏部は外面1／2に凹線1条を伴う稜を有し口縁に向かって直立気味にのび端部は外反する。脚部は緩やかに外方に広がり外面下端に段を有しわずかに内彎しながら更に外方に広がる。長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を有する。底部は面を持ち内面に段がみられる。	坏部下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。 他は回転ナデ調整。 （坏部下半，脚部は櫛描文施文後2次的に）	胎土 密，砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 黒灰～青灰色 焼成時の歪み有り ほぼ完存 II－a
－408		無蓋高坏				

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
遺物番号						
65	79	須恵器	口径 15.2 器高 13.6 基部径 3.8 脚部高 10.0 脚底径 10.7	坏部は外面1／2に稜を有し，口縁に向かって直線的にのび端部は外反する。 脚部は緩やかに外方に広がるが，下端の段はやや不明瞭である。 長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を有する。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。 坏部下半，脚部外面櫛描文。 他は回転ナデ調整。 （外面は櫛描文施文後2次的に）	胎土 密，砂粒を含む 焼成 堅緻 色調 灰褐～黒灰色 焼成時の歪みあり 脚端部は 1／5 程度欠損 II－a
－409		無蓋高坏				
65	79	須恵器	口径 14.3 器高 16.2 基部径 4.6 脚部高 11.9 脚底径 11.9	坏部は外面1／3に凹線1条を伴う稜を有し，口縁に向かって直立気味にのび端部は外反する。脚部は緩やかに外方に広がり，外面下端に段を有し，わずかに内彎しながら更に外方に広がる。長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に2条の凹線を有する。底部は面を有するが，やや丸味をおびる。坏部下半，脚部にはクシ描文がみられる。	坏部下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。 他は回転ナデ調整。 （坏部下半，脚部は櫛描文施文後2次的に）	胎土 密，砂粒をやや含む 焼成 堅緻 色調 黒灰～灰色 焼成時の歪みあり ほぼ完存 II－a
－410		無蓋高坏				
65	79	須恵器	口径 12.3 器高 14.8 基部径 4.6 脚部高 10.2 脚底径 11.7	坏部は外面1／2に凹部を伴う稜を有し，口縁に向かって直線的にのび，端部はわずかに外反する。 脚部は緩やかに外方に広がり下端近くで段を伴いわずかに内彎する。 長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ちスカシ間に不明瞭な2条の凹線を有する。 坏部外面下半，脚部外面に櫛描文。	坏部外面下半は，回転ヘラケズリ調整の後，回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。他は回転ナデ調整。 （坏部下半，脚部は櫛描文施文後2次的に） 脚部内面にしぼり目有り。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 黒灰～灰色 成形時，焼成時の歪みあり ほぼ完存 II－a
－411		無蓋高坏				
65	79	須恵器	口径 14.5 器高 14.9 基部径 4.4 脚部高 11.0 脚底径 11.8	坏部は外面2／5に稜を有するが，上側の凹線は不明瞭であり，口縁に向かって直線的に外方にのび，端部は丸い。 脚部は緩やかに外方に広がり，下端で段を伴いわずかに内彎しながら更に外方に広がる。長方形と三角形の2段スカシを3方向に持ち，スカシ間に不明瞭な2条の凹線を有する。	坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 坏部内面中央に複数方向の仕上げナデ。 坏部外面下半，脚部外面に櫛描文。 他は回転ナデ調整。 （坏部下半，脚部は櫛描文施文後2次的に）	胎土 密，砂粒含む 焼成 堅緻 色調 灰～暗灰色 焼成時の歪みあり ほぼ完存 II－a
－412		無蓋高坏				
65	80	須恵器	口径 7.2 器高 8.0 最大径 13.3	口頸部は立ち上がりがやや内傾し，端部は丸い。 体部は口頸部と120°をなし緩やかに内彎しながら2／3に最大径を有し，下内方にのび底部はわずかに丸みを帯ている。	外面下半回転ヘラケズリ調整の後回転ナデ調整。 内面下半仕上げナデ調整。 底部ヘラケズリ。 他は回転ナデ調整。	胎土 密 焼成 堅緻 色調 外 黒灰色 内 青灰色 外面は自然釉が顕著，肩部に坏蓋口縁端部が癒着
－413		短頸壺				

周溝内出土遺物

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
66	82	−414	弥生土器 脚付鉢		体部は，やや内彎しながら外方に延びる形態をとる。	器面は著しい摩滅のため調整は不明である。	胎　土 0.2〜2㎜程度の砂粒を含む 焼　成 良 色　調 黄茶色 体部を残すのみで脚部は欠損している。
66	82	−415	〃	脚底径　8.3	脚部は短く，外方に広がる。	器面は，著しい摩滅のため調整は不明である。	胎　土 0.2〜3㎜程度の砂粒を含む 焼　成 良 色　調 淡黄茶色 体部は欠損している
66	82	−416	弥生土器高坏	基部径　2.4 脚部高　5.2 脚底径　9.9	脚部は短く，大きく広がる。 基部は細くしまっている。	器面は，著しい摩滅のため調整は不明である。	胎　土 0.2〜3㎜程度の砂粒を多量に含む 焼　成 良 色　調 茶色 坏部は欠損している
66	−	−417	須恵器坏	口　径 12.9	受け部も立ち上がりもかなり萎小化している。 立ち上がりは外反しながらもほぼ垂直に立ち上がる。	全面ヨコナデ調整されている。	胎　土 密 焼　成 堅緻 色　調 白灰色 全体の11/12を欠損している
66	−	−418	須恵器 無蓋高坏	口　径 14.0	底部は丸く作られ，体部はやや外反ぎみに立ち上がる。	底部と体部の境に稜及び凹線を持つ。 全体にヨコナデ調整されている。 底部にはカキ目が施されている。	胎　土 細砂粒を含む 焼　成 堅緻 色　調 黒灰色 全体の2/3を欠損している
66	−	−419	須恵器壺	口　径 15.1	頸部は外反ぎみに立ち上がり，口縁は外方に拡張している。 口縁外面には２条の凹線が施されている。 口縁内面にはヨコナデによる凹みがある。	全体ヨコナデ調整されている。	胎　土 微砂粒を多量に含む 焼　成 堅緻 色　調 暗灰色 口縁全体の9/10を欠損している
66	81	−420	須恵器甕	口　径 20.6	頸部は外反ぎみに立ち上がり，口縁は上方へつまみ上げている。	口頸部はヨコナデ調整されている。 体部外面は，格子状の叩きを残し，内面は同心円状の叩きを残す。	胎　土 微砂粒を少量含む 焼　成 堅緻 色　調 暗青灰色 口縁全体の3/4を欠損している。

包含層出土遺物

R－2第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
69	－	弥生土器壺				0.2～3㎜程度の砂粒を多量に含む。	良好	暗褐茶色	頸部は外反しており，口縁部は垂直に立ち上がる二重口縁である。外面には，ヘラミガキが密に施されている。
－435									

S－2第3層

69	85	弥生土器壺	24.0			0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄茶色	口縁部は外側へ垂直に延び，上方に立ち上がる二重口縁である。立ち上がり外面には4本の凹線が施されており，リボン型の張り付け突帯が数ヶ所につけられている。
－436									

R－2第3層

69	85	弥生土器壺	29.8			1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡黄茶色	口縁部は上下に拡張されている。拡張された外面には3本の凹線が施されている。頸部は広く水平に造られている。
－437									

R－2攪乱土

69	－	弥生土器壺	24.0			0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	暗茶色	口縁部は上下に拡張されている。拡張された外面には4本の凹線が施されている。頸部は広く水平に造られている。
－438									

S－2第3層

69	－	弥生土器壺	20.0			細砂粒を含む。	良好	淡茶色	口縁端部は上下に少し拡張されている。拡張された外面には2条の凹線が施されている。頸部は広く水平に造られている。全面ヨコナデ調整されている。
－439									
69	85	弥生土器壺	18.0			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡茶色	口縁端部は上方に小さく下方にかなり拡張している。拡張された外面には，鋸歯文が連続してかかれている。頸部は広く水平に造られている。全面ヨコナデ調整されている。
－440									
69	－	弥生土器壺	17.8			0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡黒茶色	口縁端部は上下に小さく拡張されている。頸部は広く水平に造られている。全面ヨコナデ調整されている。
－441									

Q－4第3層

69	－	弥生土器壺	27.0			細砂粒を含む。	良好	淡茶色	口縁端部は上下に小さく拡張されている。頸部は広く水平に造られている。
－442									

R－2第3層

69	85	弥生土器壺	13.0			0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	濁茶黄色	頸部から口縁にかけては，外反して水平になる。口縁端部は上下に小さく拡張され，外面には凹線状のヨコナデの上に3個一単位の竹管文が6ヶ所に施されている。
－443									

P－3第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
69	－	弥生土器壺	15.9			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄茶色	口縁部は上下に小さく拡張されており，外面には凹線状のヨコナデがみられる。頸部から口縁にかけて外反し，水平になる。
－444									

S－2攪乱土

69	－	弥生土器壺	12.0			0.5～3㎜程度の砂粒を少量含む。	良	暗黄色	口縁端部で下方に小さく曲る頸部は広く水平に造られている。かなり薄手に造られている。
－445									

S－3第3層

69	－	弥生土器壺	16.0			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良	淡茶黄色	「く」の字形に外反した頸部を持ち，外面を少しふくらませている頸部からほぼ水平に口縁端部に延びる。口縁端部は下方につまみ出している。ヨコナデ調整されている。
－446									

R－2第2層

69	－	弥生土器壺	14.0			2～3㎜程度の砂粒を含む。	良	暗茶橙色	「く」の字形に外反した頸部を持ち，ほぼ水平に口縁端部に延びる。内外面ヨコナデ調整されており，内面頸部にはハケ目が施されている。
－447									

S－2攪乱土

69	－	弥生土器壺	16.0			2㎜程度の砂粒を含む。	良	黄茶色	「く」の字形に外反した頸部を持ち，ほぼ水平に口縁端部に延びる。内外面ヨコナデ調整されており，口縁部には，凹線が2条施されている。
－448									

S－3攪乱土

69	－	弥生土器壺	18.2			2～5㎜程度の砂粒を含む。	不良	灰橙色	頸部は外反気味に大きく広がり，口縁端部外面には凹線気味のヨコナデを施す。外面はナデ調整されており，わずかにハケ目の痕が残る。内面は摩滅のため調整不明。
－449									

R－4第2層

69	－	弥生土器壺	15.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰黄褐色	頸部は外反気味に大きく広がり，口縁端部外面には凹線気味のヨコナデを施す。内外面ヨコナデ調整されている。
－450									

S－2攪乱層

69	－	弥生土器壺	14.0			1㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰橙色	頸部は外反気味に大きく広がり，口縁端部外面には凹線気味のヨコナデを施す。内外面ヨコナデ調整されている。
－451									

P－3第2層

69	－	弥生土器壺	16.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	褐茶色	頸部は外反気味に大きく広がる。内外面ヨコナデ調整されており，内面には，指ナデの痕が残る。口縁部には凹線が2条施されている。
－452									

Q－2第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
69	－	弥生土器壺	24.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黄灰黒色 内面 灰橙黄色	頸部は外反気味に大きく広がり，口縁端部内面には凹線気味のヨコナデを施し，内外面ヨコナデ調整されている。体部外面はハケ目を施したのち，ナデられている。
－453									

S－2攪乱土

70	－	弥生土器甕	16.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	黄灰白色 (断面中心，黒色)	頸部は「く」の字形に屈曲し，口縁端部を上下に拡張させている。口縁部に2条の凹線がわずかに残る。内外面，ヨコナデ調整されている。
－454									

R－3

70	－	弥生土器甕				1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 白橙色 内面 黄灰色	頸部は「く」の字形に屈曲し，口縁端部を上下に拡張させている。口縁部には凹線が1条施され，凹線部に暗赤色の化粧土が残る。外面はヨコナデ調整されている。内面は摩滅のため調整不明。
－455									

Q－4第2層

70	－	弥生土器甕				1㎜程度の砂粒を含む。	良	白橙色	頸部は「く」の字形に屈曲し，口縁端部を上下に拡張させている。口縁部には，凹線が2条施されており，その一部は白赤色の化粧土が残る。
－456									

S－2

70	－	弥生土器甕	16.0			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	灰橙色	口縁端部上端を上方につまみあげる。外面はナデ調整されており，体部に10条／cmのハケ目が施されている。内面には8～9条／cmのハケ目が施されており，くびれ部より下はヘラケズリされている。
－457									

S－2攪乱土

70	－	弥生土器甕	17.0			1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	橙灰色	口縁端部上端を上方につまみあげ，頸部内面に明瞭な陵を持つ。内外面ヨコナデ調整されている。
－458									

Q－4第2層

70	－	弥生土器甕	16.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黒黄色 内面 黄灰色	体部外面は，ハケ目調整の後，タタキが施されている。また頸部内外面に粘土のつなぎ目が残る。内面はナデ調整されている。また口縁部内面には，ハケ目が施されている。
－459									

S－2第2層

70	－	弥生土器甕	16.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黒黄色 内面 黄灰色	口縁端部上端を上方につまみあげる。口縁部内外面はヨコナデ調整されており，体部内外面は，ナデ調整されている。内面くびれ部から体部には指頭痕が見られる。
－460									

R－3第2層

70	－	弥生土器甕	13.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	不良	外面 淡赤色 内面 暗茶色	全体的に摩滅しているが，口頸部内外面にナデ調整がみられる。
－461									

R－3

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
70	－	弥生土器甕	14.0			1㎜程度の細かい砂粒を含む。	不良	暗橙黄色	全体に摩滅しているが，口縁内面にヨコナデが施されている。
－462									

Q－4第2層

70	－	弥生土器甕	20.0			0.5～3㎜の大きい砂粒を含む。	良好	外面 黄黒灰色 内面 暗灰黄色	口縁内外面は，ナデ調整されている。外面くびれ部より下は，タタキの上からナデ調整されている。体部内面は，ヘラケズリされている。
－463									

S－2攪乱土

70	－	弥生土器甕	20.0			1～3㎜の大きい砂粒を含む。	良	暗黄灰色	内外面ヨコナデ調整されている。口縁部内面にハケ目が施されている。
－464									
70	－	弥生土器甕	20.0			0.5㎜程度の砂粒を含む。	良	灰橙色	内外面ヨコナデ調整されている。口縁部下に指頭痕がみられる。
－465									

R－2攪乱土

70	－	弥生土器甕				3～4コ石英，長石粒を含む。	良	淡灰橙色 (外面胴部すす色)	外面5条／1.2cmの斜め方向のハケ目が施されている。くびれ部はヨコナデ調整されている。内面はナデ調整されており，くびれ部には，指頭痕がみられる。
－466									
70	－	弥生土器甕	12.0			2㎜程度の砂粒を含む。	不良	暗茶黄色	内外面摩滅のため調整不明。
－467									

P－4第2層

70	－	弥生土器 小型丸底壺	12.0			0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黄褐色	頸部を短く屈曲する。 内外面ヨコナデ調整されている。
－468									

S－2攪乱土

70	85	弥生土器 小型丸底壺	7.6			1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 赤黒色 内面 灰黄色	口縁部1/4欠損している。頸部は短く屈曲する。内外面ヘラケズリの後，指ナデ調整されている。外面には，黒斑がみられる。
－469									

P－4第2層

70	－	弥生土器鉢	14.0			0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	茶色	体部は，やや内彎気味に造られ，頸部は「く」の字に屈曲し，口縁端部に至る。内外面摩滅しているが，ハケ目の痕が見える。
－470									

S－2攪乱土

70	－	弥生土器鉢	24.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	灰黄橙色	体部はやや内彎気味に造られ，頸部は「く」の字に屈曲し，口縁端部に至る。外面は摩滅のために調整不明，内面はナデ調整されており，体部に指頭痕が残る。
－471									

R－3

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
70	－	弥生土器鉢				1㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 灰黒色 内面 茶灰色	体部はやや内彎気味に造られ，頸部は「く」の字に屈曲し，口縁端部に至る。内外面へラミガキされている。口縁部はナデ調整されている。
－472									

P－2攪乱土

70	－	弥生土器坏	13.0			1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 灰黒色 内面 暗黄橙色	内彎気味に立ち上がり口縁端部に至る。外面はナデ調整されている。黒斑がみられる。内面は摩滅のため調整不明。
－473									

R－3第2層

71	－	弥生土器底部			3.6	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明灰黄色 内面 暗灰色	丸底気味の平底を持つ摩滅のために調整不明。
－474									
71	－	弥生土器底部			2.2	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 白黄色 内面 灰黒色	やや小さめの平底を呈する。外面摩滅のため調整不明。内面は6条／1.3cmのハケ目が施されている。
－475									
71	84	弥生土器底部			3.0	1～2㎜程度の石英・長石粒を含む。	良	外面 灰橙色 内面 暗灰橙色	やや小さめの平底を呈する。外面タタキの上にナデ調整。内面板ナデ調整している。
－476									

S－2攪乱土

71	－	弥生土器底部			4.0	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰橙色	やや小さめの平底を呈する。 外面板ナデ調整後ナデ調整。 内面指頭痕がみられる。底部に見られるのは，もみの圧痕かも！
－477									

S－3第2層

71	－	弥生土器底部			2.6	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	暗橙色	やや，小さめの平底を呈する 内外面，ナデ調整されている。
－478									
71	－	弥生土器底部			3.4	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 灰黄色 内面 暗橙色	やや小さめの平底を呈する。 外面はハケ目の上からナデられている。内面は指ナデ指頭痕が残る。
－479									

R－2

71	－	弥生土器底部			3.4	1～2㎜の程度の砂粒を含む。	良	外面 白黄色 内面 灰黒色	やや小さめの平底を呈する。 外面はナデ調整されている。 内面は摩滅のため調整不明。
－480									

R－3第2層

71	84	弥生土器底部			4.5	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰赤色	外面は叩きの後7条/1.1cmのハケ目が施されている。 内面はナデ調整されている。
－481									
71	－	弥生土器底部			4.0	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	暗黄黒色	内外面，摩滅のため調整不明。 底部にハケ目の痕がみえる。
－482									

Q－4第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
71	84	弥生土器			4.3	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黄褐色 内面 灰黄色	外面にはっきりとしたハケ目の痕がみられる。内面には指ナデ調整されている。
－483		底部							

R－3第2層

71	－	弥生土器			5.0	1～4㎜程度の砂粒を含む。	良	暗褐色	外面は7条／cmのハケ目がみられる。内面はナデ調整されている。
－484		底部							

Q－4第2層

71	－	弥生土器			6.8	3～7㎜程度の粗い砂粒を含む。	良	灰茶色 (底部 黒色)	内外面，摩滅のため調整不明だが，内面見込み部に指頭痕がみられる。
－485		底部							

R－3

71	－	弥生土器			7.0	1～4㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黒色 内面 淡黄茶色	外面は6条／cmのハケ目の上からナデ調整，内面は摩滅のため調整不明。
－486		底部							

Q－3第2層

71	－	弥生土器			4.4	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 淡暗赤色 内面 黄灰色	外面は11～12条／cmのハケ目が施されている。底部にもハケ目がみとめられる。内面は摩滅のため不明である。
－487		底部							

排土中

71	－	弥生土器			3.8	0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良	黄褐色	内外面ナデ調整されている。
－488		底部							

R－3

71	－	弥生土器			4.0	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	暗茶色	外面はナデ調整されている。内面は摩滅のため調整不明。
－489		底部							

S－2第2層

71	－	弥生土器			5.8	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	黄茶色	摩滅のために調整不明。
－490		底部							

S－2攪乱土

71	－	弥生土器			4.5	1～3(最大は5)㎜の砂粒を含む。	良	暗茶色	内外面，板ナデ調整されている。
－491		底部							

Q－2第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
71	－	弥生土器			5.2	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗灰黄色	内外面ナデ調整されている。外面にはハケ目が施されている。
－492		底部						内面 暗灰色	

R－2

71	－	弥生土器			4.6	1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 黒茶黄色	外面ナデ調整されている。内面摩滅のため調整不明。
－493		底部						内面 灰黒色	

S－2攪乱土

71	－	弥生土器			5.5	3～5㎜程度の石英粒を含む。	良	内面 灰黄色	摩滅のために調整は不明だが，外面にハケ目の痕が残る。
－494		底部							

Q－4第2層

71	84	弥生土器			7.5	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗灰黄褐色	外面には，ハケ目が施されており，内面は，指ナデ調整されている。内面にモミの圧痕がみられる。
－495		底部						内面 灰黄褐色	

S－2第4層

71	84	弥生土器			6.4	1～3㎜(最大は5㎜)程度の砂粒を含む。	良	外面 橙赤色	全体に摩滅しているが，外面には，ハケ目・指頭痕がかすかにみとめられる。
－496		底部						内面 灰黄色	

S－2攪乱土

71	－	弥生土器			6.0	0.5㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗橙色	外面にはハケ目が施されており，内面はナデ調整されている。また，内面見込み部には，指頭痕がみられる。
－497		底部						内面 黄灰色	
71	－	弥生土器			9.0	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗緑黄色	全体に摩滅しているが，外面にはタタキがみられ，内面には指頭痕がみられる。
－498		底部						内面 明橙色	
71	－	弥生土器			9.0	0.5㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 暗赤色	外面には13条／1.4cmのハケ目が施されている。内面は指ナデ調整されている。
－499		底部						内面 赤黒色	

S－3攪乱土

71	－	弥生土器			9.5	1～4㎜程度の長石(まれに石英)粒を含む。	良	外面 灰黄色	外面はナデ調整されている。他は摩滅のため調整不明。
－500		底部						内面 橙色	

R－3第2層

71	－	弥生土器			10.0	1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	暗灰黄色	内外面ナデ調整されている。
－501		底部							

Q－4第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
72	85	弥生土器高坏				0.5～1㎜程度砂粒を含む。	良好	淡黄茶色	外面はナデ調整されている。内面にはしぼり目がみられる。
－502		脚							

Q－3第2層

72	85	弥生土器				0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	ナデ調整されている。穿孔の数は4つであろう。
－503		脚							

R－2第2層

72	－	弥生土器				0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	黄灰色	内外面摩滅して調整不明。内面にしぼり目がみられる。穿孔が4方にある。
－504		脚							

R－3

72	－	弥生土器				0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	茶黄色	外面にはタテ方向のハケ目，内面にはヨコ方向のハケ目がみられる。内面にしぼり目がみられ，坏部内面見込み部にはヘラミガキが施されている。穿孔が4方にある。
－505		脚							

S－3第2層

72	－	弥生土器				1～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	茶色	ナデ調整されている。内面にしぼり目がみられる。
－506		脚							

R－3第2層

72	－	弥生土器			脚底径	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗茶黄色	内面見込み部には6条／cmのハケ目がみられ，底部には粘土のつなぎ目がみられる。外面はナデられており，ハケ目がかすかに残る。
－507		台付鉢			10.6				

R－4第2層

72	－	弥生土器			脚底径	0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡褐黄色	外方に広がる脚部で，端部に面を持つ。内外面ナデ調整されている。外面にはハケ目の痕がみられる。
－508		脚			12.6				

S－4第2層

72	－	弥生土器			脚底径	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	褐茶色	内外面ナデ調整されている。
－509		脚			14.0				

R－3第2層

72	－	弥生土器			脚底径	0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	黄茶色	内外面は摩滅して調整不明。穿孔は4方と思われる。
－510		脚			17.6				

R－2第1層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
72	－	弥生土器				1～4㎜程度の砂粒を含む。	良	淡茶黄色	棒状の体部下端に円形状の脚を持つ上半は欠損している。全面に指頭痕がみられる。
－511		支脚							

S－2第2～7層

72	84	縄文土器深鉢				0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	黄黒色	外反する頸部を持ち，口縁端部外面は拡張され，内面は沈線がみられる。
－512									
72	84	縄文土器深鉢				0.5～3㎜程度の砂粒を含む。	良	茶黒色	外方に延びる頸部を持つ。
－513									

S－3第2層

72	－	土師器				0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡褐茶色	指頭痕が顕著にみられる。
－514		把手							

R－2攪乱土

72	－	土師器				1～2㎜程度の砂粒を含む。	良	淡黒色	把手上面にヘラ描きの文様がつけられている。
－515		把手							
72	－	弥生土器壺	29.0			1～3㎜程度の砂粒を含む。	良	外面 明灰橙色 内面 暗橙灰色	二重口縁を持ち，頸部外面には擦り紐状の突帯を持つ。体部内面にはハケ目・指頭痕がみられる。
－516									

R－2攪乱土

73	－	須恵器	9.4	3.2		細砂粒を含む。	良好	青灰色	天井からほぼ直角に曲り体部となる。口縁端部は左右に少し拡張されている。天井はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。ロクロは右回転。
－517		短頸壺蓋							

R－3攪乱土

73	－	須恵器	12.0			微砂粒を多量に含む。	良	灰色	天井と体部間には，やわらかい稜を残す。口縁端部は左右にやや拡張されており，下部に面を作る。ヨコナデ調整されている。
－518		短頸壺蓋							

R－2第3層

73	－	須恵器				微砂粒を多量に含む。	良好	暗青灰色	天井部からなだらかに口縁端部に至り，内面には，小さくかえりが付く。天井部はヘラケズリされており，その他は全面ヨコナデ調整されている。ロクロは左回転。
－519		長頸壺蓋							
73	－	須恵器	15.2			密	良好	暗青灰色	天井部と体部の境に凹線を持つ。口縁端部は外方につまみ出している。ヨコナデ調整されている。
－520		坏蓋							

R－3攪乱土

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	底径				
73	－	須恵器	13.7	4.2		0.2～3㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗灰色	天井部から,なだらかに体部に至り,口縁端部内面には,段を有する。天井部はヘラケズリされており,その他はヨコナデ調整されている。天井部内面には当て具痕が認められる。ロクロは右回転。
－521		坏蓋							

S－2第3層

73	－	須恵器	15.0			細砂粒を含む。	良	濁灰色	体部は内彎しながら，口縁に至り，端部内面には段を有する。ヨコナデ調整されている。
－522		坏蓋							

Q－2第3層

73	－	須恵器	15.2	4.4		細砂粒を含む。	良好	暗灰色	天井部から内彎しながら体部に至る。口縁端部内面には段を有する。天井部はヘラケズされており，その他はヨコナデ調整されている。内面天井部には不定方向のナデが施されている。ロクロは右回転。
－523		坏蓋							

R－3攪乱土

73	－	須恵器	13.4			細砂粒を多量に含む。	良好	暗青灰色	天井部と体部の境にやわらかな稜を持ち，体部は真っ直ぐ口縁端部に至る。端部内面には段を有する。天井部はヘラケズリされており,その他はヨコナデ調整されている。ロクロは右回転。
－524		坏蓋							

Q－2第3層

73	－	須恵器	13.4	4.7		1㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部からなだらかに体部に至る。口縁端部内面には，段を有する。天井部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。ロクロは左回転。
－525		坏蓋							

R－3第3層

73	－	須恵器	14.0			微砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は内彎し，口縁端部に至る。端部内面には退化した段を有する。天井部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。
－526		坏蓋							

S－2第3層

73	－	須恵器	16.0			細砂粒を少量含む。	良好	青灰黒色	天井部と体部の境に凹線を有する。体部は外方にやや張り出す。口縁端部内面には段を有する。天井部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。天井部内面には当て具痕が認められる。ロクロは右回転。
－527		坏蓋							

R－3攪乱土

73	－	須恵器	13.2			緻密	良好	濁灰色	立ち上がりは内傾し，端部で外方へ屈曲する。受け部は上方へ延びている。ヨコナデ調整されている。
－528		坏身							

S－2第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
73	－	須恵器 坏身	13.0			微砂粒を含む。	良	暗青灰色	立ち上がりは内傾している。受け部も立ち上がりも萎小化している。ヨコナデ調整されている。
－529									

Q－2第3層

73	－	須恵器 坏身	14.8			細砂粒を含む。	良好	暗黄灰色	立ち上がりは内傾し，かなり細くつくられている。ヨコナデ調整されている。
－530									

R－3第3層

73	－	須恵器 坏身	13.4			緻密	良好	青灰色	立ち上がりは外反しながら，やや上方へ延びる。底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。ロクロは右回転。
－531									

R－2第3層

73	－	須恵器 高坏 坏部 (無蓋高坏)	16.0			微砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は，外方へ真っ直ぐ延び，中ほどには段を持つ。口縁端部内面には，沈線を持つ。ヨコナデ調整されている。
－532									

R－2攪乱土

73	－	須恵器 高坏 坏部 (無蓋高坏)	16.0			0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗青灰色	底部と体部の境は稜を持ち，口縁端部はやや外反する。ヨコナデ調整されている。
－533									
73	－	須恵器 高坏 坏部 (無蓋高坏)	14.4			1㎜前後の砂粒を含む。	良好	黒灰色	底部と体部間に稜を持つ。体部は真っ直ぐ外方へ延び，口縁端部でやや外反する。底部外面はカキ目調整されており，その他はヨコナデ調整されている。
－534									
73	－	須恵器 高坏 坏部 (無蓋高坏)	12.7			微砂粒を含む。	良	暗灰色	底部と体部の境と体部中央に凹線が有り，その間に波状文が施されている。体部は真っ直ぐ外方へ延びる。
－535									

P－3第3層

73	－	須恵器 高坏 坏部 (小型?)	6.0			微砂粒を含む。	良好	青灰色	体部は直線的に外方へ延び，口縁部でやや外反する。底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。
－536									

Q－2第3層

74	－	須恵器 直口壺	12.9			微砂粒を含む。	良好	暗青灰色	頸部はほぼ真っ直ぐ立ち上がり，口縁は拡張され，外側端部は上方へつまみ出されヨコナデ調整されている。
－537									

S－3第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
74	86	須恵器 広口壺	17.0			細砂粒を含む。	良好	暗灰色	頸部は外反気味に立ち上がり，口縁部は外面を拡張させ，2本の凹線を施す。上端はシャープな作りである。頸部外面にはヘラ磨きをヨコナデで消し，上から波状文を施している。
－538									

R－3第3層

74	86	須恵器 短頸壺 (平瓶)	8.4			0.5～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	灰黒色	底部は平底を呈し，肩の張る体部を持つ。頸部はほぼ真っ直ぐ立ち上がり，口縁端部でやや内彎する。口縁端部内面には，一条の沈線がある。体部下半及び底部はヘラケズリされており，頸部外面にはカキ目のち櫛描列点文が施されている。
－539									

S－2第3層

74	－	須恵器 長頸壺(?)	17.0			細砂粒を含む。	良好	青灰色	頸部は外反ぎみに立ち上がり，口縁は外方に折りまげて作られている。ヨコナデ調整されている。
－540									

R－3第3層

74	－	須恵器 甕	22.0			0.5～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部は外方に折りまげて作られている。ヨコナデ調整されている。
－541									

P－3第3層

74	－	須恵器 甕	24.0			細砂粒を多量に含む。	良好	褐灰色	頸部は外反ぎみに立ち上がり，口縁部は下方に拡張されている。ヨコナデ調整されている。
－542									

Q－4第3層

74	86	須恵器 甕	32.0			微砂粒を含む。	良好	黒灰色	頸部は外反ぎみい立ち上がり，端部は拡張され，上端につまみ上げられている。頸部外面には波状文が施されている。
－543									

R－3攪乱土

74	85	須恵器 甕	36.4			微砂粒を含む。	良好	濁灰色	頸部は外反ぎみに立ち上がり，端部は拡張され，上端を内方につまみ出している。頸部外面には櫛描列点文が施されている。
－544									

R－2第3層

					脚底径				
74	86	須恵器 器台 脚			14.0	微砂粒を少量含む。	良好	灰黒色	筒状の脚部で，裾部で大きくひらき，端部はやや内彎させている。筒部外面には波状文が施されている。ヨコナデ調整されている。
－545									

Q－2第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
74	－	須恵器 器台脚			脚底径 26.0	微砂粒を含む。	良	灰色	内彎ぎみの裾部で端部は下方へつまみ出している。外面には，2段に波状文が施されいる。
－546									

S－2攪乱土

74	－	須恵器 器台脚			脚底径 32.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良	暗灰色	裾部で外方につまみ立した，凸帯を持ち，端部は内方に屈曲する。ヨコナデ調整されている。
－547									

R－3第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
75	－	陶器(?)碗			3.6	灰白色 やや粗い	釉の溶けが悪いせいか，呉須の発色が悪い。	明青色 透明釉	高台は低く，畳付は丸みをおびる。高台裏はやや内彎しつつあがる。外面には文様が入る。発色悪い。畳付露胎。セト・ミノ系
－548									

P－3第2層

75	－	陶胎染付碗			5.0	灰白色 粗い	やや不良	青灰色 明緑灰色釉	高台脇はやや削り込まれており，高台はやや内傾する，高台下端は面取りされている。釉は高台脇から高台にかけて厚くかけられている。高台裏はふくらみながらあがる。高台内中央には削り痕が残り，ぼっちがある。全面にかん入が入り，畳付露胎。高台に1条圏線入り，外面には文様が入る。17C末～18中
－549									

S－3攪乱土

75	86	陶胎染付碗			5.0	にぶい褐色 粗い		オリーブ灰色から暗オリーブ灰色 浅黄色釉	厚手でつくられており，高台はやや内傾しつつおりる。高台はややふくらみながらあがる。外面に文様が入り，高台脇に1条，高台に2条の圏線が入る。全面にかん入が入る。畳付露胎。17C～18C中
－550									

R－2第2層

75	－	陶胎染付碗			5.0	灰白色 やや粗い		緑灰色 灰オリーブ色釉	高台脇はほぼまっすぐにおり畳付平坦である。高台裏は直線的に斜めに上がり高台内は高台脇よりも深く削り込まれている。高台及高台脇に1条ずつ圏線が入る。畳付露胎。砂付着。全体にかん入が入る。17C末～18C中
－551									

Q－3第2層

75	－	陶胎染付碗			5.2	灰白色 粗い	やや不良		厚手でつくられており，高台内は，高台脇よりも深く削り込まれている。外面には呉須で文様が入っているが，釉が厚く，見えないようである。外面は，高台途中まで釉が施され，畳付露胎。全面にかん入が入る。17C末～18C中。
－552									

R－2第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	呉須の発色 釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
75	－	陶胎染付碗	10.0			灰白色 粗い		青灰色 オリーブ灰色	厚手でつくられており，口縁端部外面に2条の圏線が入り，外面には文様が入る。全面にかん入が入る。17C末～18C中
－553									

R－2第3層

75	－	陶胎染付碗	11.0			灰白色 やや粗い		明青色 透明釉	厚手でつくらており，口縁端部は丸くおさめられている。外面には，文様が描かれており，口縁端部には明青色の呉須が入る。全面にかん入が入る。17C末～18中
－554									

P－3第2層

75	－	染付磁器碗	9.9			灰白色 精緻		青灰色から暗緑灰色 明緑灰色釉	やや厚手でつくられており，口縁端部は丸くおさまっている。外面には，雪輪などの文様が描かれている。
－555									

R－2第2層

75	86	染付磁器碗	10.0	4.6	4.4	灰白色 精緻		明青色から青灰色 明緑灰色釉	高台は若干内傾し，畳付は平坦。高台裏は，斜めにあがる。外面には，梅・竹などの文様がみられ高台脇に1条，高台に2条の圏線が入る。一部かん入が入る。見込は蛇ノ目状に釉剝ぎされている。畳付露胎。
－556									

P－3第3層

75	－	染付磁器碗	13.0			灰白色 精緻		オリーブ黒色から青色 明緑灰色釉	口縁端部は丸くおさまり，口縁端部内面には2条の圏線が入り，外面にはコンニャク印判による施文と筆により施文されている。17C末～18C中
－557									

S－3第2層

75	－	染付磁器碗	10.0			灰白色 精緻		青灰色 明緑灰色釉	口縁端部は丸くおさめられており，口縁端部内面には2条の圏線が入り，外面には文様が入る。コンニャク印判による施文の可能性がある。
－558									

R－3第2層

75	－	染付磁器碗	11.0			灰白色 精緻		暗緑灰色から青灰色 明緑灰色釉	口縁端部は丸くおさまり，口縁端部内面には2条の圏線が入る。外面にも文様が描かれている。
－559									
75	－	染付磁器碗			4.9	灰白色 精緻		明青色から暗青色 明緑灰色釉	高台はほぼまっすぐにおり，高台下端は若干面取りされている。高台裏はややふくらみながらあがる。外面によろけ縞文。高台に2条，見込みに1条，圏線が入る。見込及高台脇にかん入あり。畳付露胎。
－560									

S－2攪乱土

75	－	染付磁器碗			3.8	白色 精緻		青色 透明釉	高台はほぼまっすぐにおりるが下端部でややふくらみ，端部で面取りされている。高台は高い。外面には，文様が入り，高台と高台脇の境には一条の圏線が入る。畳付露胎。砂付着。
－561									

Q－2第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	呉須の発色釉	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
75	－	染付磁器碗			3.8	白色 精緻		青色 透明釉	高台はほぼまっすぐにおり，高台下端は面取りされている。外面には蛸唐草文。型紙摺か。畳付露胎。
－562									

S－2第3層

75	－	陶器鍋？	16.0			淡黄色 粗い		透明釉	口縁部はかえしが張りつけられており，送L状に外側に出る。そしてまたカギ状に上に少し上がり，口縁端部は，丸くおさまる。かえしの部分は無釉。施釉部分にはかん入が入る。セト・ミノ系
－563									

Q－4第2層

75	－	陶器小鉢？	6.6	1.8	3.0	灰白色 やや粗い		灰オリーブ色	底部から体部外面にかけてヘラ削り。口縁端部は，外部に肥厚している。内面から口縁端部外面まで釉がかかる。全体にかん入が入る。セト・ミノ系
－564									

P－3第2層

75	－	染付磁器瓶			5.8	灰白色 精緻	不良	灰色 透明釉	高台は貼りつけられているようで，高台脇から高台へは段がある。高台は外側へふんばるようにつき，高台には1条の圏線が入る。内面無釉。畳付露胎。焼成悪く，発色不良。
－565									

Q－4第2層

75	－	磁器皿			3.8	灰白色 精緻		明緑灰色釉	高台脇は削り込まれており，高台は逆台形状につく。畳付平坦。高台内には削り痕が残る。見込には，蛇ノ目釉剝ぎがされている。高台脇から高台，畳付，高台裏，高台内無釉。17C後半～18中
－566									

S－2

75	－	磁器皿			6.0	灰白色 精緻		内面 明緑灰色釉 外面 黒色の鉄釉	高台は低く内傾する。高台下端は面取りされている。全体に薄手でつくられている。畳付露胎。
－567									

P－4第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
75	－	灯明皿	10.0			微砂粒を含む。	良好	茶色	体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。内面には上部につまみ上げた突帯がみられる。
－568									

Q－2第2層

75	86	擂鉢				細砂粒を含む。	良好	赤褐色	口縁内外面に凹線がみられる。条溝は鋭利な工具でつけられている。
－569									

R－4第2層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	底径				
75	86	擂鉢				細砂粒を含む。	良好	暗茶褐色	口縁外面は，2条の凹線がみられ，内面は沈線ぎみの凹線が施されている。条溝は，上端をその凹線によって切られている。
－570									

R－2攪乱土

75	－	擂鉢				微砂粒を含む。	良好	暗茶色	口縁外面は，2条の凹線がみられる。内面に施された条溝は，上端をヨコナデによって切られている。
－571									

Q－4第4層

75	86	擂鉢	33.8			0.5～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	褐茶色	やや内彎ぎみに延びる体部を持つ，口縁は外面に2条の凹線，内面に1条の沈線を持つ。条溝は鋭利な工具で施され，上端はヨコナデによって切られている。
－572									

S－3攪乱土

75	－	擂鉢			13.8	細砂粒を含む。	良好	暗褐色	底部は厚く作られている。内面の条溝は密である。
－573									

Q－2第2層

75	－	擂鉢			14.0	細砂粒を含む。	良好	黒褐色	底部には砂粒の付着がみられる。内面見込み部には鋭利な工具による条溝が施されている。
－574									

石製品

挿図番号 / グリッド名 出土土層名	図版番号 / 遺物番号	器種	石材	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察
68 P-4第2層	83 −421	石鏃	サヌカイト	23.70	12.05	2.60	0.67	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状を呈する。先端がやや突出する。翼端は丸みを帯びている。くり込み率は0.55と大きい。
68 表採	83 −422	〃	〃	(24.75)	(14.10)	2.80	(0.74)	凹基無形式　先端及び片翼を欠損している。両面とも調整は少ない。くり込み率0.22
68 R-2第2層	83 −423	〃	〃	(21.15)	(13.40)	2.45	(0.56)	凹基無茎式　平面形は二等辺三角形状を呈する。片翼を欠損する。くり込み率0.40
68 R-2第3層	83 −424	〃	〃	(22.10)	(19.85)	(4.90)	(1.83)	凹形無茎式　平面形は二等辺三角形状を呈している。先端及び片翼を欠損している。周辺に細かい調整が施されている。先端角50°
68 S-2第2層	83 −425	〃	〃	33.40	23.55	4.50	2.65	凹基無茎式　平面形は，側辺中央にくり出す五角形状を呈している。先端角60° 末端角20° くり込み率0.20
68 R-2第2層	83 −426	〃	〃	25.30	15.65	3.55	1.06	凹基無茎式　平面形は，五角形状を呈する。側辺に不明瞭なコーナーを持つ。N／H＝1.62
68 R-2撹乱土	83 −427	〃	〃	21.50	(10.90)	3.00	0.62	凹基無茎式　平面形は五角形を呈しており，翼が側辺にやや突出している。片翼を欠損している。N／H＝1.95と細長い。
68 P-4第2層	83 −428	〃	〃	(12.25)	(10.20)	1.90	(0.25)	平基無茎式　基部はやや凹形である。先端及び片翼端部が欠損している。
68 S-2撹乱土	− −429	スクレイパー	〃	24.90	46.50	3.60	4.98	平面形は台形状を呈する。大きい二面は当初の剝離からなるが，周辺には細かい調整がみられる。石匙の可能性もある。
68 S-2第2層	− −430	打製石庖丁	サヌカイト	−	−	−	5.16	平面形は，三角形状を呈している。折損面以外には調整が施されている。
68 S-2第2層	82 −431	〃	結晶片岩（赤色）	(30.61)	(66.30)	(5.50)	(21.11)	平面形は長方形に近い平行四辺形を呈している。折損が2辺あるので，もう少し大きかったと考えられる。下長辺に使用痕が見られ，刃部が摩滅している。
68 R-2撹乱土	82 −432	砥石	流文岩	(72.95)	(49.40)	(53.10)	(248.74)	表面は風化している。流文岩である。明黄灰色を呈している。ほぼ正方形の面を除いて他の面にはとぎ痕がある。特に長方形の面はつるつるになっており，さらに擦痕がある。それぞれの面をつなぐコーナーにはするどい陵がある。
68 Q-2第2層	83 −433	不明（細石刃核?）	チャート（青緑色）	11.35	13.15	15.15	2.72	ひずんださいころ状を呈している。側面に剝離が見られる。
68 R-2撹乱土	83 −434	不明	チャート（青緑色）	23.80	25.85	12.95	9.10	稜上につぶれ痕がみられる。

※　表中のN／Hは長さ／幅の略である。

(註)

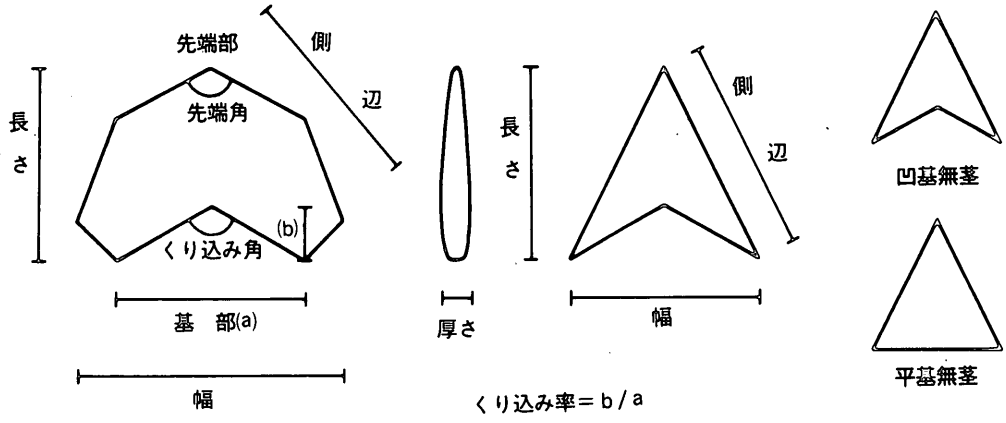
1　愛知県陶磁資料館「城下町のやきもの」　P16⑧⑦（16C前半）に類似

2　九州陶磁文化館「国内出土の肥前陶磁」　P54 ⑥④⑦ に類似

3　「木村コレクション古備前図録」

4　「杵築小学校　校内遺跡」　P46④③（18C前半～中葉）に類似唐津系

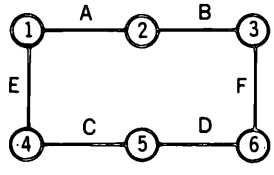
凡　例



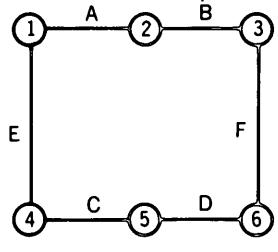
くり込み率＝b／a

※ 先端部・基部に欠損が見られる場合，反転復元のくり込み率は(　)書きをしている。

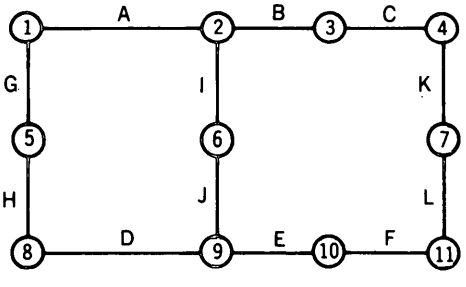
凡　例



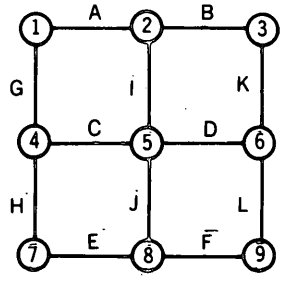
1間×2間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6)÷6
柱間長＝(A+B+C+D+E+F)÷6



※1　1間×2間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6)÷6
柱間長＝(E+F)÷2
＝(A+B+C+D)÷4



※2　2間×2＋1間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6+7+8+9+10+11)÷11
柱間長＝(B+C+E+F+G+H+I+J+K+L)÷10



2間×2間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6+7+8+9)÷9
柱間長＝(A+B+C+D+E+F+G+H+I+J+K+L)÷12

Ⅳ　柞田八丁遺跡

1．調査の経過

柞田八丁遺跡は，当初，大野原町中姫遺跡（弥生時代中期）の近接地に調査地区があることから，この遺跡に関連する遺跡であろうと思われていた。しかし，中姫遺跡は，不明な点が多く，そのために，今回の対象地区について，調査範囲・遺構の性格などを確定させ，より良い調査を実施するために，昭和60年２月18日～同年３月４日に予備調査を行った。

その結果，当初予想されていた弥生時代の遺構は検出されず，時期不明の柱穴及び包含層が確認された。この確認された遺構の広がりで，14,000㎡が調査対象面積となった。

しかし，予備調査時においても，調査範囲内に依然として未買収地が残っており，確定された調査対象地は，この未買収地も含めた面積である。

本調査は，未買収地があったこともあり，３次に渡り実施された。

まず第１次は，昭和61年4月３日から開始され，同年11月28日に終了した。第２次は，未買収地の畑地部分についてのみ昭和62年１月７日～同年１月27日に実施された。続いて第３次は，昭和62年６月２日～同年６月18日にかけて実施された。この第３次調査をもって柞田八丁遺跡の調査は，完了したことになる。

調査の方法としては，日本道路公団の設置したセンター杭・幅杭をもとに，国土地理院国土座標に準拠し，20mメッシュを基本とする調査区の設定を行った。

調査区設定にあたっては，20×20mを小区画として，東西にアラビア数字を，南北にアルファベットをつけ，北西隅の記号をその小区画の名称とした（第２図）。

以下，調査の進行状況については，日誌にもとづいて略述する。

調 査 日 誌 抄

昭和61年

4月

２日 柞田八丁遺跡の発掘作業に先立ち，公団･企業体と打合せを行う。（於長砂古現場事務所）

３日 発掘調査に先立ち，杭打ちを開始する。現場作業員は，柞田八丁遺跡の準備が整うまで長砂古遺跡で研修を兼ねて発掘作業を行う。

７日 現場事務所用地を整地する。

９日 室内作業のため柞田八丁遺跡の発掘に従事する作業員は，現地に初めて集合する。

11日 調査区の草刈りを行う。

14日 今日より本格的に柞田八丁遺跡の調査を開始。まず，調査区北東部より表土剝ぎを行う。発掘道具等搬入。

15日 表土剝ぎが終わったグリッドから，発掘調査を開始する。続いてＢ－11，Ｃ－10，Ｄ－９・10の表土剝ぎを行う。

22日 ベルトコンベアー・発電機・水中ポンプ等搬入。

24日 Ｃ－８・９，Ｂ－９・10発掘開始。

30日 Ｄ－９・10発掘調査の結果，遺構は60cm程の遺物包含層除去後に検出されることがわかる。

5月

１日 Ｄ－９・10，遺構面精査。多数の柱穴・土坑などを検出。

2日　バリバリの新採職員着任。

7日　C－10包含層発掘。須恵器・土師器が多数出土する。

9日　当遺跡においても企業体との間でおこる工事用道路の付け換え問題のために発掘調査工程をその都度変更することになる。

12日　当遺跡の予備調査時に実施できなかった南端地区の予備調査を行う。その結果，古墳時代の竪穴住居・多数の柱穴を確認する。

13日　この頃より作業員バテ気味，発掘作業になれていないためか。

19日　C－10，D－10の結果からB－10・11においては，遺構面まで一気に重機で掘る。

22日　C－11において遺構面精査。多数の柱穴確認。

27日　C－10，D－9の東・南壁土層，写真撮影，土層実測を行う。

30日　C－10の遺構を発掘。

6月

3日　B－10・11，D－9，包含層発掘。遺構全体図，写真撮影後，平面実測を行う。

11日　B－10遺構面精査。多数の柱穴・溝を検出。

12日　B－11，C－10・11，D－9・10を企業体に明渡す。

18日　A－9・10，B－9・10，発掘調査開始。

24日　A－9・10，B－10，湧水のため側溝を掘る。この調査区は，最も低い所に位置するために毎朝，湧水に悩まされる。

7月

2日　A－9，遺構面精査。多数の柱穴・溝SD01を確認。これらの柱穴からは，ほとんど遺物が出土しておらず，時期は，現段階では不明である。

10日　C－8，発掘開始。B－9，遺構面精査，遺構掘り抜き。

14日　B－9の柱穴より土師器の坏が数枚重なって出土，掘立柱建物に伴う地鎮祭に使われたものか。

16日　長砂古遺跡の終了に伴い全作業員が移って来るのでプレハブを新築する。

18日　C－8遺構面精査。多数の柱穴，土壙墓を検出。

21日　調査区北東部引き渡し。

25日　G－7，H－7，遺構面精査，写真撮影。G－6，H－6，発掘開始。

31日　当初から発掘に従事していた中西氏が他の現場にかわられる。

8月

1日　G－6，H－6，遺構面精査，遺構発掘。柱穴が数個確認されただけで，ほとんどが攪乱を受けていた。

4日　G－6，遺構写真撮影。中世の建物1棟確認。

5日　J－4・5のグリッドでは，ほとんどが攪乱土であった。

13日　G－4・5，H－4・5，I－4・5，J－4・5のほとんど全てにおいて，後世の粘土採取による攪乱が確認された。

14日～16日　盆休み。

19日　K－3・4，L－2・3，M－1・2・3において杭打ちを行う。

29日　当遺跡の中央部の攪乱をほぼ完掘した。予備調査時には確認できなかったことであるが，この攪乱のために大幅に発掘工程が遅れる。今後，こうした地区の掘り方を検討する必要があろう。

9月

4日　E－5・6，F－5・6，発掘開始。

6日　E－6，遺構面精査。柱穴，土坑検出。

9日　D－6・7，発掘開始。

16日　K－4，L－4，表土剝ぎを行う。

24日　調査区中央部が終了したので，教育委員会・公団・企業体立会いのうえ引き渡す。

25日　K－3・4・5，L－3・4，発掘開始。同時に，南端全域の草刈りも実施。

26日　E－7，D－8　発掘開始。予備調査時に竪穴住居を確認しているので慎重に掘る。

10月

2日　D－6において，竪穴住居を掘る。当遺跡において初の竪穴住居である。

3日　K－3・4，遺構面精査。多数の柱穴，

竪穴住居確認。

7日　D－7・8，E－7，遺構面精査。竪穴住居5棟確認。D－6・7・8，E－7・8では，竪穴住居址が6棟検出されたことになる。遺物より，古墳時代（6世紀末頃）と思われる。順次，写真撮影，遺構平面実測を行う。

15日　C－7において，径7m程の土坑が確認され，中央より井戸が検出された。埋土遺物より，近世の井戸と思われる。

22日　竪穴住居の平面図，写真撮影に手間取る。

23日　L－2・3・4，M－3・4，発掘開始。未買収の土地があるために，飛び地の調査区となる。

11月

4日　L－3・4，遺構面精査。結果，古墳の残骸，柱穴を確認。L－2・3・4，M－1・2・3の土層写真撮影及び実測を行う。

8日　G－8，F－8，E－8・9の表土剝ぎを行う。古墳床上面から耳環出土。

11日　E－9，F－7・8，発掘開始。

20日　E－9，F－8においても攪乱多し。

25日　E－9，F－7・8，G－7・8，遺構面精査。遺構はほとんど検出されず。本日を以て，作業員の現場での仕事が終わる。ごくろうさまでした。

26日　残っている遺構実測を行う。遺物の水洗いと道具の片付けを行う。

27日　教育長来られる。

28日　本日を以て，未買収地以外の調査を全て終了した。未買収地は，宅地部分と畑地部分があり，畑地部分がより早く調査できるようである。

昭和62年

1月

6日　未買収地（畑地）に関して，強制執行（仮処分）を行う。

7日　L－3・4，杭打ち，表土剝ぎを行う。

8日　L－3・4，包含層発掘。

14日　ここでも攪乱部分が多く，かなり大規模に削平を受けたことがわかる。

20日　L－3・4，遺構面精査。土坑，多数の柱穴を確認。

26日　遺構写真，実測終了。後は，宅地を残すのみになる。

27日　L－3・4，引き渡し。61年度の発掘調査終る。（残480m²-宅地部分）

6月

2日　発掘調査の残っていた宅地部分について公団，企業体，教育委員会間で協議。

4日　物品搬入し，杭打ちを行う。

5日　重機による表土剝ぎ。

8日　作業員雇用開始。発掘調査開始。宅地部分480m²のうち，庭部のみで遺構確認。宅地本体部では，基礎工事のため攪乱されていた。

11日　遺構面精査，遺構発掘。竪穴住居1棟，多数の柱穴を確認。

13日　全景写真撮影，実測を順次行う。

17日　宅地部分の発掘調査終了。

18日　宅地部分480m²引き渡し。これを以て柞田八丁遺跡全ての発掘調査を完了する。

第1表　遺構番号変更一覧表

遺構名	地区名	旧名称	遺構名	地区名	旧名称
掘立柱建物ＳＢ			02	Ｂ－９	ＳＤ8503
39	Ｊ-3, Ｋ-3	ＳＢ8607	03	Ｂ－９	8504
土　坑ＳＫ			04	Ｃ-7, Ｄ-7･8	——
01	Ａ－９	ＳＫ8607	05	Ｄ－９	8502
02	Ａ－９	8606	06	Ｍ－３	8606
03	Ａ－９	8608	07	Ｍ－２	8604
04	Ａ－９	8609	08	Ｍ-2･3	8605
05	Ｂ－８	8605	竪穴住居ＳＨ		
06	Ｃ－10	8601	01	Ｄ－８	ＳＢ8612
07	Ｃ－９	8602	02	Ｅ－８	8613
08	Ｃ－７	——	03	Ｄ-7, Ｅ-7	8610
09	Ｅ－９	8612	04	Ｄ－７	8611
10	Ｅ－８	8611	05	Ｄ－６	8606
11	Ｋ－３	——	06	Ｋ－７	8609
12	Ｌ－３	ＳＸ8601	07	Ｋ－４	8608
13	Ｍ－３	8614	土壙墓ＳＴ		
14	Ｍ－３	8613	01	Ｃ－８	ＳＫ8604
溝　　ＳＤ			02	Ｃ－８	8603
01	Ａ-10, Ｂ-10	ＳＤ8601			

－発掘作業に従事した人々－

秋山未好　片山康子　渋谷泰　仁尾博樹
安藤弘文　加藤悠喜子　菅原悟　深川マサエ
安藤好道　金山ヨシミ　資延百合子　福田伝
石川靖恵　河上忠義　田岡照治　藤本アキノ
今井俊文　木下アヤノ　高橋勇　藤本武弘
今川勝夫　行天邦喜　高橋シゲ子　船場久計
入江さち子　業天順子　高橋千弦　船場美和子
入江弘文　黒川真光　高橋フミノ　牧野秀子
岩田幹男　合田太郎吉　高橋正成　牧久雄
尾池政秋　後藤満枝　高橋義計　松本光男
太田春夫　小林勝治郎　立石利幸　真鍋伊三郎
大西和子　小林ミサヲ　田中豊子　真鍋三二
大西敬子　近藤キクエ　田辺ミヤ子　三谷サダ子
大西実男　近藤タマエ　千秋久夫　三野修
大西節　斉藤一夫　筒井ヒサノ　宮城修司
大西長吉　斉藤清子　富田忠美　三好春義
大西登　斉藤茂　富田玉恵　森岡光
大広林四郎　坂井スマ子　奈尾宗昭　森川静
大矢ツルエ　佐川巖　中野宏子　森道代
荻田茂義　佐柳文子　中村栄治　守谷峰子
落合正信　佐柳正明　中村敏子　横内和義
景山勇　篠原弘子　中村弘　横内正弘
片山清美　篠原善美　中村道広　横山薫

－整理作業に従事した人々－

石川ゆかり　川田裕加子　千田嘉恵子　林肇子
小畑三千代　高橋佳緒里　筒井千景　藤田由紀子
葛西薫　高橋千恵　長谷川郁子　森岡浩子
鎌谷周子　武内ゆかり

2．遺跡の概要

(1) 地　形

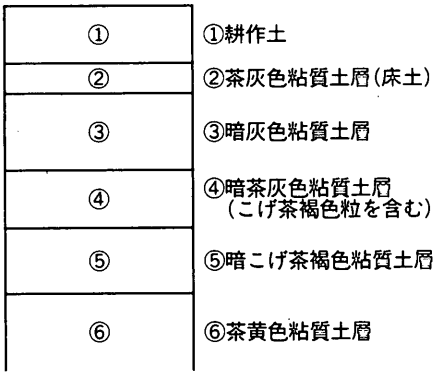
柞田八丁遺跡が位置する所は，三豊平野を財田川，柞田川で北部・中央部・南部と三分割した南部にあたり，柞田川によって形成された扇状地の扇端部である。扇状地形のために水の便が悪く，調査区周辺には，農業用の井戸が多く掘られていた。

調査及び整理作業を円滑に進めるために，当遺跡においても調査区周辺を含めて微地形の復原を試みた。その結果，当遺跡は，微高地状の尾根部にあり，北部が尾根の先端，南部が尾根の基部にあることが判明した。西側には微高地が広がり，東側は谷筋になり次の尾根部になる。この東の尾根部には，小天皇塚古墳など2基の古墳が位置し，周辺の小高い尾根上部に位置する古墳群（母神山古墳群・縁塚古墳群）とは趣を異にしている。

(2) 土層序

柞田八丁遺跡においての基本土層を，C列以北と以南に分けると，前者では，第1層耕作土・第2層床土・第3層暗灰色粘質土層，第4層暗茶色粘質土層（こげ茶褐色粘土を含む），第5層暗こげ茶褐色粘質土層に分けられ，この第3層～第5層が古墳時代後期から中世までの遺物包含層となる。

検出された多数の柱穴は，第5層下で確認されたが，柱穴の残りが悪いため，上部がかなり削平を受けているものと思われる。また，後者のC列以南では，ほとんど全区において製瓦用の粘土採取のため耕作土直下遺構面となっていた。そのため検出された竪穴住居は非常に残りが悪く，それ以外には攪乱土坑が多数確認されただけであった。



第1図　包含層基本層序模式図

(3) 調査区周辺出土遺物資料

柞田八丁遺跡が位置する柞田川より以南の平野は，江戸時代に平田氏によって大規模な開墾が行われており，その時に多数の古墳が破壊されたようである。この事実を裏付けるように，近年の発掘調査によって破壊された古墳が多数検出されている。(註1)

柞田八丁遺跡の調査でも破壊された古墳が検出されたので，調査報告に先立ち，周辺に位置する古墳表採遺物を参考資料として紹介したい。

ここで紹介するのは，柞田八丁遺跡より南130mに位置する小天皇塚古墳及び隣接する古墳周辺表採遺物である。

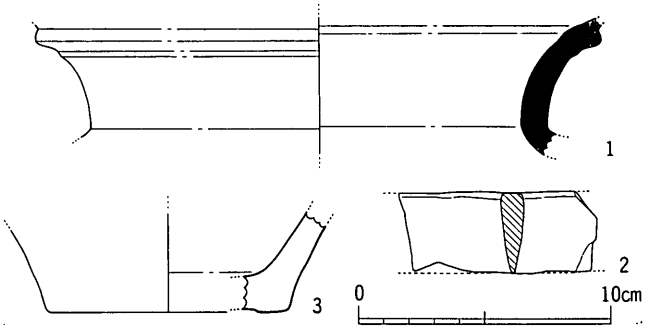
まず，小天皇塚古墳は，観音寺市遺跡地図に古墳として登録されてはいるが，現状では，水田など周りの制約でかなり削平され，形状・時期については不明な点が多い。

第 2 図　調査区周辺地形図・調査区設定図

また，近接する古墳については，遺跡台帳に登録されておらず，柞田八丁遺跡調査中に環境整備のため破壊された。誠に残念な結果である。

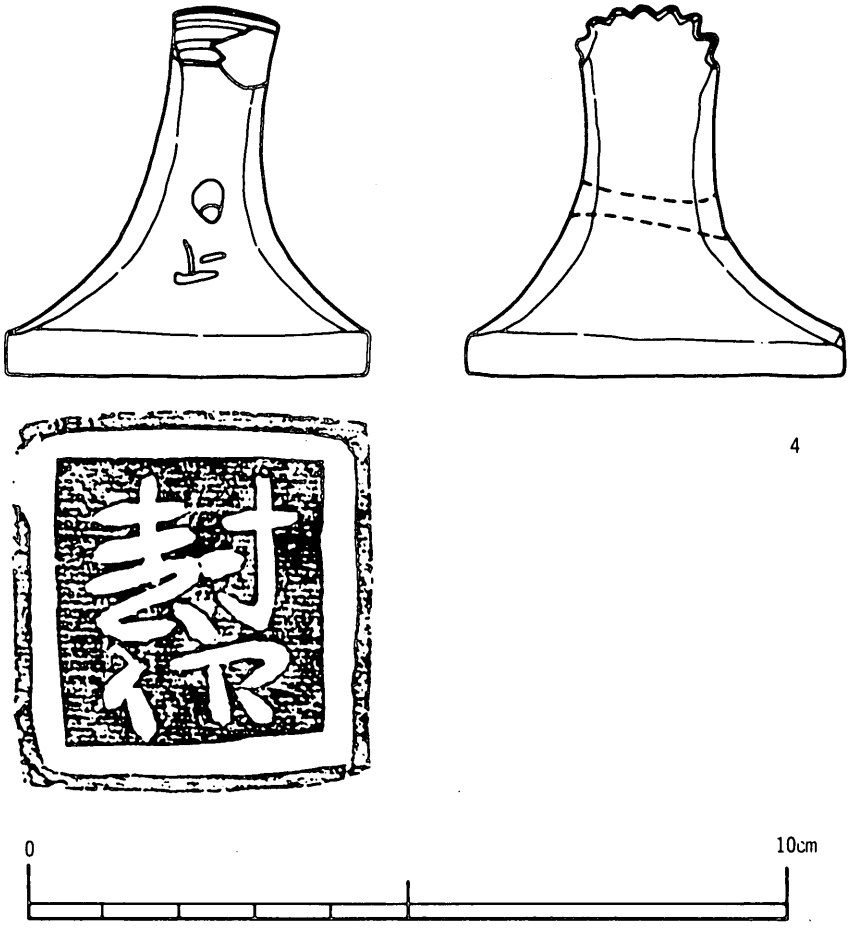
両古墳周辺より遺物を採集した(第３図)。１は，須恵器の甕で，外反する頸部と上端を外方につまみ出した口縁端部を持つ。２は，鉄刀である。全長は不明で，刀幅は，約3.2cmを計る。３は，弥生土器である。底部は，しっかりしており，少し上げ底気味である。

この２基の古墳は，ちょうど今回の調査で確認された古墳と同じ立地条件を持ち，同時期に築造された可能性が強く，丘陵上の古墳と同じく高所に古墳を造るという意識があったように思われる。



第３図　小天皇塚古墳墳丘表採遺物実測図

また，当調査区北約100m付近の水田畦畔工事中に発見された須恵質の陶印もここで紹介する。この陶印は，奈良時代のもので，「封印」と刻まれており，出土地が安井廃寺・南海道柞田駅推定地に近接していることから，今後，これらとの関係が注目されるであろう。



第４図　陶印実測図・拓影

3．遺構・遺物について

(1) 検出遺構の概要

調査の結果，当遺跡においては，後世の粘土採取によって，中央部が削平・攪乱を受けているため，南西部と北東部に遺構が検出された。南西部では古墳時代の竪穴住居と古墳及び周溝が検出され，同一遺構面上で中世の遺構も検出された。

古墳時代の遺構は，居住域と墓域がセットで検出され，両者を分けるように中央に柵列も検出された。調査区南西端では，古墳の周溝と思われる遺構が検出され，調査区外へ続いていることが確認された。しかし，この調査区外には，土井ノ池（皿池）の堤があり，微高地上に位置しているこの池の築造時においては，かなりの遺構が破壊されたものと思われる。

また，調査区東の別の微高地上には，小天皇塚古墳を含む2基の古墳があり，ここでも高所に墓域があることが判る。

調査区北東部では，中世の遺構の集中する所と竪穴住居の集中する所が分かれていた。

(2) 古墳時代の様相

古墳時代の遺構は，D－6・7・8，E－7・8とK3・4，L－3・4，M－2・3で竪穴住居7，掘立柱建物1，柵列2，溝状遺構2が検出されている。北部と南部で検出された竪穴住居は，同時期に比定され，一つの群を構成していたものと思われる。しかし，中央部の削平により両者の関連性については不明である。

(3) 古墳時代後期（6世紀末頃）

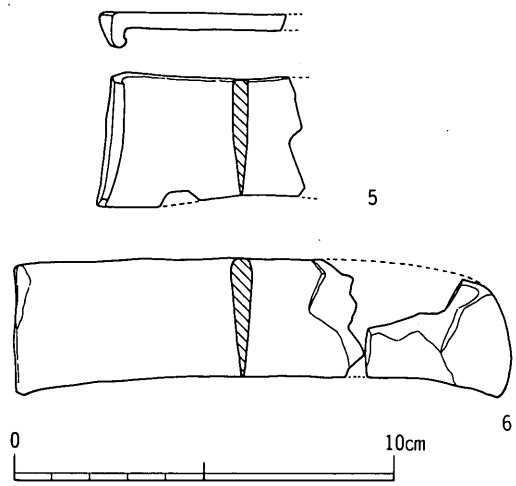
SH01

一辺約4mの方形の竪穴住居である。主軸は，真北から約23°西偏し，検出遺構面から床面までは深さ17cmを計る。主柱穴は四隅に，側溝は西壁においてのみ確認された。また，北壁際において，焼土が検出された。現状では，カマドの施設は認められないが，おそらくそれに関係のある施設の存在が想定できる。

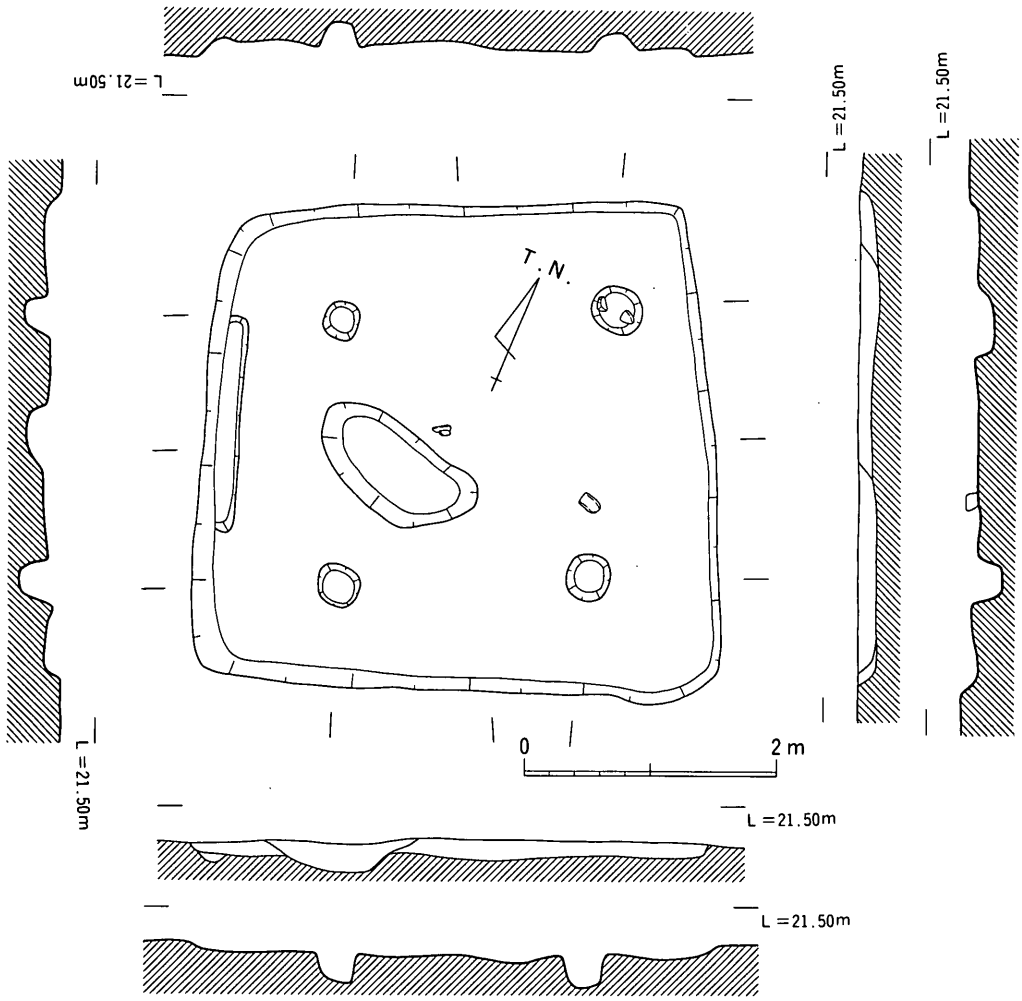
この竪穴住居からは，出土遺物が鉄鎌だけで土器は出土しておらず，また，床面も整地された様子が窺われないことから生活痕跡のない竪穴住居ではないかと思われる。

出土遺物は，鉄製の鎌2点のみであった(第6図)。そのため，遺物からは，この住居址の時期決定ができなかった。

第5図　D－6・7・8，E－6・7・8遺構平面図



第6図　ＳＨ01出土遺物実測図



第7図　ＳＨ01平・断面図

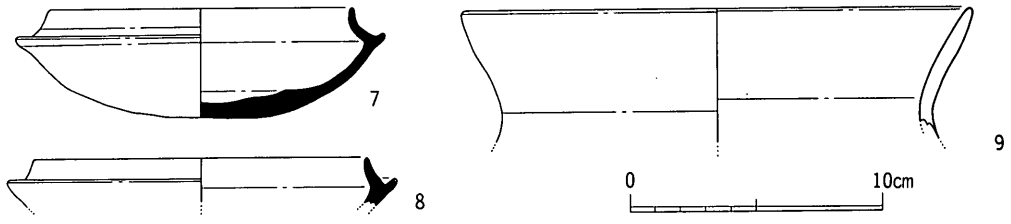
SH02

削平によって掘り方が南東半分しか確認されておらず，そのために，規模については不明である。主軸は，真北から16°西偏し，検出遺構面から床面までの深さは約5cmを計る。

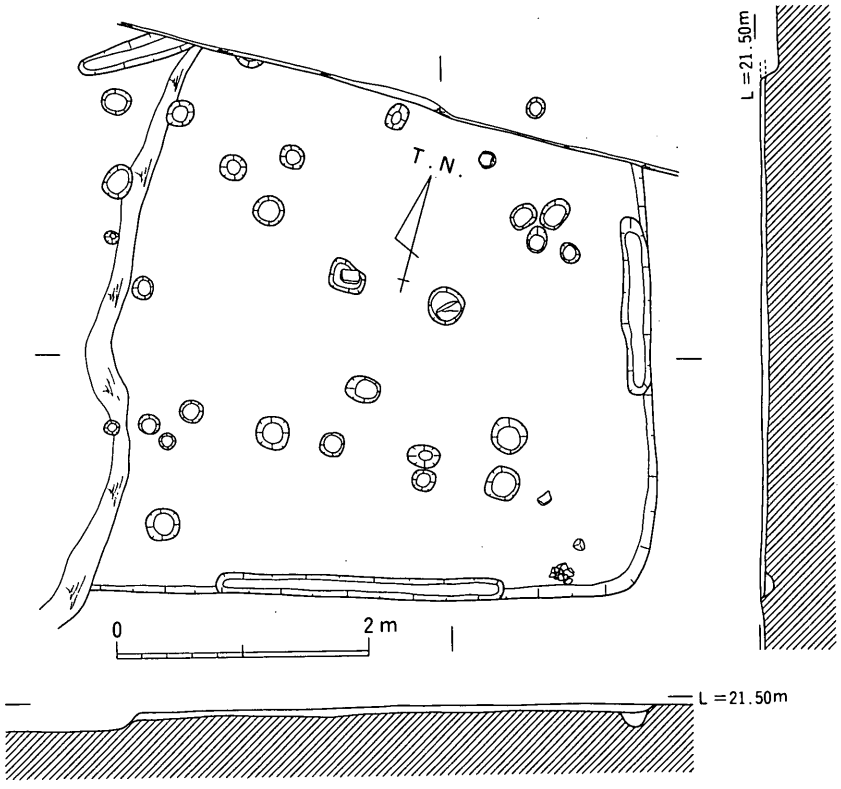
竪穴住居床面からは，多数の柱穴が検出されており，何回かの建て換えがあったことを窺わせる。また，柱穴のなかには，根石を伴うものが確認されており，これが竪穴住居に伴うものかそうでないものなのかは不明である。

側溝は，東・南壁際において確認したが全周しておらず，当初よりなかったものなのか削平により消滅したものかは不明である。

遺物としては，床面直上より，須恵器・土師器が出土している。土師器甕は南壁際におかれていたようで，その状態のまま押しつぶされたものと思われる。



第8図　SH02出土遺物実測図



第9図　SH02平・断面図

SH03

東西約5m，南北約4.4mのやや横長い方形の竪穴住居である。主軸は，真北から約18.5°西偏し，検出遺構面から床面までは深さ10cmを計る。北辺中央部に造り付けのカマドを持っているが，上部構造については，煙道部と思われるものが屋外に50cm程突出しているだけで不明である。焚口部付近には，焼土が残されていた。竪穴住居床面には多数の柱穴が残っているため，建物を構成する主柱穴を復原するのは容易ではないが，おそらく四隅と中央に1柱穴の計5柱穴ではなかったかと思われる。また，側溝は，西半分に認められる。側溝内側には，小柱穴が主柱穴を取り囲むように配しており，おそらく，屋根の下部のささえのためのものと考えられる。

出土遺物は焚口部と思われる東側に数個の石と共に多数の土器が出土している(第14図)。その他には，周溝中より数個の石と須恵器が投げ込まれた状態で検出された。

18・19は，須恵器の坏蓋である。天井部と体部間に稜を持たず丸くおさめるものと，少し稜を持つものとが出土している。口縁端部内面には，段の痕跡がある。

20～22は，須恵器坏身である。立ち上がり及び受け部ともにかなり萎小化したものが見られる。

23・24は，土師器の甕である。直線的に延びる頸部とやや外反気味に延びるものとが確認されている。頸部と体部の接合痕は顕著に見られ，体部内面には，指頭痕もみられる。

SK10

SH02の南部に土坑が検出されている。西半分を攪乱により削られていて，全体は不明であるが，南北長220cm，東西長130cmを計る土坑である。

土坑出土遺物は，残存している部分で須恵器，土師器などが多数検出された（第12図)。

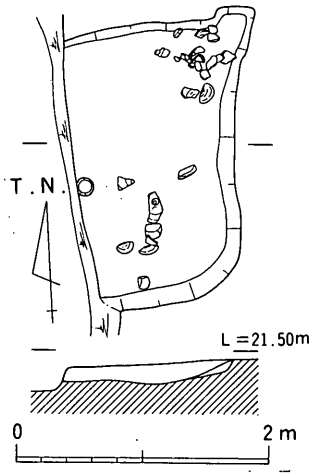
12～14は，須恵器の坏蓋である。天井部と体部間に稜線を持たず，口縁端部内面には段を有する。12の須恵器坏蓋は，天井部内面にヘラケズリ調整時の同心円状の当て具痕を残している。当遺跡においては，数少ない例である。

15・16は，須恵器坏身である。立ち上がり及び受け部のかなり萎小化したもの（15）とまだしっかりしているもの（16）がある。

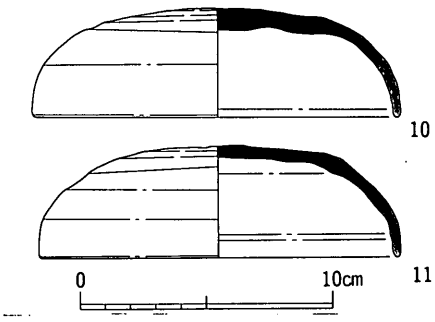
17は，土師器の甕である。直線的に外方へ延びる頸部を持ち，口縁端部はややシャープにつくられている。

また，竪穴住居・土坑間では，同一個体である須恵器坏蓋2点（10・11）が出土している（第11図)。10・11は，天井部と体部間に稜を持たず，口縁端部内面には段を有するもので，両者とも緻密な胎土で良質に作られている。これら2点は，ほぼ真ん中で2つに分かれており，一方は廃棄場へ捨てられ，一方は生活区で使用されていた可能性が考えられるが，竪穴住居廃絶時の何らかの行為による所産であるかもしれない。

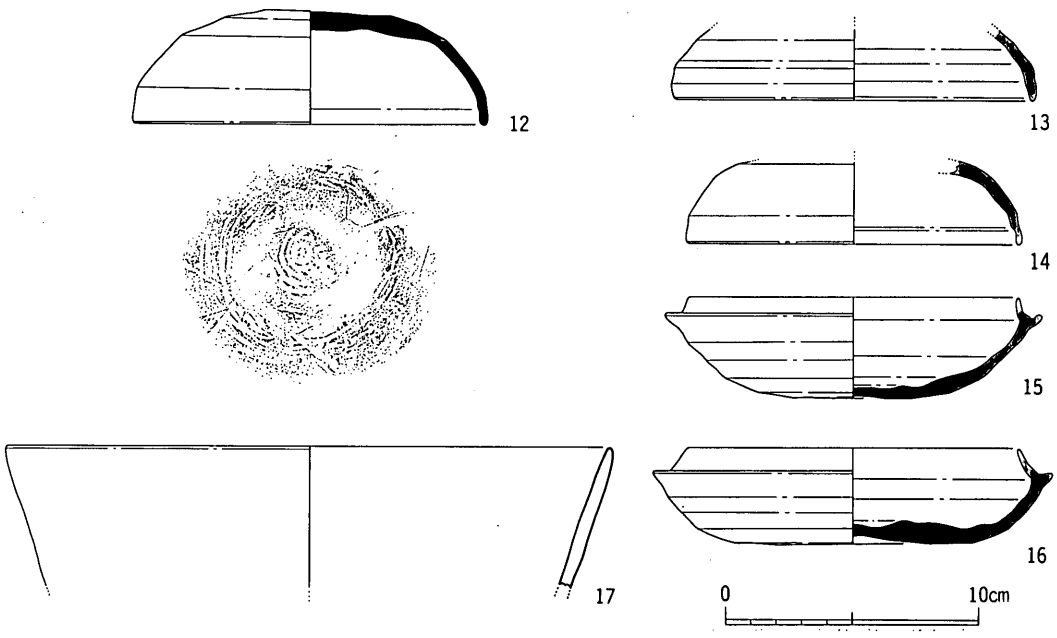
時期は，竪穴住居・土坑とも古墳時代後期（6世紀後半頃）に比定される。



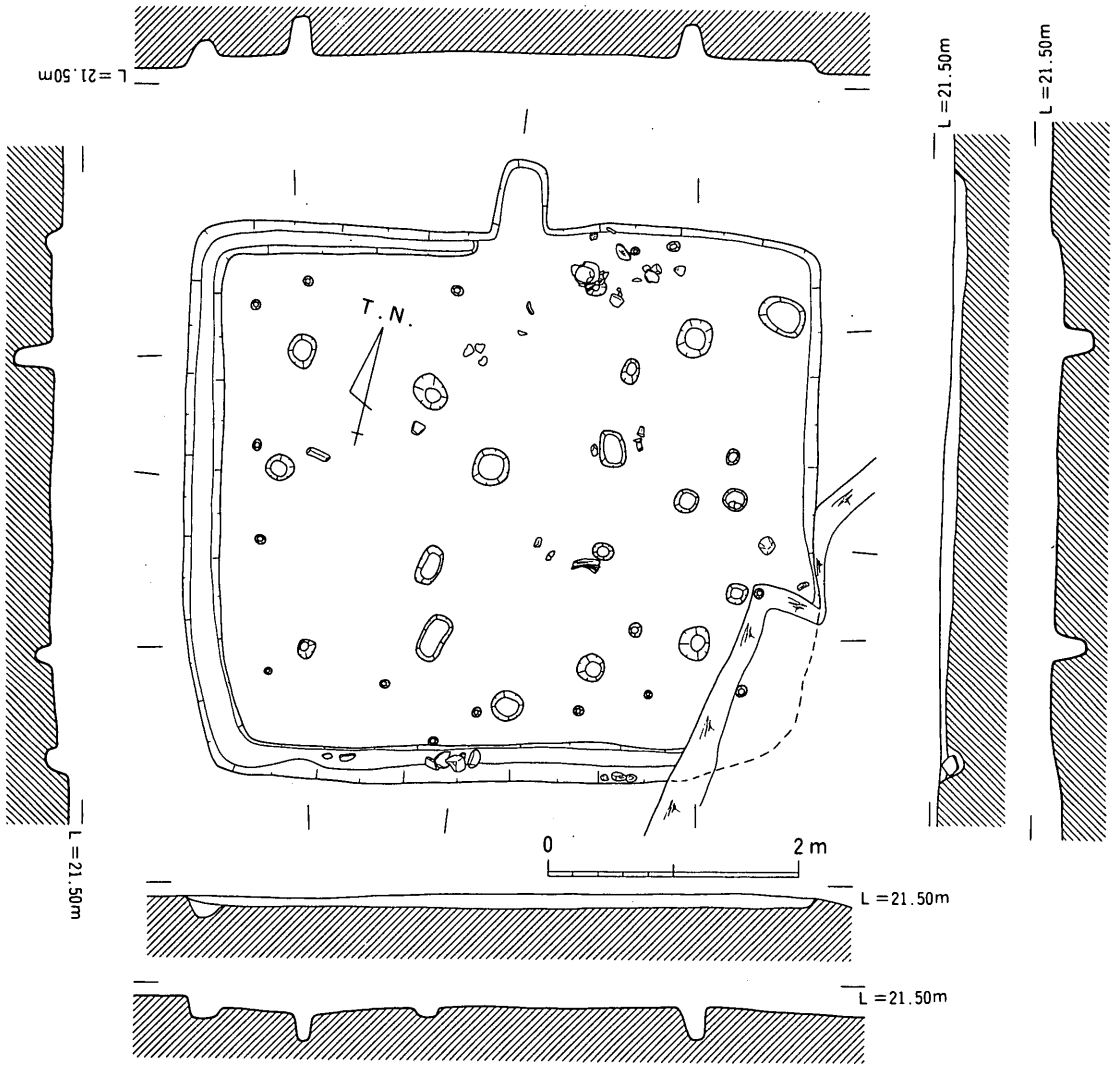
第10図　ＳＫ10平・断面図



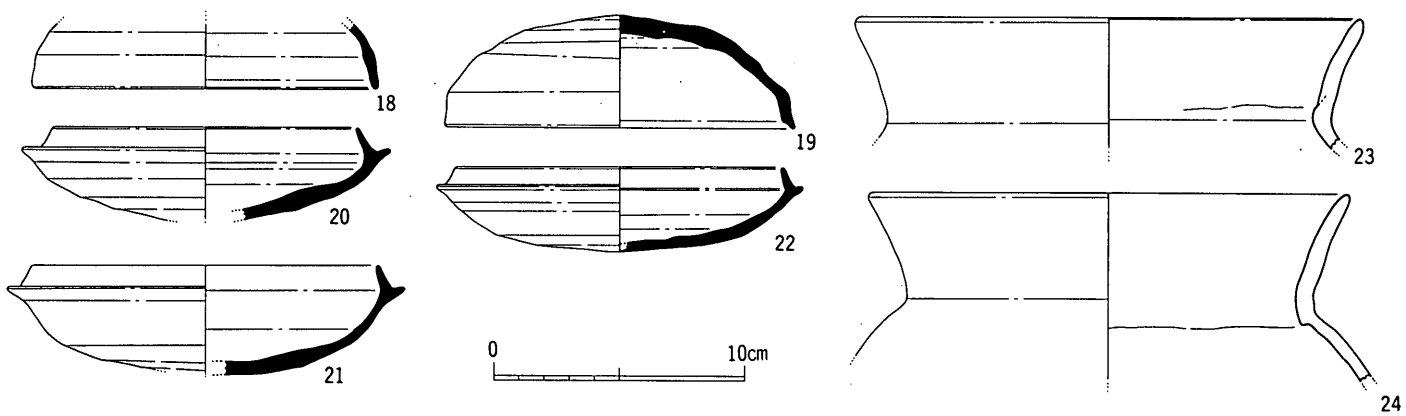
第11図　ＳＨ03・ＳＫ10出土同一個体遺物実測図



第12図　ＳＫ10出土遺物実測図



第13図　ＳＨ03平・断面図



第14図　ＳＨ03出土遺物実測図

SH04

東西3.46m，南北4.1mのやや縦長い竪穴住居である。主軸は，真北から約22°西偏し，検出遺構面から床面までは深さ10cmを計る。この竪穴住居は，四隅に主柱穴があるのではなく，掘立柱建物と同様に2間×4間の柱穴を持つ。柱穴径は，10cmと小さい。

また，北壁においては，焼土が検出されている。しかし，北西部を攪乱されているためにカマドは確認されなかった。

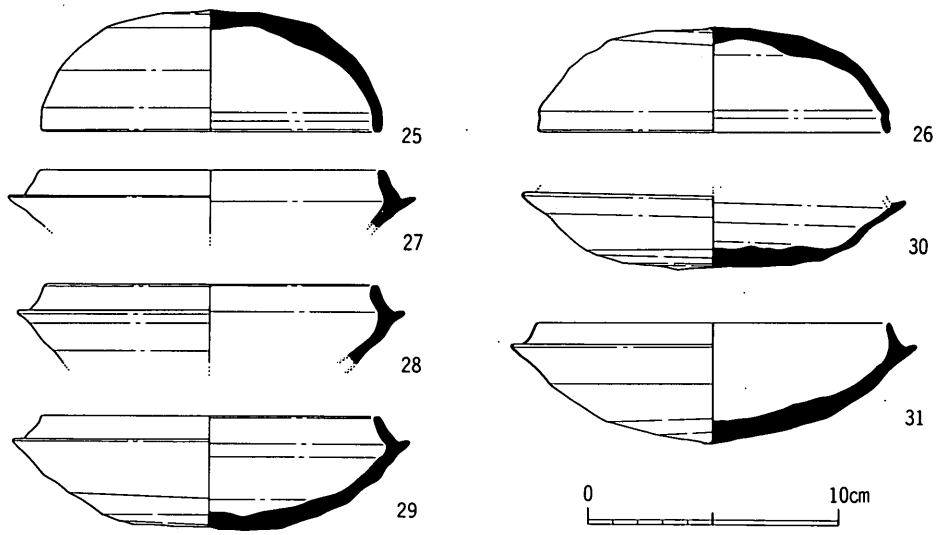
出土遺物は，須恵器・鉄滓である（第15図）。

25・26は，坏蓋である。天井部と体部の境に稜がなく，天井部からそのまま体部になっており，また，口縁内側には少し段を残す。

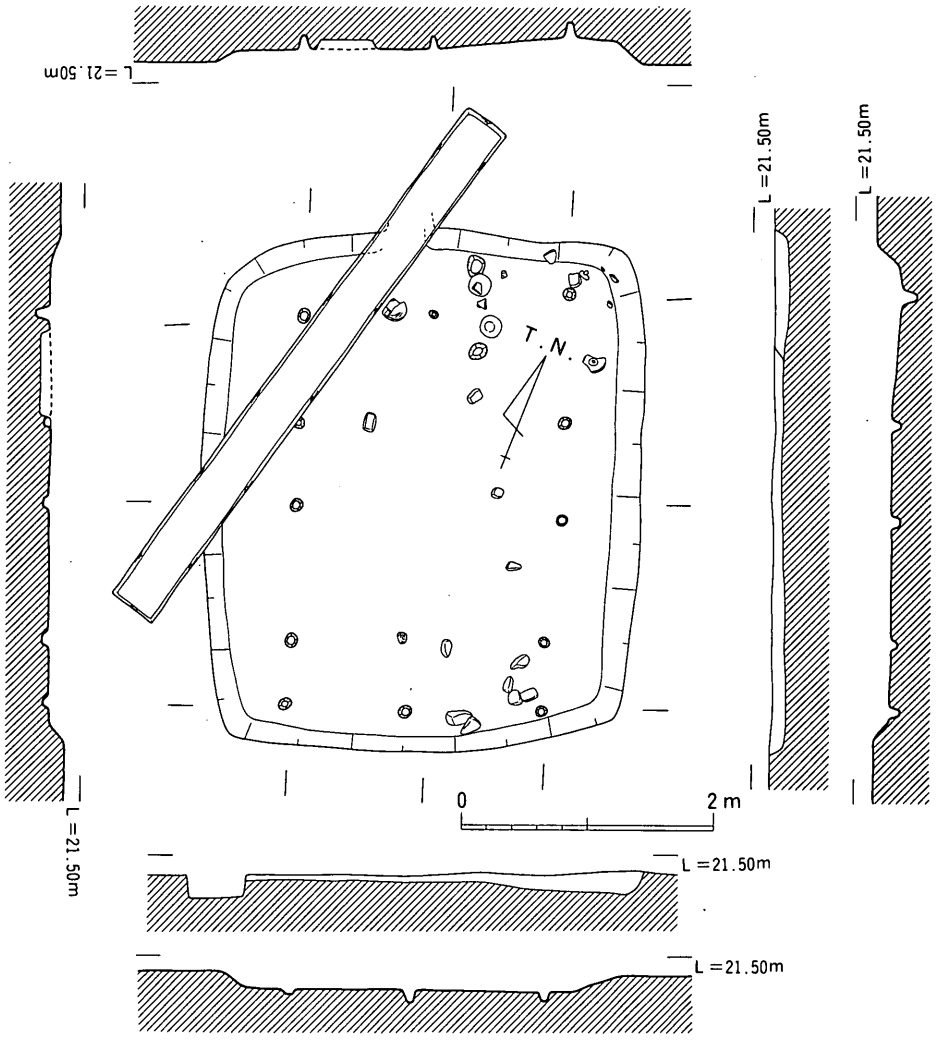
27～31は，坏身で，やや内傾した立ち上がりを持つ。退化傾向のある立ち上がりである。30は，坏身であるが，故意に立ち上がりを打ち欠いており，蓋あるいは皿へと転用したものと思われる。

また，竪穴住居出土の鉄滓は，製錬施設の存在を窺わせるが，その他に関連遺物が出土していないので再度検討が必要である。

竪穴住居の時期は，6世紀後半頃と思われる。



第15図　SH04出土遺物実測図



第16図　ＳＨ04平・断面図

ＳＨ05

この竪穴住居は，西半分程が範囲外にあることから東西長が不明であるが，確認されている南北長から推定して一辺約4.50mの方形の竪穴住居と思われる。主軸は，真北から約16°東偏し，検出遺構面から床面までは深さ20cmを計る。

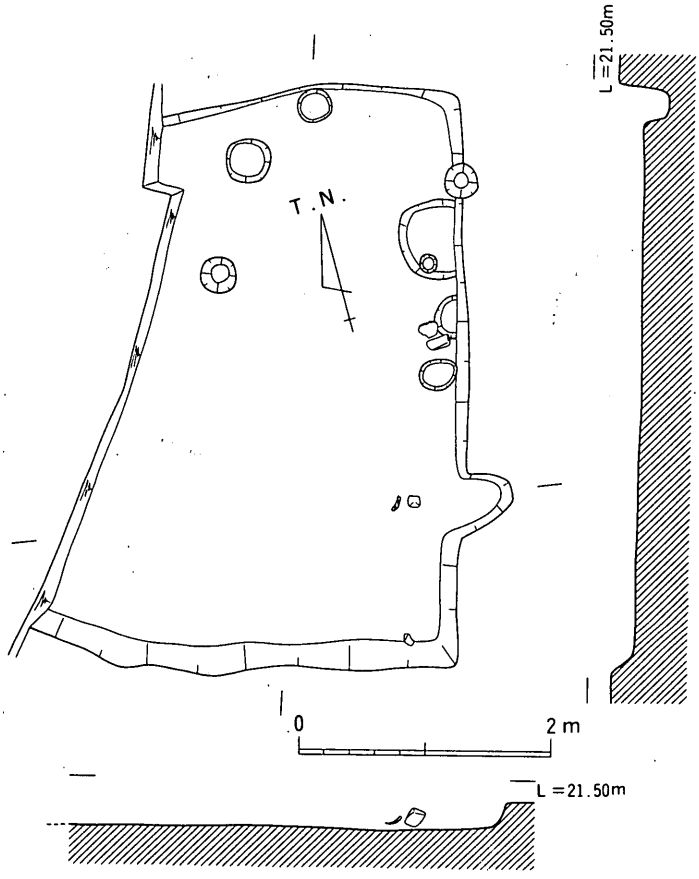
主柱穴は，確認されておらず，どの様な上部構造になっていたかは不明である。また，カマドは東壁にあり，焼土も確認されている。ＳＨ01～04とはカマドの位置が異なっており，特異な例である。

出土遺物は，須恵器を主としている（第18図）。

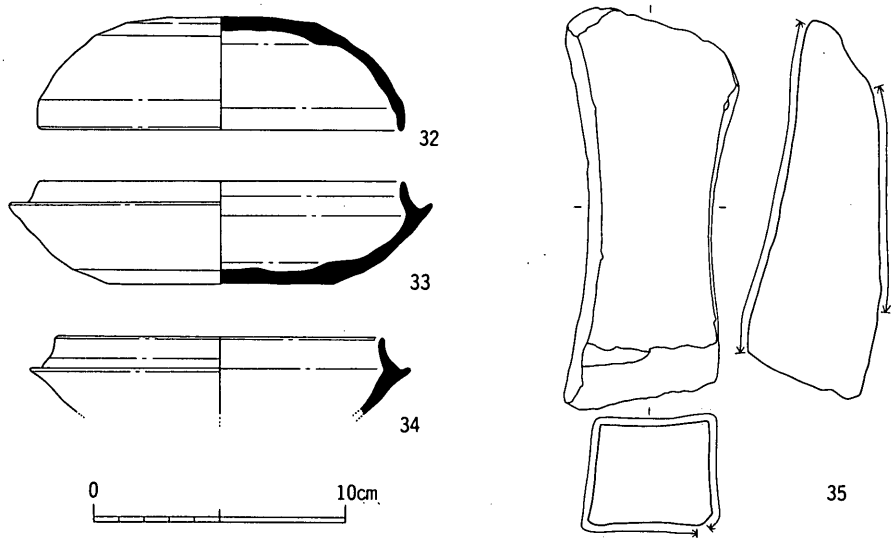
32は，坏蓋で天井部と体部の境に稜がなく，口縁端部内面に少しの段を残すものである。

33～34は，坏身で，やや内傾気味の立ち上がりとやや退化傾向の受け部を持つものである。

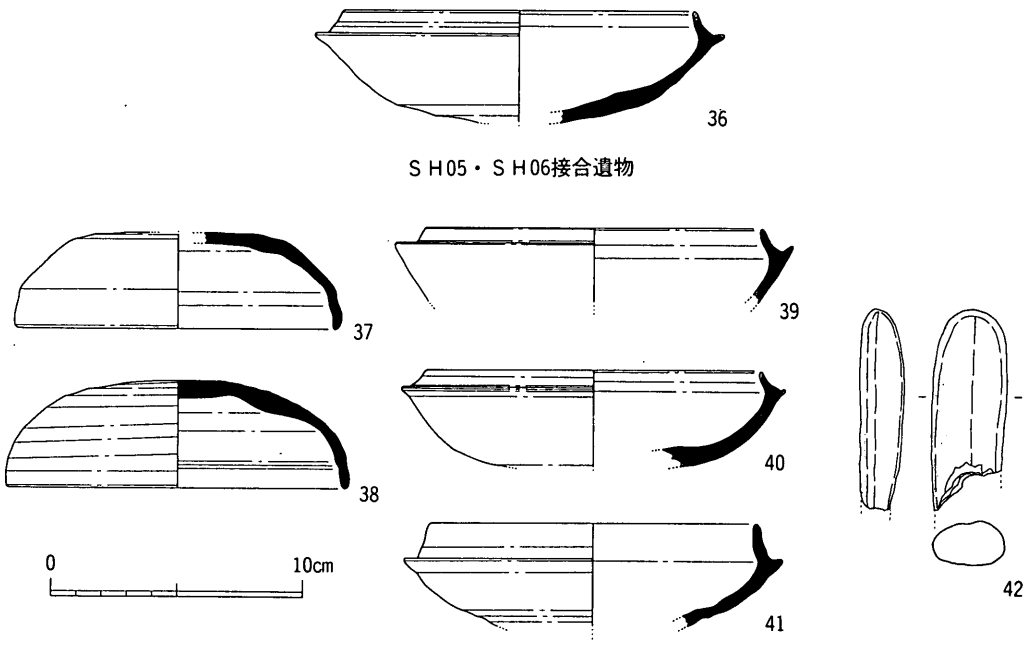
35は，砂岩製の砥石で，四辺に研ぎ面を持ち，かなり使い込まれたものと思われる。



第17図　ＳＨ05平・断面図



第18図　ＳＨ05出土遺物実測図



第19図　SH06出土遺物実測図

SH06

一辺約4mの方形の竪穴住居である。主軸は，ほぼ真北をとっており，検出遺構面から床面までは深さ10cmを計る。床面には，柱穴が数個確認されているが，それらに規則性はなく，この柱穴を使った上部構造は考えられない。また，北辺には，造り付けのカマドを有し，焚き口部では焼土も検出された。しかし，カマドの構造については，不明である。中央部床面は，少し掘りくぼめられており，中から土器が数点出土している。

出土遺物は，須恵器・土師器である（第19図）。そのほとんどは，カマド近くの焼土中より出土しており，他には，中央の土坑及び南壁際に土師器の甕がおかれていたように出土した。

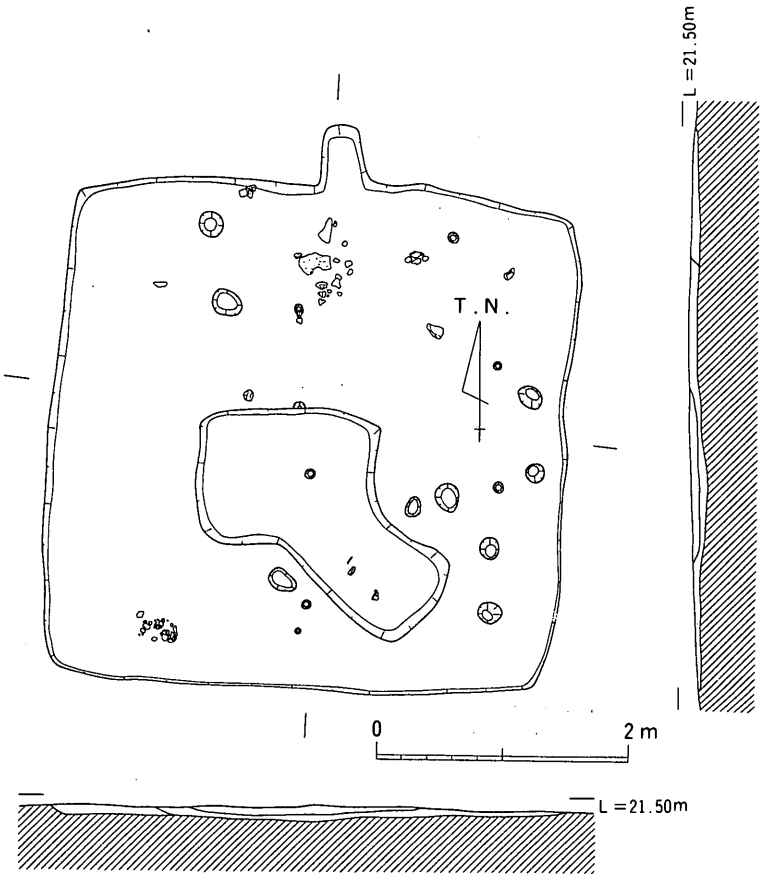
37・38は坏蓋で，天井部と体部の境に稜がなく，口縁部内面に段を有するものである。

39～41は坏身で，39・41は内傾する立ち上がりを持ち，受け部もかなりしっかりしている。

42は，敲き石と思われる。先端部に敲打面があり，中央部で欠損している。

SH05・06出土遺物の中に同一個体と思われる須恵器（36）が確認された。36は，須恵器の坏身で，内傾する立ち上がりを持ち，受け部もしっかりとしている。このように，別の竪穴住居出土遺物に，同一個体と思われるものが出土するということは，両者が同時期に機能していたということであり，また，ごく近い関係にあった者が住んでいた可能性が考えられる。

時期は，6世紀後半頃と思われる。



第20図　ＳＨ06平・断面図

ＳＨ07

南北5.94m，東西6.62mのやや横に長い方形の竪穴住居である。主軸は，真北から約30°西偏し，検出遺構面から床面までは深さ20cmを計る。

主柱穴は，四隅に検出され，側溝は周囲に認められた。柱穴は，掘り方及び柱痕を残しており，柱の太さが確認できる。北辺に造り付けのカマドを持つ。焼土は，焚口部付近に堆積しており，床面より一段低く掘りくぼめられていた。

出土遺物は，焼土付近に集中しており，須恵器・土師器が多数出土している（第21図）。

43～49は，坏蓋で，天井部と体部の境に稜を持つもの（47・49），口縁端部内面に段を持つもの（44・45・48）などがある。

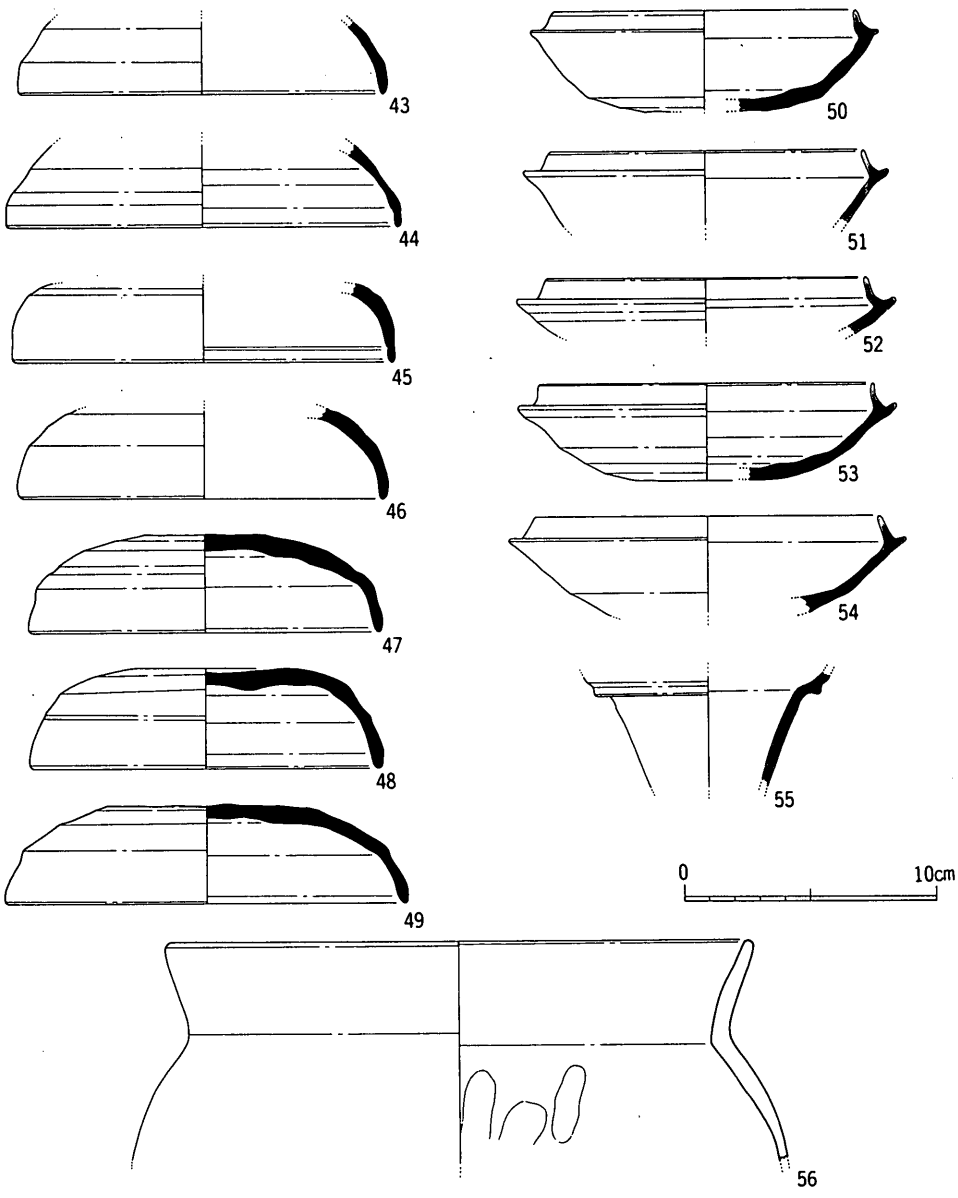
50～54は，坏身で，内傾する立ち上がりを持っているが，かなり萎小化している。

55は，瓶の頸部と思われる。

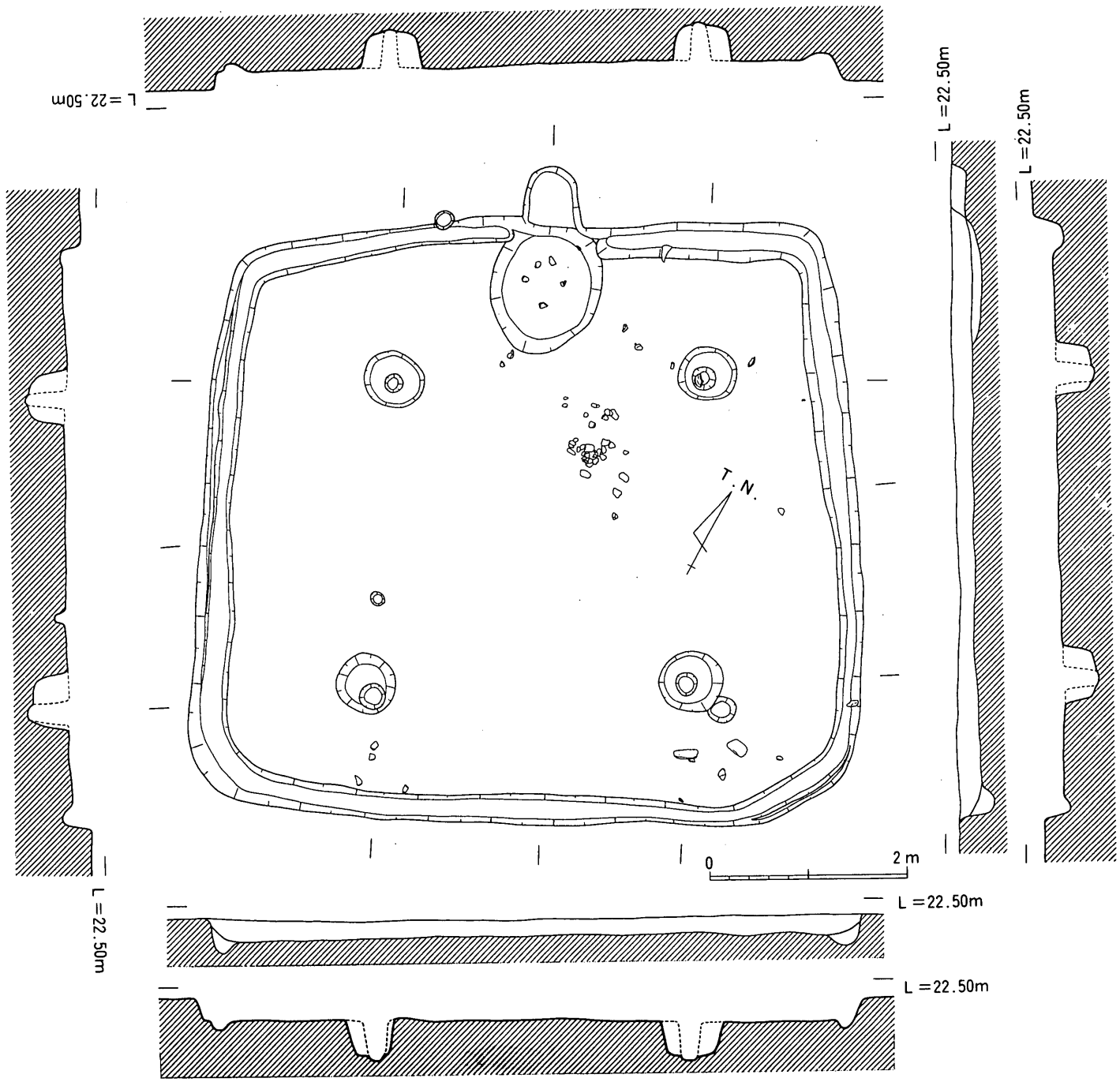
56は，土師器甕で，口縁は外方に直線的に延びる。

時期は，６世紀後半頃と思われる。

ＳＨ01～06出土遺物に比べると古い要素がなくなりかけているものばかりである。



第21図　ＳＨ07出土遺物実測図



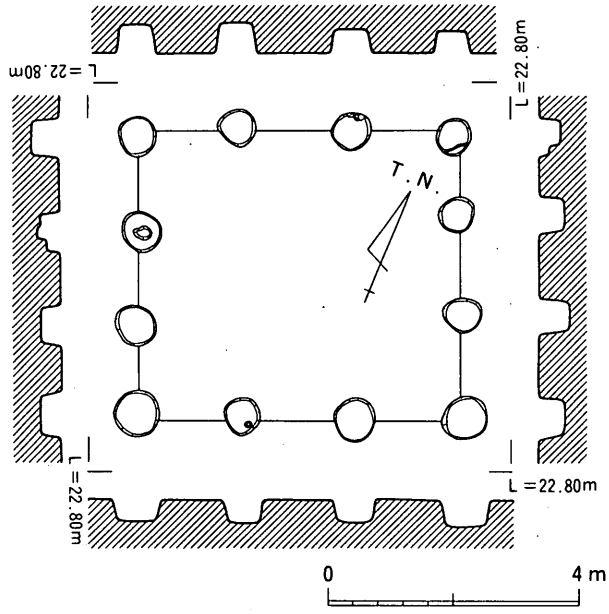
第22図　ＳＨ07平・断面図

SB39

SB39は，梁間3間×桁行3間（459×516cm）の掘立柱建物である。柱間長は平均約162.5cmで，柱穴径は平均約65.4cmを計る。主軸は，真北より23°西偏しており，竪穴住居とほぼ同じである。他の掘立柱建物に比べると柱穴も大きくしっかりした掘り方を持つ。埋土は，竪穴住居の埋土と同じであり，柱穴より遺物は出土していないが，ほぼ同時期に併存していたものと思われる。

当遺跡のD－6・7・8，E－7・8においては，竪穴住居のみで，SB39と同規模の建物は検出されなかった。

SH07に近接してSB39が検出されたことと，竪穴住居が他のものに比べてしっかり造られていることからSH07の居住者が，階層的に上位の者であったことが窺われる。



第23図　SB39平・断面図

土井之内古墳

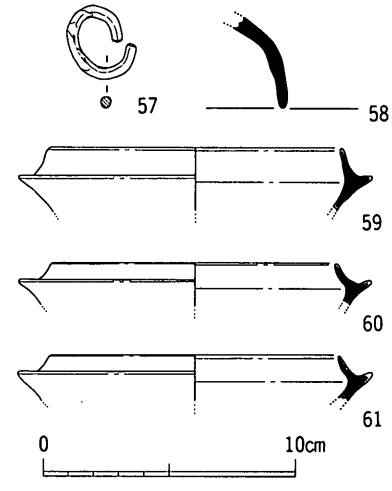
調査区南端のM－3で検出された古墳は，周辺を粘土採取のため，ほとんど破壊されており，残存しているのは，古墳の基底石と床石の一部であった。そのために，墳丘規模・石室構造・周溝の有無については不明である。玄室規模は，基底石の抜き取り穴から推察して幅110cm，奥行きは，現存で160cmを残すのみであった。おそらく，基底石の構造から，観音寺市母神山古墳群，大野原町縁塚古墳群などの特徴的な石室構造である方柱状の川原石を直列的に基底石として並べ，上部については川原石を基底石と直交するように小口積みする構築方法をとっているものと思われる。

石床は，地山整形に3～10cm程度の玉砂利を厚さ10cmに敷き，その上面を埋葬面としていたようである。

遺物は，床面直上より耳環1点，須恵器片が出土しただけである。

耳環（57）は，銅製の芯を使い外面に銀を張ったものと思われる。後に攪乱のために変形しているが，この古墳に伴うものと思われる。

また，須恵器は，天井部と体部間に稜を残さず内面端部の段も消滅した坏蓋（58）と立ち上がりのかなり退化傾向にある坏身（59・60・61）が出土しており，これらは，同一遺構面で検出されている竪穴住居とほぼ同時期の6世紀後半頃のものと思われる。

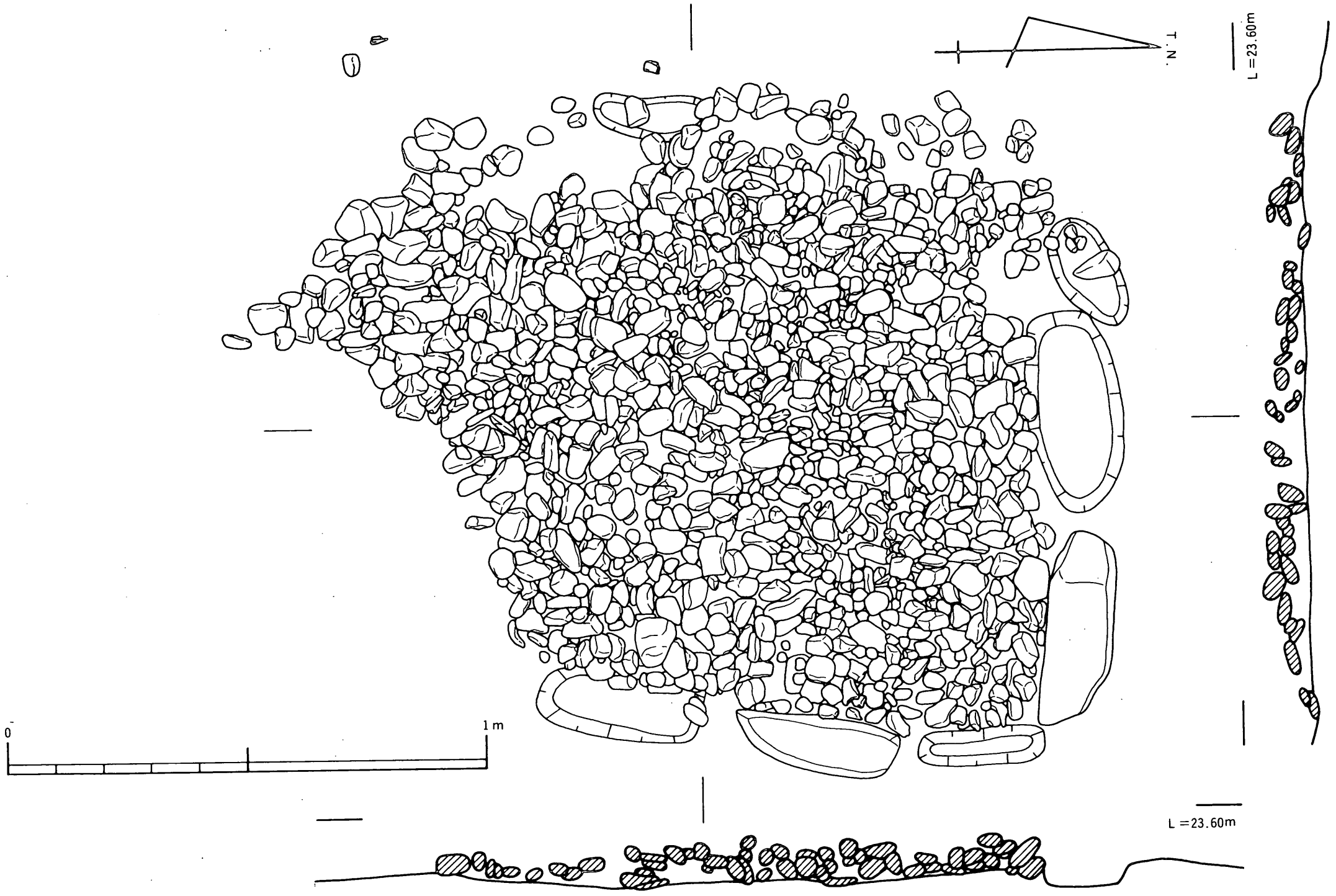


第24図　古墳出土遺物実測図

この調査で検出された古墳は，遺跡台帳に未掲載の古墳である。そのため，この報告書において，小字名（土井之内）を取り，この古墳の名称としたい。

柵列（ＳＡ01・02）

調査区南部の遺構検出状態を見ると，古墳時代の遺構である竪穴住居ＳＨ07，掘立柱建物ＳＢ39と土井之内古墳を画する様に2つの柵列ＳＡ01・02が検出されている。これらの柵は，ＳＡ01が柱間平均約120cmで，ＳＡ02が柱間平均約65cmである。この2つの柵列は，互い違いにはなっているが，平行に造られており，竪穴住居・掘立柱建物と古墳を分ける様に造られていることから，おそらく居住域と墓域を画する柵列かと考えられる。



第25図　土井之内古墳平・断面図

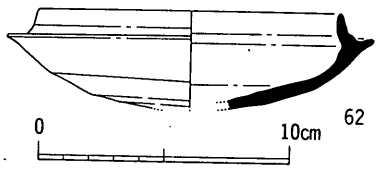
ＳＤ01

調査区最北端Ａ－９，Ｂ－10・11において古墳時代（６世紀後半頃）の溝を検出した。この溝は，調査区北半をかすめるように検出され，調査区外へと延びている。そのために，性格等については不明であるが，竪穴住居の密集するグリッドとの間にこの時期の遺構が検出されていないということから推察すると，生産域においての水田に伴う灌漑用の水路の可能性が強い。

以上のように，古墳時代（６世紀後半頃）の遺構を概観してみると，当遺跡での古墳時代の様相は，生産域・居住域・墓域の３つに区画されていることがわかる。これを微地形に照らし合わせてみると，屋根筋の高所に墓域，低所に生産域，それらの中間に居住域が営まれていたことがわかる。

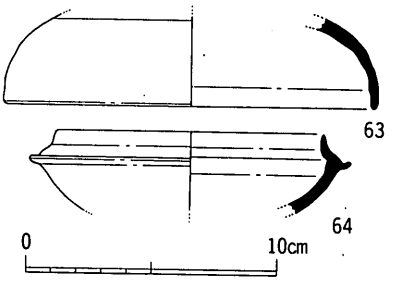
ＳＫ11

Ｋ－３で不定形の土坑を検出した。出土遺物より，古墳時代（６世紀末）であることが判明し，竪穴住居の可能性も考えられたが，床面が平坦でなく，平面形も不定形であることなどにより，ここでは土坑としておく。



第26図　ＳＤ01出土遺物実測図

出土遺物は，須恵器の坏身・坏蓋が２点出土しているにすぎず，時期は６世紀末でその他の遺構とほぼ同時期と考えられる。



第27図　ＳＫ11出土遺物実測図

(4) 7世紀初頃

ＳＴ01・02

グリッドＣ－８において，土壙墓２基（ＳＴ01・02）が検出された。

ＳＴ01は，長辺216cm，短辺約76cmの長方形を呈しており，検出遺構面からの深さは24cmを計る。主軸は，Ｎ－67°－Ｗをとる。完掘状態の西側短辺際床面直上で，10×20cm大の石が検出された。棺台あるいは石枕かと思われる。

出土遺物はなく，時期は不明である。

ＳＴ01の東に，主軸をほぼ同じくするＳＴ02を検出した。長辺266cm，短辺約149cmの長方形を呈し，検出遺構面からの深さは43cmを計る。ＳＴ01より少し大きく，掘り方もしっかりしている。

出土遺物は，東辺に須恵器（短頸壺１点，坏身１点，坏蓋２点）４点が，まとめられて副葬されていた(第28図)。また，包含層中には，38×16cmの石があり，棺台かあるいは棺上に置かれた石の可能性が考えられる。

65・66は，須恵器坏身・蓋の逆転期前後の坏蓋である。65は，逆転前の坏蓋でかなり小型化しており，天井部はヘラ切りのまま終わらせている。66は，逆転後の坏蓋で器高が低く内側に小さくかえりがつくものである。

67は，坏身で，かなり萎小化した立ち上がりを持ち，底部はヘラ切りされている。

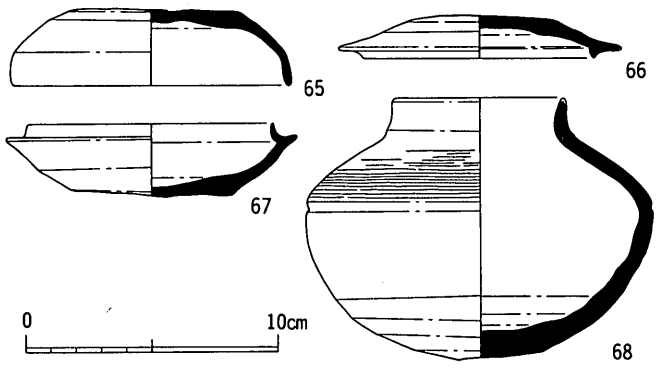
68は，短頸壺で，肩部に稜を持たないものである。

おそらく，65と67，66と68がセット関係を持つものと思われる。時期は，７世紀初頃と思われる。

ＳＴ01と02は，主軸方向が等しいことより，ほぼ同時期の土壙墓と思われる。

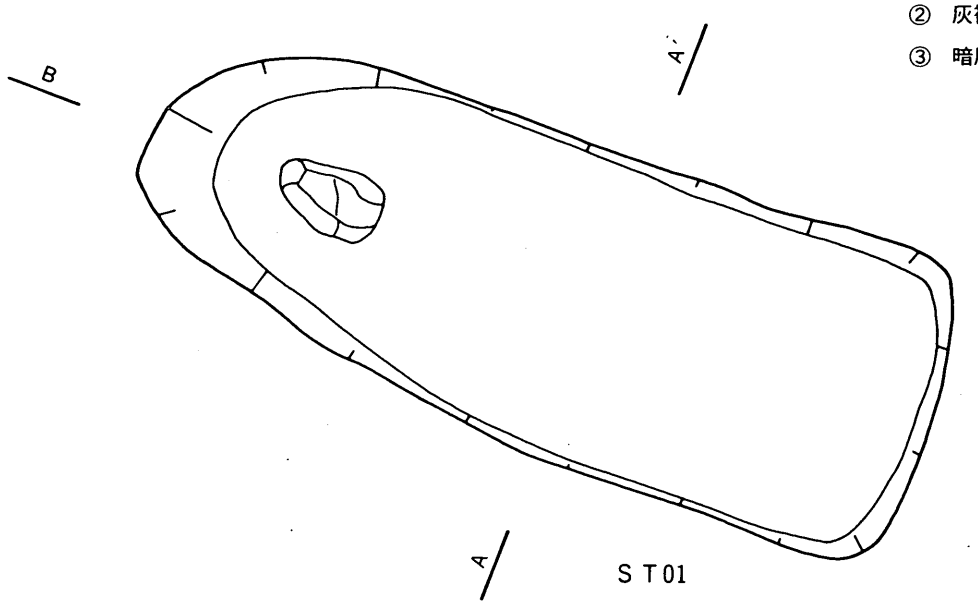
ＳＴ01において枕かと思われる石が確認されていることより，ＳＴ02の副葬品である須恵器は，おそらく足部に置かれたものであろう。ＳＴ01に比べるとＳＴ02は，掘り方もしっかりしており，副葬品も埋葬されていることから戸主の墓ではないかと思われる。

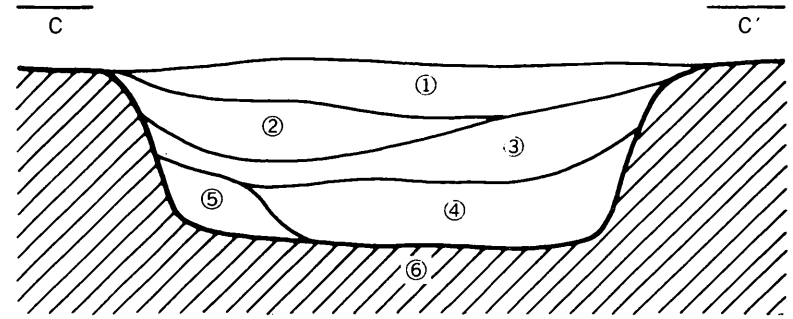
また，当遺跡において，これらの土壙墓と同時期の遺跡は，他に検出されず，削平の可能性もあるが，今回の調査では，単独の検出となった。

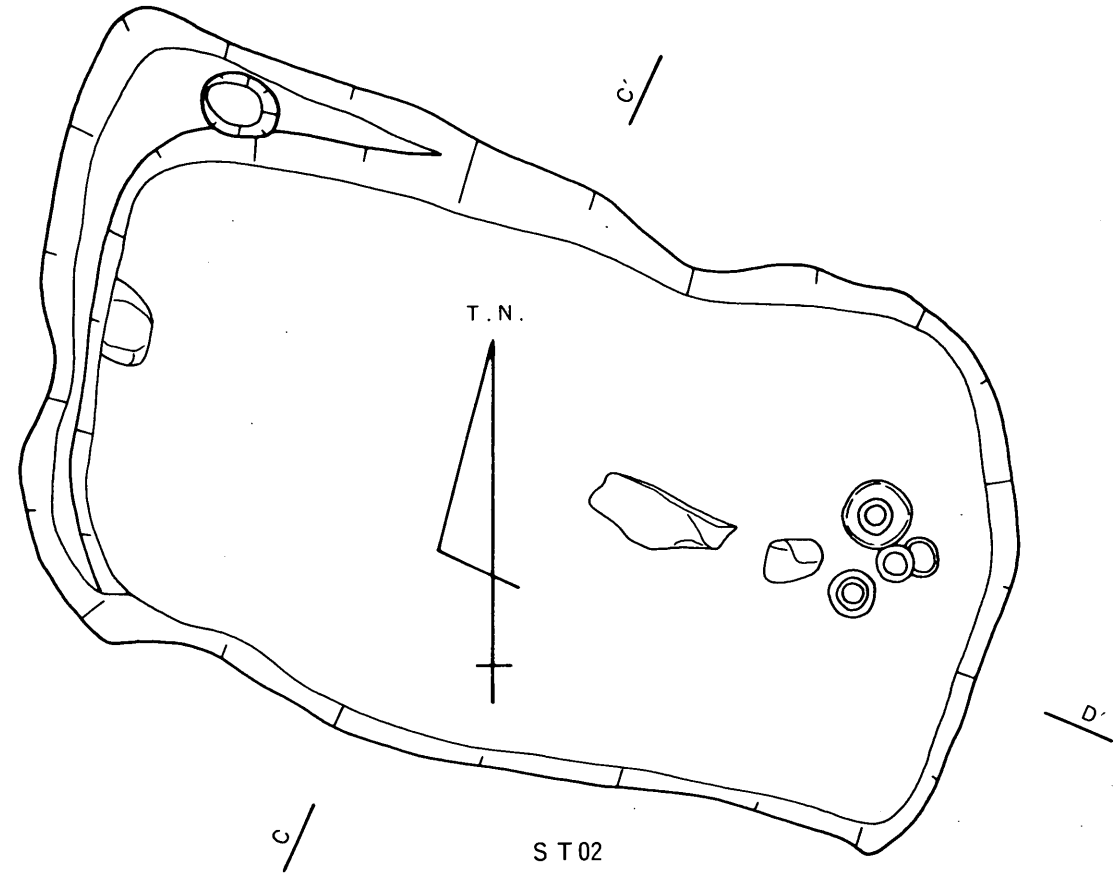


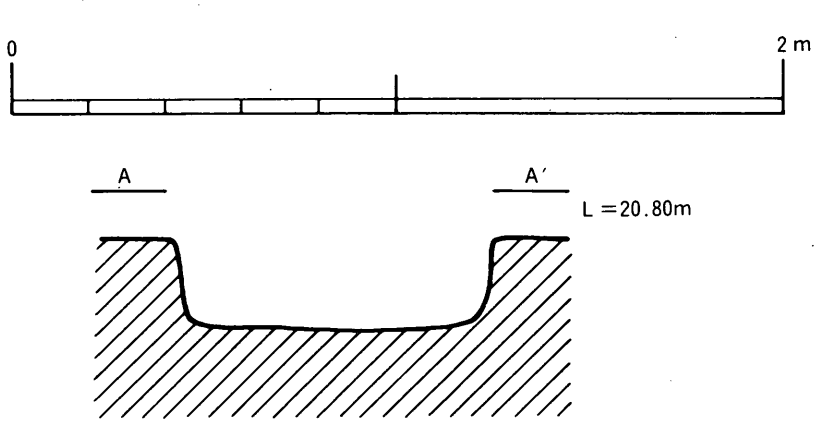
第28図　ＳＴ02出土遺物実測図

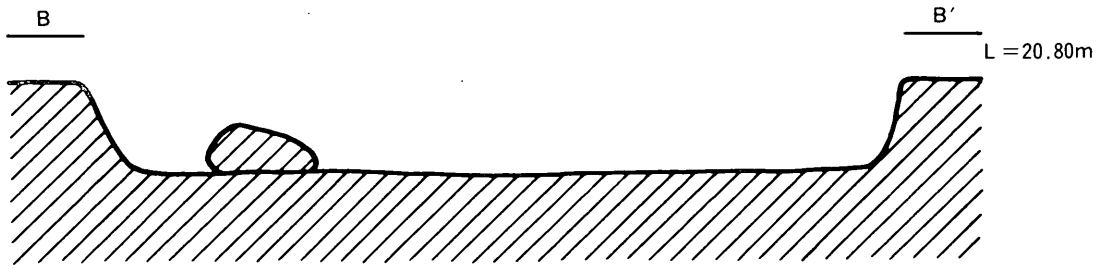
① 褐灰色粘質土層
② 灰褐茶色粘質土層
③ 暗灰褐色粘質土層
④ 濁茶灰色粘質土層（土器出土埋土）
⑤ 濁茶黄色粘質土層
⑥ 茶黄色粘質土層（ベース）

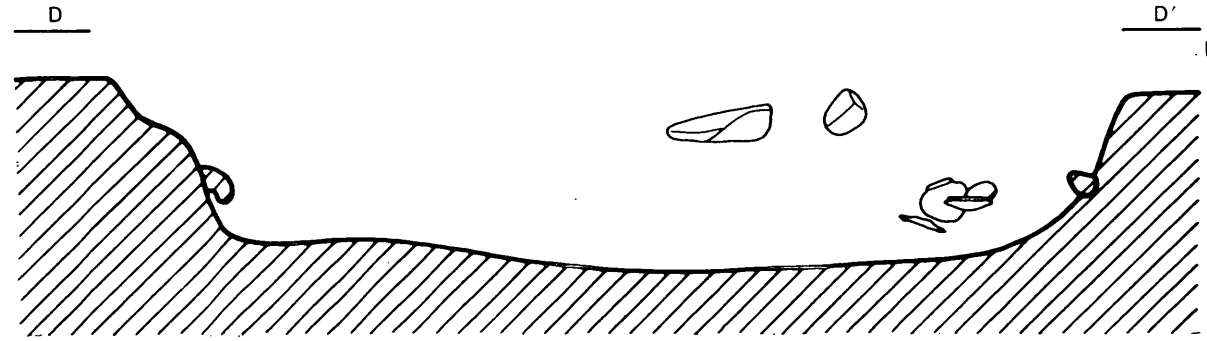












第29図　S T01・02平・断面図

(5) 古墳時代後期～奈良時代

SD07・08

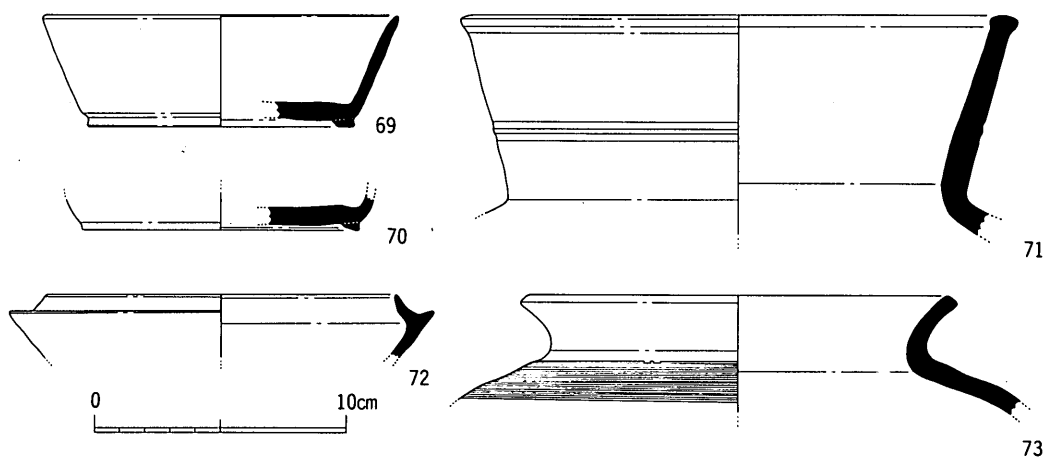
調査区南端において，6世紀後半（古墳時代後期）～8世紀頃までの遺物を包含した溝状遺構SD08が検出された。この溝は，調査区内で半円形状に確認されており，天幅255cm，深さ41.7cmを計る。

また，その中央部からは，細溝SD07が北方に延びており，SD08との切り合いから見ると同時期と思われる。

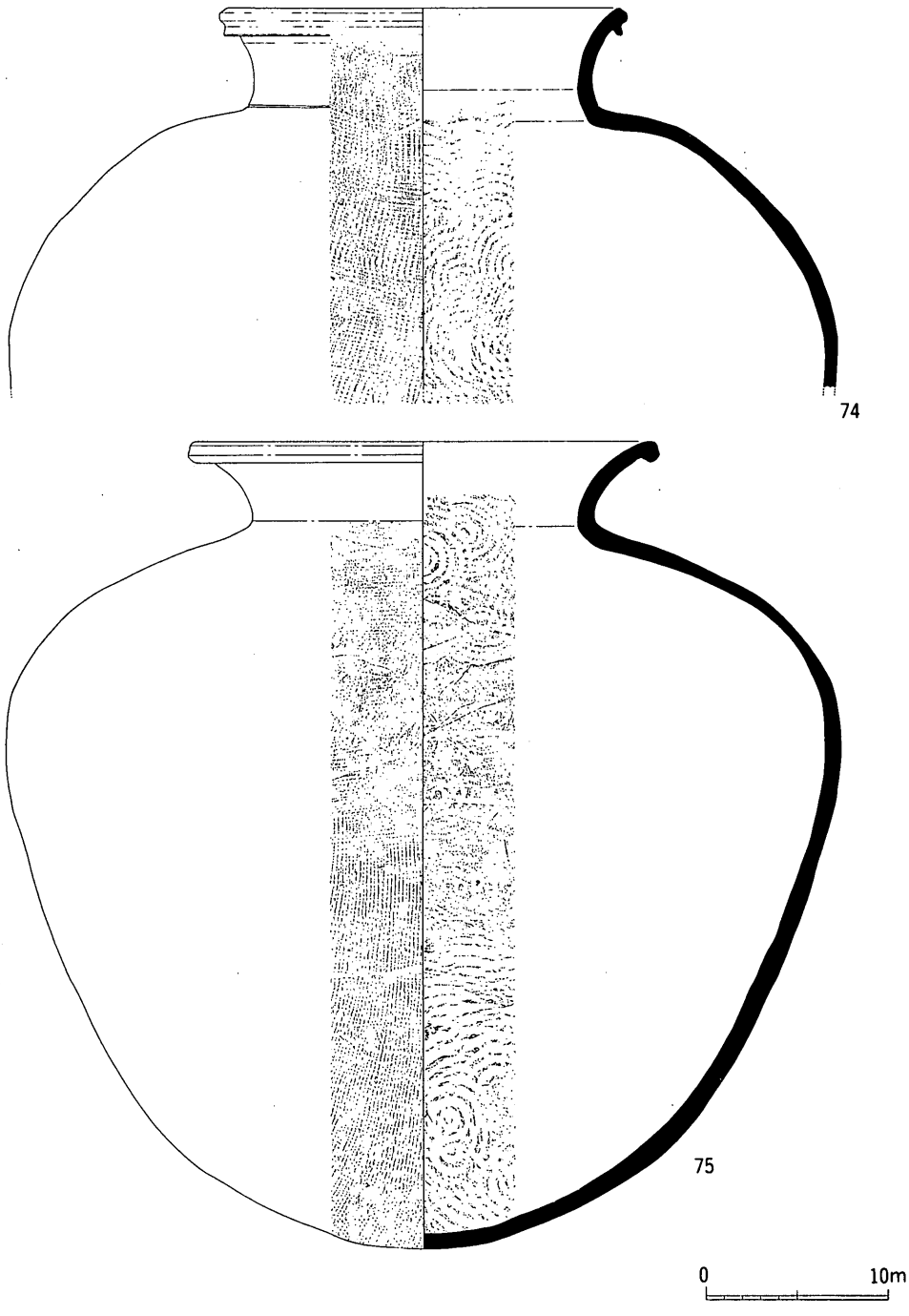
SD08出土遺物を見ると，須恵器坏身（6世紀後半頃），甕・壺・高台付坏（8世紀頃）が出土しており，竪穴住居・古墳が営まれていた頃～8世紀頃に機能していた溝と思われる。そのため，この溝は，当初古墳の周溝の可能性が考えられていたが，8世紀の高台付坏が溝上層からの出土ということもあり，一概に古墳の周溝とは言えない。

SD08は，溝内埋土を上層・下層に細分できる。まず，上層出土遺物は，須恵器高台付坏（69・70）・壺（71）である。69・70は，底部の端に偏平な低い高台が付く坏で，体部は直線的に外方へ延びる。71は，直線的に外方へ延びる頸部を持つ壺で，口縁端部は，上部に平坦面を持たせおさめている（第30図）。

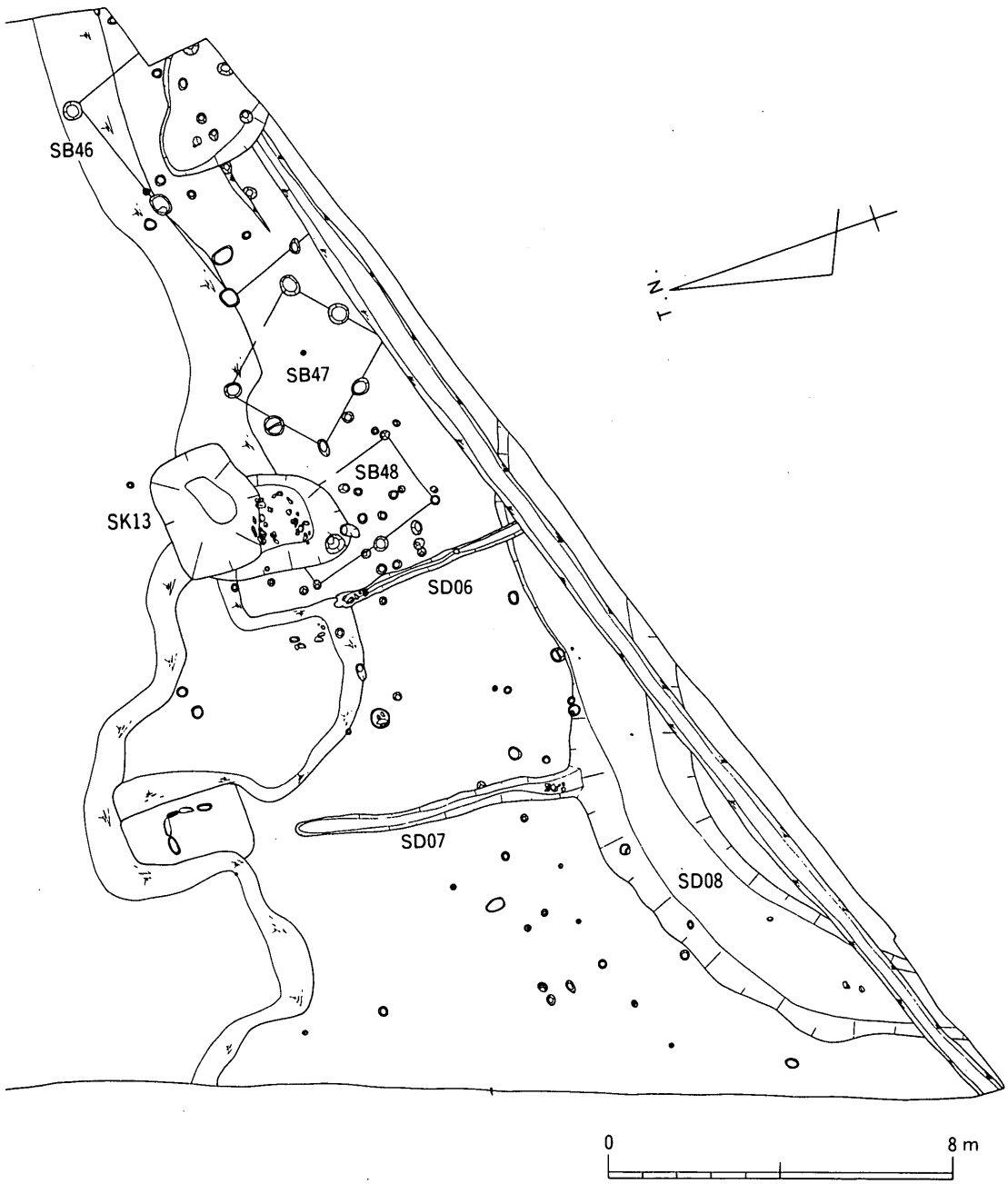
次に下層出土遺物は，須恵器の坏身（72），壺（73），甕（74・75）が出土している。72は，立ち上がりは内傾しており，受け部はしっかりしている。73は，壺で，体部上半にクシ描きが施され，頸部はやや外反しながら立ち上がる。74・75は大型の甕で，ほぼ一個体を破壊して投げ込んだように検出された（第30図，第31図）。



第30図　SD08出土遺物実測図①



第31図　ＳＤ08出土遺物実測図②



第32図　L－2・3，M－2・3遺構平面図

(6) 中　世

柞田八丁遺跡では，中世の遺構として47棟もの掘立柱建物と溝状遺構，土坑及び多数の柱穴を検出した。これらの遺構は，ほとんどが調査区の北西端で検出されており，中央部では後世の攪乱のため中世の遺構は検出されていない。検出された遺構の時期は，ＳＢ10・ＳＢ11以外の遺構から，遺物がほとんど出土していないことから，遺構の時期差・前後関係を考察するまでにはいたっていない。そのためここでは，これら中世の掘立柱建物についてそれぞれの主軸方向でグループ分けを行なうことによって，中世における各時期の建物配置の様相を考察してみたい。また，土坑及び溝状遺構については，掘立柱建物のあとに述べることにする。

47棟の掘立柱建物を主軸方向で分けると，①約Ｎ－38°－Ｗに主軸をとる一群（ＳＢ03・ＳＢ08・ＳＢ12・ＳＢ16・ＳＢ26・ＳＢ45・ＳＢ47），②約Ｎ－19.8°－Ｗに主軸をとる一群（ＳＢ23・ＳＢ30・ＳＢ32・ＳＢ46・ＳＢ48），③ほぼ真北に主軸をとる一群（ＳＢ05・ＳＢ17・ＳＢ21・ＳＢ31・ＳＢ33・ＳＢ44），④約Ｎ－10.2°－Ｅに主軸をとる一群（ＳＢ01・ＳＢ25・ＳＢ27・ＳＢ29・ＳＢ41・ＳＢ42），⑤約Ｎ－16.3°－Ｅに主軸をとる一群（ＳＢ20・ＳＢ38・ＳＢ43），⑥約Ｎ－29°－Ｅに主軸をとる一群（ＳＢ07・ＳＢ11・ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ24・ＳＢ34・ＳＢ35・ＳＢ36・ＳＢ40），⑦約Ｎ－39.2°－Ｅに主軸をとる一群（ＳＢ02・ＳＢ04・ＳＢ09・ＳＢ19・ＳＢ28），⑧約Ｎ－44°－Ｅに主軸をとる一群（ＳＢ06・ＳＢ10・ＳＢ18・ＳＢ22・ＳＢ37）の８群になり，それぞれの時期ごとに説明を加えるが，当遺跡の細分方法については，地理的条件及び生活領域の制限などの外的要因を考慮に入れていないため，中世期の建物配置を復原していない可能性もあるがここでは今後この細分が中世の建物配置の一資料になればと思い資料操作を試みた。その結果を北半の掘立柱集中部分について概観してみたい。

①　第一群（Ｎ－38°－Ｗに主軸をとる一群）

ＳＢ03

ＳＢ03は，梁間１間×桁行２間（275×490cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約255cmで，柱穴径は平均約25cmを計る。主軸は，真北より38°西偏している。

ＳＢ08

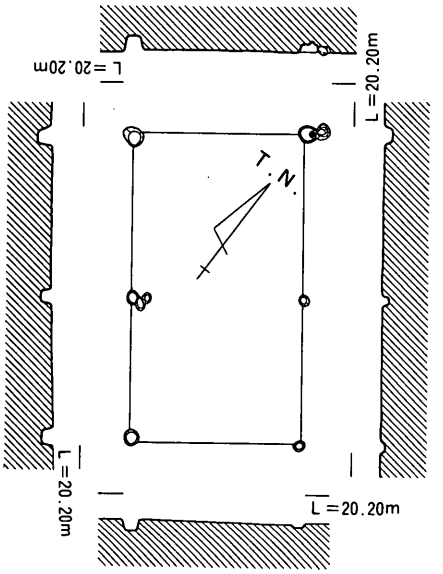
ＳＢ08は，梁間１間×桁行２間(269×349cm)の掘立柱建物である。柱間長は，平均約269cm(梁間)・174.5cm（桁行）で，柱穴径は，平均約33.5cmを計る。主軸は，真北より38°西偏している。

ＳＢ12

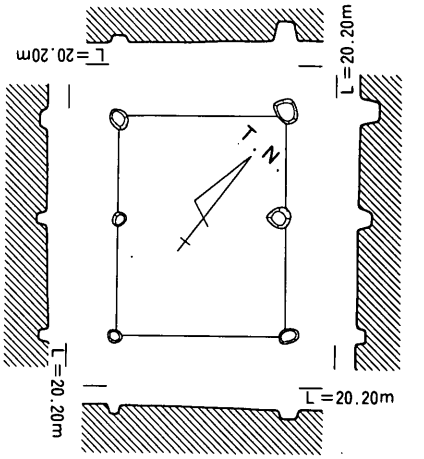
ＳＢ12は，梁間１間×桁行２間(288×367cm)の掘立柱建物である。柱間長は，平均約288cm(梁間)・183.5cm（桁行）で，柱穴径は，平均約27.7cmを計る。主軸は,真北より42°西偏している。

ＳＢ16

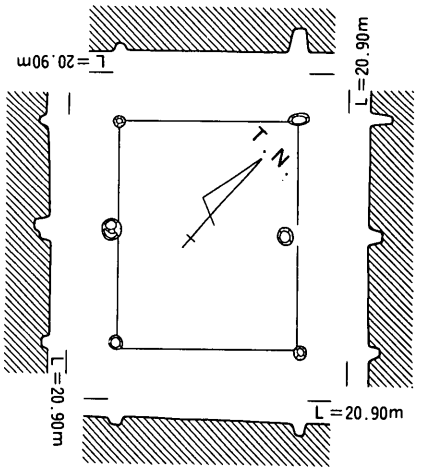
ＳＢ16は，梁間１間×桁行２間（258×360cm）で東西に長く，南に１間の庇を持つ掘立柱建物であると思われる。柱間長は，平均約258cm（梁間）・180cm（桁行）で，柱穴径は，平均約22.5cm



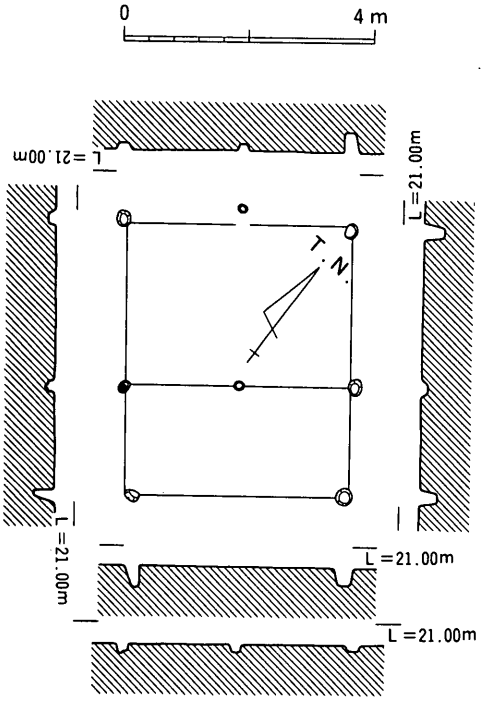
第33図　ＳＢ03平・断面図



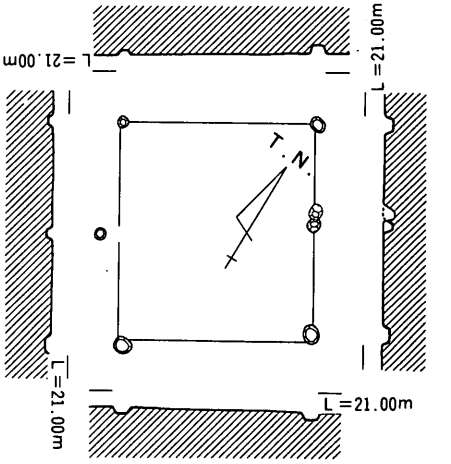
第34図　ＳＢ08平・断面図



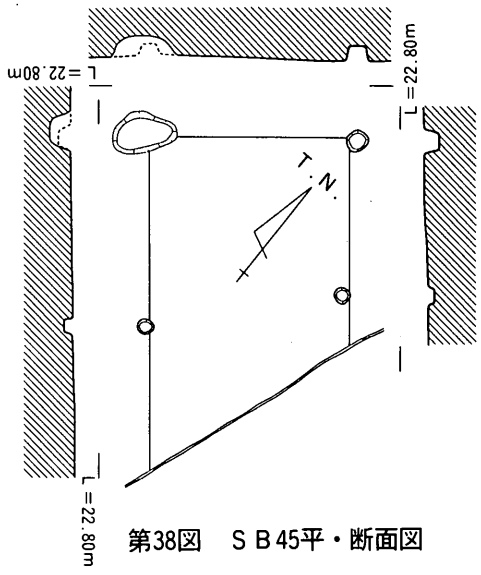
第35図　ＳＢ12平・断面図



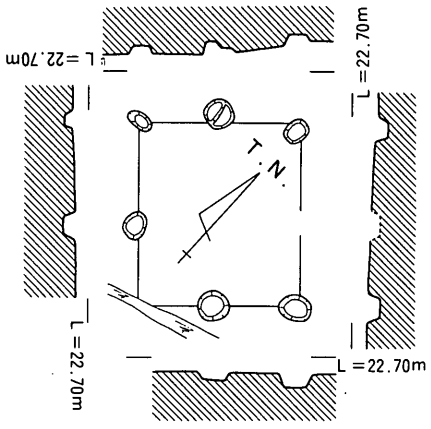
第36図　ＳＢ16平・断面図



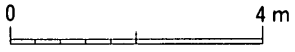
第37図　ＳＢ26平・断面図



第38図　ＳＢ45平・断面図



第39図　ＳＢ47平・断面図



を計る。主軸は真北より37°西偏している。

ＳＢ26

ＳＢ26は，梁間１間×桁行２間(312×349cm)の掘立柱建物である。柱間長は，平均約312cm(梁間)・175.4cm（桁行）で，柱穴径は，平均約24.5cmを計る。主軸は，真北より31°西偏している。

ＳＢ45

ＳＢ45は，梁間１間×桁行(2)間［320×（520）cm］の掘立柱建物と思われる。柱間長は，平均280cmで，柱穴径は，平均約30.7cmを計る。主軸は，真北より40°西偏している。

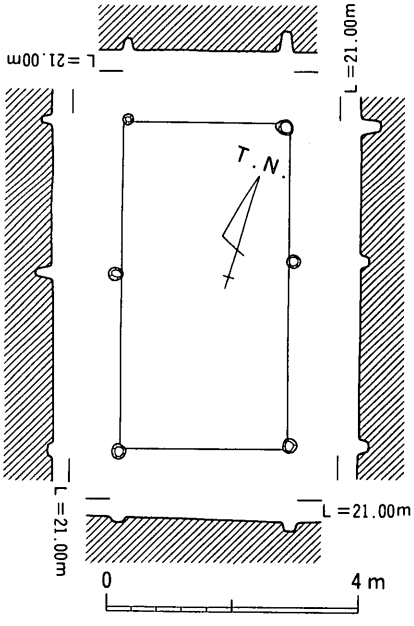
この建物は，南半分が範囲外に延びていることもあり，全容は不明である。

ＳＢ47

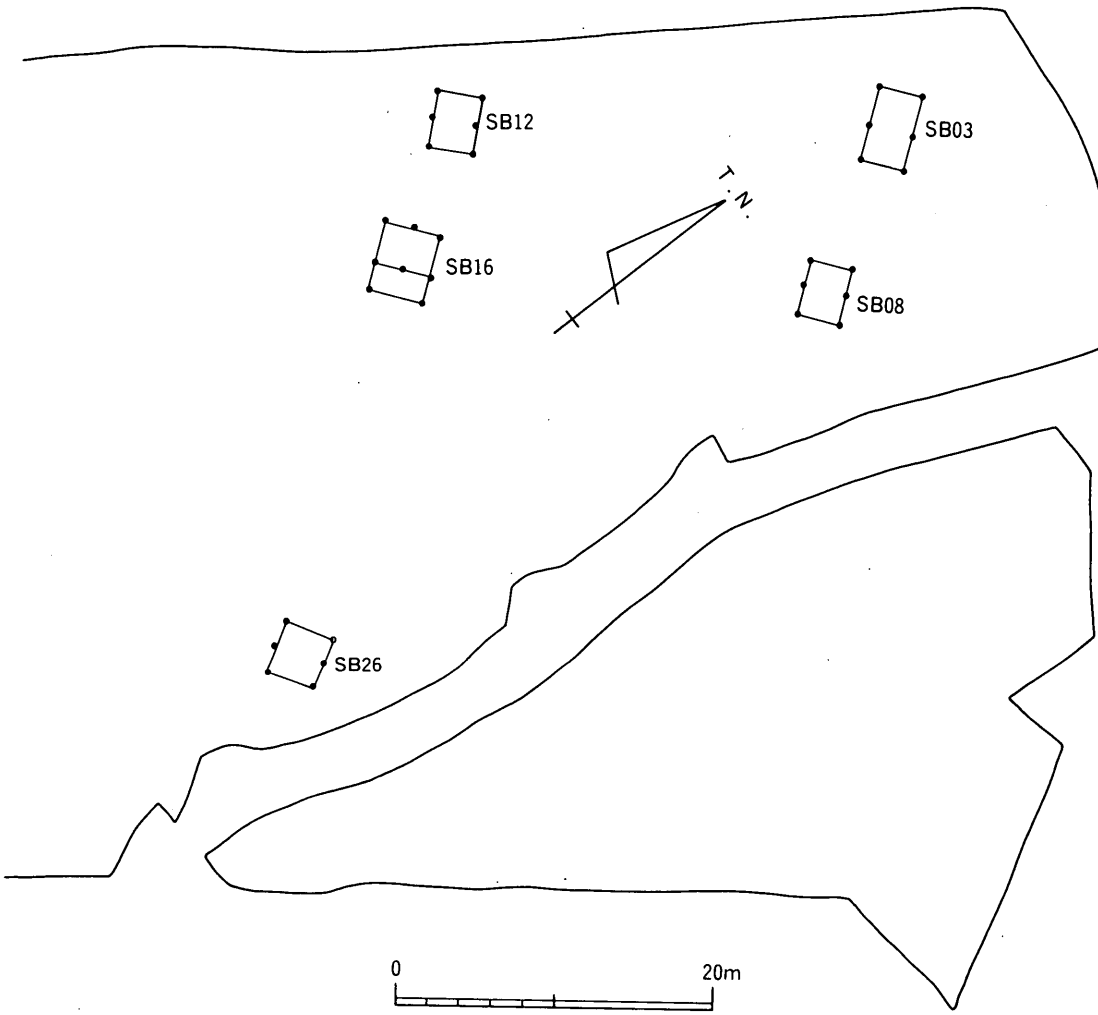
ＳＢ47は，梁間２間×桁行２間（257×288cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約136.3cmで柱穴径は約47cmを計る。主軸は，真北より42°西偏している。

この一群のなかでは，やや大きめの柱穴を持ちほぼ正方形に近い建物である。

以上中世第一群（７棟）の掘立柱建物の中で北半に位置するものは，ＳＢ03・08・12・16・26でこれら５棟の建物配置をみると，全て南北長の建物が整然と並んでいるのがわかる。



第40図　ＳＢ23平・断面図



第41図　第一群掘立柱建物配置図

② 第二群（N－19.8°－Wに主軸をとる一群）

S B23

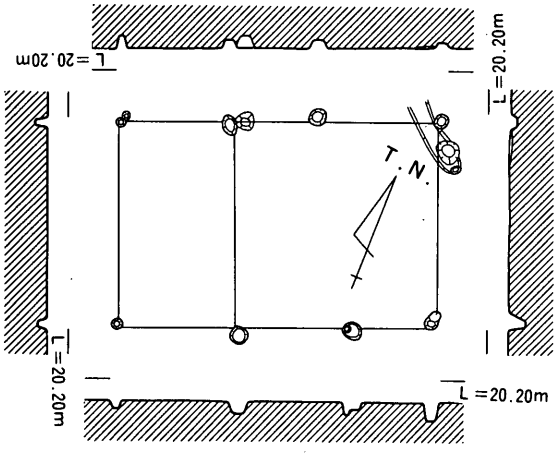
S B23は，梁間１間×桁行２間（264×525cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約263cmで，柱穴径は，平均約24.3cmを計る。主軸は，真北より16°西偏している。

S B30

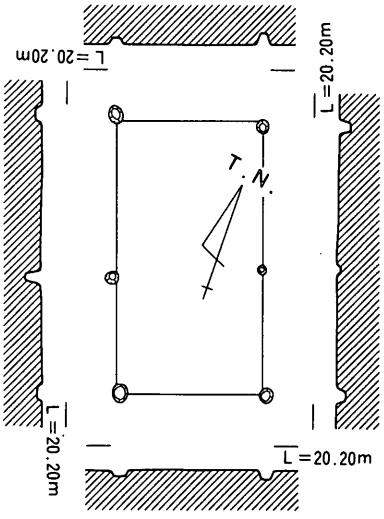
S B30は，梁間１間×桁行２間（323×326cm）のほぼ正方形の建物の西に１間の庇がつく掘立柱建物である。柱間長は，平均約323cm（梁間）・163cm（桁行）で，柱穴径は，平均約30.7cmを計る。主軸は，真北より21°西偏している。

S B32

S B32は，梁間１間×桁行２間（232×432cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約221.3cm



第42図　ＳＢ30平・断面図



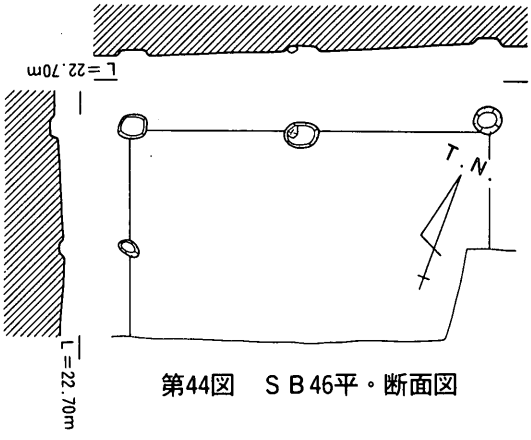
第43図　ＳＢ32平・断面図

で柱穴径は，平均約23.5cmを計る。主軸は，真北より20°西偏している。

ＳＢ46

ＳＢ46は，梁間(2)間×桁行２間[(324)×573cm]の掘立柱建物と思われる。柱間長は，平均約184cm（梁間）・286.5cm（桁行）で，柱穴径は，平均約47.5cmを計る。主軸は，真北より20°西偏している。

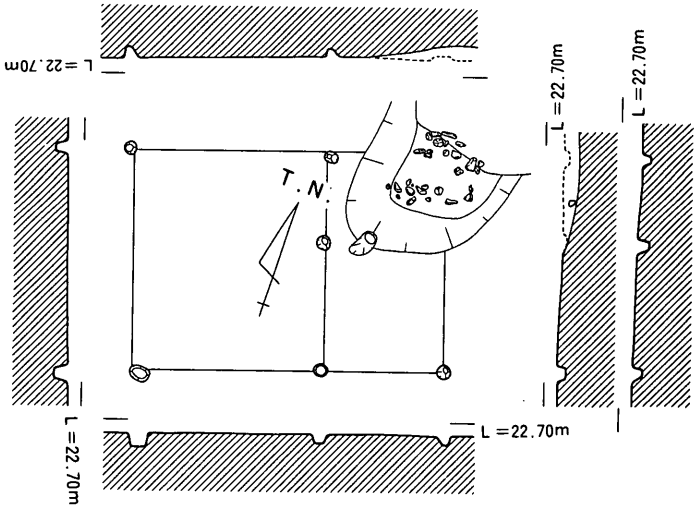
この建物は，南半分が範囲外に延びていることもあり，全容は不明である。



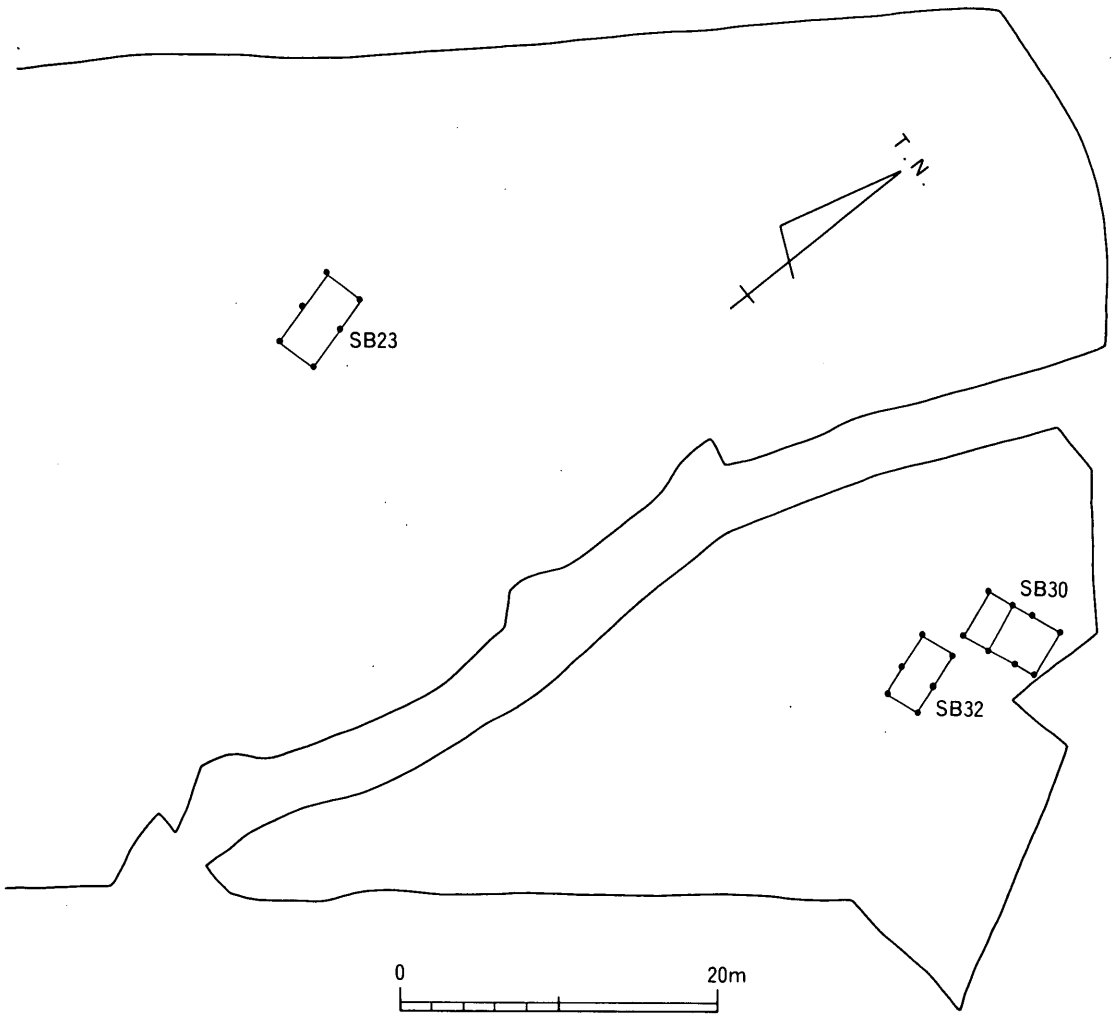
第44図　ＳＢ46平・断面図

ＳＢ48

ＳＢ48は，梁間２間×桁行１＋１間（348×192＋306cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約180cmで，柱穴径は，約25.3cmを計る。主軸は，真北より19°西偏している。この建物は，桁行の柱間長に違いをみせており，西側に延びる１間は，おそらく主屋に付属する施設ではないかと考えられる。



第45図　ＳＢ48平・断面図



第46図　第二群掘立柱建物配置図

以上中世第二群（７棟）の掘立柱建物の中で北半に位置するものは，ＳＢ23・30・32でこれら３棟の建物をみると，建物間に距離があるもののＳＢ30とＳＢ32は，東西長と南北長の建物の梁間の延長と桁行の延長をあわせるように配置されており，ここにひとつの規則性をみることができる。

③ 第三群（ほぼ真北に主軸をとる一群）

ＳＢ05

ＳＢ05は，梁間１間×桁行３間（225×603cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約207cmで，柱穴径は，平均約26.4cmを計る。主軸は，真北より５°東偏している。東西に長い建物である。

ＳＢ17

ＳＢ17は，梁間２間×桁行１＋１間（323×196＋245cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約173cmで，柱穴径は，平均約30.5cmを計る。主軸は，真北より約２°西偏している。この建物は，柱穴の配置に特徴があり，北側の１間×１間に付随して南側では，１間×２間となっている。

ＳＢ21

ＳＢ21は，梁間２間×桁行２間（372×385cm）の総柱の掘立柱建物で，西に１間の庇がつく。柱間長は，平均約189.3cmで，柱穴径は，平均約25.3cmを計る。主軸は，真北を向く。検出された掘立柱建物のなかでは特異な例である。

ＳＢ31

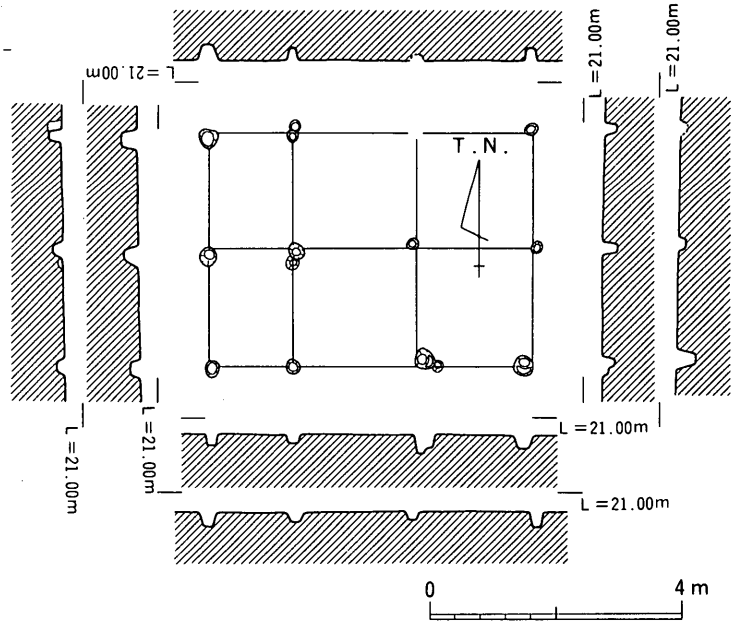
ＳＢ31は，梁間１間×桁行２間（265×425cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約230cmで，柱穴径は，平均約28.3cmを計る。主軸は，真北より約５°西偏している。

ＳＢ33

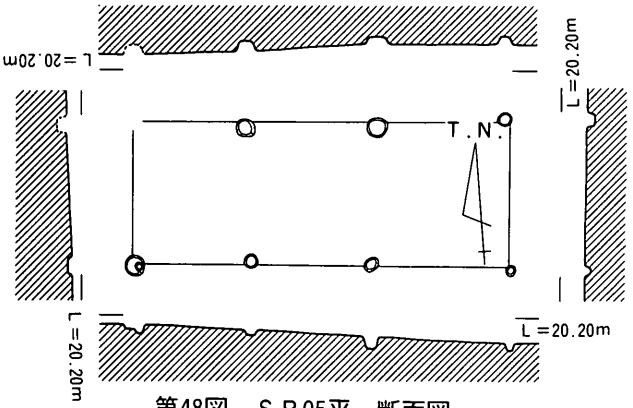
ＳＢ33は，梁間(2)間×桁行２間［(329)×531cm］の総柱の掘立柱建物で，南に１間の庇がつく。柱間長は，平均約259.8cmで，柱穴径は，平均約28.2cmを計る。主軸は，真北から１°東偏している。

ＳＢ44

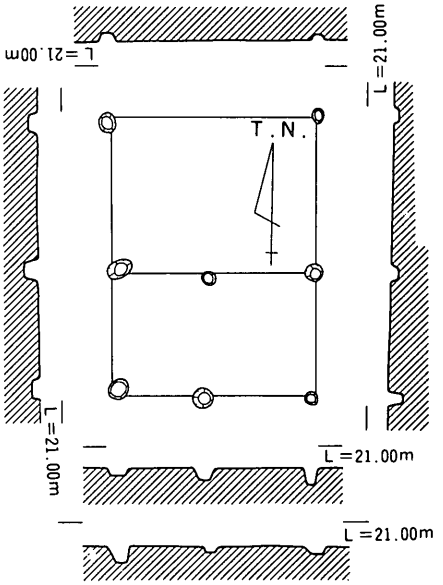
ＳＢ44は，梁間２間×桁行３間（371×444cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約163cmで，柱穴径は，約38.4cmを計る。主軸は，真北より約８°西偏する。なお，この建物は，不明遺構ＳＸ01によって削平されている。柱穴は他のものに比べると少し大きく造られている。



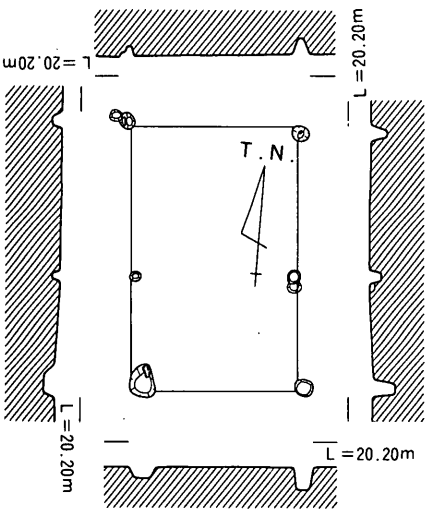
第47図　ＳＢ21平・断面図



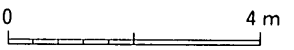
第48図　ＳＢ05平・断面図

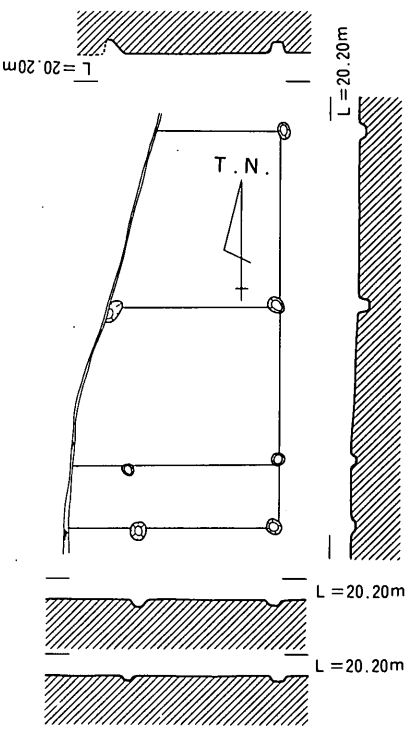


第49図　ＳＢ17平・断面図

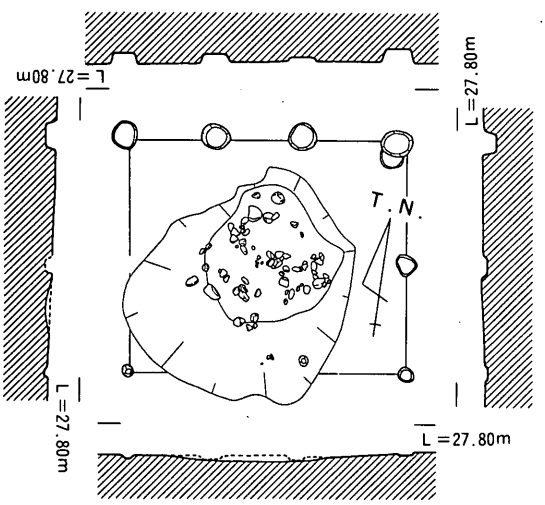


第50図　ＳＢ31平・断面図



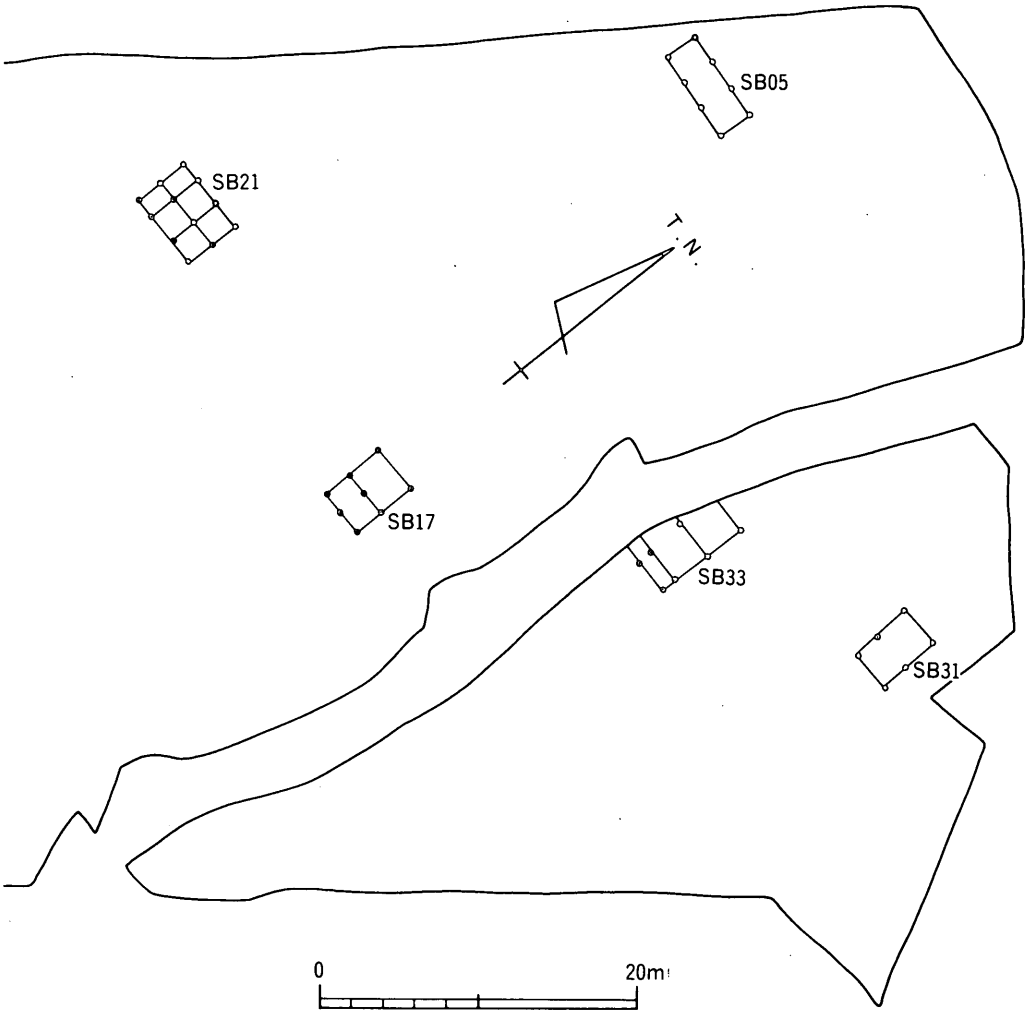


第51図　ＳＢ33平・断面図



第52図　ＳＢ44平・断面図

以上中世第三群（６棟）の掘立柱建物のなかで北西地区に位置するものは，ＳＢ05・17・21・31・33で，これら５棟の建物配置をみると広場をとり囲むような形で配されている。その中で少し大きめのＳＢ33は，主屋であろうか。そしてその正面左右に東西長と南北長の建物がならび，隣接して総柱の倉庫と思われるものも建てられている。おそらくこのような建物配置が中世の建物配置の一様相と思われる。



第53図　第三群掘立柱建物配置図

④ 第四群（N－10.2°－Eに主軸をとる一群）

SB01

SB01は，梁間2間×桁行3間（556×704cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約256.3cmで，柱穴径は，約34.4cmを計る。主軸は，真北より約9°東偏している。

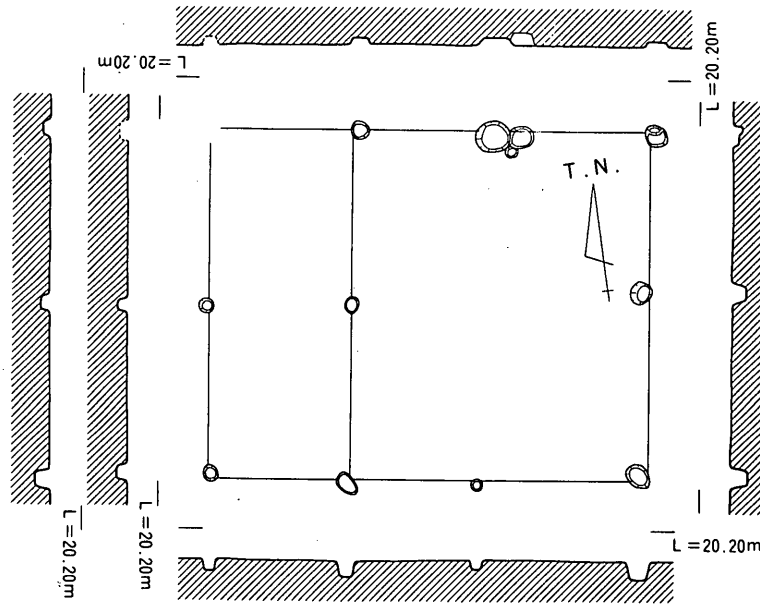
SB25

SB25は，梁間1間×桁行2間(305×368cm)の掘立柱建物である。柱間長は，平均約305cm(梁間)・184cm（桁行）で，柱穴径は，平均約28.2cmを計る。主軸は，真北より約8°東偏する。

SB27

SB27は，梁間2間×桁行5間（416×1123cm）の掘立柱建物である。柱間長は,平均約218.4cmで柱穴径は，平均約28.9cmを計る。主軸は，真北より約13°東偏している。

東西に長い建物で，東から1間分に間字きりのための柱穴を有している。柱穴には，根石を伴うものもある。



第54図　SB01平・断面図

SB29

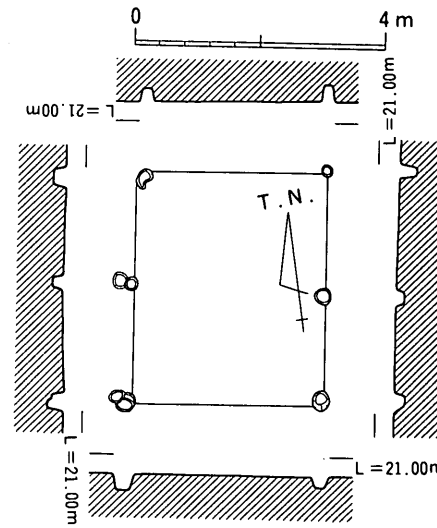
SB29は，梁間1間×桁行2間（304×360cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約304cm（梁間），180cm（桁行）で，柱穴径は，平均26.5cmを計る。主軸は，真北より約11°東偏している。

SB41

SB41は，梁間2間×桁行2＋1間(363×404＋278cm）の掘立柱建物で，西に1間の庇が附いている。柱間長は，平均約191.8cmで，柱穴径は，平均約27.3cmを計る。主軸は，真北より約12°東偏している。

SB42

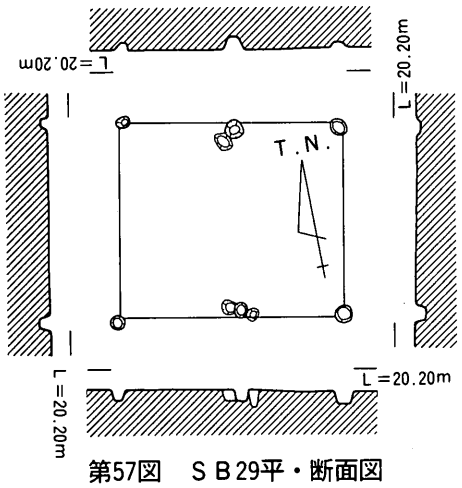
SB42は，梁間1間×桁行3間（279×607cm）の掘



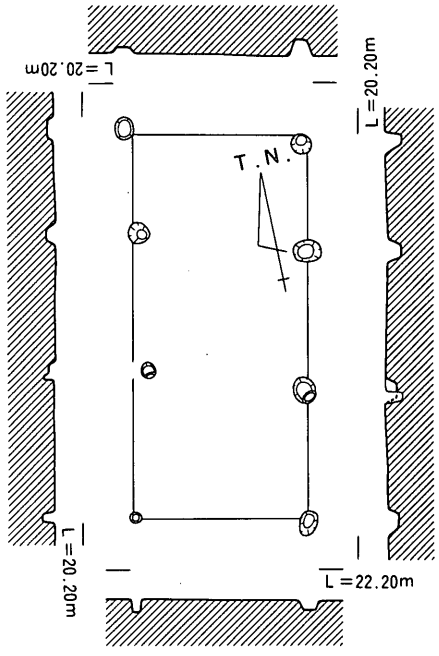
第55図　SB25平・断面図

立柱建物である。柱間長は，平均約279cm（梁間）・約202.3cm（桁行）で，柱穴径は，平均約34.4cmを計る。主軸は，真北より約8°東偏する。

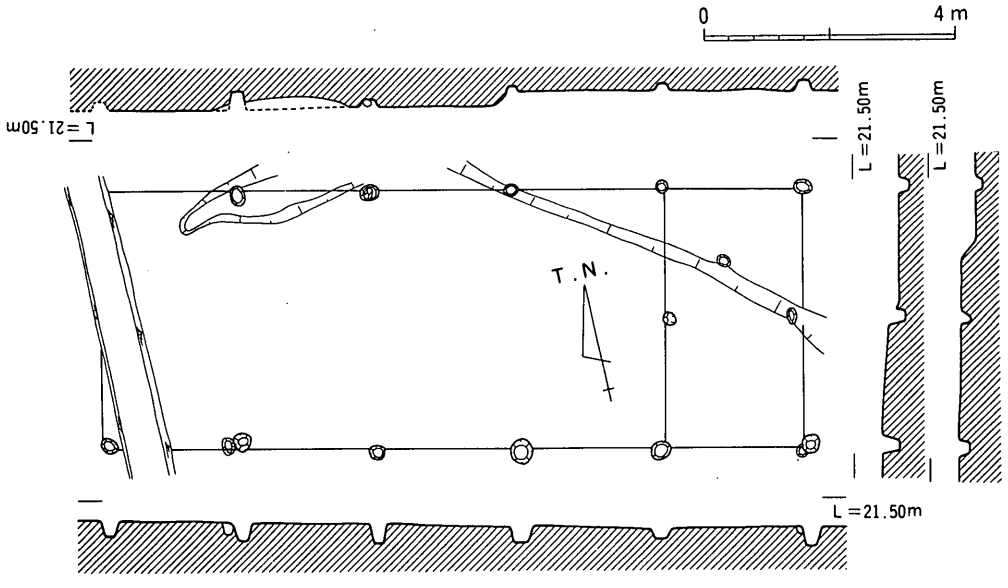
北半に位置する3棟は，それぞれに間隔をあけ位置している。建物配置については不明である。



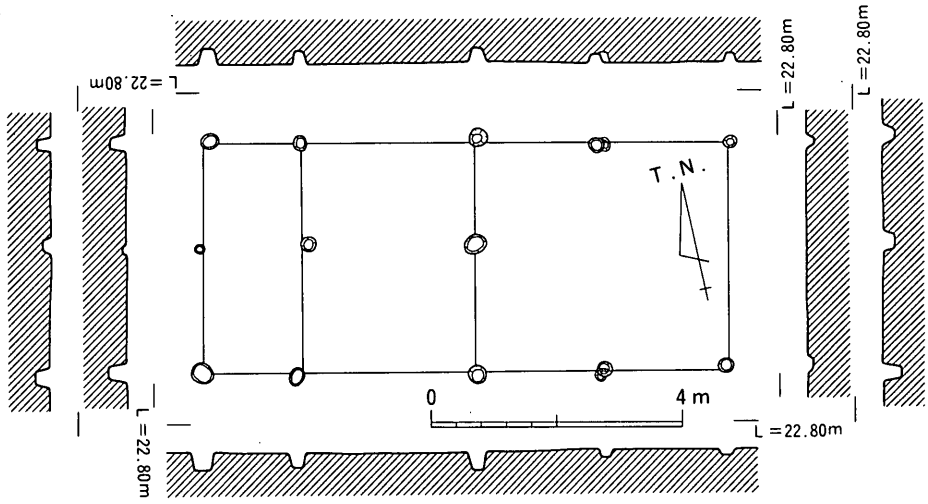
第57図　ＳＢ29平・断面図



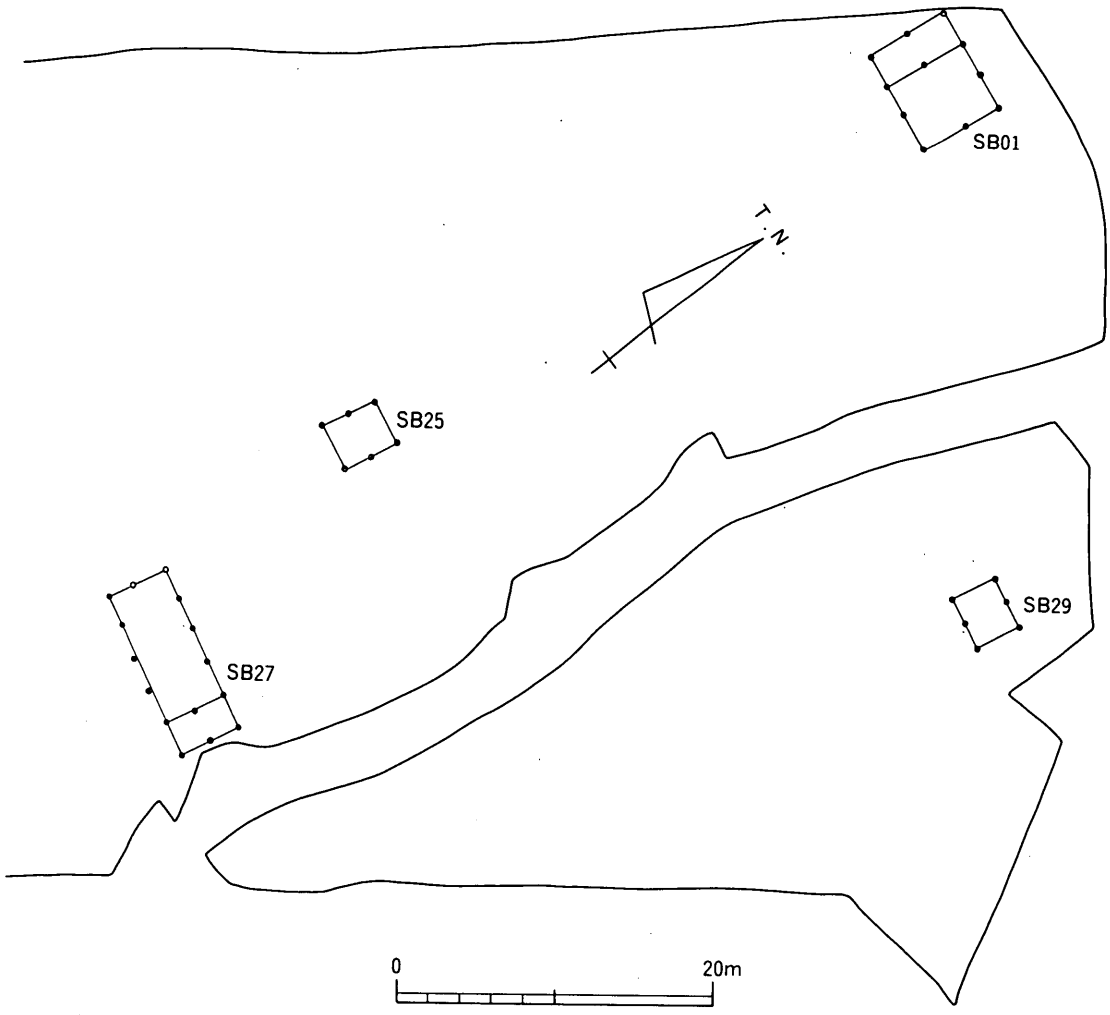
第58図　ＳＢ42平・断面図



第56図　ＳＢ27平・断面図



第59図　ＳＢ41平・断面図



第60図　第四群掘立柱建物配置図

⑤ 第五群（N－16.3°－Eに主軸をとる一群）

SB20

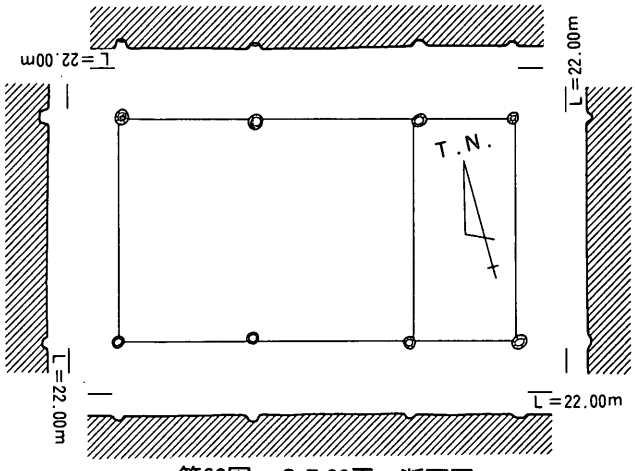
SB20は，梁間2間×桁行3間（415×784cm）の掘立柱建物で，柱間長は，平均約239.8cmで，柱穴径は，平均約30.6cmを計る。主軸は，真北より約16°東偏している。

SB38

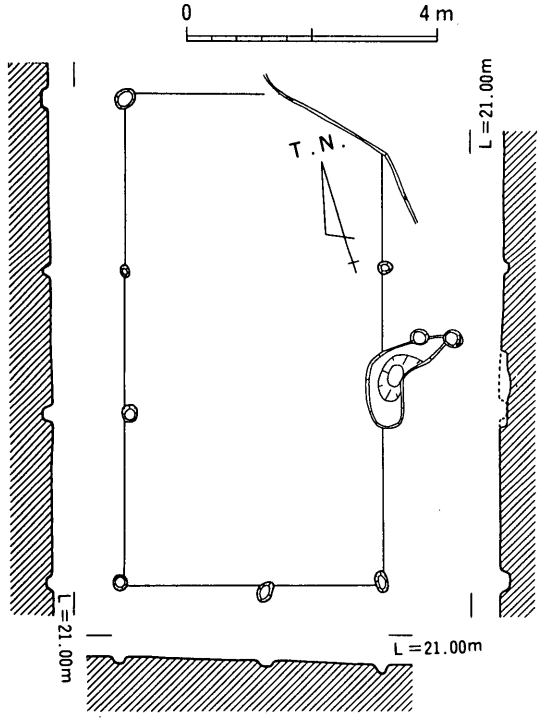
SB38は，梁間1間×桁行2間（348×472cm）の掘立柱建物で，東に1間の庇がつく。柱間長は，平均約348cm（梁間）・236cm（桁行）で，柱穴径は，平均約21.7cmを計る。主軸は，真北より約16°東偏する。

SB43

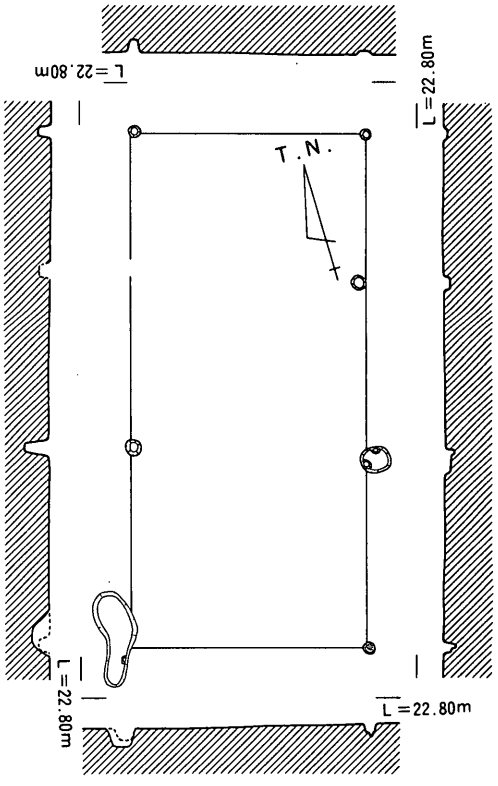
SB43は，梁間1間×桁行3間（376×822cm）の掘立柱建物で，柱間長は，平均約376cm（梁間）・274cm（桁行）で，柱穴径は，平均約26.3cmを計る。



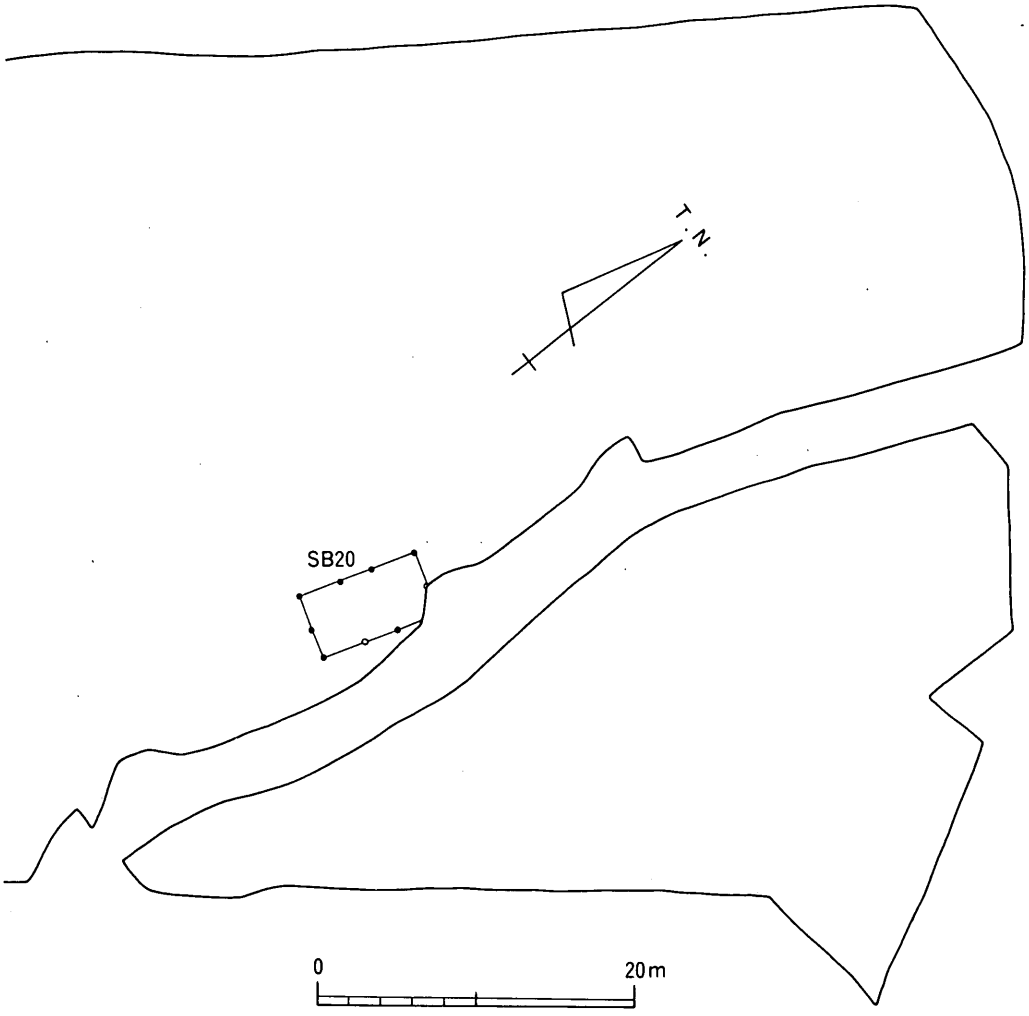
第62図　SB38平・断面図



第61図　SB20平・断面図



第63図　SB43平・断面図



第64図　第五群掘立柱建物配置図

主軸は，真北より約17°東偏する。

この３棟の建物のなかで，北半部に位置するのは，ＳＢ20だけであるので建物配置については不明である。

⑥ 第六群　（N－29°－Eに主軸をとる一群）

ＳＢ07

ＳＢ07は，梁間２間×桁行３間（452×651cm）の掘立柱建物で，柱間長は，平均約220.6cmで，柱穴径は，平均約24.5cmを計る。主軸は，真北より約32°東偏する。

ＳＢ11

ＳＢ11は，梁間２間×桁行２間（313×361cm）の掘立柱建物で，東に１間の庇がつく。柱間長は，平均約168.5cmで，柱穴径は，平均約26.8cmを計る。主軸は，真北より約28°東偏する。

ＳＢ13

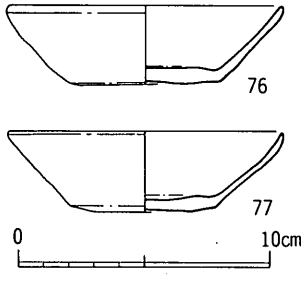
ＳＢ13は，梁間３間×桁行３間（408×445cm）の掘立柱建物で，柱間長は，平均約142.2cmで，柱穴径は，平均約29.9cmを計る。主軸は，真北より約27°東偏する。

ＳＢ14

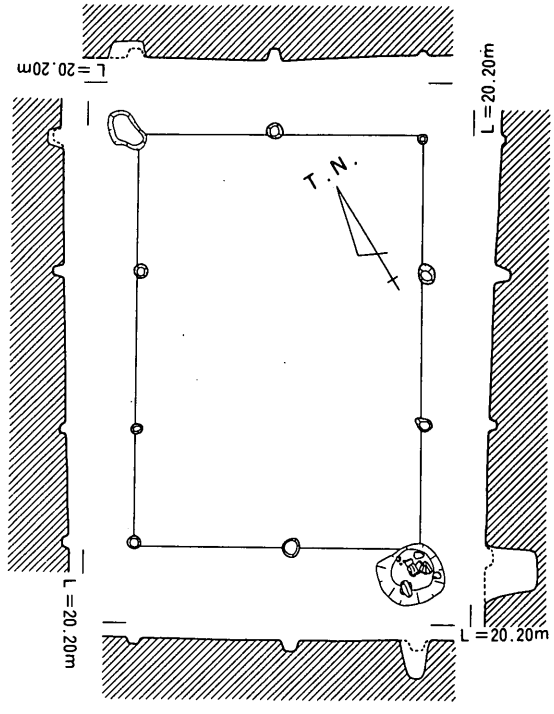
ＳＢ14は，梁間２間×桁行(3)間［291×（408）cm］の総柱の掘立柱建物である。柱間長は，平均約163.4cmで，柱穴径は，平均約29cmを計る。主軸は，真北より約24°東偏している。この建物は，東半分が調査外へ延びているため，全容は不明である。

ＳＢ15

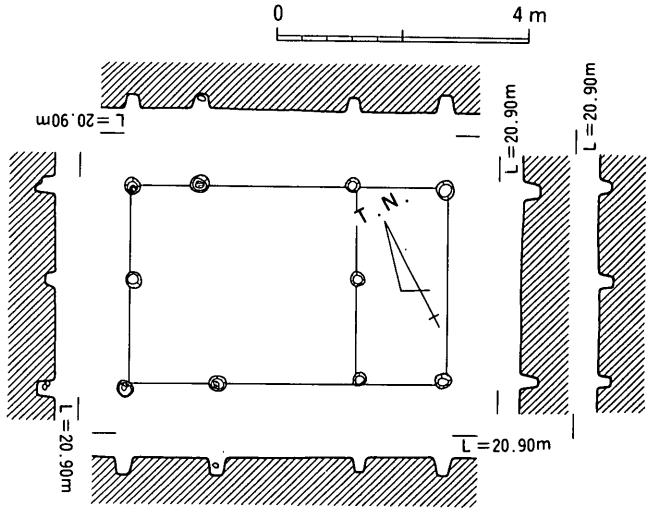
ＳＢ15は，梁間１間×桁行３間（297×545cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約297cm（梁間）・



第67図　ＳＢ11柱穴出土遺物



第65図　ＳＢ07平・断面図



第66図　ＳＢ11平・断面図

181.7cm（桁行）で，柱穴径は，平均約26.2cmを計る。主軸は，真北より約29°東偏する。

ＳＢ24

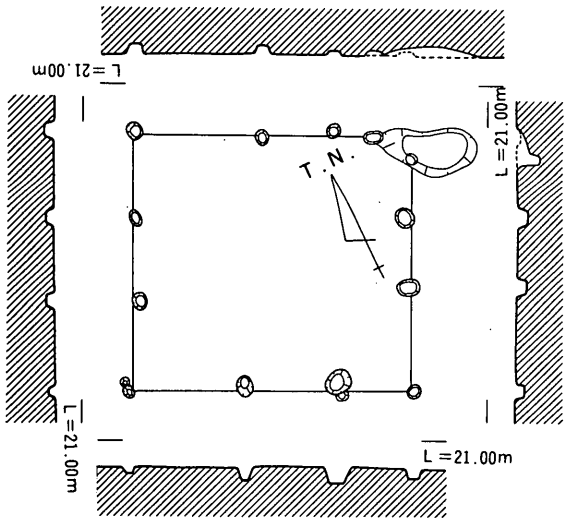
ＳＢ24は，梁間１間×桁行２間（292×465cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約252.3cmで，柱穴径は，平均約25.2cmを計る。主軸は，真北より約30°東偏する。

ＳＢ34

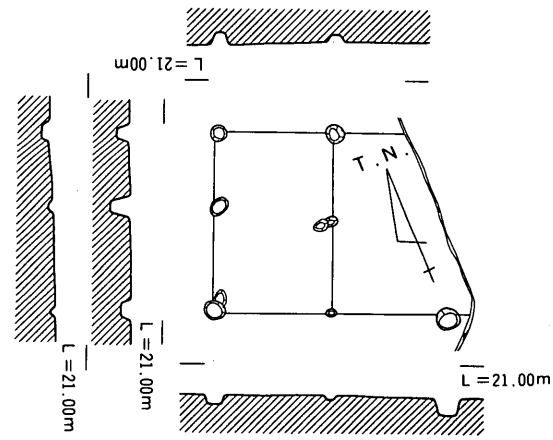
ＳＢ34は，梁間２間×桁行３間（240×444cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約136.8cmで，柱穴径は，平均約29.6cmを計る。主軸は，真北より約31°東偏する。

ＳＢ35

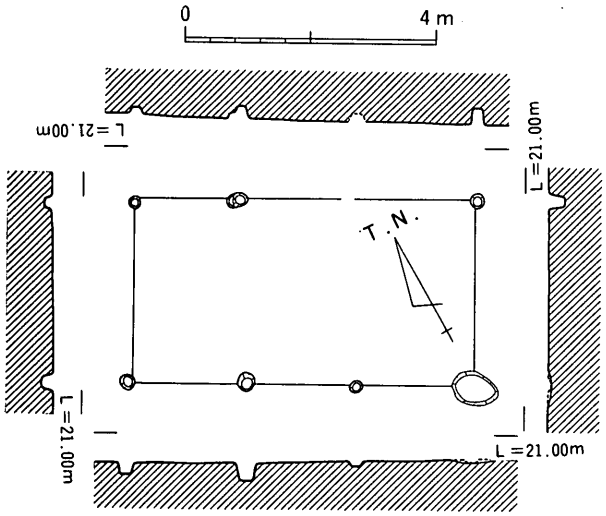
ＳＢ35は，梁間１間×桁行２間(306×405cm)の掘立柱建物である。柱間長は，平均約306cm(梁



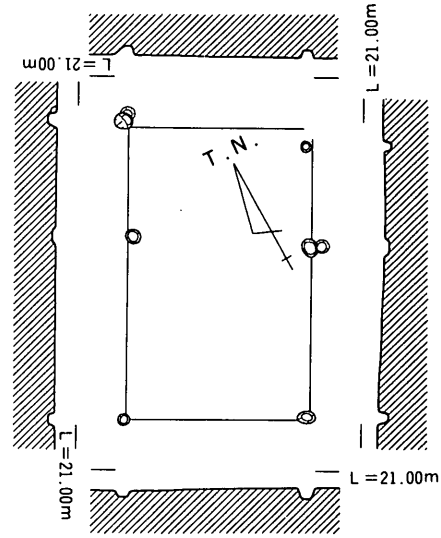
第68図　ＳＢ13平・断面図



第69図　ＳＢ14平・断面図



第70図　ＳＢ15平・断面図

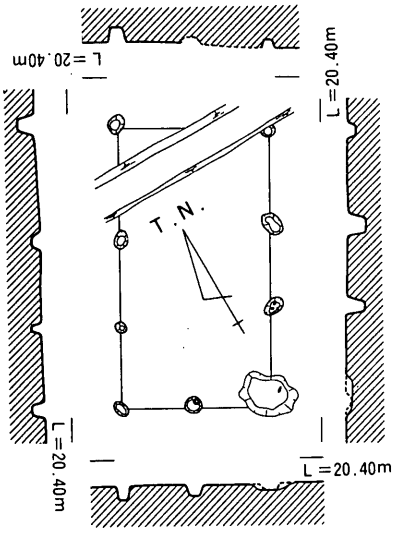


第71図　ＳＢ24平・断面図

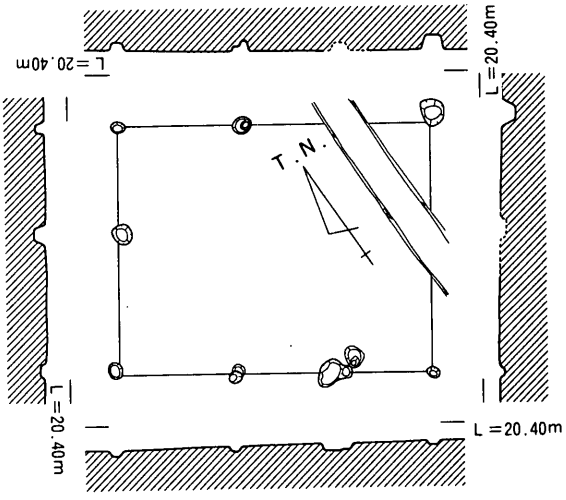
間）・202.5cm（桁行）で，柱穴径は，平均約29.2cmを計る。主軸は，真北より約34°東偏する。

SB36

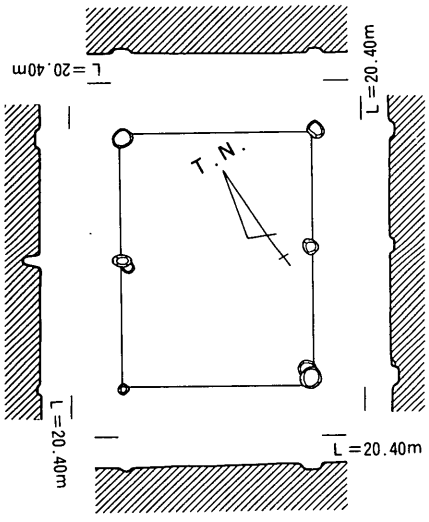
SB36は，梁間2間×桁行3間（392×501cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約178.6cmで，柱穴径は，平均約31.6cmを計る。



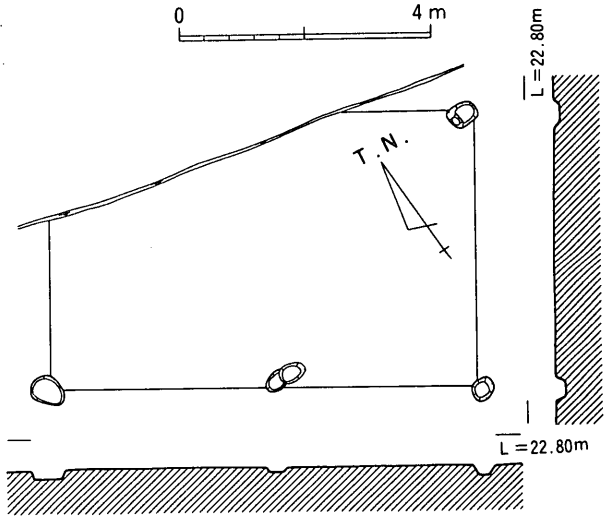
第72図　SB34平・断面図



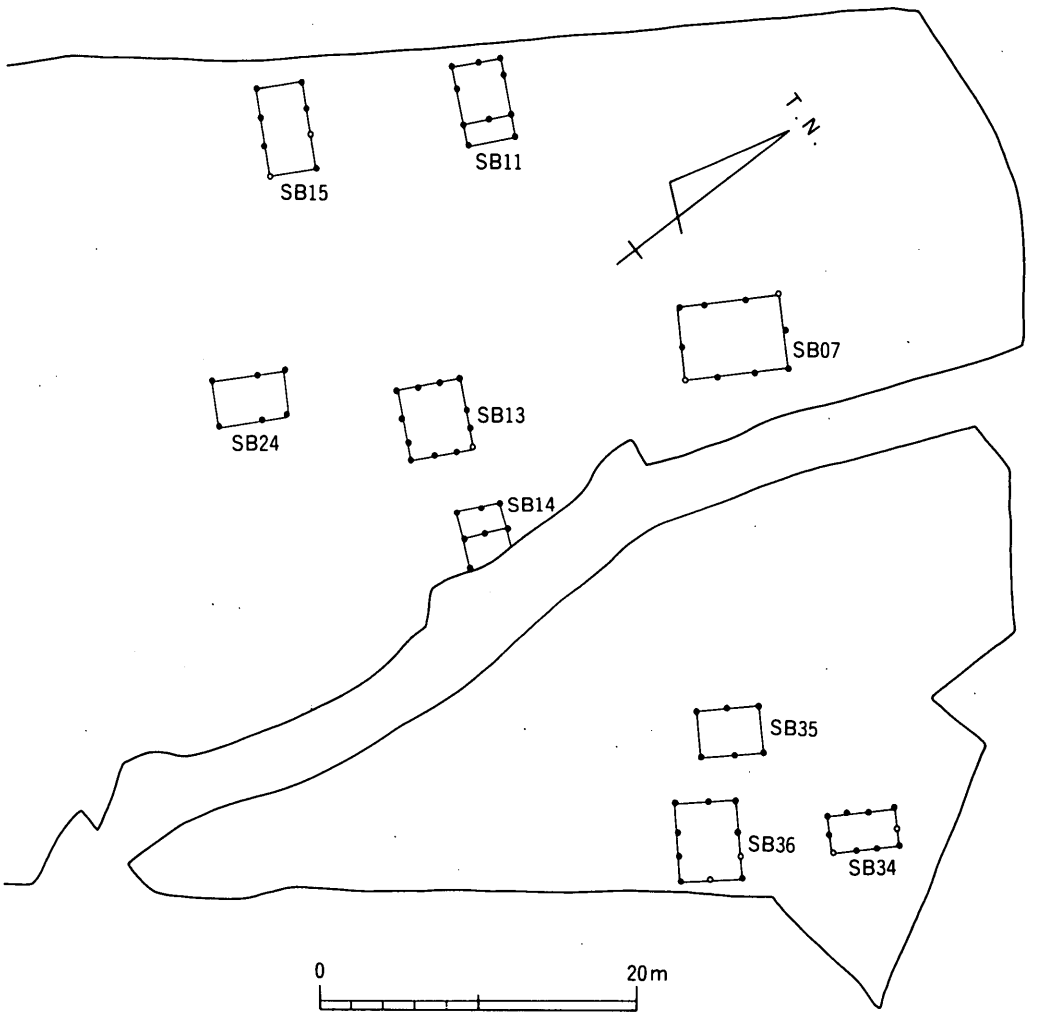
第74図　SB36平・断面図



第73図　SB35平・断面図



第75図　SB40平・断面図



第76図　第六群掘立柱建物配置図

⑦ 第七群　（N－39.2°－Eに主軸をとる一群）

SB02

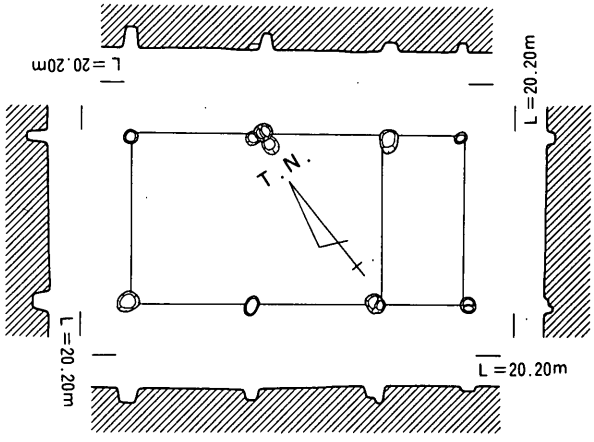
SB02は，梁間1間×桁行2間（266×400cm）の掘立柱建物で，東に1間の庇がつく。柱間長は，平均約266cm（梁間）・200cm（桁行）で，柱穴径は，平均約32.3cmを計る。主軸は，真北より39°東偏している。

SB04

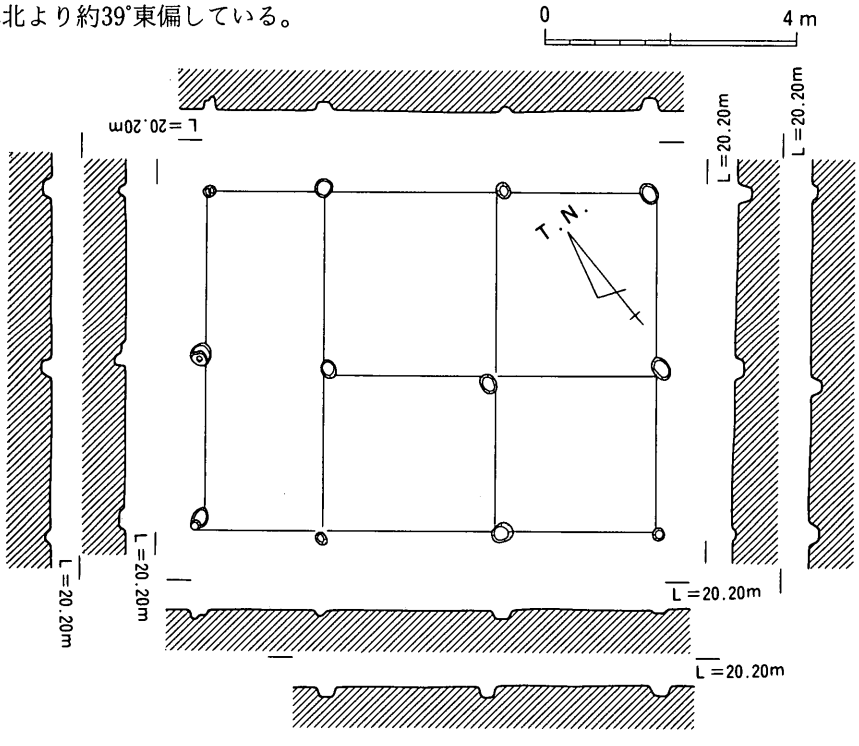
SB04は，梁間2間×桁行2間(532×540cm)の総柱の建物で，西側には1間の庇がつく。柱間長は，平均約268cmで，柱穴径は，平均約29.6cmを計る。主軸は，真北より約40°東偏する。

SB09

SB09は，梁間1間×桁行5間(400×898cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約400cm（梁間）・179.6cm（桁行）で，柱穴径は，平均約26.1cmを計る。主軸は，真北より約39°東偏している。



第77図　SB02平・断面図



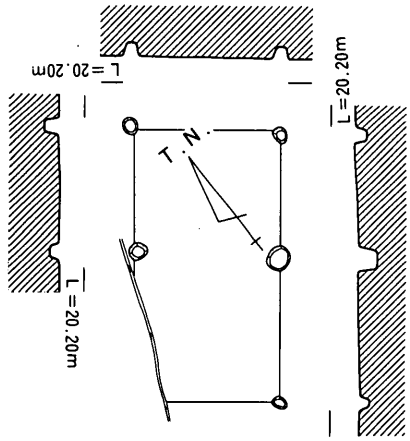
第78図　SB04平・断面図

SB19

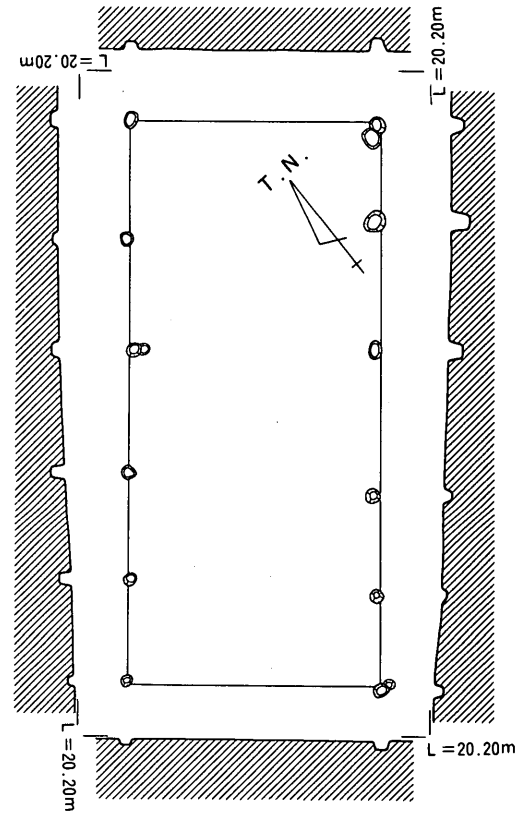
SB19は，梁間1間×桁行3間（385×584cm）の掘立柱建物で，東に1間の庇がつく。柱間長は，平均約385cm（梁間）・194.7cm（桁行）で，柱穴径は，平均約37.7cmを計る。主軸は，真北より約38°東偏している。この建物は，北側の一部が調査外へ延びるため全容は不明である。

SB28

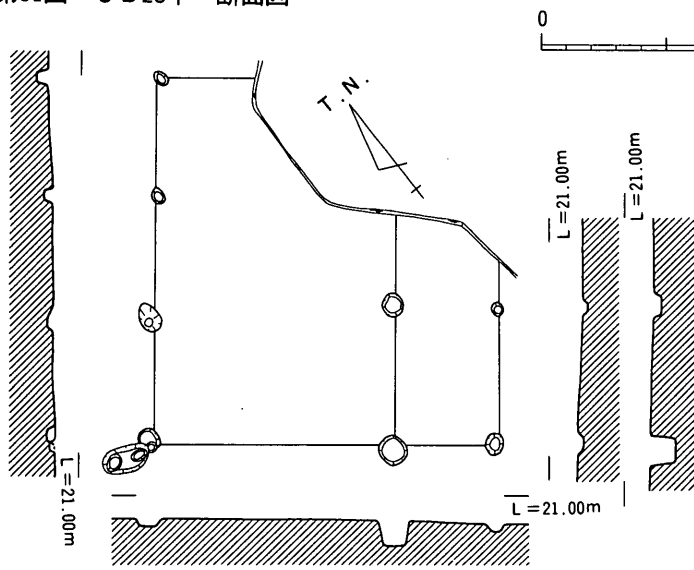
SB28は，梁間1間×桁行2間（232×436cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約222.7cmで，柱穴径は，平均約30.8cmを計る。主軸は，真



第81図　SB28平・断面図



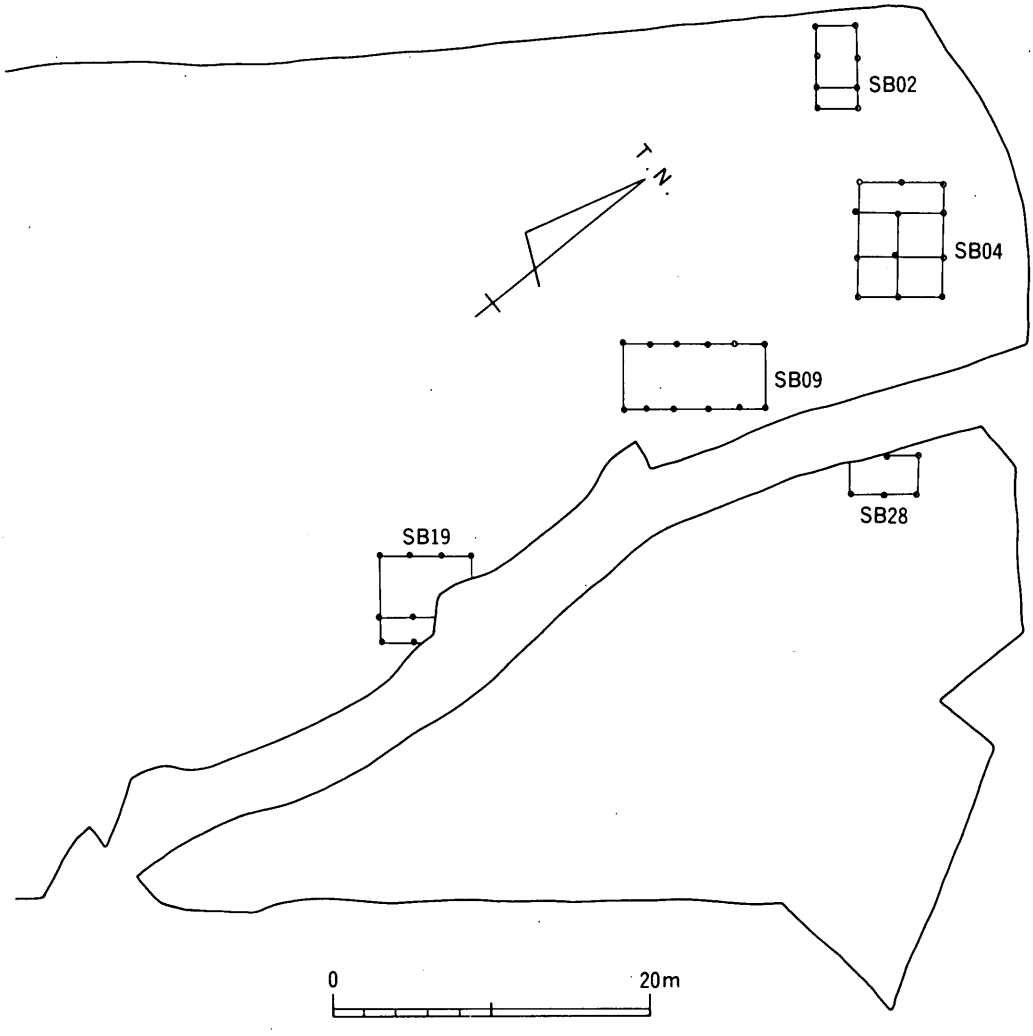
第79図　SB09平・断面図



第80図　SB19平・断面図

北より約40°東偏している。この建物は，西側の一部が調査外へ延びるため全容は不明である。

これら５棟の建物は，主屋と思われるＳＢ09を中心として後方あるいは左右に建物が立ち並ぶ配置をとっている。

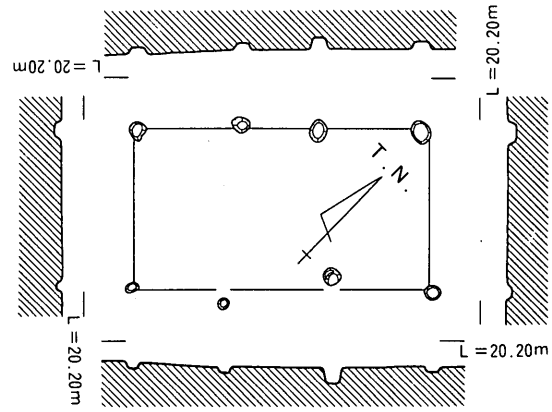


第82図　第七群掘立柱建物配置図

⑧ 第八群 （N－44°－Eに主軸をとる一群）

SB06

SB06は，梁間1間×桁行3間（252×471cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約252cm（梁間）・157cm（桁行）で，柱穴径は，平均約29.6cmである。主軸は，真北より約45°東偏する。

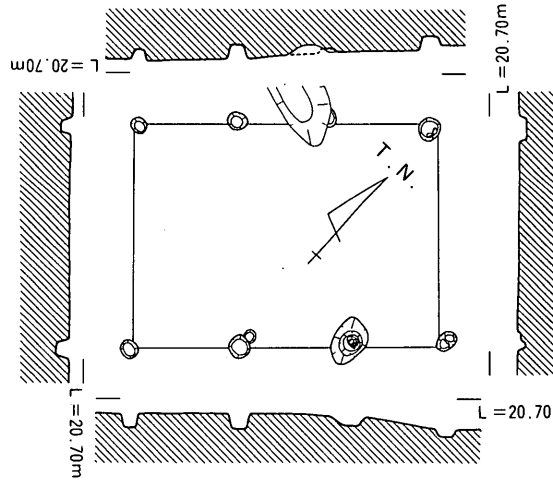


第83図 SB06平・断面図

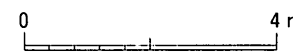
SB10

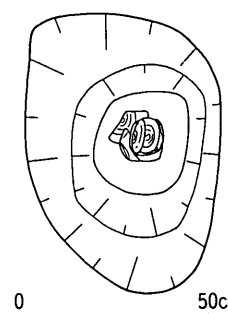
SB10は，梁間1間×桁行3間（356×484cm）の建物遺構である。柱間長は，平均約356cm（梁間）・161.3cm（桁行）で柱穴径は，平均34.3cmを計る。主軸は，真北より44°東偏している。

この建物は，B－9にあり，掘立柱建物群のほぼ中央で確認されたもので，柱穴の一つに土師器の坏と小皿を計12枚埋納していた。柱穴は，南桁行列の東から2個目で，他より少し大きく掘られている。土師器坏・小皿の検出状況は，上から3枚が坏で，1枚小皿が入り，以下坏が6枚というものであった。その他に，破片であるが，坏が2個出土している。重なり状態は，不明である。土師器坏は，全て作りが同じで，同一者によるものと判明した。



第84図 SB10平・断面図





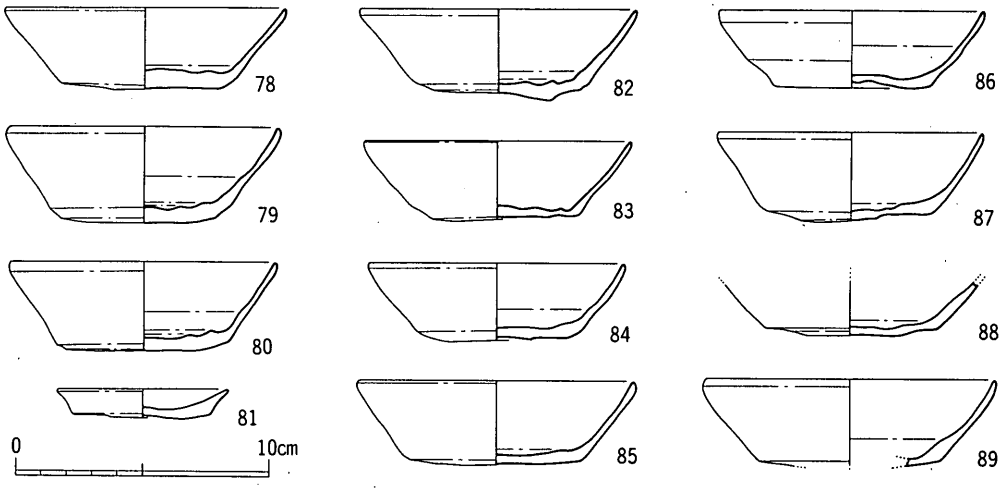
第85図 SP07平面図

土師器坏78～80，82～89は，底部をヘラ切りされており，体部は，直線的に外方に延び，口縁はやや内彎しながら終る。体部は，ヨコナデ調整されており，器厚はすべて薄手に作られている。

81は土師器小皿である。低部はヘラ切りされており，体部は，やや外反しながら終る。体部は，ヨコナデ調整されており，坏と同様やや薄手に作られている。

この柱穴埋納土師器の性格は，おそらく，掘立柱建物に伴う地鎮祭に使用されたものではないかと推察(註2)する。

SB18

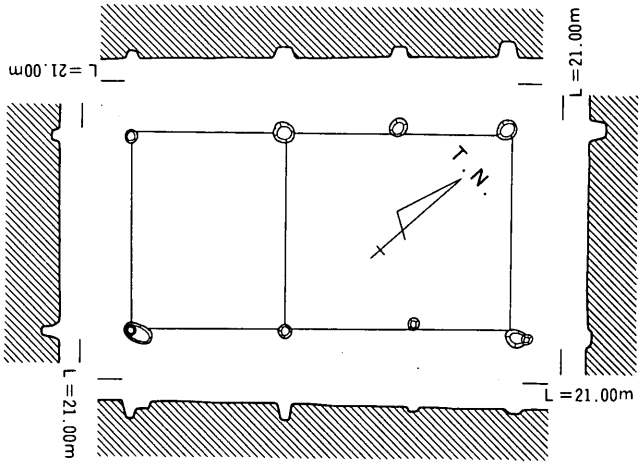


第86図　ＳＢ10柱穴出土遺物実測図

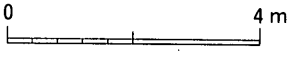
ＳＢ18は，梁間１間×桁行２＋１間（308×360＋242cm）の掘立柱建物である。柱間長は，約308cm(梁間)・180cm（桁行）で，柱穴径は，平均約31cmを計る。主軸は，真北より約42°東偏している。

ＳＢ22

ＳＢ22は，梁間２間×桁行２＋１間（328×490＋400cm）の掘立柱建物である。柱間長は，平均約204.5cmで，柱穴径は，平均約29.5cmを計る。主軸は，真北より約44°東偏する。



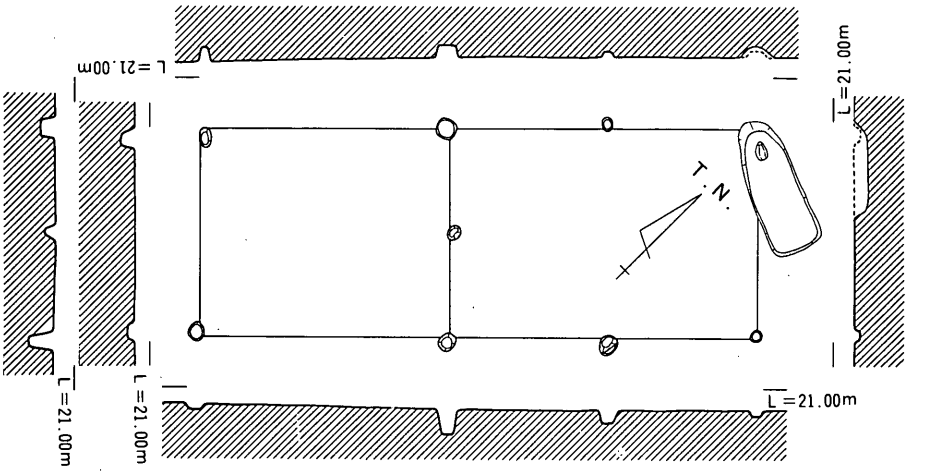
第87図　ＳＢ18平・断面図



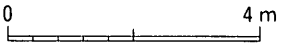
ＳＢ37

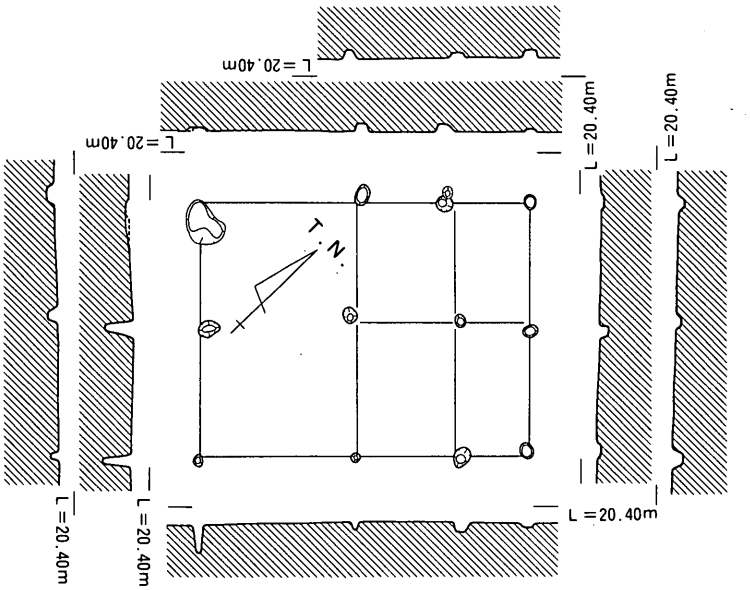
ＳＢ37は，梁間２間×桁行２＋１間（400×275＋253cm）の掘立柱建物である柱間長は，平均約200cm（梁間）・137.5cm（桁行）で，柱穴径は，平均約26.7cmを計る。主軸は，真北より約44°東偏する。

これら５棟の建物は，全て東西長に主軸をとるものばかりで，ここでは第七群と分けてはあるがこれらを同一時期に考えるとＳＢ06・ＳＢ10・ＳＢ18は，近接して第七群の建物に並んで建っていることがわかる。

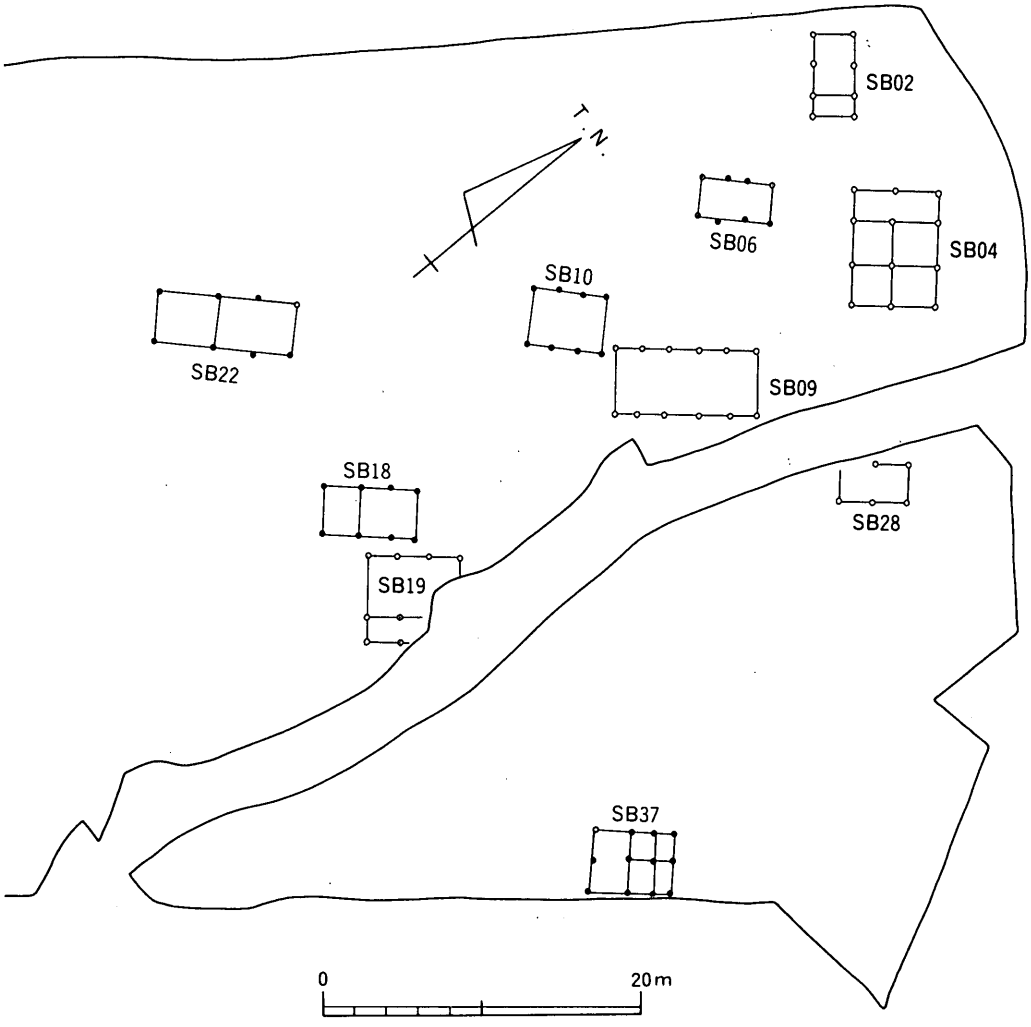


第88図　ＳＢ22平・断面図





第89図　ＳＢ37平・断面図



第90図　第八群掘立柱建物配置図

(7) その他の遺構出土遺物

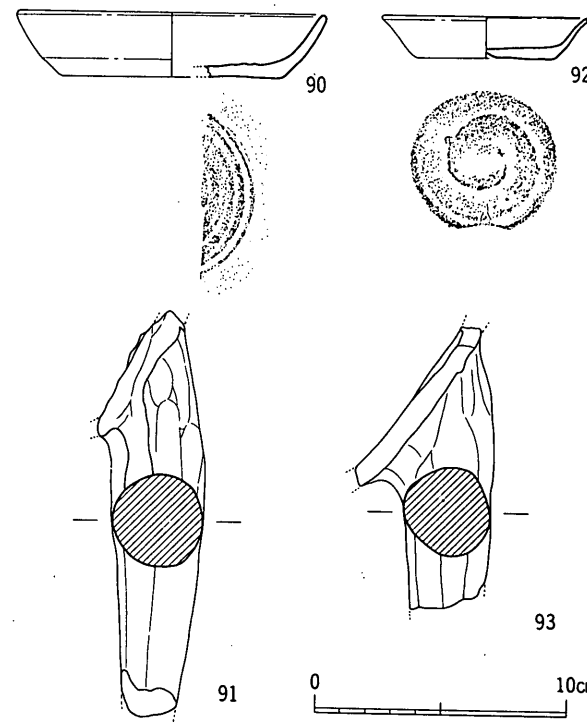
ここでは，良好な遺物が出土しているものについてのみ概略する。

ＳＤ02

ＳＤ02は，掘立柱建物が集中する中央部に位置する。かなり削平を受けており，掘立柱建物に伴うものかその他の機能を有していたものかは不明である。90は，ＳＤ02出土遺物で，底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎気味に立ち上がり，口縁端部は，丸くおさめられている。

ＳＤ04

ＳＤ04は，当初，竪穴住居域を画する溝と考えられていたが，埋土中より土釜の脚（91）・瓦器が出土したことにより中世頃に機能していた溝と判明した。



第91図　溝・土坑出土遺物実測図

ＳＫ01

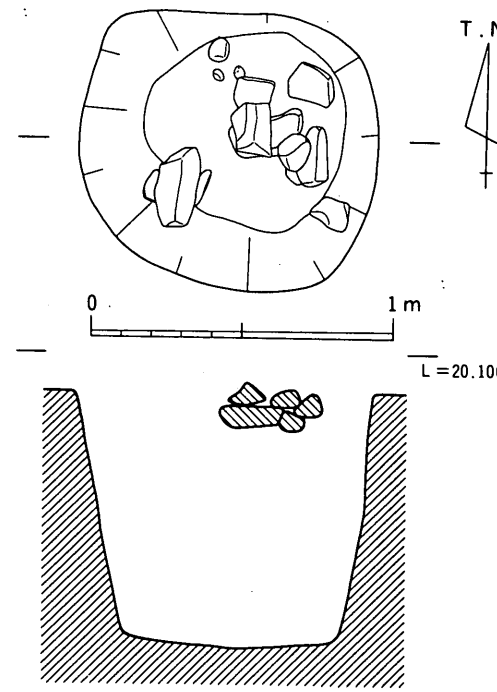
ＳＫ01は，ＳＢ07の一柱穴を切って掘られており，天幅92.0cm，深さ88cmのほぼ円形に近い土坑である。土坑内には，数個の川原石が投げ込まれた状態で検出され，土坑廃棄の様相を呈している。

時期については，両者ともほぼ同じ埋土をもつことから，時期差はないと思われる。

土坑出土遺物は，土師器片が多く，ほぼ完形に近い土師器小皿（92）が出土している。92は，底部はヘラ切りされており，体部はやや外反しながら立ち上がる。

ＳＫ02

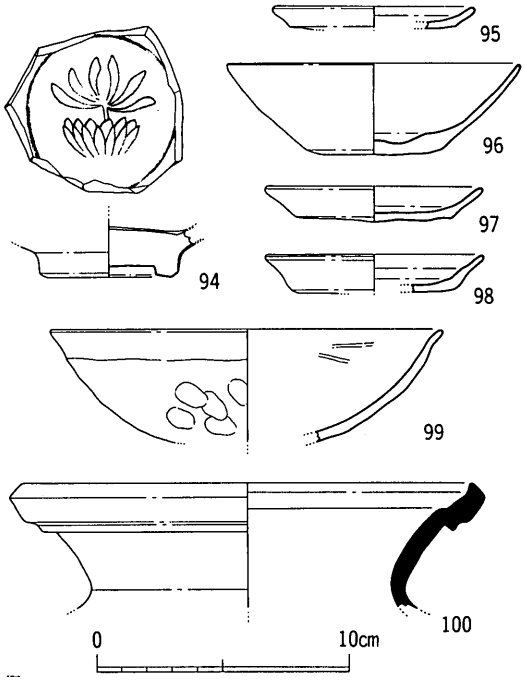
ＳＫ02は，かなり削平を受けており，全容は不明であるが，土釜の脚（93）が出土していることから，おそらく中世以降の時期のものと思われる。



第92図　ＳＫ01平・断面図

(8) 柱穴出土遺物

柞田八丁遺跡では，北半でほぼ同じ埋土の柱穴が多数検出されている。その中には，掘立柱建物の柱穴として使用されたものとそうでないものがある。そこで，後者の柱穴より出土している遺物を観察することによって，柱穴全体の時期を概略的ではあるが決定してみたい。



第93図　柱穴出土遺物実測図

B－8　SP08

94は，龍泉窯系青磁(註3) I類と思われる。底部には，低く太い高台が削り出されており，釉は，高台内面以外全てにかけられており，内面見込み部には，草花文がヘラ描きされている。95は，土師器の小皿で，底部はヘラ切りされており，体部は，内彎気味に立ち上がるものである。時期は，13世紀頃と思われる。

C－8　SP05

96は，土師器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外方へ延びる。

C－9　SP12

97は，土師器の小皿である。底部調整は，不明である。体部はやや内彎気味に外方へ延び，口縁端部は丸くおさめられている。

C－9　SP13

98は，土師器小皿である。底部はヘラ切りされており，体部は外反しながら口縁端部に至る。99は，瓦器埦である。内彎する体部を持ち，口縁端部は，やや外反している。体部外面には指頭痕が顕著に見られ，口縁部外面には，ヨコナデが施されている。体部内面は，ヘラミガキが見られる。この柱穴の時期は，瓦器埦より，13世紀末頃と思われる。

E－6　SP01

100は，須恵器壺である。口縁端部がかなり肥厚しており，内面にはヨコナデによる凹線状のものがみられる。

柱穴出土遺物より，これらの柱穴は，13世紀頃と思われ，埋土もほとんど同一であることから，大略的ではあるが，ほぼ同時期（中世頃）の柱穴群と考えられるのではないだろうか。

(9) 近世　井戸・土坑

ＳＫ08・ＳＥ01

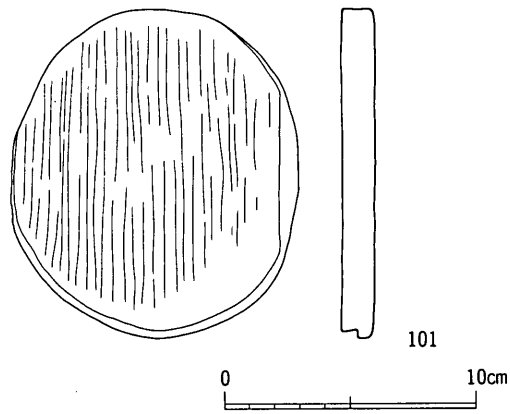
近世の遺構としては，Ｃ－７で井戸を検出した。井戸は，南北約８ｍ程の掘り方を持った土坑のほぼ中央，深さ3.26ｍで検出された。出土遺物，埋土堆積状況より，この井戸は近世に使用されていたが，その後，廃棄され，そのまま自然に埋没していったと思われる。井戸検出上面（第97図）での状態から，廃棄時に，礫を多量に投げ込まれたらしい。

内径90cm，深さ100cmの規模で，川原石を使い造られた石組みの井戸である。井戸の内側は，ほぼ垂直になっており，石組みも雑に造られている。

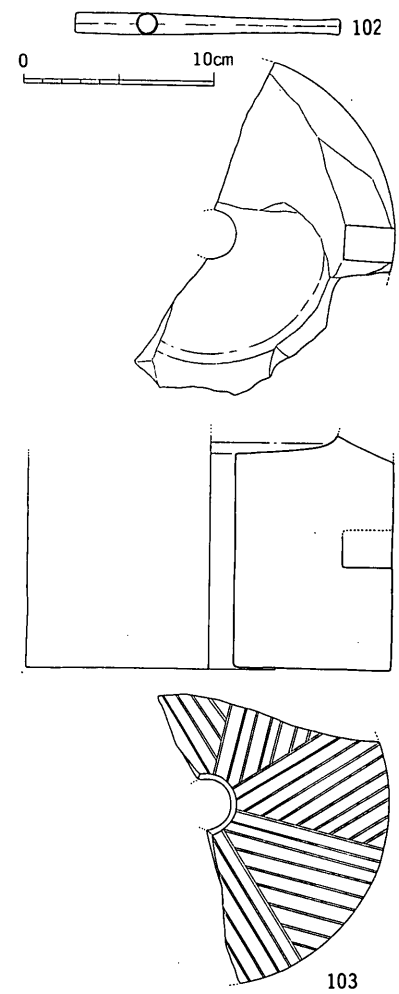
廃棄前の石組み上面構造は不明であるが，散積していた石が，井戸石組みに使用されていたものか判断できないため，木製の井戸枠を使用していた可能性も考えておかなくてはならない。

この遺構を井戸石組み内と上層部に分けて遺物を観察すると，上部土層堆積中より，石臼（103）・土鍋の脚が出土している。この石臼は，砂岩製で非常に作りの良い茶臼[註4]である。

また，石組み内からは，キセル(102)及び曲物底板(101)が出土している。このキセルは，火皿と吸口を木製の管でつなぐもので，残存している吸口部は，一枚の銅板を加工して作られており，外面には金メッキを施している。曲物の底板は，平面形が，長径13.0cm，短径11.4cmの楕円形を呈しており，厚さ1.4cmと厚い。側辺は，側板との接合のために上端を削っている部分とくり込みを入れている部分とがある。側面に木釘の痕跡は認められない。蓋の可能性も考えられる。

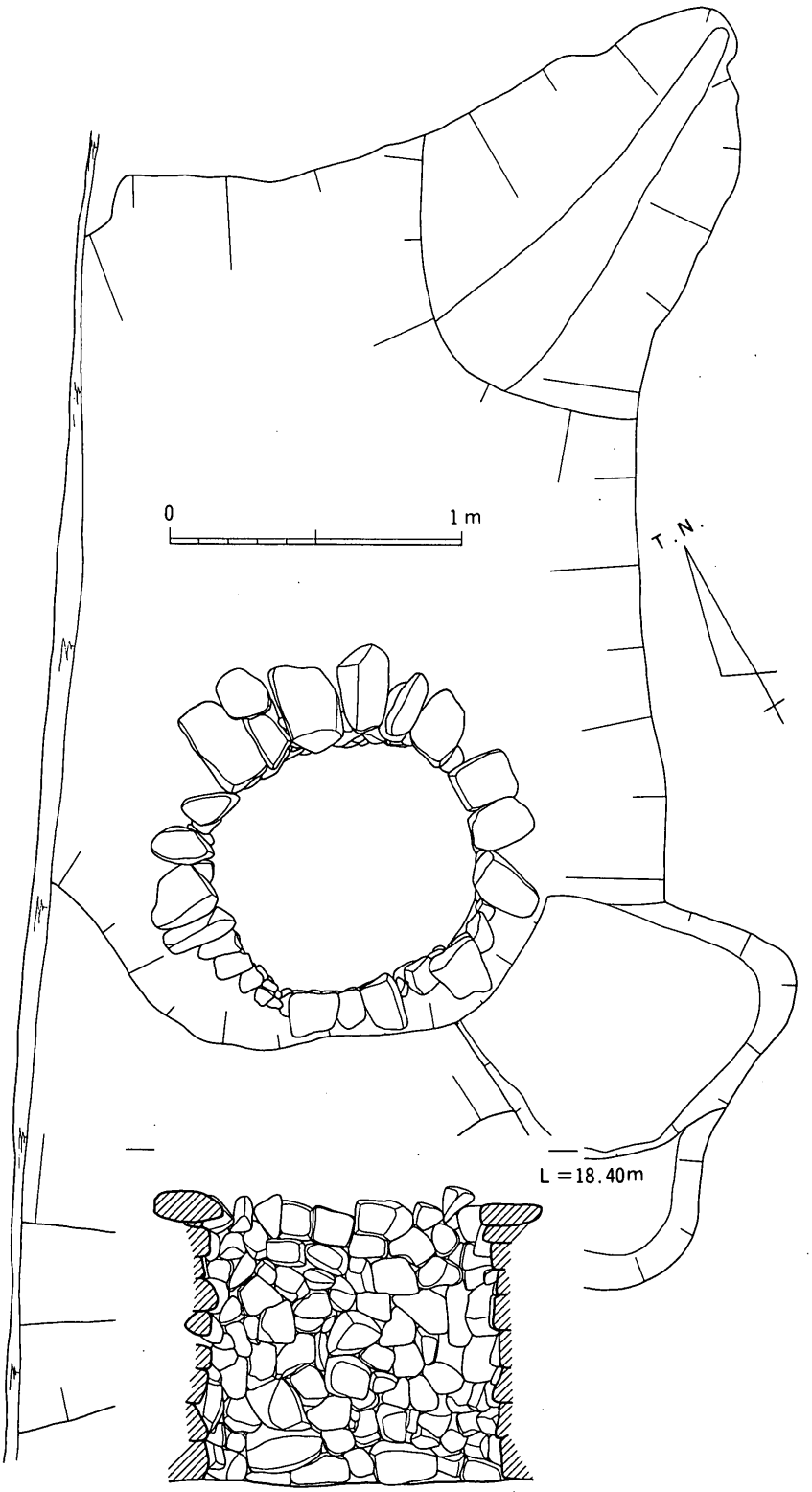


第94図　ＳＥ01出土遺物実測図



第95図　ＳＫ08出土遺物実測図

第96図　ＳＫ08平面図



第97図　ＳＥ01平・断面図

⑽ 包含層出土遺物

柞田八丁遺跡では，遺構面上部の包含層より多数の遺物が出土している。特にC列以北の包含層からは，柞田八丁遺跡で検出された全時期の遺物が出土している。しかし，各層ごとに時期的な差はなく，時間幅のある遺物の堆積であった。そして各層上面において遺構は検出されず，遺構面は，包含層除去後に検出された。また，C列以南では，ほとんど包含層がない状態であった。そのためにここでは各グリッドごとの包含層出土遺物を器種ごとに分けそれぞれについて概略し，時期幅を考察したい。

① 須恵器

包含層出土須恵器　(第98図　104～124・第99図　125～148)

まず須恵器であるが，D列の一部及びC列以北の包含層から多数出土している。時期は，古墳時代後期（6世紀後半頃）～平安時代までで，特に古墳時代後期のものが多数出土している。形態は，坏身においては立ち上がりおよび受け部のかなり萎小化したものが多く，坏蓋についても天井部と体部間に稜線を持たず丸く仕上げられたものが多数出土している。これら包含層出土遺物が柞田八丁遺跡の調査で検出された竪穴住居遺物と同時期であることから，この時代に周辺地域において多くの遺構があったものと考えられる。次に7世紀の須恵器は，非常に量が少なく遺構の検出状況と同じであることがわかる。8世紀以降についても同様で次第にその数は減少していく。

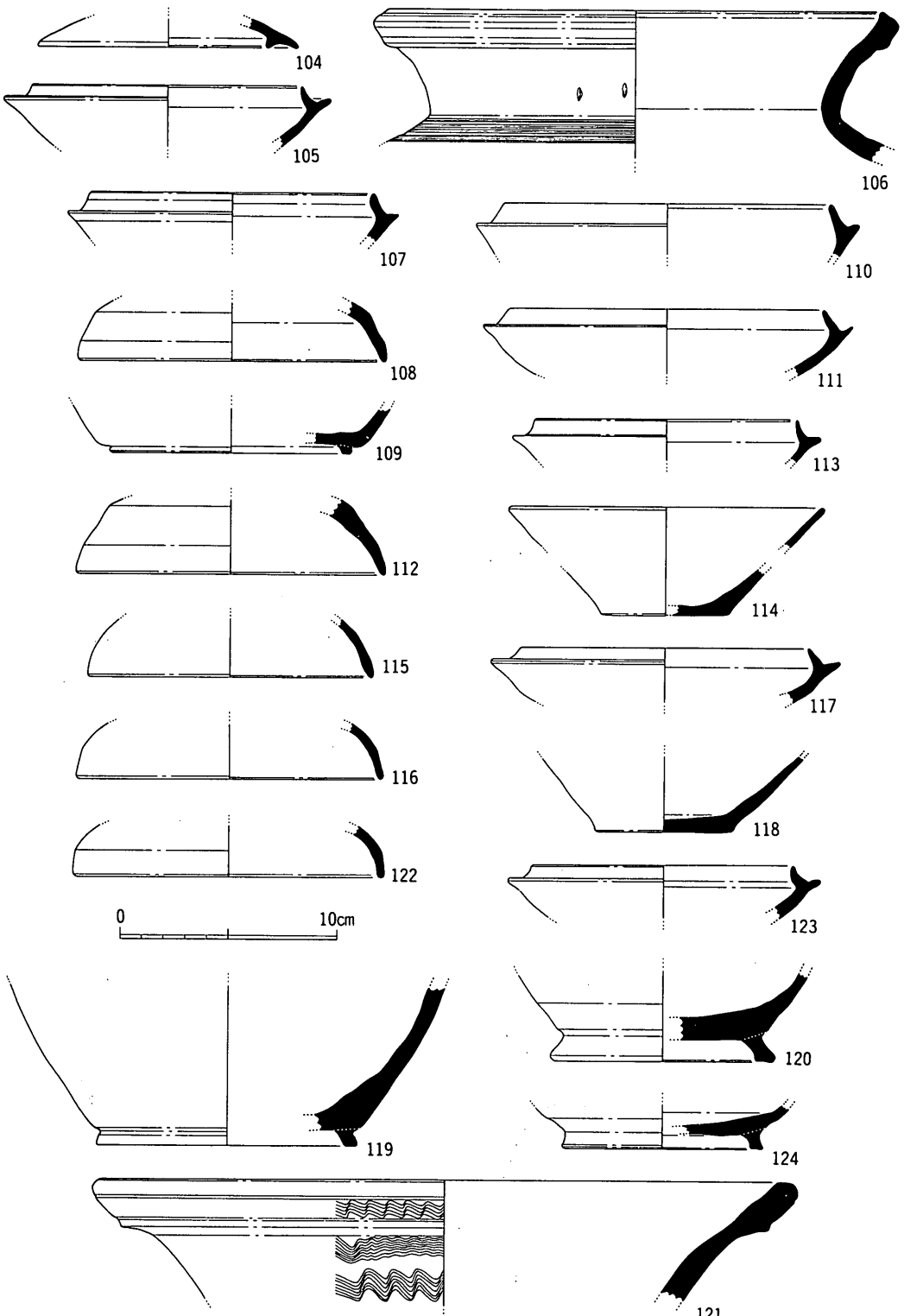
106は，須恵器の壺であるが頸部外面ヘラ状工具の先端部による刺突文がある。口縁部は肥厚しており端部を内方につまみだしている。また体部上半には，クシ描きが施されている。134の甕は，頸部外面に平行叩きを残している。

F－7・8土器集中　(第100図　149～156)

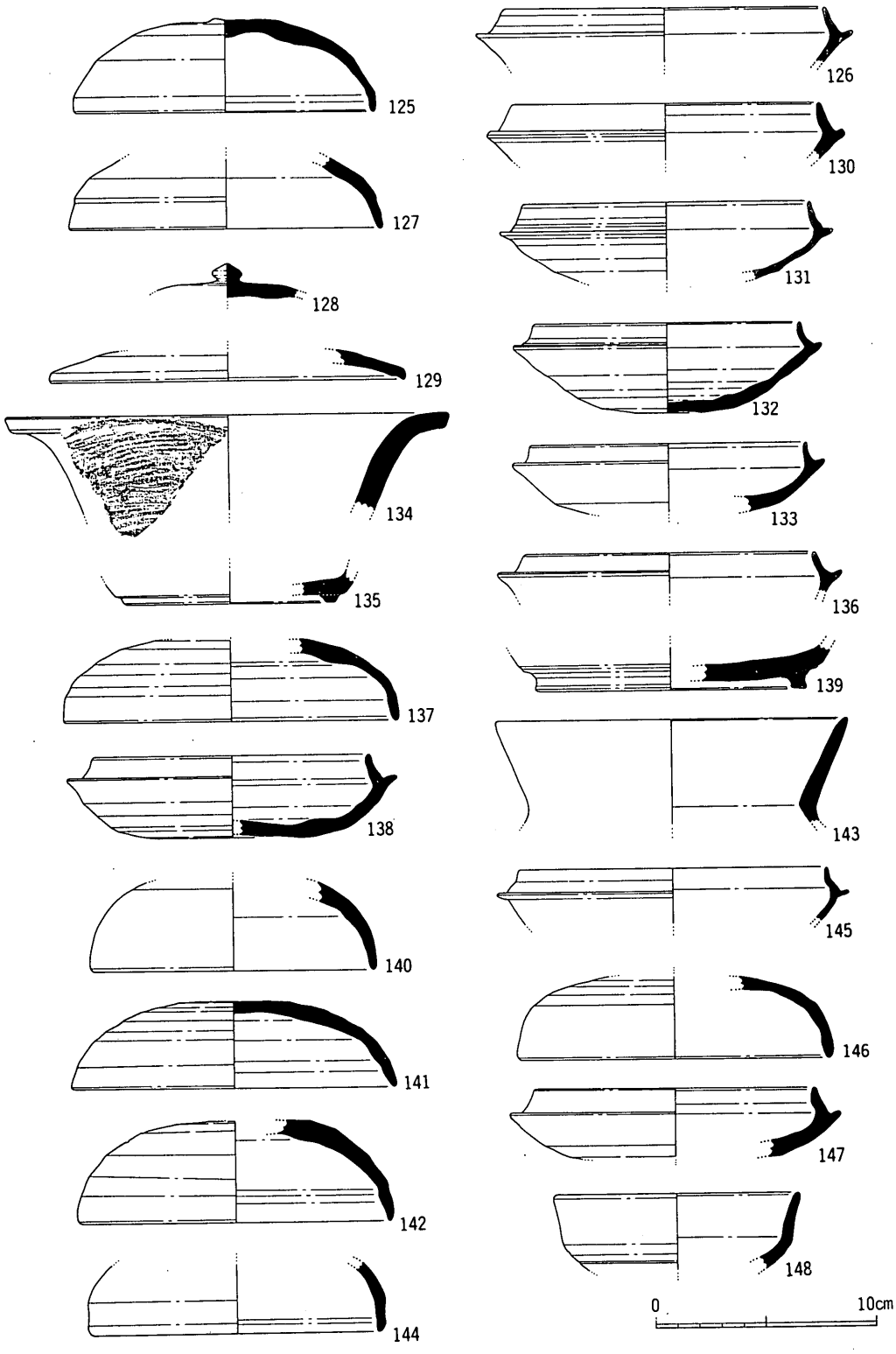
F－7・8土器集中部分からは6世紀末頃の須恵器がまとまって出土している。坏蓋は，天井部と体部間に稜線を持たず，口縁端部内面に段を持つものと持たないものがみられる。坏身は，立ち上りと受け部のかなり萎小化したものがみられる。156は，壺の口縁と思われ，直線的な頸部とやや外反した口縁を持つ。口縁端部内面には，一条の凹線を持つ。これらは，竪穴住居と同時期であり，出土位置も近接していることから竪穴住居に伴う遺構があったのではないかと考えられる。古墳時代の遺構は，中央部の削平部分の両側に位置しており，おそらくこの間にもこの頃の遺構があったことは間違いなく，その名残がこの土器集中部分であると思われる。

攪乱層出土遺物　(第100図　157～163)

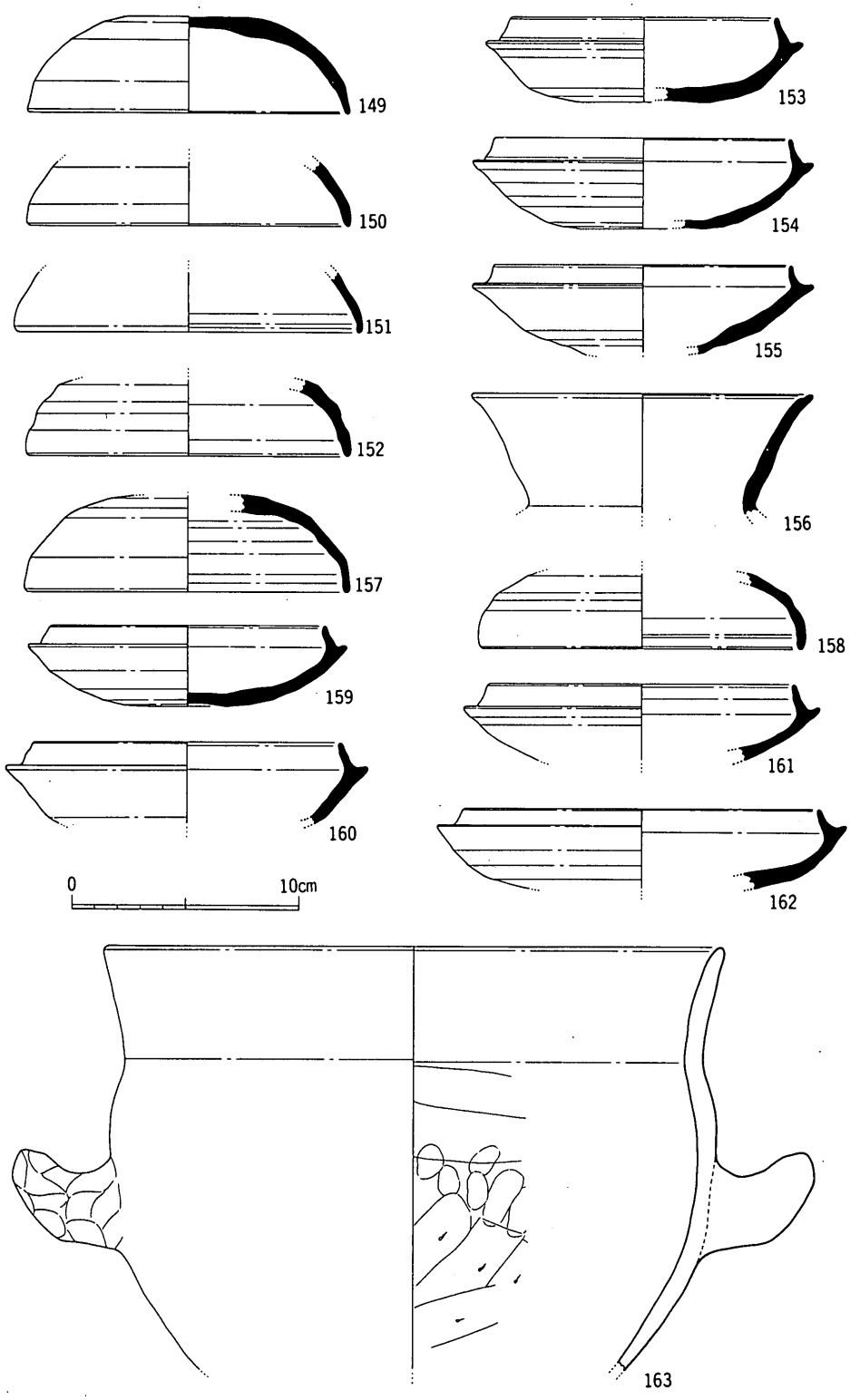
前述したことを裏付けるように調査区中央部攪乱層より6世紀末頃の遺物が出土している。163は土師器の甕で，体部中央部に上方へ屈曲した把手を持つ。頸部は直線的に外方へ延び，体部内面はヘラ削りが施されている。



第98図　包含層出土遺物実測図（須恵器）①



第99図　包含層出土遺物実測図（須恵器）②

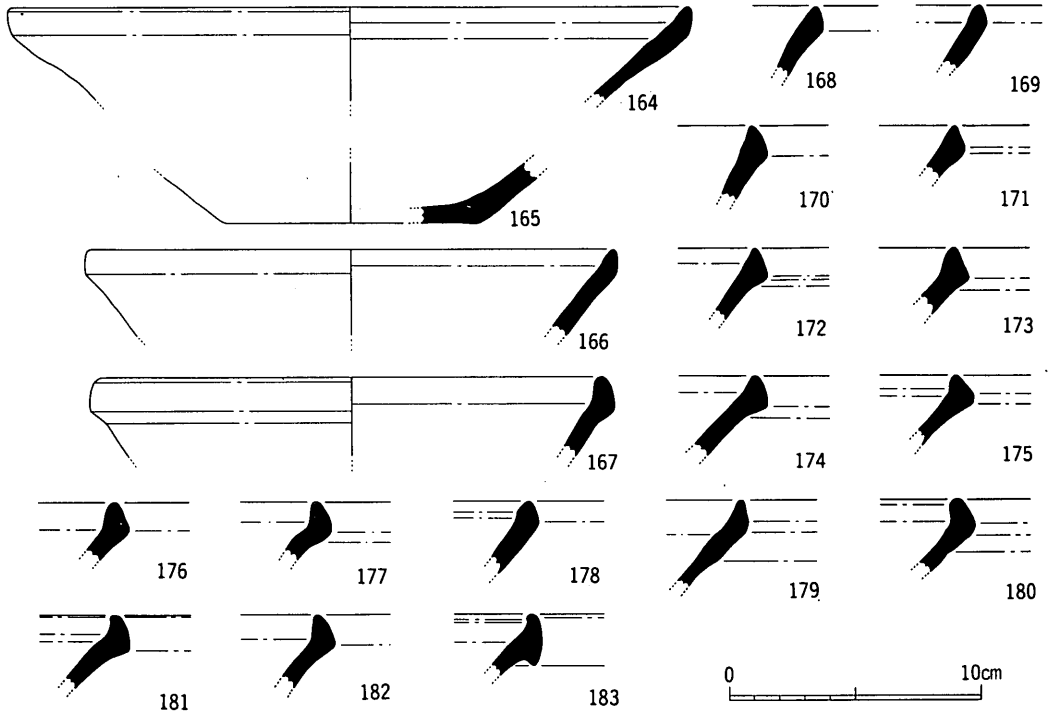


第100図 包含層出土遺物実測図（土器集中・攪乱土層）③

② 東播系こね鉢　(第101図　164～183)

包含層より，東播磨系中世須恵器（所謂魚住焼）が多量に出土している。口縁の形態で4種類に細分できる。①直線的に延びる体部に，あまり拡張されない端部がやや内方に屈曲するもの（164・166・168・169・179)。②直線的に延びる体部に端部外面を三角形状に拡張させ，端部上端を内方につまみ出したもの（170・171・172・173)。③直線的に延びる体部に，端部外面を三角形状に拡張させ，口縁端部を内方へ屈曲させたもの（174・175・176・177・180・181・182)。これらは，口縁端部内面に指ナデによる凹線状のくぼみを持つ。④口縁端部が上下に拡張され，上端はやや内方に曲っているもの（183)。以上，4種類に細分されるが，これらの口縁部形態の特徴は，東播系こね鉢の時間的な差において起こるものなのか，製作者の違いによって起るものなのかは，判然としない。しかし，口縁部を形態的に見た時，①→②→③→④というような流れが考えられるのではないだろうか。ここでは，各層ごとの前後関係で詳細にとらえるのは難しいが，①の形態が各グリッドの下層で出土していることより，大略的には，このような形態変遷が言えるのではないだろうか。

時期は，13世紀頃と思われる。



第101図 包含層出土遺物実測図（東播系こね鉢）④

③ 土師器　(第102図　184～205)

包含層出土遺物中の土師器は，掘立柱建物の量に比べると意外に少なく，土師器小皿・坏，黒色土器埦，瓦器埦・小皿，土錘などが出土している。

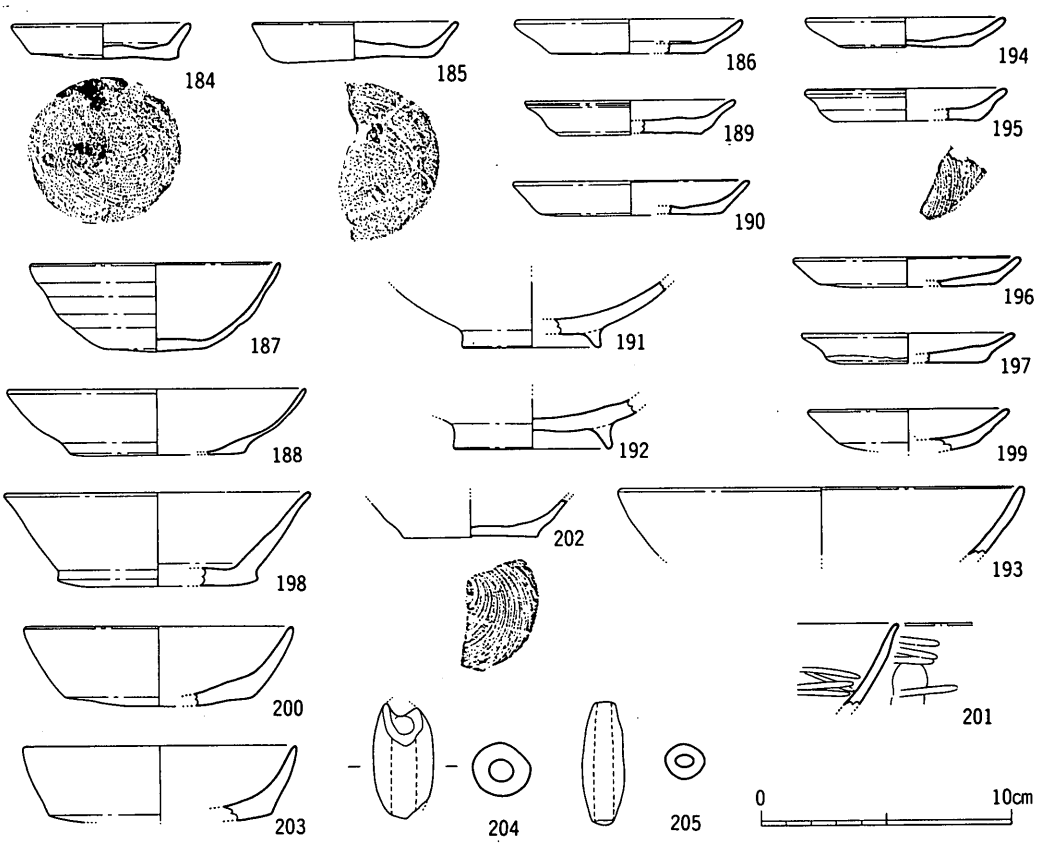
土師器小皿は，底部が糸切りされているもの（184・185・195）とヘラ切りされているもの（189・190・194・196）があり，体部形態でも，直線的に外方へ立ち上がるもの（184・185・190・197）とやや外反しながら立ち上がるもの（189・195），やや内彎しながら立ち上がるもの（186・194・196）などがあるが，小皿細部の形態に規則性は認められない。

また，土師器坏についても小皿と同様な形態がみられるが，ここでは，時間的な差を考察するまでには至っていない。

黒色土器の量は，非常に少ない。

瓦器の出土量も少ないが，体部のやや太くしっかりしたもの（193）や，体部外面にもヘラミガキのあるものなどがあり，瓦器でも古手の様相を示している。

包含層中より土錘が2点出土している。2点共に紡錘形を呈しており，中央にやや大きめの穴をあけている。外面は，指頭痕が顕著にみられる。



第102図 包含層出土遺物実測図（土師器）⑤

④ 土師質土器 （第103図 206～213・第104図 214～221・第105図 222～232）

土師質土器は大別して，土鍋・土釜・擂鉢の3種類に分けられる。

206～218は，土鍋である。206は，直線的な体部を持ち，口縁は外方に屈曲する。口縁内面には，横方向のハケ目が施されている。207～209は，内彎した体部を持ち，口縁は外方へ屈曲する。体部外面には，指頭痕がみられる。210～213は，口縁の屈曲が少なく，前述したものに比べると大型化したものと口縁が外方に長く延び，端部上面を上方に少しつまみ上げているものがある。214～218は，口縁が内方に屈曲する土鍋で，体部は内彎しながら口縁端部に至る。口縁端部は，指ナデによりつまみ出されている。216は，吊り下げる穴を口縁端部にもつものである。外面に指頭痕が顕著にみられるもの（216・217），内面にハケ目がみられるもの（215）などがある。

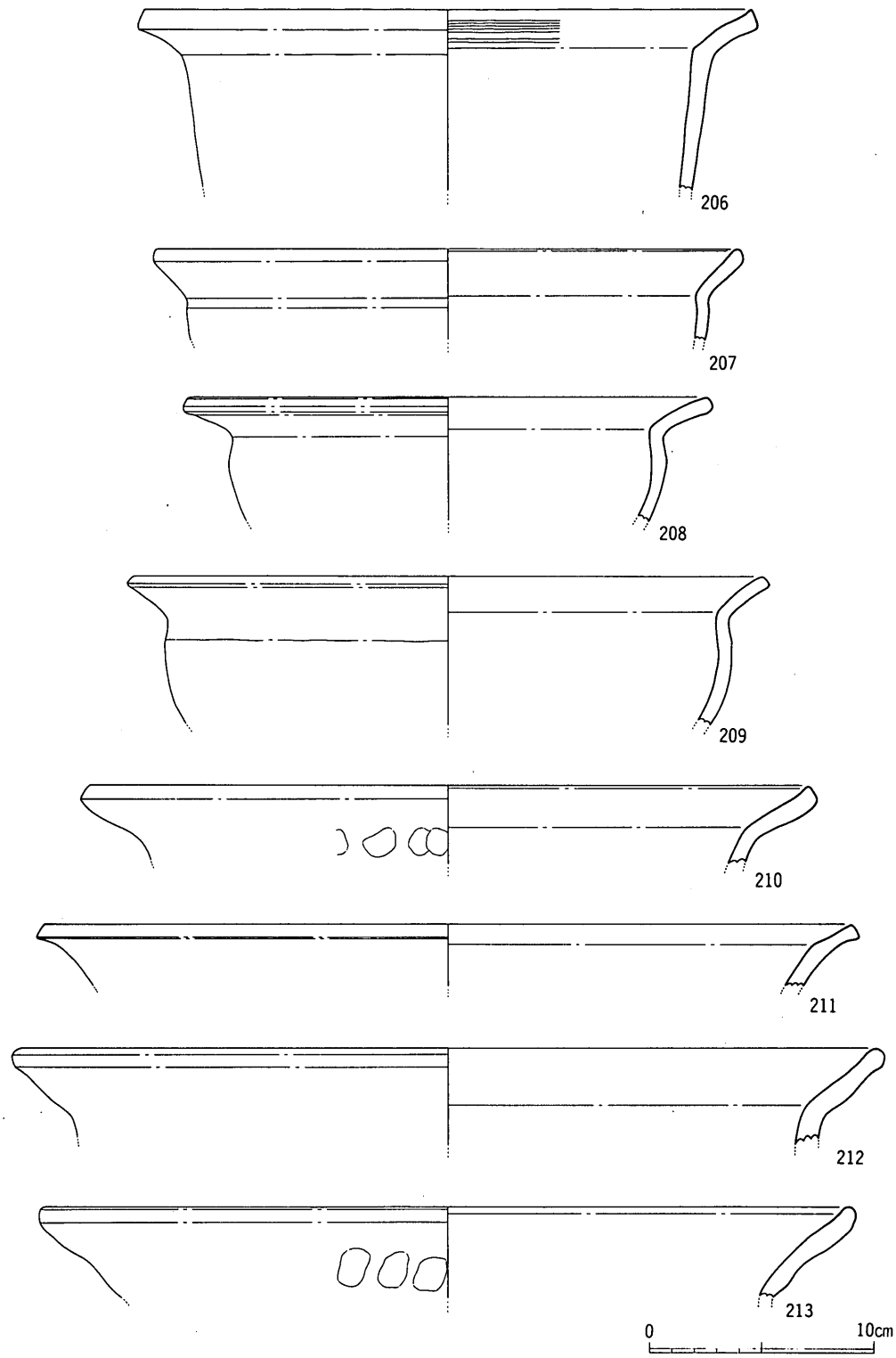
219～223は，土釜である。219・220は，鍔が大きく，水平に突出しており，口縁部が鍔より上部に延びているもの，短く終るものの2種類に分けられる。221～223は，鍔がかなり退化したもので，体部は丸くつくられており，口縁部は少し外反するもの（221・222）と内方向に延びるもの（223）とがある。体部外面には，指頭痕が顕著にみられ，体部上半・鍔直下に脚が付く。かなり大型のものや小型のものがある。

224～228は，土釜の脚である。断面円形で，長く延びるもの（224～227）や短く終るもの（228）などがある。全面，指ナデ調整痕が顕著にみられる。

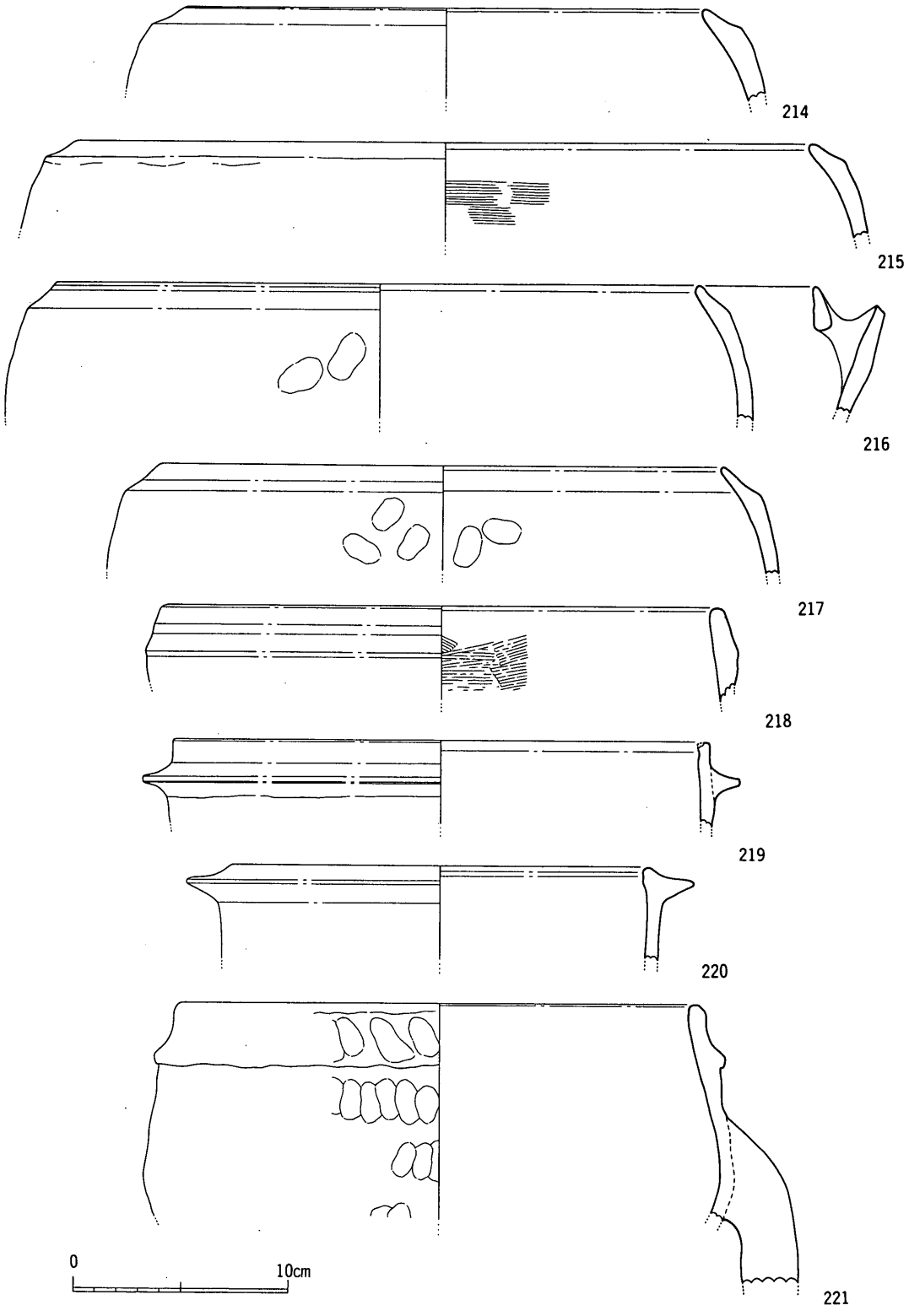
229～232は，土師質の擂鉢である。直線的に延びる体部とやや内彎気味の体部があるが，口縁端部は全て，内方向に屈曲しており，端部はつまみ出されている。体部内面には，6本1単位の条溝がみられ単位ごとの間隔はかなりあけられている。体部外面には，指頭痕が顕著にみられる。

⑤ 備前焼 （第106図 233～243）

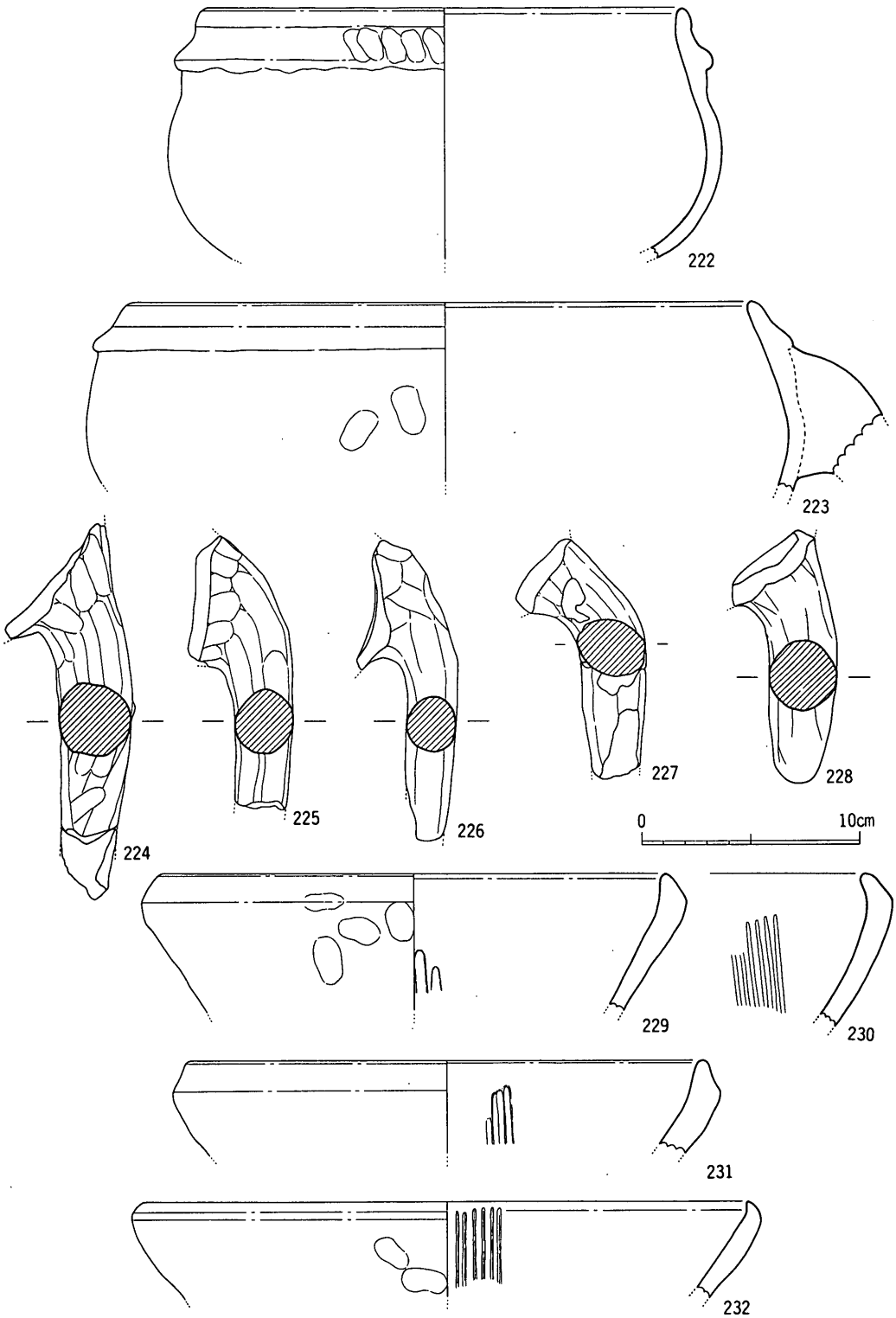
233～238は，擂鉢で，233は，口縁を少し拡張させ，口縁端部は斜めにつくられ，上端と下端をそれぞれ三角形状につまみ出している。条溝は粗く，単位間もかなり開いているようである。色調は，暗青灰色を呈しており，還元焔焼成に近いものと思われる。間壁編年III期に比定される。234は，口縁端部を少し拡張しているもので，上端はやや内方につまみ出され，下端は丸くつくられている。口縁端部外面は，233・234とも凹線状の横ナデが施されている。体部内面には，単位間が広く目の粗い条溝が施されている。234の色調は，233と同じであり，間壁編年IV期に比定される。235～237は，口縁端部を拡張させ，内外面に凹線が施されており，口縁端部下半を丸くおさめているもの（235・236）と三角形状につまみ出すもの（237）がある。また，体部内面の条溝も，単位間を開けるもの（235）と密に施すもの（236・237）があり，後者も条溝上端をそのまま残すもの（236）とナデ消すもの（237）に分けられる。また，口縁端部は，全体に丸く仕上げられているものから変換点に稜を持ちシャープに仕上げられているものまである。235は17世紀後半，236は18世紀，237は18～19世紀頃に比定される。238は，擂鉢底部で，体部内面には，金具の櫛による条溝が密につけられている。



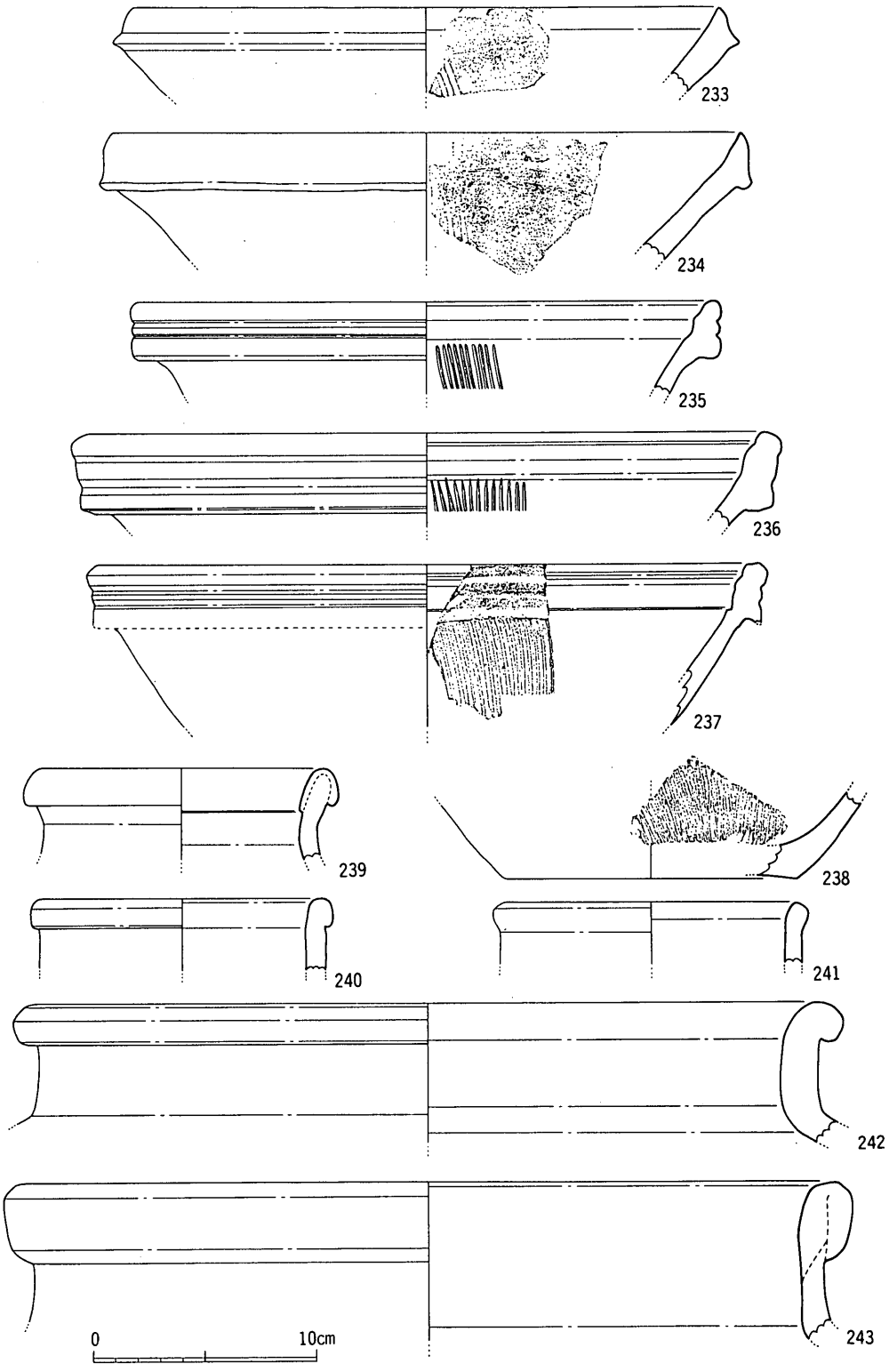
第103図 包含層出土遺物実測図（土師質土器）⑥



第104図 包含層出土遺物実測図（土師質土器）⑦



第105図 包含層出土遺物実測図（土師質土器）⑧



第106図 包含層出土遺物実測図（備前焼）⑨

239～241は，壺の口縁と思われ，口縁は，別の粘土紐を端部に貼り付け仕上げたもの（239），外方に折り曲げ仕上げたもの（240・241）などがある。頸部は，垂直に立ち上がるものばかりである。時期は，間壁編年Ⅴ期に比定されると思われる。

242・243は，大甕と思われ，頸部は垂直に立ち上がり，口縁部は外方に折り曲げ丸くおさめている。242は，間壁編年Ⅲ期に，243は，Ⅳ期に比定されると思われる。

⑥ 陶磁器 （第107図 244～262）

244は，唐津系の皿である。高台は低く削り出し，内面見込み部分には砂目積みの痕跡がみられる。釉は高台までかかっておらず，発色は悪く，器面はカン入が著しい。時期は，16世紀末～17世紀頃と思われる。

245～247は，陶胎染付碗で，体部外面に発色の悪い呉須絵が描かれている。246・247は，体部外面下半に圏線がかかれている。体部下半は内彎気味に立ち上がる。高台畳付け以外に青味がかった灰色釉が施される。器面はカン入が著しい。

248は，二重網目文の碗である。高台畳付け以外に青味がかった白色釉を施している。呉須の発色は悪く，淡青色を呈している。

249～251は，青磁染付碗である。底部には細めの高台が削り出されており，体部は直線的に外方に延びている。外面には，緑がかった釉がかけられ，内面及び高台内面には青味がかった白色釉がかけられている。高台畳付け部分には，釉がかかっていない。口縁内面には四方襷文がかかれており，内面見込み部には圏線とコンニャク判による五弁花文の退化文様が施されている。

252・253は，染付皿である。高台は小さく作られ，径は，かなり大きい。体部はやや内彎気味に立ち上がり，内外面に圏線及び文様が施されている。

254は，唐津系の刷毛目鉢である。体部は，端部近くで外方に屈曲し，上方につまみ上げられている。

255・256は，唐津系の青緑釉皿で，高台は高く削り出され，内面見込み部に蛇ノ目釉剝ぎが認められる。

257は，肥前系の白磁皿である。高台は低く三角形状につくられ，内面には溝状の凹みが認められる。

258・259は，肥前系の染付である。内外面に呉須絵が描かれている。

260・261は，肥前系の陶器である。260は，体部下半は内彎し，上半は直線的に延びるもので，器面はカン入が著しい。釉は緑がかった透明釉である。261は，内面見込み部に蛇ノ目釉剝ぎが認められる。釉は，深い緑色を呈し，高台までかかっていない。

262は，白磁紅皿で高台は低く，体部は内彎しながら立ち上がる。体部外面には，縦の沈線が連続して施されている。時期は，244の唐津系皿が16世紀末～17世紀頃で，245～247，255・256・261の陶胎染付碗及び唐津系の青緑釉皿が17世紀末～18世紀中葉に，その他は18世紀～19世紀初に比

定される。

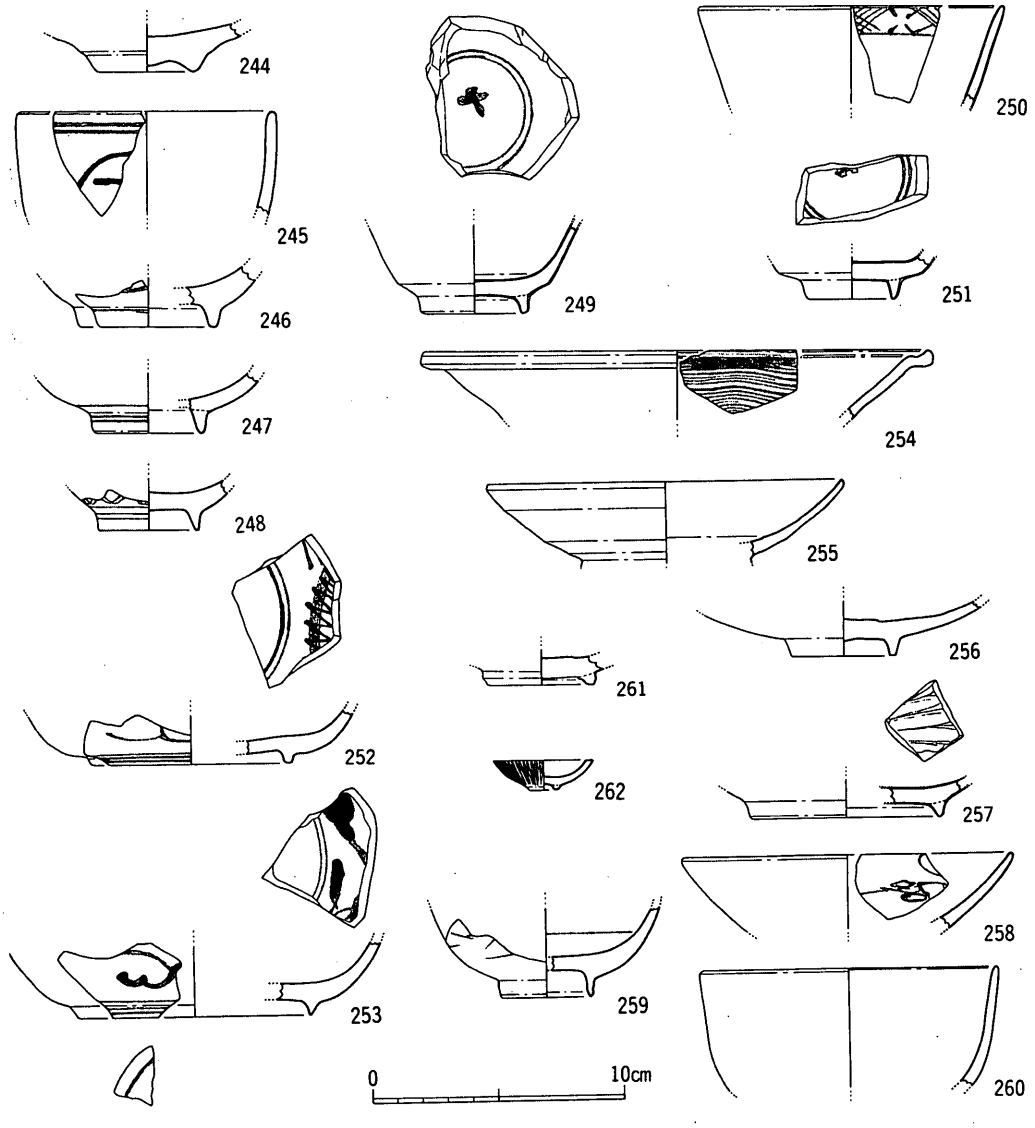
⑦ **輸入磁器・緑釉陶器・その他** （第108図 263～278）

263～277は，輸入陶器である。

263～265は，体部外面上端に雷文帯を持ち，内面には片切彫による草花文が描かれた龍泉窯系青磁である。体部はやや内彎気味に立ち上がり，釉はくすんだ緑色を呈する。時期は，15世紀頃に比定される。

266は，龍泉窯系青磁碗で，口縁端部内外面にヘラ描きによる横線が描かれている。

267～269は，外面に鎬蓮弁を持つ龍泉窯系青磁碗である。13世紀後半頃に比定される。



第107図 包含層出土遺物実測図（陶磁器）⑩

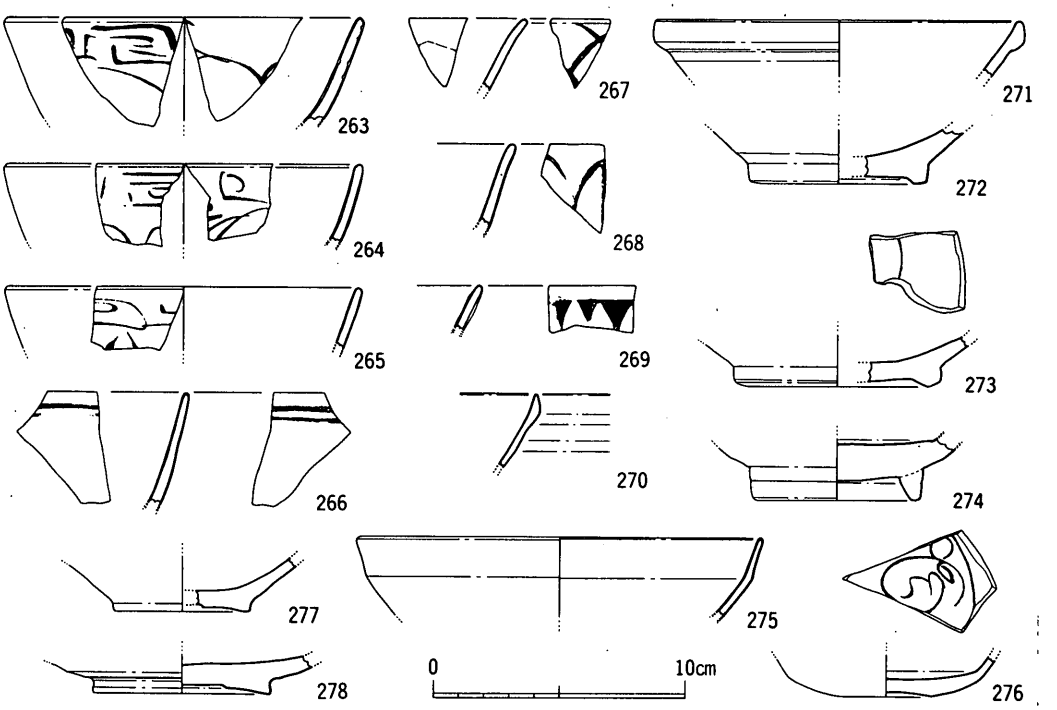
270～274は，白磁碗で，口縁を玉縁状につくるもの（270・271）があり，太宰府編年白磁Ⅳ類に比定される。272～274は，白磁碗底部であり，高台は，太く，低く削り出すもの（272・273），高く削り出すもの（274）がある。274は，内面見込み部外周に沈線を施す。これらは，釉を高台までかけておらず，体部下半まででとめる。272・273は，太宰府編年白磁Ⅳ類に，274は，同編年Ⅴ類に比定される。

275は，同安窯系青磁碗で，体部はやや内彎気味につくられ，体部上半でやや内方に屈曲する。内面にクシ目文様を持つ。太宰府編年同安窯系青磁Ⅰ類に比定される。

276は，白磁皿で，底部は小さくつくられ，体部中央部で内方へ屈曲する。内面見込み部には草花文様が彫られている。太宰府編年白磁Ⅷ－1類[(註5)]に比定される。

277は，越州窯系青磁である。底部は蛇ノ目高台で，体部は直線的に外方へ延びる。全面に緑色の釉がかかっている。太宰府編年の越州窯系青磁Ⅰ－1類に比定される。越州窯系青磁は，県下であまり出土しておらず，官衙・寺院関係の出土例が多いようである。

278は，蛇ノ目高台を持つ須恵器である。



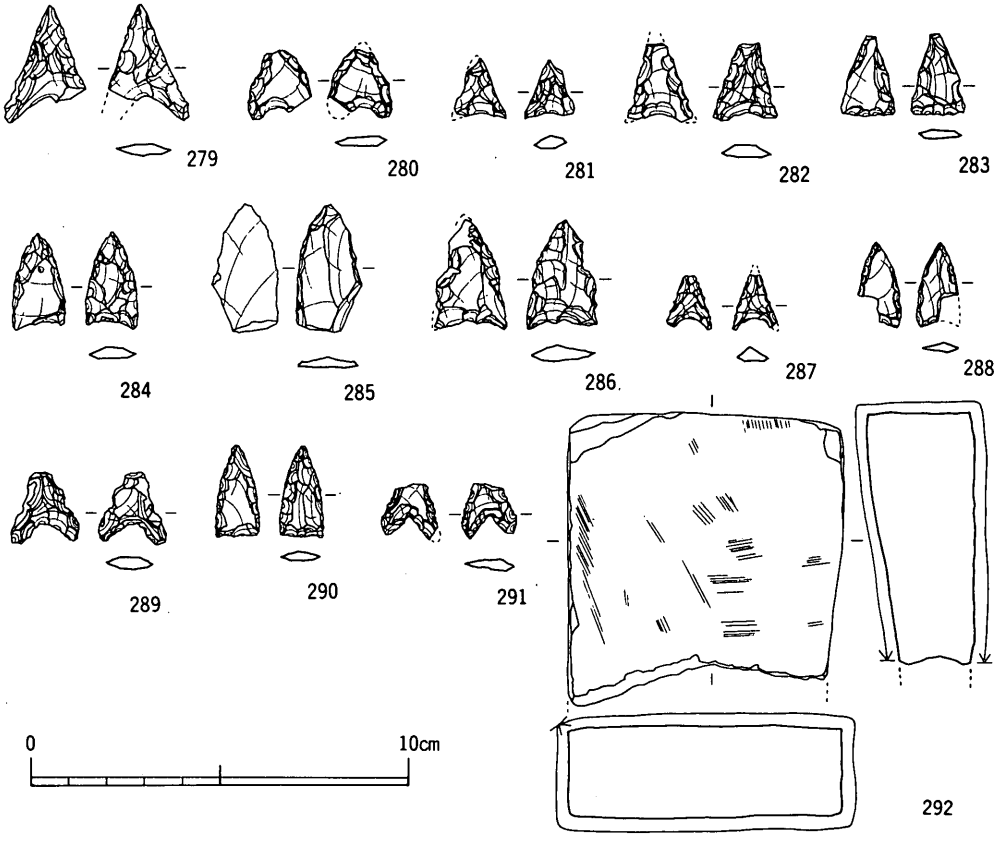
第108図 包含層出土遺物実測図（輸入磁器）⑪

⑧ 石製品　(第109図　279～292)

279～291は，サヌカイト製の石鏃である。形状は，凹基無茎式のもの（279・280・281・282・284・286・287・288・289・291）と平基無茎式のもの（283・290）がある。凹基無茎式の中にも，くりこみがV字状になっているもの（279・289・291）とU字状になっているもの（280・281・282・284・286・287・288）などがあり，側辺も直線的なもの（279・281・282・283・287・291），外彎気味のもの（280・284・286・288・290），やや内彎気味のもの（289）などがある。

285は，石鏃の未製品と思われる。

292は，安山岩製の砥石である。全面を研ぎ面としている。



第109図 包含層出土遺物実測図（石製品）⑫

4．ま と め

発掘調査の結果，柞田八丁遺跡は，古墳時代～中世（一部近世遺構を含む）に至る集落址であることが判った。ここでは，検出された遺構を時代ごとに細分することによって，それぞれの様相を概観し，考察したい。

当遺跡では，ほぼ同一平面上で遺構が検出されたため，遺構及び埋土出土遺物により時期決定を行った。その結果，柞田八丁遺跡は，古墳時代2期・奈良時代・中世（鎌倉時代と思われる）8期・近世の4時代12期に細分できる。

古墳時代1期では，竪穴住居7棟・掘立柱建物1棟・古墳1基・溝状遺構2が検出されている。これらは，調査区全域で検出されており，墓域・居住域・生産域に区分されるものと思われる。

墓域であるが，微地形復原によって確認された高所には，今回確認された土井之内古墳をはじめ，小天皇塚古墳などの古墳が造営されていたことが判っている。おそらく，これは，それまでの慣習による丘陵地尾根部の墓域選地ができなかった集団首長によるもので，平野部で墓域選地を行った結果が，この古墳の立地であると思われる。言い換えれば，生活領域内に丘陵高所のない集団，6世紀末頃から古墳造営に参加する新たな首長によるものである。母神山古墳群では，現在確認されている古墳の中で6世紀末頃以降に新たに造られた古墳はなく，7世紀以降ではほとんどが追葬を行っている。このことは，丘陵を持つ首長数の増加がなく，新たな首長の丘陵への古墳造営もないことを示している。しかし，平野部では，6世紀以降新たに古墳造営が始まる。以上のことより，丘陵をテリトリー内に持つ集団首長と持たない集団首長間の差が古墳造営位置に認められる。古墳造営可能な首長の増加と考えられる。

また，後期の群集墳は，7世紀前半に衰退していることからも裏付けられる。

最近発掘された雲岡古墳・埴穴塚古墳などは，7世紀の古墳で，特に埴穴塚古墳は，7世紀初に初葬が行われ，追葬の痕跡がないことから，6世紀末頃新たに台頭した集団首長が造墓規制(註6)により衰退していった結果を裏付ける古墳ではないだろうか。

平野部の古墳としては，調査区南西方向約1.4km地点に小森塚古墳があり，築造時期を6世紀後半とすることから，今後，丘陵高所に造営された古墳と平野部に造営された古墳の関係を考える貴重な一資料となるであろう。

居住域であるが，7棟検出された竪穴住居の中で最大のものは，他のものと比べ，より高所で確認されており，近くに掘立柱建物を伴うことから，古墳造営者により近い者の住居であったことが推定できる。この竪穴住居ＳＨ07と他の竪穴住居の間は，後世の攪乱のため，遺構は検出できなかった。そのために居住域の全体像は不明であるが，北側で検出された6棟の竪穴住居を，それぞれの特徴ごとに列挙すると，①造り付けのカマドを持つもの（ＳＨ03・05・06），持たないもの（ＳＨ01），②主柱穴を四隅に持つもの（ＳＨ01），主柱穴を四隅及び中央に持つもの（ＳＨ

03)，掘立柱建物状に2間×4間の主柱穴を持つもの（SH04)，③主軸をほぼ真北より20°西にとるもの（SH01～04)，ほぼ真北にとるもの（SH05･06）など各種様々で，これらが造られた6世紀末頃には，竪穴住居造営の規則性が薄らぐ時期・地域であったのではないだろうか。

これら古墳時代の遺構は，C列を境にして以北には検出されなかった。おそらく，この地域は，古墳時代の生産域であったと思われる。

この様に，古墳時代（6世紀末頃）の様相は，高所に墓域･中程に居住域･低所に生産域を持って一つの村が形成されていたことが判る。

古墳時代2期の遺構では，7世紀初頃の土壙墓が2基検出されている。しかし，他に同時期の遺構がないことから，この地が墓域として存在していたかは不明である。しかし，7世紀初頃は，古墳造営が終焉を迎える前夜でもあり，この土壙墓が造墓規制に抵触する集団首長によるものか，それ以外の階層によるものかは，今後の課題となろう。

また，6世紀～8世紀に機能していた溝も検出されているが，範囲外へ延びていることから性格は不明である。

中世の遺構としては，8期に細分された掘立柱建物群がある。それらは，主軸方向によりまとまりをみせており，中世における建物配置の一様相を呈している。

これら8群に細分された掘立柱建物は，前後関係は判らないものの，各々規則性を持って建てられていたのではないかと考えられる。ここでは，このグルーピングを一つの試みとして行い，良好な結果を得たが，今後の資料の増加を待たなければ，中世の建物配置に規則性があったとは言えないのではないだろうか。

以上，柞田八丁遺跡では，中央部が攪乱を受けているものの，各時代において貴重な遺構が検出された。遺物としては，調査区内から，県下で出土例の少ない越州窯系青磁，隣接地から，陶印と官衛・寺院に関係する資料の出土が相次いだため，今後，奈良時代に創建された安井廃寺あるいは，南海道柞田駅も考慮に入れた柞田八丁遺跡の位置付け及び性格付けが課題となるだろう。

（註）

1．小天皇塚古墳
　雲岡古墳
　埴穴塚古墳
　柞田八丁遺跡

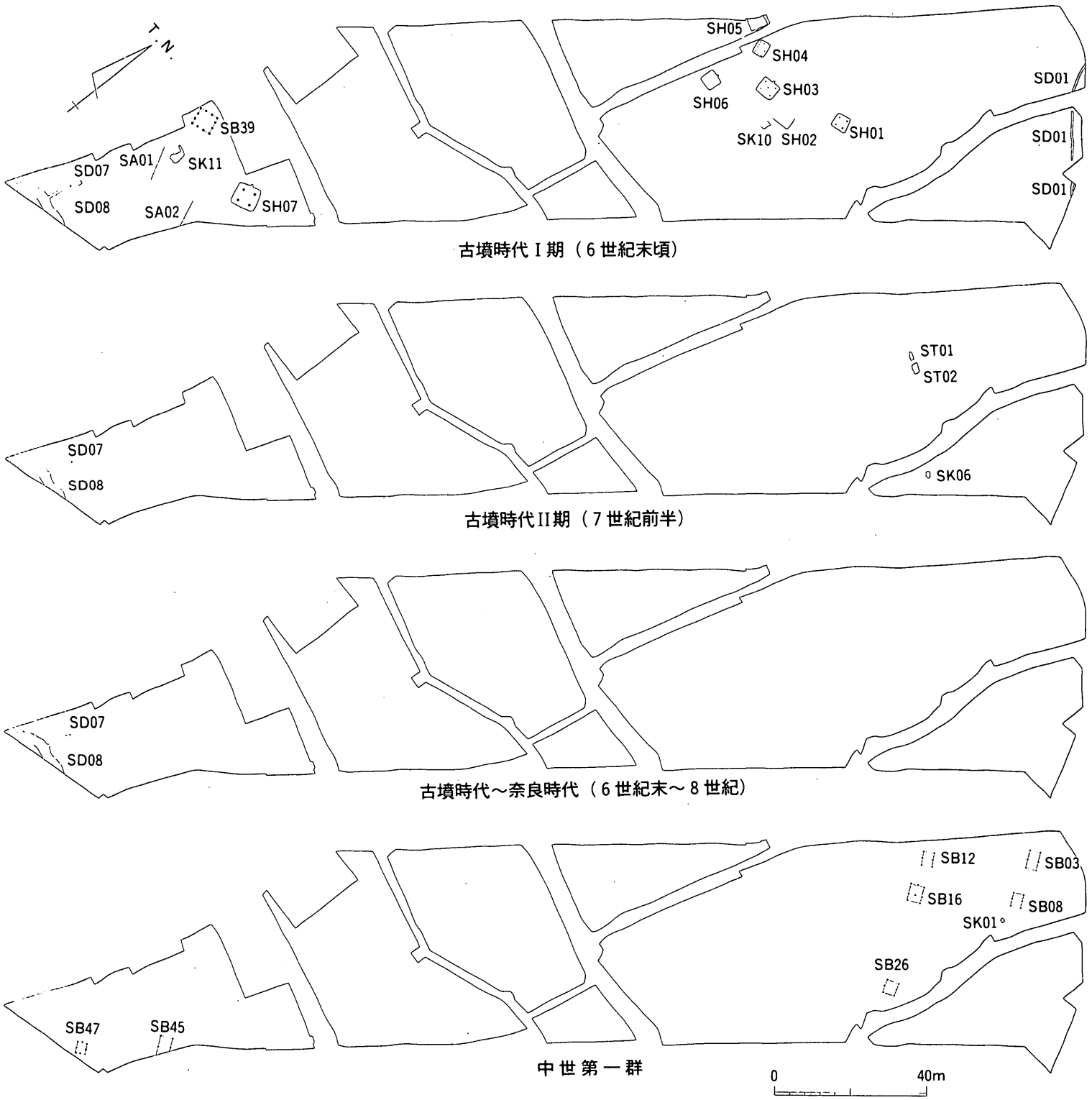
2．柱穴により土師器の坏が出土した例は，四国横断道調査の上一坊遺跡においてもみられる。

3．九州歴史資料館　研究論集4　太宰府出土の輸入磁器

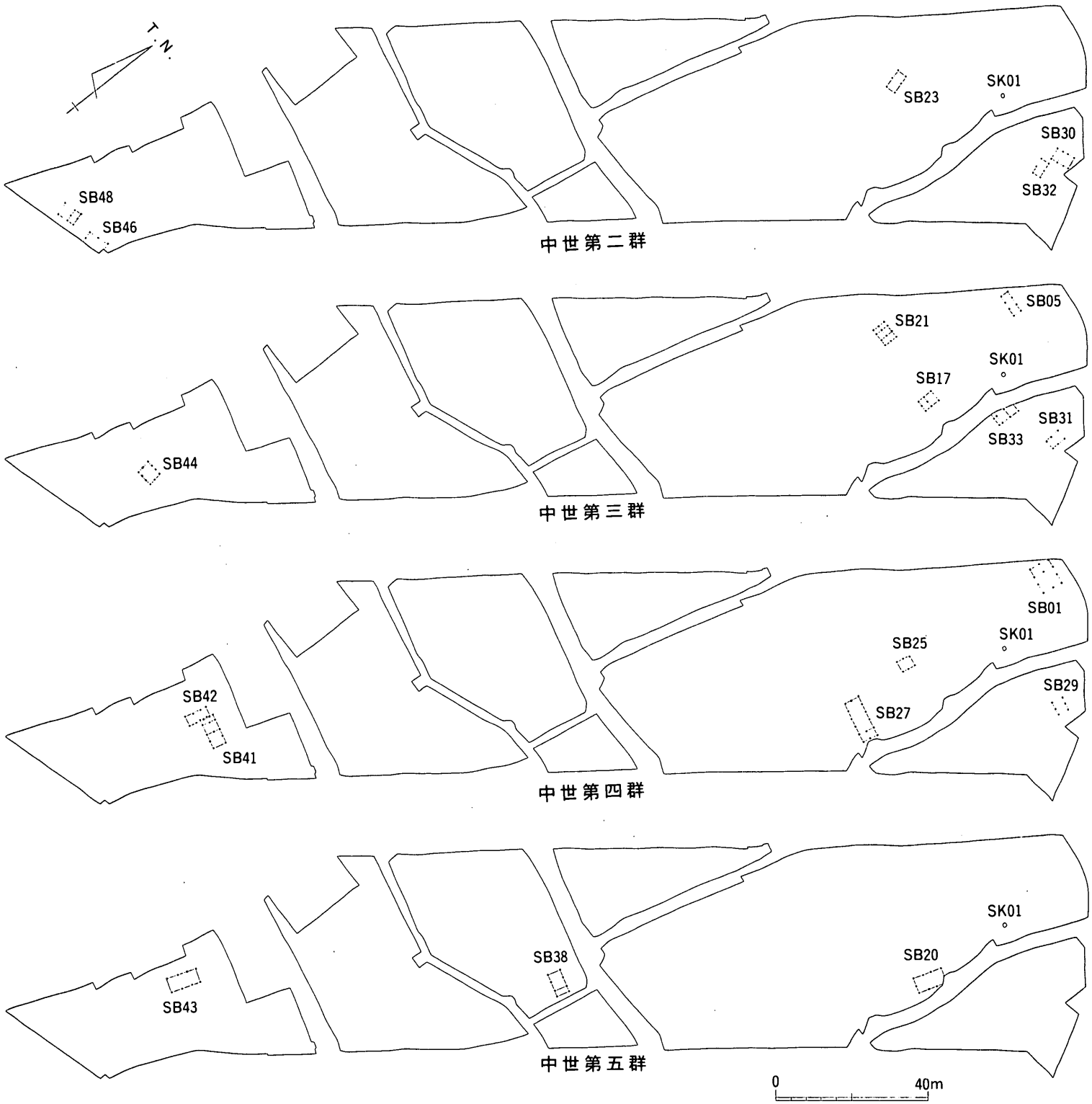
4．同志社大学教授　三輪茂雄氏に御教示を得た。

5．県内で越州窯系青磁は，下川津遺跡で1点，大浦浜遺跡で9～10世紀頃のもの1点，10～11世紀頃のもの1点の計2遺跡で3点が出土しているのみである。当遺跡で出土した青磁は，太宰府編年越州窯系青磁Ⅰ－1類（9～10世紀）に比定される。

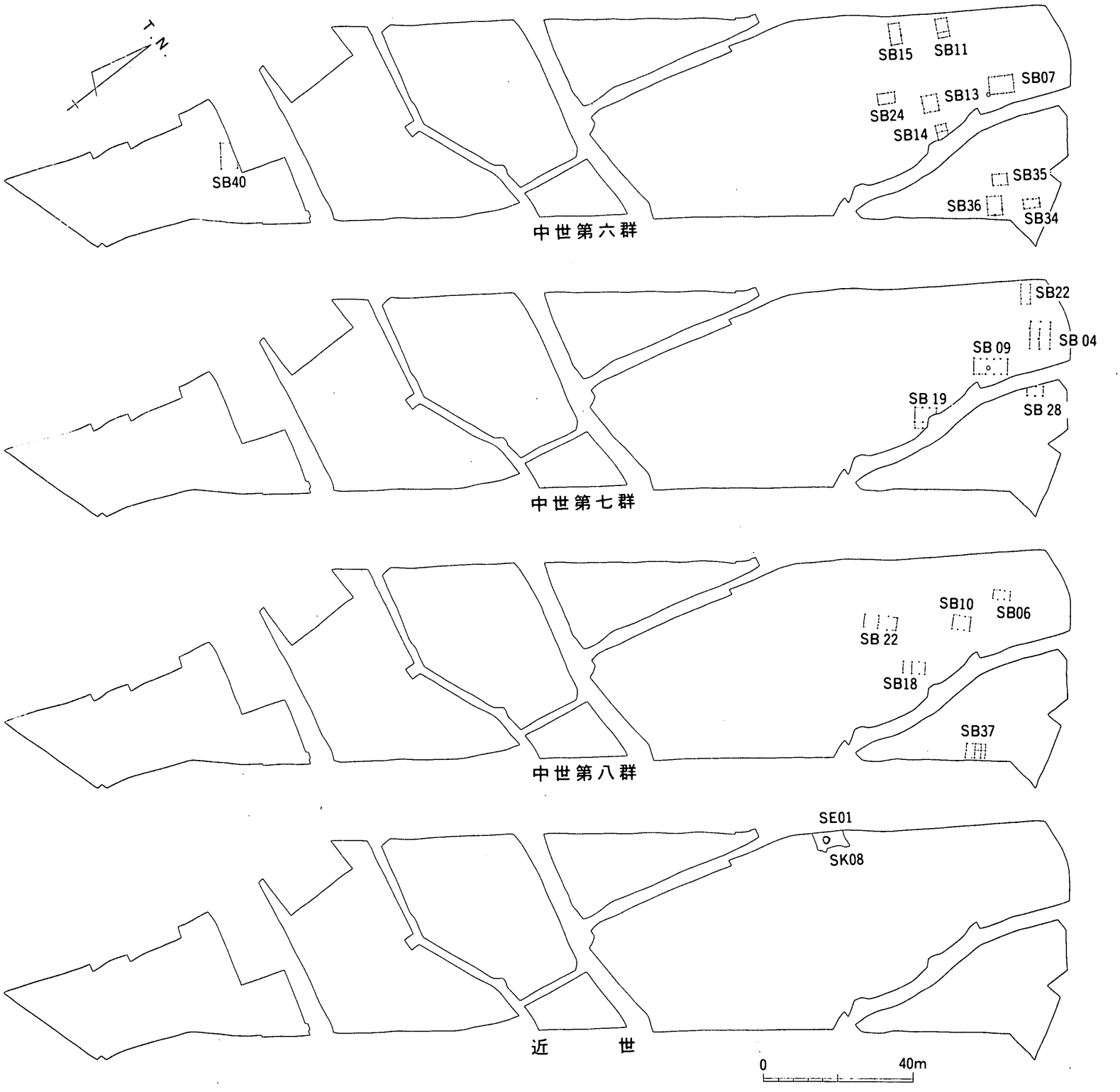
6．大化の薄葬令



第110図　柞田八丁遺跡遺構変遷図(1)



第111図　柞田八丁遺跡遺構変遷図(2)



第112図　柞田八丁遺跡遺構変遷図(3)

第2表　掘立柱建物一覧表（1）

古墳時代後期

単位（cm）

遺構番号＼項目	規模(梁間×桁行) 大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
SB39	3間×3間	N23°W	76	60	182	130	大型の柱穴を持つので，主軸を竪穴住居とほぼ同一方向に持つ。
	459×516		65.4(平均)		162.5(平均)		

中世　第一群

SB03	1間×2間	N38°N	36	18	275	226	
	275×490		25		255		
※1 SB08	1間×2間	N38°W	44	24	269		梁間と桁行の柱間長が異なる建物である。
	269×349		33.5		269		
					188	161	
					174.5		
※1 SB12	1間×2間	N42°W	36	21	288		〃
	288×367		27.7		288		
					194	173	
					183.5		
※1 SB16	1間×2間	N37°W	28	16	258		1間×2間の建物の東側に庇を持つものである。
	258×360		22.5		258		
					186	174	
					180		
※1 SB26	1間×2間	N31°W	30	18	312		梁間と桁行の柱間長が異なる建物である。
	312×349		24.5		312		
					188	161	
					174.5		
SB45	1間×(2)間	N40°W	36	28	320	248	範囲外に建物が延びており，全体像は不明である。
	320×(520)		30.7		288		
SB47	2間×2間	N42°W	52	40	164	121	柱穴径のやや大きい建物である。
	257×288		47		136.3		

中世　第二群

SB23	1間×2間	N16°W	26	22	302	223	
	264×525		24.3		263		
※1 SB30	1間×2間	N21°W	34	25	323		1間×2間の建物の西側に庇を持つものである。
	323×326		30.7		323		
					194	132	
					163		
SB32	1間×2間	N20°W	28	16	247	185	
	232×432		23.5		221.3		

第２表　掘立柱建物一覧表（２）

単位（cm）

項目 / 遺構番号	規模(梁間×桁行) 大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
※１ ＳＢ46	(２)間×２間	N20°W	56	38	184		範囲外に延びているため，規模不明。
					184		
	(324)×573		47.5		297	276	
					286.5		
※２ ＳＢ48	２間×１＋１間	N19°W	32	24	204	144	北東隅をＳＫ14に切られている。
	348×192＋306		25.3		180		

中世　第三群

ＳＢ05	１間×３間	N５°E	34	16	225	179	東西に長い建物である。
	225×603		26.4		207		
※２ ＳＢ17	２間×１＋１間	N２°W	44	24	196	145	南側に一間の幅で入口と思われる部屋が付く。
	323×196＋245		30.5		173		
ＳＢ21	２間×２間	N０°	36	18	200	184	西に一間の庇(?)が付く総柱の建物である。
	372×385		25.3		189.3		
ＳＢ31	１間×２間	N５°W	40	20	265	185	
	265×425		28.3		230		
ＳＢ33	(２)間×２間	N１°E	40	20	280	240	西側を水路に切られているため，規模不明。
	(329)×531		28.2		259.8		
ＳＢ44	２間×３間	N８°W	50	20	196	139	ＳＸ01に削られている。掘り方のしっかりした柱穴を持つ。
	371×444		38.4		163		

中世　第四群

ＳＢ01	２間×３間	N９°E	56	20	301	202	西側に一軒間切りがある。
	556×704		34.4		256.3		
※１ ＳＢ25	１間×２間	N８°E	33	20	305		
					305		
	305×368		28.2		196	172	
					184		
ＳＢ27	２間×５間	N13°E	40	22	244	206	東西に長く床面積の広い建物である。
	416×1,123		28.9		218.4		
※１ ＳＢ29	１間×２間	N11°E	30	22	304		
					304		
	304×360		26.5		195	165	
					180		
※２ ＳＢ41	２間×２＋１間	N12°E	36	24	210	162	西側に間切りと庇が付く。
	363×404＋278		27.3		191.8		
※１ ＳＢ42	１間×３間	N８°E	44	20	279		南北に長い建物である。
					279		
	279×607		34.4		236	155	
					202.3		

第2表　掘立柱建物一覧表（3）

中世　第五群

単位（cm）

遺構番号＼項目	規模(梁間×桁行) 大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
SB20	2間×3間	N16°E	36	24	285	191	
	415×784		30.6		239.8		
※1 SB38	1間×2間	N16°E	24	20	348		東に庇の付く建物である。
					348		
	348×472		21.7		258	214	
					236		
※1 SB43	1間×3間	N17°E	48	18	376		
					376		
	376×822		26.3		319	251.5	
					274		

中世　第六群

SB07	2間×3間	N32°E	32	16	251	186	
	452×651		24.5		220.6		
SB11	2間×2間	N28°E	30	24	251	110	東に庇が付く建物である。長辺の柱間が違う。
	313×361		26.8		168.5		
SB13	3間×3間	N27°E	44	24	205	108	柱間の狭い建物である。
	408×445		29.9		142.2		
SB14	2間×(3)間	N24°E	38	17	188	122	東側を切られており,規模不明。
	291×(408)		29		163.4		
※1 SB15	1間×3間	N29°E	36	20	297		
					297		
	297×545		26.2		190	165	
					181.7		
SB24	1間×2間	30°E	30	18	292	173	
	292×465		25.2		252.3		
SB34	2間×3間	N31°E	40	20	180	112	しっかりした掘り方の柱穴を持つ。
	240×444		29.6		136.8		
※1 SB35	1間×2間	N34°E	34	19	306		
					306		
	306×405		29.2		223	182	
					202.5		
SB36	2間×3間	N35°E	52	22	224	150.5	
	392×501		31.6		178.6		
※1 SB40	1間×2間	N35°E	56	38	440		柱間の長い建物である。
					440		
	440×684		45		364	320	
					342		

第2表　掘立柱建物一覧表（4）

中世　第七群

単位（cm）

遺構番号＼項目	規模（梁間×桁行）大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
※1 SB02	1間×2間	N39°E	38	24	266		東に庇が付く。
	266×400		32.3		266		
					203	191	
					200		
SB04	2間×2間	N40°E	36	20	291	249	西に庇が付く，総柱建物である。
	532×540		29.6		268		
※1 SB09	1間×5間	N39°E	40	21	400		南北に長い建物である。床面積が広い。
	400×898		26.1		400		
					227	128	
					179.6		
※1 SB19	1間×3間	N38°E	48	28	385		東側を切られているが，庇の付く建物である。
	385×584		37.7		385		
					220	190	
					194.7		
SB28	1間×2間	N40°E	42	25	232	196	
	232×436		30.8		222.7		

中世　第八群

遺構番号＼項目	規模（梁間×桁行）大きさ	方位	柱穴 最大	柱穴 最小	柱間 最長	柱間 最短	備考
※1 SB06	1間×3間	N45°E	38	18	252		
	252×471		29.6		252		
					178	123	
					157		
※1 SB10	1間×3間	N44°E	40	28	356		柱穴より11枚の坏と1枚の小皿が出土している。
	356×484		34.3		356		
					175	141	
					161.3		
※1 ※2 SB18	1間×2＋1間	N42°E	46	20	308		南側に間切りがある。
	308×360＋242		31		308		
					209	151	
					180		
※2 SB22	2間×2＋1間	N44°E	36	20	254	162	
	328×490＋400		29.5		204.5		
※1 ※2 SB37	2間×2＋1間	N44°E	36	16	208	192	ほぼ中央に間切りがあり，東側を総柱とする建物である。
	400×275＋253		26.7		200		
					158	117	
					137.5		

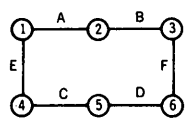
第3表　検出遺構一覧表（1）

竪穴住居

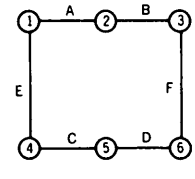
遺構番号	グリッド名	主軸方向	大きさ(m) 東西長	大きさ(m) 南北長	出土遺物	時期	備考
SH01	D－8	N23°W	4.07	※1 3.82	鉄鎌	古墳時代後期（6世紀末）	突出したカマドを持たないが北壁ぎわには，焼土を持つ。主柱穴を四隅に配し，側溝は，西壁沿いに確認された。遺物は，鉄鎌だけで須恵器などの他の遺物は全く出土しなかった。
〃 02	E－8	N16°W	(4.26)	(3.97)	須恵器 土師器	〃	東・南壁際に側溝がみられる。根石を持つ柱穴がみられるが，竪穴住居に伴うものなのかは不明。
〃 03	D－7 E－7	N18.5°W	5.03	4.33	須恵器 土師器	〃	西半分の壁際に側溝がみられ，北壁には造り付けのカマドを持つ。主柱穴は，四隅と中央部にあり，周囲には，小柱穴を配する。遺物は焚口部周辺で多数検出された。
〃 04	D－7	N22°W	3.46	4.10	須恵器 土師器 鉄滓	〃	北壁にカマドを持っていたものと思われる。主柱穴は，掘立柱建物と同様に，配している。焚口部付近で多数の土器が検出された。
〃 05	D－6	N16°W	(2.65)	4.48	須恵器 砥石	〃	東壁に造り付けのカマドを持つ。 主柱穴は，確認されていない。 カマド近くの焼土中より砥石・須恵器片が出土している。
〃 06	E－7	N5°E	4.10	3.96	須恵器 土師器 敲石	〃	北壁に造り付けのカマドを持つ。 主柱穴は，確認されていない。 中央に土坑を持ち，埋土中より須恵器が出土している。 南壁際に土師器の甕が検出された。
〃 07	K－4	N30°W	6.62	5.94	須恵器 土師器	〃	大型の竪穴住居である。四隅に主柱穴を持ち，掘り方もしっかりしている。 周囲に側溝を持ち，北壁に造り付けのカマドを持つ。

※1　南北長にはカマド部分を含んでいない。

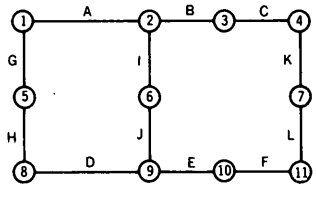
凡　例



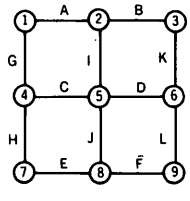
1間×2間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6)÷6
柱間長＝(A+B+C+D+E+F)÷6



※1　1間×2間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6)÷6
柱間長＝(E+F)÷2
＝(A+B+C+D)÷4



※2　2間×2＋1間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6+7+8+9+10+11)÷11
柱間長＝(B+C+E+F+G+H+I+J+K+L)÷10



2間×2間
柱穴径＝(1+2+3+4+5+6+7+8+9)÷9
柱間長＝(A+B+C+D+E+F+G+H+I+J+K+L)÷12

第3表　検出遺構一覧表（2）

溝状遺構

遺構番号	グリッド名	大きさ(cm) 天幅	大きさ(cm) 深さ	遺物	時期	備考
SD01	A-10 B-10,11	62.0	4.5	須恵器	古墳時代後期 （6世紀末）	調査区の北辺で検出された溝である。 かなり削平を受けており，残りが悪い。
〃 02	B－9	44.0	5.1	須恵器 土師器 土師質土器	中世	非常に残りの悪い溝であったにもかかわらず遺物量は多かった。
〃 03	B－9	44.0	5.4	土師質土器		非常に残りの悪い溝である。
〃 04	D-7,8	67.0	27.9	瓦　器 土釜の脚		調査区を横切るように検出された。
〃 05	D－9	12.0	4.5			西端で直角に南方向に曲る。 雨落ち溝の可能性有。
〃 06	M－3	28.0	20.3	須恵器 土師器		かなり削平されていると思われるが溝は深い。 北部先端部には集石がみられる。
〃 07	M－2	42.0	29.1	須恵器		天幅のわりに深い溝である。 SD08と同時期と思われる。
〃 08	M-1,2	255.0	41.7	須恵器	古墳時代後期 （6世紀末） ～奈良時代	検出状況は円形で，深い。遺物も甕2個体分がほぼ完形で出土している。周溝の可能性有。

土　坑

遺構番号	グリッド名	形状(cm)	遺物	時期	備考
SK01	B－9	ほぼ円形 径 92.0	土師器	中世	形状円形で10～20cm程度の礫が投げ込まれた状態で検出された。
〃 02	B－9	ほぼ方形 長 88.0短 64.0深さ25.5	須恵器 土師器		拳大の石を数個検出した。
〃 03	B－9	長方形 長180.0短100.0深さ 7.9	土師器		かなり削平を受けていて，性格不明。
〃 04	B－9	不定形	土師器		形状は不定形でしっかりしていない。
〃 05	C－8	円　形 径 88.0深さ17.8	土師器 土師質土器	中世	性格不明

第3表　検出遺構一覧表（3）

土　坑

遺構番号	グリッド名	形　状（cm）	遺　物	時　期	備　考
〃 06	D－10	楕円形 長176.0短108.0深さ43.1	須恵器片		5～20cm程の礫を多量に投げ込まれた状態で検出された。 須恵器片はその最下層からの出土である。
〃 07	D－9	楕円形 長 76.0短 46.0深さ10.4	須恵器片		
〃 08	C－7	不定形 幅780.0深さ182.9	石臼	中世～ 近世	10～40cm程の川原石が多量に投げ入まれた状態で検出された。 ＳＥ01の掘り方の可能性も考えられる。
〃 09	E－9	不定形 長118.0幅 54.0深さ33.9	須恵器 土師器		性格不明
〃 10	E－8	方　形 長220.0短124.0深さ17.7	須恵器 土師器	古墳時代 後期 （6世紀末）	西側半分を，後世の撹乱によって削られてはいるが土坑内より多量の遺物が出土している。ＳＨ03出土遺物と同一個体の遺物が出土している。
〃 11	K－3	不定形	須恵器	古墳時代 後期 （6世紀末）	竪穴式住居の可能性も考えられる。 形状が不定形のため性格不明。
〃 12	M－3	不定形 幅233.0深さ23.8	砥　石（？） 須恵器		この土坑は，後世の粘土取りによって切られており，土坑内より拳大の礫が検出された。
〃 13	M－3	不定形 幅243.0深さ20.2	土師器		範囲外に続いており全体は不明。

土壙墓

遺構番号	グリッド名	主　軸	大きさ（cm）			遺　物	備　考
			長　辺 （長さ）	短辺（幅）			
				最　長	最　短		
ＳＴ01	C－8	N67°W	216	84	68		枕あるいは棺床と思われる石が北辺際に検出された。
〃 02	C－8	N69°W	266	156	142	須恵器	西壁沿いに供献土器が検出された。また，埋土中央部には石が配されており，棺の上におかれたものであろうか。

不明遺構

遺構番号	グリッド名	形　状（cm）	遺　物	時　期	備　考
ＳＸ01	L－3	不定形 幅 350深さ27.4	須恵器 土師器 土釜の脚	中世（？）	埋土中は多数の自然石が投げ込まれていた。 ちょうどＳＢ45を切るように検出された。

第4表　遺物観察一覧表

参考資料　小天皇塚古墳・その他出土遺物

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
3	—	－1	須恵器甕				微砂粒を少量含む。	良好	濁黄灰色	頸部は外反しながら口縁に至り，端部は上端を細くつまみ出している。頸部外面にはクシ描き痕がみられる。その他はヨコナデ調整されている。
3	—	－2	鉄刀	刃長 (7.8)	刃幅 3.2	—	素材 鉄	——	——	刀の背は，太い。
3	—	－3	弥生土器底部			底径 11.6	0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗褐茶色	底部は少し上げ底状でしっかりしている。体部は外方に真っ直ぐ延びる。体部外面は指ナデされている。

SH01

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 刃長	刃幅	素材	形態及び手法上の特徴
6	110	－5	鉄鎌	13.1	3.1	鉄	全体に直線的に作られているが刃先でやや丸く曲ている。基部は少し折り曲ている。刃は背を厚く，刃部を鋭利にしている。
6	110	－6	〃	(5.0)	3.0	〃	基部を折り曲ている。刃部は曲線状になっている。

SH02

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
8	110	－7	須恵器坏身	12.0	4.3		細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	かなり内傾した立ち上がりで，やや外反しながら延びる。受け部はかなり萎小化している。底部はヘラ切りでその上をナデ調整している。
8	—	－8	〃	13.0			堅緻	良好	白灰色	かなり萎小化した立ち上がりを持つ。全面ヨコナデ調整されている。
8	110	－9	土師器甕	20.0			0.2～3㎜程度の砂粒を含む。	良好	淡黄茶色	頸部は直線的に外方へ延び，端部は丸くおさめられる。

SH03　SK10

11	110	－10	須恵器坏蓋	14.2	4.2		細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部と体部間に稜を持たず，丸くおさめ，口縁端部内面には段を有する。天井部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。ロクロは左回転

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
11	110	須恵器坏蓋	14.1	4.4		堅緻	良好	濁灰色	天井部と体部間に稜を持たず,口縁端部内面には段を有する。 天井部はヘラケズリされており,その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−11									
12	111	〃	15.7	4.5		0.2〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	濁灰白色	天井部と体部間に稜を持たず,口縁端部内面には段を有する。 天井部はヘラケズリされており,天井部内面には同心円状の当て具痕を残す。 ロクロは右回転。
−12									
12	−	〃	14.0			細砂粒を少量含む。	良	白灰色	口縁端部近くでやや屈曲する。 端部内面には,段の痕跡を残す。 ヨコナデ調整されている。
−13									
12	111	〃	13.0			細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部と体部間に稜を持たず,口縁端部内面に段を有する。 ヨコナデ調整されている。
−14									
12	110	須恵器坏身	13.0	3.9		0.2〜2㎜程度の砂粒を少量含む。	良	淡黄灰色	かなり萎小化した立ち上がりと受け部を持つ。 底部はヘラケズリしており,その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
−15									
12	110	〃	13.0	3.8		細砂粒を含む。	良好	青灰色	立ち上がりはかなり内傾している。 底部はヘラケズリされており,その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−16									
12	111	土師器甕	23.6			0.2〜2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	淡黄茶色	頸部は直線的に外方へ延び口縁端部に至る。
−17									
14	111	須恵器坏蓋	13.6			0.2〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗灰色	体部は外方に直線的に延び,端部は丸くおさめる。 ヨコナデ調整されている。
−18									
14	111	〃	14.0	4.5		0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗黄灰色	体部中央で屈曲する。 口縁端部内面には段を有する。 天井部はヘラケズリされており,その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
−19									
14	−	須恵器坏身	12.0			0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗青灰色	内傾する立ち上がりを持ち,受部もしっかりしている。 その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−20									
14	111	〃	13.8			0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	灰青色	内傾する立ち上がりを持つ。 底部はヘラケズリされており,その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−21									
14	111	〃	13.0	3.4		0.2〜2㎜程度の砂粒を含む。	良	暗褐灰色	立ち上がりも受け部もかなり萎小化している。 底部はヘラケズリされており,その他は,ヨコナデ調整されている。
−22									
14	112	土師器甕	20.0			0.2〜2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	暗黄茶色	頸部は少し外反ぎみに外方へ延び,口縁端部は丸くおさめる。 内面には粘土紐接合痕がみえる。
−23									
14	112	〃	19.0			0.2〜1㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	淡黄茶色	頸部は直線的に外方へ延びる。 頸部内面には接合痕,体部内面には指頭痕がみられる。
−24									

SH04

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
15	−	−25	須恵器坏蓋	13.2	4.8		細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部と体部間に稜を持たず，丸くおさめる。 口縁端部内面には段を有する。 天井部はヘラケズリされており，他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
15	112	−26	〃	13.8			0.5〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	濁黄灰色	天井部と体部間に稜を持たず，丸くおさめる。 口縁端部内面には段を有する。 天井部はヘラケズリされ，他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
15	−	−27	須恵器坏身	13.4			微砂粒を少量含む。	良好	青灰色	やや内傾した立ち上がりで，受け部もしっかりしている。 全体にヨコナデ調整されている。
15	112	−28	〃	13.0			竪緻	良好	青灰色	内傾した立ち上がりと，しっかりした受け部を持つ。 全体にヨコナデ調整されている。
15	−	−29	〃	13.0	4.5		微砂粒を含む。	良好	暗灰色	立ち上がりはやや内傾しており，端部近くでやや外反する。 受け部はかなり萎小化している。 底部はヘラケズリ，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
15	112	−30	〃				0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	立ち上がりは故意に打ち欠いた様で全て取り除いてある。 底部はヘラ切りされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
15	112	−31	〃	14.0	4.8		竪緻	良好	暗褐灰色	やや萎小化した内傾する立ち上がりを持つ。 底部は尖ぎみにヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。

SH05，06

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
18	112	−32	須恵器坏蓋	14.3	4.5		0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	黄灰色	天井部と体部間に稜を持たず丸くおさめ，口縁端部内面には段を有す。 天井部はヘラケズリ，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
18	112	−33	須恵器坏身	14.4	4.0		0.2〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	黒灰色	内傾する立ち上がりとかなり萎小化した受け部を持つ。 底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
18	−	−34	〃	12.8			竪緻	良好	青灰色	内傾する立ち上がりは，中央部でやや外反する。 受け部はしっかりしている。
18	113	−35	砥石	全長 15.9	幅 4.9	厚さ 3.9	石材 砂岩	——	濁乳白色	四面に磨面を持ち，かなり使い込まれたものである。
19	113	−36	須恵器坏身	13.8			0.5〜2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	青灰色	内傾する立ち上がりを持つ。 底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
19	113	−37	須恵器坏蓋	12.5			微砂粒を含む。	良好	青灰色	口縁端部は内彎ぎみに作られ，内面には，段の痕跡を残す。 天井部はヘラケズリ，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
19	113	須恵器坏蓋	13.3	4.2		0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	天井部と体部間に稜を持たず，口縁端部内面には段を有す。 天井部はヘラケズリ，その他はヨコナデ彫整されている。 ロクロは右回転。
−38									
19	−	須恵器坏身	13.2			微砂粒を含む。	良好	暗青灰色	内傾する立ち上がりとかなり上向きの受け部を持つ。
−39									
19	113	〃	13.2			微砂粒を含む。	良好	暗青灰色	かなり萎小化した立ち上がりと，受け部を持つ。 底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。
−40									
19	113	〃	12.8			細砂粒を含む。	良好	白灰色	立ち上がりはほぼ垂直に延び，しっかりしている。 ヨコナデ調整されている。
−41									
19	113	敲石(?)	全長	幅	厚さ	石材	——	濁銀灰白色	断面は楕円形を呈し，端部は丸くなっている。 もう一方は，欠損している。
−42			7.8	2.9	1.7	結晶片岩			

SH07

21	−	須恵器坏蓋	14.4			細砂粒を含む。	良	白灰色	体部はやや丸みを持ちながらおさめる。 ヨコナデ調整されている。
−43									
21	−	〃	15.4			微砂粒を含む。	良好	青灰色	丸みを持ちながら口縁端部に至る。 端部内面には段を有する。 外面に自然釉が付着する。
−44									
21	−	〃	15.0			微砂粒を含む。	良好	白灰色	口縁端部内面に段を持つ。
−45									
21	−	〃	14.4			0.2～2㎜程度の砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	丸みを持ちながら口縁に至り，端部も丸くおさめられている。 ヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−46									
21	114	〃	13.8	3.9		細砂粒を含む。	良好	外面 暗灰色 内面 白灰色	天井部と体部の境に少し稜を残す。 天井部はヘラケズリ，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
−47									
21	114	〃	13.8	4.0		0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗青灰色	天井部と体部間に稜を持たず，口縁端部は丸くおさめる。 天井部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−48									
21	114	〃	15.8	3.8		細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部と体部間に稜を残しているが体部は外方に直線的に延びているため，あまり段差を見ない。 天井部はヘラケズリされている。 ロクロは右回転。
−49									
21	114	須恵器坏身	12.0			0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	暗褐灰色	受け部も立ち上がりもかなり萎小化している。 底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは左回転。
−50									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
21	114	須恵器坏身	12.4			0.2～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	全体に細く作られ，受け部も立ち上がりもかなり萎小化している。
−51									
21	−	〃	12.6			細砂粒を含む。	良好	青灰色	内傾する立ち上がりを持つ。
−52									
21	114	〃	13.2			微砂粒を含む。	良好	暗灰褐色	立ち上がりはほぼ垂直に延び，受け部はかなり萎小化している。 底部はヘラケズリされ，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−53									
21	114	〃	13.6			細砂粒を少量含む。	良好	暗青灰色	立ち上がりは直線的に内傾して延びる。 ヨコナデ調整されている。
−54									
21	114	須恵器甕				堅緻	良好	黒灰色	直線的に延びる頸部を有している。
−55									
21	114	土師器甕	23.0			0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む。	良	褐茶色	直線的に延びる頸部を持つ。 外面には赤色顔料を塗る。 体部内面には指ナデが施されている。
−56									

古墳

24	115	耳環	大きさ 約2.5	直径 約0.4		素材 銅芯銀箔張り			ほぼ円形に近い銅芯を使い，円形にまげていたものと思われる。 ほとんど風化しており，銀色は呈していない。
−57									
24	−	須恵器坏蓋				細砂粒を少量含む。	良好	灰色	天井部と体部間には稜を持たず，口縁に至る。 端部は丸くおさめられている。 天井部はヘラケズリ，その他はヨコナデ調整されている。
−58									
24	115	須恵器坏身	11.6			細砂粒を含む。	良好	灰黒色	内傾する立ち上がりを持つ。 全面ヨコナデ調整されている。
−59									
24	115	〃	11.3			堅緻	良好	暗灰色	萎小化した立ち上がりを持つ。 やや内傾しているが外反しながら延びる。 全面ヨコナデ調整されている。
−60									
24	115	〃	11.4			細砂粒を少量含む。	良好	暗灰色	立ち上がりはかなり萎小化しており，直線的に内傾して延びる。 全面ヨコナデ調整されている。
−61									

SD01　（古墳時代）

26	115	須恵器坏身	11.8	4.9		0.1～1㎜程度の砂粒を含む。	良好	内面　青灰色 外面　暗灰褐色	受け部は水平に延び，立ち上がりは，中央で屈曲している。 底部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
−62									

SK11

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
27	115	−63	須恵器坏蓋	14.6			0.2〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	天井部から丸く体部へ至り，口縁端部内面には段を有する。 ヨコナデ調整されている。
27	115	−64	須恵器坏身	10.6			細砂粒を含む。	良好	暗青灰色	外方へ屈曲する立ち上がりで受け部はかなり萎小化している。 ヨコナデ調整されている。

ST02

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
28	116	−65	須恵器坏蓋	11.0	3.0		0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	天井部はヘラ切りされたままで，体部は稜を持たず丸くおさめる。 全面ヨコナデ調整されている。
28	116	−66	〃	9.0	1.7		0.5〜1㎜程度の砂粒を含む。	良好	白灰色	かなり小さいかえりが付いている。 天井部はヘラケズリされている。 その他はヨコナデ調整されている。 ロクロは右回転。
28	116	−67	須恵器坏身	9.6	2.9		細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	かなり萎小化した立ち上がりを有する。 底部はヘラ切りされたままでその他はヨコナデ調整されている。
28	116	−68	須恵器 短頸壺	6.6	10.2		0.5〜2㎜程度の砂粒を含む。	良好	青灰色	ほぼ垂直に立ち上がる短い頸部を持つ。 肩部には明瞭な稜を持たず，底部は丸くおさめる。 底部はヘラケズリ，肩上部にはカキ目が施されている。 ロクロは右回転。

SD08

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
30	117	−69	須恵器坏	12.0	4.4	10.6	細砂粒を多量に含む。	良	青灰色	体部と底部の境に低い高台が付く。 体部は直線的に外方に延び，端部はややシャープにおわる。 体部はヨコナデ調整されている。
30	117	−70	〃			11.0	細砂粒を含む。	良好	暗青灰色	体部と底部の境に低い高台が付く。 体部は直線的に上方に延びるようである。
30	−	−71	須恵器壺	21.0			5㎜前後の砂粒を含む。	良好	灰色	直線的に外方に延びる頸部を持ち，口縁端部は左右に少し拡張し，上方に平らな面を持つ。 頸部外面には2条の凹線を持つ。
30	117	−72	須恵器坏身	13.8			細砂粒を少量含む。	良好	外面 青灰色 内面 暗灰茶色	立ち上がりは内傾しており，受け部はしっかりしている。 全面ヨコナデ調整されている。
30	117	−73	須恵器壺	16.5			0.2〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良	濁黄灰色	頸部は外反しながら立ち上がり，端部はそのまま終る。 体部，肩付近にカキ目が施されている。 体部内面はナデ調整されている。
31	117	−74	須恵器甕	21.6			堅緻	良好	白灰色	頸部は外反しながら立ち上がり，口縁外面に突帯状の拡張がある。 体部外面は格子叩きのちカキ目調整されており，内面は同心円文叩き痕が残る。
31	117	−75	〃	25.3	44.2		堅緻	良好	黄灰色	頸部は外反しながら立ち上がり，口縁端部は，外方に折りまげたように拡張部分が見られる。 体部外面は，格子叩きのちカキ目調整されており，内面は同心円文の叩き痕が残る。

SB10,11

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
67	118	−76	土師器坏	10.8	3.1	6.0	精良	良	暗褐黄色	底部はヘラ切りされており，体部はやや外反しながら外方へ延びる。全面ヨコナデ調整されている。
67	118	−77	〃	10.8	3.2	5.8	精良	良	淡褐黄色	底部調整は不明。体部は直線的に外方に延び口縁近くでやや内彎する。
86	118	−78	〃	11.0	3.1	6.3	精良	良好	暗黄褐色	底部はヘラ切りされており，体部はやや外反しながら外方に延びる。全面ヨコナデ調整されている。
86	118	−79	〃	10.5	3.8	6.1	精良	良好	淡黄褐色	底部はヘラ切りされており，体部は直線的に立ち上がり，口縁端部でやや内彎する。全面ヨコナデ調整されている。
86	118	−80	〃	10.4	3.5	6.5	精良	良好	白黄色	底部はヘラ切りされており，体部はやや外反しながら延び，口縁近くで内彎する。全面ヨコナデ調整されている。
86	120	−81	土師器小皿	6.7	1.0	5.4	精良	良好	淡褐色	底部はヘラ切りされており，体部は外反ぎみに立ち上がる。
86	118	−82	土師器坏	11.0	3.3	6.0	精良	良好	淡灰褐色	底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外方に延びる。全面ヨコナデ調整されている。
86	119	−83	〃	10.5	3.0	5.7	精良	良好	暗褐黄色	底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎しながら口縁に至る。全面ヨコナデ調整されている。
86	119	−84	〃	10.1	2.9	5.0	精良	良好	淡褐色	底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎しながら外方に延びる。全面ヨコナデ調整されている。
86	119	−85	〃	10.8	3.2	6.7	精良	良好	濁褐黄色	底部はヘラ切りされており，体部は外反ぎみに立ち上がり，口縁近くでやや内彎する。全面ヨコナデ調整されている。
86	119	−86	〃	10.4	2.8	6.2	精良	良好	淡黄褐色	底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。全面ヨコナデ調整されている。
86	120	−87	〃	10.3	3.6	6.5	精良	良好	白黄色	底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。全面ヨコナデ調整されている。
86	−	−88	〃			6.8	精良	良好	淡褐色	底部はヘラ切りされている。体部は直線的に延びる。
86	119	−89	〃	11.6	(3.4)	6.3	精良	良好	淡白褐色	底部はヘラ切りされており，体部は，やや外反し外方に延び，口縁は少し内彎する。口縁端部はシャープに終る。

SD02, SD04, SK01, SK02

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号			口径	器高	高台径				
91	−	土師器坏	12.2	2.6	底径 9.0	細砂粒を含む。	良	淡黄茶色	底部はヘラ切りされており，体部はやや内彎しながら口縁に至り，端部は丸くおさめられている。体部の調整は摩滅のため不明。
−90									
91	120	土師質土器脚				0.2〜4㎜程度の砂粒を多量に含む。	良好	褐茶色	断面円形で直線的に延びる。先端部は欠損している。指ナデ痕が顕著にみられる。
−91									
91	120	土師器小皿	8.2	1.7	底径 5.6	0.2〜2㎜程度の砂粒を少量含む。	良	淡白黄色	底部はヘラ切りされており，体部は外彎しながら口縁に至り，全体に細くつくられている。調整は摩滅のため不明である。
−92									
91	120	土師質土器脚				0.2〜4㎜程度の砂粒を多量に含む。	良好	褐茶色	断面はほぼ円形で直線的に延びる。先端部は欠損している。指ナデ痕が顕著にみられる。
−93									

柱穴出土遺物

B−8 SP08

93	120	青磁碗底部			5.5	堅緻	良好	胎土 白灰色 釉 淡緑色	しっかりした短い高台が付く。内面見込み部に草花の模様が描かれている。
−94									
93	−	土師器小皿	7.8		底径 6.6	微砂粒を含む。	良	淡褐黄色	底部はヘラり切されており，体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。端部は丸くおさめられている。
−95									

C−8 SP05

93	−	土師器坏	11.5	3.6	底径 5.4	精良	良	淡黄色	底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外方に延びる。
−96									

C−9 SP12

93	−	土師器小皿	8.4	1.4	底径 6.2	0.5〜1㎜程度の砂粒を少量含む。	良	淡褐黄色	底部調整は不明。体部はやや内彎ぎみに外方に延びる。
−97									

C−9 SP13

93	−	土師器小皿	8.5		底径 6.5	微砂粒を多量に含む。	良好	淡灰黄色	底部はヘラ切りされており，体部は外反しながら口縁端部に至る。全面ヨコナデ調整されている。
−98									
93	−	瓦器埦	15.4			精良	良	灰黒色	体部外面は顕著に指頭痕がみられる。外面口縁端部下はヨコナデされている。内外面炭素を吸着している。
−99									

E−6 SP01

93	−	須恵器壺	17.8			細砂粒を多量に含む。	良好	濁黄灰色	口縁端部は，外方に肥厚しており，内面は凹線ぎみにヨコナデされている。頸部外面にはカキ目調整されている。
−100									

S E01

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 径	高さ	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
95	122	キセル	全長 13.9	径 最大 1.1 最小 0.7	——	素材 真鍮	——	黄銅色	真鍮製の一枚板で作られている。吸い口は丸くおさめられる。
−102									
95	121	石臼	19.2	(12.3)	——	石材 和泉砂岩	——	茶灰色	上臼で上部が凹状を呈する。横部にはひき手穴がみられる。下面には8分割された目立てがある。
−103									

包含層出土遺物

A − 9第3層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
98	−	須恵器坏蓋	9.1			細砂粒を少量含む。	良好	青灰色	天井部から直線的に口縁に至る。内面に小さいかえりが付く。
−104									
98	−	須恵器坏身	12.4			堅緻	良好	灰青色	萎小化した立ち上がりを持つが，受け部はしっかりしている。ヨコナデ調整されている。
−105									
98	−	須恵器壺	22.4			細砂粒を含む。	良好	暗褐灰色	口縁は外方に肥厚しており，端部内面には凹線風のヨコナデが施されている。肩部にはカキ目調整がある。頸部にヘラ状工具による突文がある。
−106									

B − 9第3層

98	−	須恵器坏身	13.0			微砂粒を含む。	良	白灰色	かなり萎小化した立ち上がりと受け部を持つ。
−107									

B −11第3層

98	−	須恵器坏蓋	14.0			細砂粒を含む。	良好	暗青灰色	体部はやや内彎しながら口縁に至り，端部はやや強い稜を持つ。
−108									
98	−	須恵器 高台付坏			11.0	細砂粒を含む。	良	白灰色	底部と体部の境に高台が小さく付く。
−109									

C − 8第3層

98	−	須恵器坏身	15.0			細砂粒を含む。	良好	青灰色	内傾する直線的な立ち上がりを持つ。受け部もしっかりしている。ヨコナデ調整されている。
−110									

C − 9第3層

98	−	須恵器坏身	14.4			堅緻	良好	青灰色	かなり内傾した立ち上がりを持つ。受け部は薄く作られている。
−111									

C－10第２層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	高台径	胎土	焼成	色調	形態及び手法上の特徴
遺物番号									
98	122	須恵器坏蓋	14.0			竪緻	良好	暗青灰色	体部はやや内彎しながら口縁に至り，端部は丸くおさめられる。天井部はヘラケズリされており，その他はヨコナデ調整されている。
－112									
98	－	須恵器坏身	12.0			微砂粒を含む。	良	白灰色	かなり萎小化した受け部と立ち上がりを持つ。
－113									
98	122	〃	14.4		底径 6.0	細砂粒を含む。	良	白灰色	底部はヘラ切りされており，体部は，直線的に外方へ延びる。口縁端部は丸くおさめられている。
－114									

C－10第３層

98	122	須恵器坏蓋	13.0			微砂粒を含む。	良好	暗青灰色	やや内彎ぎみの体部で，端部はやや稜を残し終わる。ヨコナデ調整されている。
－115									
98	122	〃	14.0			竪緻	良好	灰青色	やや内彎ぎみの体部で，端部は丸くおさめられている。ヨコナデ調整されている。
－116									
98	122	須恵器坏身	13.2			細砂粒を含む。	良好	暗青灰色	立ち上がりは内傾して小さいが，受け部はしっかりしている。
－117									
98	122	〃			底径 6.4	細砂粒を含む。	良好	灰色	底部は糸切りされており，体部は直線的に外方へ延びる。ヨコナデ調整されている。
－118									
98	122	須恵器壺 底部			12.0	微砂粒を含む。	良好	濁灰色	底部には外方にふんばったやや高めの高台を持ち，体部はやや内彎しながら外方へ延びる。ヨコナデ調整されている。
－119									

C－10第２層

98	122	須恵器壺 底部			10.2	竪緻	良好	暗灰色	底部は外方にふんばったやや高めの高台を持ち，体部はやや内彎しながら外方へ延びる。
－120									

C－10第２・３層

98	122	須恵器壺	30.6			0.2～2㎜程度の砂粒を含む。	良好	外面 灰黒色 内面 灰色	頸部はやや外反しながら外方へ延び，口縁端部は外面肥厚している。頸部外面には３段に波状文が施されている。
－121									

C－11第２層

98	122	須恵器坏蓋	14.0			竪緻	良好	灰青色	体部は内彎し，口縁端部は丸くおさめられている。ヨコナデ調整されている。
－122									